

替田遺跡(第5次～第8次)発掘調査報告

2007(平成19)年3月

三重県埋蔵文化財センター

序

県都・津市は、伊賀・伊勢で三十二万四千石を領した藤堂氏の城下町です。その中心部を貫く安濃川は、流域に肥沃な穀倉地帯を形成し、伊勢湾に注ぎます。この安濃川は、下流部においては蛇行を繰り返すため、藤堂氏もその治水に腐心し、様々な施策を行いました。そのひとつが下流部の城下町を洪水から護るため、上流部で堤防を低くして大水が出た際にそこを切って水の逃げを確保した「三泗堤」といわれる堤です。現在もこの部分の堤防は低い高さに押さえられていて、津市街地に大量の水が浸入するのを防いでいます。

さて、今回報告する替田遺跡はちょうどこの三泗堤の下流側、安濃川の南岸に位置し、安濃川から引水して南側の岩田川に注ぐ小河川、三泗川沿いに展開しています。安濃川から岩田川にいたる低地部は、このようにいったん出水があったときは絶えず洪水の危険に晒される地域ですが、今回の調査によって、この地においても微高地を利用しての人間活動の活発な展開を確認することができました。まさに、自然と格闘しながら自らの生活の安定のために力を注いだ先人たちの日常が甦ってくるようです。

埋蔵文化財は、日本や日本人、あるいはそれぞれの地域が歩んできた営みを、先人が大地に残した生活の痕跡である遺構と日々の生活に使用した遺物、つまり具体的な造形物によって現代の我々に伝えてくれるものということができるでしょう。このように考えれば、埋蔵文化財とは、現代に生きる我々が過去の歴史を振り返り、現在立っている座標軸を確認して、明日への歩みを踏み出す方向を探るひとつの道標ともなりうるものといってもよいのではないのでしょうか。

最後になりましたが、本書が過去に学んで豊かな未来像を構築するための材料のひとつとして活用されることを期待いたしますとともに、県民の皆様の埋蔵文化財保存へのより一層のご理解とご協力を念願して序文といたします。

平成19年3月

三重県埋蔵文化財センター

所長 吉水康夫

例 言

- 1 本書は、津市南河路に所在する替田遺跡の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は、国道163号バイパス整備事業（国道163号国補特殊道路改良事業、国道163号南河路BP国補特殊道路改良事業）に伴うもので、最終の調査面積は5,521㎡である。
- 3 発掘調査および報告書作成は、次の体制で実施した。
 - 〈平成13年度（発掘調査）〉
 - 調査主体 三重県教育委員会
 - 調査担当 三重県埋蔵文化財センター
調査研究第一課 技師 大川操、研修員 黒田聖也
 - 発掘作業 (財)三重県農業開発公社
 - 〈平成14年度（発掘調査）〉
 - 調査主体 三重県教育委員会
 - 調査担当 三重県埋蔵文化財センター
調査研究グループ 主査 筒井正明、主事 黒田聖也、研修員 野田有美、技術補助員 豊田祥三
 - 調査作業 安西工業㈱
 - 〈平成15年度（発掘調査）〉
 - 調査主体 三重県教育委員会
 - 調査担当 三重県埋蔵文化財センター
調査研究グループ 主査 松田珠美
 - 調査作業 国際航業株式会社
 - 〈平成16年度（発掘調査）〉
 - 調査主体 三重県教育委員会
 - 調査担当 三重県埋蔵文化財センター
調査研究グループ 主事 小倉整
 - 調査作業 安西工業㈱
 - 〈平成17～18年度（報告書作成）〉
 - (17年度) 三重県埋蔵文化財センター支援研究グループ 主査 伊藤裕偉、調査研究Ⅰグループ 主査 穂積裕昌
 - (18年度) 三重県埋蔵文化財センター調査研究Ⅰ課 主査 穂積裕昌、技師 石井智大・野寫美沙子
技術補助員 川崎志乃・酒井巳紀子
- 4 遺構写真撮影は、調査担当者及び調査作業受託機関が行った（上記参照）。
- 5 調査にかかる諸費用は、三重県県土整備部が全額負担している。
- 6 発掘調査にあたっては、地元津市在住の皆様、津市教育委員会、県土整備部道路整備室、津地方県民局津建設部（当時）から多大な協力を受けたことを明記する。
- 6 報告書作成にあたっては、堀木真美子氏（愛知県埋蔵文化財センター）から有益なご教示を得ました。
- 7 本書で報告した記録類及び出土遺物は、三重県埋蔵文化財センターが保管している。
- 8 当報告書の作成業務は三重県埋蔵文化財センターで実施し、平成17年度は支援研究グループ及び調査研究Ⅰグループ、平成18年度は調査研究Ⅰ課が主務として実施した。報告文の執筆は、穂積・伊藤・石井・野寫・川崎・酒井が行い、目次及び文末に記した。遺物の写真撮影は酒井が行った。本書の編集は穂積が行い、酒井がこれを補佐した。

凡 例

地図類

- 1 本書で使用した地図類は、国土地理院発行の1/25,000地形図、津市都市計画図である。
- 2 これら地図類は本書で報告した遺跡の位置は、国土座標第VI系を用いており、平成14年4月から施行されている世界測地系には対応していない。
- 3 挿図の方位はすべて座標北で示している。なお、真北は座標北の西偏0度16分、磁北は座標北の西偏6度40分である。

遺構類

- 4 土層図の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版 標準土色帖』（日本色研事業株式会社 1967年初版）を用いた。
- 5 本書の遺構は連番となっているが、この番号は本報告書作成にあたって、新たに付与しなおしたものである。調査時の遺構番号との異同・関係は、本文および遺構一覧を参照されたい。
- 6 遺構は、調査区ごとに報告しているが、溝などで隣接区にまたがる場合は、初出部もしくは主要部分が確認されている調査区で代表して報告している。
- 7 掘立柱建物の方位は、南北主軸・東西主軸を問わず、すべて北からの振れで表記している。したがって、東西主軸の建物は、梁行をもとに方位を測った。
- 8 遺構名称については、下記の略記号を用いて表示したものがあある。
竪穴住居：SH 掘立柱建物：SB 土坑：SK 土坑墓・方形周溝墓：SX 井戸：SE
溝：SD 旧河道・自然流路：SR 柱列：SA ピット：pit その他不明遺構：SZ

遺物類

- 9 遺物番号は、調査年次、遺物の種別（土器や石器、木器など）に関わらず、本書内での通し番号で付与した。
- 10 本書での遺物実測図は、土器については実物の1/4を基本としたが、木器・木製品、石器はその都度指示している。
- 11 遺物観察表は、土器（瓦・金属器を含む）、石器（石製品を含む）、木器ごとに作成し、それぞれの遺物の特性に合わせて記載内容を若干変動している。以下、留意事項を簡単に記す。
 - ・土器観察表の「胎土」は、混和材を除いた素地の緻密さを「密～粗」で、混和材が認められる場合は確認できる最大の大きさを計測して表記した（「～〇mm」）。
 - ・土器観察表の「色調」は、その遺物の代表となる色調を記載した。その表記は、前掲『新版 標準土色帖』に拠る。
 - ・木器観察表の「樹種」は、整理の過程で樹種同定を経たもののみを記した。

写真図版

- 12 遺構写真は、最初に調査区の別に関わらず遺構全体図を配した後、個別遺構写真を配した。
- 13 挿図と写真図版の遺物番号は、報告書番号と対応している。
- 14 遺物の写真図版は、すべて縮尺不同である。

本文目次

第1章	前言	(穂積)	1
	第1節	調査に至る経緯と経過	1
	第2節	調査の方法	3
	第3節	本書における調査区名・遺構番号の扱い	10
第2章	位置と環境	(穂積・酒井)	11
	第1節	地理的環境	11
	第2節	歴史的環境	13
第3章	旧地形と基本層序	(川崎)	17
第4章	発掘された遺構と遺物	(穂積)	37
	第1節	H区の調査	37
	第2節	I区の調査	37
	第3節	J区の調査	39
	第4節	K区の調査	49
	第5節	L区の調査	52
	第6節	M区の調査	88
	第7節	N区の調査	96
	第8節	O区の調査	101
	第9節	P区の調査	115
第5章	まとめ	(穂積・石井・川崎・野畷・伊藤)	199
	第1節	遺構の変遷と画期	(穂積) 199
	第2節	替田遺跡における弥生集落の様相	(石井) 200
	第3節	弥生土器について	(川崎) 203
	第4節	替田遺跡出土古式土師器の位置付け	(野畷) 206
	第5節	微地形と土地利用の変化について	(川崎) 208
	第6節	中世の墨書土器について	(川崎) 211
	第7節	古代末から中世の替田遺跡	(伊藤) 213
第6章	調査の総括と学術上の課題	(穂積)	214

挿図目次

第1図 遺跡地形図 …………… 2	第40図 S R 121実測図 ……………40
第2図 調査区配置図 …………… 4	第41図 S E 112・S K 113・S 4 pit10実測図 ……41
第3図 H区小地区割図 …………… 6	第42図 S K 114実測図 ……………41
第4図 I区小地区割図 …………… 6	第43図 S K 103実測図 ……………41
第5図 J区小地区割図 …………… 6	第44図 P 4 pit 5 実測図 ……………41
第6図 K区小地区割図 …………… 7	第45図 S D 116・117・118実測図 ……………42
第7図 L区小地区割図 …………… 7	第46図 S E 105実測図 ……………42
第8図 M区小地区割図 …………… 8	第47図 S A 631・S B 624実測図 ……………44
第9図 N区小地区割図 …………… 8	第48図 S E 106実測図 ……………45
第10図 N-2区小地区割図 …………… 8	第49図 S B 155実測図 ……………46
第11図 O区小地区割図 …………… 9	第50図 S B 156実測図 ……………47
第12図 P区小地区割図 …………… 9	第51図 S B 158実測図 ……………47
第13図 替田遺跡と周辺の主要遺跡 ……………12	第52図 S B 157実測図 ……………47
第14図 津市内出土銅鐸 ……………12	第53図 N 1 pit 2・4、N 3 pit14、N 2 pit15、 M 3 pit 7 位置図 ……………50
第15図 替田遺跡と近傍の遺跡 ……………14	第54図 U 7 pit 2 位置図 ……………50
第16図 土層断面模式図 ……………16	第55図 R 4 pit17位置図 ……………50
第17図 K区東西土層断面図 ……………21～22	第56図 R 6 pit 5 位置図 ……………50
第18図 J区土層断面図 ……………21～22	第57図 S D 124・127実測図 ……………51
第19図 M区南北土層断面図 ……………21～22	第58図 S D 124遺物出土状況図 ……………51
第20図 L区東西土層断面図 ……………21～22	第59図 S K 123実測図 ……………51
第21図 P区東西土層断面図 ……………23～24	第60図 S H 207実測図 ……………53
第22図 O区東西土層断面図 ……………23～24	第61図 S H 219実測図 ……………53
第23図 H区実測図 ……………25	第62図 S H 230実測図 ……………54
第24図 F・I・J区西側実測図 ……………26	第63図 S H 251実測図 ……………54
第25図 F・I・J区東側実測図 ……………27	第64図 S H 303・S K 301・302実測図 ……………55
第26図 G区実測図 ……………28	第65図 S H 311実測図 ……………55
第27図 L区実測図 ……………29～30	第66図 S H 333実測図 ……………56
第28図 K区実測図 ……………31	第67図 S H 322実測図 ……………56
第29図 M・N・O区西側実測図 ……………32	第68図 S H 330実測図 ……………56
第30図 O・N区実測図 ……………33	第69図 S K 201実測図 ……………58
第31図 O区東側・N・P区西側実測図 ……………34	第70図 S K 204実測図 ……………58
第32図 N・P区実測図 ……………35	第71図 S K 211実測図 ……………58
第33図 N・P区東側実測図 ……………36	第72図 S K 205実測図 ……………59
第34図 S D 362実測図 ……………38	第73図 S K 202実測図 ……………60
第35図 S D 361実測図 ……………38	第74図 S K 220実測図 ……………60
第36図 S X 119実測図 ……………38	第75図 S K 234実測図 ……………60
第37図 S X 115・122実測図 ……………38	第76図 S K 221実測図 ……………61
第38図 S B 154実測図 ……………38	第77図 S K 223実測図 ……………61
第39図 S R 601・606・607・609実測図 ……………40	

第78図	S K 242実測図61	第119図	S K 270実測図77
第79図	S K 239実測図61	第120図	S D 256実測図77
第80図	S K 233実測図62	第121図	S D 208実測図78
第81図	S K 252実測図62	第122図	S D 279実測図78
第82図	S K 275実測図62	第123図	S D 209実測図78
第83図	S K 238実測図63	第124図	D 10pit23・D 11pit 6 位置図78
第84図	S K 244実測図65	第125図	E 3 pit 1 位置図78
第85図	S K 253・254実測図66	第126図	S E 324・327実測図80
第86図	S K 260実測図66	第127図	S E 299・S K 300実測図80
第87図	S K 240・285実測図67	第128図	S E 267実測図80
第88図	S K 277実測図67	第129図	S B 352実測図81
第89図	S K 288実測図68	第130図	S X 229実測図81
第90図	S K 312実測図69	第131図	S E 266実測図81
第91図	S K 309実測図69	第132図	S X 286実測図81
第92図	S K 284実測図69	第133図	S E 259実測図82
第93図	S K 312遺物出土状況図69	第134図	S K 250実測図82
第94図	S K 292実測図70	第135図	S E 258実測図82
第95図	S K 304実測図70	第136図	S E 263実測図82
第96図	S K 310実測図70	第137図	S K 265実測図83
第97図	S K 307実測図70	第138図	S D 237実測図83
第98図	S K 314実測図70	第139図	B 11pit 2・B 12pit 4 位置図89
第99図	S D 313実測図71	第140図	D 10pit 2・6・18位置図89
第100図	S K 326実測図71	第141図	C 10pit 6・13、C 11pit 1 位置図89
第101図	C 2 pit 3 位置図71	第142図	S B 159実測図89
第102図	F 8 pit 6 位置図71	第143図	S B 161実測図89
第103図	S D 317実測図71	第144図	S B 162実測図90
第104図	C 11pit11位置図73	第145図	S B 160実測図90
第105図	C 13pit 3 位置図73	第146図	S A 163実測図90
第106図	S K 241実測図73	第147図	S A 164実測図90
第107図	E 13pit 3 位置図73	第148図	S A 165実測図90
第108図	D 10pit13位置図73	第149図	S A 166実測図90
第109図	S K 222実測図73	第150図	S E 129実測図91
第110図	S B 343実測図75	第151図	S K 132実測図91
第111図	S B 344実測図75	第152図	S K 131実測図91
第112図	S B 345実測図76	第153図	M区S D・S R 位置図、 東壁断面模式図93
第113図	S B 348実測図76	第154図	S R 137実測図95
第114図	S B 350実測図76	第155図	H 11pit 1 位置図95
第115図	S B 346実測図76	第156図	H 3 pit 5 位置図95
第116図	S B 349実測図76	第157図	H 6 pit12、H 7 pit25位置図95
第117図	S B 351実測図77	第158図	H 8 pit 4 位置図95
第118図	S B 347実測図77			

第159図	S K 409実測図	95	第199図	S K 541実測図	109
第160図	S X 425実測図	95	第200図	S X 537実測図	111
第161図	S D 401実測図	97	第201図	S E 538実測図	111
第162図	S K 440実測図	97	第202図	S K 525実測図	111
第163図	S Z 441実測図	97	第203図	S K 530実測図	111
第164図	S D 404実測図	97	第204図	S D 816遺物出土状況図	116
第165図	S D 408実測図	97	第205図	S D 802・803実測図	116
第166図	S D 405実測図	99	第206図	S D 804・806実測図	117
第167図	S D 433実測図	99	第207図	S D 814実測図	117
第168図	S D 435実測図	99	第208図	S D 816実測図	118
第169図	S K 424・423実測図	99	第209図	S K 819実測図	118
第170図	S Z 443実測図	99	第210図	S D 812実測図	118
第171図	G 9 pit 1、F 9 pit 3、G 10 pit 12、 F 11 pit 3 位置図	99	第211図	出土遺物実測図	127
第172図	G 18 pit 2 位置図	100	第212図	出土遺物実測図	128
第173図	G 5 pit 1、G 6 pit 2 位置図	100	第213図	出土遺物実測図	129
第174図	G 14 pit 2・3・4 位置図	100	第214図	出土遺物実測図	130
第175図	B 7 pit 1 位置図	100	第215図	出土遺物実測図	131
第176図	S X 540実測図	100	第216図	出土遺物実測図	132
第177図	S B 549実測図	100	第217図	出土遺物実測図	133
第178図	S D 502・503・518・545実測図	102	第218図	出土遺物実測図	134
第179図	S D 501・507・S Z 535位置図	103	第219図	出土遺物実測図	135
第180図	S Z 535遺物出土状況図	103	第220図	出土遺物実測図	136
第181図	S D 516・519実測図	103	第221図	出土遺物実測図	137
第182図	S D 514・515・520実測図	103	第222図	出土遺物実測図	138
第183図	S D 504実測図	104	第223図	出土遺物実測図	139
第184図	S D 508・512実測図	104	第224図	出土遺物実測図	140
第185図	S K 547実測図	104	第225図	出土遺物実測図	141
第186図	S K 536実測図	104	第226図	出土遺物実測図	142
第187図	S D 513実測図	104	第227図	出土遺物実測図	143
第188図	S D 544実測図	104	第228図	出土遺物実測図	144
第189図	S D 514遺物出土状況図	105	第229図	出土遺物実測図	145
第190図	S D 517実測図	106	第230図	出土遺物実測図	146
第191図	S D 517遺物出土状況図	106	第231図	出土遺物実測図	147
第192図	S D 532実測図	106	第232図	出土遺物実測図	148
第193図	S D 521実測図	106	第233図	出土遺物実測図	149
第194図	S K 529実測図	108	第234図	出土遺物実測図	150
第195図	S K 510実測図	109	第235図	出土遺物実測図	151
第196図	S K 531実測図	109	第236図	出土遺物実測図	152
第197図	S K 533実測図	109	第237図	出土遺物実測図	153
第198図	S K 534実測図	109	第238図	出土遺物実測図	154
			第239図	出土遺物実測図	155

第240図 出土遺物実測図……………156	第253図 出土遺物実測図……………169
第241図 出土遺物実測図……………157	第254図 出土遺物実測図……………170
第242図 出土遺物実測図……………158	第255図 出土遺物実測図……………171
第243図 出土遺物実測図……………159	第256図 出土遺物実測図……………172
第244図 出土遺物実測図……………160	第257図 出土遺物実測図……………173
第245図 出土遺物実測図……………161	第258図 出土遺物実測図……………174
第246図 出土遺物実測図……………162	第259図 出土遺物実測図……………175
第247図 出土遺物実測図……………163	第260図 替田遺跡弥生時代遺構配置図……………201
第248図 出土遺物実測図……………164	第261図 替田遺跡出土弥生土器の変遷(1) ……204
第249図 出土遺物実測図……………165	第262図 替田遺跡出土弥生土器の変遷(2) ……205
第250図 出土遺物実測図……………166	第263図 替田遺跡出土古式土師器の 編年の位置……………207
第251図 出土遺物実測図……………167	第264図 替田遺跡調査区と周辺の小字……………210
第252図 出土遺物実測図……………168	

挿表目次

第1表 替田遺跡基本層序一覧表……………16	第11～33表 遺物観察表 ……176～198
第2表 土層名一覧……………19	第34表 替田遺跡墨書一覧表 ……212
第3表 土層名一覧……………20	第35表 里前遺跡ほか墨書一覧表 ……212
第4～10表 遺構一覧表 ……120～126	

写真・図版目次

写真1 建設中の国道163号線B P……………2	写真2 建設中の国道163号線B P……………2
図版1 遺跡全景/遺跡東半部全景 ……217	S E 106 枹材内遺物出土状況/ S E 106 横棧組方 ……229
図版2 調査前風景/H区北側全景 ……218	図版14 S K 201/S K 202/S K 204/S K 205/ S H 207/S H 207 近景/S K 220/ S K 221 ……230
図版3 H区東側全景/I区全景 ……219	図版15 S K 222/S K 222 近景/S K 223/ S K 244/S K 244/ S H 251 石斧 (139) 出土状況/S K 252/ S K 252 遺物 (190) 出土状況 ……231
図版4 J区北西側全景/J区南東側全景 ……220	図版16 S K 285/S K 285 遺物出土状況/ S K 304/S D 340/ S E 327 (左)・S E 324 (右) /S E 324/ S E 327/S E 327 完掘状況 ……232
図版5 K区北側全景/L区全景 ……221	図版17 L区全景/S K 204/S X 229/S H 230/ S K 233/S K 233 遺物出土状況/ S H 251/S K 252 ……233
図版6 L区全景/L区西側近景 ……222	
図版7 L区中央部近景/L区東側近景 ……223	
図版8 M区北側/M区東側 ……224	
図版9 N区上層全景/N区下層全景 ……225	
図版10 N区南への派生トレンチ上層全景/ N区南への派生トレンチ下層近景……………226	
図版11 N区東端部全景/O区西側全景 ……227	
図版12 O区全景/P区全景 ……228	
図版13 S K 103/S E 105/S X 122/ S E 106 枹材検出/S E 106 枹材埋土掘削/ S E 106 掘形と枹材/	

図版18	S E 259埋土半裁/S E 269/S E 267/ S E 299/S H 311/S K 312/ S K 312遺物出土状況/S K 315 ……234	図版38	出土遺物720・736・739・741・854・ 856・859・1007 ……254
図版19	S E 324/S E 327/S E 327遺物出土状況/ S H 333/S K 335/S B 343/ S K 234・S K 235/S B 344……235	図版39	出土遺物1・4・5・11・27・34・36・ 63・75・93・103・129 ……255
図版20	S D 124/M区南端調査区/S E 129/ J 区P 4 pit 5 遺物出土状況/ S D 514/S D 516・518・519 ……236	図版40	出土遺物142・159・161・166・194・ 201・205・206・207・221・225・242・ 243 ……256
図版21	S K 529/S K 533 ……237	図版41	出土遺物255・256・257・255・261・ 261・401・412・416・439・506・441・ 446・461・524 ……257
図版22	S D 514遺物出土状況/S X 537/ S X 537/S K 525/ S D 517網代出土状況 ……238	図版42	出土遺物577・583・601・604・606・ 749・633・761・770・1144・840・ 842 ……258
図版23	S D 806/S D 802/S D 803下駄出土状況/ S D 802掘削中/S D 503東側 ……239	図版43	出土遺物687・883・884・688・701・ 885・886・887・1146・1147・1238・ 1238 ……259
図版24	出土遺物18・81・116・179 ……240	図版44	出土遺物376・377・530・622・623・ 624・643・676・677・678・707・708・ 709 ……260
図版25	出土遺物181・182・227・228 ……241	図版45	出土遺物710・781・782・783・784・ 785・786・787・788・789・790・ 791 ……261
図版26	出土遺物10・10・37・40・67・117…242	図版46	出土遺物792・793・794・795・796・ 797・798・799・800・801・802・803・ 804 ……262
図版27	出土遺物124・125・149・180・183・ 186 ……243	図版47	出土遺物805・806・807・809・810・ 868・869・896・921・960・972・ 974 ……263
図版28	出土遺物190・196・197・199・204・ 211 ……244	図版48	出土遺物976・993・1024・1025・ 1026・1027・1028・1029・1030・ 1031・1083・1084 ……264
図版29	出土遺物229・232・445・500・745・ 1003 ……245	図版49	出土遺物1085・1086・1087・1088・ 1089・1090・1091・1092・1093・ 1095・1096・1174 ……265
図版30	出土遺物9・12・23・53・56・62・68・ 72・73・77 ……246	図版50	出土遺物1175・1225・1226・784・ 785・786・787・794・798 ……266
図版31	出土遺物91・118・119・121・122・ 143・144・145 ……247	図版51	出土遺物589・588・1268・594・998・ 998・1155・1156・1273・1274・ 1275・1276 ……267
図版32	出土遺物147・148・162・163・164・ 164・167・168・169・189 ……248	図版52	出土遺物273・287・289・291・298・ 306・307・310・327・326・330・334・
図版33	出土遺物210・212・214・215・226・ 233・254・357 ……249		
図版34	出土遺物369・370・371・376・379・ 382・383・402 ……250		
図版35	出土遺物404・407・411・414・415・ 417・425・422・426・469 ……251		
図版36	出土遺物430・431・443・444・448・ 490・501・510 ……252		
図版37	出土遺物536・537・538・539・547・ 548・551・560・575・667・686・ 700 ……253		

	342 · 337 · 349	268
图版53	出土遺物348 · 713 · 909 · 909 · 910 · 910	269
图版54	出土遺物1171 · 1239 · 1240 · 1241 · 1242 · 1243 · 1244 · 1247 · 1251 · 1257 · 1258	270
图版55	出土遺物1263 · 1264 · 1266 · 1267 · 1269 · 1272	271
图版56	出土遺物6 · 80 · 88 · 112 · 113 · 114 · 115 · 131 · 132 · 133 · 134 · 137 · 138 · 140 · 139 · 141 · 151 · 152 · 153 · 158	272
图版57	出土遺物165 · 174 · 177 · 178 · 203 · 223 · 231 · 237 · 249 · 250 · 251 · 252 · 454	273
图版58	出土遺物455 · 457 · 456 · 458 · 460 · 534 · 535 · 591 · 565 · 718 · 893 · 1148 · 1149 · 1150 · 1151 · 1152 · 1153 · 1154	274

第1章 前言

第1節 調査に至る経緯と経過

1 替田遺跡の確認と調査に至る経緯

替田遺跡を含む津市南河路・野田の安濃川右岸堤防から岩田川間の沖積部一帯を南北に縦断するかたちで都市計画道路の中勢バイパスが決定されたのは昭和58年4月のことであった。この地域に関しては、既に三重県考古学の先達、故鈴木敏雄氏によって現在の南河路集落付近における弥生～古墳時代遺物の出土が報告されており（鈴木敏雄『安東村考古誌考』、私家版）、古くから遺跡の存在が注意されていた。しかし、行政上で替田遺跡が遺跡として認識されたのは、昭和58年に三重県教育委員会が実施した中勢バイパス建設に伴う事前の分布調査からであった。

この中勢バイパス建設計画にかかる範囲確認調査が新たに組織された三重県埋蔵文化財センターによって替田遺跡を含む範囲を対象として実施されたのは平成元年のことで、これによって中勢バイパス路線内に替田遺跡として7,900㎡の面積が報告された。中勢バイパスに伴う替田遺跡の調査は、平成8年から調査が実施され、最終的に10,060㎡が調査されるに至った（替田遺跡1次～2次調査）。

さて、この中勢バイパスに直交するかたちで国道163号線のバイパス建設事業（平成14年度は国道163号国補特殊道路改良事業、15年度は国道163号南河路B P 国補道路特殊改良事業と事業名称変更、以下では「国道163号線バイパス」として略記）が計画され、その事業照会を受けて埋蔵文化財の範囲確認調査が路線計画地内を対象として実施されたのは平成11年1月のことであった。

一方、津市南河路・野田の安濃川右岸堤防から岩田川間の沖積部一帯は、ほ場整備事業の未整備地域であり、替田遺跡を含む津中部地区を対象とした県営圃場整備事業が平成9年度以降に順次実施されることが計画された。そこで、平成9年度より範囲確認調査が行われ、替田遺跡が含まれる部分は平成10年度（中勢道路以東対象）と11年度（中勢道路以西対象）に実施された。

これら県事業（国道163号線バイパス建設の実施主体は県）の範囲確認調査の結果を受け、まず平成11年度より県営かんがい排水整備事業と県営圃場整備事業（経営体育成基盤整備事業）とに伴う替田遺跡の調査が実施されたのを皮切りに、16年度まで国道163号線バイパスと経営体育成基盤整備事業（旧称県営圃場整備事業）・県営かんがい排水整備事業という県事業に伴う替田遺跡にかかる埋蔵文化財の発掘調査が相次いで実施されることとなった。

2 調査経過

前述のように、県事業に伴う替田遺跡の調査は、平成11年度から平成16年度までの都合6年にわたって実施した（12年度は当該調査なし）。これらの調査は、既に調査を終えた中勢道路に伴う2カ年の調査（1次調査・2次調査）の調査次数を引き継いで行われ、調査次数は11年度を除き、年度単位で付与している。すなわち、11年度調査は、かんがい排水整備事業による発掘調査を3次調査、県営圃場整備事業による発掘調査を4次調査としたが、13年度の5次調査から16年度の8次調査は同一年度であれば原因事業が異なっても調査次数としては同じとして次数換算している。

このうち、平成11年度の3次調査と4次調査は、既に報告書として刊行している（三重県埋蔵文化財センター『神戸遺跡（第2次）・替田遺跡第3次発掘調査報告～三重県津市南河路所在～』2001、同『替田遺跡（第4次）発掘調査報告』2004）。

ここでは、平成13年度の5次調査以降について、調査経過の整理をしておこう。

13年度の5次調査は、稲刈りが終了した10月より開始した。調査は、国道163号線バイパス建設に伴うものと、県営ほ場整備事業に伴うものがある。前者に伴う調査は、平成11年度4次調査区（F地区）の東側隣接地（中勢道路以西）を対象とし、J地区として935㎡の調査を行っている。後者は替田遺跡でも南側、式ノ坪遺跡に隣接する部分をH地区とし



第1図 遺跡地形図 (1 : 3,000)



写真1 建設中の国道163号線B P (西から、奥は津市街)



写真2 建設中の国道163号線B P (東から、奥は長谷山)

て173㎡、中勢道路以東の13年度分をI地区として344㎡を行った。

14年度の6次調査は7月より開始した。調査は、県営ほ場整備事業に伴うものと国道163号線バイパス建設に伴うものがある。前者は中勢道路を挟んだ東西で1258㎡（うち下層234㎡）、後者は中勢道路以東の1600㎡（うち下層263㎡）を対象として調査を実施した。

15年度の7次調査と16年度の8次調査はいずれも国道163号線バイパス建設に伴うもので、前者で1403㎡、後者で1583㎡の調査を行った。

3 文化財保護法にかかる諸通知

文化財保護法等にかかる諸通知は、以下により県教育長宛に行っている。

・文化財保護法に基づく三重県文化財保護条例第48条第1項（県教育長宛）

平成12年3月8日付 道整674号（文化庁官宛）

平成14年5月31日付 県土第08-44号

平成15年5月6日付 津建第107号

平成16年5月25日付 県土第08-39号

・文化財保護法第58条の2第1項（県教育長宛）

平成13年9月14日付 教埋184号

平成14年6月26日付 教埋88号

平成15年6月5日付 教埋75号

平成16年5月20日付 教埋72号

・遺失物法による文化財発見・届出通知（津警察署長宛）

平成15年1月7日付 教委12-6-9号（県教育長通知）

平成16年2月3日付 教委12-9-8号（県教育長通知）

平成16年9月17日付 教委12-4-21号（県教育長通知）

第2節 調査の方法

1 調査区の設定

三重県埋蔵文化財センターの調査では、調査区内を4m×4mの方眼（小地区）に分割し、それを調査の基本単位となるグリッドの1単位として調査を行っている。その際、グリッド名の表記はアルファベットと数字を組み合わせて行い、通常グリッドの北西隅を表示の原点としている。

今回の替田遺跡の調査は、調査トレンチが年度や原因事業によって分断され、結果として隣接しつつも複数の独立したトレンチを個別に調査することとなった。この際、調査の当初に小地区設定にかかる統一した取り決めがなされていなかったため、小地区付与は結果としてトレンチ毎の任意設定で行われた。また、この小地区設定にあたって、各調査区の主軸が国土座標の整数値から大きくずれていたため、国土座標に沿った設定は行わず、現地調査の作業効率を優先して調査区形状に合わせて設定した。

そのうえで、遺構実測の段階で、国土座標（旧座標）を調査区に付与し、調査区全体の位置関係を座標レベルで把握できるようにした。

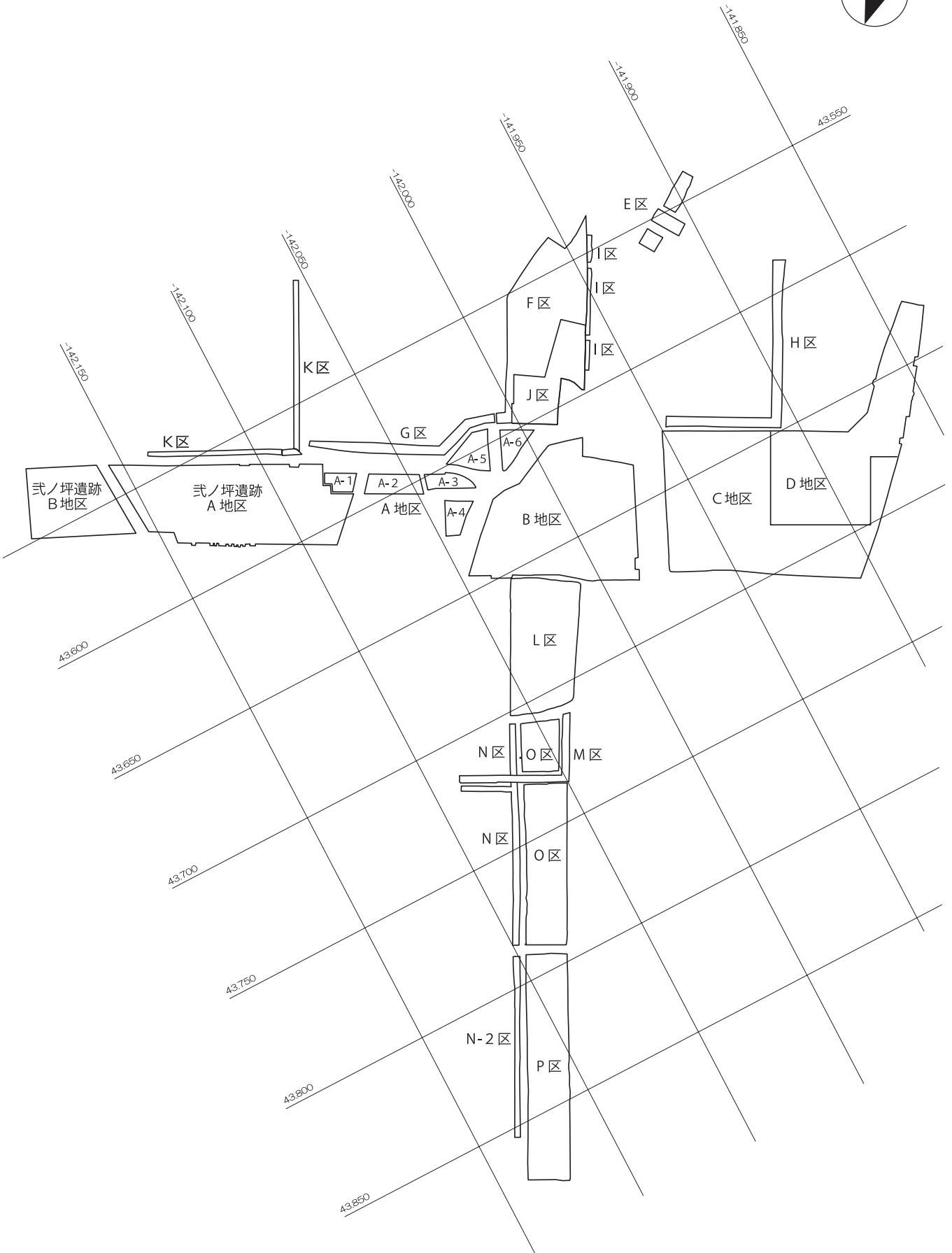
なお、13年度5次調査と14年度6次調査では、調査トレンチ毎にトレンチ名称としての地区名（例え

ば「A地区」や「F地区」など）を冠している（15年度と16年度は独立したトレンチ名称は特に付与していない）。このうち、5次調査はそれまでに行われた中勢道路や県事業のトレンチ名称（ちなみに中勢道路ではA～D地区の名称を使用）を引き継ぎ、ひとつの遺跡でのトレンチ名称の重複を避けたが、6次調査ではそれらを踏襲せずに新たにB・C・D地区の名称を用いた。このため、調査区名においても、替田遺跡として年度や事業枠を越えた統一的なトレンチ名称の付与は実現されなかった。

ここでは、以上を念頭に置いたうえで、13年度5次調査以降の替田遺跡調査における調査区と小地区設定の具体的手順を述べておきたい。なお、以下の調査区名称は、本書において新たに付与した調査区名を用い、調査時の旧調査区名はカッコ内に付記した。具体的には、本章第3節1を参照されたい。

〈平成13年度5次調査〉 調査区は、国道163号線バイパスに伴うJ区（J地区、以下、括弧内は調査時調査区名称）と、ほ場整備事業に伴うK区（5次調査H地区）とM区（5次調査I区）がある。

各々の地区における小地区の設定は、J区は前年度4次調査F地区・G地区の東隣接地であるが、4



第2図 調査区配置図 (1 : 2,000)

次調査F・G地区の小地区の番号は踏襲しないうえで、東西軸は西から東へアルファベットを、南北軸は北から南へ数字を付与している（第5図）。

一方、ほ場整備事業に伴う調査区のうち、前年度4次調査G地区と一部重複するかたちでその南側に広がるK区も、4次調査G地区の小地区とはリンクさせずに、トレンチの形状に沿って東西軸は西から東へアルファベットを、南北軸は北から南へ数字を付与している（第6図）。

また、M区も、調査区の形状に合わせてその部分のみを対象とした小地区の設定を行い、トレンチ形状に合わせて東西軸は西から東へアルファベットを、南北軸は北から南へ数字を付与している（第8図）。

〈平成14年度6次調査〉 調査区は、国道163号線バイパスに伴うL区（6次調査C区）、ほ場整備事業に伴うH区（6次調査D1・D2区）・I区（6次調査D3区）・N区（6次調査B2～B4区、なおB2区は本書ではL区に包含している）がある（なお、この年度はA地区を立花堂遺跡、E地区を里前遺跡の地区名に充てている）。

各々の調査区における小地区の設定は、①L区（旧C地区とその南側に接続する旧B1地区）、②N区のうち旧B2地区～旧B3地区、③N区のうち旧B4地区、④H区（旧D1・D2地区）、⑤I区（旧D3区）という5つの区分で独立して行っている。

まず、①は、調査区の形状に合わせて東西軸は西から東へ数字を、南北軸は南から北へアルファベットを付与している（第7図）。②は、①の東側隣接部であるが小地区の設定は②として独立して行っており、調査区形状に合わせて東西軸は西から東へ数字を、南北軸は南から北へアルファベットを付与している（第9図）。③・④もトレンチ形状に合わせて東西軸は西から東へ数字を、南北軸は南から北へアルファベットを付与している（第10図・第3図）。一方、⑤は、調査区形状に合わせて東西軸に数字、南北軸にアルファベットを付与したのは同様であるが、アルファベットは①～④と異なって北から南へ順に付与している（第4図）。

全体として、本年度調査は、13年度や後述の15・16年度調査とは数字・アルファベットの付与が全く逆になっていることに注意されたい。

〈平成15年度7次調査〉 東西に並ぶ2ヶ所のトレンチがあるが（トレンチの間は13年度I地区が貫入する）、本書においては両トレンチを合わせて「O区」とした。13年度5次調査同様、小地区設定は調査区の形状に合わせて東西軸は西から東へアルファベットで、南北軸は北から南へ数字で表示している（第11図）。なお、15年度と16年度は、個別のトレンチ名称は用いていない。

〈平成16年度8次調査〉 前年度の7次調査区の東側に連続する部分で、本書ではP区として扱った。本調査区も前年調査区とは連動せずに、調査区の形状に合わせて独自設定が行われている。すなわち、東西軸は西から東へアルファベットで、南北軸は北から南へ数字で表示している（第12図）。

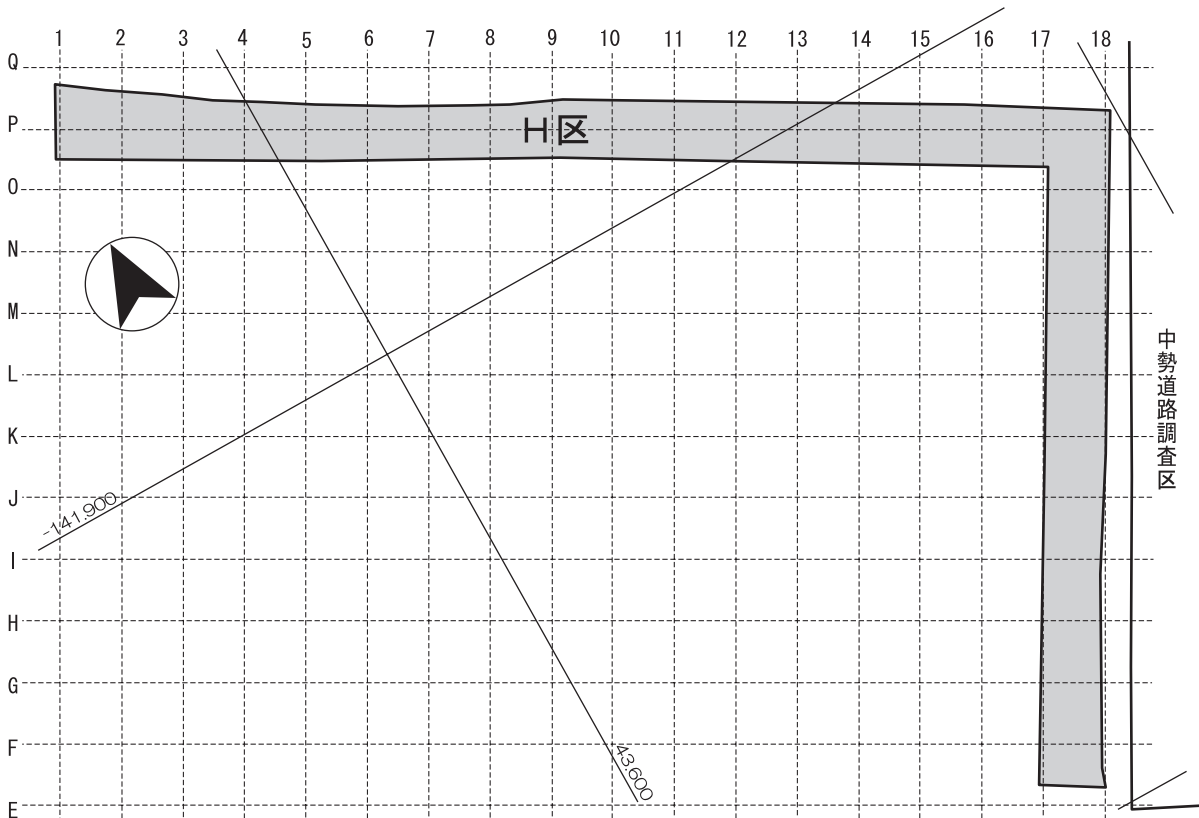
2 調査方法

表土除去 包含層より上位は、重機（バックホー）による表土除去を実施した。さらに、上層面調査終了後の下層面へ移行する際も、重機を利用した。

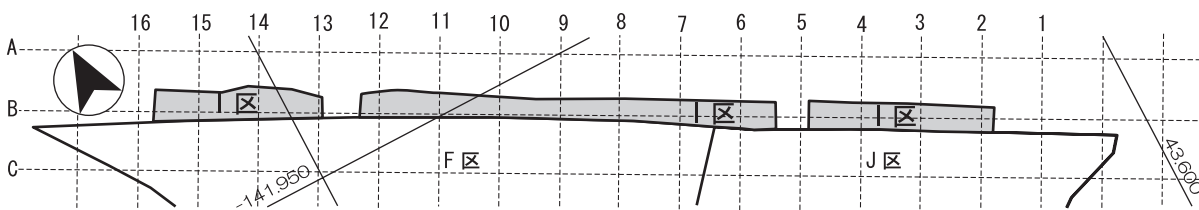
検出・掘削 表土除去後、人力による包含層掘削を実施し、その後、遺構検出を行った。遺構検出によって確認された遺構は、遺構カードに概要を記入した後、手スコップ等を用いて掘削を行った。

遺構カード 小地区を単位として1/40で作成し、略図・埋土土質・切り合い等を記すとともに、遺物が出土した遺構については取り上げにおける遺構番号の注記台帳としても使用した。

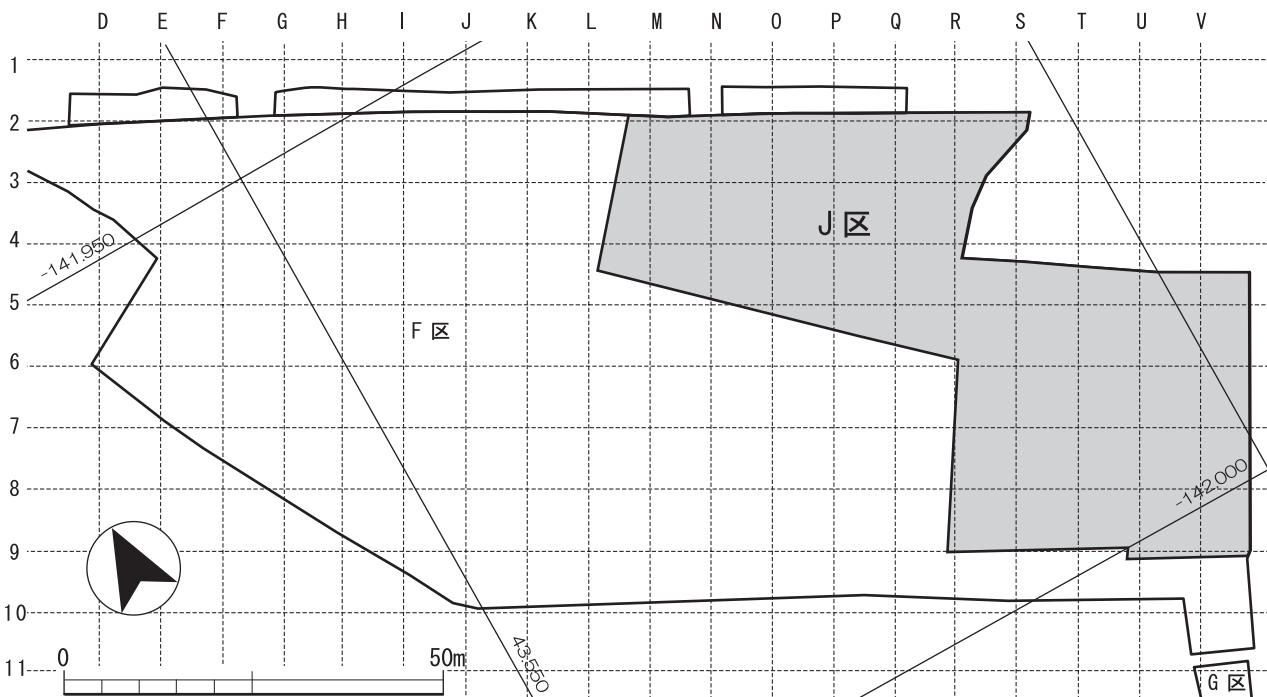
調査における遺構番号の付与 当センターが基本としている発掘調査における遺構番号付与は、ピット以外は遺構種別を越えた遺跡毎の通し番号で付与する方式である。しかし、本遺跡においては、それに従った年度もある一方、平成13年度5次調査では遺構種別毎の通し番号、14年度6次調査では調査地区が異なればその地区毎の通し番号を付与したように、年度によって異なった番号付与方法となっていた。そのため、本書の報告にあたっては、調査時に付与した遺構番号をそのまま使用すると煩雑なうえに同一遺構番号が多出して混乱をきたす恐れがあることから、遺構番号を替田遺跡全体での通し番号に変更した（詳細は後述）。ただし、遺物注記は現地調査中ないしは現地調査後速やかに終了しており、煩雑を避けるため遺物取り上げ時の名称のままとし



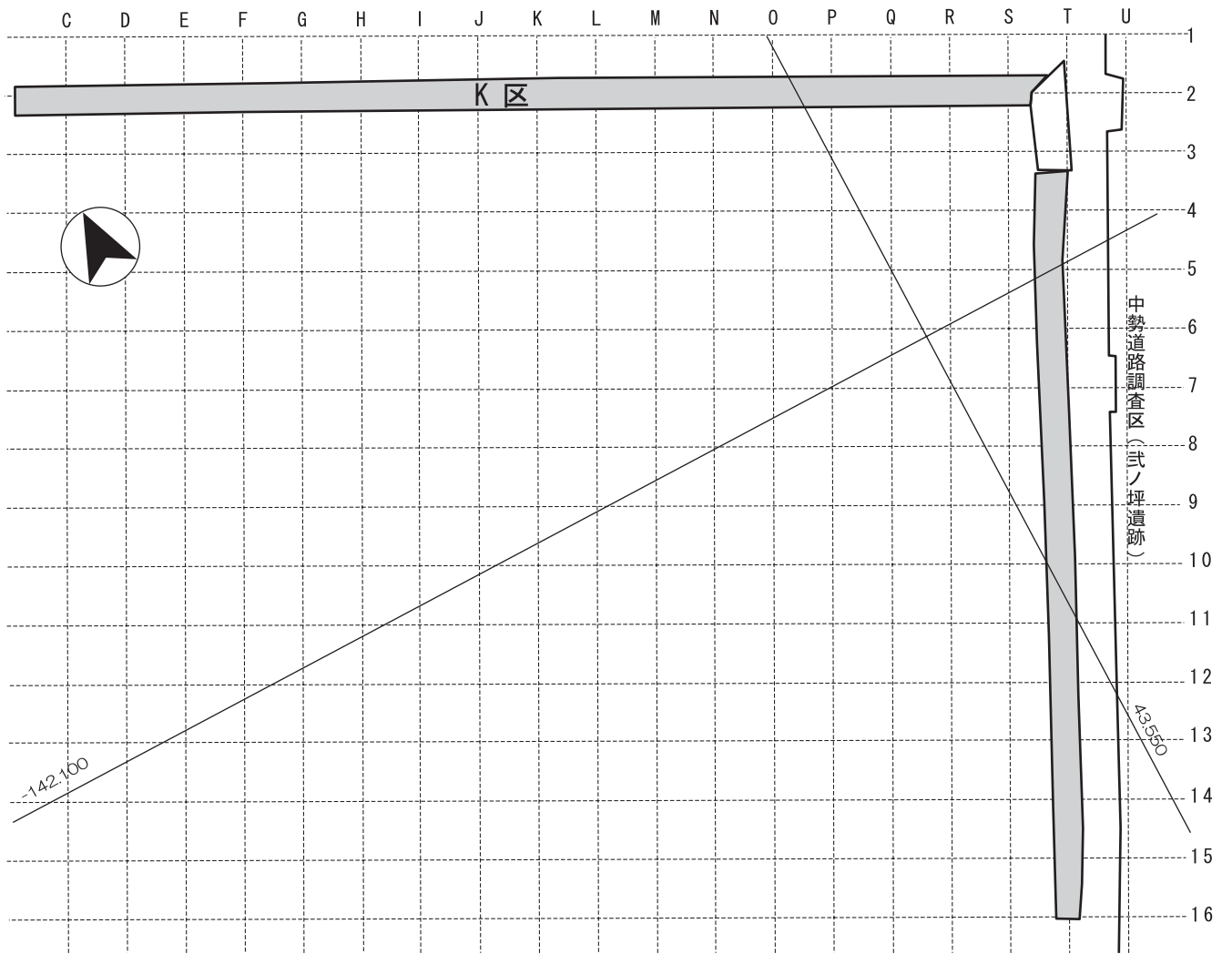
第3図 H区小地区割図 (1 : 1,000)



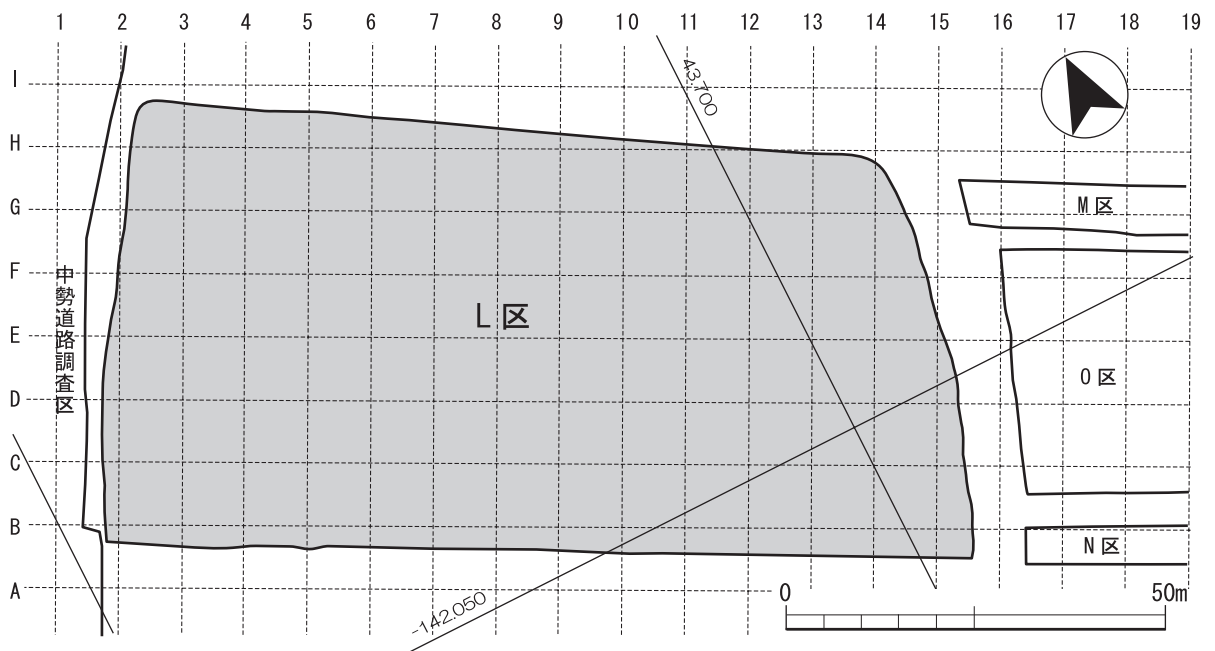
第4図 I区小地区割図 (1 : 1,000)



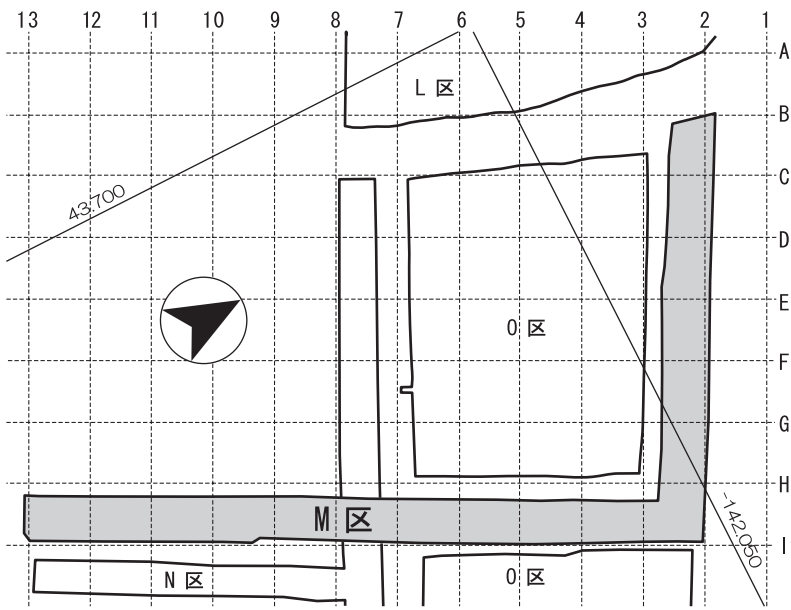
第5図 J区小地区割図 (1 : 1,000)



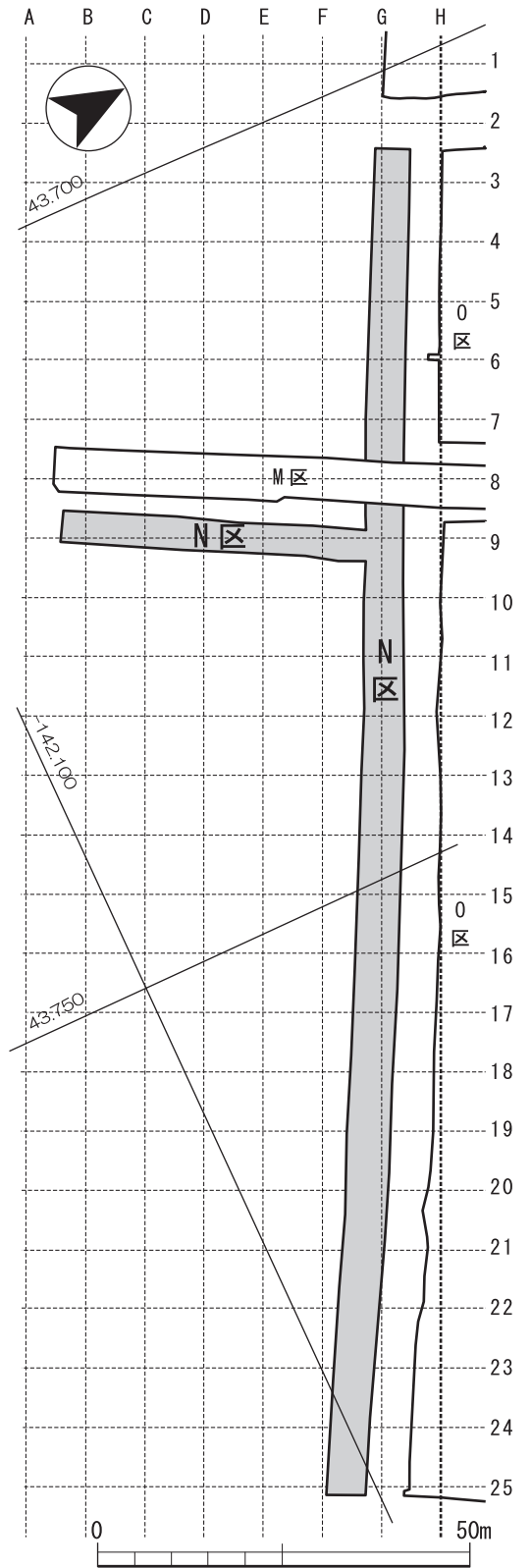
第6図 K区小地区割図 (1 : 1,000)



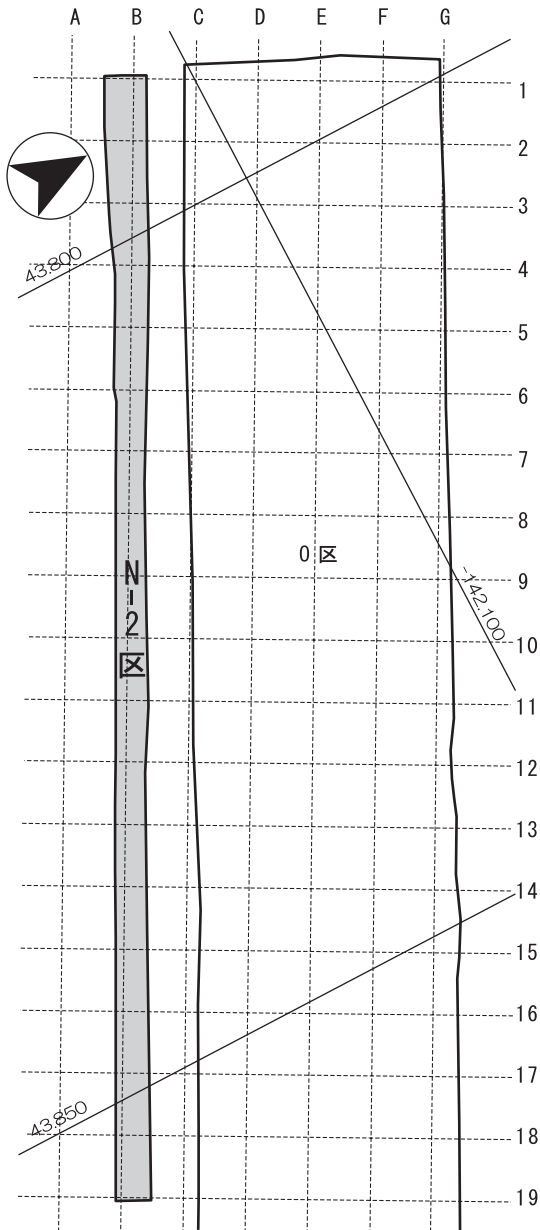
第7図 L区小地区割図 (1 : 1,000)



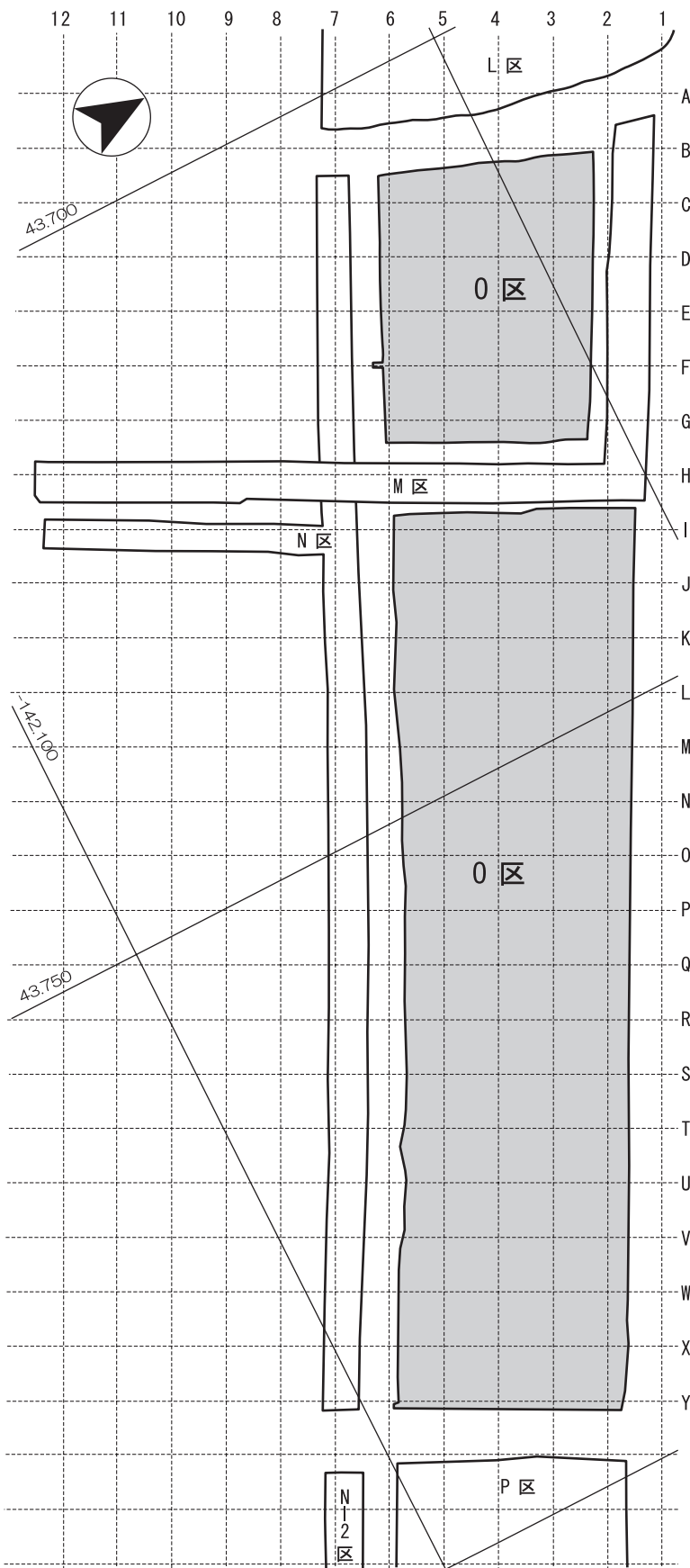
第8图 M区小地区割图 (1:1,000)



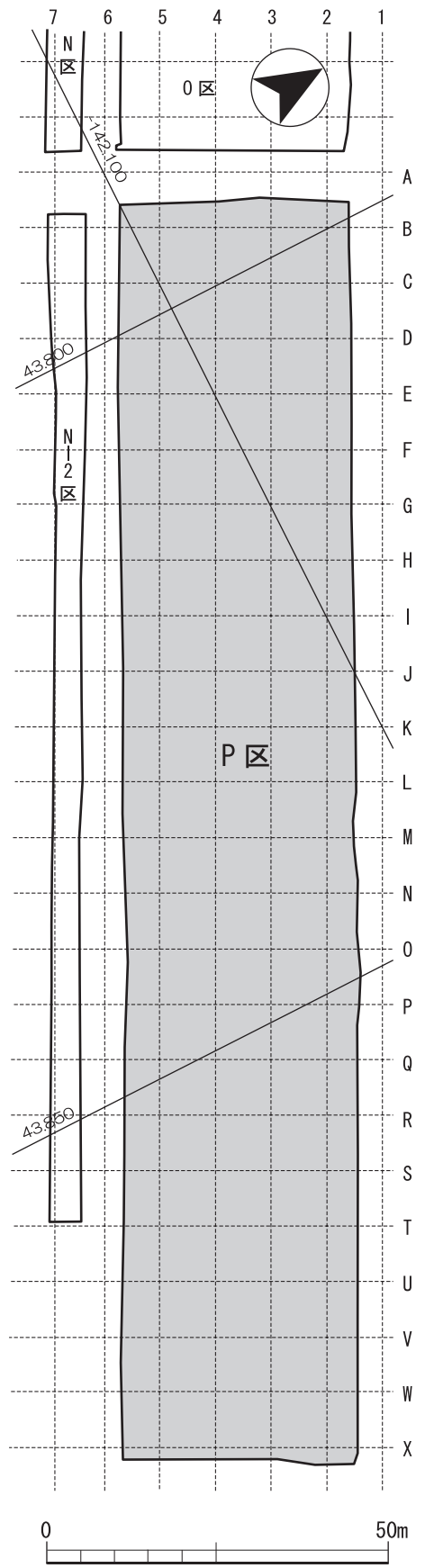
第9图 N区小地区割图 (1:1,000)



第10图 N-2区小地区割图 (1:1,000)



第11图 O区小地区割图 (1 : 1,000)



第12图 P区小地区割图 (1 : 1,000)

ている。

なお、三重県の調査方式上致し方ないが、基本的に遺物出土遺構はその量や性格に関わらず一律に遺構番号が付与されるため、報告段階で不要と認めた遺構も番号が残る一方、重要性があっても遺物の出土がなければ現場段階では遺構番号が付与されない場合も生じる。このため、本書においても、前者に関しては遺構番号があっても本文中で説明がない遺構があるとともに、整理段階で新たに付与した遺構があることを明記しておきたい。

以上の対応関係は、遺構一覧表に記したので参照されたい。

実測 土層や、詳細な図化が必要と認められた遺構は、実測を行った。調査区土層は1/20、遺物出土状況や個別遺構の実測図は1/10作図を基本とし、基本

的に手描き実測により作成した。また、調査区全体の遺構実測も手描きとし、この場合は1/20作図を原則とした。

遺構写真撮影 基本的に4×5インチ判ないしは6×9インチ判の白黒ネガ・カラーリバーサルで撮影し、補助・メモ的に35mm判白黒ネガおよびカラーリバーサルも使用している。なお、平成14年度調査は、4×5判以外に6×7判も利用している。

遺物写真撮影 報告書掲載遺物から任意に選択し、基本的にブローニー判白黒ネガで撮影した。その他、弥生土器の完形品など大きな遺物は4×5インチ判白黒ネガも適宜使用した。これらは、基本的に報告書写真図版の掲載時の大きさを考慮して使用の版を決定した。

第3節 本書における調査区名・遺構番号の扱い

1 調査区（調査トレンチ）名称の変更

遺構番号と並び、現地調査で使用したA地区やI地区などといった調査区名称は、国及び県の各事業を越えて替田遺跡というひとつの枠で統一して付与されておらず（中勢道路の調査時における地区名自体、たんに年度による調査区の区切りを示すもの）、それぞれが任意に付与されたものである。そのため、調査区名称の付与方法も扱いや基準が統一されておらず、そのままの名称を用いると同一名称が混在するなど混乱が大きい。

そこで、本書では、第2節1でも簡単に触れたが、中勢道路調査部分との整合も図り、かつ県公共事業調査部分も含めた替田遺跡調査のトレンチ名称を通し番号とするため、これまでの調査トレンチ名を一部変更し、後述の調査時付与の遺構番号との整合も図りつつ、以下に記したように調査区（トレンチ）名称の変更を行った（第2～12図参照）。

新	旧（調査時）
A～D地区	中勢道路関係調査区（調査時名称踏襲）
E区	県営かんがい排水整備事業に伴う調査区（3次調査）
F区	4次調査F区（調査時名称踏襲）
G区	4次調査G区（調査時名称踏襲）

H区	6次調査D1区・D2区
I区	6次調査D3区
J区	5次調査J区（調査時名称踏襲）
K区	5次調査H区
L区	6次調査C区・B1区
M区	5次調査I区
N区	6次調査B2～B4区
O区	7次調査トレンチ
P区	8次調査トレンチ

なお、前述のように4mを単位とした小地区は調査トレンチ毎に独立して付与され、遺物取り上げや遺物注記もそれに基づいて行っている。そのため、旧トレンチ名称も原資料類や遺物注記においてはそのまま引き継いでいるので、本報告書を今後の資料活用の際の媒介として利用する必要がある。

2 遺構番号の変更（再交付）

前述のように、替田遺跡の調査では、遺構番号は調査年次毎に他の調査年次とは全く連動せずに独立して与えられ、また同一年度であっても調査区が異なれば遺構番号が通し番号化されていない年度も存在する。

しかし、こうした調査時の遺構名称をそのまま踏襲すれば、替田遺跡のなかに同一遺構番号が重複して存在するものも出てくるため、まことに都合が悪

い。そのため、報告においては、遺構番号にかかる混乱を避け、替田遺跡としての遺構番号の統一性を図る必要性に迫られた。

そこで、本書の報告にあたっては、既刊の報告書（平成11年度の3次調査・4次調査の報告書）において決定された遺構番号はそのまま踏襲し、かつ現地調査で付与した番号（調査年度や調査区毎に与えられていた番号）も一定程度は踏襲しつつ、全体として通し番号となるように、新たに通し番号で再交付することとした。

具体的には、以下のように遺構番号の再交付を行った。

新遺構番号	対象
001～	3次調査（調査時番号踏襲）
101～	5次調査
201～	6次調査
501～	7次調査
601～	4次調査F区（調査時番号踏襲）
701～	4次調査G区（調査時番号踏襲）

801～ 8次調査

新遺構番号を付与した5次調査以降のうち、7～8次調査は、調査時の遺構番号が通し番号であったため、調査時番号にそれぞれ700と800を加算した。調査区毎の通し番号である6次調査は、L区遺構に200を加算したうえでH・I区遺構はそれに続く通し番号を、N区は400を加算した。5次調査は小地区毎の通し番号であったので、新たに再交付した。

なお、ピットについては、調査時に付与したピット番号をそのまま踏襲することとした。

3 本書における報告方法

以上の調査区名及び遺構番号の通し番号化による再整理を経たうえで、本書において新たに付与した調査トレンチ毎に遺構・遺物を報告することとした。ただし、全体の遺構実測図については、レイアウトの都合上、必ずしもトレンチ毎のレイアウトになっていない（隣接するトレンチと合わせて掲載）のでご留意されたい。（穂積）

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

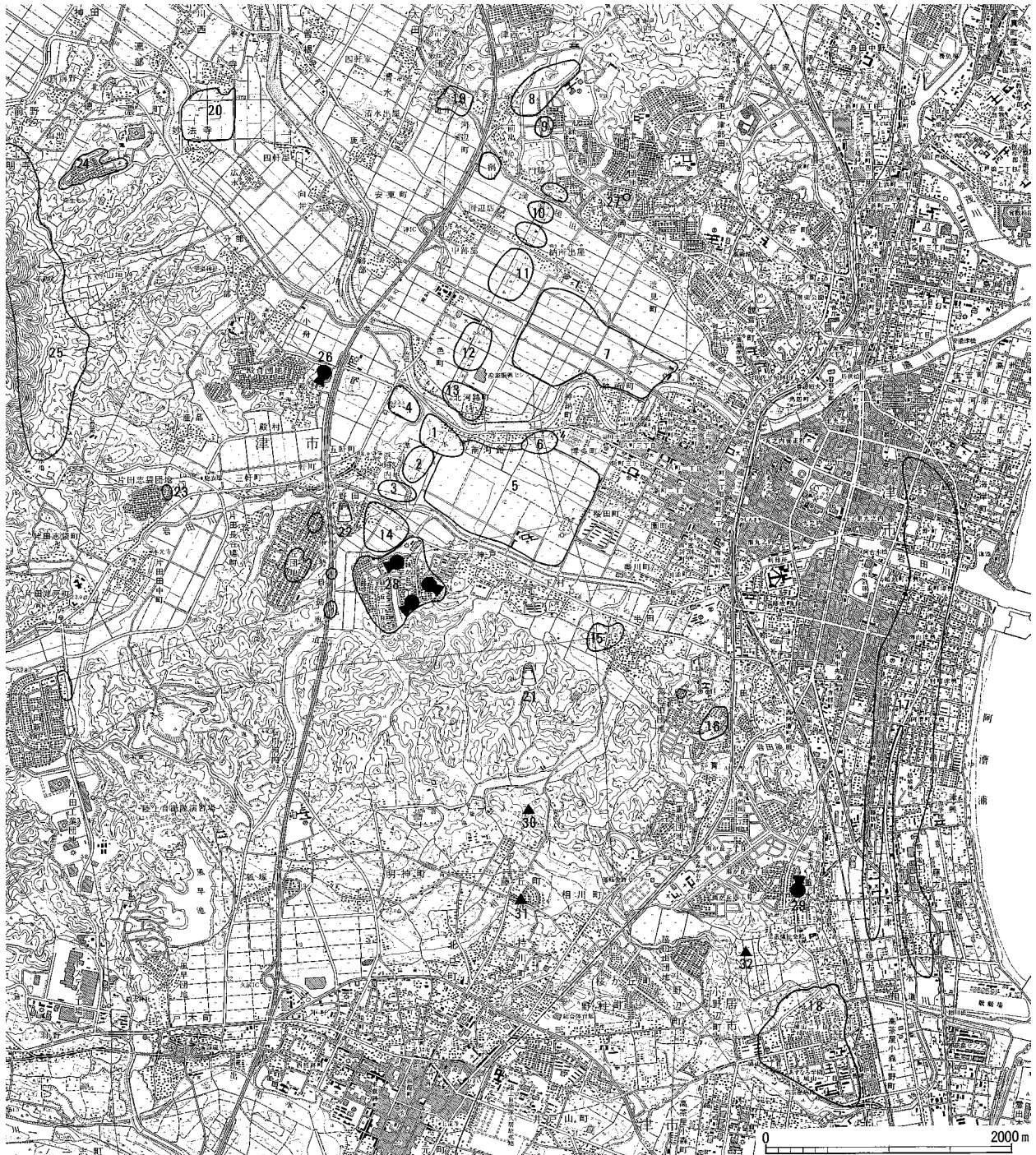
替田遺跡（1）は、津市を東西に貫いて伊勢湾に注ぐ安濃川右岸の標高6.6m～7mの自然堤防およびそれに続く微高地上に位置する。

この安濃川は、鈴鹿山脈鋸杖ヶ岳付近に源を発し、伊賀に連なる布引山系の東側を画する独立峰、長谷山の北麓を流れる穴倉川などを合流しつつ、流域に肥沃な沖積平野を形成する。安濃川によってもたらされたこの沖積平野は、西側を経ヶ峰から長谷山にいたる山塊、北側を長岡丘陵（見当山丘陵）、南側を半田丘陵によって画されて地理的なひとつのまとまりと見ることが可能で、巨視的には北側（長岡丘陵）から南側（半田丘陵）に向かって低くなっていく地形をなす。すなわち、長岡丘陵南麓を流れる美濃屋川は、南側へ小流路を派生させて安濃川北岸の水田を潤し、最終的に美濃屋川本体も含めて安濃川へ排出される。また、安濃川南岸の水田は、安濃川

から南へ派生した三泗川は安濃川南岸の水田を潤しつつ、半田丘陵北麓を流れる岩田川に集まり、伊勢湾へと注ぐ。

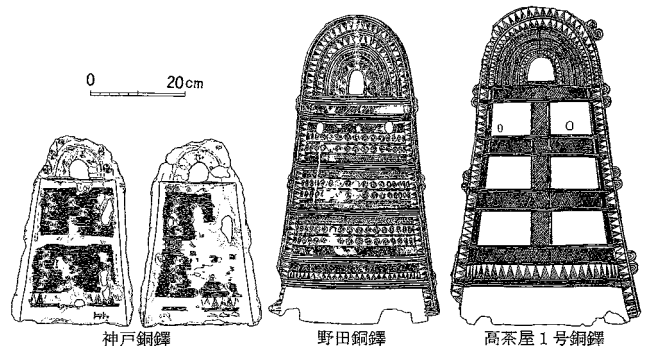
さて、替田遺跡からみてやや北西側は、北西から南東へ向かって流れてきた安濃川が、伊勢湾に向かって向きを転じて東流を開始する部分に相当している。この地で安濃川から派生し、岩田川へ注ぐ三泗川は、普段はさほど大きな流路ではない。しかし、大雨時には津城下町を洪水から護るため安濃川の水を岩田川へ排出する機能を負っており、非常時はかなりの水量を受け持つ（この部分の安濃川堤防自体、現在も洪水時の南側への分水を前提として低い）。そのため、三泗川沿いの水田部は、洪水時には水没するような低地となっている。

替田遺跡は、この三泗川の左岸（東側）にあって、地籍上、津市南河路の「替田」「又口」「結縁寺」



第13図 替田遺跡と周辺の主要遺跡（1：50,000） 国土地理院 1：25,000「津西部」「津東部」

- | | | |
|----------|--------------------|-------------|
| 1 替田遺跡 | 12 蔵田遺跡 | 23 坂本山古墳群 |
| 2 式ノ坪遺跡 | 13 位田遺跡 | 24 平田古墳群 |
| 3 里前遺跡 | 14 梁瀬遺跡 | 25 長谷山古墳群 |
| 4 惣作遺跡 | 15 上村遺跡 | 26 殿村1号墳 |
| 5 神戸遺跡 | 16 高松遺跡 | 27 君ヶ口古墳 |
| 6 立花堂遺跡 | 17 安濃津遺跡群 | 28 鎌切・稲葉古墳群 |
| 7 納所遺跡 | 18 高茶屋大垣内遺跡 | 29 池ノ谷古墳 |
| 8 長遺跡 | 19 亀井遺跡 | 30 藤谷埴輪窯 |
| 9 山籠遺跡 | 20 浄土寺南遺跡 | 31 久居古窯跡群 |
| 10 森山東遺跡 | 21 神戸銅鐸出土地 | 32 法ヶ広埴輪窯 |
| 11 松ノ木遺跡 | 22 野田銅鐸出土地（詳細位置不明） | |



第14図 津市内出土銅鐸（三重県『三重県史資料編考古1』2005）

「八反田」という4つの小字にまたがっている。このうち、替田遺跡でも北西部の小字「替田」に含まれる部分が最も高く、安濃川の形成した自然堤防上に相当し、現南河路集落も基本的にこの自然堤防上に立地する。この小字「替田」部分を頂点に、地形的には南側及び東側へ向かって緩やかに落ちていく

第2節 歴史的環境

替田遺跡が含まれる津地域は、その中心域が安濃川水系となる地域であり、安濃川上流の旧安濃町と旧芸濃町の一部と合わせて旧の郡域は安濃郡にあたる。ここでは、安濃郡のなかでも、替田遺跡の所在する安濃川下流部の遺跡を中心に、その展開を概観してみよう。

〈縄文時代〉 縄文時代はまだ沖積部への進出・開発は未活発であるが、安濃川右岸の蔵田遺跡⁽¹⁾ (12)では後期末葉の土坑、松ノ木遺跡⁽²⁾ (11)では晩期の河道と竪穴住居が確認されており、既に縄文時代後晩期段階には僅かではあるが開発が沖積低地へも及んでいたことが知られる。

〈弥生時代〉 弥生時代になると、安濃川流域でも一気に遺跡形成が進む。このうち、最も注目すべき事象は、納所遺跡⁽³⁾ (7)の出現である。納所遺跡は、安濃川下流左岸の自然堤防上に立地し、替田遺跡からは直線距離で1.5kmほど下流となる。納所遺跡では、既に弥生時代前期の自然河道から各種農具類をはじめとする木製品も多数出土している。このことは、水稻耕作に基盤を置く弥生文化が当地域への波及当初から基本的な生活用具類を装備した状態で伝播していることを示していよう。納所遺跡は、中期に最盛期を迎え、各種原材や未成品も出土するなど伊勢湾西岸域を代表する弥生集落として、物資流通の核となっただけでなく拠点遺跡として機能したとみられる。ただし、後期を迎える頃には急速に衰退し、流路程度しか明瞭な遺構が確認できないようになる。

前期の集落は、沖積部だけでなく丘陵部にも進出しており、納所遺跡の出現よりは遅れるが半田丘陵の上村遺跡⁽⁴⁾ (15)でも多数の前期弥生土器の出土がある。

中期になると、遺跡数はさらに増加し、替田遺跡

地形をなすが、替田遺跡の範囲部分は西・南・東の3方向からみれば、50cm前後高い方形の微高地状を呈している。起伏の少ない沖積低地に形成された集落遺跡であるが、そのなかでも自然堤防から続く僅かな微高地を利用して占地された状況が窺える。

やその南の式ノ坪遺跡(2)でも遺構が確認されているほか、安濃川左岸の沖積部では蔵田遺跡(12)(掘立柱建物、集落域)・松ノ木遺跡⁽⁵⁾ (11)(方形周溝墓、墓域)・森山東遺跡(10)(水田、生産域)など多数の遺跡が形成される。これら遺跡は、遺構密度としては納所遺跡にはるかに及ばず、納所遺跡の後方に展開する衛星集落的な様相を呈するが、この時期の活発な低地進出の動きは特筆に値する。

中期後葉には丘陵部への遺跡形成がさらに進展し、長岡丘陵には長遺跡⁽⁶⁾ (8)(竪穴住居100基以上)や山籠遺跡⁽⁷⁾ (9)(竪穴住居10基)など狭い範囲に多数の竪穴住居が集中して営まれた集落が出現する。これら遺跡は、後期を迎える頃には廃絶し、あたかも納所遺跡の盛衰とほぼ軌を一にした状況は注目される。つまり、安濃川下流域に形成された弥生中期集落は、地域の拠点集落たる納所遺跡の動向と、少なからぬ関係を有しながら存在した可能性が考えられる。

後期に入ると、岩田川左岸の半田丘陵を中心に新たな集落形成の動きが広がるとともに、方形台状墓などの墳墓が造営された。また、半田丘陵に入り込んだ谷筋からは、銅鐸が出土している(神戸銅鐸出土地、21)。

〈古墳時代〉 安濃川水系の古墳時代の集落は、現在知られているものに関してはさほど大規模なものとは知られておらず、比較的遺構密度も薄いものを中心である。古墳・墳墓に関しても、古墳前期のものは岩田川水系の坂本山古墳群⁽⁸⁾ (23)があるが、規模としては小規模である。また、安濃川左岸の位田遺跡⁽⁹⁾ (13)や右岸の高松C遺跡⁽¹⁰⁾などにも古墳時代初頭の墳墓(方形周溝墓)が営まれるが、これらのあり方は弥生時代の墳墓群の延長にある。

安濃川水系の明瞭な首長墓は、中期中葉頃になっ



第15図 替田遺跡と近傍の遺跡（1：5,000）

て中流域右岸に出現する旧安濃町明合古墳⁽¹¹⁾（全長81mの造出付き方墳）の築造を嚆矢とする。また、水系的には安濃川水系とは言い難いが、前期末葉頃には半田丘陵から東側へ続く台地の縁辺に中勢地域最大の前方後円墳、池ノ谷古墳⁽¹²⁾（29）が築造された。これらのことから、当地域における首長墳は、5世紀頃を境に明瞭に把握できるようになる。

この後、5世紀後葉以降も、安濃川水系では半田丘陵や長谷山から派生した丘陵部を中心に前方後円墳の築造が続き、小規模ながら安定した首長墓の系譜をみる事ができる。ただし、これら首長墳の母体として対比しうる集落遺跡は、池ノ谷古墳がさらに南方側の台地上に展開する高茶屋大垣内遺跡⁽¹³⁾（18）との関係が考慮される以外、まだ不明な部分が多い。

前方後円墳の廃絶後も、首長墓に連なる古墳⁽¹⁴⁾が確認されており、そのひとつが安濃川下流左岸の長岡丘陵端部に所在する家形石棺を内包した横穴式石室墳、鳥居古墳⁽¹⁵⁾である。初葬時か追葬時かはともかく、金銅装磚仏等注目すべき出土品があり、初期仏教の地方浸透を考える上でも重要である。

（穂積）

〈古代〉 安濃川水系は古代の安濃郡に含まれるが、現在のところ、安濃郡衙に相当するような官衙遺跡や確実に奈良時代以前に遡る古代寺院は本地域内では未確認である。この点、同じ津市域であっても、正方位を指向したコの字形配置の大型底付掘立柱建物が確認された六大B遺跡⁽¹⁶⁾などを擁する北部の志登茂川右岸域（古代には安菴郡に属する）の状況とは対照的である。

しかし、納所遺跡などから断片的ではあるが古代瓦の出土がみられるほか、長岡丘陵の東端部に近い津市広明町からかつて軒丸・軒平瓦が発見⁽¹⁷⁾されており、広明町瓦窯跡（四天王寺瓦窯跡）として瓦窯の可能性が考えられている。前述の鳥居古墳からも近い位置にあり、郡家や古代寺院を含む古代安濃郡の中核施設に関わる遺跡の確認は、今後に残された大きな課題である。

安濃川水系の古代集落は、宮ノ前遺跡や蔵田遺跡、それに替田遺跡などで奈良時代までの集落が、また平安時代以降の集落は位田遺跡や式ノ坪遺跡、安濃

川を少し遡った安濃町浄土寺南遺跡⁽¹⁸⁾（20）などで確認されている。このうち、浄土寺南遺跡は規則性をもつ建物配置を採っており、円面硯や緑釉陶器の出土とあわせ、公的機能をもった性格も考えられている。

また、安濃川流域は近年まで条里制の方格地割の残存が認められており、N30度Eの条里プランの復元⁽¹⁹⁾が提示されている。これまでの発掘調査の結果からも、式ノ坪遺跡⁽²⁰⁾の平安時代前期の掘立柱建物など条里プランに沿った方向の遺構が確認されており、残存地割の起源が古代に遡る可能性を示した。

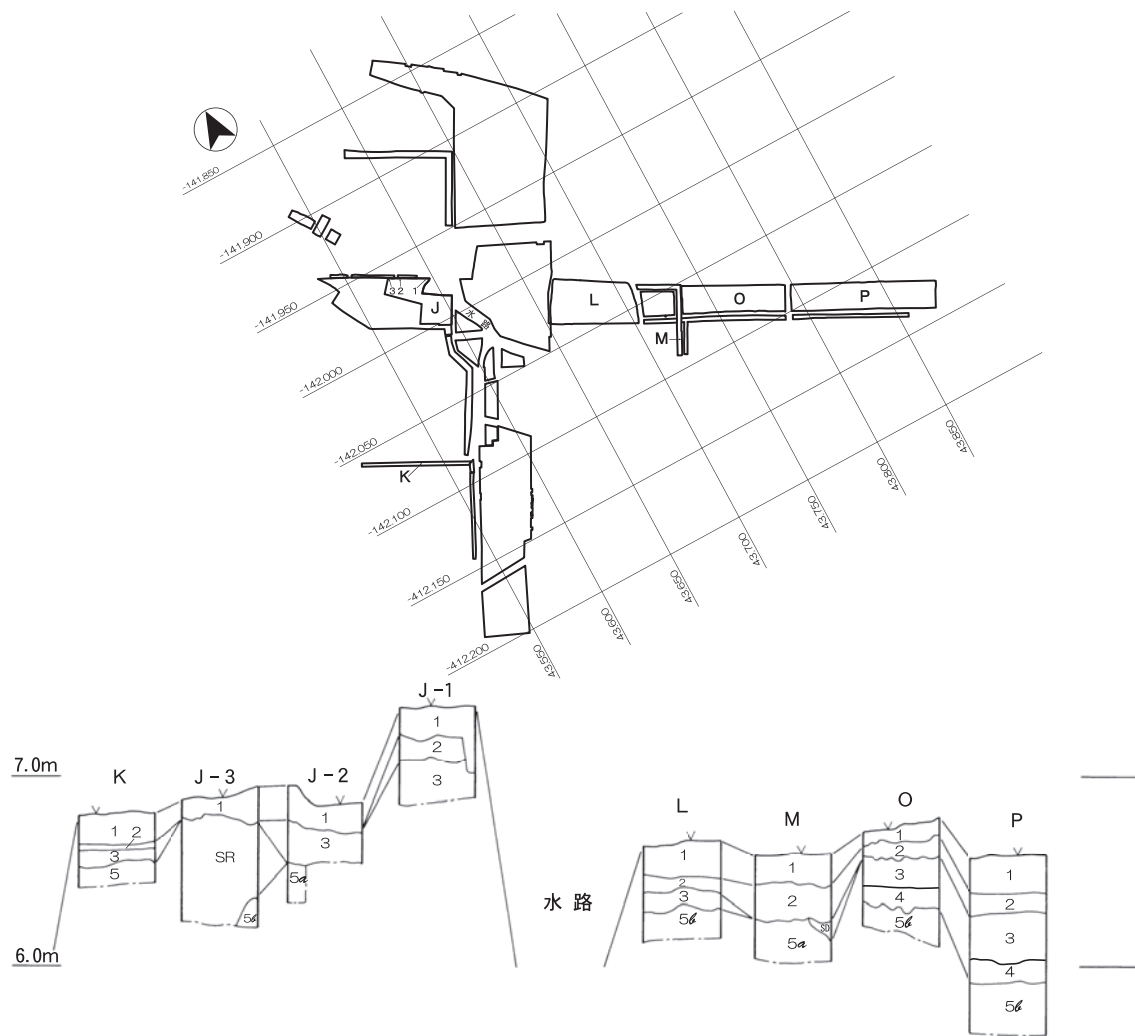
〈中世〉 当地域においても、替田遺跡をはじめ、中世の遺構・遺物が確認された遺跡は数多いが、まず注目できるのは替田遺跡の南方に広がる里前遺跡である。里前遺跡⁽²¹⁾（3）は、岩田川左岸にあって、三泗川が岩田川に流れ込む合流点の内側（北西側）に位置する。集落の中心域と目される微高地部分は大部分が調査区外であるが、三泗川沿いの調査区からは未使用を含む大量の墨書山茶椀が出土しており、岩田川を遡上して内陸へ物資を荷揚する内水運の拠点地としての性格や、墨書内容から年貢集配に関わる機能などが想定されている。

さて、替田遺跡が含まれる範囲ないしはその近傍は、中世には神宮領荘園が存在していたようで、13世紀初頭頃成立の『神宮雑令集』には「野田御園」、14世紀後半に成立したとされる『神鳳鈔』には「野田御厨」として書出する⁽²²⁾。これに相当する集落の比定はまだ定まったものはないが、これまで行われた安濃川流域の発掘調査の結果とも総合して、今後、より豊かな地域像が提示されることが期待される。

また、一部が替田遺跡の範囲に含まれる津市南河路字結縁寺の地は、中世に結縁寺^{けつえんじ}が存在したとされる地で、熊野信仰が行われた痕跡が認められている。替田遺跡から出土した中世前期の山茶椀に仏教系文言の存在を認め、墨書内容の解釈に仏教信仰との関わりを認める説⁽²³⁾も提起されている。（酒井）

註

- (1) 三重県埋蔵文化財センター『蔵田遺跡発掘調査報告』1999
- (2) 三重県埋蔵文化財センター『松ノ木遺跡・森山東遺



第16図 土層断面模式図

層名		遺構等の確認	利用時期
1	表土(耕作土)	↑ 攪乱	圃場整備後
2	耕作土	↑ 攪乱	圃場整備以前
3	包含層	↑ 遺構 △遺構 ↓ 溝(旧河道)	↑ 中世前期 △弥生中期 ↓ 弥生中期
4 (J区西部・O・P区)のみ		↑ 遺構 ↓ 遺構	↑ 古墳時代? ↓ 古墳時代
5a	5b層の土壤化層	—	—
5b	砂層	—	—

第1表 替田遺跡基本層序一覧表 (↑上面、△層内、↓下面検出を示す)

- 跡・太田遺跡発掘調査報告』1993
- (3) 三重県教育委員会『納所遺跡―遺構と遺物』1980
- (4) 津市教育委員会『上村遺跡発掘調査報告』1972
- (5) 前掲註(2)
- (6) 三重県埋蔵文化財センター『長遺跡発掘調査報告』2000
- (7) 三重県埋蔵文化財センター『大古曾遺跡・山籠遺跡・宮ノ前遺跡発掘調査報告』1995
- (8) 津市教育委員会『坂本山古墳群・坂本山中世墓群』1970
- (9) 三重県埋蔵文化財センター『位田遺跡発掘調査報告』1993
- (10) 津市教育委員会「高松C遺跡発掘調査報告」『津市埋蔵文化財センター年報』3 1999
- (11) 安濃町史編纂委員会『安濃町史資料編』1994
- (12) 藤田充子「津市池の谷古墳出土の円筒埴輪」『三重の古文化』81 1999
- (13) 三重県埋蔵文化財センター『高茶屋大垣内遺跡（第3・4次）発掘調査報告』2000
- (14) 鎌切古墳群など。
- (15) 浅生悦生「鳥居古墳と押出仏」『津市の文化財』津市教育委員会 1989
- (16) 三重県埋蔵文化財センター『六大B遺跡発掘調査報告』2006
- (17) 鈴木敏雄『三重県古瓦図録』1933、三重県の古瓦刊行会『三重県の古瓦』1997
- (18) 三重県教育委員会『昭和55年度県営圃場整備事業地域埋蔵文化財発掘調査報告』1981
- (19) 仲見秀雄・谷岡武雄編『伊勢湾岸地域の古代条里制』東京堂出版 1979
- (20) 三重県埋蔵文化財センター『式ノ坪遺跡発掘調査報告』2005
- (21) 三重県埋蔵文化財センター『里前遺跡発掘調査報告』2002
- (22) 平凡社『日本の地名』1988
- (23) 小倉整「三重県津市南河路「小字結縁寺」についての一考察」『Mie history』vol.16 2005

第3章 旧地形と基本層序

替田遺跡における中勢道路と国道163号線BPはほぼ十字に交差する。それぞれの道路主軸の方位は、正方位には乗らないが、以下の記述では、中勢道路に平行する部分を南北、国道163号線BPに平行する方向を東西として記述を進めていきたい。

替田遺跡においては、巨視的に見ると中勢道路による調査区が南北方向に、本事業（国道163号線BP）に伴う調査区が東西方向に大きなトレンチを開けた様相を呈する。

前言のとおり、替田遺跡の調査では調査区別に独立した調査が実施されたために、全調査区を通じた基本層序による分層が行われていなかった。従って、本報告による基本層序は、報告書作成段階で新たに作成したことをあらかじめ断っておく。

報告書作成段階に作成した基本層序は、調査区別に独立した土層断面図を元に、各時期の遺構が切り込む層序を検討して作成した。沖積平野では、層相の色調や粒度が側方変化することが一般的である。

替田遺跡においてはJ区北東部に現在も水路（以後、現水路と表記する）が存在しており、調査区に近接して堆積物の供給源が存在し、層相変化の激しいことが想定されたために色調や粒度を用いた細分は行わなかった。

上記を基に作成した基本層序（第1表・第16図参照）は次のとおりである。

- 1層 圃場整備後の表土（耕作土）である。
- 2層 圃場整備以前の耕作土層である。
- 3層 調査時に包含層として把握されていた層序をまとめたが、後述のように一部の地区では4層として細分した。

各調査区において、上部から中世前期の遺構が切り込まれる状態で確認されており、L区では、層内から弥生時代中期前葉の遺構が確認されている。また弥生時代中期前葉の遺物が包含されるJ区のSR601は下部から掘り込まれている。つまり、弥生時代中期前葉には3・4層の形成が始まっており、土

地が利用されていることが分かる。

J区は現在の北東部と南西部の比高差が0.5mに及ぶ(第18図)が、これはJ区北東部の水路の自然堤防帯に相当する。J-1地点では3層より下部の掘削を行っていないためにその形成時期は不明であるが、3層段階においては確実に自然堤防状の高まりが存在する。

M区は中世前期の遺構がS Z 138上面で検出されている。S Z 138は5 a層上面と3層下面の間に存在する砂層であり、北部から南部に向かって粒度が細くなる特徴をもつ。調査時に自然流路として把握されていたことから遺構番号を付したが、自然流路として平面形態を捉えることが困難である。このことから基本的には北部から南部方向に流れた洪水堆積物として把握する。この点では基本層序の4層に相当する可能性もあるが、0区では層相の粒度記載のないため比較が困難であり、独立させて報告した。

4層 J区北東部の現水路から遠ざかるO・P区では、層厚が厚く包含層が細分されており、3・4層間にも遺構が存在する。具体的には、P区西部の断面では3・4層間に高まりを両側に保有し、砂を包含する溝(畝畦?)が存在する。出土遺物が極めて稀少であることと併せて、水田であった可能性が考えられる。このために3層から独立させたが、基本的には同層として把握できる。

5層 土壌化の有無で、5 a・5 b層に細分した。上面での平面調査は実施されていない。J区北東部の現水路に近い地点で砂と表記されており、最も遠いP区ではシルトと表記されていたことから、この段階でもJ地区北東部に谷状地形が存在しており、洪水堆積物が流出したと考えられる。

地層の形成と調査の矛盾点

以上から、替田遺跡の基本層序はJ区北東部の現水路地点に谷状地点が存在しており、そこからの氾濫した洪水堆積物によって形成されたことが分かる。

5層の形成時期は不明であるが、弥生時代中期前葉の遺物を包含する(4次調査区)水路SR601が3層下部で確認されている。完全に充填された後、3層上部には中世の遺構が検出されていることから、弥生時代中期前葉には包含層として認識された3・4層の形成が開始されており、同時に土地が利用されていたことが分かる。

J区北東部の現水路地点に隣接するJ-1地点(自然堤防帯)では3層下部で平面検出が実施されていないために判然としないが、基本的には現水路との相対的な位置関係で遺構密度と層位が変化する。具体的には、L区やJ区西部では弥生時代中期前葉から中世前期までの遺構が接近した高さで確認されているのに対し、元々標高の低かったO区やP区では堆積土量が多く、3層を細分できる地点も存在する。

これらの層位的な特徴からみると、O・P区では一面で平面調査を実施することが困難であるにもかかわらず、一面での平面調査を実施するために、3層をかなり下げた高さでの平面検出を行なっている。従って、O・P区では断面図に表現されている3層上面から掘り込まれていた遺構を平面図で確認することが不可能となっている。替田遺跡の遺構については、以上のてんに留意する必要がある。

(川崎)

K区

層名(番号)	土質	色調	その他
1	褐灰色粘質土	5YR4/1	表土(耕作土)
2	明褐色粘質土	7.5YR5/6	
3(包含層)	にぶい褐色粘砂土	7.5YR5/4	
SD124			
SD127	にぶい黄褐色砂質土	10YR5/4	
5b	黄褐色粘砂土	2.5Y5/3	西部は砂質度が高い

J区

層名(番号)	土質	色調	その他
1	オリブ黒色砂質土	5Y3/1	表土(耕作土)
2	褐色砂	10YR4/4	
3(包含層)	灰黄色粘砂 褐色砂	2.5Y6/2 10YR4/4	ブロック状に混じる
4(包含層)	3層 黒褐色粘砂土		ブロック状に混じる
Pit	-1 にぶい褐土	7.5YR5/4	
	-2 褐灰色(やや砂質)	5YR4/1	
	-3 黒褐土(やや砂質)	7.5YR3/1	
SR606-607	-1 黒褐粘砂土 褐色砂質土	7.5YR3/2 7.5YR4/4	ブロック状に混じる
	-2 暗褐色砂礫		
	-3 黄砂		
	-4 にぶい黄褐粘砂	10YR5/3	
	-5 灰黄褐色砂礫	10YR4/2	
	-6 暗赤灰砂礫	7.5R3/1	
	-7 灰黄褐粘砂土	10YR4/2	
	-8 黒褐粘砂	10YR3/2	
	-9 暗灰黄粘砂	2.5Y4/2	
	-10 暗赤灰砂礫	7.5R3/1	
	-11 暗赤灰細砂	7.5R3/1	
	-12 暗赤褐砂礫	5YR3/2	
	-13 暗赤灰砂礫	7.5R3/1	
	-14 暗赤褐砂礫	5YR3/2	
	-15 黒褐粘砂 灰粘砂	2.5Y3/2 5Y4/1	ブロック状に混じる
-16 褐色砂礫	10YR4/4		
-17 黒褐細砂	2/5Y3/2		
-18 黒褐色砂質土	7.5YR3/1		
SR601	-1 にぶい黄褐砂礫	10YR4/3	
	-2 明褐粘質土	7.5YR5/8	
	-3 にぶい黄褐砂礫 黄灰細砂	10YR4/3 2.5Y5/1	ブロック状に混じる
	-4 オリブ褐砂 黄灰砂	2.5Y4/4 2.5Y4/1	ブロック状に混じる
	-5 灰オリブ粘土	5Y6/2	
	-6 暗灰黄細砂 褐砂	2.5Y5/2 10YR4/6	ブロック状に混じる
	-7 黒褐粗砂	2.5Y3/2	
	-8 明黄褐砂質土	10YR6/6	
	-9 明褐砂礫	10YR3/4	
	-10 暗灰黄細砂	2.5Y5/2	
	-11 褐灰粘砂 暗灰黄砂	7.5YR4/1 2.5Y4/2	ブロック状に混じる
	-12 灰オリブ砂	5Y5/2	
	-13 明黄褐砂質土	10YR6/6	
	-14 明褐砂礫	10YR3/4	
	-15 暗青灰粘砂	10BG4/1	
	-16 にぶい黄粘砂	2.5Y6/4	
	-17 にぶい褐色砂 褐灰細砂	7.5YR5/3 7.5YR5/1	ブロック状に混じる
	-18 褐色砂礫	10YR4/4	
	-19 黒褐粗砂	2.5Y3/2	
	-20 明赤褐粘土	5YR5/8	
	-21 灰粗砂	10Y5/1	
	-22 灰粗砂 オリブ黒	10Y5/1 5Y3/1	ブロック状に混じる
	-23 灰オリブ細砂 暗灰黄細砂	5Y6/2 2.5Y5/2	ブロック状に混じる
5a	黒褐砂		
5b	暗灰黄細砂	2.5Y5/2	

L区

層名(番号)	土色	色調	その他
1	黒褐色	2.5Y3/2	表土(耕作土)
遺構	灰黄褐色	10YR4/2	
2	暗褐色	10YR3/3	
Pit	暗褐色	10YR3/3	
3	にぶい黄褐色	10YR4/3	
SD313	にぶい黄褐色	10YR4/3	
SK284	黒褐色	10YR3/2	
5b	灰黄褐色	10YR4/2	

M区

層名(番号)	土質	色調	その他
1	褐灰粘質土	5YR4/1	表土(耕作土)
2	にぶい褐灰粘質土 明褐粘質土	7.5YR4/1 7.5YR5/6	ブロック状に混じる
Pit	-1 灰褐粘砂	7.5YR4/2	
	-2 褐灰粘砂土	10YR4/1	
	-3 褐灰粘砂	7.5YR4/1	
	-4 明褐粘質土 褐灰粘土	7.5YR5/6 7.5YR4/1	ブロック状に混じる
SD152	にぶい黄褐粘質土	10YR5/4	
SD151	-1 暗灰黄砂質土 オリブ褐粘砂	2.5Y4/2 2.5Y4/3	
SK132	褐灰粘質土 明褐粘質土	5YR4/1 7.5YR5/6	ブロック状に混じる
SR136	-1 黄灰色土	2.5Y4/1	
	-2 褐灰色土	10YR4/1	
	-3 褐灰色土	5YR4/1	
SD545	-1 にぶい黄褐色細砂	10YR5/3	
	-2 にぶい褐色細砂	7.5YR5/4	
	-3 灰黄褐色土	10YR5/2	
	-4 褐灰色粘砂	5YR5/1	
SD503	-1 褐灰色粘砂	5YR6/1	
	-2 褐灰色細砂	5YR6/1	
	-3 褐灰色細砂	7.5YR5/1	
	-4 褐灰色粘砂	5YR5/1	
	-5 灰色細砂	N5/0	
	-6 褐灰色粘砂	5Y6/1	
SD140	にぶい赤褐色土	5YR5/4	
SD150	灰色土	5Y5/1	
3	灰褐色土	5YR4/2	
SD148	褐灰色粘砂	5YR5/1	
SZ138	褐色粘砂	7.5YR4/6	南部に向かって細くなる
5b(SZ139)	黒褐粘砂	7.5YR3/1	砂質度高い

第2表 土層名一覧

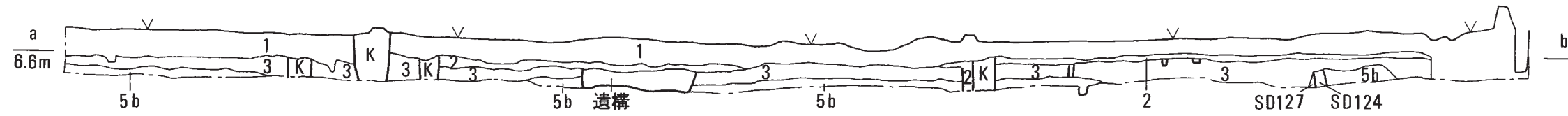
O区

層名(番号)	土色	色調	その他
1	黒色土	5YR1.7/1	表土(耕作土)
SD545	灰白色土	5YR3/1	径1mm~3mmのマンガンブロックと砂粒か
2	明灰色土	5YR4/1	径5mm程のマンガンブロックを少量、多量のシルトを含む 粘質はあるが砂質でしまりはなし
SK528	-1 黄褐色土	5YR4/1	
	-2 暗灰褐色土	5YR4/1	径5mmのマンガンブロックを多量に含む しまりあり
	-3 暗灰褐色土	5YR4/1	径5mmのマンガンブロックを多量に含む 砂粒を少量含む しまりなし
	-4 茶褐色土	5YR4/1	径5mmのマンガンブロック径1mm~3mmの砂粒を少量含む
	-5 暗灰褐色土	5YR4/1	径5mmのマンガンブロックを多量に含む 砂粒を少量含む しまりなし
	-6 茶褐色土	5YR4/1	径1mm~3mmのマンガン粒子を多量に含む まだらに黒色土を少量含む しまりあり
SD517	-1 暗褐色土	5YR3/1	径3mmのマンガン粒子を多量含む 径1mm程度の炭化ブロックを微量に含む
	-2 暗褐色土	5YR3/1	径3mmのマンガン粒子を多量含む
SD	-1 明灰褐色土	5YR3/2	マンガンブロックの混入が少ない
	-2 赤褐色土	5YR4/1	径5mmのマンガンブロックを多量に含む、しまりあり
	-3 明灰褐色土	5YR4/1	径5mmのマンガンブロックを少量 多量の砂粒を含む、しまりあり
	-4 明灰褐色土	5YR3/2	径1mm~3mmのマンガン粒子 径5mmのマンガンブロックを多量に含む、しまりあり
	-5 明茶褐色土	5YR3/1	径1mm~3mmのマンガン粒子を少量含む 径1mm以下の砂粒を多量に含む
	-6 茶褐色土	5YR3/3	径5mmのマンガンブロック、ジャリを多量に含む、しまりあり 粘質なし
	-7 暗茶褐色土	5YR3/2	径5mmのマンガンブロック、径1cmのジャリを多量に含む、しまりあり 粘質なし
	-8 暗茶褐色土	5YR3/2	径5mmのマンガンブロック、径1cmのジャリ砂粒を大量に含む、 しまりあり 粘質なし
	-9 暗褐色土	5YR1/2	径5mmのマンガンブロック、径1cmのジャリを多量に含む、しまりあり
Pit	-1 茶褐色土	5YR3/1	径3mmのマンガン粒子を多量に含む
	-2 明茶褐色土	5YR3/1	径3mm~5mmのマンガン粒、1mm以下の砂粒を少量含む
	-3 明茶褐色土	5YR3/2	径5mmのマンガン粒子を少量含む、しまりあり
	-4 茶褐色土	5YR3/2	径5mmのマンガン粒子、径1mm以下の砂粒を少量含む、しまりあり
遺構1	黄褐色土	5YR3/2	径1mm~3mmのマンガン粒子を少量含む、しまりあり
遺構2	暗褐色土	5YR3/1	径3mmのマンガン粒子を多量含む しまりあり
3	赤灰色土	5YR3/2	径5mm程のマンガンブロックを多量に混入する また1mm以下のマンガン粒子も 多量に混入する しまり粘質あり
4	赤灰褐色土	5YR3/1	径5mm程のマンガン粒を多量に含む 径1mm以下のシルトを多量に混入また、 粘質もある
5	暗灰褐色土	5YR3/2	径1mm以下の砂が多量に混入する 灰色の粘土を多量に混入する 粘質あり。 またマンガン粒子も多量に含む

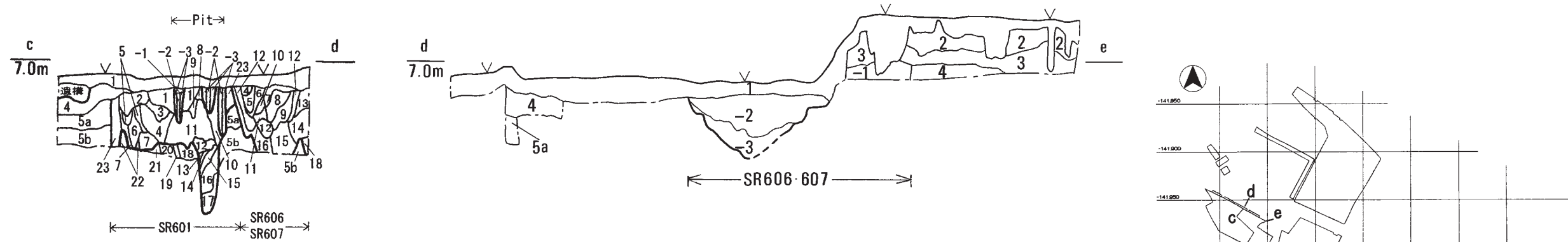
P区

層名(番号)	土質	色調	その他
1	灰黄粘質土	2.5Y6/2	表土(耕作土)
2	黄褐粘質土	2.5Y5/3	
遺構1	にぶい黄褐粗砂含む	10YR5/3	
Pit	にぶい黄褐砂質土	10YR5/3	粘土ブロック混じり
3	-1 にぶい褐色粘砂土	7.5YR5/4	
	-2 暗褐粘質土	10YR3/4	
	-3 褐灰粘質土	10YR5/1	炭少量含
遺構2	暗灰黄粘質土	2.5Y4/2	細砂含
4	にぶい黄褐粗砂	10YR5/3	
SD507	にぶい黄褐粘質土	10YR4/3	
SD516	-1 褐灰細砂粘質含む	10YR5/1	
	-2 褐灰細砂粘質多く含む	10YR6/1	
	-3 灰黄褐粘質土	10YR4/2	
5a	黒褐シルト	10YR2/3	
5b	灰黄褐シルト	10YR4/2	

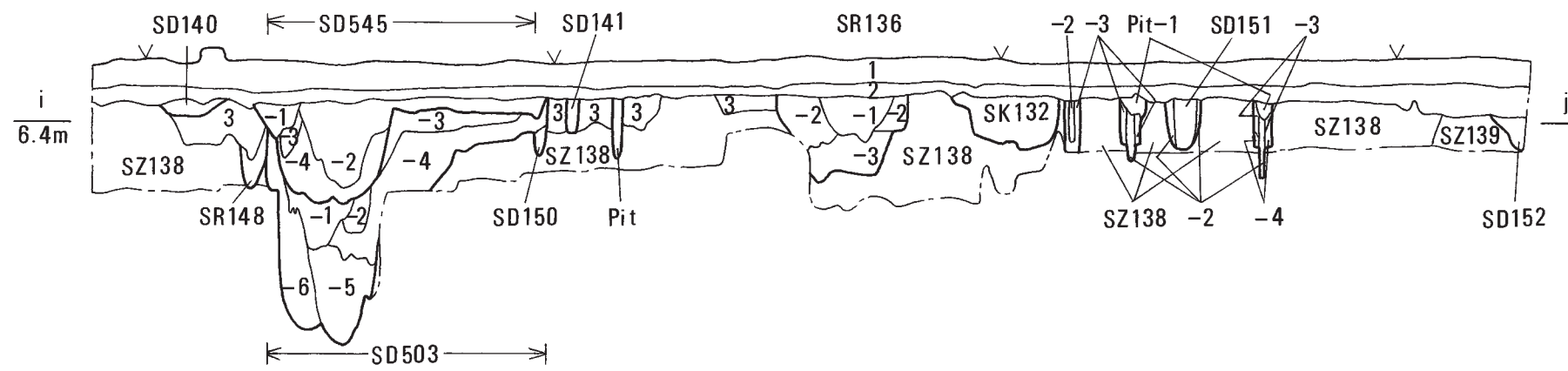
第3表 土層名一覧



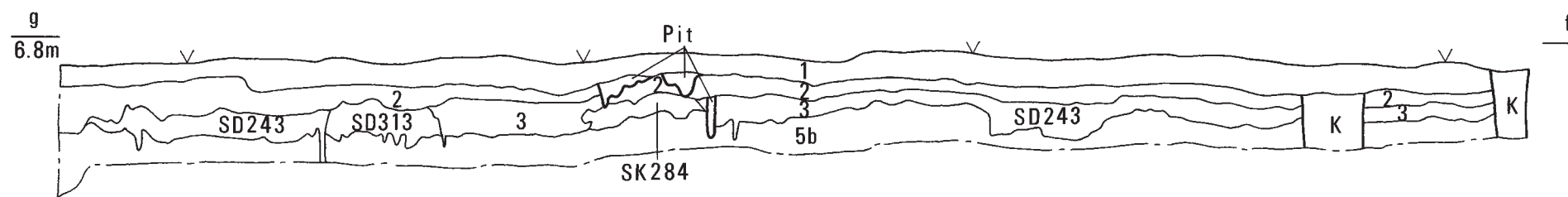
第17図 K区東西土層断面図(縦1:40、横1:200)



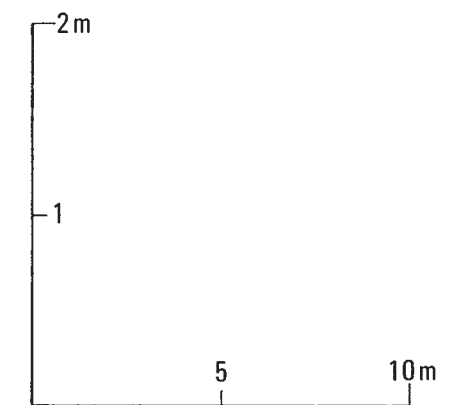
第18図 J区土層断面図(縦1:40、横1:200)

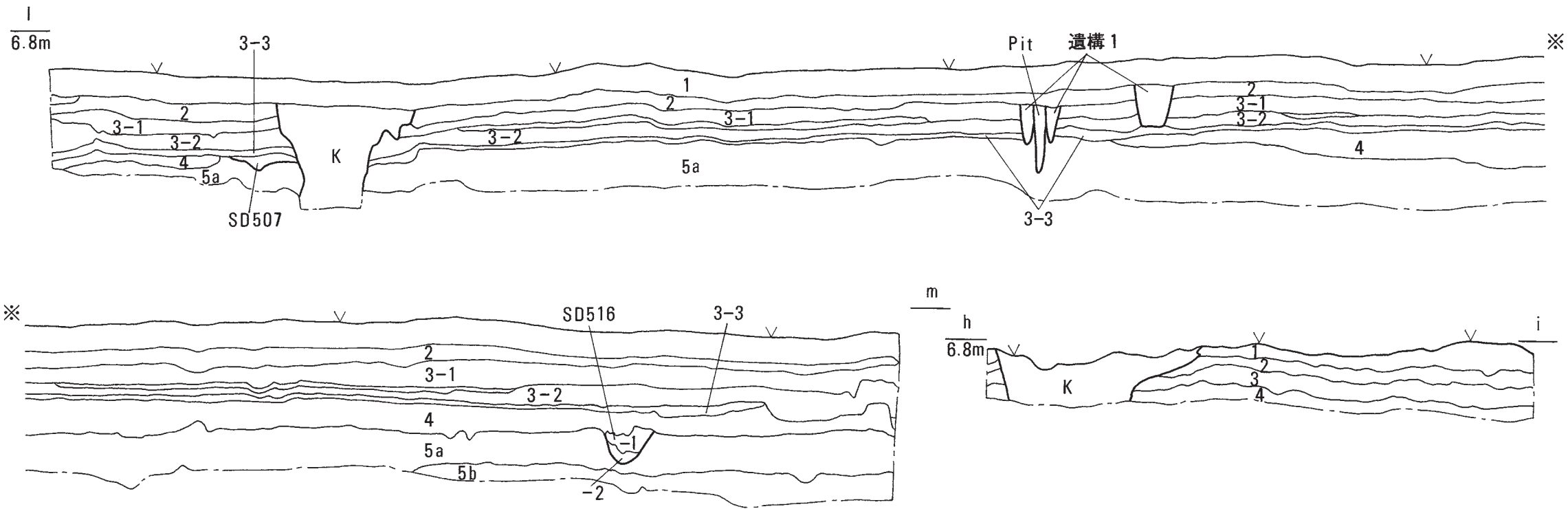


第19図 M区南北土層断面図(縦1:40、横1:200)

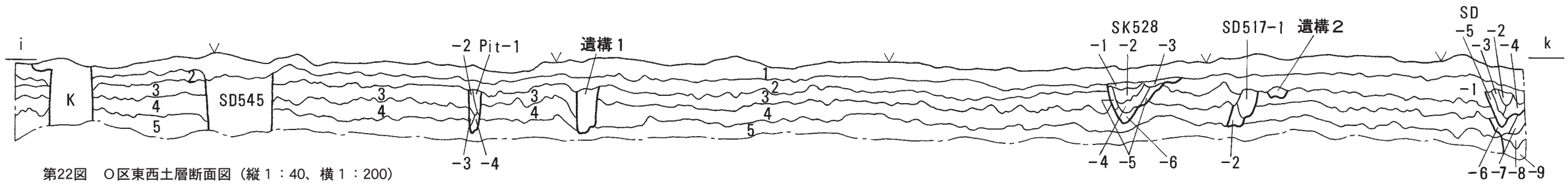


第20図 L区東西土層断面図(縦1:40、横1:200)

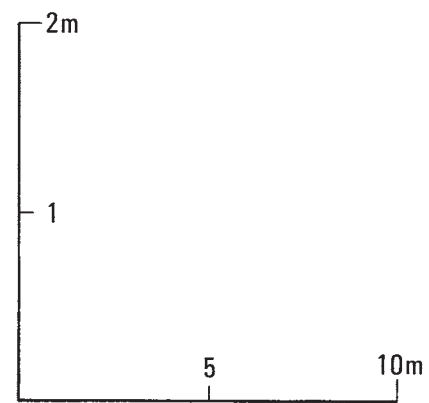
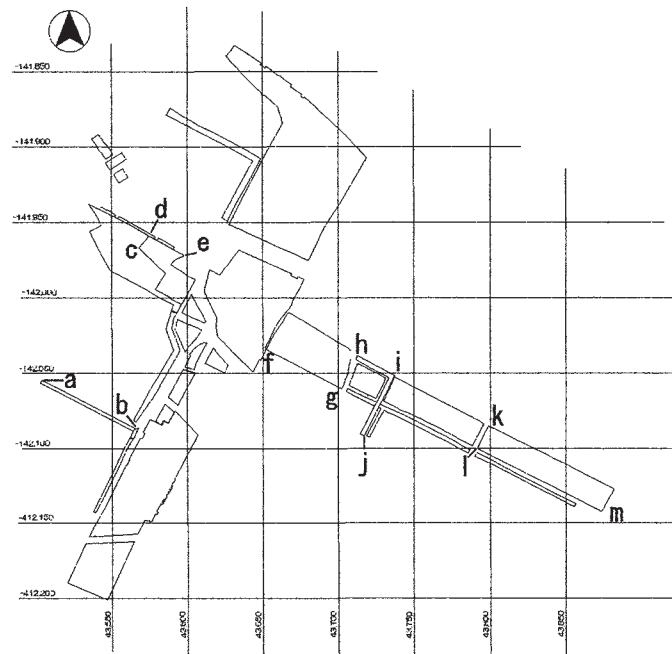


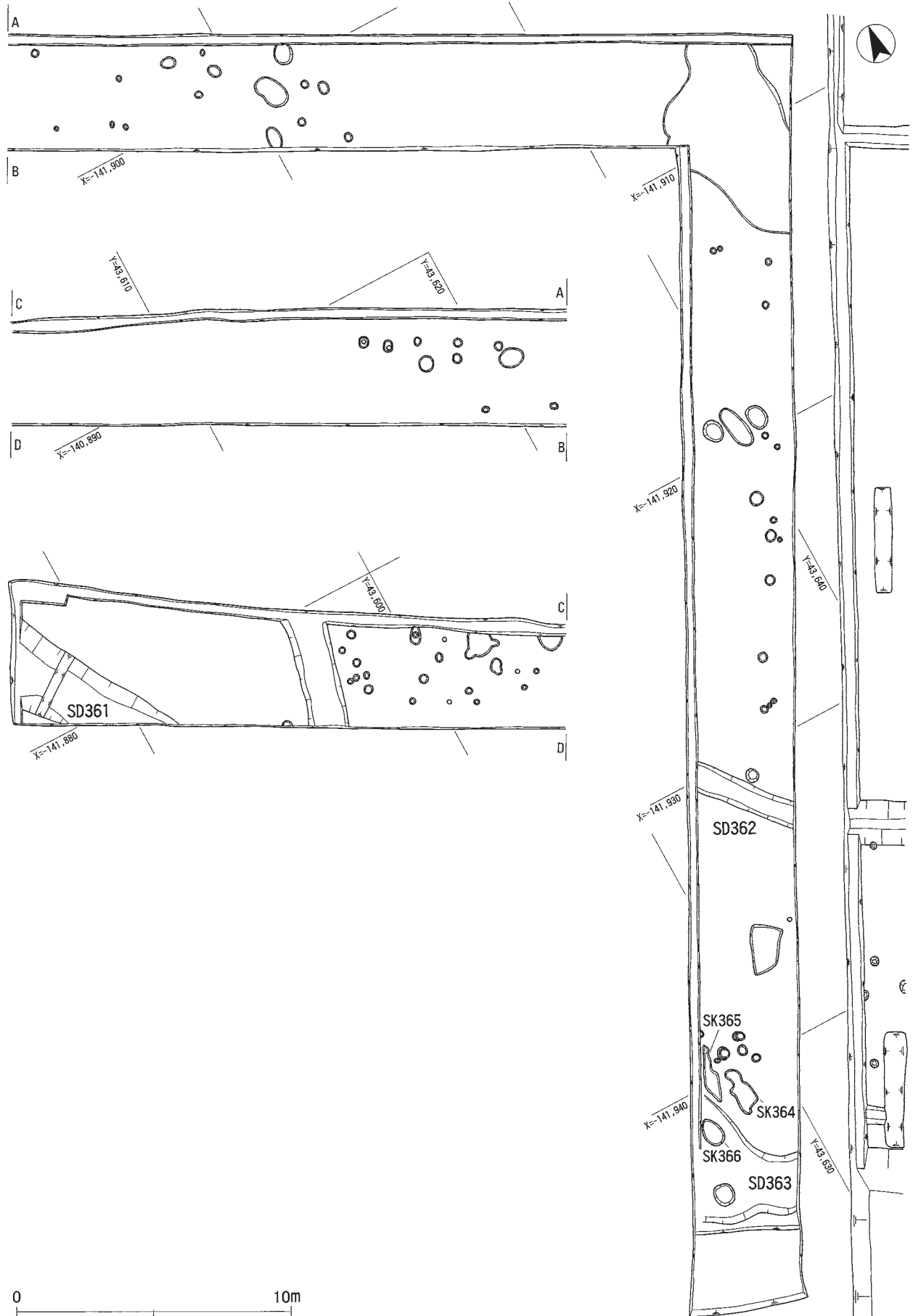


第21図 P区東西土層断面図 (縦 1 : 40、横 1 : 200)

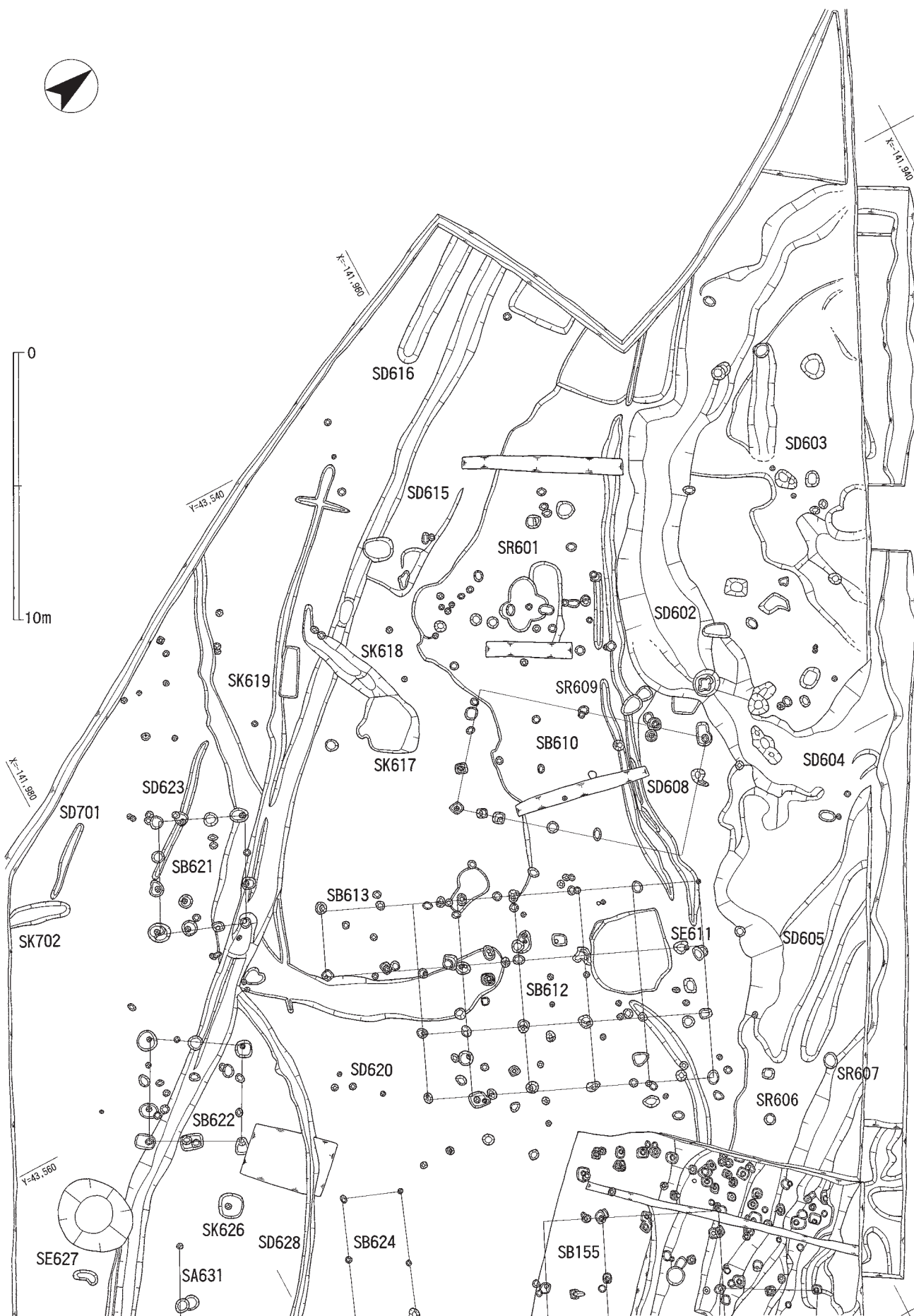


第22図 O区東西土層断面図 (縦 1 : 40、横 1 : 200)

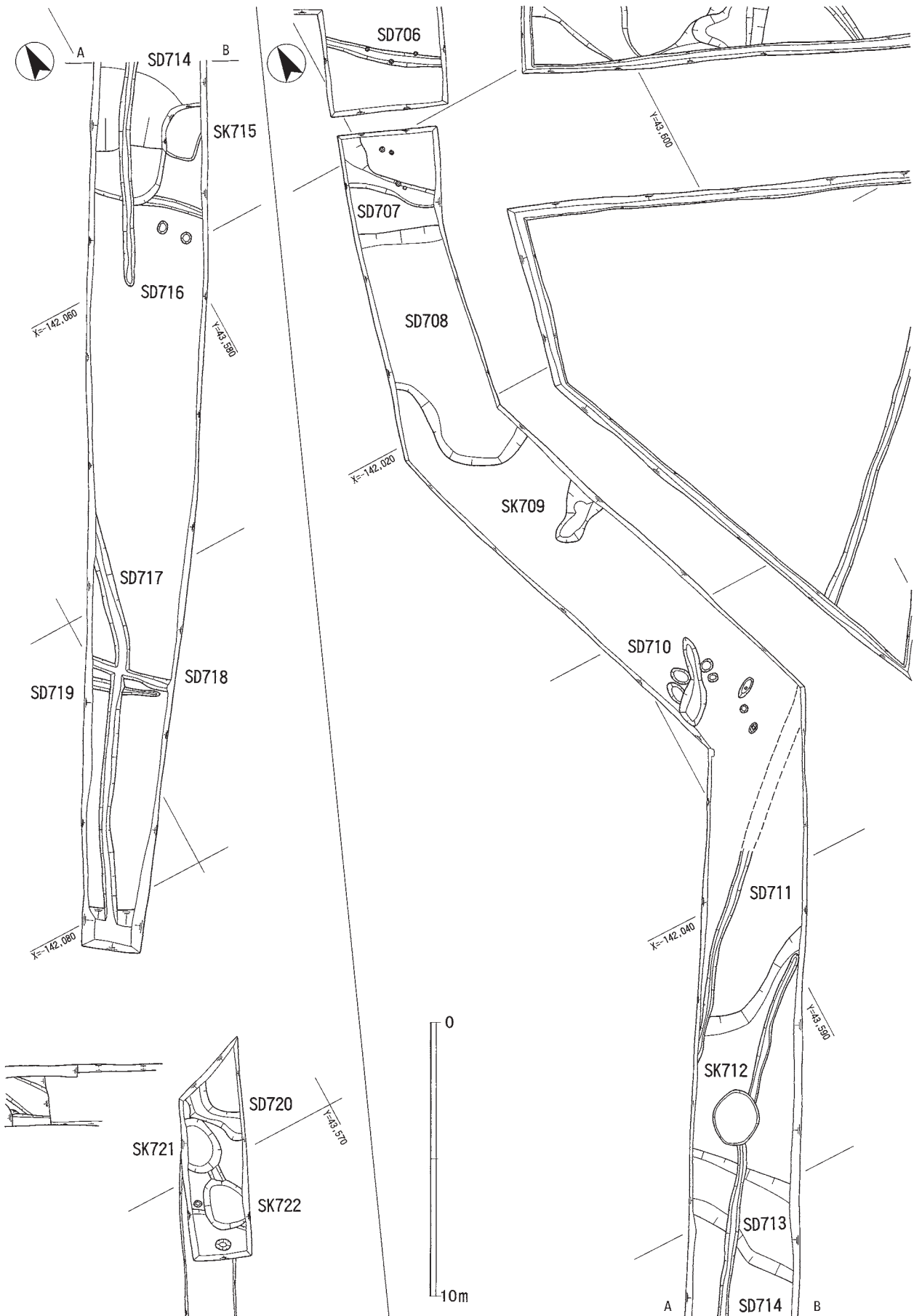




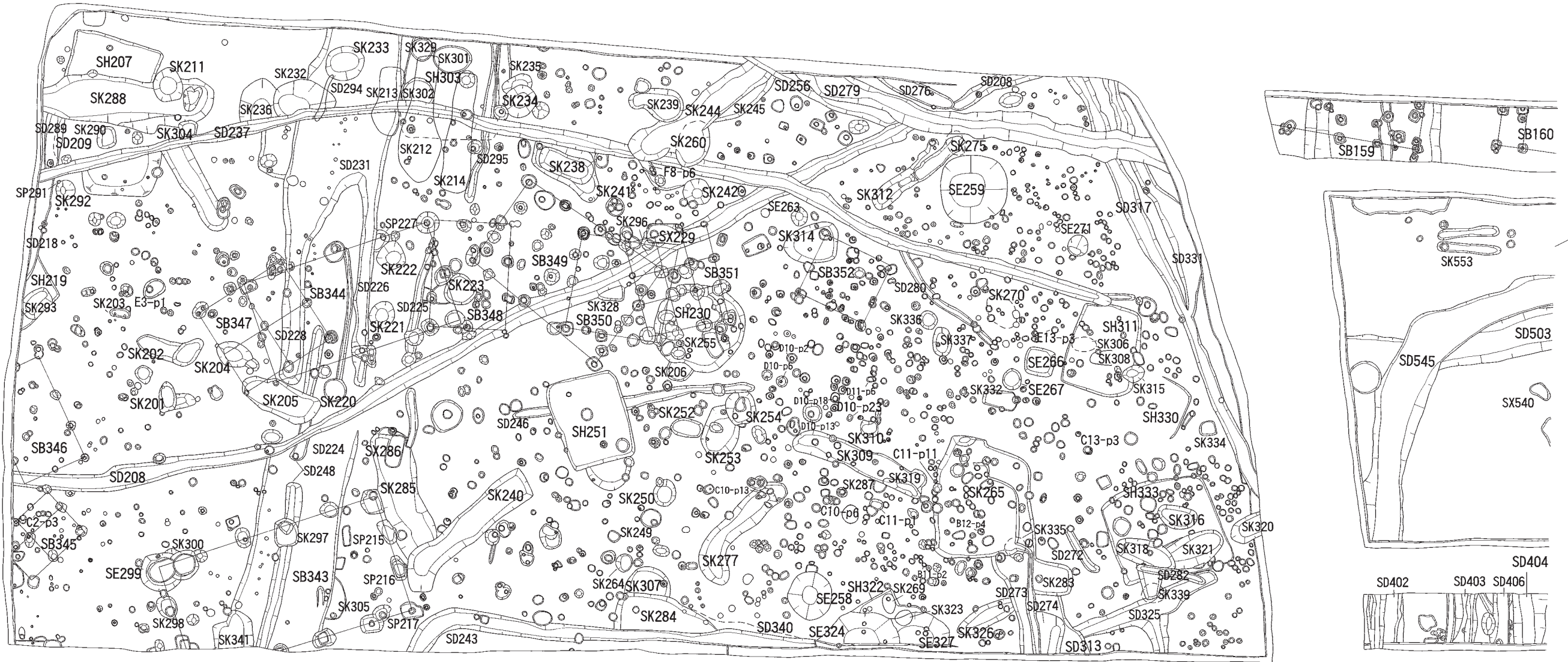
第23图 H区实测图 (1:200)



第24図 F・I・J区西側実測図 (1:200)



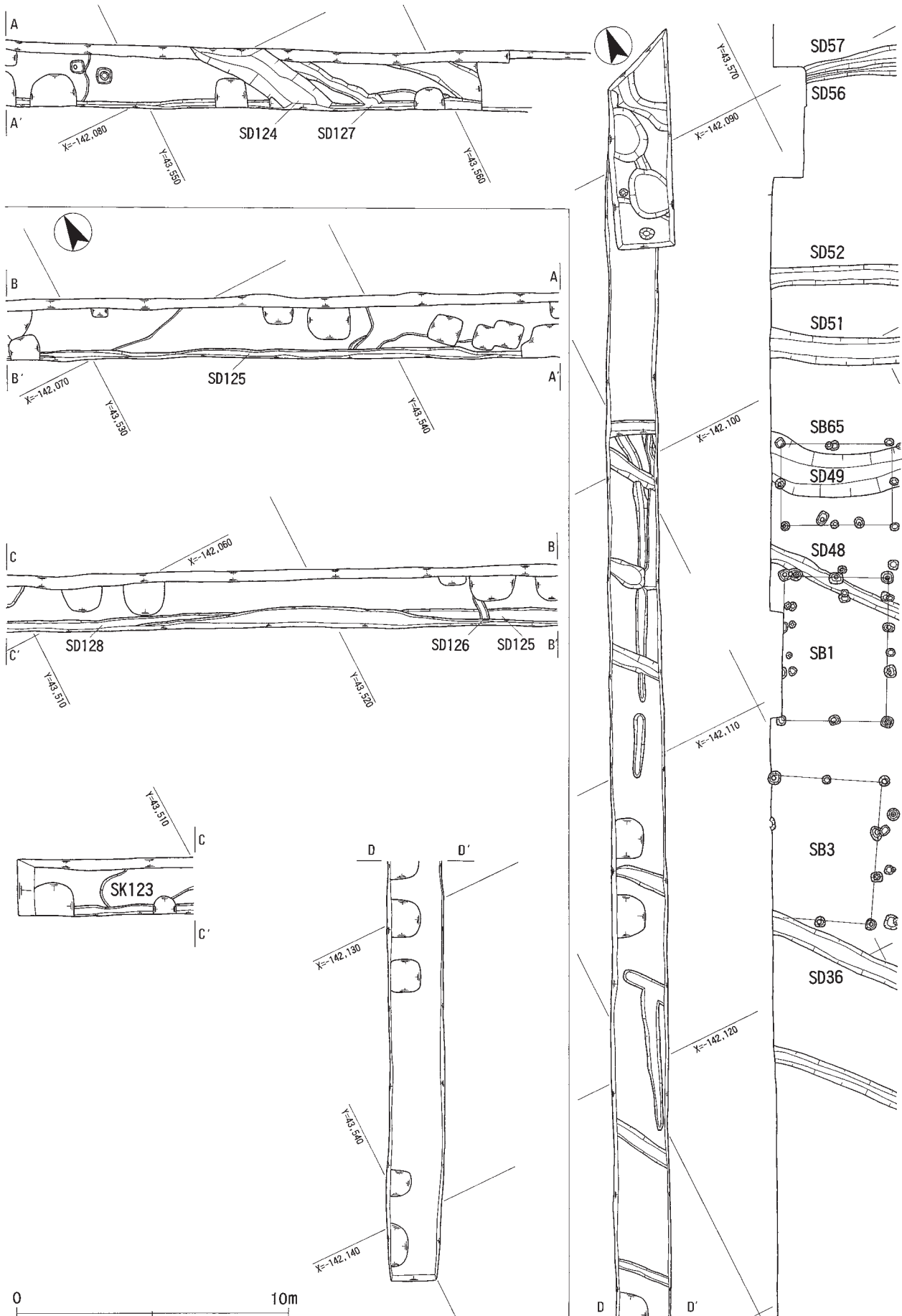
第26図 G区実測図 (左下はK区) (1:200)



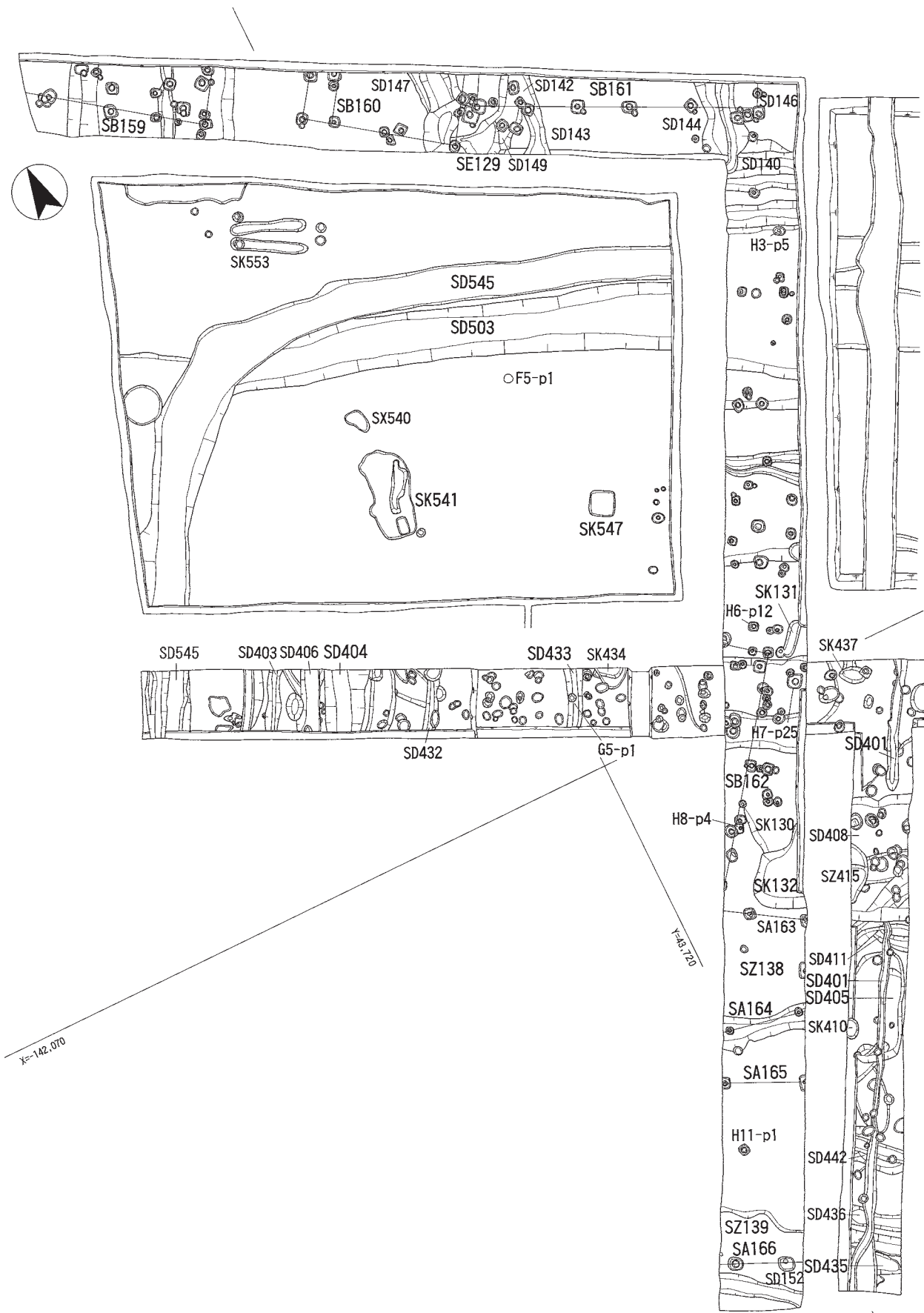
X=-142,050
Y=43,680

0 10m

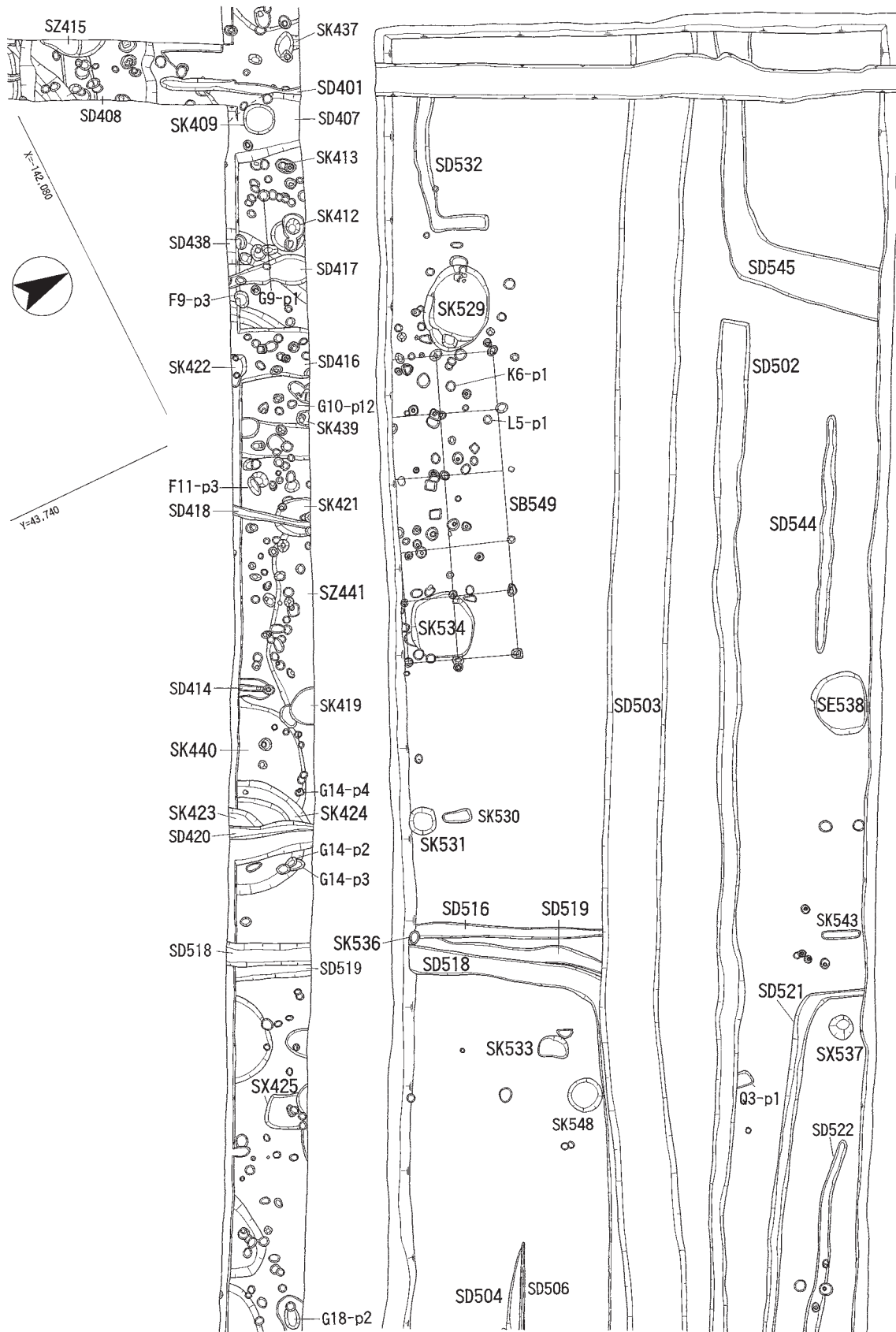
第27図 L区実測図(1:200)



第28図 K区実測図 (1:200、右端は中勢道路部分)

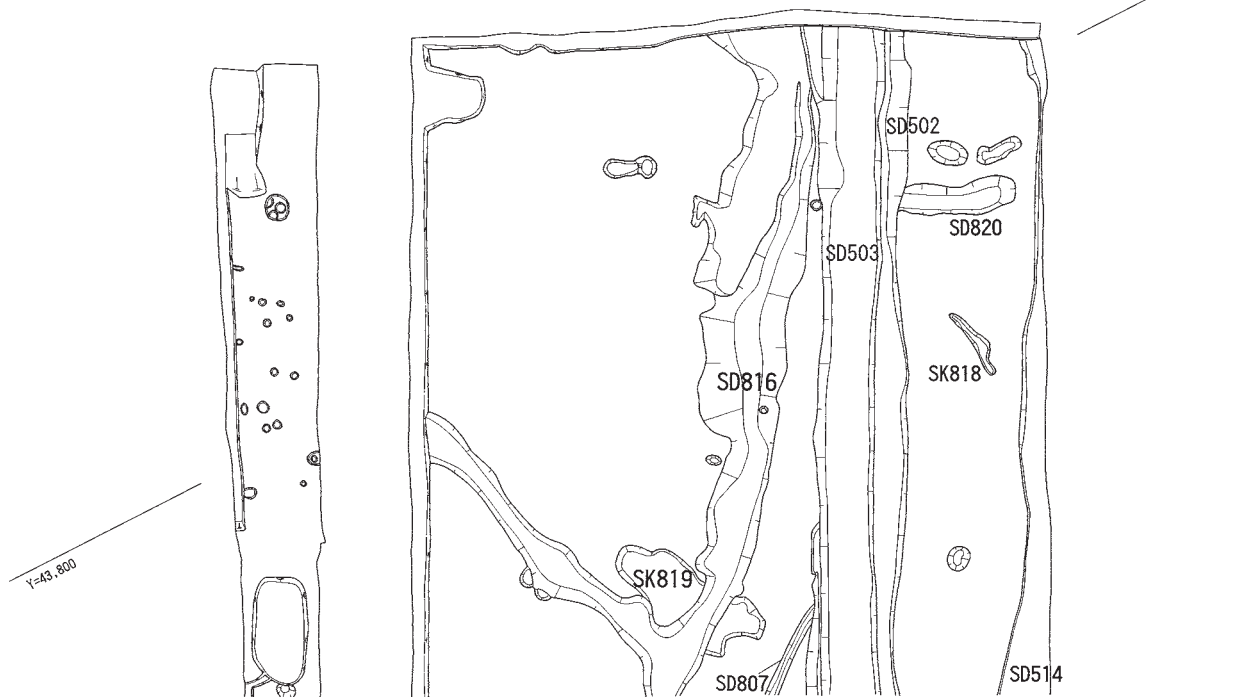
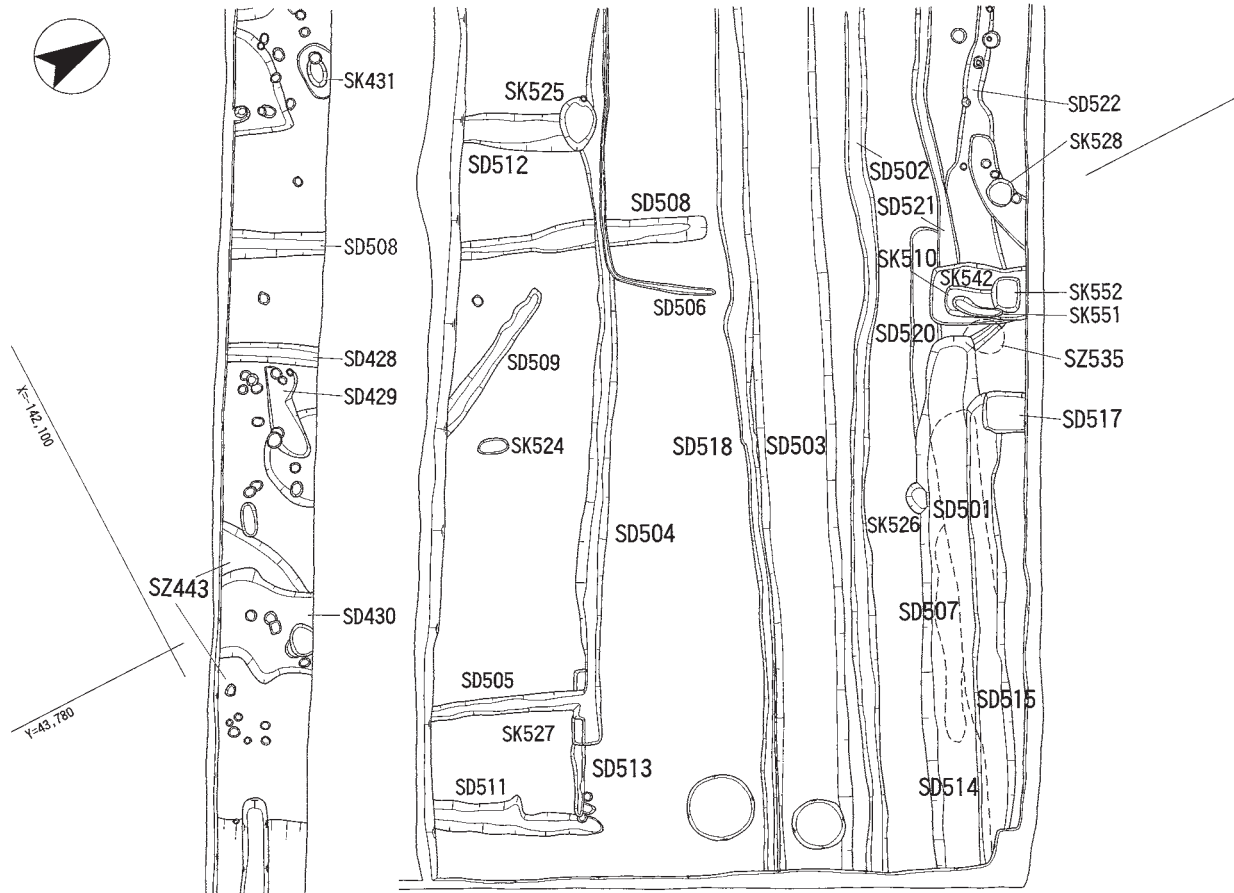


第29図 M・N・O区西側実測図 (1:200)



0 10m

第30图 O・N区実測図 (1:200)

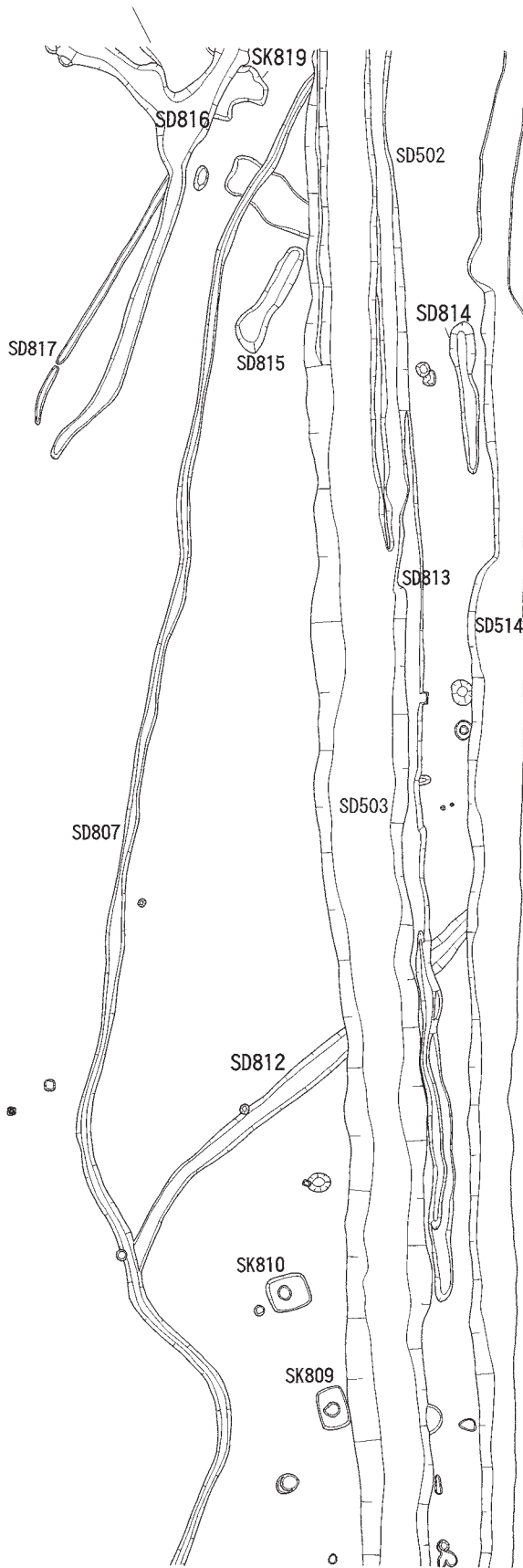
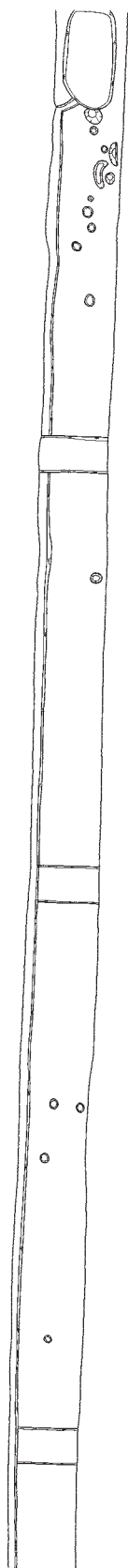


0 10m

第31図 O区東側・N・P区西側実測図 (1:200)



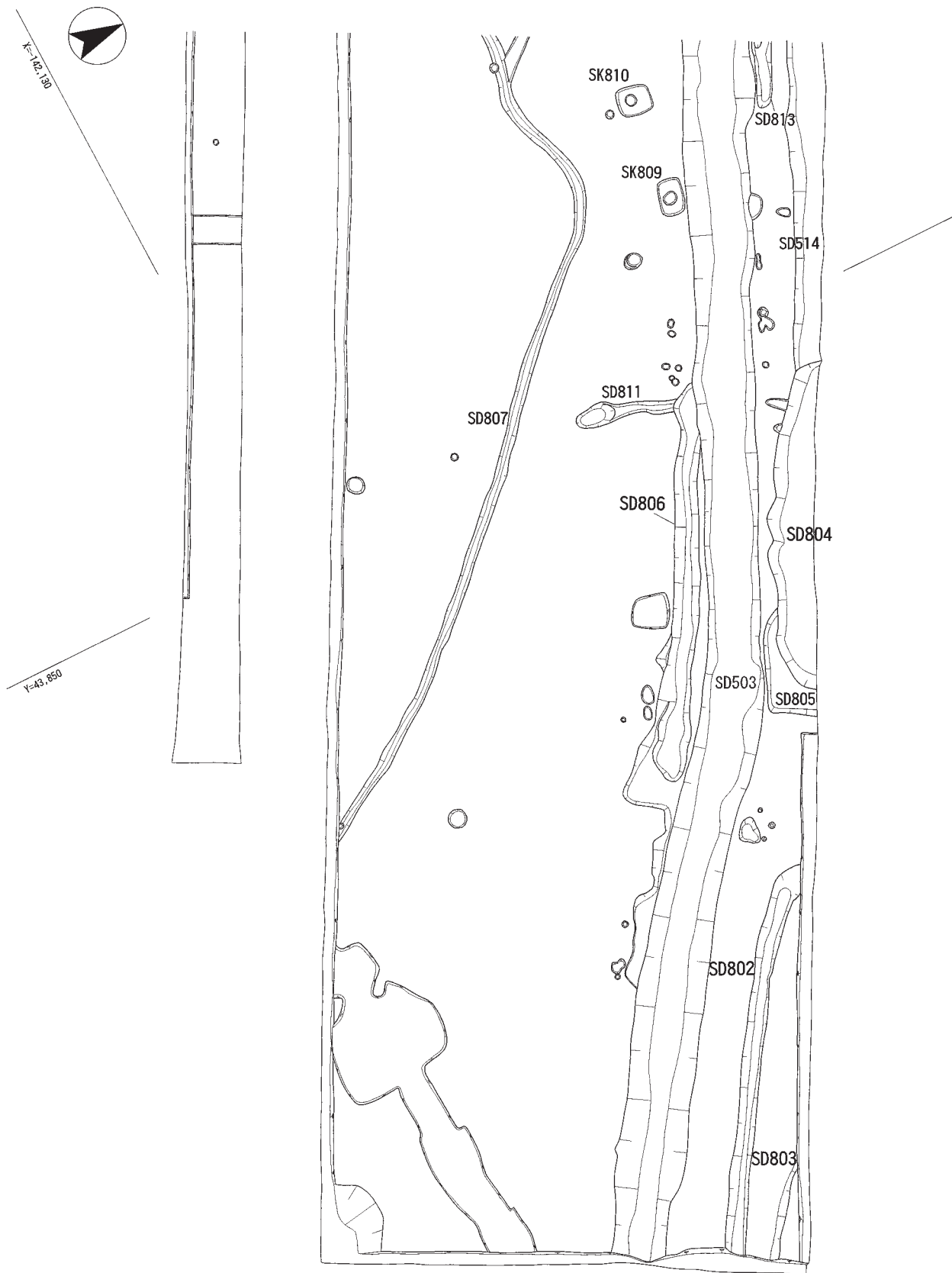
Y=43.820



X=142.100

0 10m

第32图 N·P区实测图 (1:200)



第33図 N・P区東側実測図 (1:200)

第4章 発掘された遺構と遺物

前言でも述べたように、三重県埋蔵文化財センターの調査では、調査区内を4m×4mの方眼（小地区）に分割し、それを調査の基本単位となるグリッドの1単位として調査を行っている。その際、グリッド名の表記はアルファベットと数字を組み合わせを行い、通常グリッドの北西隅を表示の原点とするのが原則である。しかし、替田遺跡の調査では、全調査区を通した統一的な小地区の設定が行われなかったのみならず、調査年次もしくは調査区によって、小地区の設定方法や遺構番号の付与方法が異なっている。そのため、出土遺物への遺構注記も、調査時

点の番号が付与されており、現在三重県埋蔵文化財センターに収蔵されている替田遺跡の出土遺物注記も、調査時点のものが注記されたままである。そこで、本報告においては、調査区名称や遺構番号は前述したように本報告用として新たに改変した新番号を付与したものの、遺構と遺物の記述は、無用の混乱を避けて個別に行われた小地区設定の具体的手続きも説明するため、各調査区毎に報告することにする。

なお、調査時遺構番号（遺物注記連動）と本書の遺構名称等の異同は、遺構一覧や遺物観察表で確認されたい。

第1節 H区の調査

1 概要

H区は、幅わずか4m弱、総延長89mの独立した逆L字状の調査区形状を示す。連続する同一トレンチであるが、調査時は東西方向を「D1区」、南北方向を「D2区」というトレンチ名称を付与している。

東接する中勢道路に伴う調査区でも北と南の遺構密集部分に比べると遺構密度が薄くなる部分であり、特にピットや土坑といった生活臭のある遺構に乏しく、少量の溝や旧河道が確認されたにとどまる。

2 小地区設定方法

H区では、国土座標に則らず、トレンチ形状に合わせるかたちで小地区設定を行った。具体的には、東西軸は西から東へ数字を付与しているものの、南北軸は三重県の小地区設定の原則とは異なって、南から北へアルファベットを付与している（第3図）。

3 遺構

SD361（第35図） 幅2.5m、深さ30cmの溝で

ある。東側の中勢道路調査区でその延長が出ているが、その所見も勘案すると、大きな弧を描きながら東南方向から北西方向へ流れる溝である。

SD362（第34図） 東接する中勢道路調査区に続く溝で、幅1m、深さ30cmを図る。中勢道路部分も含めると、総延長6.4m分確認でき、形状的には緩やかな弧状を呈する。

SD363（第23図） これも東接する中勢道路調査区に続く溝である。中勢道路部分も含めると、総延長62m、幅4.6m、深さ48cmを測るが、ちょうど本調査区で幅が急激に減じ、2.2m程度となっている。

その他 上記以外に若干の土坑や溝、ピットがある。断片であっても遺物が出土した遺構は遺構番号を付与しており、遺構一覧で概略を確認されたい。

4 出土遺物

H区の出土遺物は極めて少なく、実測しうるほどのものはない。

第2節 I区の調査

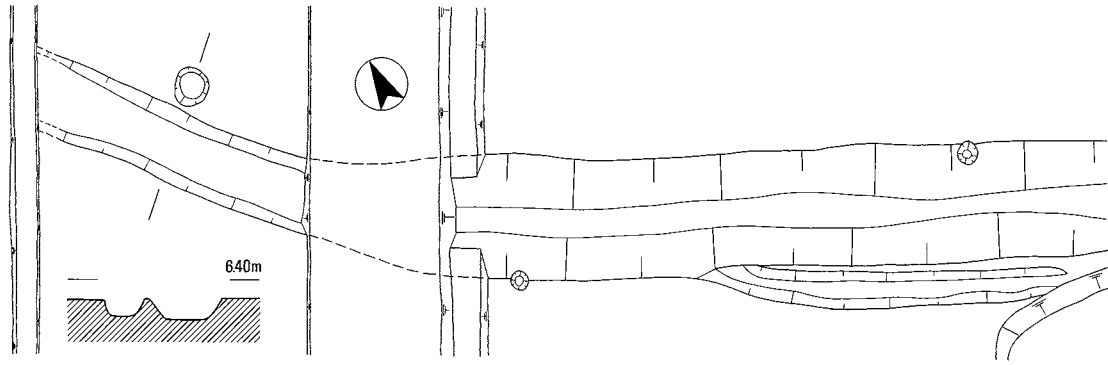
1 概要

5次調査F区、6次調査J区に北接する幅1.5m、東西延長55m（途中2mの調査不能部分あり）の細長い調査区である。

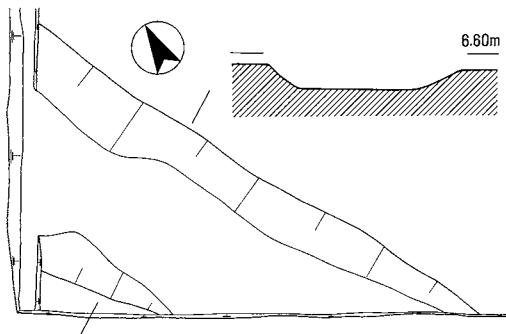
2 小地区設定方法

国土座標には則らずに調査区形状に合わせた地区

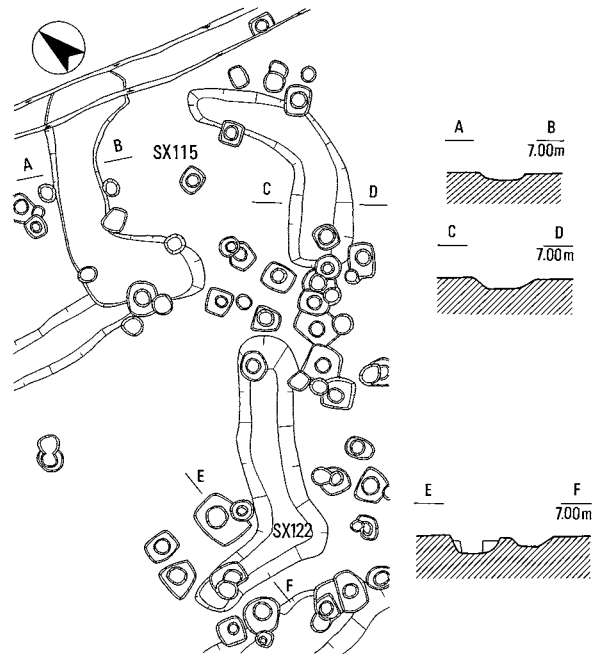
設定ながら、三重県埋蔵文化財センターの小地区付与の基本原則にならわず、西北方向を表示の基準として、調査区形状に平行させて東西軸に東から西へ算用数字、南北軸に北から南へアルファベットを付与した（第4図）。



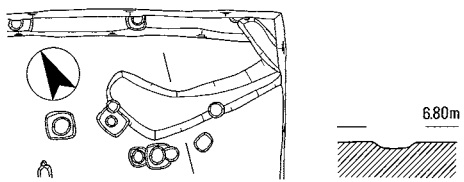
第34图 S D 362実測図 (1 : 100)



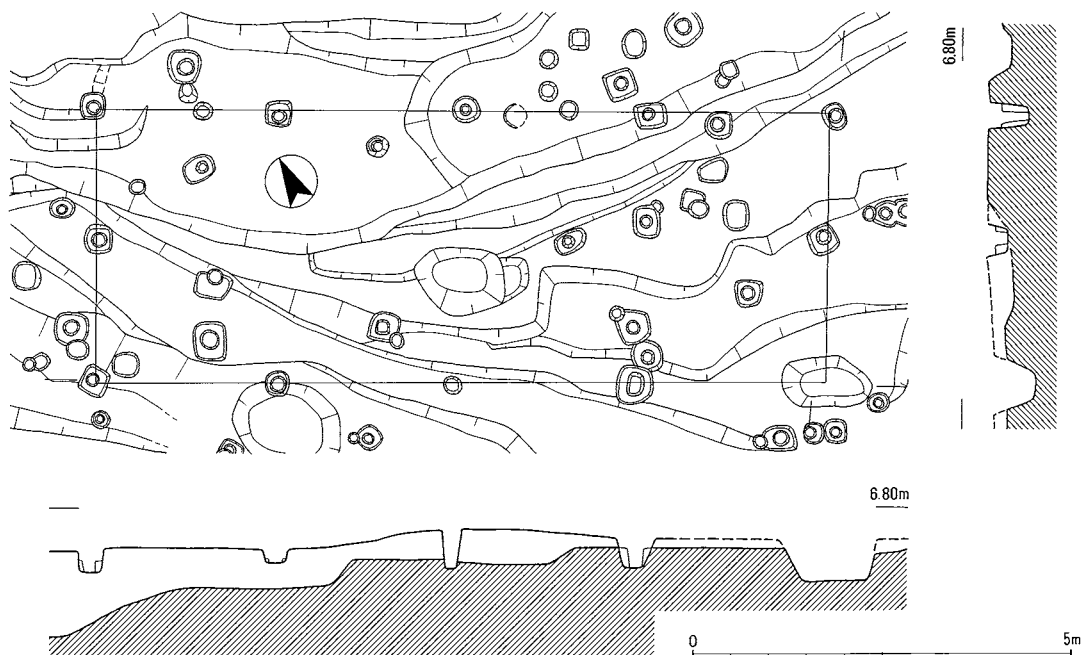
第35图 S D 361実測図 (1 : 100)



第37图 S X 115・122実測図 (1 : 100)



第36图 S X 119実測図 (1 : 100)



第38图 S B 154実測図 (1 : 100)

3 遺構

調査区全体に攪乱が多く、明瞭な遺構はあまりない。南接するJ区から続く旧河道は確認されているが、これについては次節で説明する。

4 出土遺物

H区同様、出土遺物は極めて少なく、実測しうるほどの遺物もなかった。

第3節 J区の調査

1 概要

J区は、5次調査のF区に東接し、G区に北接する調査区である。やや歪な調査区形状であるが、弥生時代から中世の遺構・遺物が良好に出土した。

2 小地区設定方法

J区では、前年度に調査を実施した4次調査F区・G区に連続する部分であるが、4次調査F・G区の小地区番号は踏襲せずに、J区独自の小地区設定が行われている。具体的には、三重県の遺構番号付与の基本原則に従って、東西軸は西から東へアルファベットを、南北軸は北から南へ数字を付与している(第5図)。

3 遺構

a 弥生時代の遺構

SR601・606・607・609(第39図) J区北西部に所在し、4次調査のF区から連続する旧河道群である。北からSR607、SR606、SR601、SR609と並ぶ。SR606が最も深く、これら流路群の主流路と想定される一方、SR609は極めて浅く、SR601やSR606が氾濫した際の派生流路と想定される。また、SR607は調査区北端を弧状に流れ、I区へ続く。

これら旧河道群の出土遺物は少ないが、埋土中からは主に弥生土器が出土していることから、これらの形成が弥生時代に遡ると判断される。しかし、例えばSR606からは古墳時代須恵器なども出土しており、完全に埋没する時期はかなり新しいものと思われる。

SK113(第41図) 長径0.9m×短径0.6m、深さ20cmの略長方形を呈した小土坑で、SE112に切られている。埋土より弥生土器が出土している。

SX115(第37図) 調査区の北東隅に平面形状が「く」字形あるいは「コ」字形に屈折する溝状の遺構が集中している部分がある。いずれも小規模ながら、埋土から弥生土器が出土することや、形状の

特徴から群集する小型の方形周溝状遺構(方形周溝墓?)群の可能性が考えられ、SX115・119・122として把握した。このうちSX115は、「コ」字形溝と「く」字形溝で形成された、長径4m×短径3.3mのやや歪な形状を示す小型の方形周溝遺構である。図示しうるほどの遺物は出土していない。

SX119(第36図) 調査区の隅に存在するため、全体形状は不明であるが、屈折して途切れる幅70cm程度の溝状遺構で、SX115同様の方形周溝遺構と考えた。その場合、周溝はコーナーで切れず、溝中央寄りの部分で途切れることとなる。

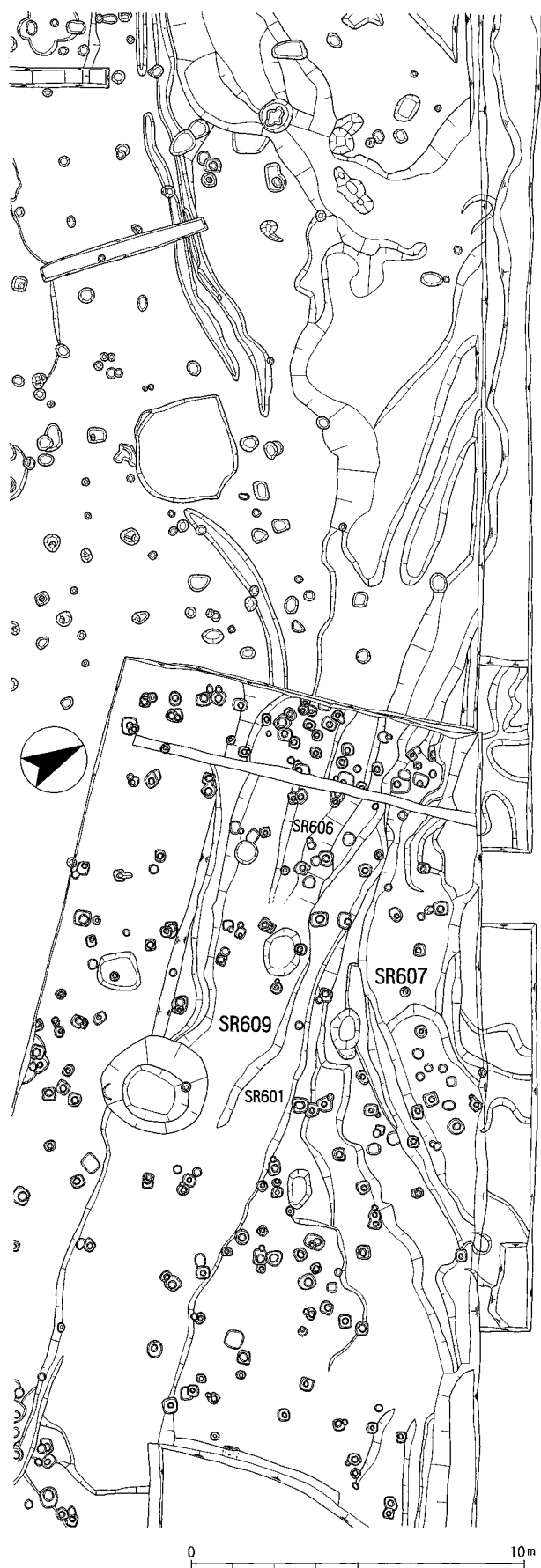
SX122(第37図) SX115の南側に連続して存在する歪な「く」字形の溝で、形状的にはSX119と共通する。屈折の方向から、方形周溝遺構とすると東側の溝に相当するが、対応すべき西側溝は検出されていない。残存部も深さ10cm程度しかないため、削平を受けたものと判断される。埋土から、弥生土器の壺の小片が出土している。

SD116(第45図) 古墳時代の溝であるSD118に重複されているため起点部分の状況は不明だが、位置関係からおそらく後述のSD117を水源としてそこから南側へ派生させた溝と推定される。直線的な形状を示し、そのまま中勢道路調査区へも続いていることが確認できる。J区内における最大幅は1.4m、深さ40cmを測る。埋土から出土する土器には弥生土器のほか古墳時代のものも含まれており、溝埋没後も窪み程度には残存していたのかもしれない。

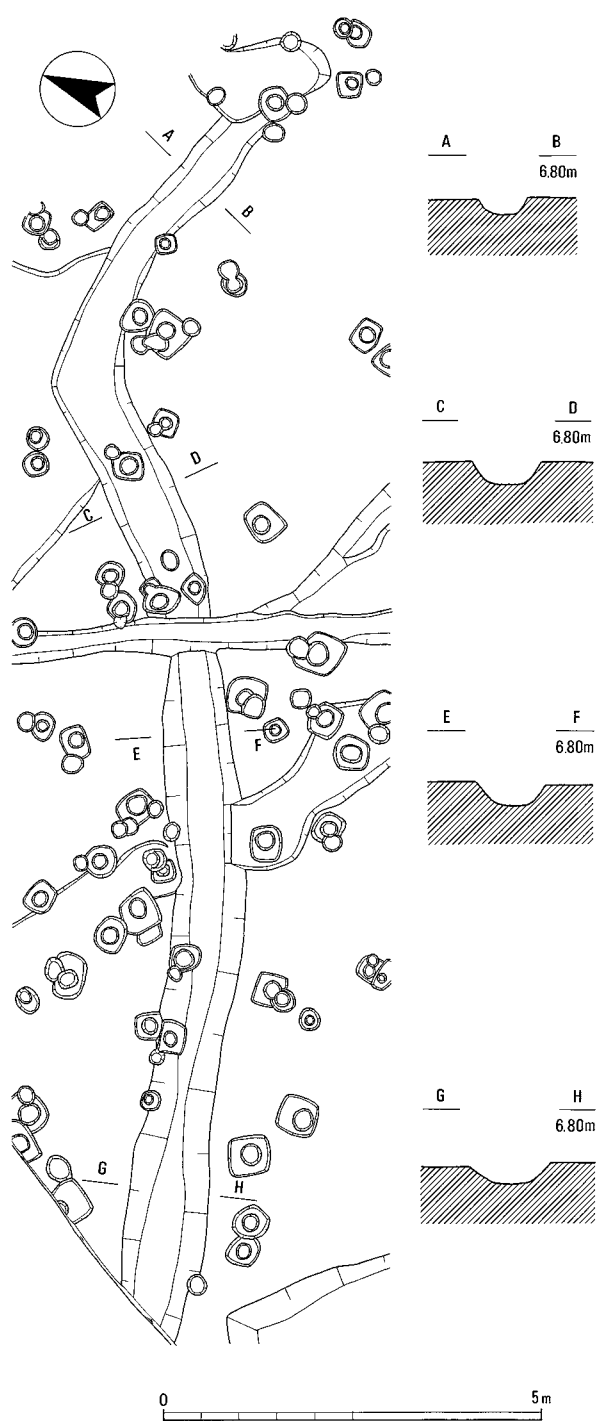
SD117(第45図) 検出された長さ20m×幅2.5m、深さ50cmの自然流路であるが、隣接するF区や中勢道路調査区では未検出である。埋土から弥生土器の小片が出土している。

b 古墳時代の遺構

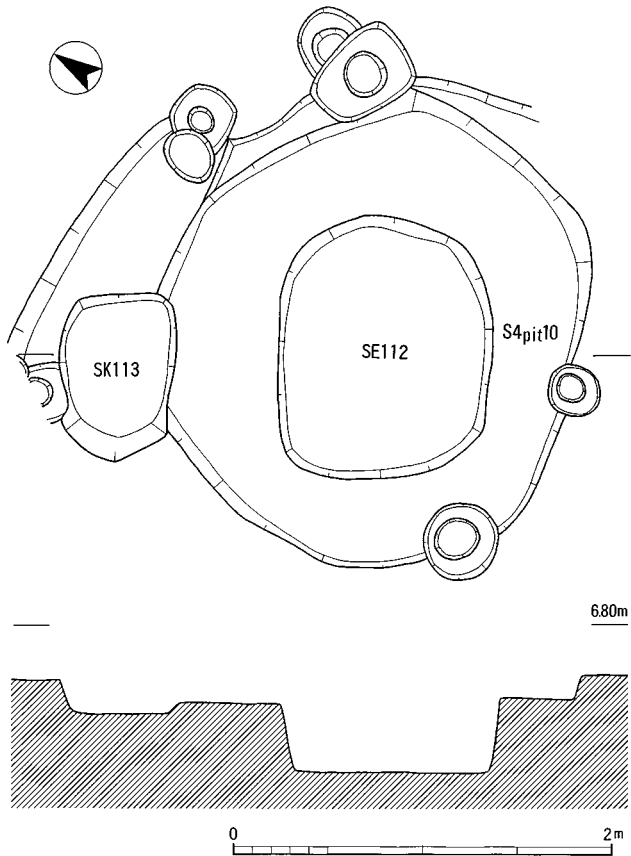
SK103(第43図) 長径1.4m×短径1.1mの楕円形状を呈し、深さ42cmを測る。底部は平らで、明



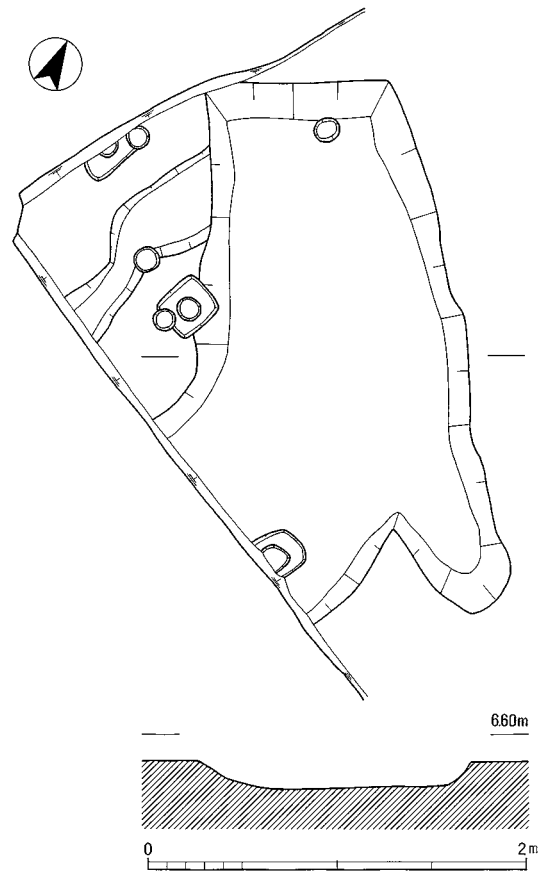
第39図 S R 601・606・607・609実測図 (1 : 200)



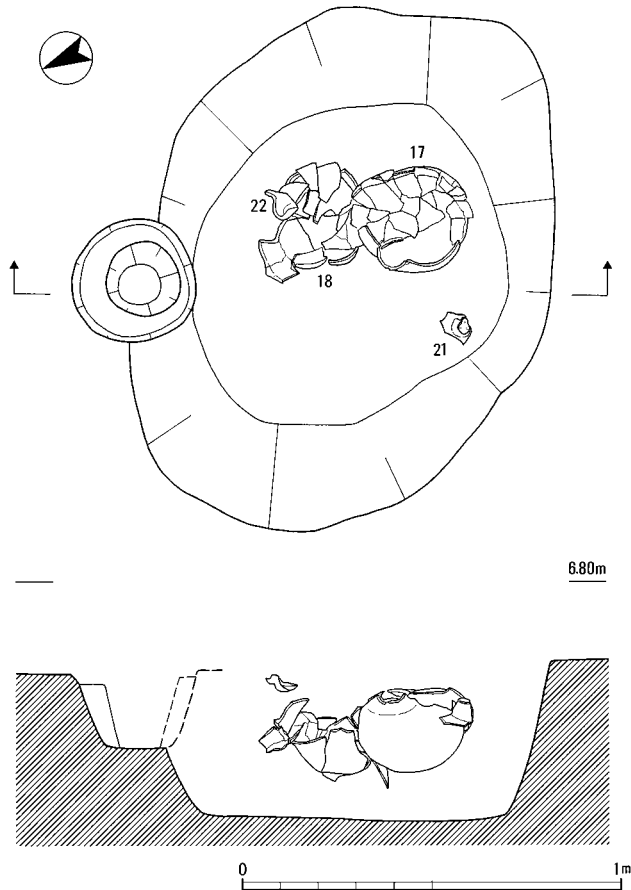
第40図 S R 121実測図 (1 : 100)



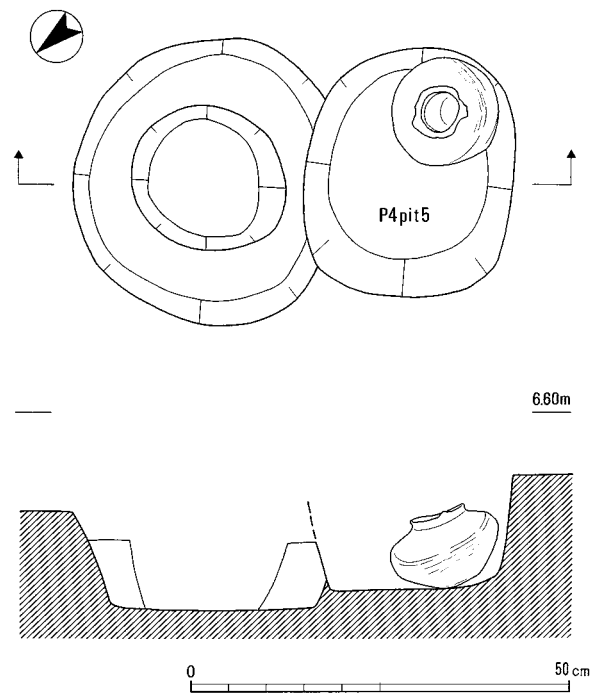
第41図 S E 112・S K 113・S 4pit10実測図 (1 : 40)



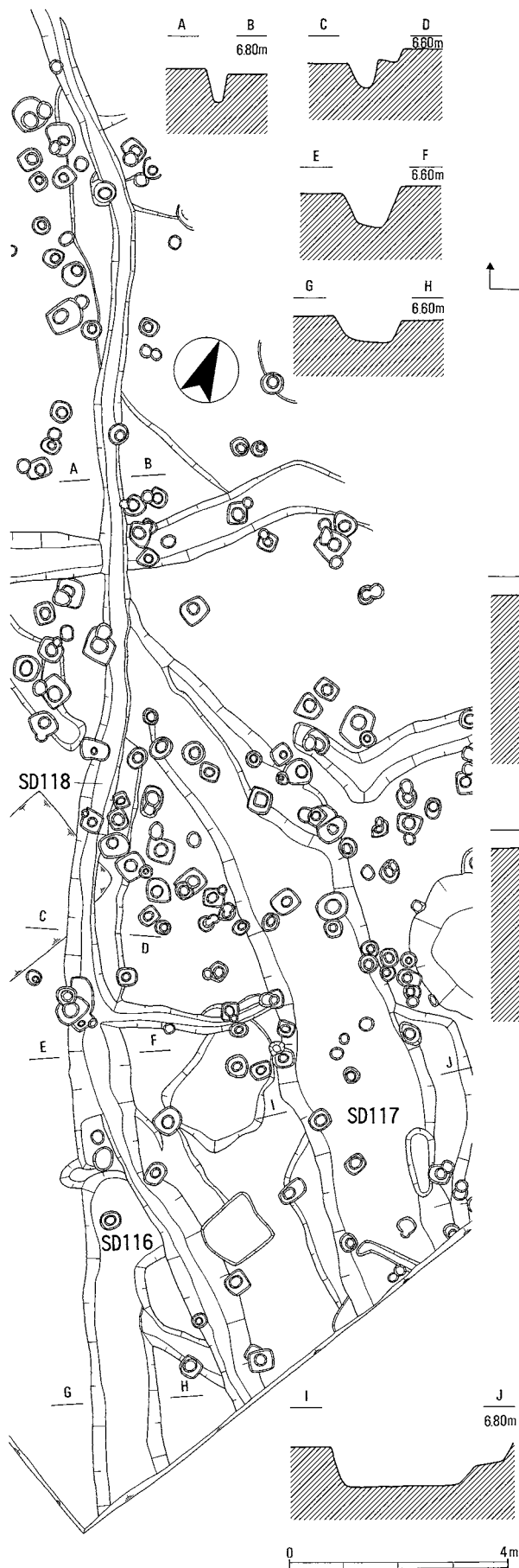
第42図 S K 114実測図 (1 : 40)



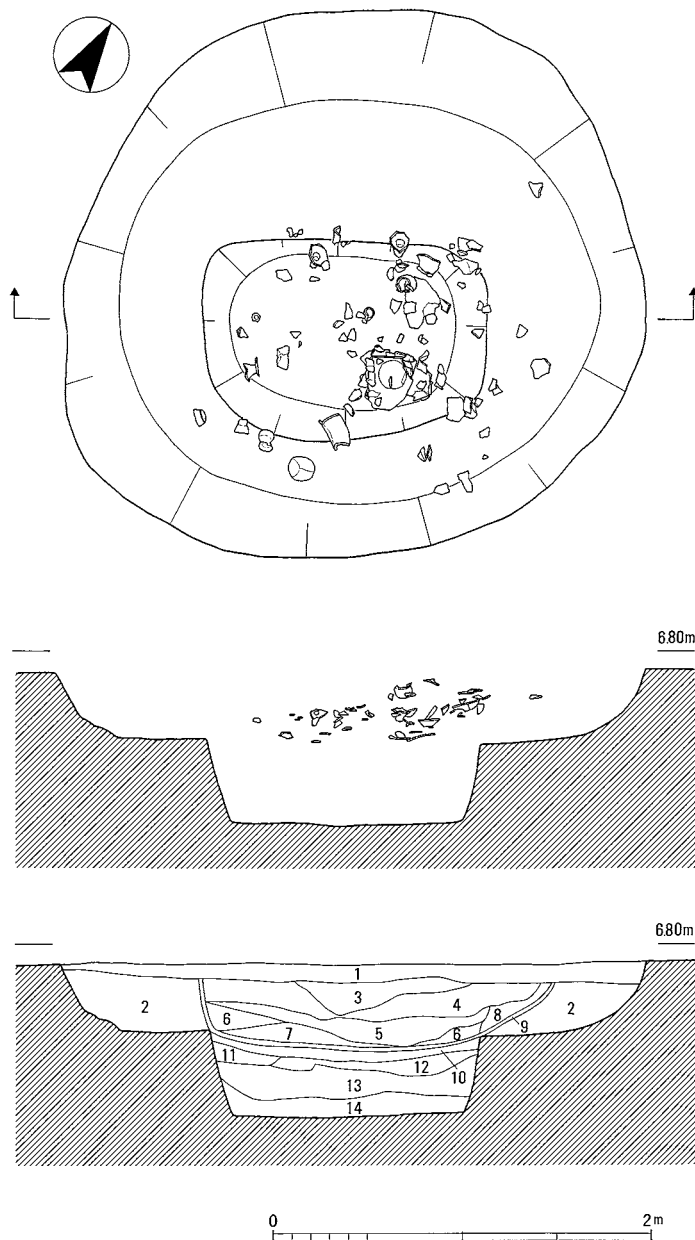
第43図 S K 103実測図 (1 : 20)



第44図 P 4 pit 5 実測図 (1 : 10)



第45図 S D 116・117・118実測図 (1 : 120)



- 1 2.5Y 4 / 1 黄灰色粘砂土
- 2 5 Y 4 / 1 灰色粘砂土、
7.5Y R 4 / 6 褐色砂質土粒含む
- 3 7.5Y 4 / 1 灰色粘砂土、
7.5Y R 4 / 6 褐色砂質土粒含む (炭化物含む)
- 4 5 Y 4 / 1 灰色粘砂土、
10Y R 4 / 4 褐色粘砂土ブロック含む (炭化物含む)
- 5 N 3 / 暗灰色砂質土 (炭化物含む)
- 6 10Y R 4 / 1 褐灰色砂質土
- 7 10Y R 3 / 2 黒褐色粘砂土 (炭化物含む)
- 8 10Y R 4 / 2 灰黄褐色粘砂土
- 9 10Y R 7 / 1 灰白粘土、
7.5Y R 6 / 8 橙色粘質土ブロック含む
- 10 N 4 / 灰色粘土、7.5Y R 6 / 8 橙色粘土ブロック含む
- 11 N 3 / 暗灰粘砂土、7.5Y R 6 / 8 橙色粘砂土
- 12 N 5 / 灰色粘砂土 (やや砂質強い)
- 13 5 P B 4 / 1 暗青灰色粘砂土 (やや砂質強い)
- 14 N 7 / 灰白色砂

第46図 S E 105実測図 (1 : 40)

瞭な掘り込みを持って形成されたため土坑断面形は急角度の逆台形状を呈する。溝底から10cm程度浮いたレベルから、二重口縁壺をはじめとする土器類がまとまって出土している。

SE105 (第46図) 円形の掘形(外周に形成された段)直径3.1m、湧水部が上部で1.5m(底部1.2m)、深さ82cmを測る井戸状の遺構である。湧水部は底部から急角度で一直線に立ち上がっており、本来ここに板状の木材があてがわれていた可能性が高い。下層部となる14層は砂層で、ここが湧水層であったと推定される。その後、一旦埋没が進んだが(10層~12層の粘性土)、その埋没過程で再掘削され、長径1.9mの浅い土坑として再利用されたと推定される。その時の底部が9層の薄い灰色粘土層で、滞水によって形成されたものと思われる。以上をまとめると、SE105は、当初2段に掘り込まれた井戸として形成され、埋没途中で再掘削されて浅い土坑として再利用されたものと思われる。埋土からは、多数の古墳時代土師器が出土したが、そのほとんどは再利用時の土坑部分からの出土である。

SD118 (第45図) 南北18.5m、南端で東側へ3mほど直角に屈折するL字形の溝である。幅・深さともに50cmを測るシャープな掘り込みをもち、SD117やSD121を切って存在している。平面プランからは何らかの区画溝的な機能が想起されるが、溝屈折の内側(北東側)では特に区画・圍繞対象となる遺構は確認されていない。埋土から土師器杯が出土した。

SR121 (第40図) 緩やかに蛇行する東西方向の溝で、長さ18m、幅1.1m、深さ30cmを測るが、隣接するF区では未検出である。埋土から7世紀代の須恵器杯身が出土している。

SA631・SB624 (第47図) これらの遺構はその大部分がF区に所在し、個別には既に報告済である。今回のJ区では、SA631に連続すると考えられる柱列が新たに確認された。この結果、F区報告段階ではこれら遺構はセットで存在するという認識はなかったが、SA631はSB624を囲む柱列(柵)である可能性が高まったので、あらためて報告する。

SB624は、梁間1間、梁行3間の掘立柱建物で、建物方向はN22度Eである。SA631は、このSB

624を「コ」字形に取り囲む柱列で、建物の東西主軸の東側延長部には柱穴はなく、柱列の開放部となっている。このことから、SB624は東側妻入りの建物と推定される。ただし、SA631はSB624を等分に取り囲んでいるのではなく、東側開放部を基準にすると、北に1間、南に3間分存在する。つまり、SB624はSA631内の北寄りに存在し、南側にスペースを持っていることになる。なお、SA631の西および北西側の柱穴は未検出で、状況的に不明な部分が残っている。

F区報告段階では時期不明とされていたが、SA631を構成する柱穴のひとつは古墳時代中期の土師器直口壺(67)が出土したピット(5次P4pit5、第44図)に切られており、古墳時代中期以前の所産と考えられる。

c 古代~中世の遺構

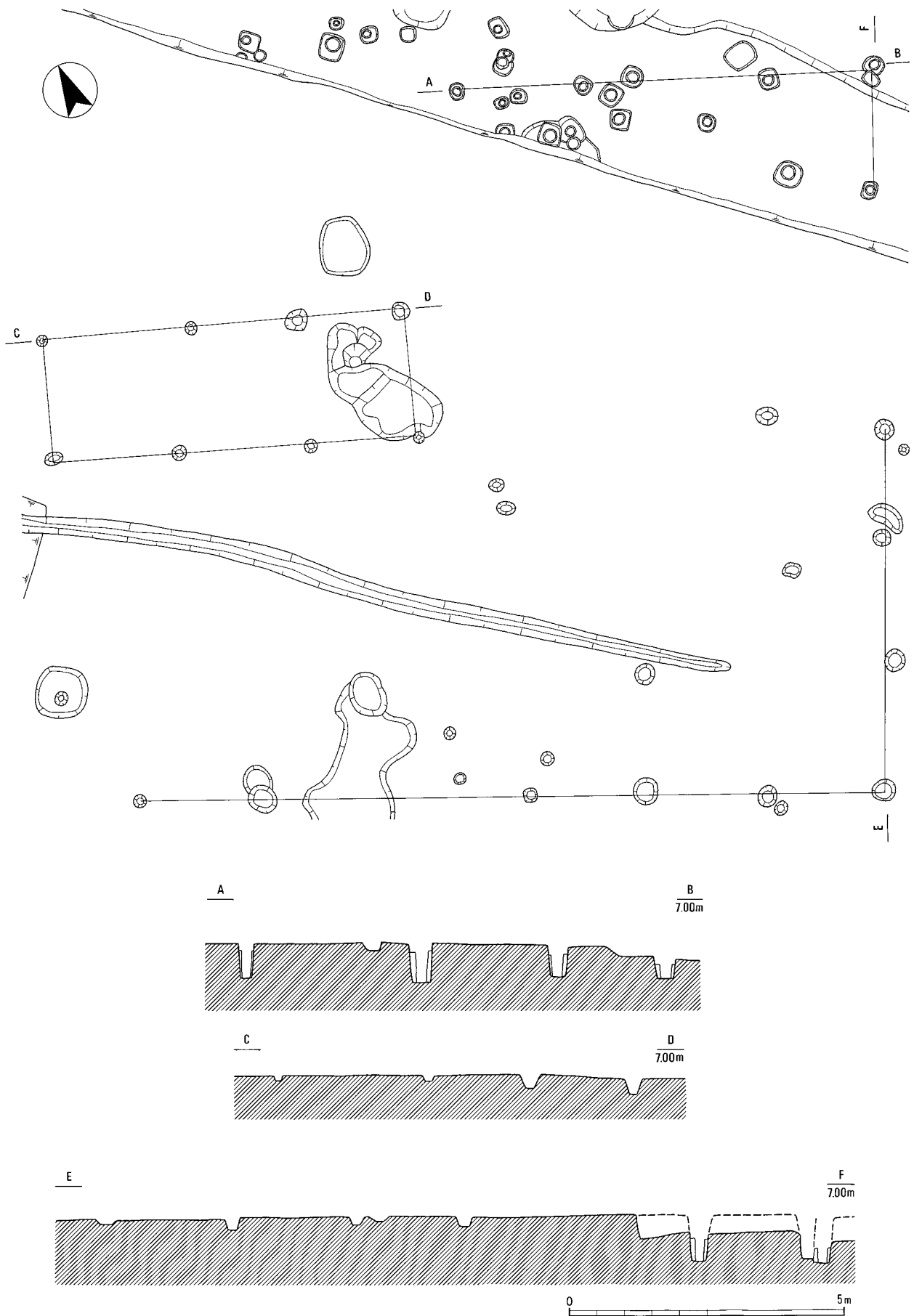
SK114 (第42図) 南側が歪な形状になっているが、長径2.9m×短径1.4mの長方形土坑で、深さ12cmを測る。埋土から土師器皿(47)や志摩式製塩土器(48)が出土した。

SE106 (第48図) 底部に3枚の底板を敷き、長方形板材を縦方向に組んで井戸側とした井戸である。立板は、各辺5枚で形成され、内外に横板を渡してそれをコーナーで組合せて固定している。そのため、各辺の隅に位置する立板の外側には、横板両端を嵌め込むために方形の抉りが入れている。掘形は2.5m×2.1mの楕円形、井戸側は0.7m×0.6mを測る。井戸の掘形や井戸枠内からは、多数の遺物が出土しているが、その多くは古代の遺物(49~66)である。

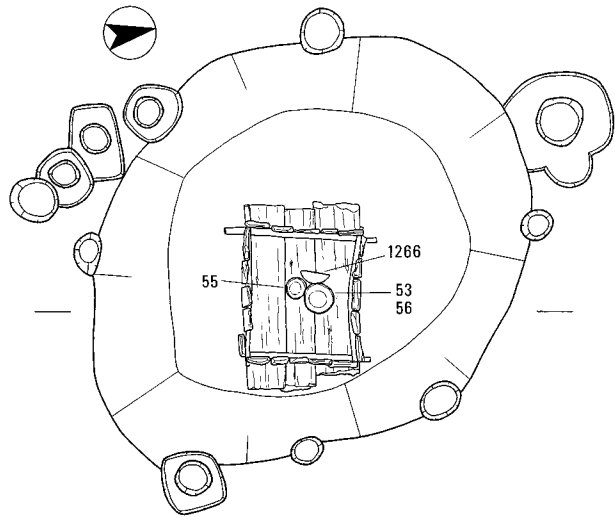
SB154 (第38図) 桁行4間(9.8m)×梁行2間(3.6m)の側柱建物で、柱間寸法は桁行2.45m等間、梁行は1.8mで、柱掘形は直径30~40cmの方形を基本とする。建物方向は、N29度Eである。

SB155 (第49図) 桁行5間(12m)×梁行3間(6.8m)の東西棟の掘立柱建物で、梁の南側一間分は庇(南庇)となる。柱穴は、長径30~40cmの隅丸方形もしくは隅丸長方形で、SR601やSE105を切って存在している。建物方向は、N20度Eである。

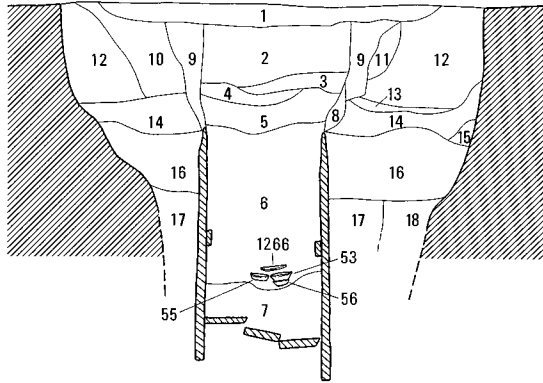
SB156 (第50図) 西側のF区に延びる部分など検出されていない柱穴もあるが、位置的に西側妻



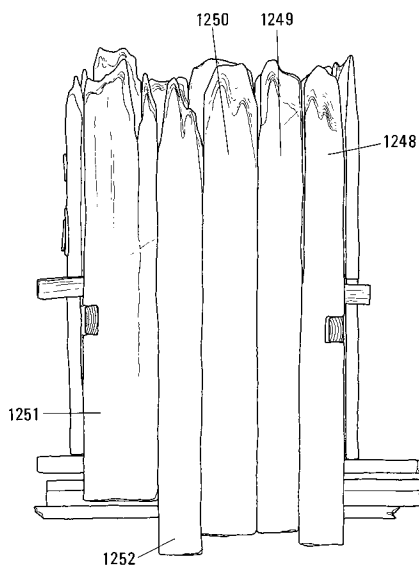
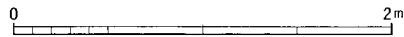
第47図 S A 631・S B 624実測図 (1 : 100)



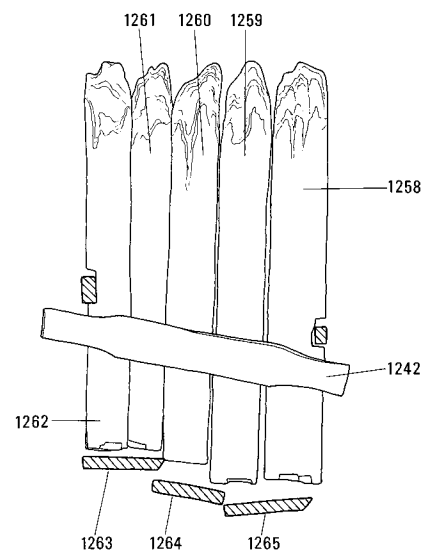
6.80m



- 1 5 Y 5 / 2 灰オリーブ色細砂、7.5 Y R 3 / 1 黒褐色細砂・10 Y R 5 / 6 黄褐色細砂ブロック含む
- 2 7.5 Y R 5 / 2 灰褐色粘砂土、7.5 Y R 3 / 1 黒褐色細砂・10 Y R 6 / 8 明褐色細砂ブロック含む
- 3 10 Y R 4 / 1 褐灰色粘砂土、7.5 Y R 5 / 6 明褐色細砂・10 Y R 3 / 2 黒褐色細砂ブロック含む
- 4 7.5 Y R 4 / 1 褐灰色粘砂土、7.5 Y R 6 / 8 橙色細砂・10 Y R 3 / 1 黒褐色細砂ブロック含む
- 5 5 Y R 4 / 1 褐灰色粘土、5 Y R 4 / 6 赤褐色粘土・10 Y R 3 / 1 黒褐色細砂ブロック含む
- 6 N 3 / 暗灰色粘砂土、10 Y R 4 / 3 にぶい黄褐色粘質土ブロック含む (植物遺体多く含む)
- 7 N 2 / 黒色粘土 (粗砂混じる)
- 8 N 5 / 灰色粘土、5 Y R 5 / 8 明赤褐色粘質ブロック含む
- 9 5 Y R 3 / 2 黒褐色粘砂土、7.5 Y R 4 / 1 褐灰色粘砂土ブロック含む
- 10 10 Y 5 / 1 灰色粘砂土、5 Y R 5 / 8 明赤褐色細砂ブロック含む
- 11 2.5 Y 4 / 2 暗灰黄色粘砂土・2.5 Y 7 / 6 明黄褐色粘砂土ブロック含む
- 12 10 Y 5 / 1 灰色粘砂土、5 Y R 5 / 8 明赤褐色細砂ブロック含む (9層より粘性弱い)
- 13 5 Y R 5 / 8 明赤褐色粘砂土
- 14 2.5 Y 5 / 1 黄灰色粘質土、10 Y R 5 / 8 黄褐色粘土 (やや砂質帯びる) ブロック含む
- 15 10 Y R 6 / 4 にぶい黄褐色粘砂土
- 16 5 B 4 / 1 暗青灰色粘質土、10 Y R 5 / 8 黄褐色粘土・N 6 / 灰色砂ブロック含む
- 17 B 3 / 1 暗青灰色粘土
- 18 N 3 / 暗灰色粘砂土



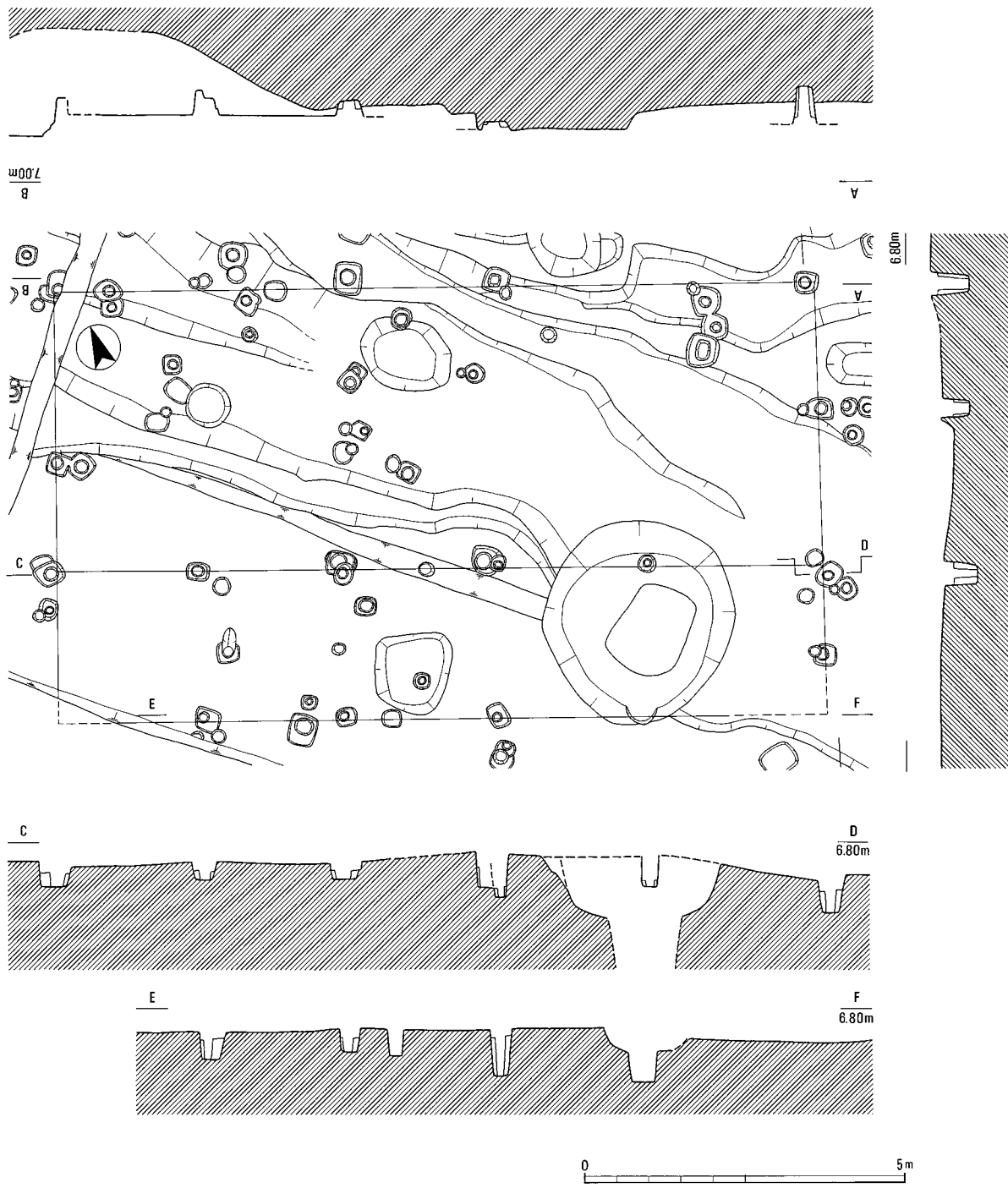
井戸枠南側外面



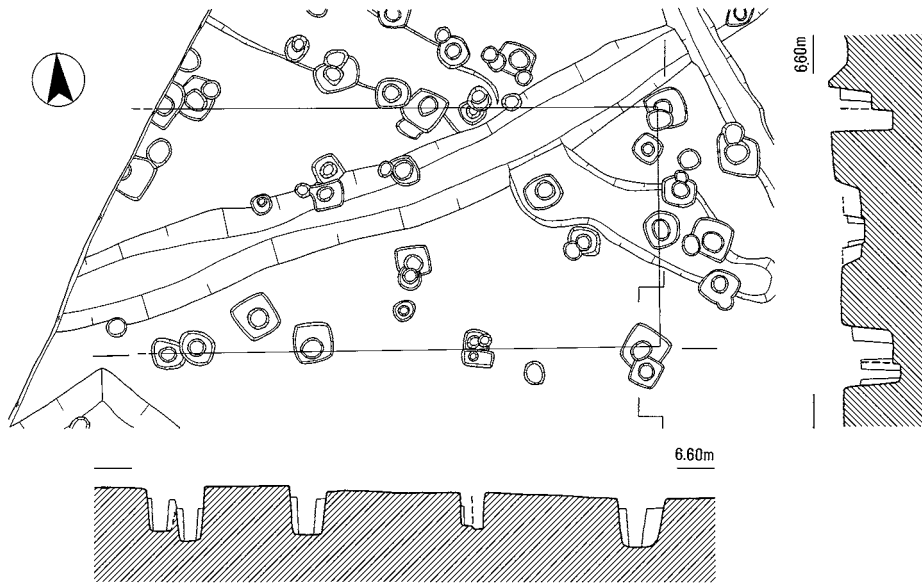
井戸枠西側内面



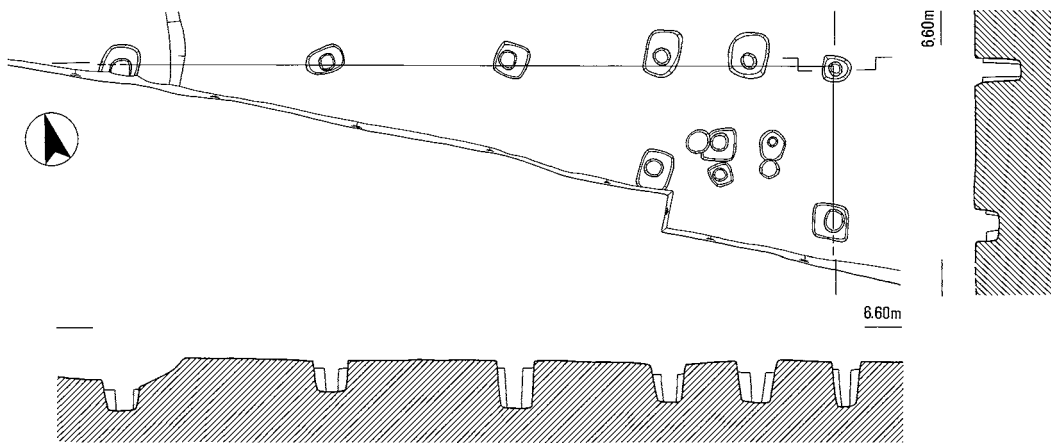
第48図 S E 106実測図 (平面・断面 1 : 40、井戸枠 1 : 20)



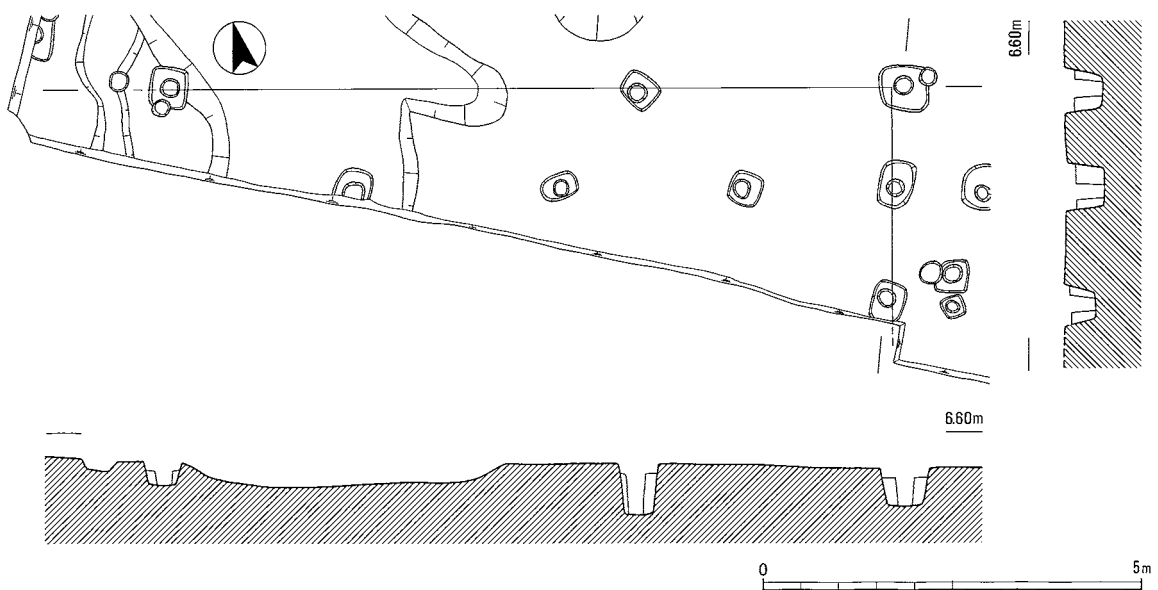
第49図 S B 155実測図 (1 : 100)



第50図 S B 156実測図 (1 : 100)



第51図 S B 158実測図 (1 : 100)



第52図 S B 157実測図 (1 : 100)

柱と推定される柱穴が存在したので桁行4間(9.2m)×梁行2間(3.5m)の東西棟の側柱建物と把握した。建物方向はN20度Eで、建物を構成する柱穴の掘形はいずれも1辺50cm程度の方形である。

S B157(第52図) S K114との重複部分の柱穴が未検出のほか、隣接するF・G区でも延長部の柱穴が未検出であるが(F・G区の検出高が低い可能性)、桁行3間以上×梁行2間の側柱建物と思われる。柱穴掘形は、直径50cmほどの方形であるが、隅柱は直径60cm強と若干大きい。

S B158(第51図) 本建物も、隣接する調査区であるF・G区では未検出であるが、桁行4間以上の側柱建物であろう。柱掘形は、隅丸方形もしくは隅丸長方形を呈し、建物方向はN17度Eである。

4 出土遺物

a 弥生時代遺構出土の遺物

S R601出土遺物(1~3) 直口壺(1)・甕(2~3)がある。2は口縁部、3は脚台部である。

S R606出土遺物(4~7) 弥生土器としては壺(4~5)があるが、この他、古墳時代の滑石製有孔円板(6)、須恵器高杯蓋(7)がある。広口壺の口頸部である4は、頸部に直線文を密接施文しており、沈線間に刺突を充填した5ともども、中期初頭の所産と思われる。

S R607出土遺物(8) 弥生土器の小形の甕である。口縁部は外側へ短く、かつ緩やかに屈折する。体上部はほとんど張らず、調整もナデないしは板ナデを基本としている。

S K113出土遺物(9) 弥生土器の壺の胴底部片である。胴部は下膨れ形状を呈し、最も膨らんだ部分に隆帯を貼付している。

S D116出土遺物(10~14) 弥生土器のほか、古墳時代以降の遺物も混じる。弥生土器甕(10)・壺胴部(11)、須恵器杯蓋(12)・土師器杯(13~14)がある。11は破片であるが、胴部は文様帯とミガキによる無文部を段状に連続させるもので、文様帯は沈線間にヨコハケを充填して部分的にタテハケでアクセントを付けている。中期前半の所産であろう。

S D117出土遺物(15) 弥生土器の壺の破片である。頸部片で、櫛描文が入る。

S X122出土遺物(16) 弥生土器の壺の破片で

ある。櫛描による流水文が施されている。

b 古墳時代遺構出土の遺物

S K103出土遺物(17~22) いずれも土師器で、壺胴部(17)・二重口縁壺(18)・小形S字甕口縁部(19)・高杯(20~21)・小型平底壺(22)がある。二重口縁壺18は、平底で、口縁部の開きが弱く、ナデ調整の粗製化したものである。

S E105出土遺物(23~44) いずれも土師器で、二重口縁壺(23~25)・小形丸底壺(27~28)・小型平底壺(29)・高杯(26・30~36)・S字甕(37~44)がある。二重口縁壺は、いずれも大きな一次口縁に小さな二次口縁の付くナデ調整のものである。高杯のうち、30~36はいわゆる屈折脚高杯で、脚部内面をナデ調整している。26は、ハケによる調整痕を顕著に残した分厚い異形の高杯である。S字甕は、いずれもD類以降のものである。

S D118出土遺物(45) 土師器杯である。口縁端部を面取りし、全体をナデ調整で仕上げている。

S R121出土遺物(46) 須恵器杯身である。いわゆる古墳時代型であるが、口縁部の立ち上がりは極めて短い退化形態を示す個体で、底部のロクロケズリもみられない。7世紀代後半の所産であろう。

P 4 pit 5 出土遺物(67) 小型の土師器直口壺である。胴上部にはミガキも認められるが、体下半部はケズリ痕跡をそのまま残す。

c 古代~中世遺構出土の遺物

S K114出土遺物(47~48) 土師器皿(47)と志摩式製塩土器(48)を図示した。土師器皿は、口縁部がヨコナデによってやや外反気味となっている。製塩土器は、やや小振りである。

S E106出土遺物(49~66・1239~1267) 土器では、土師器の皿(49~52)・杯(53~57)・甕(58~60)・甌(61)・鉢(62、斎宮でいう「盤A⁽¹⁾」)、黒色土器の円形板(63)・須恵器杯蓋(64)・灰釉陶器椀(65~66)、木製品では、井戸横棧(1239~1242)・井戸縦板(1243~1262)・井戸底板(1263~1265)・曲物底板(1266)・横櫛(1267)がある。

土師器皿49は、内面に螺旋状暗文を僅かに残す。土師器杯のうち、53や55は底部と胴部の境に明瞭な稜が入り、ロクロ使用の可能性が残る。土師器甕は、いずれも口縁端部にヨコナデによる面を形成する。

全体に平安時代のもものが主体を占めると思われるが、土師器甕などは口縁部外面に面をもつなどやや古い要素を残し、若干の時間幅がある。なお、63は碗の可能性ある。木製品のうち横棧は横位で出土したが、レイアウトの都合上、縦位で配置した。

S B 154出土遺物 (68~69) 土師器碗 (68) と山茶碗 (69) がある。土師器碗は、黒色土器碗の形状にも似るが、黒色化はなされていない。

J - N 1 pit 2 出土遺物 (70) ロクロ土師器の小皿で、柱状高台をもつ。

J - N 1 pit 4 出土遺物 (71) 高台付きのロクロ土師器であるが、器種は不明である。

J - R 6 pit 5 出土遺物 (72~73) 山茶碗 (72) と土師器小皿 (73) がある。山茶碗は瀬戸・猿投系⁽²⁾、土師器小皿はいわゆる「ての字小皿」で、京都系を模倣した在地産である。

J - S 4 pit 10 出土遺物 (74~75) 山茶碗 (74) と土師器甕 (75) である。山茶碗は渥美系である。

J - U 7 pit 2 出土遺物 (76) 土師器甕である。法量の小さい外面ハケ調整の甕で、口縁外面にヨコナデによる面を有する。

J - R 4 pit 17 出土遺物 (77) ロクロ土師器の皿である。口縁内面に沈線が入る。

J - N 3 pit 14 出土遺物 (78) 黒色土器の碗で、内面を黒化したA類である。

J - N 2 pit 15 出土遺物 (79) 灰釉陶器碗で、猿投系である。

J - M 3 pit 7 出土遺物 (80) 凝灰岩製の砥石である。撥形形状を呈するが、片側を欠損する。

d J区包含層等出土遺物

遺構以外から出土した遺物に関して、表土掘削時出土なども含めて報告する。

81~87は弥生土器で、81~84は甕、85~87は壺である。

このうち、甕81は、底部を穿孔する土器であるが、整形・調整自体は「体部外面タテハケ・口唇部刻み・口縁内面ヨコハケ」手法で特徴付けられるもので、同手法をもつ甕は替田遺跡出土の弥生中期の甕で最も一般的な存在である。そこで、以下では同特徴を「A調整」、A調整から口唇部刻みを省略して口唇部ヨコナデ仕上げのものを「B調整」と呼称して記述を進めることとする（その他の特徴のものは別途、個別に記述する）。

そのほか、小形の甕83は、胴上部が張らず、口縁が水平近く開く。また、86は沈線によって区画された縄文帯をもつ。これらも含め、全体として中期前半に属するものが中心である。

88は石庖丁で、塩基性岩製である。

89~90は古墳時代遺物である。89は土師器杯、90は須恵器杯身である。90は、立ち上がりはしっかりしているが、法量は小さく、7世紀代の所産であろう。

91~93は古代の土器で、91は須恵器大甕、92~93は土師器杯である。92は口縁端部がわずかに開く粗製の杯、93は暗文こそ不明ながら、内外をミガキ調整した精製品である。

94~96は中世の土器で、94は青磁香炉、95~96は山茶碗である。94は、脚部に花文状の透孔が穿たれたもので、15世紀後半から16世紀前半頃の所産であろう。山茶碗は、95が瀬戸系、96が知多・猿投系である。

97~99は、鉄釘である。

註

(1) 斎宮歴史博物館『斎宮跡発掘調査報告』I 2001

(2) 伊藤裕偉氏のご教示による。以下、中世遺物に関しては、系統等の記述など伊藤氏のご教示による。

第4節 K区の調査

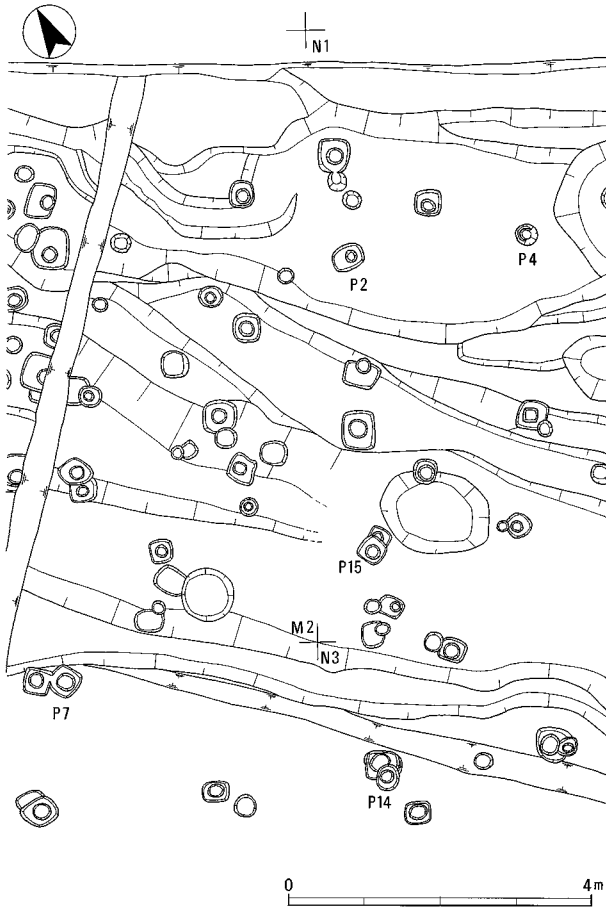
1 概要

K区は、幅2.2m、総延長127mの細長い調査区である。北側の東西方向のトレンチと、その東端から南に延びる南北方向のトレンチからなるが、南側の南北トレンチは厳密には式ノ坪遺跡の範囲に含まれ

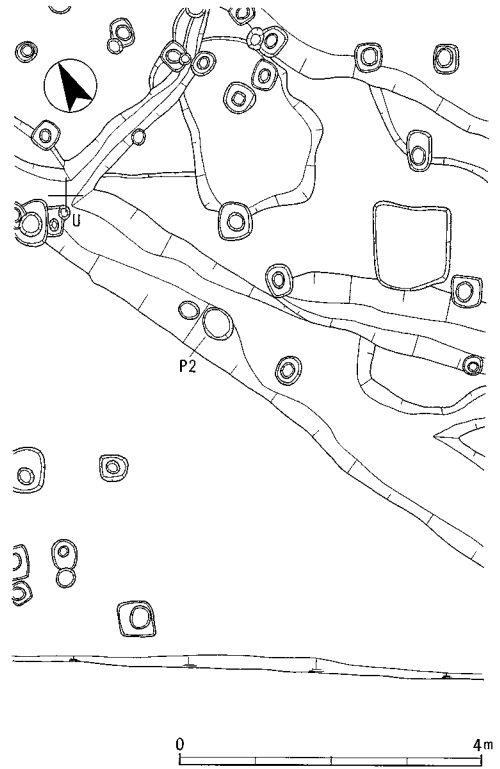
る。なお、両トレンチの屈折部8m分は、平成12年度に実施された第4次調査時にトレンチ調査されている（G区の一部）。

2 小地区設定方法

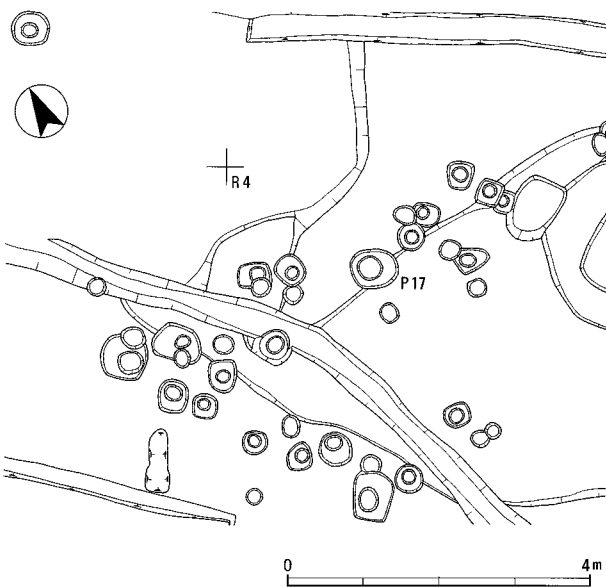
K区は、4次調査G区に続く部分であるが、G区



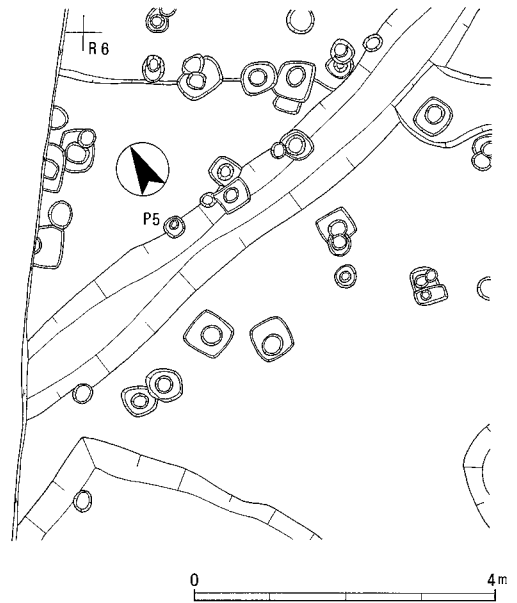
第53图 N 1 pit 2・4、N 3 pit 14、N 2 pit 15、
M 3 pit 7 位置图 (1 : 100)



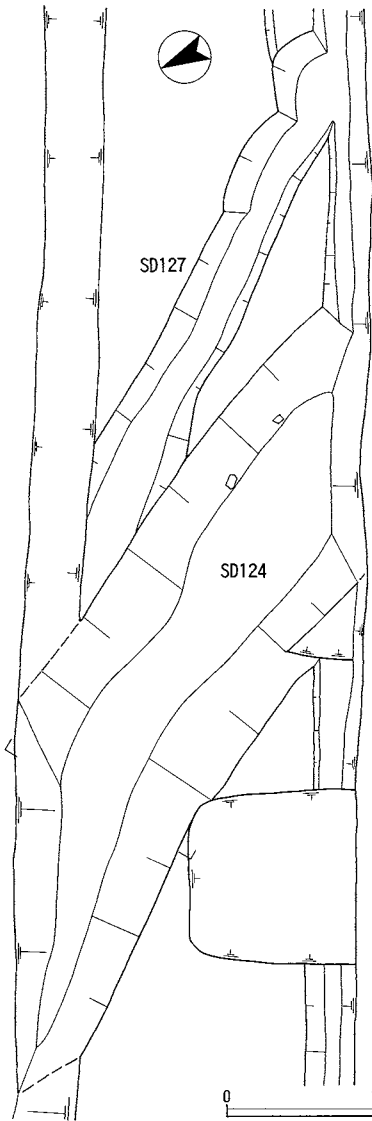
第54图 U 7 pit 2 位置图 (1 : 100)



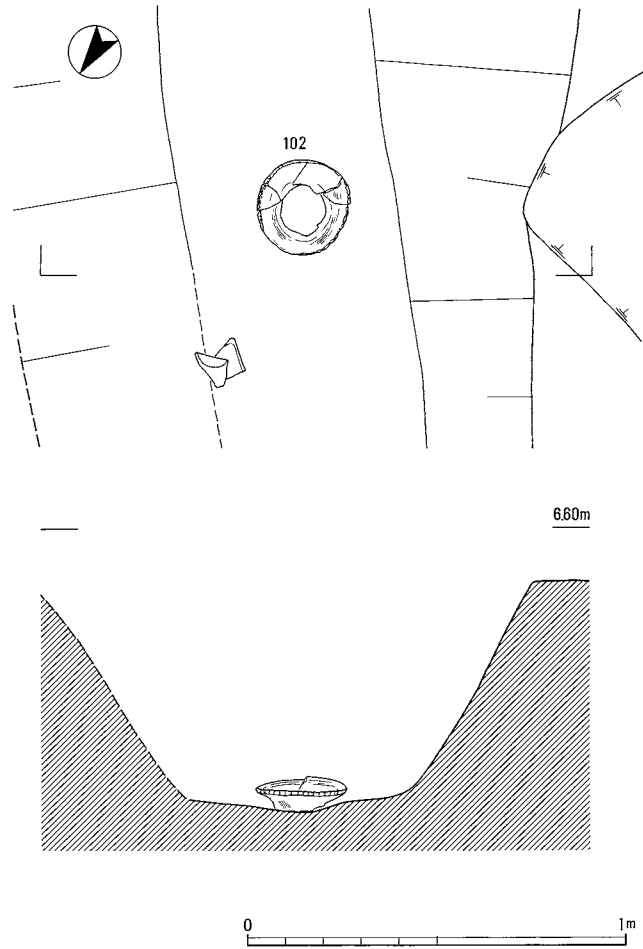
第55图 R 4 pit 17 位置图 (1 : 100)



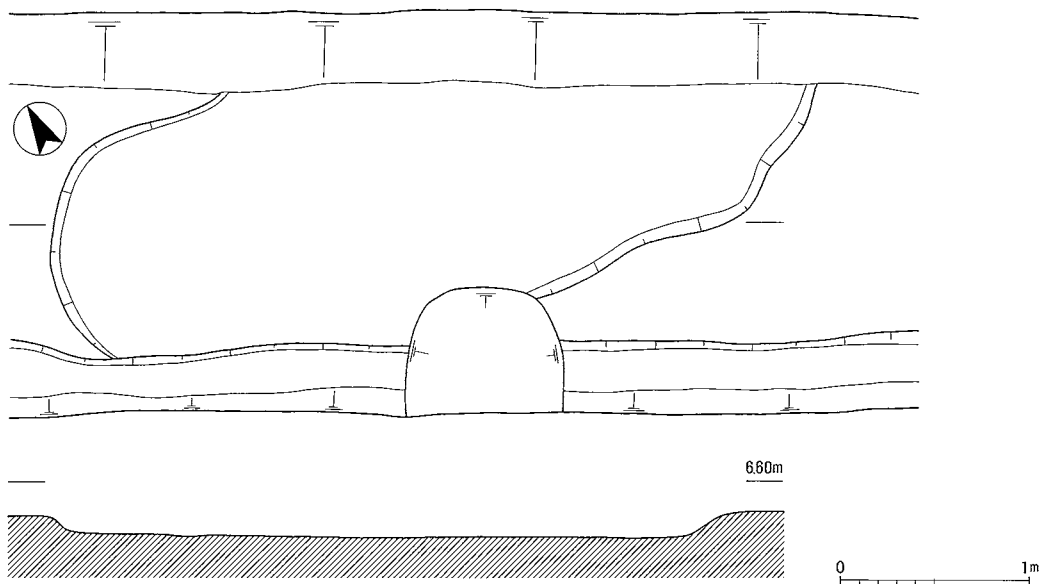
第56图 R 6 pit 5 位置图 (1 : 100)



第57図 S D 124・127実測図 (1 : 50)



第58図 S D 124遺物出土状況図 (1 : 20)



第59図 S K 123実測図 (1 : 40)

の小地区とはリンクさせずに、K区として独立して行っている。すなわち、三重県埋蔵文化財センターの小地区付与の基本原則に則って北西隅を表示の基点とし、トレンチの形状に沿って東西軸は西から東へアルファベットを、南北軸は北から南へ数字を付与している（第6図）。

3 遺構

遺構密度も乏しく、報告すべき数も少ないので、本地区は時期別に分けずに一括して説明を加える。

SK123（第59図） 調査区の幅が狭いため全体形状は不明だが、長径4m以上×短径1.6mの楕円形の土坑で、深さは10cm程度と浅かった。埋土からは土錘2個（100～101）が出土したが、明瞭な時期を示すものではない。

SD124（第58図） 調査区幅が狭いため全体形は示しえないが、幅1.4m、深さ60cmを測るしかり

とした溝である。埋土から弥生土器が出土している。

その他（素掘り小溝遺構、第28図） 南側の南北トレンチの遺構は、出土遺物も乏しく、報告しうるほどの遺構はないが、南側の南北トレンチには素掘り小溝があり、そのいくつかは中勢道路調査区の式ノ坪遺跡にも連続する。

4 出土遺物

SK123出土遺物（100～101） 土師質の土錘である。101は、中央部が膨らむ菱形形状をとる。

SD124出土遺物（102～109） 弥生土器で、102～107は壺、108～109は甕である。102は広口壺で、口縁端部に刻目刺突を入れた中期の土器である。104は、頸部に縄文を施した細頸壺である。

K区包含層等出土遺物（110～115） 須恵器杯蓋（110）・転用硯（111）・土錘（112～115）である。転用硯は薄手であるが、須恵器からの転用である。

第5節 L区の調査

1 概要

L区は、西接する中勢道路調査区B地区と並んで替田遺跡で最も遺構の濃密な部分である。発掘調査では、上層と下層とに分層して調査したが、整理の結果、必ずしも遺物があるようには分別されなかった。このことは、結果として遺構埋土の濃淡によってより上面で検出できた遺構と、少し削り込まなければ検出できなかった遺構とが出たが、実際には「下層面」検出の遺構も本来は上面で把握されるべき遺構であったことを示している。実際、調査区壁の土層観察からは、「上層／下層」の別は存在しなかった。以上を鑑み、ここでは両者を一括して報告する。

2 小地区設定方法

本地区の小地区は、国土座標には則らずに調査区の形状に合わせて東西軸は西から東へ数字を付与したが、西北隅を表示の基本とする三重県原則に拠らずに、南北軸は南から北へアルファベットを付与している（第7図）。

3 遺構

a 弥生時代の遺構

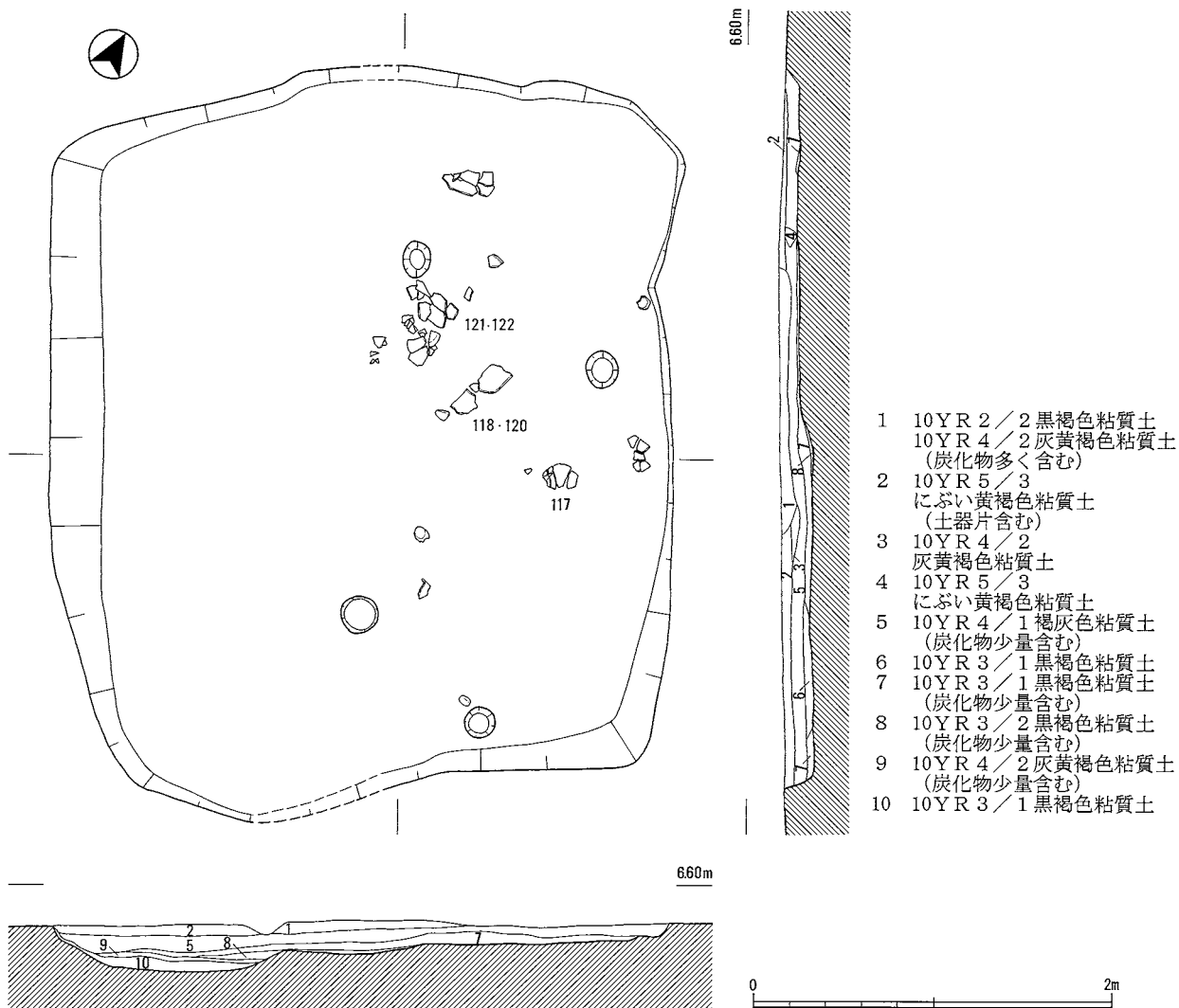
SH207（第60図） 長径5.1m×短径4.3mの方形竪穴状遺構で、深さ26cmを測る。周溝や支柱穴が

未確認のため竪穴住居と確定するには疑問も残るが、遺構の平面形から竪穴住居と推定した。住居南側はSK288をはじめとする他遺構との切り合いによって、詳細な形状が掴みづらい。埋土から、中期前葉の土器（116～130）や石鏃等の石器（131～134）が多く出土している。

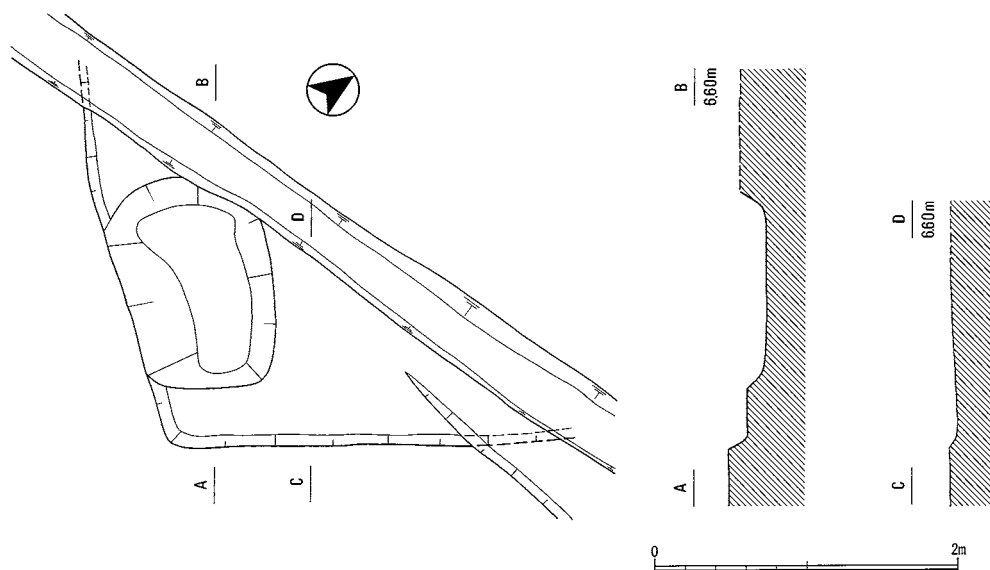
SH219（第61図） 調査区際で検出されたため、住居東南隅の一部を検出したのみである。1.8m以上×1.7mの方形竪穴住居と推定したが、西側の中勢道路調査区では未検出のため、疑問も残る。南壁に接して、長径1.4m×短径1m、深さ23cmの土坑があり、貯蔵穴かと推定される。図示しうるほどの出土遺物はなかった。

SH230（第62図） 4.1m×3.9mの規模を有する替田遺跡唯一の略円形の竪穴住居で、深さ29cmを測る。SB351をはじめとする重複遺構のため、遺構自体の残りは悪い。壁柱穴かと推定される小穴が住居東側の壁に見られるが、住居を全周するほどは検出できなかった。支柱穴は方形に配された4柱と推定されるが、1本が未確認であった。埋土から、中期の土器（135～136）が出土した。

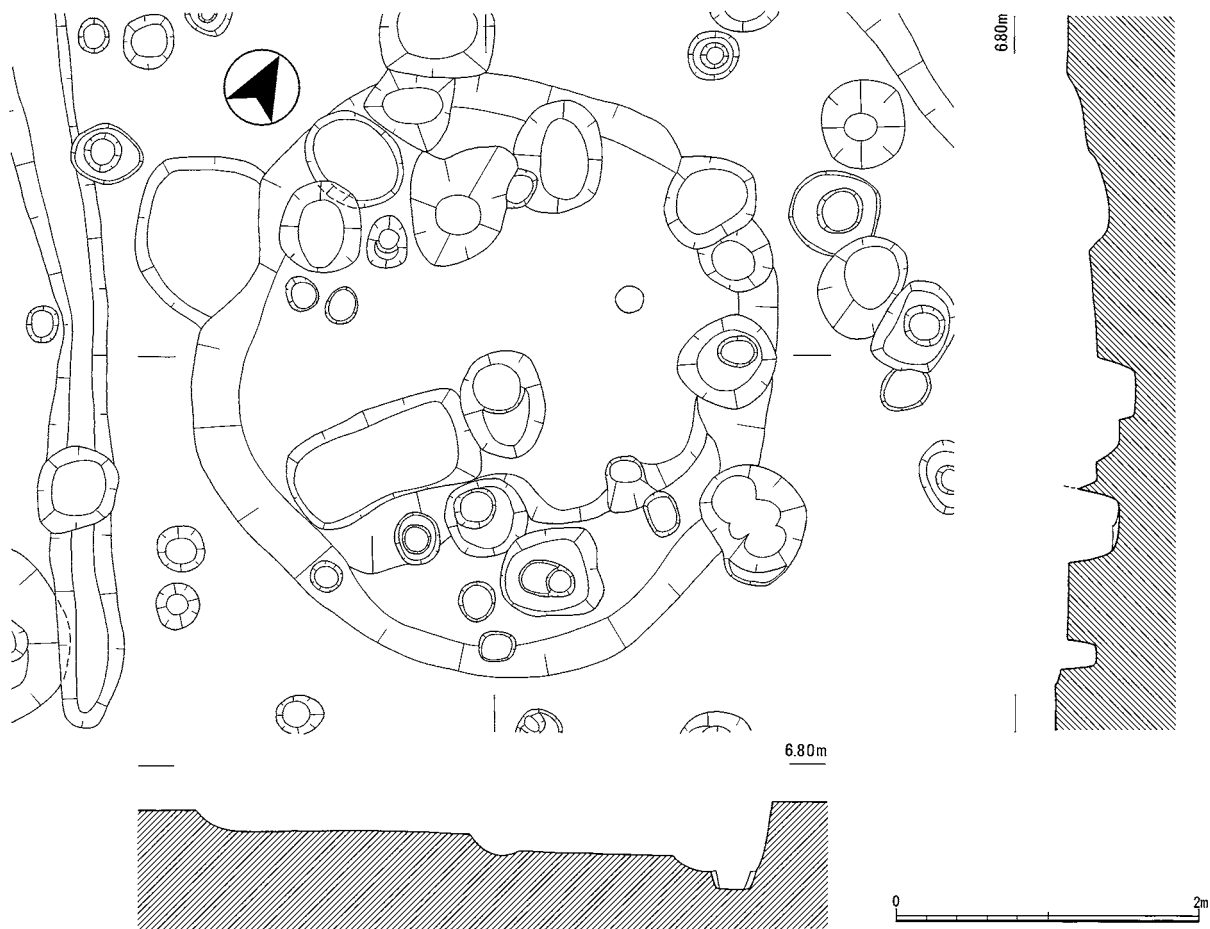
SH251（第63図） 長径4.3m×3.8mの長方形の竪穴住居で、深さ25cmを測る。他遺構との重複が



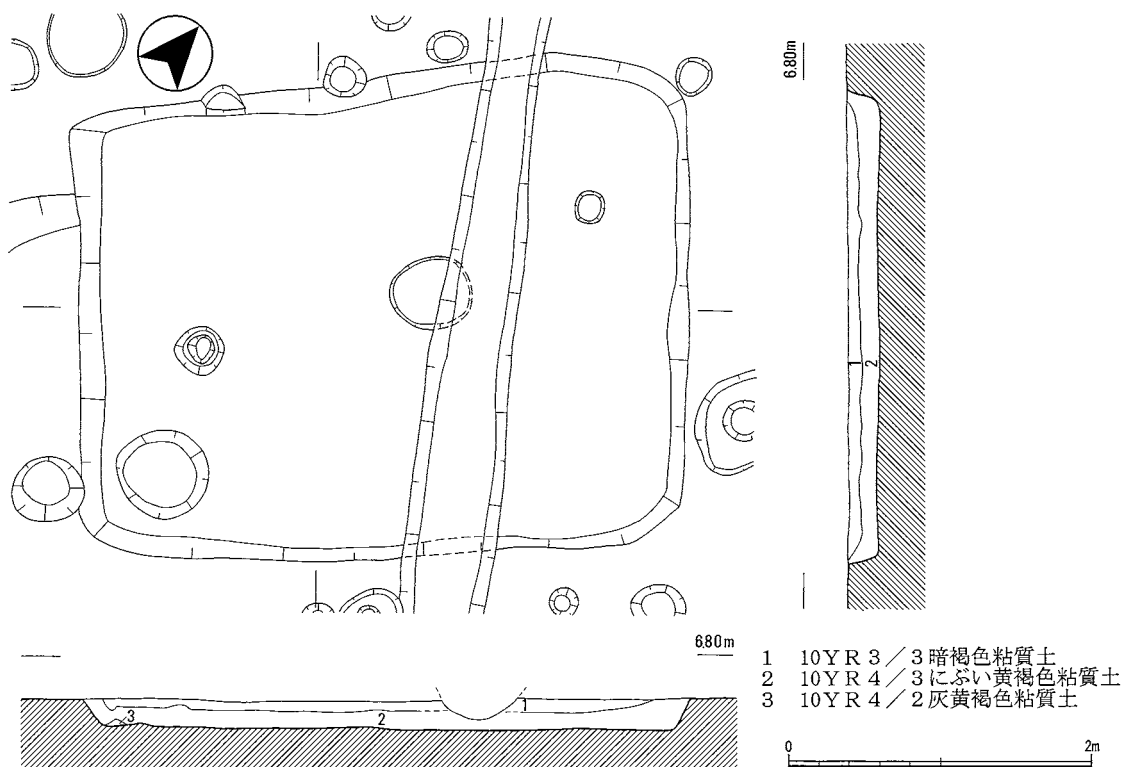
第60図 SH207実測図 (1 : 40)



第61図 SH219実測図 (1 : 50)

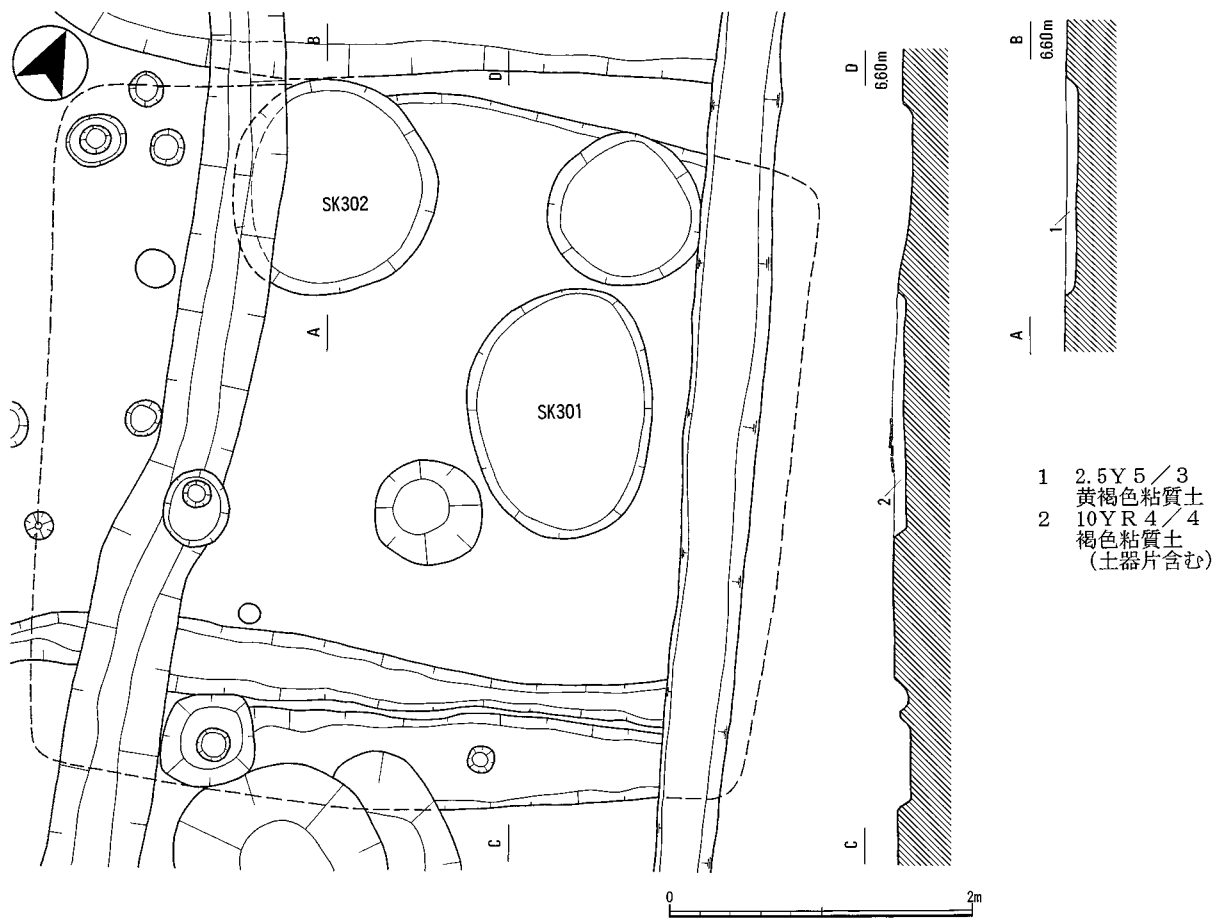


第62図 S H230実測図 (1 : 50)

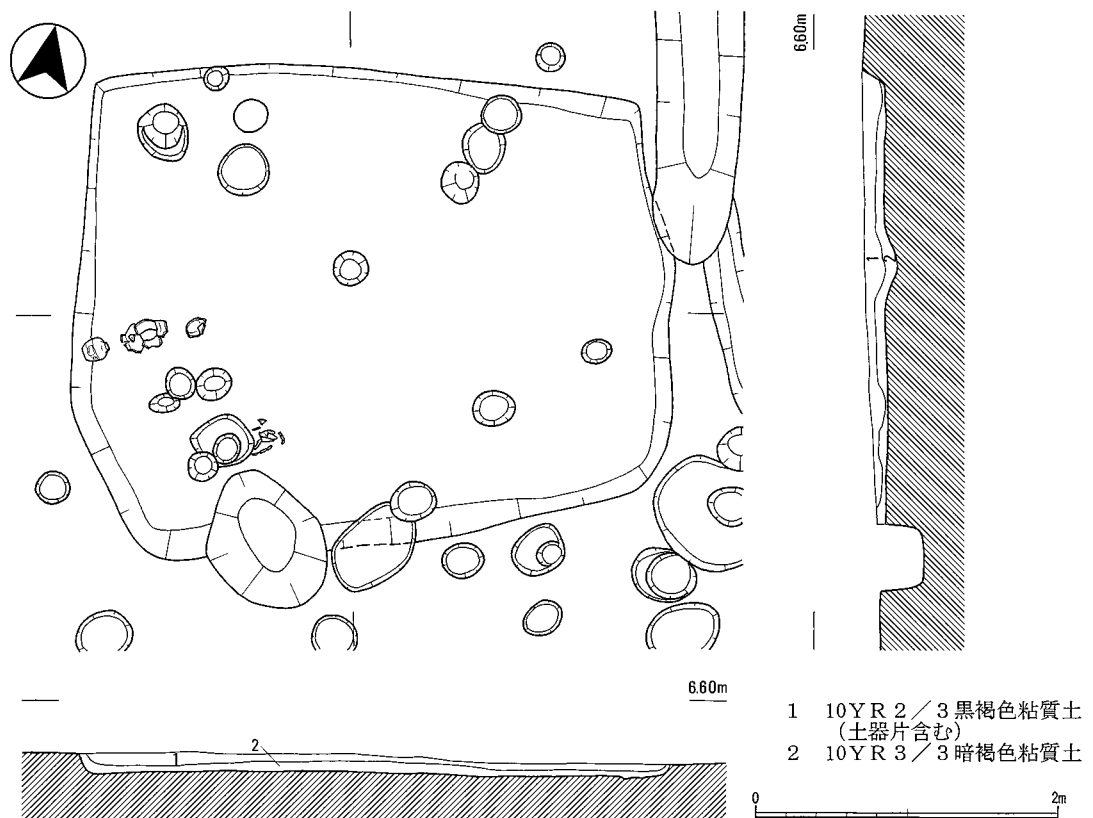


第63図 S H251実測図 (1 : 50)

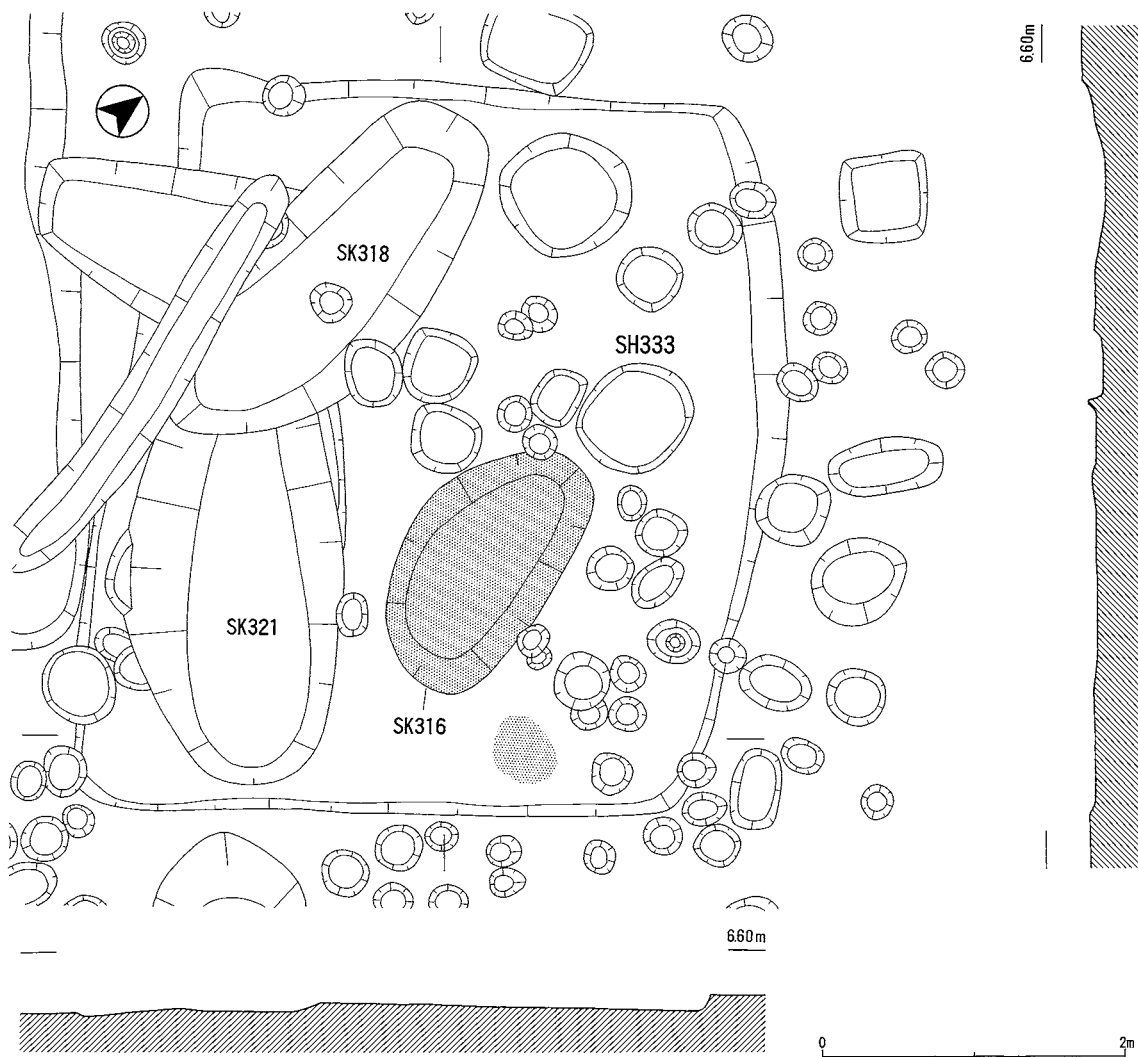
- 1 10Y R 3 / 3 暗褐色粘質土
- 2 10Y R 4 / 3 にぶい黄褐色粘質土
- 3 10Y R 4 / 2 灰黄褐色粘質土



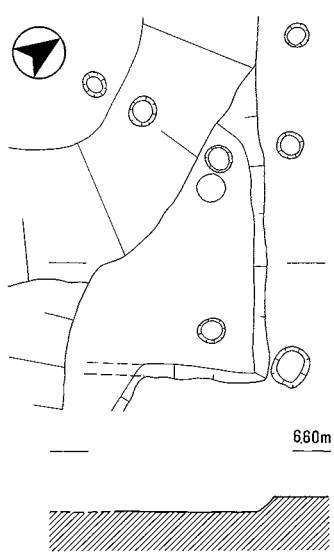
第64図 S H303・S K 301・302実測図 (1 : 50)



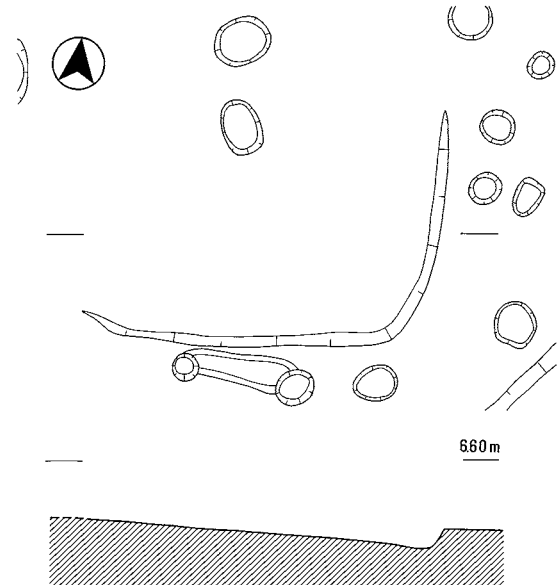
第65図 S H311実測図 (1 : 50)



第66図 S H333実測図 (1 : 50)



第67図 S H322実測図 (1 : 50)



第68図 S H330実測図 (1 : 50)

ほとんどない状態で検出されたが、周溝や支柱穴は明瞭でない。調査精度に起因するのか、上屋構造自体が極めて貧弱なものであったためかは判然としない。埋土からは、図示しうるほどの土器は出土しなかったが、石鏃や柱状片刃石斧等の石器類（137～141）が出土している。なお、埋土の洗浄等は実施していない。

SH303（第64図） 長径5m×短径4.6m以上、深さ9cmを測る竪穴住居であるが、残りは悪い。この住居も周溝や支柱穴は不明であるが、住居ほぼ中央の床面に炉跡が確認されている。埋土から中期前半の土器（142～146）が出土している。

SH311（第65図） 北東隅がやや流出しているが、長径4m×短径3.2m、深さ5cmの長方形プランの竪穴住居である。周溝は確認できなかったが、支柱穴は確認している。埋土から中期前葉の土器（147～150）や石鏃などの石器（151～153）が出土している。

SH322（第67図） 調査区の縁辺に所在するため一部しか検出していないが、一辺4.3m以上の方形ないしは長方形の竪穴住居である。SE324やSE327の重複を受け、残存状況は悪い。埋土から図示しうるほどの遺物は出土しなかった。

SH330（第68図） 削平や流出のため、住居の東北隅のみが残存しただけであるが、2.2m以上×1.6m以上の方形もしくは長方形の竪穴住居と推定される。埋土から図示しうるほどの遺物は出土しなかった。

SH333（第66図） 長さ4.8m×幅4.4mの略方形の竪穴住居で、深さ10cmを測る。周溝は未確認であるが、住居のほぼ中央に1.1m×0.9m、深さ12cmの焼土の詰まった部分があり、炉跡と推定される。ほぼ炉跡に接する楕円形土坑、SK316は別遺構である。埋土から図示しうるほどの遺物は出土しなかった。

SK201（第69図） 長さ1.5m×幅0.8mの楕円形土坑であるが、残存の深さは17cmとかなり浅い。埋土から中期の土器（154）が出土した。

SK202（第73図） 東側に別土坑が重複するが、長さ2.5m×幅1.1mの楕円形土坑で、深さ42cmを測る。中期の土器が出土したが、図示しうるほどのものはなかった。

SK204（第70図） 長さ1.6m×幅1.1mの楕円

形土坑で、深さ26cmを測る。埋土全体に炭を多く含む。埋土から中期前半の壺（155）が出土した

SK205（第72図） 長さ3.6m×幅1.5m、深さ25cmを測る大型の長楕円形土坑で、埋土に炭を多く含む。中期前葉の土器が出土しているが小片であり、図示しうるものとしては土錘（156～157）がある。

SK211（第71図） 1.2m×1.1mの略円形の土坑で、深さ25cmを測る。埋土から中期の甕（159）が出土した。

SK220（第74図） 直径1.1mの円形土坑で、深さ15cmを測る。埋土より弥生土器が出土したが、図示しうるほどではなかった。

SK221（第76図） 長径1.1m、短径1mの円形土坑で、深さ31cmを測る。埋土に混じるかたちで中期初頭の甕（160）が出土した。

SK223（第77図） 他遺構との重複などもあってややかたちは崩れているが、長径1.4m×短径1.3mの円形土坑である。床面は浅い挿鉢状になっており、深さ15cmを測る。埋土から中期前葉の土器（161～162）が出土した。

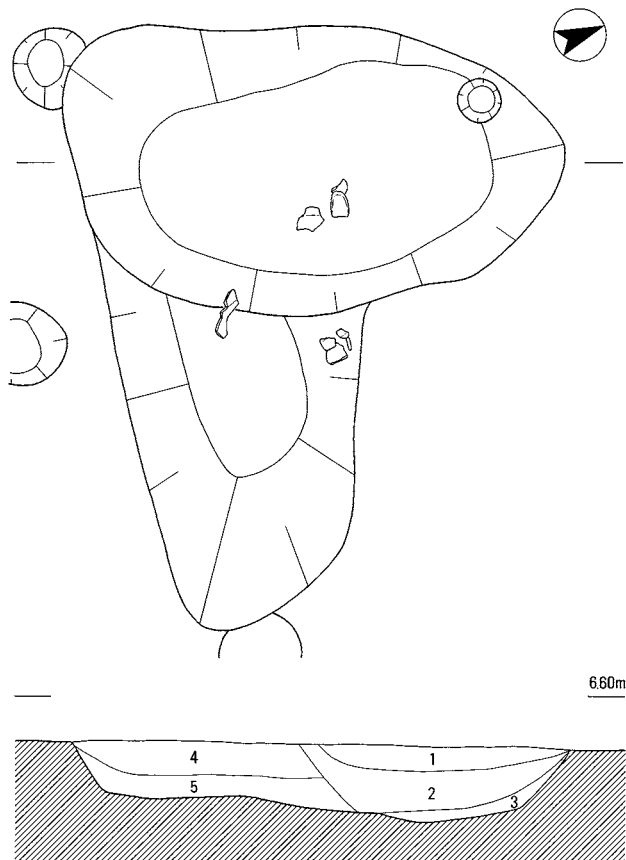
SK233（第80図） 長径1.5m×短径0.9mの楕円形土坑である。逆台形状の掘り込みを有し、深さ30cmを測る。埋土から中期初頭の甕（163～164）が出土している。

SK234（第75図） 長径1.8m×短径1.2mの楕円形土坑で、深さ33cmを測る。図示しうる遺物では軽石（165）がある程度だが、出土遺物から弥生時代の所産と思われる。

SK238（第83図） 長さ3.7m×幅2.5mの歪な楕円形土坑で、深さ23cmを測る。2段に掘り込まれており、下段は箱状の断面形を呈する。東南側に隣接するSK244とセットとみて方形周溝墓周溝の可能性も考えられたが、溝主軸が通有の方形周溝墓とはかなりずれていて無理があり、単独の土坑とみるのが妥当である。埋土からは中期前葉の土器（166～170）が出土している。

SK239（第79図） 長さ2m×幅1.5mの片端部が幅広となる土坑で、深さ50cmを測る。埋土から中期前葉の甕（171～172）が出土した。

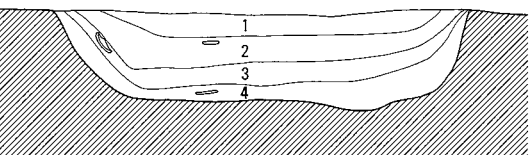
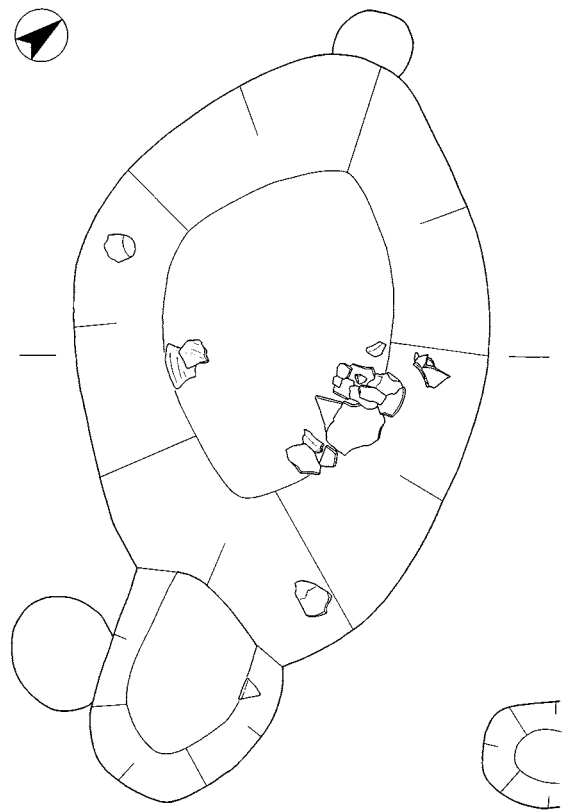
SK240（第87図） 長さ7m×幅1.5mの細長い溝状の土坑で、深さ43cmを測る。土坑は直線では



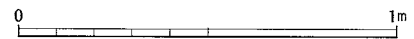
- | | | | |
|---|-------------------|---|-----------------|
| 1 | 10YR 3 / 2 黒褐色土 | 4 | 10YR 3 / 3 暗褐色土 |
| 2 | 10YR 2 / 2 黒褐色土 | 5 | 10YR 4 / 1 褐灰色土 |
| 3 | 10YR 4 / 2 灰黄褐色細砂 | | |



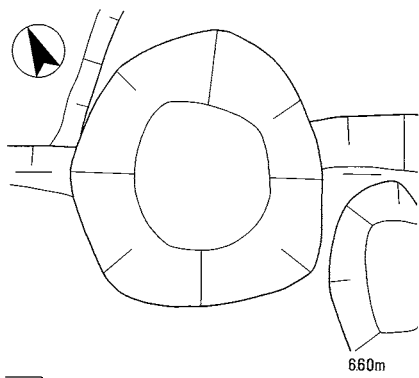
第69図 S K 201実測図 (1 : 20)



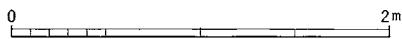
- | | |
|---|------------------------------|
| 1 | 10YR 4 / 3 にぶい黄褐色粘質土 (土器片含む) |
| 2 | 10YR 4 / 2 灰黄褐色土 |
| 3 | 10YR 3 / 1 黒褐色粘質土 (炭化物多く含む) |
| 4 | 10YR 4 / 1 褐灰色粘質土 |



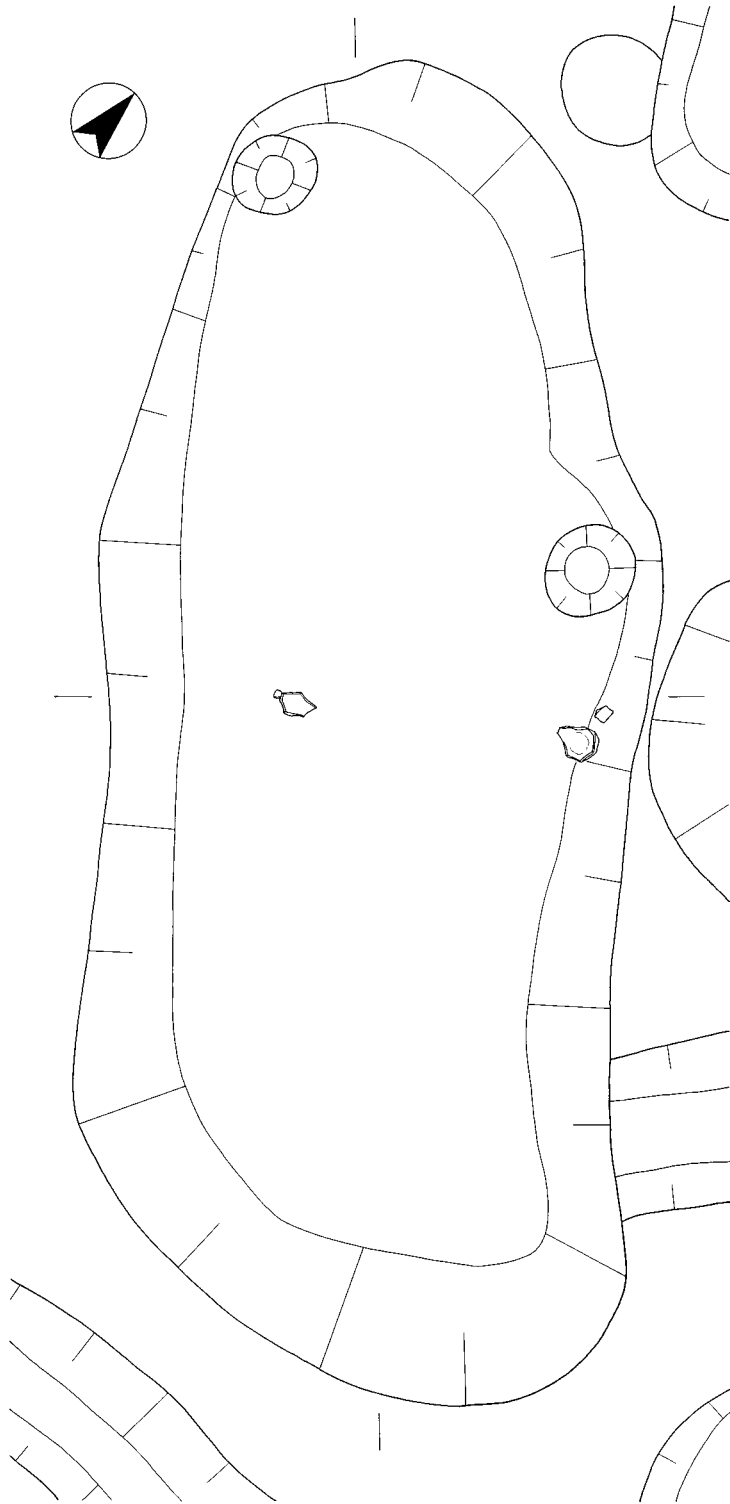
第70図 S K 204実測図 (1 : 20)



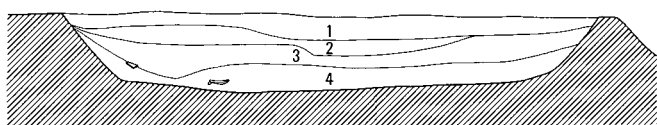
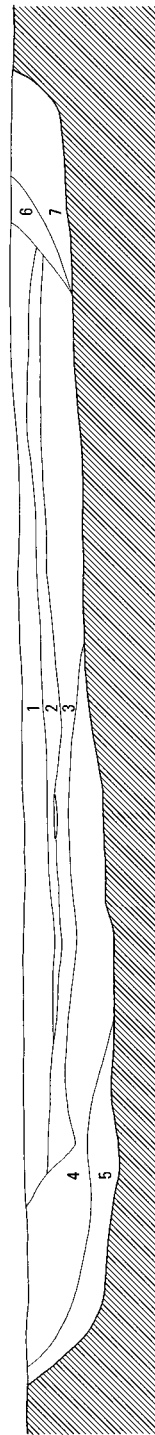
- | | |
|---|-----------------------------|
| 1 | 10YR 3 / 2 黒褐色粘質土 (炭化物含む) |
| 2 | 10YR 3 / 1 黒褐色粘質土 (炭化物多く含む) |
| 3 | 10YR 4 / 1 褐灰色粘質土 (炭化物含む) |
| 4 | 10YR 4 / 3 にぶい黄褐色粘質土 |



第71図 S K 211実測図 (1 : 40)



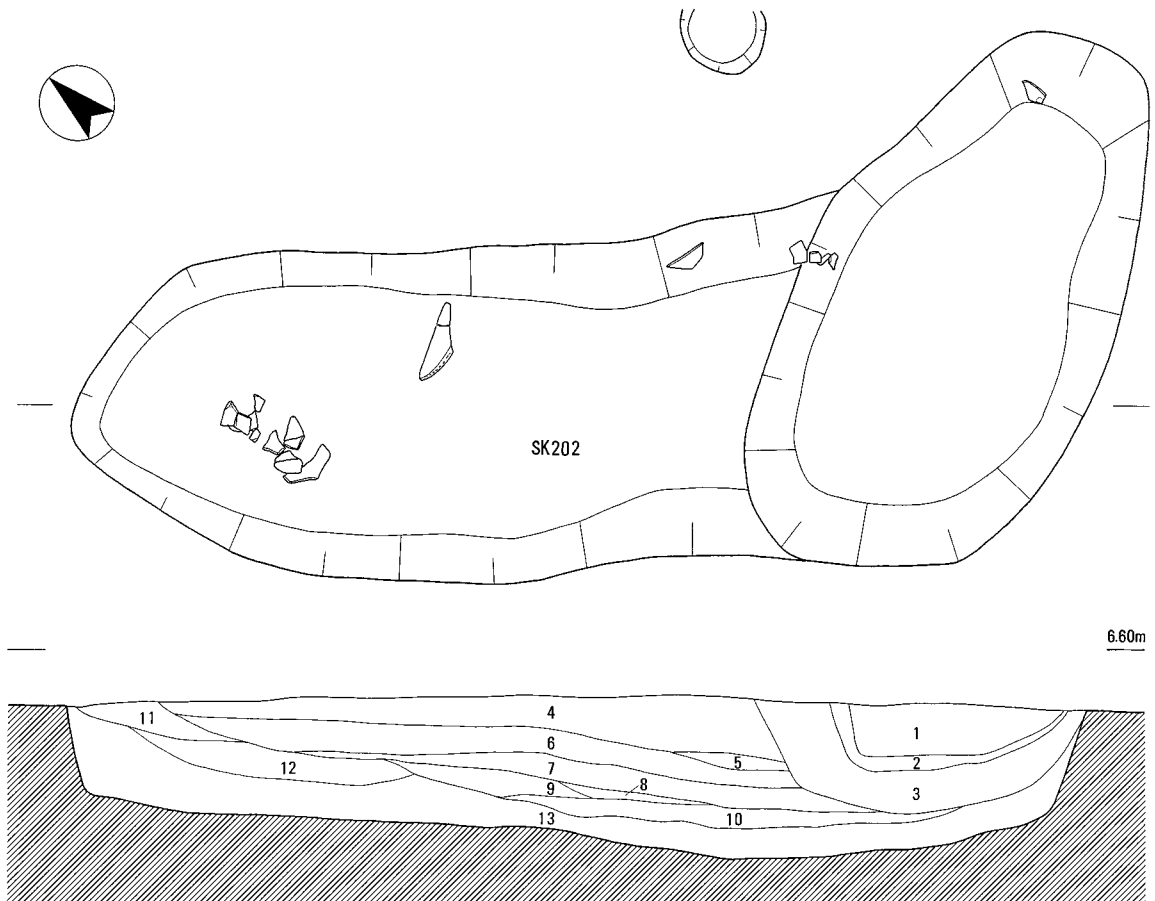
660m



- 1 10Y R 5 / 3 にぶい黄褐色土
- 2 10Y R 3 / 1 黒褐色土
- 3 10Y R 4 / 2 灰黄褐色土 (炭化物多く含む)
- 4 10Y R 4 / 2 灰黄褐色土、
10Y R 4 / 6 褐色土含む
- 5 10Y R 3 / 2 黒褐色土
- 6 10Y R 3 / 2 黒褐色土、
10Y R 4 / 6 褐色土含む
- 7 10Y R 2 / 3 黒褐色土



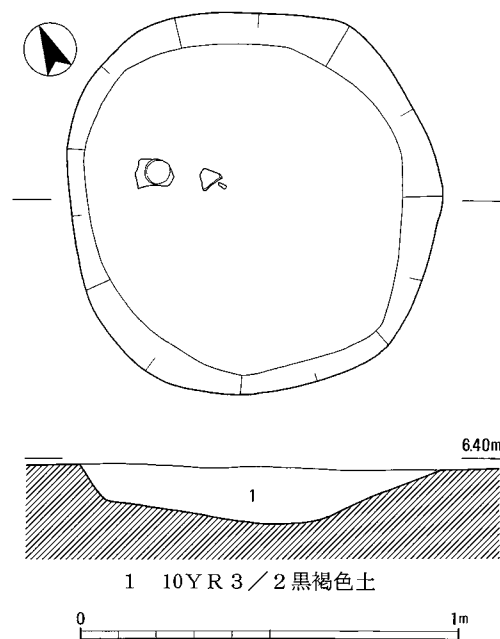
第72図 S K 205実測図 (1 : 20)



- | | | | |
|---|------------------------------|----|-----------------------------|
| 1 | 10YR 5 / 3 にぶい黄褐色土粘質土 | 8 | 10YR 5 / 1 褐灰色粘質土 (炭化物含む) |
| 2 | 10YR 4 / 1 褐灰色粘質土 | 9 | 10YR 4 / 1 灰褐色粘質土 (炭化物含む) |
| 3 | 10YR 2 / 3 黒褐色粘質土 (炭化物含む) | 10 | 10YR 2 / 2 黒褐色粘質土 (炭化物多く含む) |
| 4 | 10YR 4 / 2 灰黄褐色粘質土 | 11 | 10YR 5 / 3 にぶい黄褐色粘質土 |
| 5 | 10YR 5 / 3 にぶい黄褐色粘質土 | 12 | 10YR 4 / 2 灰黄褐色粘質土 |
| 6 | 10YR 4 / 3 にぶい黄褐色粘質土 (炭化物含む) | 13 | 2.5Y 6 / 2 灰黄色粘質土 |
| 7 | 10YR 5 / 2 灰黄褐色粘質土 (炭化物含む) | | |

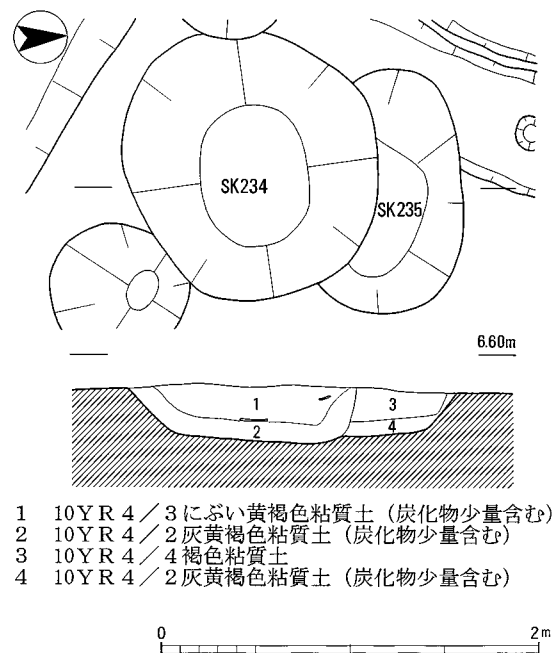
第73図 SK 202実測図 (1 : 20)

0 1m



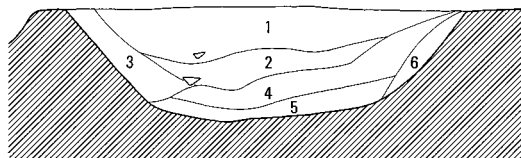
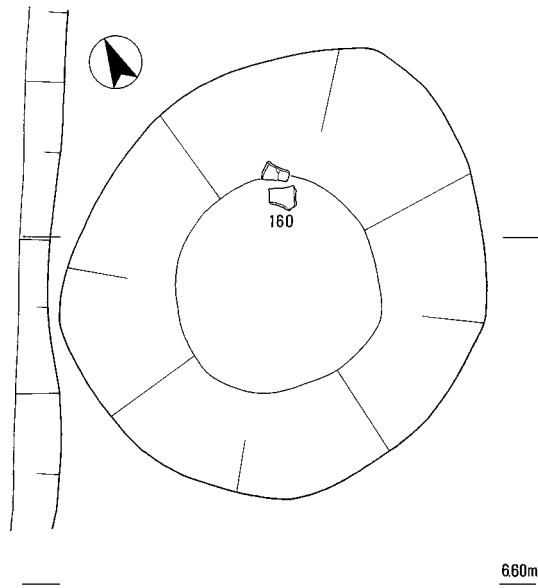
1 10YR 3 / 2 黒褐色土

第74図 SK 220実測図 (1 : 20)



- | | |
|---|--------------------------------|
| 1 | 10YR 4 / 3 にぶい黄褐色粘質土 (炭化物少量含む) |
| 2 | 10YR 4 / 2 灰黄褐色粘質土 (炭化物少量含む) |
| 3 | 10YR 4 / 4 褐色粘質土 |
| 4 | 10YR 4 / 2 灰黄褐色粘質土 (炭化物少量含む) |

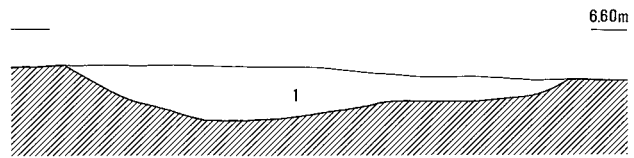
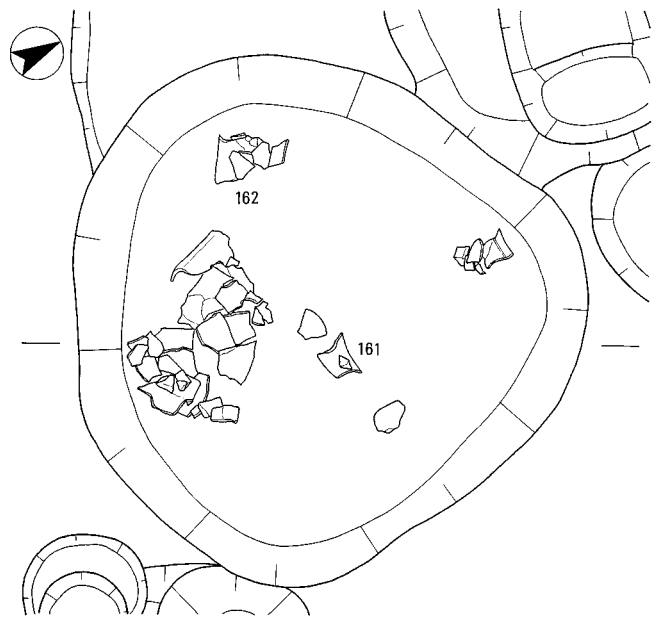
第75図 SK 234実測図 (1 : 40)



- 1 10Y R 3 / 2 黒褐色土
- 2 10Y R 2 / 2 黒褐色土
- 3 10Y R 2 / 2 黒褐色土
- 4 10Y R 3 / 2 黒褐色土 (炭化物含む)
- 5 10Y R 3 / 1 黒褐色土
- 6 10Y R 4 / 4 褐色土

0 1m

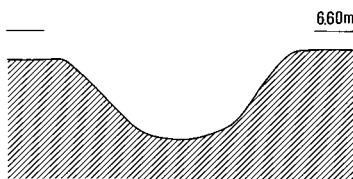
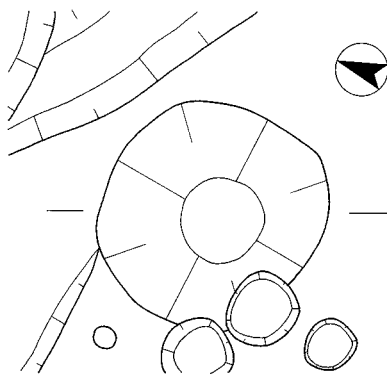
第76図 SK221実測図 (1:20)



- 1 10Y R 3 / 2 黒褐色土

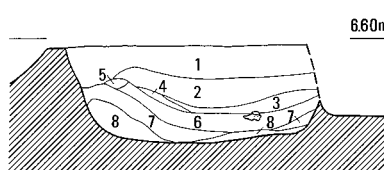
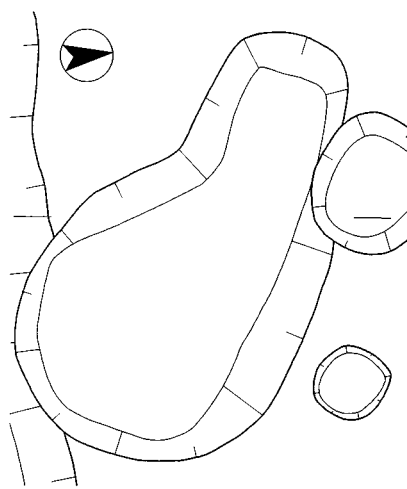
0 1m

第77図 SK223実測図 (1:20)



0 1m

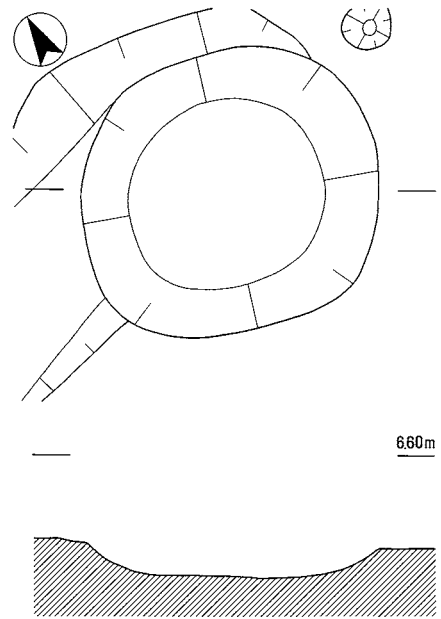
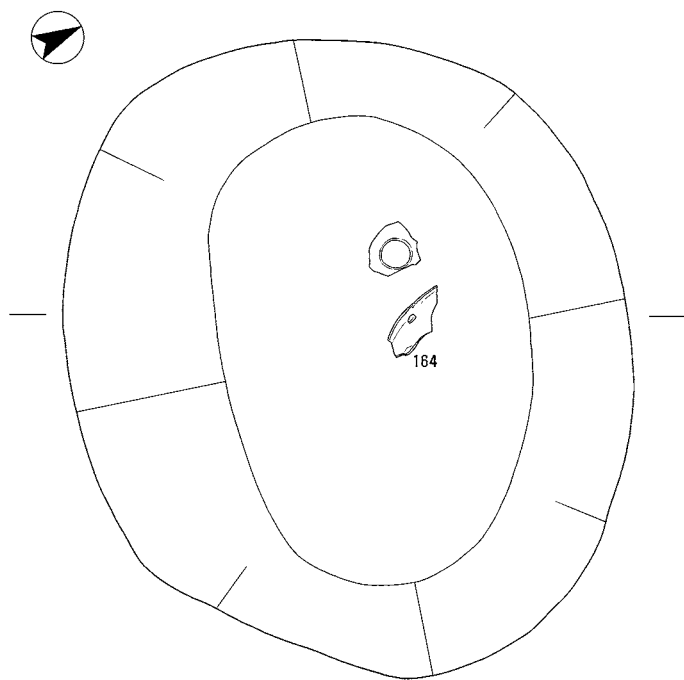
第78図 SK242実測図 (1:40)



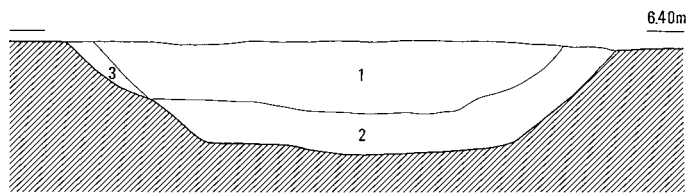
0 1m

- 1 10Y R 4 / 4 褐色粘質土
- 2 10Y R 3 / 3 暗褐色粘質土
- 3 10Y R 4 / 2 灰黄褐色粘質土 (炭化物多く含む)
- 4 10Y R 3 / 2 黒褐色粘質土 (炭化物多く含む)
- 5 10Y R 4 / 2 灰黄褐色粘質土 (炭化物多く含む)
- 6 10Y R 4 / 1 褐灰色粘質土 (炭化物少量含む)
- 7 10Y R 5 / 3 にぶい黄褐色粘質土
- 8 10Y R 5 / 2 灰黄褐色粘質土

第79図 SK239実測図 (1:40)

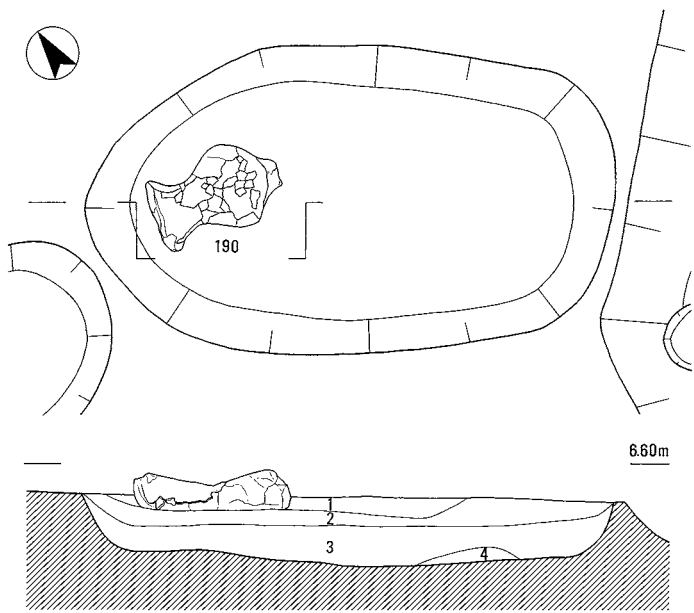


第82図 S K 275実測図 (1 : 20)



- 1 10Y R 4 / 3 にぶい黄褐色粘質土 (炭化物少量含む)
- 2 10Y R 4 / 2 灰黄褐色粘質土 (炭化物少量含む)
- 3 2.5Y 4 / 1 黄灰色粘質土

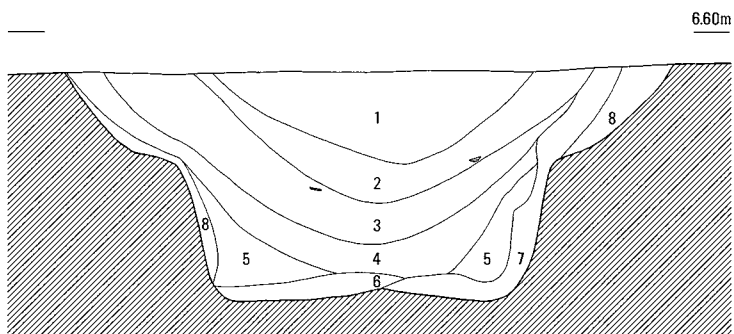
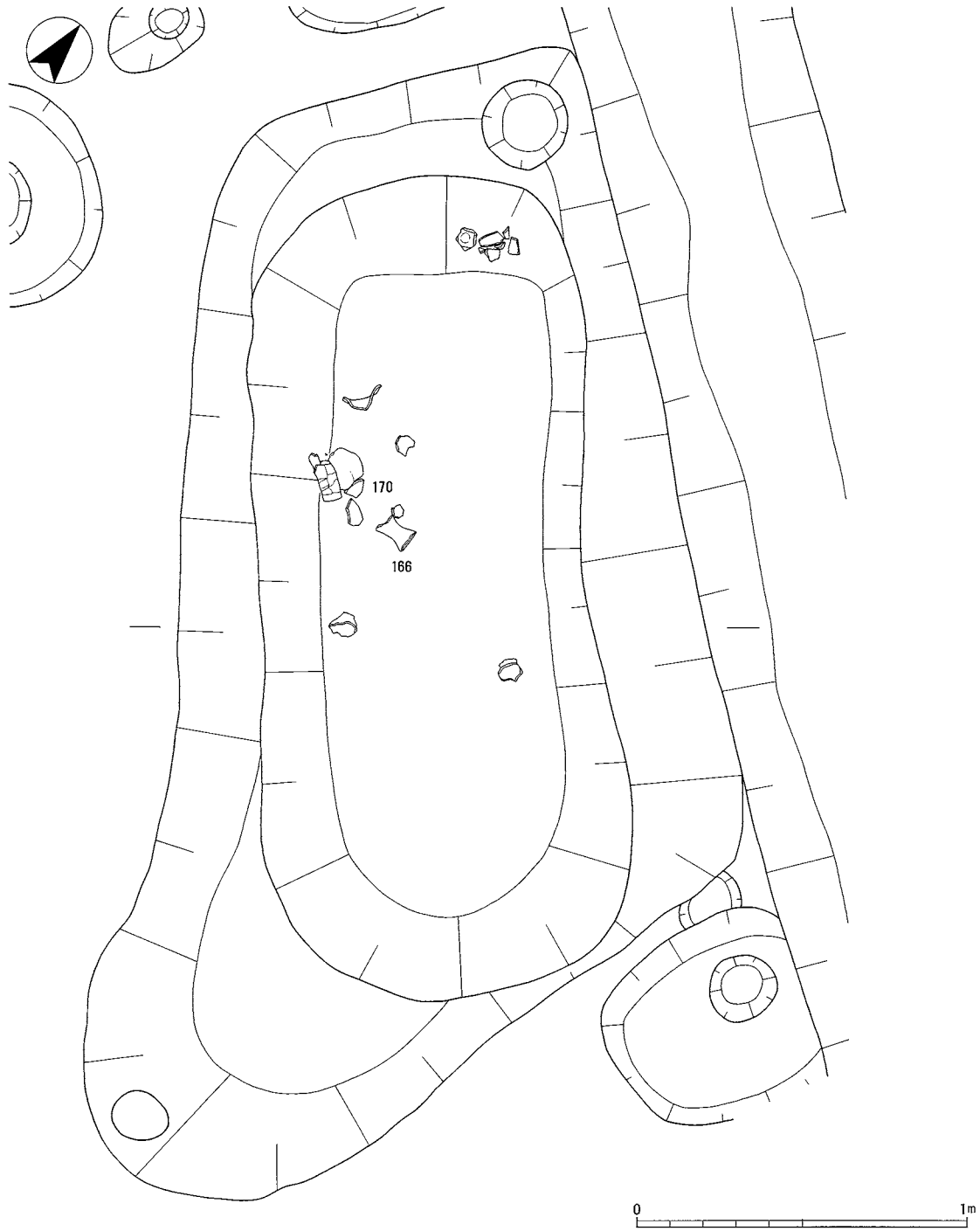
第80図 S K 233実測図 (1 : 20)



- 1 10Y R 3 / 3 暗褐色粘質土
- 2 10Y R 3 / 2 黒褐色粘質土 (炭化物少量含む)
- 3 10Y R 3 / 4 暗褐色粘質土
- 4 10Y R 4 / 3 にぶい黄褐色粘質土



第81図 S K 252実測図 (1 : 20)



- | | | |
|---|------------|-----------------|
| 1 | 10YR 3 / 3 | 暗褐色土 |
| 2 | 10YR 2 / 2 | 黒褐色土 |
| 3 | 10YR 3 / 2 | 黒褐色土 |
| 4 | 10YR 3 / 1 | 黒褐色土 |
| 5 | 10YR 5 / 6 | 黄褐色土含む |
| 6 | 10YR 3 / 1 | 黒褐色土 |
| 7 | 10YR 3 / 2 | 黒褐色土
(炭化物含む) |
| 8 | 10YR 4 / 3 | にぶい黄褐色細砂 |
| 8 | 10YR 5 / 4 | にぶい黄褐色細砂 |

第83図 S K 238実測図 (1 : 20)

なく、一方の端部が僅かに屈折気味の形状を呈するが、後述のSK277ほどではない。切り合い関係からSK285より新しい。埋土から中期前葉の甕(173)や石錐(174)が出土した。

SK242(第78図) 1.3m×1.2mの円形土坑で、深さ52cmを測る。掘り込みはしっかりしているが、明瞭な底面を形成せず、緩やかに丸みをもった底面を呈する。埋土から、中期前半の土器(175~176)や石鎌(177~178)が出土した。

SK244(第84図) 長さ6.7m以上×幅1.5m、深さ51cmを測る溝状の土坑である。調査時点では複数の土坑が集合したものと認識されていたが、埋土に差異がなく、溝状の土坑として認識できたことから単独の遺構として扱った。片側端部が調査区外へ逃げるため、溝の可能性も捨てきれないが、形状や規模がSK240や後述のSK309など細長い土坑と共通するため、土坑としている。掘り込みは明瞭で、逆台形の断面形を呈する。切り合い関係から、SK260よりも古い。埋土からは、いくつかのまとまりで中期前葉の土器(179~189)が出土している。

SK252(第81図) 長さ1.3m×幅0.7mの略長方形を呈する土坑で、深さ18cmを測る。土坑端部に寄った部分から、中期前葉の壺(190)が横たわった状態で出土している。床面からは15cmほど浮いた状態であるが、土坑長軸に沿ったかたちで埋置されており、土坑内に供献されたものと推定される。さすれば、本遺構の上面は、かなり流出ないしは削平を受けていると判断され、本来はもう少し深かったものと思われる。土層観察からは木棺痕跡などは確認できないことから、単独の土坑墓であった可能性がある。

SK253・SK254(第85図) 重複する2基の土坑で、切り合い関係からSK254のほうが新しい。SK253は、長さ2.5m×1.5m、深さ35cmを測る隅丸長方形を呈した土坑で、埋土から甕や壺の底部(191~192)や土錘(193)などが出土した。一方、SK254は、長さ1.5m×幅1.2m、深さ37cmを測る土坑で、図示しうるほどの土器は出土していない。

SK260(第86図) 前述のSK244に重複する土坑で、長さ1.6m×幅1.1mの楕円形を呈し、深さ52cmを測る。埋土から中期中葉の土器(194~195)が出土している。

SK275(第82図) 長径0.8m×短径0.6mの略円形の土坑で、深さ49cmを測る。挿鉢状の掘り込みを有し、床面はほぼ平らになる。埋土から、中期前葉の土器(196~197)が出土した。

SK277(第88図) 長さ4.8m×幅1.2m、深さ38cmを測る溝状の土坑であるが、土坑片側端部がL字状に短く屈折する。一見すると、方形周溝墓の周溝状を呈するが、方形周溝墓とした場合にこれとセットになって組み合う溝がなく、単独の土坑として理解した。埋土のかなり床面に近い部分から壺の体下半部が出土している。

SK284(第92図) 南側が調査区外となることや、SD243に重複されているため遺構の一部のみの検出である。長さ5m以上×幅1.7m、深さ17cmを測る。前述のSK240やSK277などと同じ溝状の土坑と推定される。埋土から中期の甕(200~202)やスクレイパー(203)が出土した。

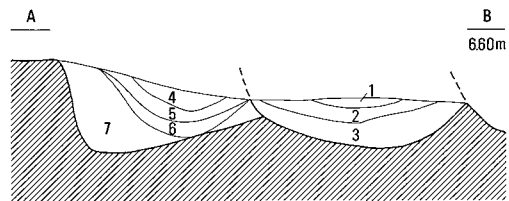
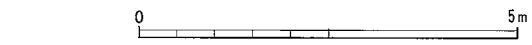
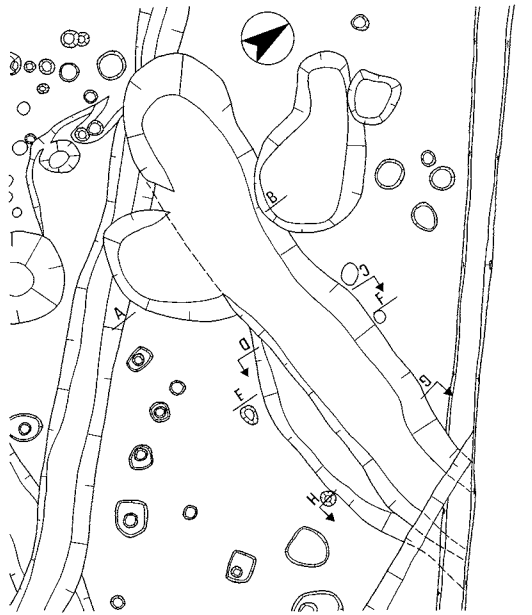
SK285(第87図) 南側をSK240に切られているため全体形は不明だが、長さ5.5m×幅1.5m、深さ65cmの溝状の土坑である。埋土から中期前葉の壺(204)が出土した。

SK288(第89図) 西側が調査区外へと延びるが、遺構の閉じ具合から遠からず遺構端部があると推定される。長さ7.5m以上×幅1.8mの長楕円形状で溝状を呈した土坑で、深さ46cmを測る。SH207を切って存在している。土坑埋土からは、上層から下層にかけて比較的まんべんなく中期前葉の土器(206~213)が出土している。

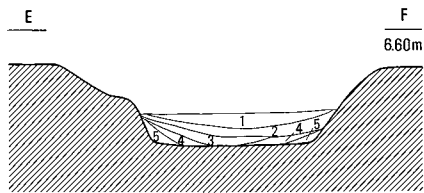
SK292(第94図) 0.8m×0.7mを測る円形土坑で、深さ8cmを測る。掘り込みは緩やかなレンズ状を呈しており、上部がかなり削平を受けて流失している可能性がある。埋土から中期前葉の甕(214)が出土した。

SK304(第95図) 長径0.8m×短径0.7mの隅丸方形土坑で、深さ15cmを測る。掘り込みは緩やかでレンズ状の断面形を呈する。埋土から中期前葉の土器(215~216)が出土している。

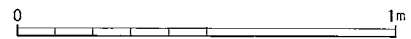
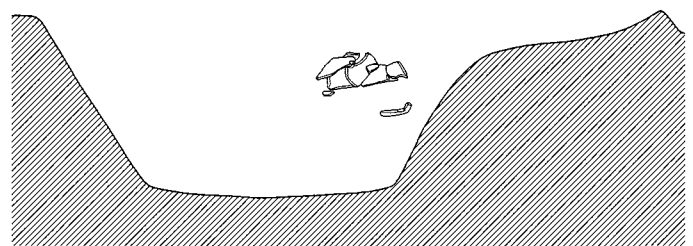
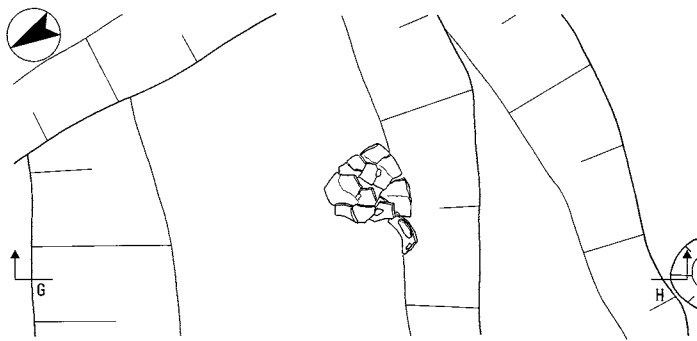
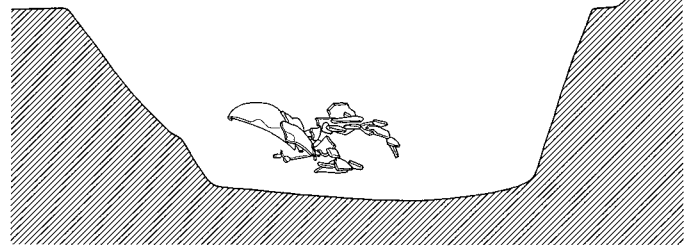
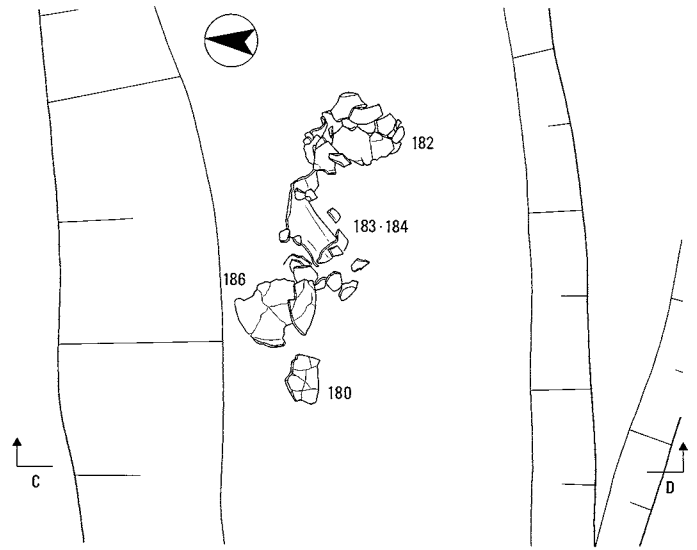
SK307(第97図) 南側をSK284と重複しているため(切り合い不明瞭)全体形は不明だが、2m×1.2m以上の規模を有し、円形ないしは隅丸方形の平面形プランをもつと推定される。深さは8cm



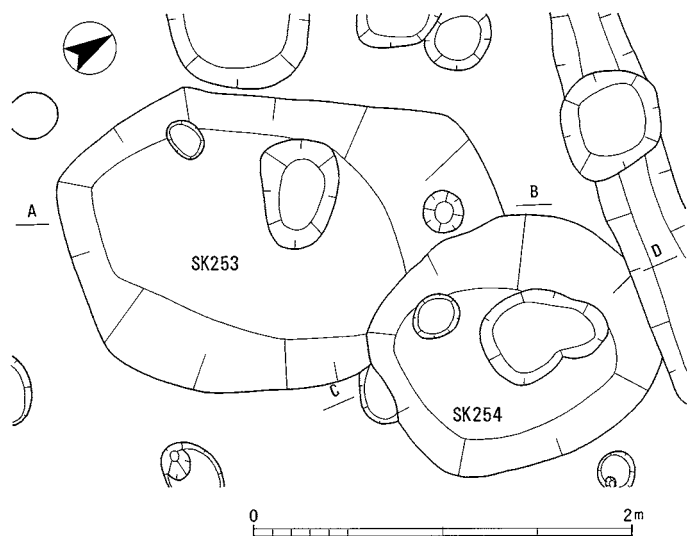
- 1 10Y R 4 / 4 褐色粘質土
- 2 10Y R 3 / 3 暗褐色粘質土 (土器片含む)
- 3 10Y R 2 / 2 黒褐色粘質土 (炭化物多く含む)
- 4 10Y R 3 / 3 暗褐色粘質土 (炭化物少量含む)
- 5 10Y R 4 / 2 灰黄褐色粘質土



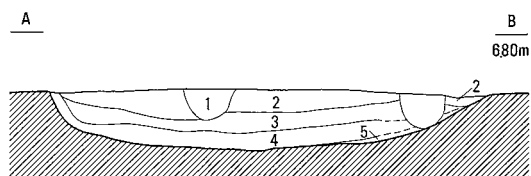
- 1 10Y R 4 / 3 にぶい黄褐色粘質土
- 2 10Y R 3 / 3 暗褐色粘質土 (炭化物少量含む)
- 3 10Y R 4 / 1 褐灰色粘質土 (炭化物少量含む、土器片含む)
- 4 10Y R 4 / 2 灰黄褐色粘質土 (炭化物少量含む、土器片含む)
- 5 10Y R 4 / 4 褐色粘質土
- 6 10Y R 4 / 1 褐灰色粘質土 (土器片含む)
- 7 10Y R 4 / 2 灰黄褐色粘質土



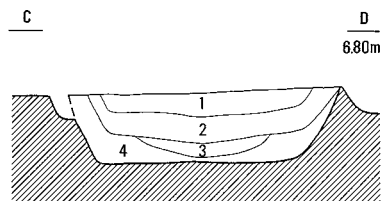
第84図 SK244実測図 (平面図 1 : 100、土層断面図 1 : 40、遺物出土状況図 1 : 20)



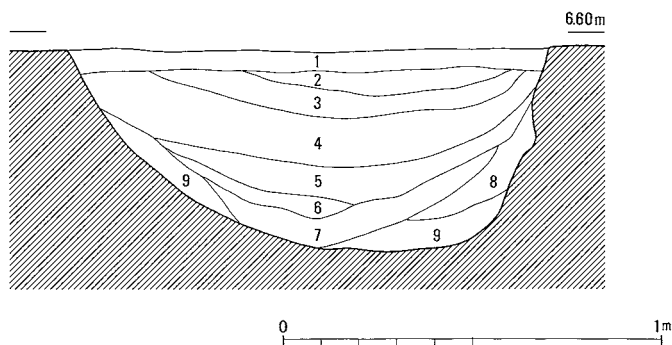
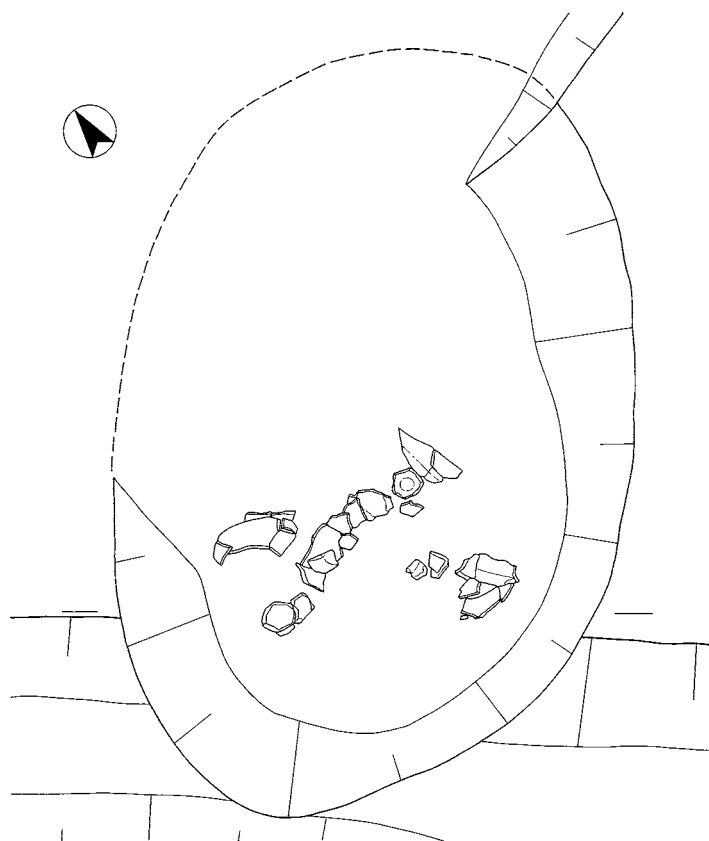
第85図 S K 253・254実測図 (1 : 40)



- 1 10Y R 3 / 2 黒褐色粘質土
(炭化物少量含む)
- 2 10Y R 4 / 2 灰黄褐色粘質土
(土器片含む)
- 3 10Y R 3 / 3 暗褐色粘質土
- 4 10Y R 4 / 1 褐灰色粘質土
- 5 10Y R 5 / 1 褐灰色粘質土

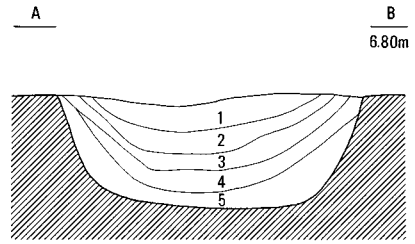
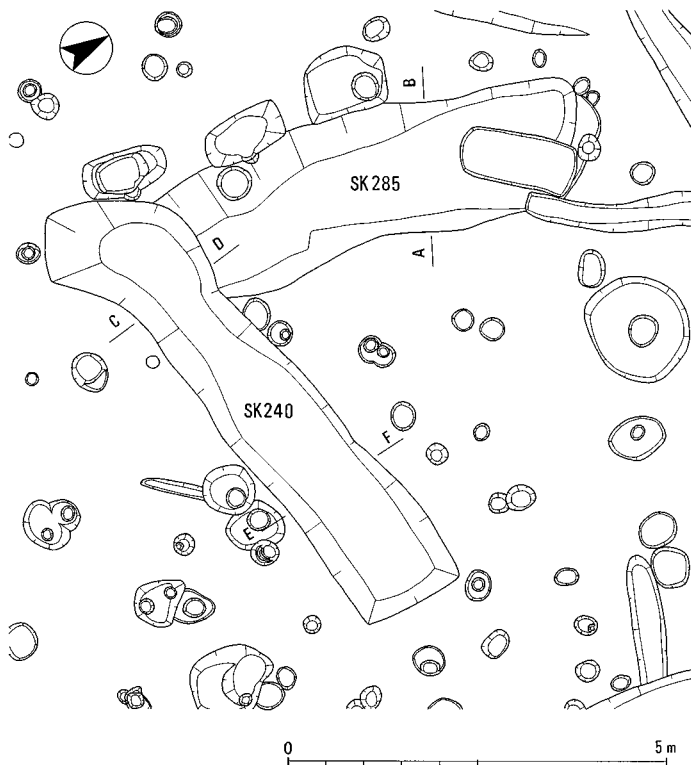


- 1 10Y R 4 / 2 灰黄褐色粘質土
(炭化物少量含む)
- 2 10Y R 3 / 2 黒褐色粘質土
(炭化物少量含む)
- 3 10Y R 3 / 1 黒褐色粘質土
- 4 10Y R 3 / 3 暗褐色粘質土

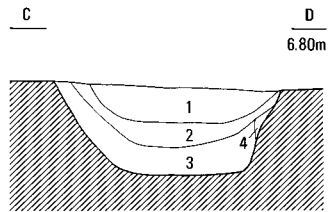


- 1 10Y R 4 / 4 褐色粘質土
- 2 10Y R 4 / 6 褐色粘質土
- 3 10Y R 3 / 3 暗褐色粘質土
(炭化物少量含む)
- 4 10Y R 4 / 3 にぶい黄褐色土
(炭化物少量含む)
- 5 10Y R 3 / 4 暗褐色粘質土
(炭化物少量含む)
- 6 10Y R 4 / 4 褐色粘質土
- 7 10Y R 3 / 2 黒褐色粘質土
(炭化物少量含む)
- 8 10Y R 3 / 4 暗褐色粘質土
- 9 10Y R 3 / 1 黒褐色粘質土

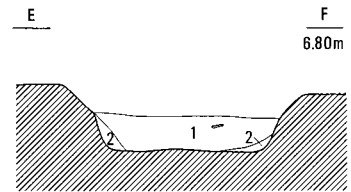
第86図 S K 260実測図 (1 : 20)



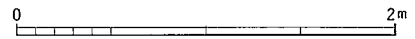
- 1 10Y R 3 / 2 黒褐色粘質土 (炭化物少量含む)
- 2 10Y R 4 / 1 褐灰色粘質土
- 3 10Y R 4 / 1 褐灰色粘質土 (炭化物少量含む)
- 4 2.5Y 4 / 1 黄灰色粘質土
- 5 10Y R 3 / 1 黒褐色粘質土 (炭化物少量含む)



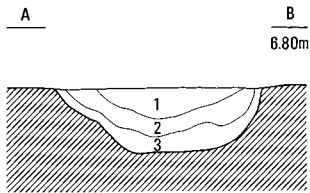
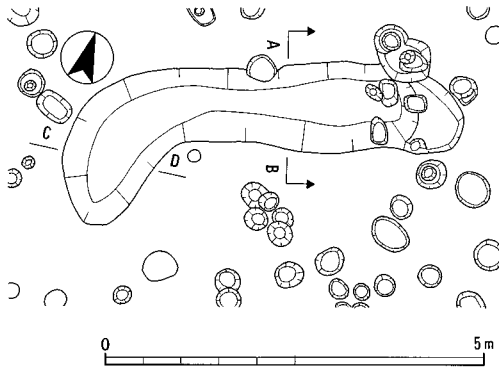
- 1 10Y R 4 / 4 褐色粘質土
- 2 10Y R 4 / 2 灰黄褐色粘質土
- 3 10Y R 4 / 1 褐灰色粘質土 (炭化物少量含む)
- 4 10Y R 5 / 3 にぶい黄褐色粘質土



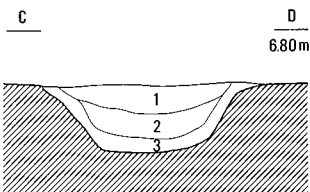
- 1 10Y R 4 / 2 灰黄褐色粘質土 (土器片含む)
- 2 2.5Y 5 / 2 暗灰黄色粘質土



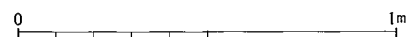
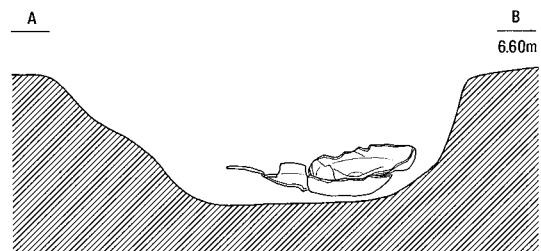
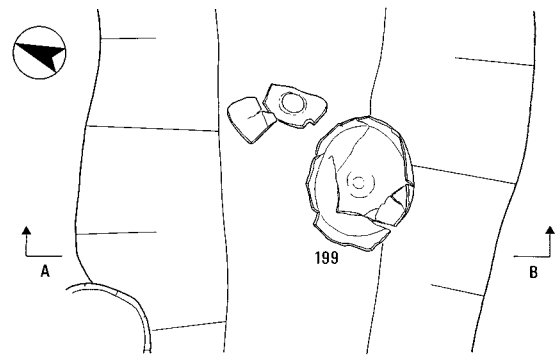
第87図 S K 240・285実測図 (平面図 1 : 100、土層断面図 1 : 40)



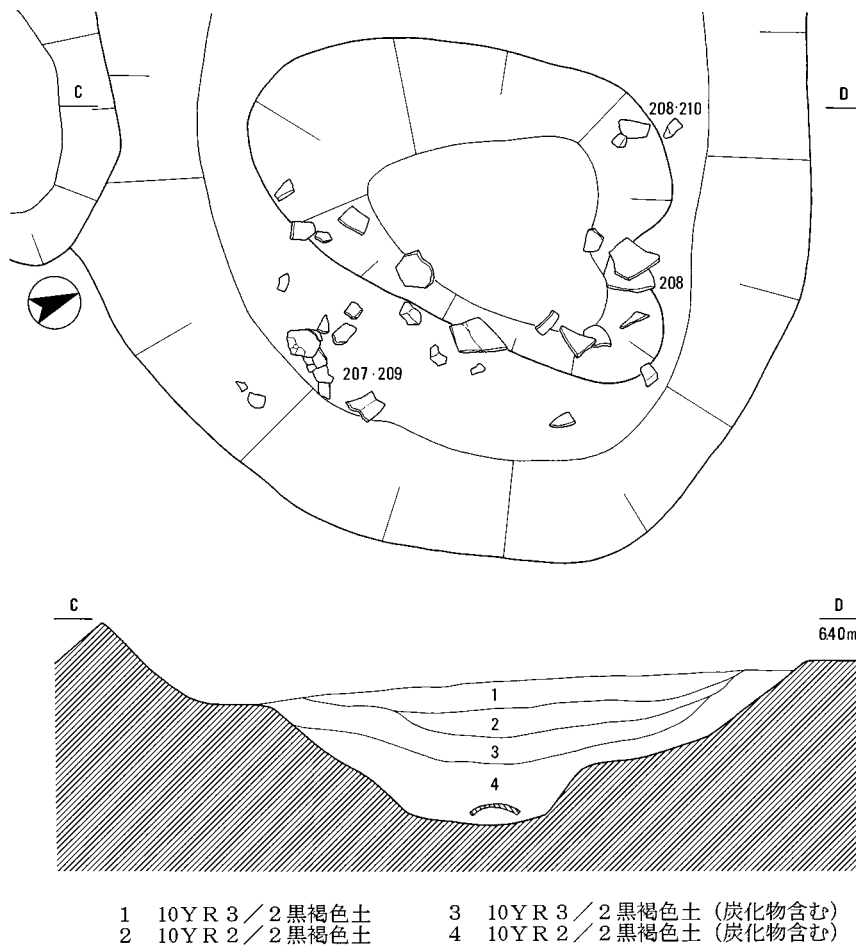
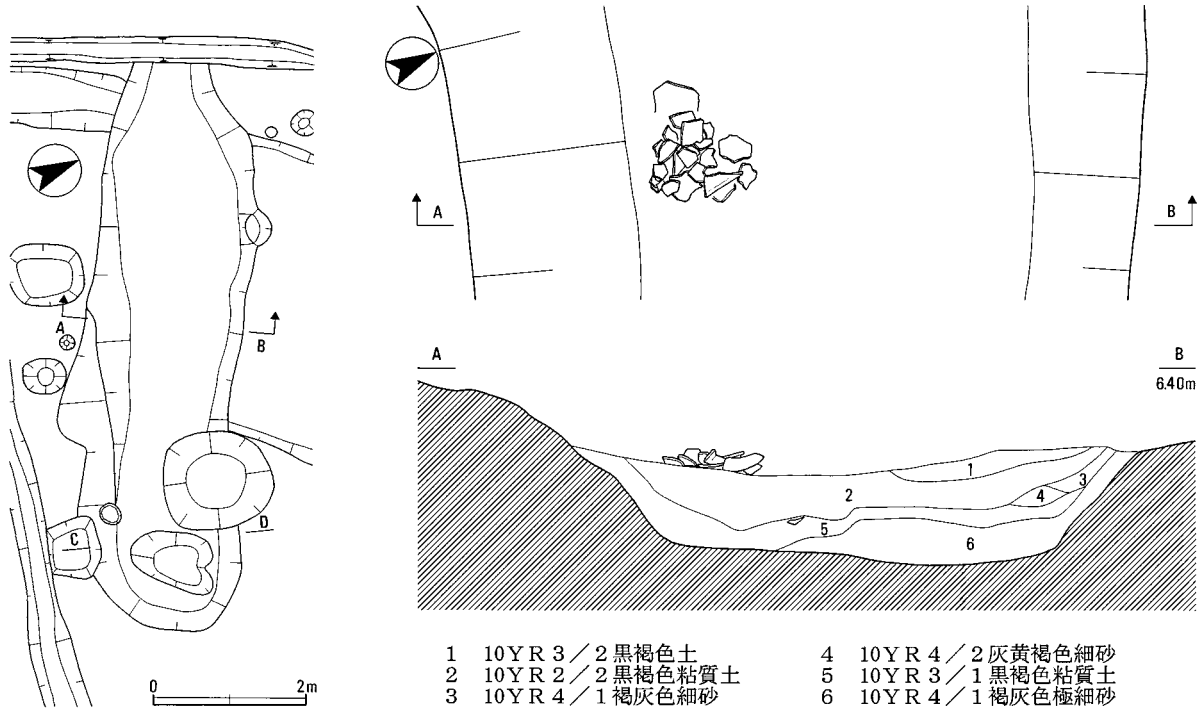
- 1 10Y R 4 / 2 灰黄褐色粘質土 (炭化物少量含む)
- 2 10Y R 3 / 2 黒褐色粘質土 (炭化物少量含む)
- 3 10Y R 4 / 2 灰黄褐色粘質土



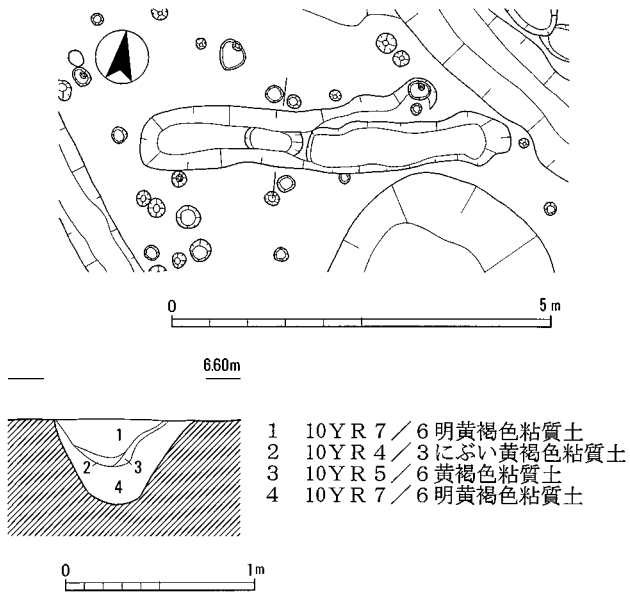
- 1 10Y R 4 / 2 灰黄褐色粘質土 (土器片含む)
- 2 10Y R 4 / 2 灰黄褐色粘質土
- 3 10Y R 4 / 2 灰黄褐色粘質土 (砂・土器片含む)



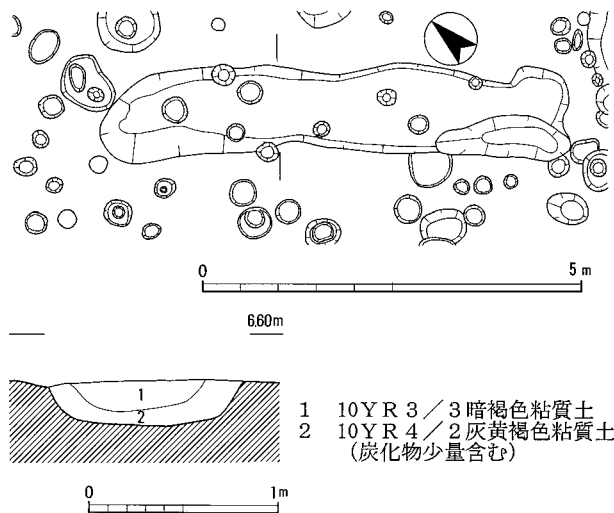
第88図 S K 277実測図 (平面図 1 : 100、土層断面図 1 : 40、遺物出土状況図 1 : 20)



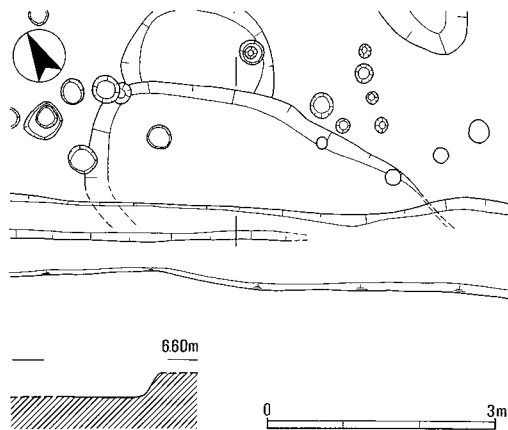
第89図 SK 288実測図 (平面図 1 : 100、遺物出土状況図 1 : 20)



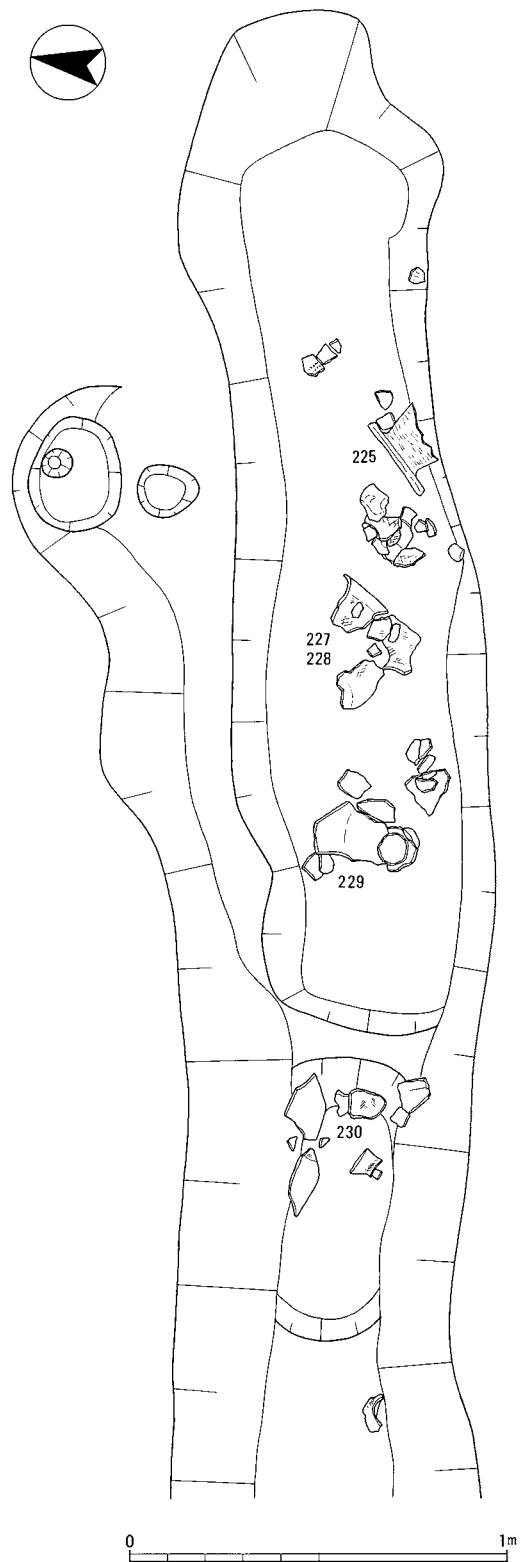
第90図 S K 312実測図 (平面図 1 : 100、土層断面図 1 : 40)



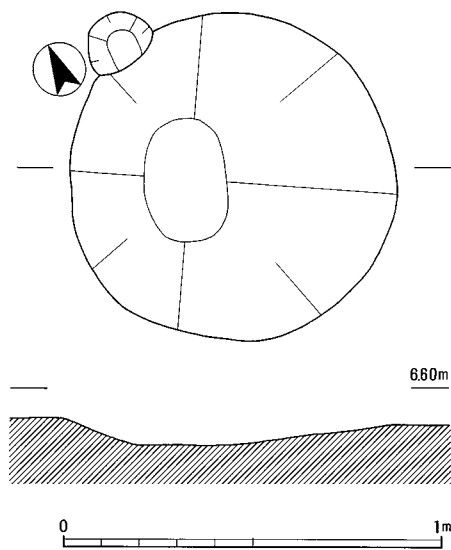
第91図 S K 309実測図 (平面図 1 : 100、土層断面図 1 : 40)



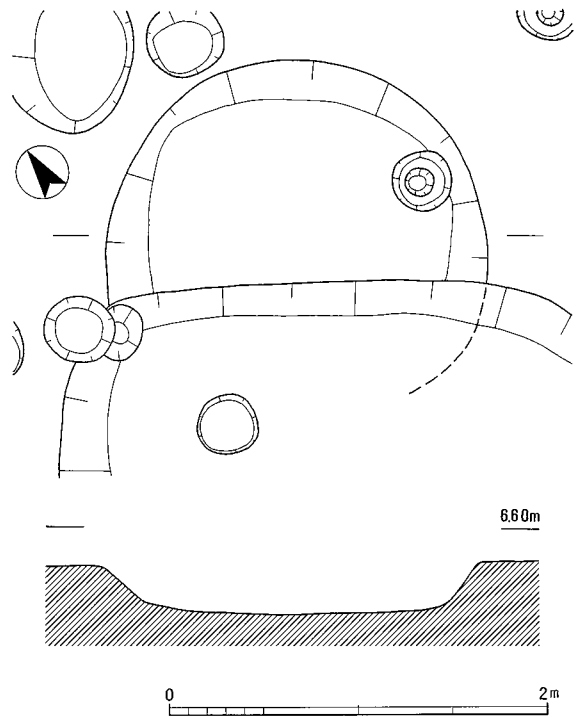
第92図 S K 284実測図 (1 : 100)



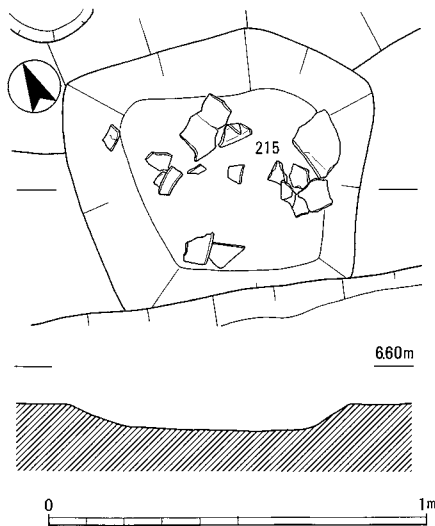
第93図 S K 312遺物出土状況図 (1 : 20)



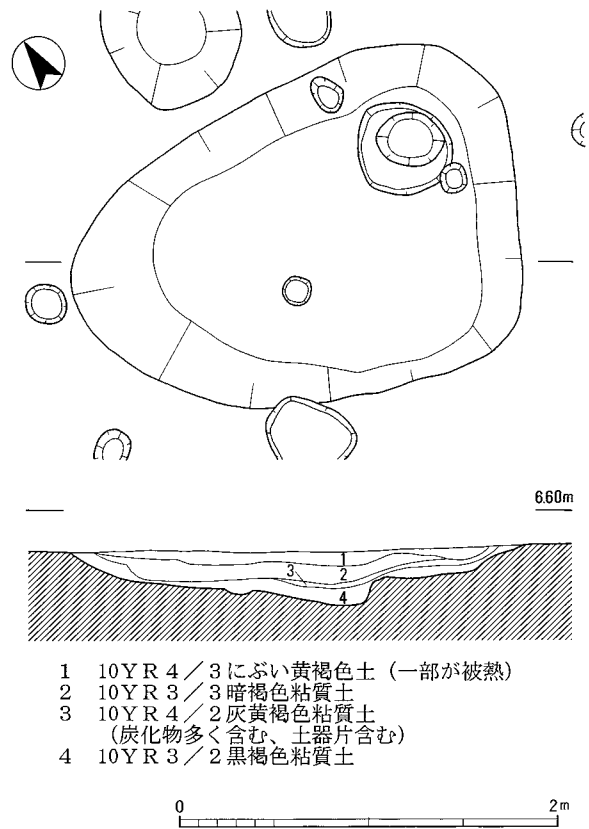
第94図 S K 292実測図 (1 : 20)



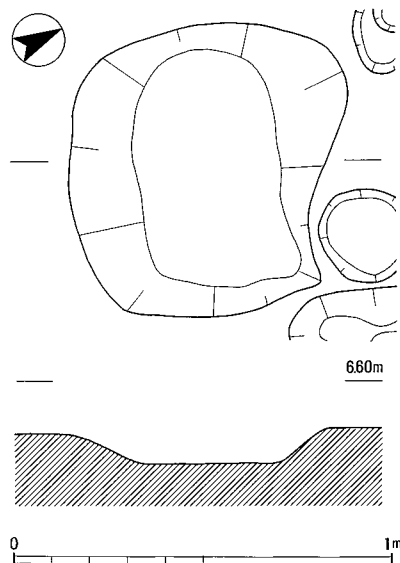
第97図 S K 307実測図 (1 : 40)



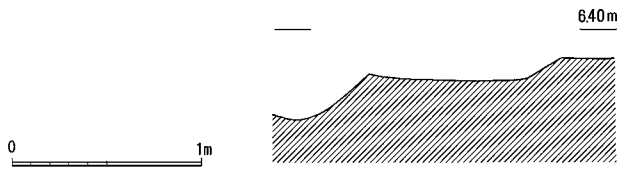
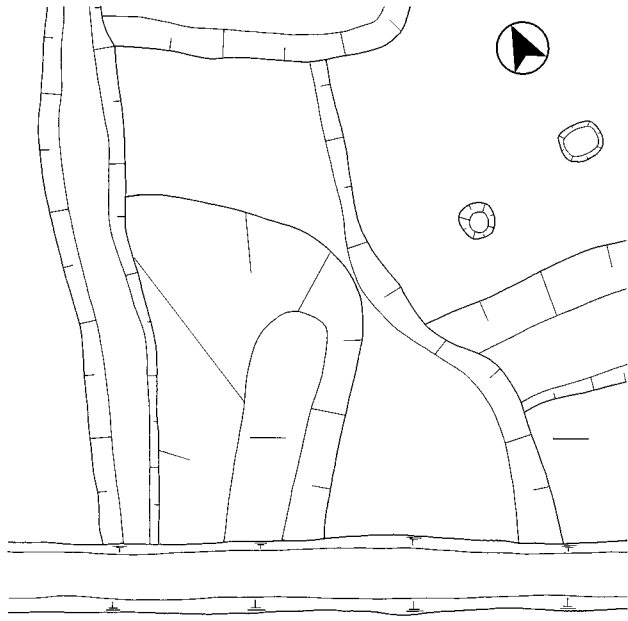
第95図 S K 304実測図 (1 : 20)



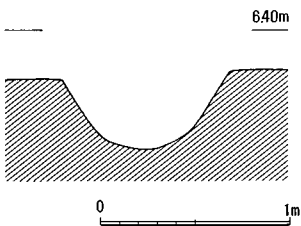
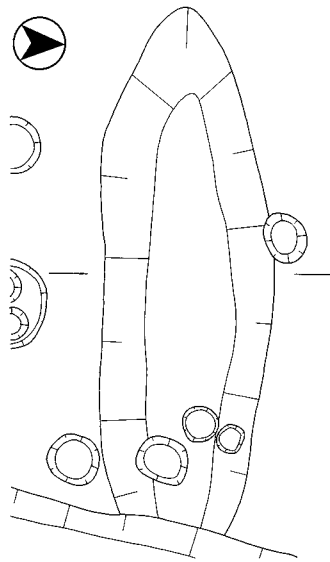
第98図 S K 314実測図 (1 : 40)



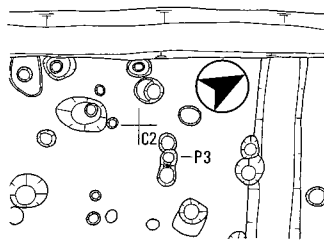
第96図 S K 310実測図 (1 : 20)



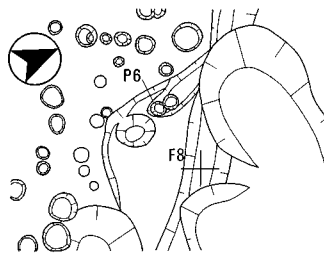
第99图 S D 313实测图 (1 : 40)



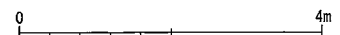
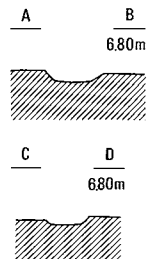
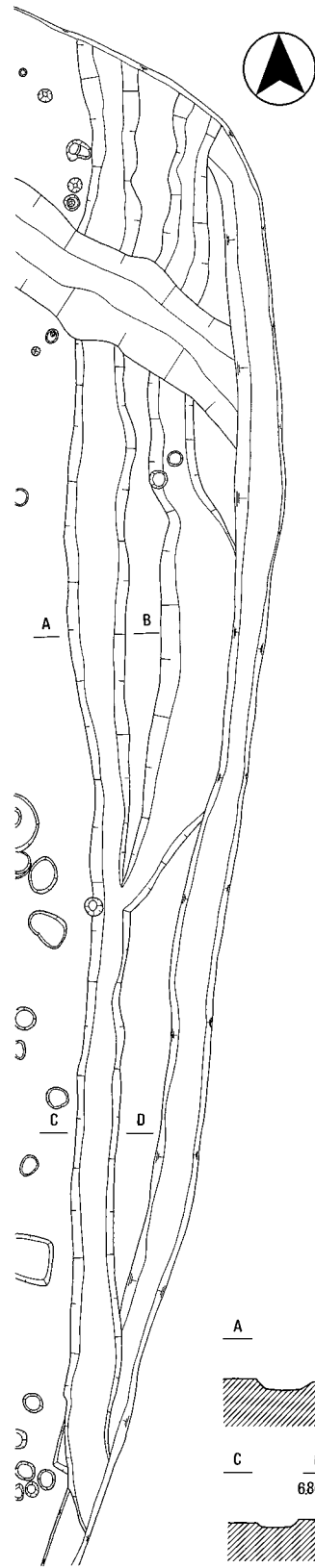
第100图 S K 326实测图 (1 : 40)



第101图 C 2 pit 3 位置图 (1 : 100)



第102图 F 8 pit 6 位置图 (1 : 100)



第103图 S D 317实测图 (1 : 100)

を測り、掘り込みは緩やかで、遺構の断面形は幅広の逆台形を呈する。埋土から中期前葉の甕（217）が出土したので弥生時代遺構に指定したが、手捏ね土器（259）も出土している。

SK309（第91図） 長さ6.6m×幅1.2mの直線的な溝状を呈した土坑で、深さ23cmを測る。埋土から中期前葉の土器（218～222）が出土した。

SK310（第96図） 長径0.75m×短径0.66mの隅丸方形を呈した土坑で、深さ9cmを測る。埋土から壺底部（224）や太型蛤刃石斧（223）が出土した。

SK312（第90図・第93図） 長さ4.9m×幅0.8mの溝状の土坑で、深さ48cmを測る。床面は凹凸があり、別遺構との重複の可能性も考慮されるが、平面プラン上は確認できず、単独の遺構として扱った。埋土から砥石（231）のほか、中期前葉の壺がままって出土している（225～230）。

SK314（第98図） 長径2.8m×短径2.1mの隅丸二等辺三角形形状の土坑で、深さ34cmを測る。鋭角となる頂点部分から中央に向けて徐々に深くなり、底辺寄りの部分から立ち上がる。3層の灰黄褐色粘質土は炭化物を多く含んでいるほか、最上面にも被熱された部分がある。形状的には、近傍の蔵田遺跡SF1と同様の土器焼成遺構のような特徴を示すが、床面自体は被熱の痕跡がなく、確定するには至らなかった。埋土から中期前半の土器（232～235）や石器類（236～237）が出土した。

SK316（第66図） SH333の炉脇で検出された土坑で、長さ1.7m×幅1.2mの楕円形土坑で、深さ36cmを測る。埋土から壺甕類の底部（238～240）が出土した。

SK326（第100図） 東側がSD273に切られているが、長さ2.7m以上×幅0.5mの長楕円形の土坑である。土坑断面は半球状を呈し、深さ42cmを測る。埋土から中期前葉の土器（241～243）や叩石（244）が出土した。

SD313（第99図） 重複が激しく、残存は悪いが、確認長4.2m×幅1.2m、深さ5cmの極めて浅い流路で、南側へ広がりつつ延びていく。遺構としての安定性は低い。埋土から中期前葉の土器（245）が出土している。

SD317（第103図） 調査区の東端部を南北に

横断する溝で、長さ20.5m以上×最大幅0.9m、深さ12cmを測る。溝の主軸は直線的で、埋土から壺の底部（246）が出土した。

SD340 調査区の南壁沿いにあることと、中世の溝SD243に重複されるため、ほとんど残っていないが、長さ5m程度の溝である。埋土から中期の壺と甕（247～248）が出土している。

ピットないしは小土坑 掘立柱建物としてはまともななかったが、埋土から弥生時代遺物が出土したピットがいくつかある。建物の柱穴以外にも、小さな土坑として存在したのも含まれると思われるが、ここではピットとして整理した。出土遺物から時期を判断しているが、後世のピットに弥生時代のもものが混入した可能性も排除できない。なお、遺構番号は、調査時のものをそのまま踏襲している。

b 古墳時代の遺構

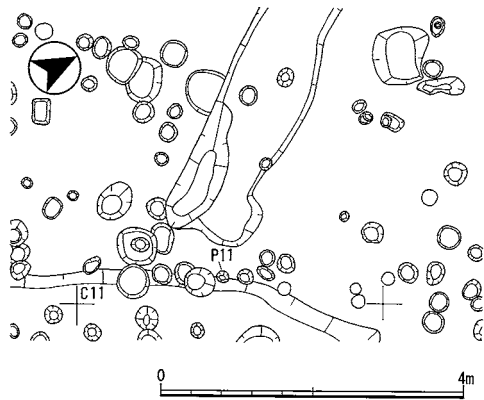
SK222（第109図） 直径1.2mの円形土坑である。浅い挿鉢状の掘り込みで、深さは10cmと浅いが、底面は一定でなく、南側に向かって徐々に深くなっていく特徴を示す。埋土から古墳時代前期の土器（255～257）が出土した。

SK241（第106図） ピットの重複が激しいが、長径1.2m×幅0.8mの楕円形土坑で、深さ9cmを測る。埋土から7世紀頃の須恵器杯身（258）が出土した。

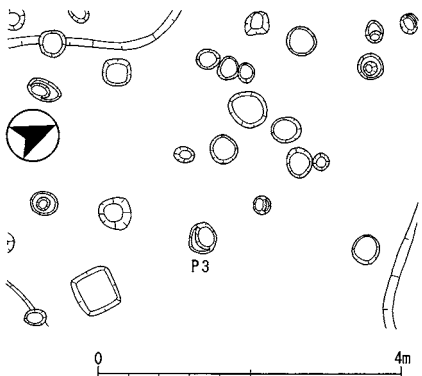
c 古代の遺構

奈良時代に属するとみられる遺構も含まれるが、遺構の中心は10～12世紀の平安時代にある。L区では「古代末～中世前半」に属する遺構が多いが、ここでは遺構から灰釉陶器や黒色土器などが出土する遺構を古代に指定した。なお、掘立柱建物については、出土遺物が僅少なことから時代を特定しきれないものが多いが、明らかに中世遺物が出土したSB352のみを中世の遺構として扱い、他は古代に指定した。

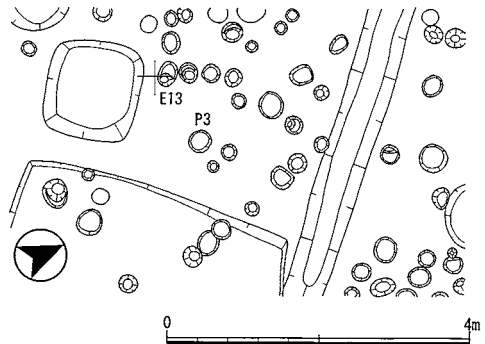
SB343（第110図） 桁行5間（10m）×梁行3間（5.4m）の東西棟の側柱建物で、柱間寸法は桁行2m等間、梁行1.8m等間である。建物方向はN10度Eで、後述のSB344とほぼ同じである。柱掘形は、ややばらつきはあるものの概ね長径1m×短径0.8m前後の隅丸長方形で、検出面から40～60cm程度の深さが残る。L区で検出された掘立柱建物のなかでは最大の規模で、他遺構との切り合いなどもあ



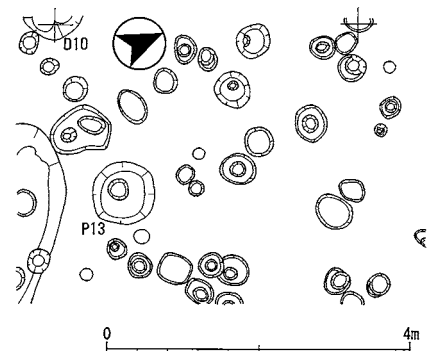
第104图 C 11pit11位置图 (1 : 100)



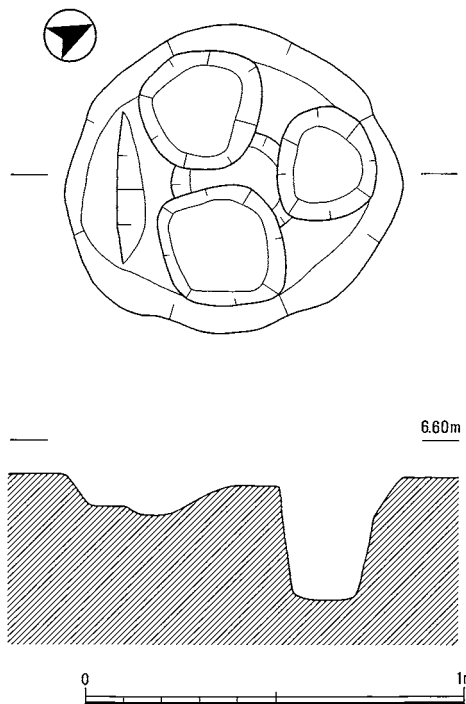
第105图 C 13pit 3 位置图 (1 : 100)



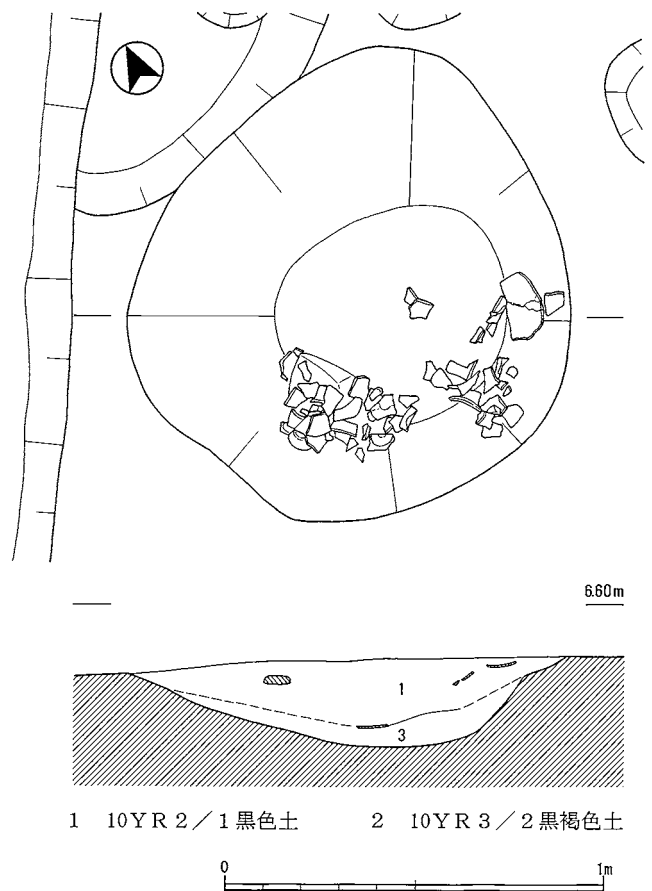
第107图 E 13pit 3 位置图 (1 : 100)



第108图 D 10pit13位置图 (1 : 100)



第106图 S K 241实测图 (1 : 20)



第109图 S K 222实测图 (1 : 20)

1 10YR 2 / 1 黑色土 2 10YR 3 / 2 黑褐色土

るものの、残りはいい。

S B344 (第111図) 桁行4間(8.4m)×梁行2間(4.5m)の東西棟の側柱建物で、建物方向はN8度Eである。柱間寸法は、桁行が2.1m等間、梁行が2.25m等間である。柱掘形は、不定形のものもあるが長径0.6～1mの隅丸方形もしくは隅丸長方形のものが多く、建物全体の規模、柱掘形の規模とも、隣接する掘立柱建物S B343よりやや小振りになっている。S B344を構成する柱穴のひとつから平安末の灰釉陶器の破片が出土しており、古代末に比定できよう。

S B345 (第112図) 調査区西端に所在するため全体規模は不明だが、東西2間(3.2m)以上×南北2間(2.4m)以上の総柱建物である。建物方向は、N19度Wである。柱間寸法は、東西は1.6m等間であるが、東西方向は不等間で、南から1.5m+0.9m+2mである。東西方向が桁行である可能性が高い。柱掘形は、長径60cm×短径50cmの隅丸方形のものが最大で、入側柱がやや小さい傾向をもつ。建物を構成する柱穴からは比較的まとまった出土遺物があり、概ね奈良時代に比定できるであろう。

S B346 (第115図) 桁行3間(4.8m)×梁行2間(推定3m)の南北棟の側柱建物で、建物方向はN2度Eである。柱間寸法は、桁行が南から1.5m+1.5m+1.8m、梁行は西側柱列が不明なため確定できないが1.5m等間と推定される。柱掘形は、長径50cmの円形ないしは楕円形である。時期比定に足る遺物に乏しいが、柱間寸法が30cmでの完数值になっているため、古代以降の所産であろう。

S B347 (第118図) 他遺構との重複も激しいが、2間(4.2m)×2間(4.2m)の正方形プランを呈した総柱建物で、柱間寸法はいずれも2.1m等間である。建物方向は、N7度Wで、ほぼ正方位を示す。柱掘形は、40～50cm程度の不整形で、四隅の柱掘形が若干大きい傾向にある。時期決定できる遺物に乏しいが、切り合い関係からS B344より新しい。

S B348 (第113図) 桁行3間(4.8m)×梁行2間(3.3m)を測る南北棟の側柱建物で、建物方位はN32度Eである。柱間寸法は、桁行1.6m等間、梁行1.65m等間である。柱掘形は、径50cm～80cmの円形もしくは隅丸方形であるが、柱痕のみしか掘られていない柱穴もある。切り合い関係からS B344よ

りも先行する。

S B349 (第116図) 桁行4間(7m)×梁行2間(4.6m)の南北棟の側柱建物で、建物方向はN26度Wである。柱間寸法は、桁行東側柱列が南から1.6m+1.6m+1.8m+2.0m、桁行西側柱列が南から2.4m+1.8m+1.8m+1.0m、梁行は1.3m等間で、桁行については柱間寸法が不等間なうえに、東列と西列で不揃いとなっている。柱掘形は、長径50～70cmの隅丸長方形もしくは隅丸方形を基本としている。

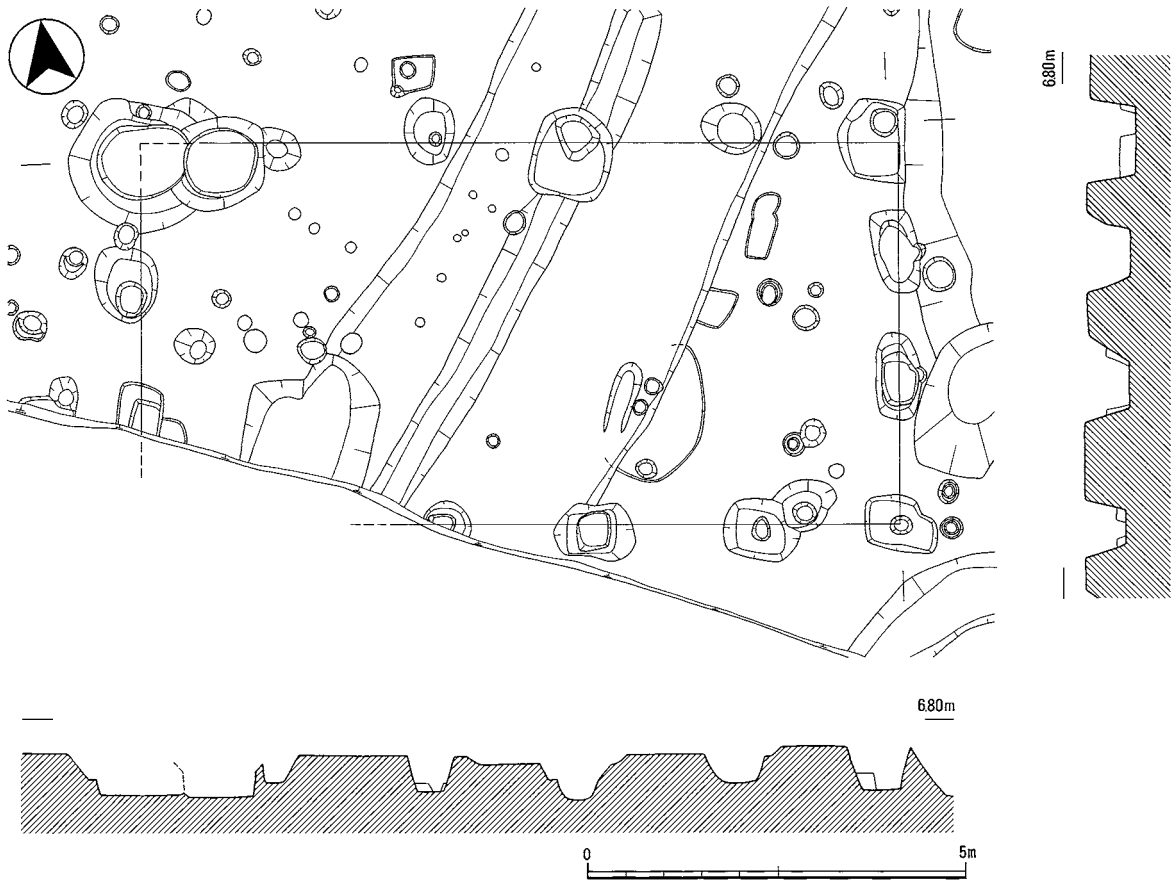
S B350 (第114図) 3間(4.3m)×3間(4.2m)の略正方形プランの掘立柱建物で、建物方向はN37度Eである。柱間寸法は、不等間である。束柱は検出されなかったが、建物プランとしては総柱建物であった可能性を示しており、束柱は削平もしくは流出によって検出されなかっただけかもしれない。もしそうであるなら、S B350の束柱は、側柱に比べて深さ・深さともに小振りなものであったと推定される。

S E258 (第135図) 長径2.2m、短径2mの円形土坑で、深さ57cmを測る。床は丸底で、平坦である。木材等の残存はないが、深さは浅いものの湧水があり、素掘りの溜井戸として機能していた可能性がある。埋土から土師器杯(405)が出土した。

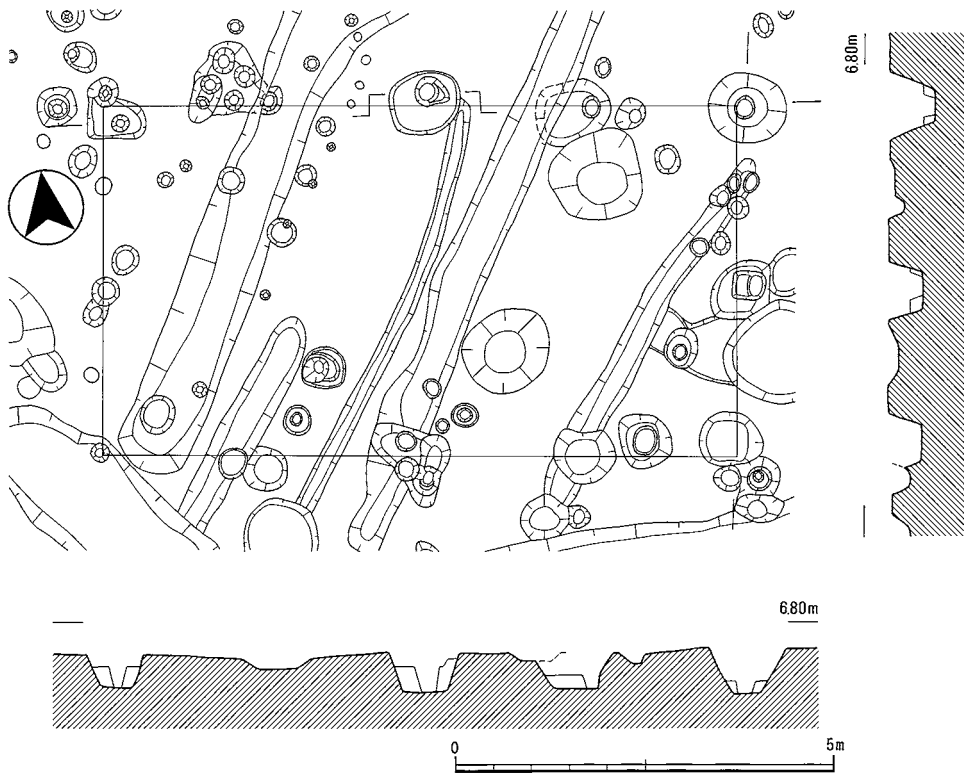
S K270 (第119図) 長径1.6m以上×短径1.2mの楕円形土坑である。検出はできたものの、残りが非常に悪く、実測図作成段階で詳細な平面形が把握しきれなかった。埋土から土師器甕(359)が出土している。

S E324 (第126図) 南側が調査区外となるため遺構北半しか掘削できなかったが、前述のS E327を切って存在する掘形直径3.4mの円形井戸で、深さは168cmを測る。井戸の構造は、湧水点まで挿鉢状に掘り抜いてそこに曲物を設置し、井戸側は方形に縦板を組んで横方向の棧材で留める構造で、基本的にはJ区のS E106と同構造になるものであろう。ただし、調査区壁際で確認されたため、出土図面は作成されなかった。なお、井戸本体とは無関係の木材と思われるものも入っており、井戸の廃棄時に投棄されたものも多かったと推定される。埋土から須恵器杯(373)や灰釉陶器碗(374)などが出土している。374は10世紀前半頃の所産であろう。

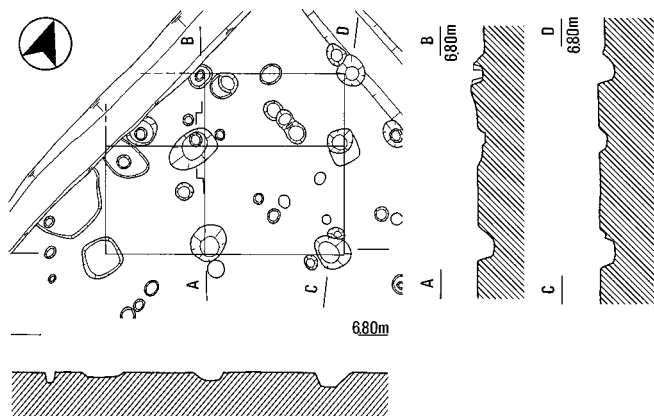
S E327 (第126図) 調査区南壁に所在するた



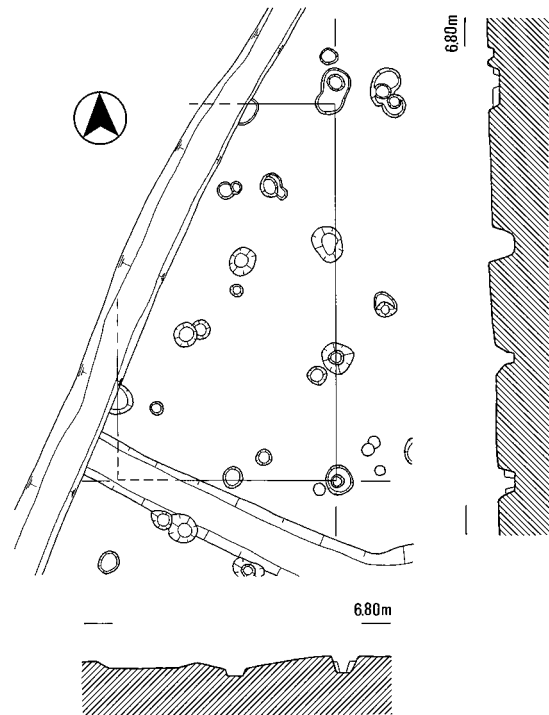
第110図 S B 343実測図 (1 : 100)



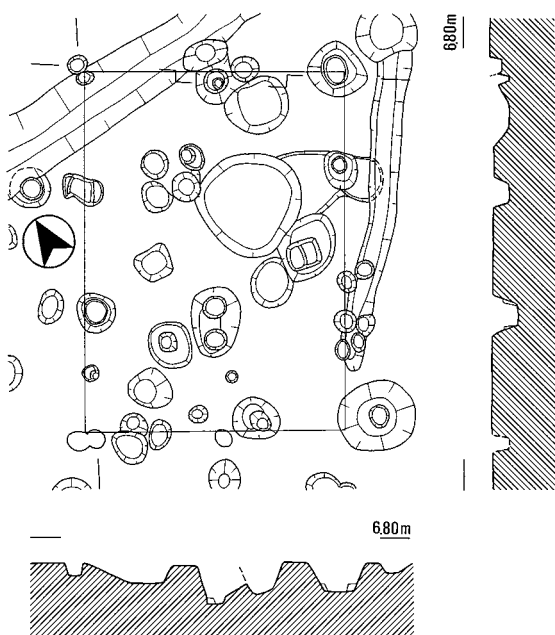
第111図 S B 344実測図 (1 : 100)



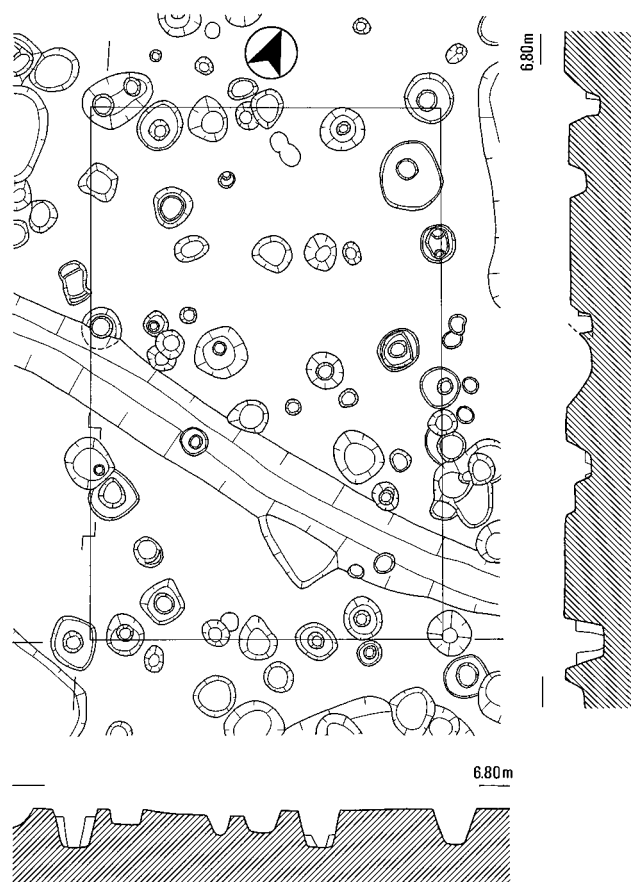
第112図 S B 345実測図 (1 : 100)



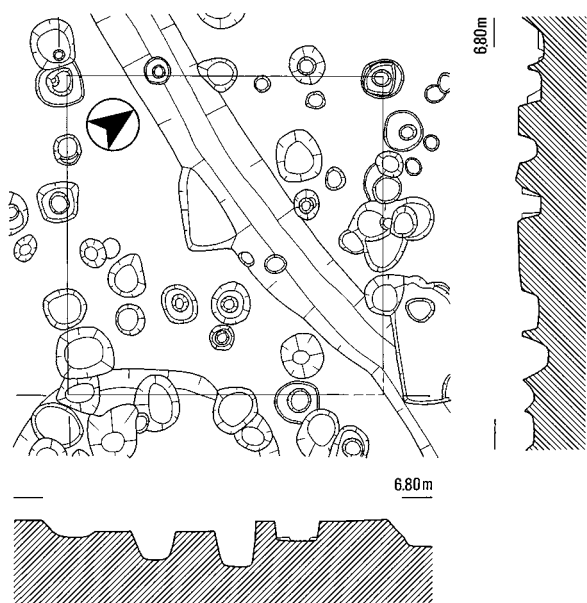
第115図 S B 346実測図 (1 : 100)



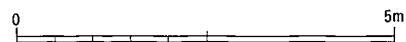
第113図 S B 348実測図 (1 : 100)

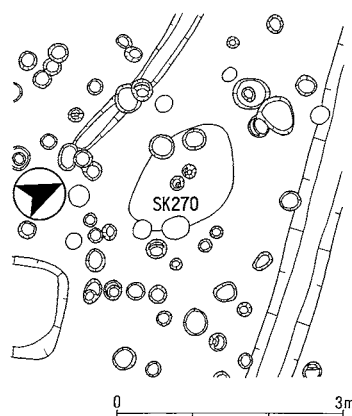
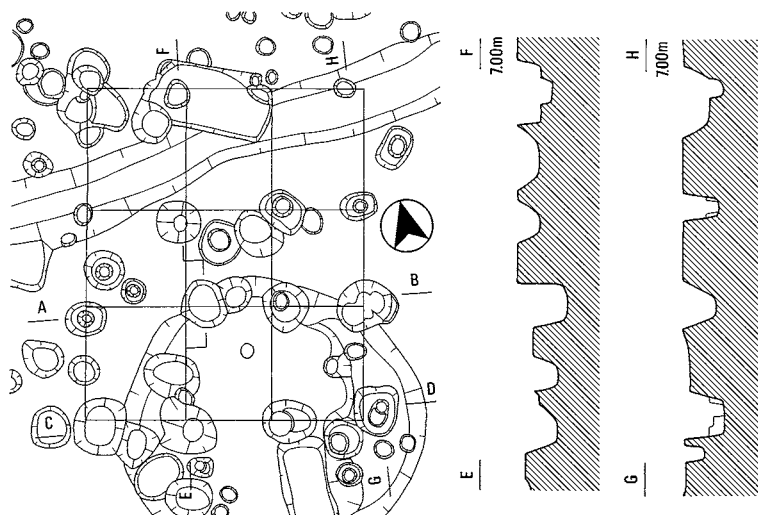


第116図 S B 349実測図 (1 : 100)

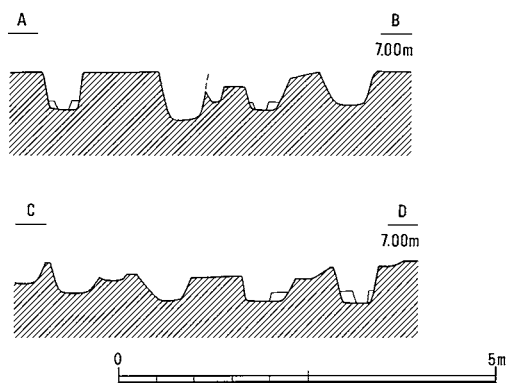


第114図 S B 350実測図 (1 : 100)

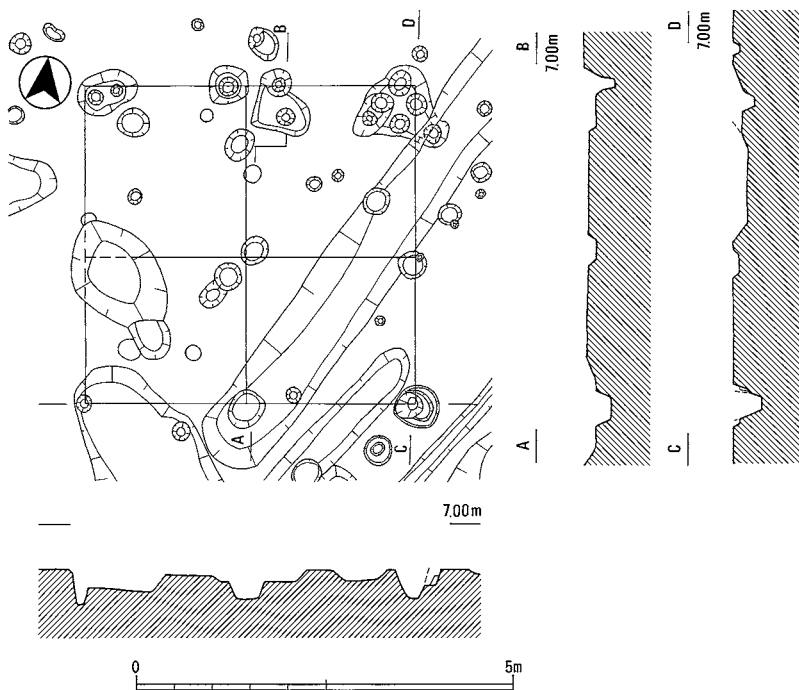




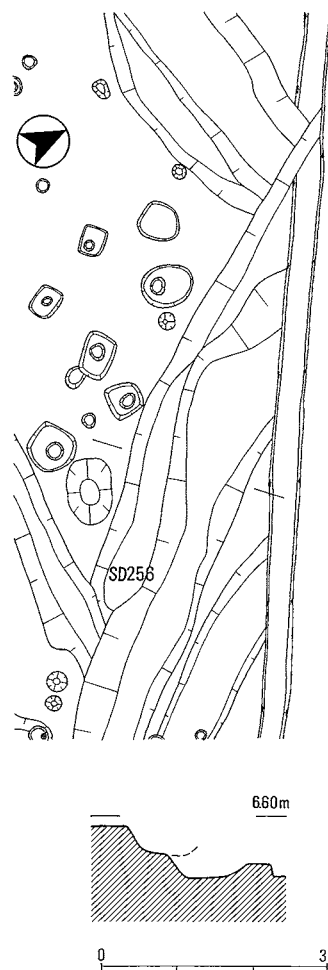
第119図 S K 270実測図 (1 : 100)



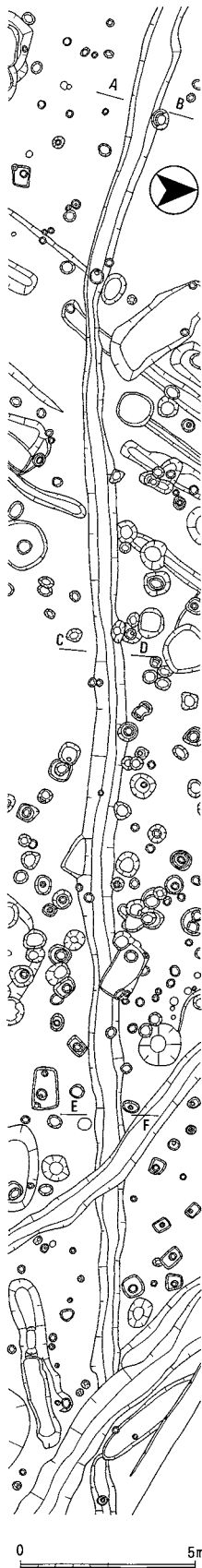
第117図 S B 351実測図 (1 : 100)



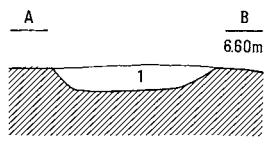
第118図 S B 347実測図 (1 : 100)



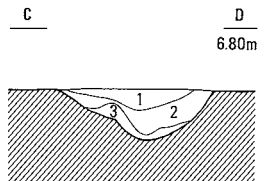
第120図 S D 256実測図 (1 : 100)



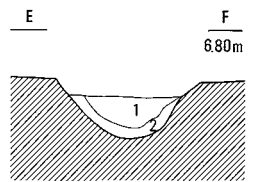
第121図 S D 208実測図
(平面図 1 : 200、土層断面図 1 : 40)



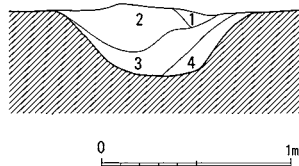
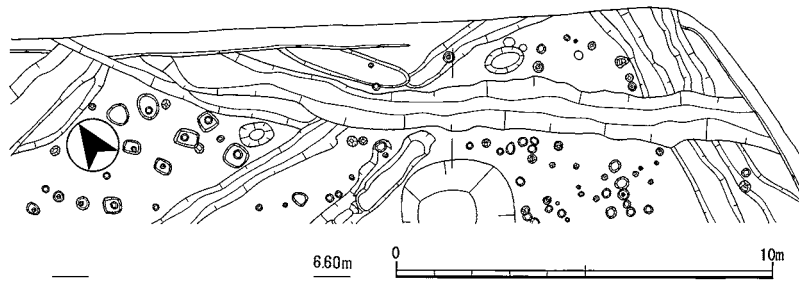
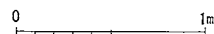
1 10Y R 3 / 2 黒褐色土



1 10Y R 3 / 2 黒褐色土
2 10Y R 3 / 2 黒褐色土
・10Y R 4 / 6 褐色土
3 10Y R 4 / 3
にぶい黄褐色粘質細砂土

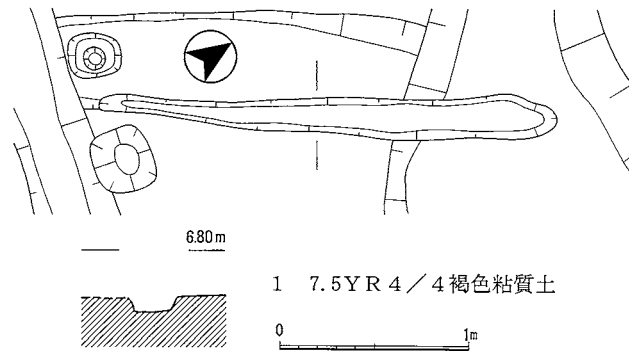


1 10Y R 4 / 2
灰黄褐色粘質土
2 10Y R 4 / 3
にぶい黄褐色粘質土



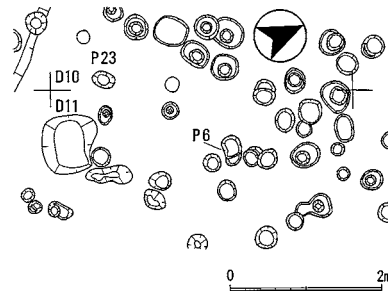
1 10Y R 3 / 3 暗褐色粘質土
2 10Y R 2 / 2 黒褐色粘質土
(炭化物多く含む)
3 10Y R 3 / 2 黒褐色粘質土
(炭化物少量含む)
4 10Y R 4 / 2 灰黄褐色粘質土

第122図 S D 279実測図 (平面図 1 : 200、土層断面図 1 : 40)

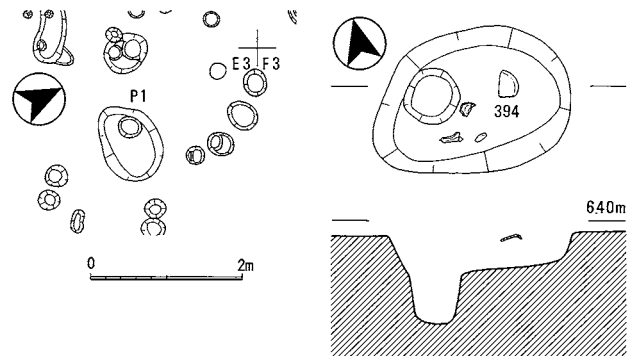


1 7.5Y R 4 / 4 褐色粘質土

第123図 S D 209実測図 (1 : 40)



第124図 D 10pit23・D 11pit 6 位置図 (1 : 100)



第125図 E 3 pit 1 位置図、実測図
(位置図 1 : 100、実測図 1 : 40)

め遺構の半分が調査区外となり、また西側はS E 324に重複されているため全体形は不明だが、2.2m以上×1.7m以上で深さ175cmを測る。木材の出土がないため、素掘り井戸であったと推定される。埋土からは、土師器の椀・杯類(260～262)が出土しているほか、床面から須恵器甗(461、写真図版19参照)も出土した。

SD208(第121図) 調査区を東西に走る溝で、L区内で長さ48m×幅0.8m、深さ35cmを測り、さらに中勢道路調査部分へも連続する。遺物は碎片で図示しうるものはないが、古代の土器が出土している他、切り合い関係からSD209よりも先行する。

SD209(第123図) SD218等との重複のため検出状況が悪く、明瞭なプランが把握しきれなかったが、最大幅0.4m、深さ15cm程度の小さな溝である。埋土からは、古墳時代の遺物とともに平安時代頃の土師器杯(364)が出土した。

SD237(第27図) 調査区を東西に縦断する弧状の溝で、切り合い関係からSD208よりも新しい。幅0.7m、深さ25cmの溝がL区内で長さ49m分あるが、東端は途切れている。埋土から平安時代初頭頃の土師器(365～367)などが出土している。

SD262・279(第122図) ともに調査区の東北隅で確認された相互に重複する溝で、切り合い関係からはSD279のほうが新しい。ただし、SD262・SD279を含めたこの周辺の溝群、SD256・276はいずれも相互に重複しながらほぼ同一方向(南北)に流れる溝であるが、遺構検出時の認識はかなり混乱しており(例えばSD256とSD262は名称こそ異なるが、それぞれSD279を挟んで片側の肩しか確認されておらず、同一の溝の可能性が高い)、再掘削等による土層の色調の差異を別遺構として認識した可能性もある。遺物のうえからも、SD262とSD279はともに埋土から黒色土器や灰釉陶器など10世紀後半から11世紀頃の遺物が出土しており(SD262;368～371、SD279;372～393)、切り合い関係として把握されるほどの年代差は認められない。

SD256(第120図) SD279と重複しているためほとんど残っていないが、深さ40cm程度の溝である。埋土から灰釉陶器が出土しており、古代末の所

産と思われる。前述のように、SD262と同一溝とみるのが妥当と判断されるが、現場レベルでは両者は別溝と認識されており、ここでも一応、出土遺物(427～428)は分けて掲載した。

C-E 3 pit 1(第125図) 調査時はピットとして遺物取り上げがなされており、本書においてもその遺構名称を踏襲したが、平面形としては長径1m、短径0.7mの楕円形土坑ともいい得る遺構で、別ピットと重複がある。埋土から9世紀前半頃の遺物(394～396)が出土している。

C-D 10 pit 23(第124図) 長径30cm×短径20cmを測る楕円形のピットで、埋土から黒色土器椀と土師器小皿(397～399)が出土している。

C-D 11 pit 6(第124図) 長径40cm×短径20cmを測る隅丸長方形を呈したピットで、埋土から土師器杯(400)が出土した。

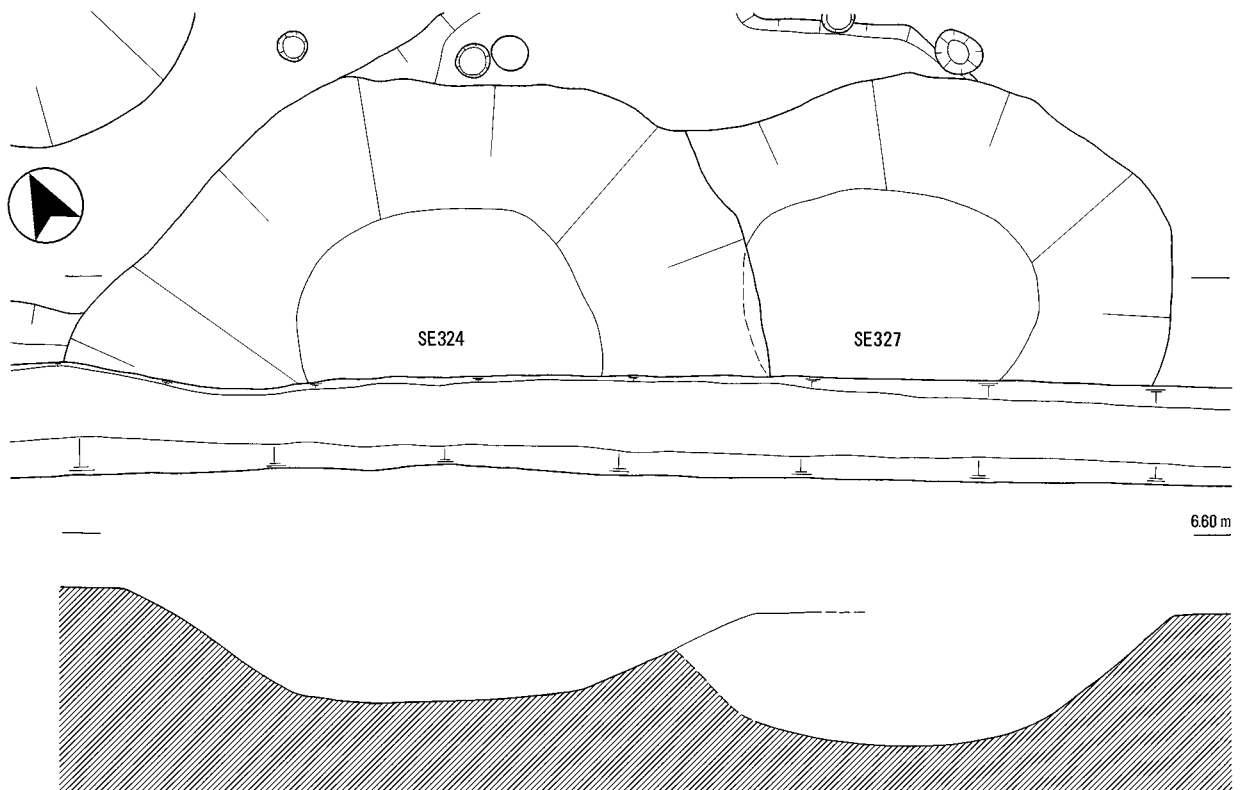
d 中世の遺構

SB351(第117図) 桁行3間(4.2m)×梁行3間(3.6m)の南北棟の総柱建物である。建物方向はN16度Eである。柱間寸法は、桁行が南側より1.5m+1.2m+1.5m、梁行が西側より1.3m+1.2m+1.2mである。柱掘形は、長径50～80cmの隅丸方形ないしは楕円形である。切り合い関係からSX229に後出する。

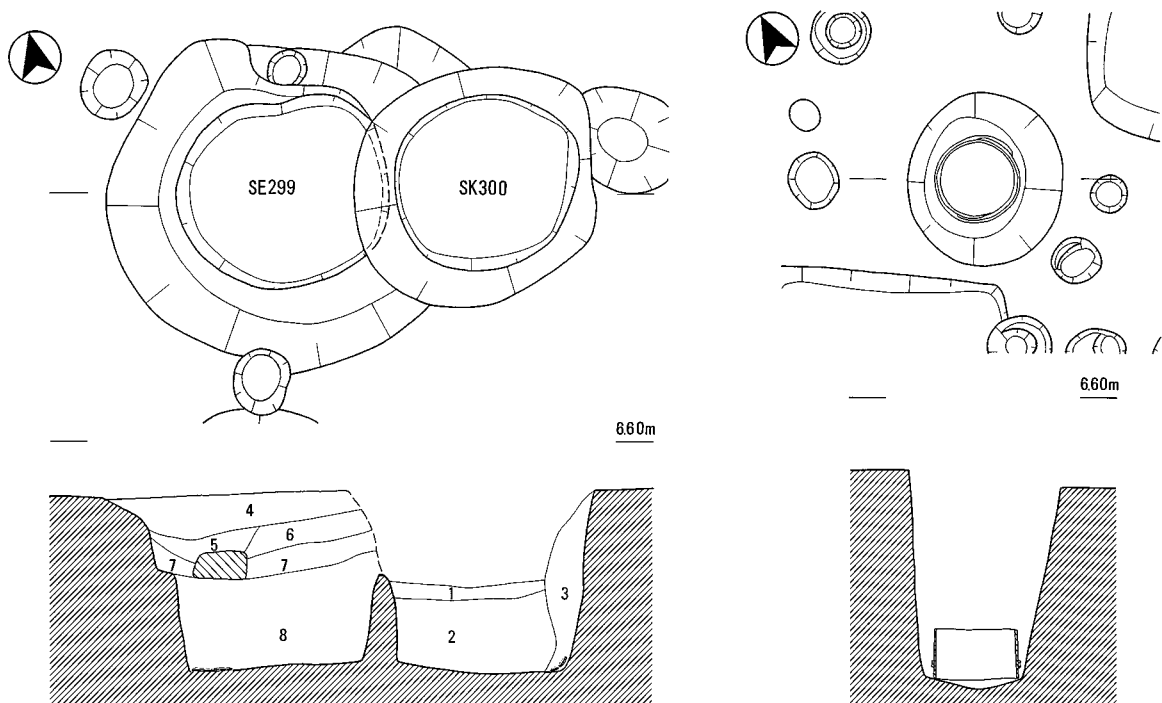
SB352(第129図) 桁行2間(3m)×梁行2間(2.8m)の略方形を呈した掘立柱建物で、柱間寸法は桁行が1.5m等間、梁行が1.4m等間である。建物方向は、N1度Wで、正方位を意識しているとみられる。正方形に近い建物平面からは、総柱建物に多い倉庫的な機能が想定されるが、中央に束柱は確認されなかった。

SX229(第130図) 長径1.3m×短径0.7mの長方形土坑で、深さ37cmを測る。切り合い関係からSB351よりも先行する。焼土等は認められない。平面形から、中世の木棺墓と思われる。

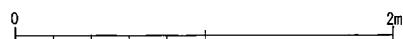
SK250(第134図) 長径1.2m×短径1mの略円形を呈した土坑で、深さは79cmを測る。埋土からは弥生土器などの碎片も出土しているが、ロクロ土師器小皿(402～403)や山茶椀(404)が完形で出土しており、鎌倉時代の所産と思われる。井戸として機能していた可能性もある。



第126図 S E 324・327実測図 (1:40)



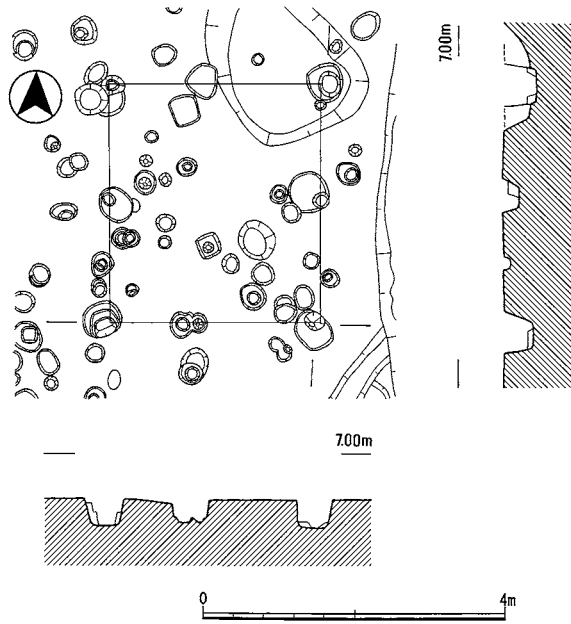
- | | |
|--------------------------------------|----------------------------------|
| 1 10YR 6 / 4 にぶい黄色砂質土
(粘質土ブロック含む) | 5 2.5Y 3 / 2 黒褐色粘質土 |
| 2 10YR 6 / 6 明黄褐色砂質土 | 6 2.5Y 3 / 1 黒褐色粘質土
(炭化物少量含む) |
| 3 5G 4 / 1 暗緑灰色砂質土
(有機物含む) | 7 10YR 3 / 1 黒褐色粘質土
(炭化物少量含む) |
| 4 10YR 3 / 2 黒褐色粘質土 | 8 2.5Y 3 / 1 黒褐色粘質土 |



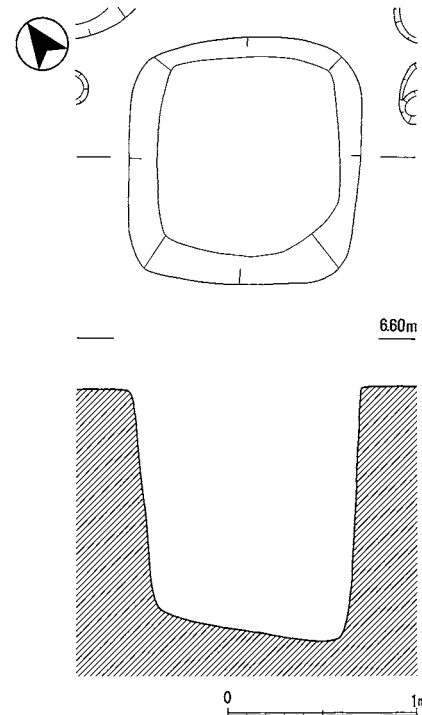
第127図 S E 299・S K 300実測図 (1:40)

第128図 S E 267実測図 (1:40)

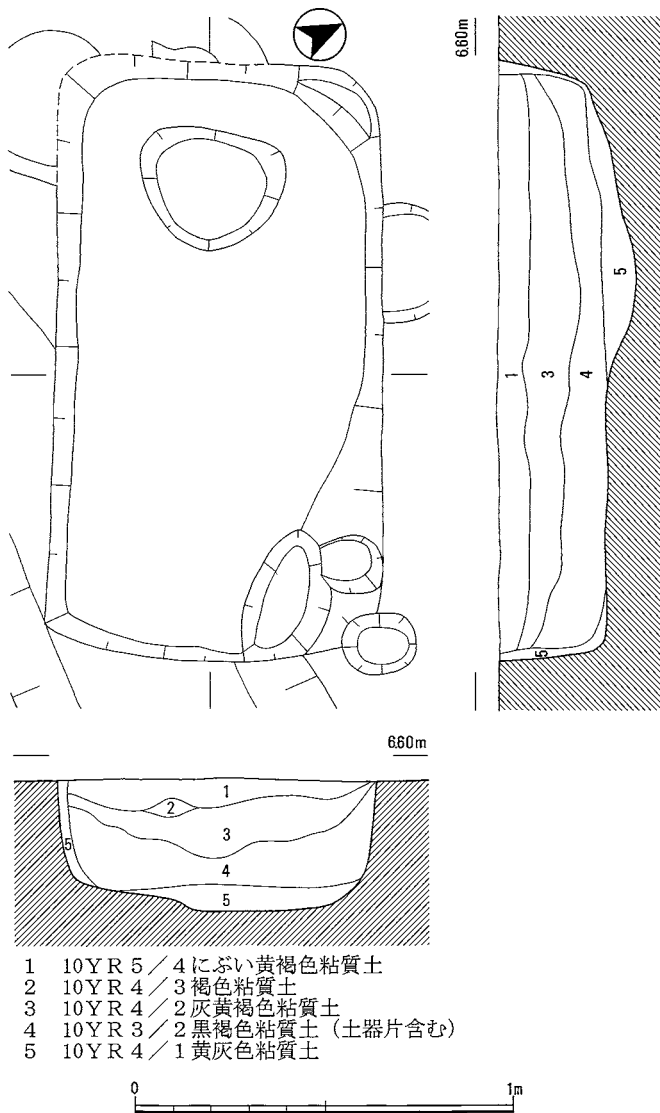




第129図 S B 352実測図 (1 : 100)

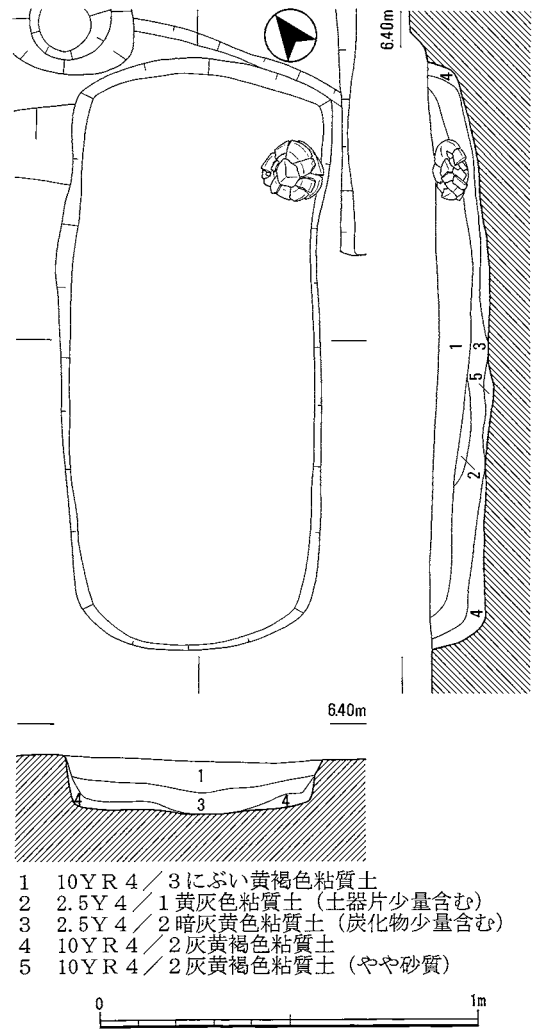


第131図 S E 266実測図 (1 : 40)



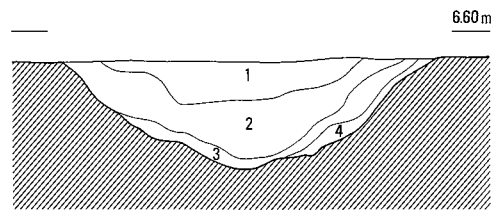
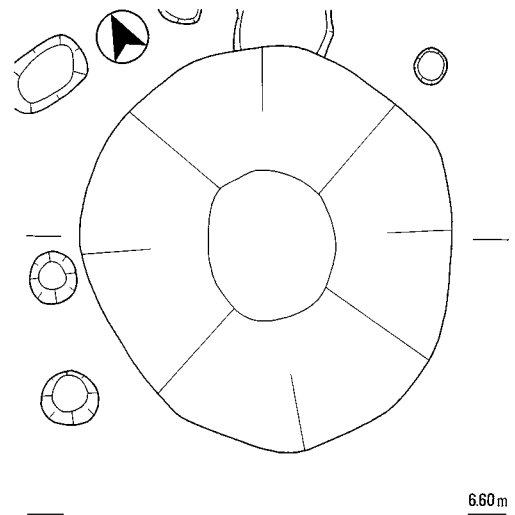
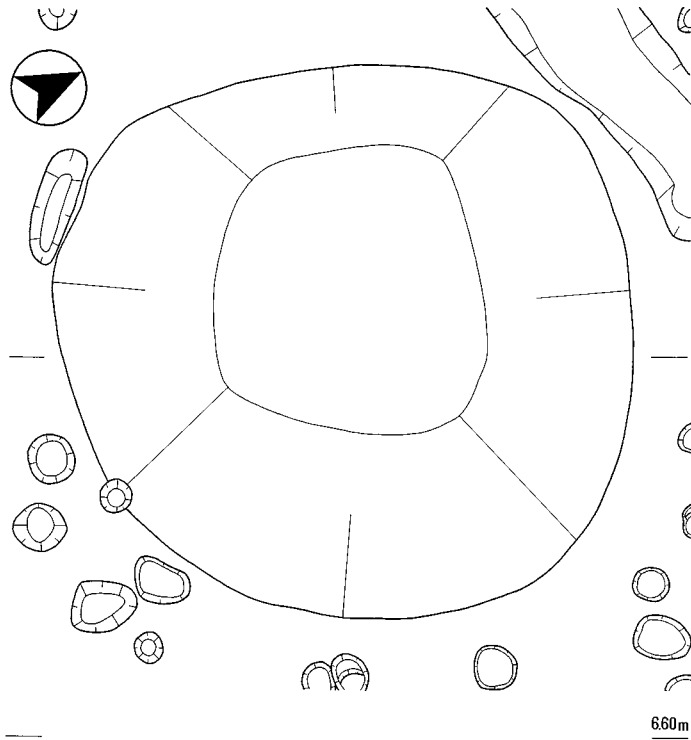
第130図 S X 229実測図 (1 : 20)

- 1 10Y R 5 / 4 にぶい黄褐色粘質土
- 2 10Y R 4 / 3 褐色粘質土
- 3 10Y R 4 / 2 灰黄褐色粘質土
- 4 10Y R 3 / 2 黒褐色粘質土 (土器片含む)
- 5 10Y R 4 / 1 黄灰色粘質土

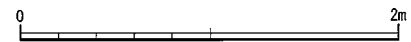


第132図 S X 286実測図 (1 : 20)

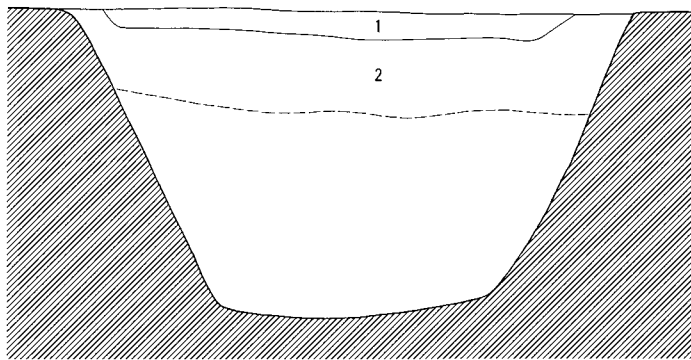
- 1 10Y R 4 / 3 にぶい黄褐色粘質土
- 2 2.5Y 4 / 1 黄灰色粘質土 (土器片少量含む)
- 3 2.5Y 4 / 2 暗灰黄色粘質土 (炭化物少量含む)
- 4 10Y R 4 / 2 灰黄褐色粘質土
- 5 10Y R 4 / 2 灰黄褐色粘質土 (やや砂質)



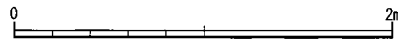
- 1 10Y R 3 / 3 暗褐色粘質土 (土器片含む)
- 2 10Y R 4 / 1 褐灰色粘質土
- 3 10Y R 3 / 2 黒褐色粘質土
- 4 10Y R 5 / 1 黄灰色粘質土 (砂含む)



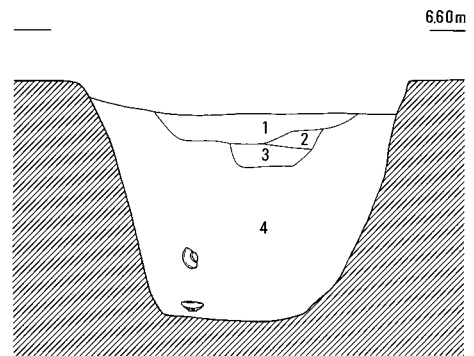
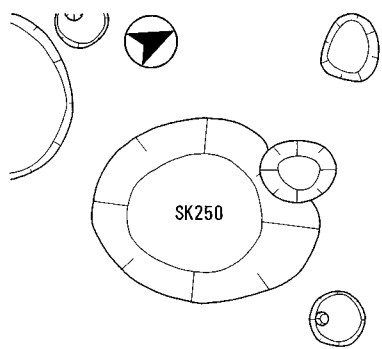
第135図 S E 258実測図 (1 : 40)



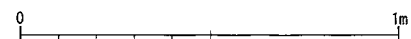
- 1 10Y R 4 / 3 にぶい黄褐色粘質土 (土器片少量含む)
- 2 10Y R 4 / 2 灰黄褐色粘質土 (土器片少量含む)



第133図 S E 259実測図 (1 : 40)

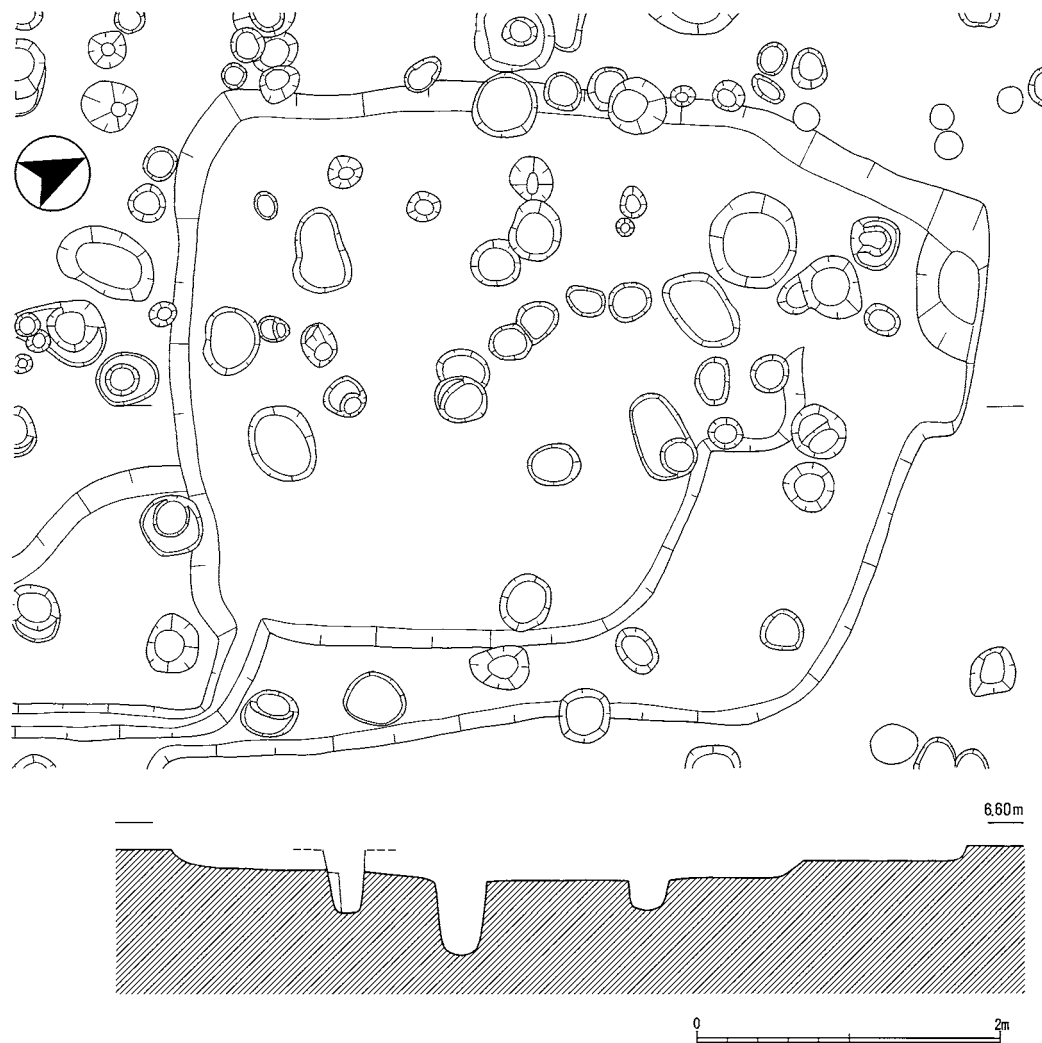


- 1 10Y R 3 / 3 暗褐色粘質土 (炭化物少量含む)
- 2 10Y R 3 / 2 黒褐色粘質土
- 3 10Y R 3 / 3 暗褐色粘質土
- 4 10Y R 4 / 2 灰黄褐色粘質土 (土器片含む)

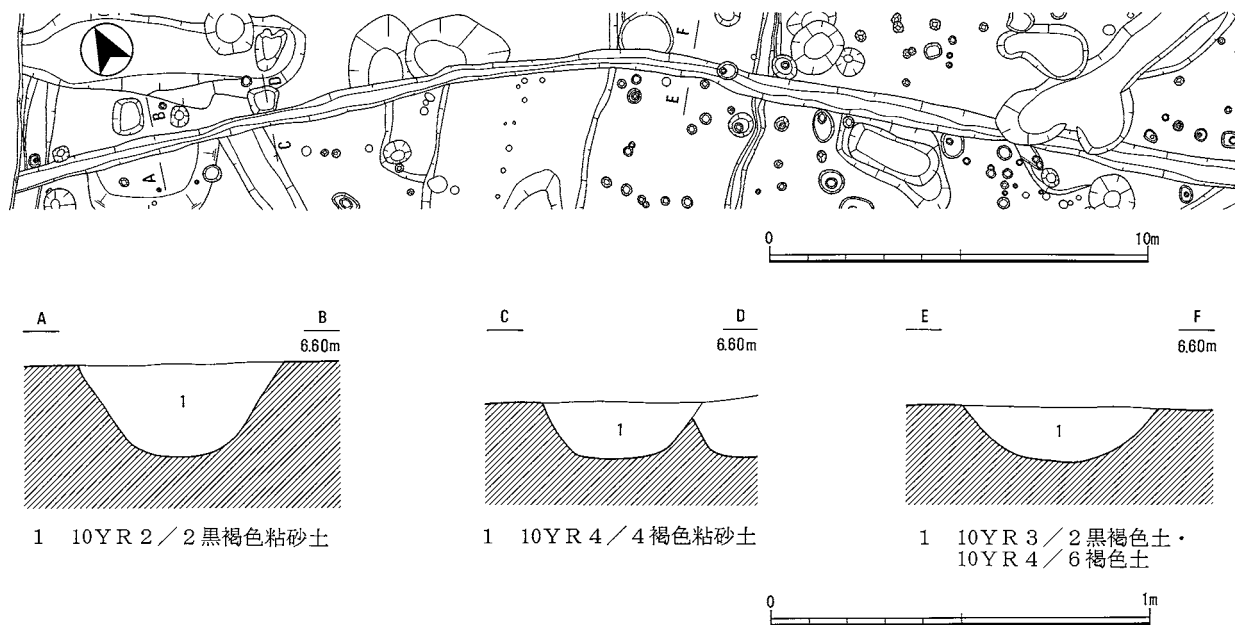


第136図 S E 263実測図 (1 : 20)

第134図 S K 250実測図 (1 : 40)



第137图 S K 265实测图 (1 : 50)



第138图 S D 237实测图 (平面图 1 : 200、土层断面图 1 : 20)

SE267 (第128図) 直径0.9mの円形井戸で、深さ58cmを測る。図示しうるほどの遺物はないが、中世の所産である。

SE259 (第133図) 直径3.2mの略円形の素掘り井戸で、深さは66cmを測る。替田遺跡の井戸の中では大型の部類に入る。埋土から山茶碗をはじめとする中世前期の遺物(406~418)が良好に出土している。

SE263 (第136図) 直径0.8m、深さ64cmの小型円形素掘り井戸である。埋土から陶器小皿が出土している。

SK265 (第137図) 2段に掘り込まれた方形土坑で、西壁及び南壁を共有する。上段は長径5.8m×短径4.3mで深さ17cm、内側の下段は長径3.7m×短径3.5mで深さ18cmを測る。下段の南東隅から幅20cm~40cmの溝が延びており、排水溝と思われる。いわゆる南東隅土坑かとも考えたが、本遺構を南東部に取り込む掘立柱建物は確認できなかった。埋土からロクロ土師器杯(421)や山茶碗(422)・小碗(423)が出土している。

SE266 (第131図) 長径1.5m×短径1.3m、深さ51cmの小型方形井戸である。埋土から曲物の破片(424)が出土しており、一応、杵材等は存在したと思われるが、詳細は分からない。検出面より緑釉陶器片(358)が出土しているが、出土位置はかなり上であり、中世の所産と思われる。

SX286 (第132図) 弥生時代の土坑SK285を切って造られた長方形土坑で、長さ1.6m×幅0.6m、深さ17cmを測る。北側に土師器杯(425~426)を2枚重ねて埋納しており、中世墓と思われる。土坑平面からは、木棺墓など方形容器での埋設が示唆される。

SE299 (第127図) 1.4m×1.3mの円形井戸で、深さ92cmを測る。上部は挿鉢状に掘り込まれた後、下部はほぼ垂直に掘り込まれており、木製構造材が存在したものと推定される。図示しうるほどの遺物はないが、中世の所産である。

C-C10pit13 (第141図) 長さ40cm、幅30cmの楕円形のピットである。完形の山茶碗が2個体(430~431)出土しており、埋置されたものとみられる。したがって、性格としては掘立柱建物の柱穴

を構成するピットとするよりは小土坑とするのが適当であろう。

C-C11pit1 (第141図) 重複するピットがあるため全体形は不明だが、隅丸長方形を呈したピットで、埋土から土師器鍋(432)と杯(433)が出土した。

C-B12pit4 (第139図) SK265を切って形成されたピットで、埋土からロクロ土師器小皿(434)が出土した。出土遺物のうえでは、SK265とはほとんど時期差がない。

C-D10pit18 (第140図) 長径45cm×短径40cmの隅丸方形のピットで、掘立柱建物を構成するピットであった可能性が高い。埋土から土錘(435)が出土した。

C-D10pit6 (第140図) 径50cmほどの円形ピットである。埋土から土錘(436)が出土している。

C-C10pit6 (第141図) 径35cmほどの円形ピットである。埋土から土師器鍋(437)が出土した。

C-D10pit2 (第140図) 径40cmの円形ピットである。埋土から土師器小皿(439)が出土した。

C-B11pit2 (第139図) 径20cmほどの小さな円形ピットである。埋土からロクロ土師器小皿(440)が出土した。

4 出土遺物

a 弥生時代遺構出土の遺物

SH207出土遺物(116~134) 中期前葉の壺(116~122)、甕(123~130)、サヌカイト製石鏃(131~133)と剥片(134)がある。壺には、太頸の広口壺(118~119)と中頸壺(116~117)、細頸壺(121~122)がある。このうち、広口壺119は、胴部に刻目の貼付突帯を付した前期の様相を残す。中頸壺(117は頸部より上が欠損のため推定)は、胴部が下膨れ形状で、胴部下位が算盤状に稜をもつ形状で、116は口縁部が受口状を呈し、胴部は横位帯状に施文した直線文の要所に縦アクセントを入れる。細頸壺はいずれも口縁部を欠損するが、胴部は縄文帯とミガキ調整の無文部を交互に配するもので、121は縄文部の上下に沈線を入れて文様部をより顕在化している。甕は、口縁内面ヨコハケ・体部外面タテハケ・口唇部刻みという替田遺跡という「A調整」手法で作られたものを基本とするが、125

や127は口縁内面のヨコハケが明瞭でない。また、小型の130は口縁端部に刻みを入れず、そのまま丸く収めるB調整をもつ。石鏃はいずれもサヌカイト製で、131が凹基式の五角形鏃、132は平基式、133が凸基式である。

SH230出土遺物(135~136) 広口壺(135)と甕(136)がある。広口壺は、口唇部に波状文と刻目を施す。甕は口縁内面ヨコハケ・体部外面にタテハケを施すが口唇部が欠損のため不明である。

SH251出土遺物(137~141) サヌカイト製の石鏃(137~138)とスクレイパー(140)、ハイアロクラスタイト製の柱状片刃石斧(139)、安山岩製の敲石(141)がある。石鏃は、137が平基式、138が凸基式である。柱状片刃石斧は、きわめて細身のもので、ノミ的な機能が想定される。

SH303出土遺物(142~146) 壺(142~144・146)と甕(145)がある。壺は細頸壺で、142と144は上下を沈線で区画した縄文帯と無文部を段状施文したもので、143は横位直線文上に縦直線文を重ねたものである。甕145は、口唇部をヨコナデで仕上げたB調整をもつ。

SH311出土遺物(147~153) 広口壺(147)、細頸壺(148)、壺(149)、甕(150)、石鏃(151~152)、磨製石斧破片(153)がある。広口壺は、頸部に直線文を密接施文し、口縁内面に瘤状突起を貼付する。細頸壺は、口縁部を有段(受口状)にしたものである。甕は、口縁部刻みをもつが、外面調整等は不明の部分が大きい。打製の石鏃はいずれもサヌカイト製、磨製石斧の破片はハイアロクラスタイト製である。

SK201出土遺物(154) 甕である。体部外面にタテハケ、口縁内面にヨコハケを施し、口唇部をヨコナデで仕上げたB調整である。

SK205出土遺物(156~157) いずれも小型の土錘である。

SK204出土遺物(155) 有段の細頸壺である。口縁外面に波状文の痕跡が残る。

SK211出土遺物(158~159) 甕(159)とホルンフェルス製の打製石器(158)がある。甕は、口唇部刻み、口縁内面ヨコハケ、体部外面タテハケを施した典型的なA調整で、体部の膨らみは弱い。

打製石器は、いわゆる石鏃であるが、身部から刃部への広がりには乏しい。

SK221出土遺物(160) 弥生土器の甕である。159同様、A調整をもつ。

SK223出土遺物(161~162) 広口壺(161)と甕(162)がある。広口壺は、頸部に直線文を密接施文し、口縁部の開きは弱い。甕は、A調整で、体部がやや膨らみ気味となる。

SK233出土遺物(163~164) いずれも中期前葉の甕である。163はA調整、164は口唇部ヨコナデ仕上げ・口縁内面にヨコハケ、体部内外に斜ハケを施したもので、体上部の膨らみがなく、頸部から底部に向かってそのまま窄まる深鉢的な器形をなし、体上部に一对の把手をもつ。

SK234出土遺物(165) 軽石である。具体的な用途はわからない。

SK238出土遺物(166~170) いずれも壺で、166は細頸壺、167~169の体部片も同一個体の可能性が高い。体部文様は、直線文の上に半円の扇状文を重ねて流水文としたものである。

SK239出土遺物(171~172) ともに甕の口縁部小片であるが、171は条痕文系、172はB調整の甕である。

SK240出土遺物(173~174) 173は甕、174はサヌカイト製の打製石鏃である。甕はA調整で、体上部がかすかに膨らむ。

SK242出土遺物(175~178) 細頸壺(175)、甕(176)、サヌカイト製の石鏃(177~178)がある。細頸壺は有段で、凹線こそないが屈折は強い。く字形甕は、体上部が膨らまず、口縁部から底部に向かって一気に窄まる形状をとる。石鏃は平基式(177)と凸基式(178)がある。

SK244出土遺物(179~189) 広口壺(179~180)、甕(181~189、184と189は底部のみ)がある。広口壺179は、口縁部を欠損するが、いわゆる遠賀川系の壺の頸部が長頸化して直線文が施された壺である。甕で口縁部も残るものは、183・185~188がA調整であるが、181と182は口唇部刻み、口縁内面ヨコハケをともに欠く。189は底部穿孔が施されている。

SK252出土遺物(190) 器面の残存は悪いが、

広口壺である。頸部が欠損するが、体部は下膨れで、頸部がやや長くなるものと推定される。

SK253出土遺物(191~193) 甕底部(191)、壺底部(192)、土錘(193)がある。191は壺の可能性もある。

SK260出土遺物(194~195) 甕の口縁部(194)と底部(195)である。194は頸部が緩やかに外反し、端部に刻みをもつ。195は焼成後穿孔を施している。

SK275出土遺物(196~197) 甕(196)と広口壺(197)がある。196は体部が緩やかに膨らみ、体上部に一对の瘤状隆起を貼付する。197は、やや長頸化した頸部と胴部に幅広の直線文を加えたもので、中期前葉に属しよう。

SK277出土遺物(198~199) 甕(198)と壺(199)である。198はA手法、壺は下膨れでミガキ調整である。

SK284出土遺物(200~203) 甕(200~202)と搔器(203)がある。甕はA調整、搔器はサヌカイト製である。

SK285出土遺物(204) 広口壺で、頸部に幅広く直線文を施した中期前葉の土器である。

SK288出土遺物(205~213) 広口壺(205~206)と甕(207~213)がある。広口壺205は、口縁内面に瘤状突起を貼付する。甕はいずれも甕で、いずれも頸部から口縁部に向かって緩やかに外反する。調整はいずれもハケ調整と思われる。

SK292出土遺物(214) 甕である。体部を直線文や緩い波状文で加飾している。

SK304出土遺物(215~216) 甕(215)と壺底部(216)を図示した。215はA調整で、胴部があまり張らない。

SK307出土遺物(217) 甕で、風化のため調整は明瞭でないが、体部の膨らみは乏しい。やや器高が低い鉢的な土器になるかもしれない。

SK309出土遺物(218~222) 甕(218~219)、甕底部(220)、小形壺(221)、壺底部(222)がある。甕は、A調整に似るが、体部外面のハケがやや横方向に流れる。220は、焼成後底部穿孔を施す。222は厚底である。

SK310出土遺物(223~224) 223はハイア

ロクリタイト製の太型蛤刃石斧、224は壺底部である。223は非常に粗製で、刃部がかなり刃毀れしている。

SK312出土遺物(225~231) 225~229は広口壺、230は壺底部、231は砥石である。広口壺はいずれもやや頸部が長く、225と226は口縁内面に瘤状突起が付き、226~229は頸部ないしは体上部に直線文で加飾している。231は凝灰質砂岩である。

SK314出土遺物(232~237) 広口壺(232)、鉢(233)、甕(234)、甕底部(235)、サヌカイト製の剥片(236)と石鏃(237)がある。広口壺は、口縁内面に瘤状突起を貼付し、体部は上下を沈線で区画して内部を直線文で充填した文様帯をベルト状に配している。235の底部には、木の葉痕跡が残る。石鏃237は、凸基式である。

SK316出土遺物(238~240) 壺底部(238)と甕底部(239~240)がある。

SK326出土遺物(241~244) 壺(241~242)、甕(243)、敲石(244)がある。242は体部に沈線で区画された縄文帯をベルト状に施す。244は塩基性の閃緑岩製で、先端に敲打痕を残す。なお、244は遺構直上からの出土である。

SD313出土遺物(245) 甕の口縁部で、口唇部を刻んでいる。

SD317出土遺物(246) 壺の底部である。

SD340出土遺物(247~248) 壺(247)と甕(248)がある。壺は、胴部に刻目隆帯を貼付している。甕は、口唇部に波状文、口縁内面に刻み列を施すが、体部タテハケ、口縁内面ヨコハケの調整はA調整と照応している。

C11pit11出土遺物(249) サヌカイト製の石鏃である。平基式の小型品で、端正な形状をなす。

C2pit3出土遺物(250) サヌカイト製の石錐である。基部を欠損する。

F8pit6柱痕出土遺物(251) 敲石である。先端に僅かな敲打痕がある。砂岩製である。

D10pit13出土遺物(252) 側面に擦痕があり、敲石の可能性もある。泥岩製である。

C13pit3出土遺物(253) 小形の甕である。磨耗が激しく、口縁内面にヨコハケがある以外、調整不明である。

E13pit3出土遺物(254) 弥生土器の甕である。

B調整のうえに、口縁内面を刻んでいる。

b 古墳時代遺構出土の遺物

SK222出土遺物(255~257) 土師器の直口壺(255)、小形丸底鉢(256)、S字甕底部(257)がある。直口壺は口縁部片で、間隔の空いた縦方向の細ミガキが施されている。

SK241出土遺物(258) 須恵器杯身である。ヘラ切り後未調整である。

SK307出土遺物(259) 土師器の手捏ね土器である。臼状の鉢形をなす。

c 古代遺構出土の遺物

SE327出土遺物(260~262・461) 土師器杯(260~262)と須恵器甕(461)がある。土師器杯260~261は半球状で内彎する古墳時代的な形状であるが、262は奈良~平安期の所産であろう。

SB344出土遺物(350~352) 土師器碗(350)、土錘(351~352)がある。

SB345出土遺物(353~356) 須恵器杯(353)、土師器甕(354)と皿(355)、鉄器釘(356)がある。皿の暗文は確認できなかった。

SB349出土遺物(357) 黒色土器の鉢である。底部から口縁部に向かってほぼ真っ直ぐ外側へ開く。磨耗のため調整等は不明である。

SE266出土遺物(358) 緑釉陶器の碗で、ロクロ調整による削り出し高台である。

SK270出土遺物(359) 土師器甕である。口縁上端に面をもつ。

SD208出土遺物(360~361) 土師器甕(360)と須恵器提瓶(361)がある。提瓶は、欠損部があるが非常に歪みが大きく、完成品かどうか疑わしい。

SD209出土遺物(362~364) 土師器甕(362~363)と杯(364)がある。362は古墳期遺物の混入であろう。

SD237出土遺物(365~367) 土師器の杯(365~366)と甕(367)を図示した。杯はいずれも平底から外側へ直線的に体部が立ち上がる。

SD262出土遺物(368~371) 灰釉陶器碗(368~369)、黒色土器碗(370)、土師器甕(371)がある。368の底部には判読不明ながら墨痕がある。369は一見土師器を思わせるが、生焼けによると判

断した。

SE324出土遺物(263~349・373~375) 土器では須恵器杯(373)と灰釉陶器碗(374)、木製品には井戸の構造材を含む杭(263~271)、曲物(272~274・348)、棒状材(275・324・326・332)、板材(276~323・325・327~331・333~347・349・375)がある。木製品は欠損等も多いため、杭と棒状具には流動的な側面も大きい。275は柱状の形態を示す。375は、片側を欠損するが、もう一方の端部は2又に分かれている。すべての木製品が樹種同定されているわけではないが、わかる範囲で樹種をみると、杭ではシイ属やサカキ・シャシャンボがあり、棒状具ではスギやヤブニッケイがある。板材ではスギが多数を占めるがモミ属も含む。349が唯一のアスナロ属例で、これは何かの部材の破片であろう。個々の樹種名は観察表を参照されたい。須恵器373は焼成が甘く、生焼け状態である。

SD279出土遺物(372・376~393) 土錘(372)、灰釉陶器碗(376~380)、ロクロ土師器皿(381)・台付皿(382)、緑釉陶器碗(383)、黒色土器碗(384~386)、土師器皿(387)・杯(388~391)・甕(392~393)がある。376には「大」、377には「●」の墨書がある。また、黒色土器は、ハケ後ミガキの調整を施している。

SE258出土遺物(405) 土師器杯である。ナデ調整を施す。

C-E3pit1出土遺物(394~396) 土師器皿(394)・甕(395~396)がある。皿は、磨耗が激しく調整不明であるが、口縁部は僅かに内彎気味に立ち上がり、端部を内側に肥厚させる。

C-D10pit23出土遺物(397~399) 黒色土器碗(397~398)、土師器小皿(399)がある。土師器小皿は小片で、これは中世に属する。混入でなければ、このピット自体、中世の所産かもしれない。

C-D11pit6出土遺物(400) 土師器杯である。底部をヘラケズリし、体部ヨコミガキする精製品である。暗文の有無は不明である。

d 中世遺構出土の遺物

SB352出土遺物(401) 陶器小碗である。いわゆる山茶碗質である。以下、陶器小碗と呼称する

場合は山茶椀質のものを示す。

S K 250出土遺物 (402~404) ロクロ土師器小皿 (402~403)、山茶椀 (404) がある。山茶椀には靱殻圧痕は付いていない。

S E 259出土遺物 (406~418) 山茶椀 (406~411)、小椀 (412~413)、小皿 (414)、陶器 (いわゆる山茶椀質) 鉢 (415)、陶器小壺 (416)、土師器杯 (417~418) がある。

S E 263出土遺物 (419~420) 陶器小皿 (419) と小椀 (420) である。

S K 265出土遺物 (421~423) ロクロ土師器杯 (421)、山茶椀 (422)、小椀 (423) がある。

S E 266出土遺物 (424) 曲物底板である。スギを使用している。

S X 286出土遺物 (425~426) 土師器杯である。底形態に差があり、425は丸底、426は平底である。

S D 256出土遺物 (427~428) 山茶椀 (427) と灰釉陶器椀 (428) がある。427も高台に靱殻圧痕が付着せず、器形も灰釉陶器の形態を残す猿投・知多系の山茶椀である。

S D 237出土遺物 (429) 鉄製釘である。先端が屈曲している。

C - C 10pit 13出土遺物 (430~431) ともに山茶椀である。底部が厚く、深めの形態を示す。

C - C 11pit 1出土遺物 (432~433) 土師器鍋 (432) と杯 (433) である。鍋は、口縁端部が内斜面を形成する。

C - B 12pit 4出土遺物 (434) ロクロ土師器小皿である。

C - D 10pit 18出土遺物 (435) 及びC - D 10pit 6出土遺物 (436) 共に土師質の土錘である。

C - C 10pit 6 (437) 土師器鍋である。口縁内面が肥厚し、内斜面を形成する。

C - B 12pit 4出土遺物 (438) 土師器小皿である。厚手で、ハケ調整痕を残す。

C - D 10pit 2出土遺物 (439) 土師器小皿である。ヨコナデにより口縁端部が外側に突出する。

C - B 11pit 2 (440) ロクロ土師器小皿である。厚手で、形態的には438と類似する。

e L区包含層等出土遺物

縄文土器 (441~442) ともに縄文後期堀之内2式に相当しよう。441はバケツ状の器形で、口縁直下に刻目隆帯を有する。

弥生土器 (443~453) 壺 (443~446)、甕 (447~450)、甕底部 (451~453) がある。443は大型で、横方向3条・縦方向4条の刻目隆帯をT字状に貼付する。445は細頸壺で、口縁直下から胴部にかけて直線文を密接施文する。広口壺444は、口縁内面に瘤状突起を貼付している。

石器 (454~460) 打製の石小刀 (454)、打製石鎌 (455~457)、石錐 (458)、磨製の片刃石斧 (459)、磨製石斧の転用品 (460) がある。454~458はサヌカイト製、459~460はハイアロクラスタイト製である。460は転用されて側縁部が丸い。

古代・中世期遺物 (462~477) 古代の遺物としては須恵器の杯身 (462・474)、土師器の甕 (463~465)・皿 (468)・杯 (469~471・475) がある。中世の遺物として山茶椀 (472)・小椀 (473)、土師器小皿 (476~477) がある。474は転地逆となって、杯蓋の可能性もある。その他、時期不明の遺物として土錘 (466~467) がある。山茶椀472は猿投系、477土師器小皿は2段ナデの京都系である。

第6節 M区の調査

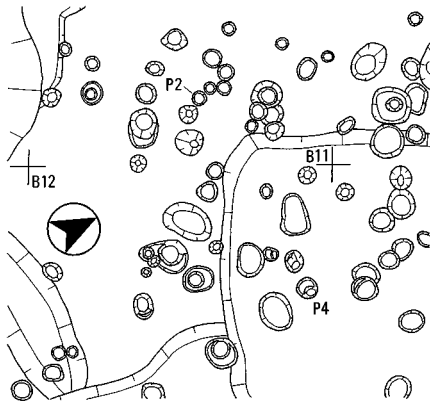
1 概要

M区は、幅3m、総延長72.5mの細長いトレンチである。L区東北隅から東へ34m延びて直角に屈折し、南側へ44.5m延びる。狭長な調査区ながら、遺構・遺物は濃密に出土している。しかし、隣接するO区の遺構検出面が本来存在したはずの面よりかなり削り込んで検出されたため、遺憾ながらこのM区

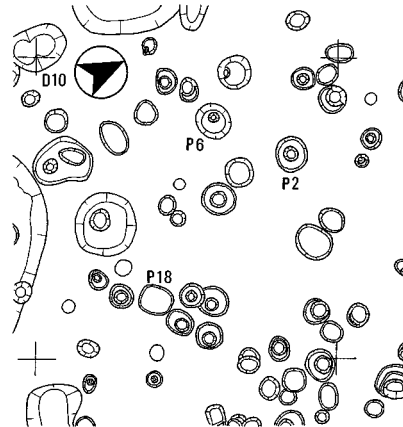
で確認した掘立柱建物の柱穴などの連続性が隣接区で検証できない部分も生じた。

2 小地区設定方法

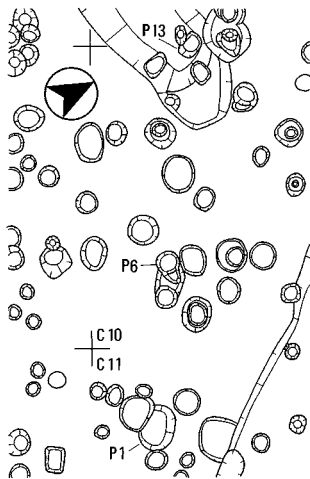
ここでもM区のみで独立した小地区の付与を行っている。すなわち、国土座標には則らず、調査区の形状に合わせて小地区の付与を行い、三重県の基本原則に従って北西隅を表示の基点とし、東西軸は西



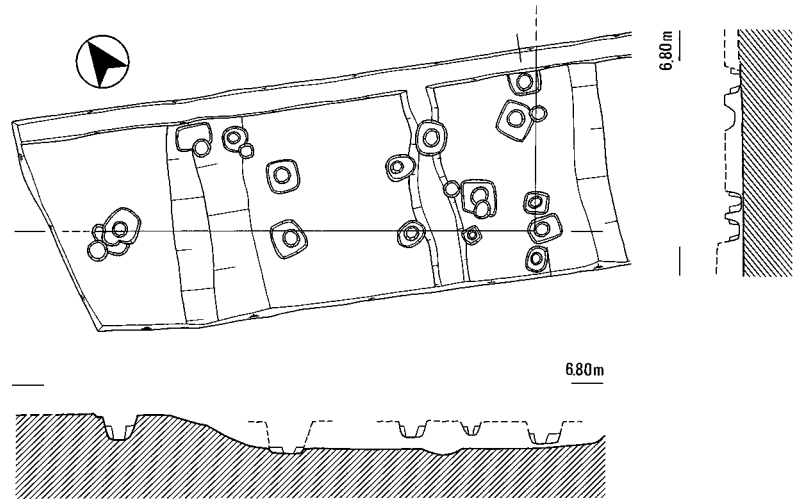
第139図 B 11pit 2 · B 12pit 4 位置図 (1 : 100)



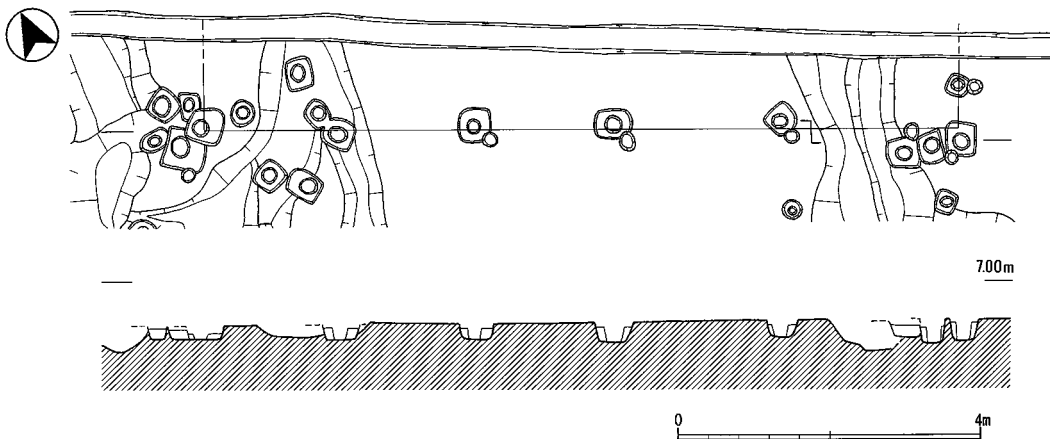
第140図 D 10pit 2 · 6 · 18位置図 (1 : 100)



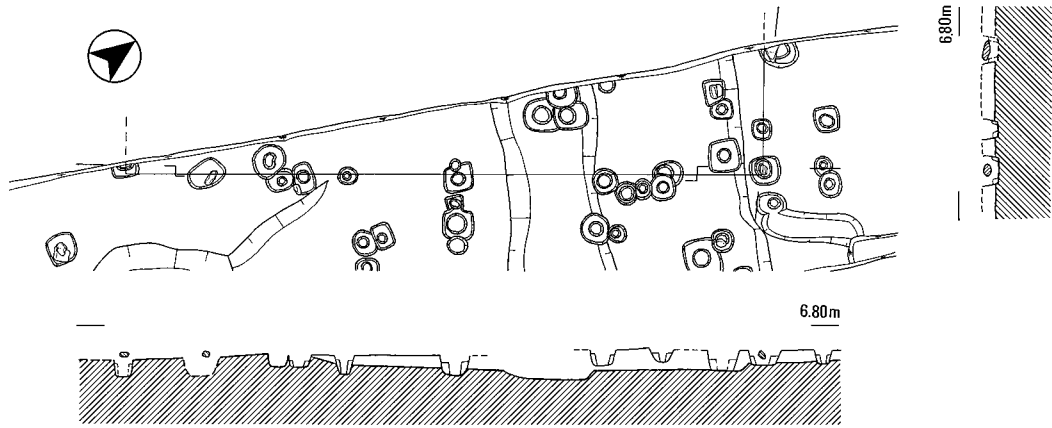
第141図 C 10pit 6 · 13 · C 11pit 1
位置図 (1 : 100)



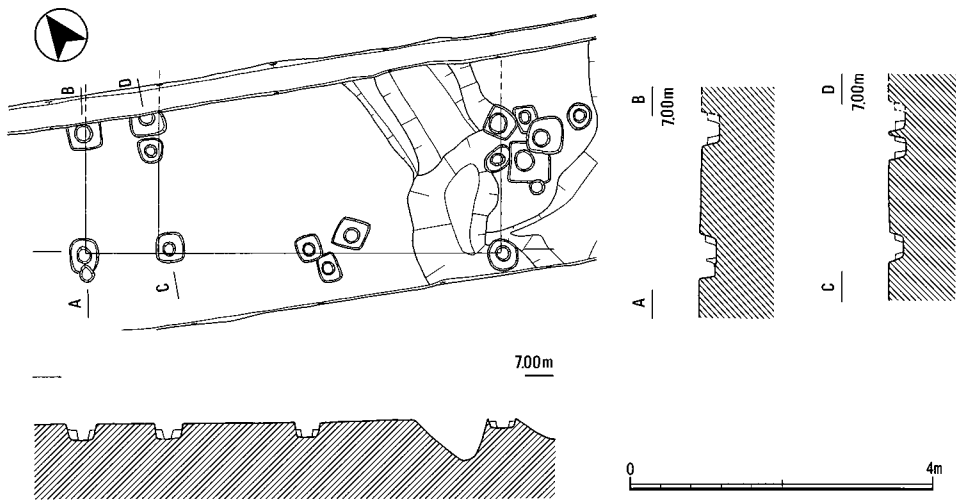
第142図 S B 159実測図 (1 : 100)



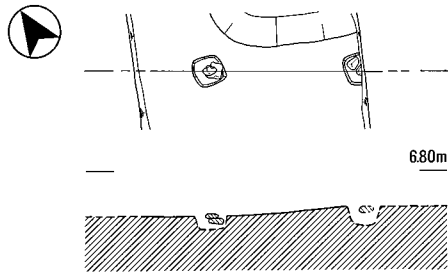
第143図 S B 161実測図 (1 : 100)



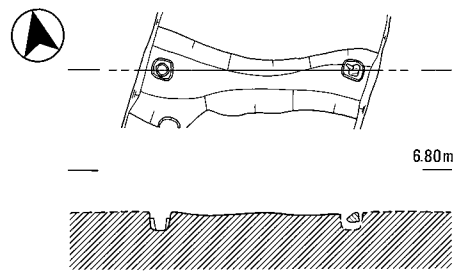
第144図 S B 162実測図 (1 : 100)



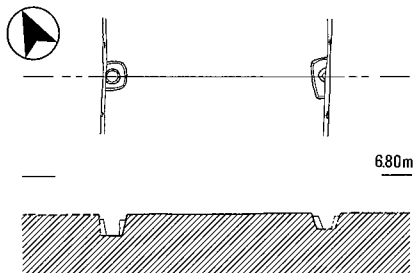
第145図 S B 160実測図 (1 : 100)



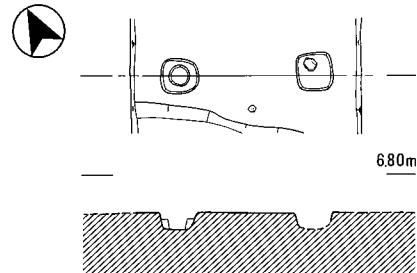
第146図 S A 163実測図 (1 : 100)



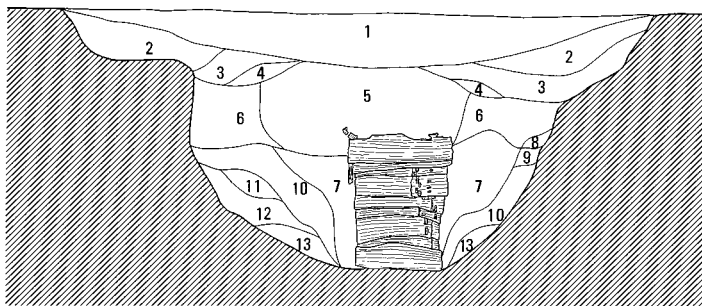
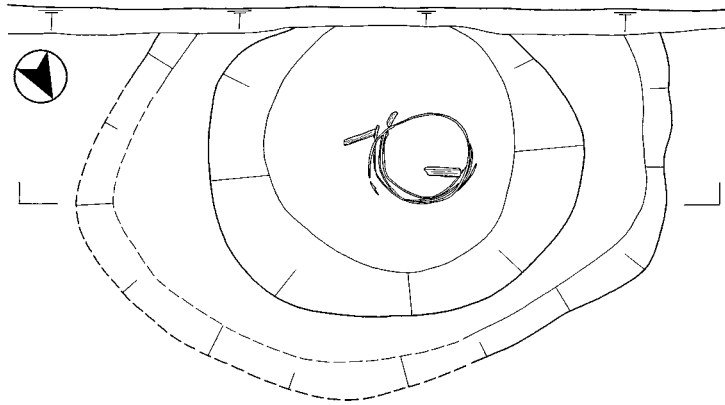
第147図 S A 164実測図 (1 : 100)



第148図 S A 165実測図 (1 : 100)

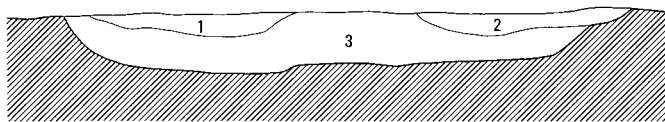
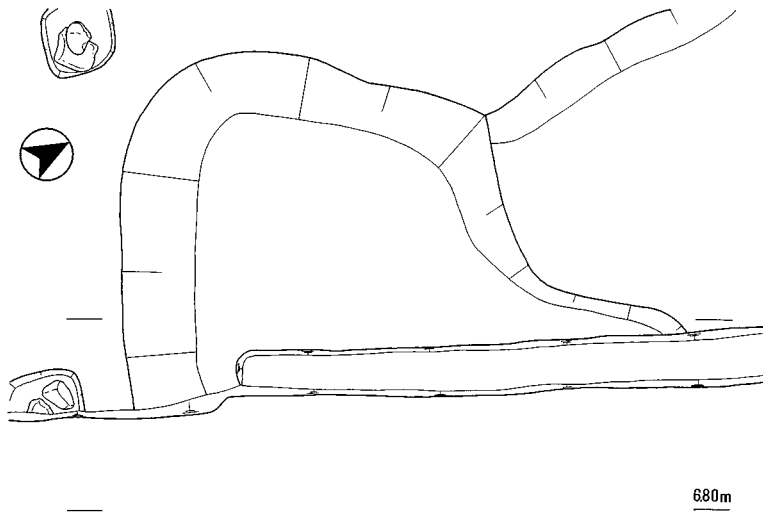


第149図 S A 166実測図 (1 : 100)



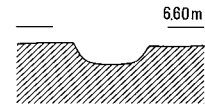
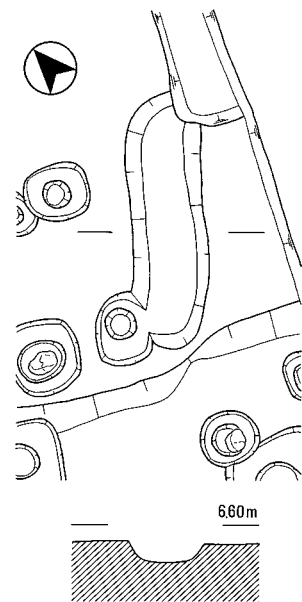
- 1 5 Y 4 / 1 灰色土
- 2 5 Y 4 / 1 灰色土
(2.5 Y 4 / 1 黄灰色土ブロック含む)
- 3 7.5 Y R 3 / 3 暗褐色土
- 4 7.5 Y R 4 / 6 褐色土・
7.5 Y R 5 / 6 明褐色土 (鉄分含む)
- 5 2.5 Y 5 / 1 黄灰色粘土・
2.5 Y 7 / 2 灰黄色粘土
(7.5 Y R 5 / 6 明褐色土ブロック含む)
- 6 10 Y R 5 / 1 褐灰色粘砂土
(7.5 Y R 4 / 6 褐色土ブロック含む)
- 7 N 4 / 灰色粘砂土
- 8 N 5 / 灰色細砂
- 9 2.5 Y 5 / 6 黄褐色粗砂
(N 5 / 灰色細砂含む)
- 10 N 5 / 灰色粗砂
- 11 10 B G 6 / 1 青灰色粗砂
- 12 10 B G 5 / 1 青灰色細砂
- 13 N 5 / 灰色細砂
(N 3 / 暗灰色粘砂土ブロック含む)

第150図 S E 129実測図 (1 : 40)



- 1 5 Y R 4 / 1 褐灰色粘質土
(7.5 Y R 5 / 6 明褐色粘質土ブロック含む・炭化物少量含む)
- 2 5 Y R 4 / 1 褐灰色粘質土
(7.5 Y R 5 / 6 明褐色粘質土ブロック含む・炭化物多く含む)
- 3 5 Y R 4 / 1 褐灰色粘質土
(7.5 Y R 5 / 6 明褐色粘質土ブロック含む)

第151図 S K 132実測図 (1 : 40)



第152図 S K 131実測図 (1 : 40)

から東へアルファベットを、南北軸は北から南へ数字を付与している（第8図）。

3 遺構

S B159（第142図） 調査区の制約のため3間（5.6m）×1間分（2m）のみが確認されただけの掘立柱建物である。柱掘形は直径50cm程度の方形である。なお、この場所には他にも掘立柱建物柱穴として適当な柱穴があり、もう1棟の別建物が重複していた可能性が高い。

S B160（第145図） 建物の南側部分が残存しただけであるが、西側1間分の底を含めた梁行3間（5.5m）の掘立柱建物と推定される。ただ、柱筋に乗る梁行中央柱は柱間寸法が等間にならず、柱筋から1柱穴分外側に出た柱穴が等間になる。このことから、本建物は近接棟持柱を採用した掘立柱建物であった可能性も残る。

S B161（第143図） 桁行5間（10m）の東西棟建物の南側柱列のみを確認した。柱間寸法は、西側から3間分が1.8m等間、残り2間分が2.4m等間である。柱掘形は、直径50cm程度の方形である。建物方向は、N27度Eである。

S B162（第144図） 調査区の制約のためごく一部を検出したただけだが、4間（8.5m）×1間（1.8m）以上の建物と判断された。ただし、4間分については、柱筋に乗る柱穴がいくつかあり、建物およびそれを構成する柱穴の認定にはやや流動的な側面も残ることは否めない。また、建物方位は、N37度Eである。柱穴埋土から土師器鍋や土師器小皿、山茶碗などの鎌倉時代の土器（520～523）が出土している。

S A163（第146図） 柱痕の残存等より掘立柱建物を構成するピットと想定されたが、調査区の制約などから対応する柱穴が不明なため、一応、柱列として把握した。柱掘形は直径40cm1間分（2.1m）を確認しただけであるが、主軸方向はN57度Wであり、前述のS A163と共通する。

S A164（第147図） S D151と重複しているが、柱穴としてはしっかりしており、柱列として把握した。しかし、これも詳細は不明である。

S A165（第148図） これも1間分しかないが、柱間寸法2.8mの柱列である。柱掘形の直径が40cm

～50cmの方形を呈し、主軸方向はN64度Wである。ひとつの柱穴（H10pit4）から墨書山茶碗（530）が出土した。

S A166（第149図） これも1間分しか確認できないが、柱間寸法1.8mの柱列である。柱掘形は、直径50～60cmの方形ないしは隅丸方形を呈し、主軸方向はN63度Wである。柱穴埋土から土馬（524）が出土した。

S E129（第150図） 調査区の制約のため北半分しか検出されなかったが、直径2m、深さ1.5m以上の円形井戸である。埋土から山茶碗（478～480）や曲物（1269～1271）が出土した。

S K131（第152図） 長さ1.4m、幅0.4mの長楕円形の土坑で、深さ10cmを図る。埋土から陶器小皿（481）が出土している。

S K132（第151図） 東側のN区にも延びる遺構で、N区部分も含めて長径2.1m、短径1.5mの不定形状の土坑である。埋土から土師器鍋や山茶碗など多くの土器類（488～501）が出土した。

S D150（第153図） 幅0.5m、深さ12cmの細い溝である。埋土から山茶碗（502）が出土した。なお、本来続くはずのO区で検出されなかったのはそこまで延びずに溝が完結したのではなく、調査精度上の問題と思われる。

S D151（第153図） 幅1.2m、深さ11cmの溝である。東側に隣接するN区には楕円形の土坑状落ち込みがあり、あるいはここに連続する溝かもしれない。

S R137（第154図） 調査区の北西端で確認された幅2.6mの旧河道であるが、南接するO区では確認されていない。図示したのは中世の山茶碗（515）であるが、他の時期のものも混じる。

S Z138（「S R134・S R136」・「S Z138」）それぞれ間に細い溝（このうち「S R134」と「S Z138」の間はS D151）があるため調査時は別々の旧河道として認識・調査されたが、土層観察からは同一のものであることを示しており、ここは138をもって遺構番号に代表させた。しかし、この遺構が旧河道といえるかどうかは疑問があり、土層観察からは後述のS Z139に乗る土層であることが判明しており、遺構というよりは層序の変わり目の土質の差を「遺構」として認識した可能性が高い。ただし、



第153図 M区SD・SR位置図、東壁断面模式図（位置図1：200、断面模式図垂直方向1：40）

報告に当たっては、この部分をさしあたって不明遺構（S Z）として扱っている。従って、「S R 134」や「S R 136」、「S Z 138」は、S Z 138に包含させたうえで、遺物出土地点の別を示すものとして扱った。なお、後述の「S R 153」も、S Z 138と同一層の可能性はある（以上、第153図参照）。

埋土からは、「S R 134」地点から山茶碗類や土師器類など（504～510）が、「S R 136」地点からも山茶碗や土師器皿など（511～514）が、「S Z 138」地点からは山茶碗（516）や瓦器（517）が出土している。なお、S A 166はここをベースに遺構が切り込まれている。

S Z 139（第153図） これも不明遺構として認識されているが、替田遺跡の基本層序（第3章参照）の5 a層そのものの可能性が高く、さらにその形状は土層観察から土手のように盛り上がる形状を呈していたらしい。埋土からは陶器片（518）が出土しているが、完掘されていないので上面出土遺物ということになる。

S R 153（第153図） 一見すると旧河道の様にみえるが、これも下位層上面の土質の変化を遺構として扱った可能性が高く、前述のS Z 138と同一の土層の延長部であると思われる。埋土から土師器皿（519）が出土しているが、この土器をもって当層の時期が限定できるわけではない。

H 7 pit 25（第157図） 直径35cmほどの円形柱穴で、埋土から山茶碗（525）と土師器小皿（526）が出土した。

H 8 pit 4（第158図） S B 162の柱筋に乗る柱穴であり、S B 162を構成する柱穴の可能性もある。埋土から山茶碗（527～529）が出土した。

H 11 pit 1（第155図） 直径40cm程の方形のピットである。柱痕も確認できることから掘立柱建物の柱穴であろう。埋土から陶器小碗（531）が出土している。

H 3 pit 5（第156図） 長径40cmの楕円形ピットである。埋土から山茶碗の底部（532）が出土している。

H 6 pit 12（第157図） 長径35cm程の方形柱穴である。埋土からロクロ土師器小皿（533）が出土した。

4 出土遺物

a 遺構出土遺物

S E 129出土遺物（478～480・1269～1271）
土器はいずれも山茶碗、木製品は曲物である。山茶碗のうち、478は知多・猿投系、479と480は猿投・瀬戸系である。478の内面には研磨は認められない。曲物は、いずれも側板である。

S K 131出土遺物（481） 陶器小皿である。知多・猿投系である。

S D 140出土遺物（482～486） 土師器鍋（482）、山茶碗（483・485）、陶器小皿（486）、白磁碗（484）がある。山茶碗はいずれも知多・猿投系、陶器小皿は渥美系である。

S D 146出土遺物（487） 弥生土器の壺底部である。やや底部の立ち上がり急である。

S K 132出土遺物（488～501） 土師器の鍋（488～490）・小皿（491）・皿（492）、山茶碗（493～499）・陶器壺（500）・陶器鉢（501）がある。土師器の鍋と小皿、皿はいずれも南伊勢系である。山茶碗は、499が知多・猿投系である以外はすべて渥美系で、壺も渥美である。陶器鉢は高台を欠いた後、研磨を施している。全体に渥美系の割合が多いのが特筆される。

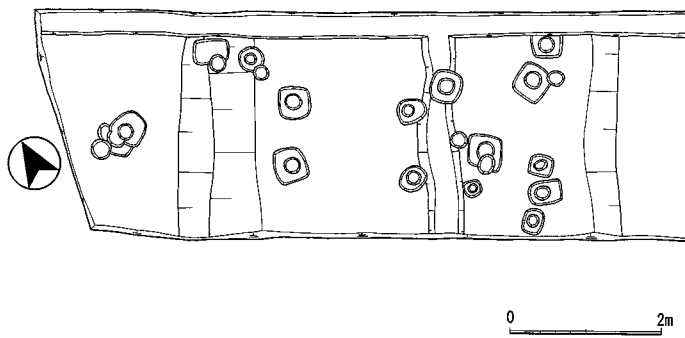
S D 150出土遺物（502） 山茶碗である。瀬戸・猿投系で、高台はない。

S D 151出土遺物（503） 山茶碗である。知多・猿投系である。

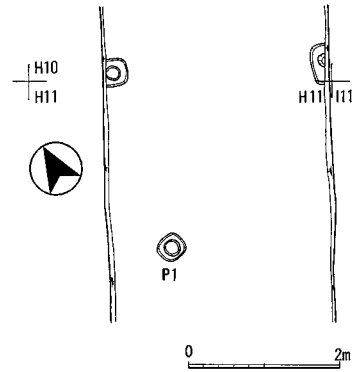
S R 137出土遺物（515） 山茶碗の底部で、渥美系である。

S Z 138出土遺物（504～514・516～517） 山茶碗（505・511～513・516）、陶器小碗（504）・土師器皿（506・514）、ロクロ土師器小皿（507）、土師器小皿（508）、土師器甕（509）、瓦器碗（517）、土製小容器（510）がある。山茶碗・陶器小碗類は、504・512が猿投系、505・511・513が渥美系、516が知多・猿投系である。土師器小皿508は雲出島貫遺跡分類⁽¹⁾の小皿b 2類、土師器皿514は口縁部に2段ナデを施した12世紀の所産である。山茶碗505は、底部内面に墨痕があり転用碗と思われる。

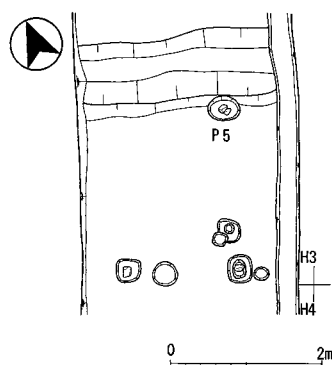
S Z 139出土遺物（518） 緑釉陶器碗である。焼成は土師質である。



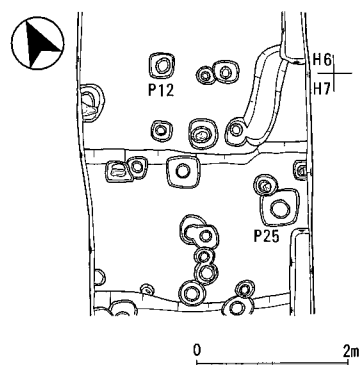
第154図 S R 137実測図 (1 : 100)



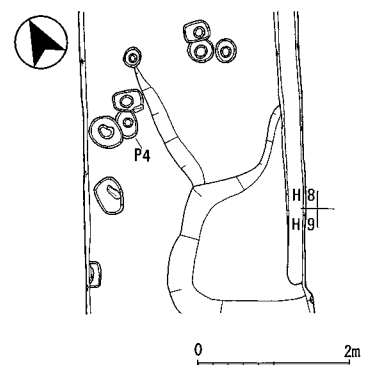
第155図 H 11pit 1位置図 (1 : 100)



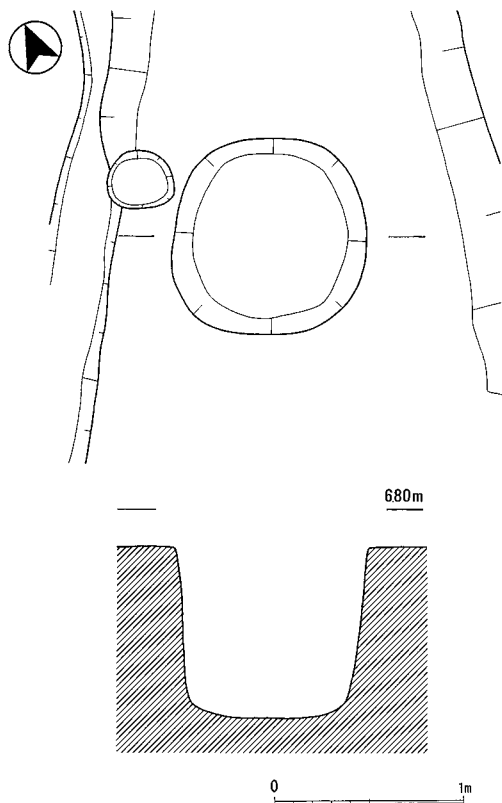
第156図 H 3 pit 5位置図
(1 : 100)



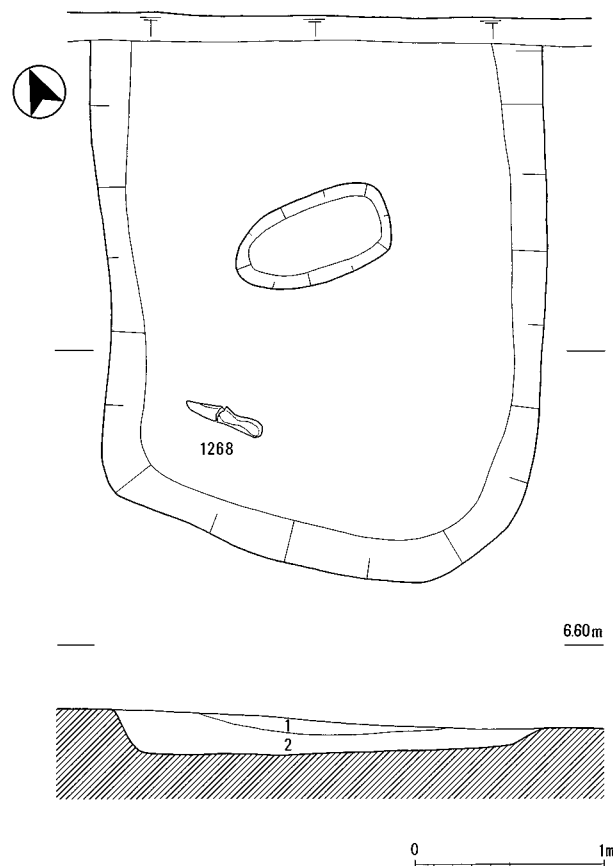
第157図 H 6 pit 12、H 7 pit 25位置図
(1 : 100)



第158図 H 8 pit 4位置図
(1 : 100)



第159図 S K 409実測図 (1 : 40)



第160図 S X 425実測図 (1 : 40)

SR153出土遺物(519) 土師器皿である。

SB162出土遺物(520～523) 土師器甕(520)、山茶碗(521～522)、土師器小皿(523)がある。土師器甕は、口縁部を内側に折り返して内斜面を形成し、体部をナデ調整する鍋的な土器である。山茶碗は、521が渥美系、522が瀬戸である。土師器小皿は南伊勢系で、IIb型式に相当する。

SA166出土遺物(524) 土馬である。焼成は土師質である。肢体は欠損し、頭部も欠くが、頭部を接合する際に頭部と胴部を繋ぐ連結補助材を噛ましたと推定される穿孔が残る。全体にナデ・オサエ調整がなされている。

SA165出土遺物(530) 陶器小皿で、猿投・知多系である。底部に「+」墨書が施されている。

H7pit25出土遺物(525～526) 山茶碗(525)と土師器小皿(526)がある。山茶碗は知多系、土師器小皿は中北勢系である。

H8pit4出土遺物(527～529) いずれも山茶碗で、527が渥美系、他は知多系である。

H11pit1出土遺物(531) 陶器小碗で、猿投・知多系である。

H3pit5出土遺物(532) 山茶碗で、知多・猿投系である。

H6pit12出土遺物(533) ロクロ土師器小皿である。

b M区包含層等出土遺物(534～550)

534～535はサヌカイト製の石鏃、536～539は縄文土器深鉢、540～544は弥生土器壺、545～547は弥生土器甕、548は土師器S字甕、549は青磁碗、550は白磁小皿である。縄文土器はいずれも晩期の突帯文土器である。弥生土器の壺は、いずれも胴部片で、540が格子目文、541が櫛による擬似流水文を施す。同じく弥生土器甕はいずれもく字形甕で、このうち545はA調整を施す。白磁は、いわゆる口ハゲの小皿になるものであろう。

註

(1) 三重県埋蔵文化財センター『嶋抜II』 2000

第7節 N区の調査

1 概要

途中、用水路の存在などのため調査できなかった部分も含むが、幅2.8m、東西91mの細長いトレンチを主軸とし、そこから南側へ派生する南北20mのトレンチからなる。L区に連続する西側の調査密度は濃い、東側にいくに従って遺構密度は薄くなり、トレンチ東端部ではほぼ遺構はなくなる。

2 小地区設定方法

平成14年度の6次調査の際、L区南側から東に延びるトレンチとして調査が実施されたが、小地区の設定はL区から独立して行っている。具体的には、国土座標には拠らずに調査区形状に合わせたかたちで小地区の付与を行い、東西軸は西から東へ数字を、南北軸は南から北へアルファベットを付与している。つまり、本調査区においては、北西方向を小地区表示の基点とする三重県原則には則らず、西南側を小地区表示の起点としている(第9図)。

3 遺構

SX425(第160図) 北側が調査区外となるが、長径1.3m以上×短径1.2mの長方形土坑である。埋

土から土師器鍋(551)と刀子(1268)が出土しており、土坑墓であろう。

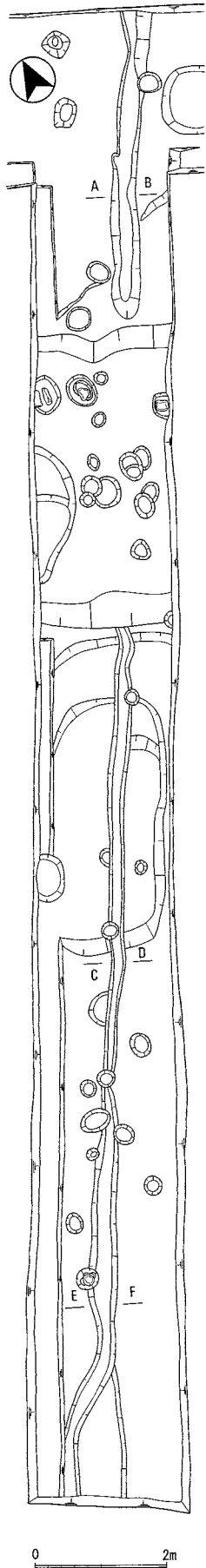
SK440(第162図) 直径70cmの小さな円形土坑で、深さ6cmを測る。埋土から土器類(554～557)のほか、曲物底板破片(558)が出土していることから、井戸として使用されたものと思われる。

SK409(第159図) 直径1.1mの円形土坑で、深さ93cmを測る。埋土から、陶器小皿(559)が出土した。

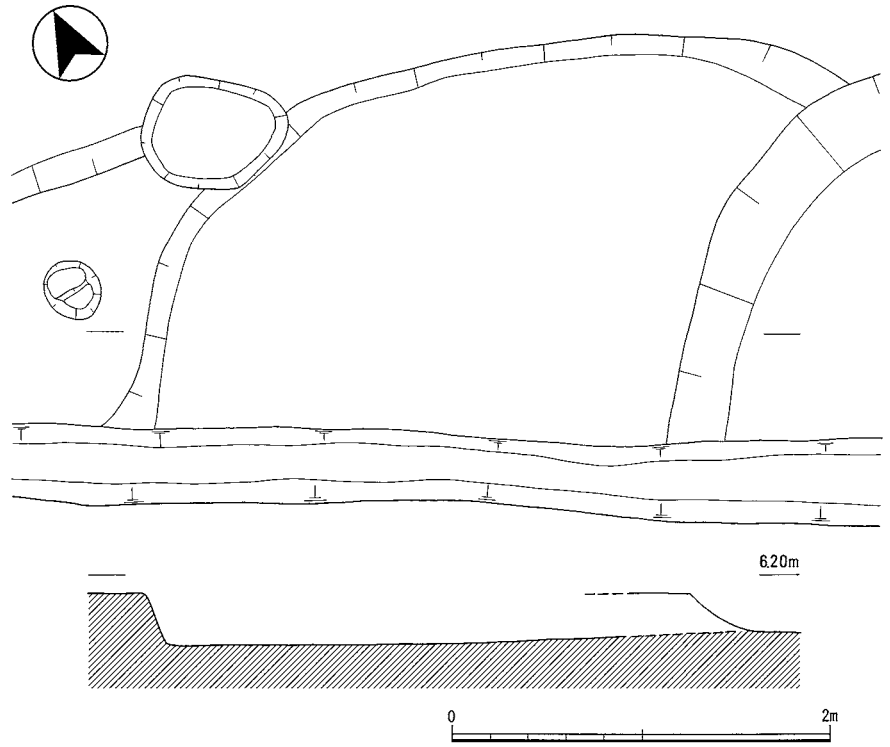
SD433(第167図) 幅0.6m、深さ18cmの南北溝であるが、北接するO区部分では未検出である。埋土から土師器甕(552～553)が出土した。

SZ443(第170図) SD430に切られている落ち込み状の遺構で、深さ21cmを測る。西側トレンチの東端で検出したが、東側トレンチでは未検出である。埋土から古墳時代の須恵器高杯(560)やロクロ土師器(561～562)が出土しており、時期的な限定ができない。

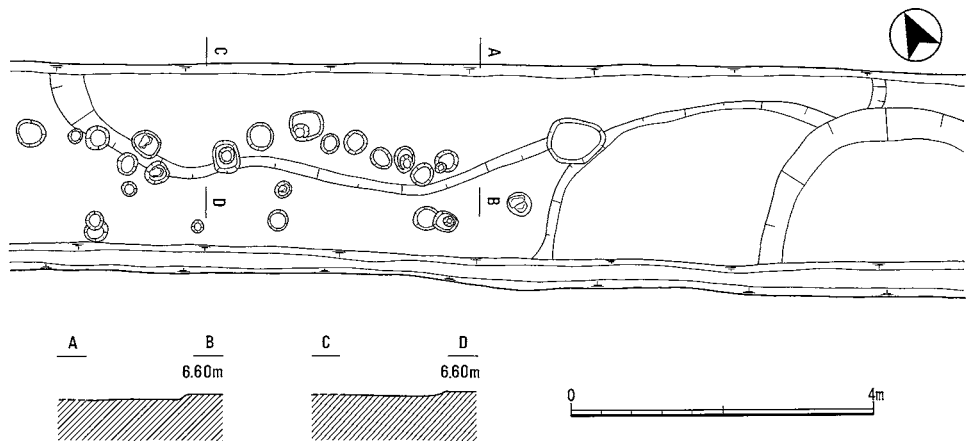
SD401(第161図) 途中別遺構の重複のため途切れる部分があるが、長さ11m以上×幅0.4cm、



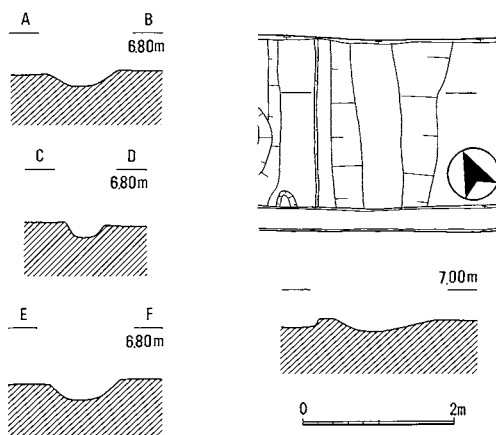
第161图 S D 401実測図
(平面図 1 : 100、断面図 1 : 40)



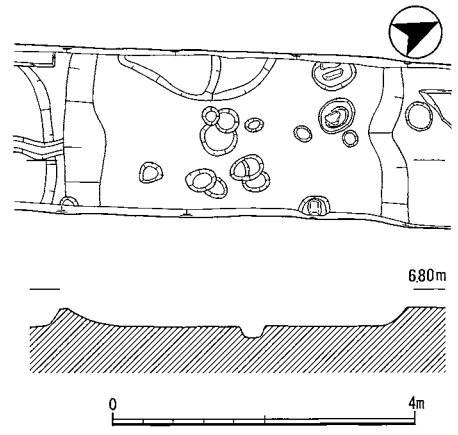
第162图 S K 440実測図 (1 : 40)



第163图 S Z 441実測図 (1 : 100)



第164图 S D 404実測図
(1 : 100)



第165图 S D 408実測図 (1 : 100)

深さ16cmの細長い南北溝である。埋土から鉄製品(563~564)の出土があるほか、切り合い関係からSD405やSD411、SD442、SD335~336などよりも後出する。

SD404(第164図) 幅1.6m、深さ20cmの南北溝であるが、北接するO区部分では遺構検出がなされていない。埋土から管玉(565)が出土した。

SD405(第166図) 西側が調査区外となるが遺構としては遠からず収束すると思われる。さすれば、長径3.9m×幅1.7程度の楕円形土坑で、深さは22cmを測る。埋土から山茶碗(566)や土師器小皿(567~568)が出土している。

SK423・SK424(第169図) 中央部をSD420に切られているが、南北に主軸をもつ楕円形状の落ち込みで、その北半部を検出している。土坑は二段に掘り込まれており、外周の落ち込みをSK424、その床面で確認された内側の落ち込みをSK423として現場段階では把握した。外側のSK424は、短径0.6m・深さ28cm、内側のSK423は深さ28cmを測る。SK423埋土からは山茶碗(571)、SK424埋土からは山茶碗(574)や常滑大甕(575)が出土している。

SD435(第168図) 重複が多く規模は確認できないが、幅0.7m、深さ19cm程度の溝である。調査区の制約により端部が確認できないため確定できないが、楕円形の土坑状のものである可能性もある。埋土から山茶碗(572)が出土した。

SZ441(第163図) 北側が調査区外となるため全体形は不明だが、現況で長さ11m、幅1.5m、深さ9cmの不定形な落ち込みの南側部分を確認している。埋土から山茶碗(573)が出土した。

4 出土遺物

a 遺構出土遺物

SX425出土遺物(551・1268) 土師器甕と刀子である。土師器甕は口縁部を肥厚させて上端面を形成する。体部はナデ調整を施す。

SD433出土遺物(552~553) いずれも土師器甕である。ともに口縁端部は外斜面を形成する。553は体部にハケ調整が残る。前述の551よりは古相を示す。

SK440出土遺物(554~558) 陶器小皿

(554~555)、山茶碗(556~557)のほか、木製品としてヒノキ科アスナロ属の板材(558)がある。557は底部の内外に墨痕が認められ、転用碗として使用されたいらしい。

SZ443出土遺物(560~562) 須恵器高杯(560)、ロクロ土師器の台付皿(561)と小皿(562)がある。須恵器高杯はいわゆる古墳時代タイプで、混入であろう。

SD401出土遺物(563~564) ともに鉄製品である。断面方形の釘であろうか。

SD404出土遺物(565) 管玉であるが、穿孔は不十分である。

SD405出土遺物(566~568) 山茶碗(566)と土師器小皿(567~568)がある。

SD408出土遺物(569~570) 須恵器杯蓋(569)、陶器大甕(570)がある。須恵器は、古代のもので、宝珠ツマミが欠損している。陶器大甕は、常滑である。

SK423出土遺物(571) 山茶碗である。

SD435出土遺物(572) 山茶碗である。

SZ441出土遺物(573) 山茶碗である。

SK424出土遺物(574~575) 山茶碗(574)と陶器甕(575)がある。甕は、常滑である。

G18pit2出土遺物(576~579) 土師器甕(576)、黒色土器碗(577~578)、緑釉陶器碗(579)である。576は口縁端部が肥厚し、上端面を形成する。

G5pit1出土遺物(580) 山茶碗である。

G6pit2出土遺物(581) 山茶碗である。

G10pit12出土遺物(582) 陶器小皿である。

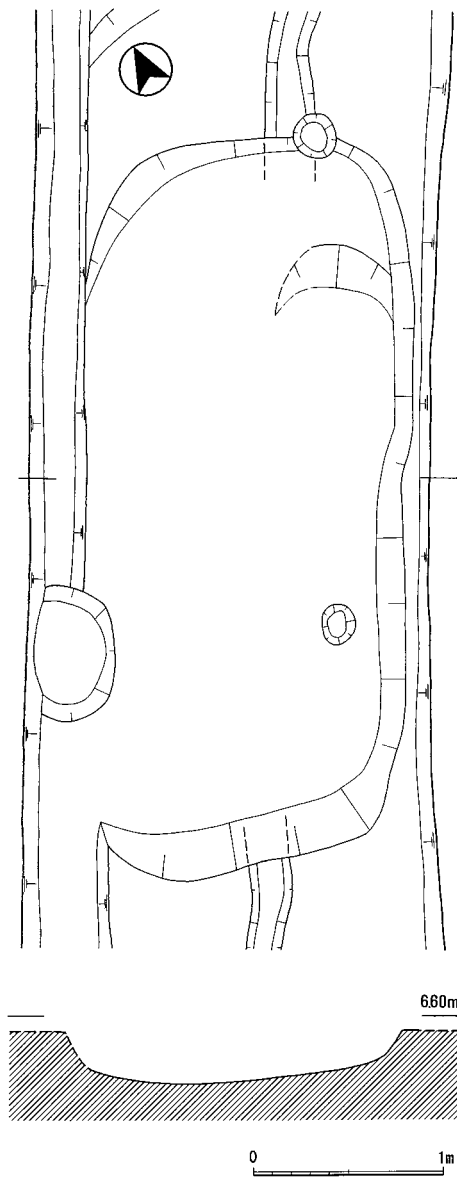
F9pit3出土遺物(583) ロクロ土師器の台付皿である。体部内面にはハケ、外面にはオサエの痕跡が残り、高台は高い。

G14pit2出土遺物(584) 土師器鍋で、口縁端部を内側に折り返した南伊勢系である。

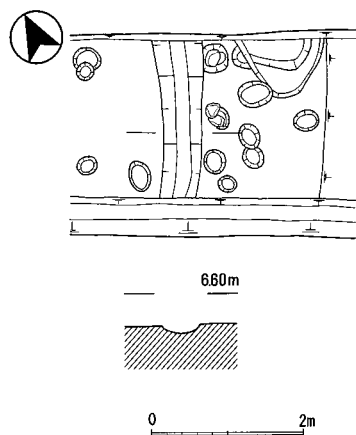
G14pit3出土遺物(585) 土師器小皿で、南伊勢系である。

G14pit4出土遺物(586) 土師器小皿である。

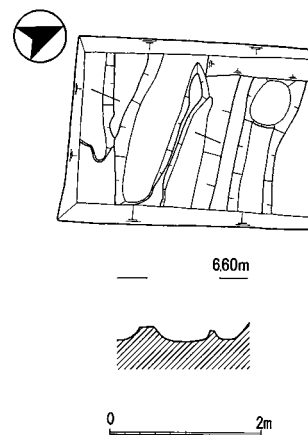
G9pit1出土遺物(587~588) 山茶碗(587)と鉄製の釘(588)がある。山茶碗には、墨書(「大」?)が存在する。



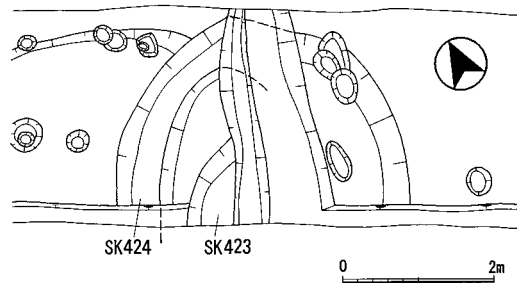
第166図 S D 405実測図 (1 : 40)



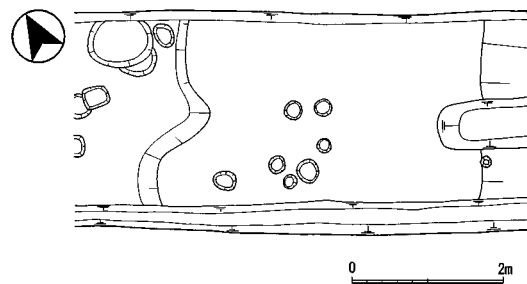
第167図 S D 433実測図
(1 : 100)



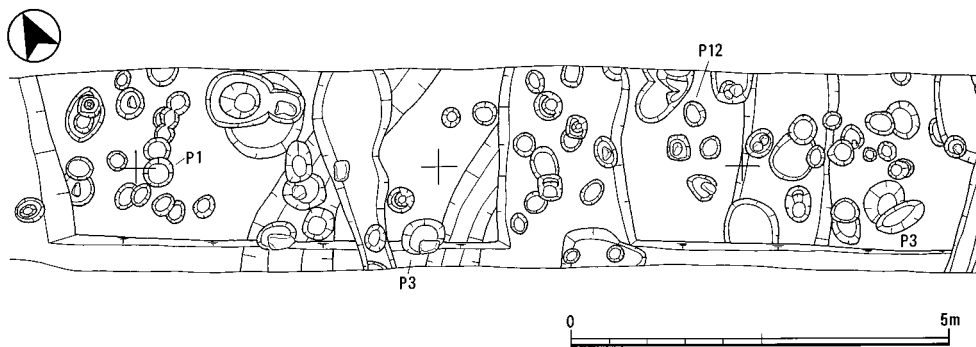
第168図 S D 435実測図
(1 : 100)



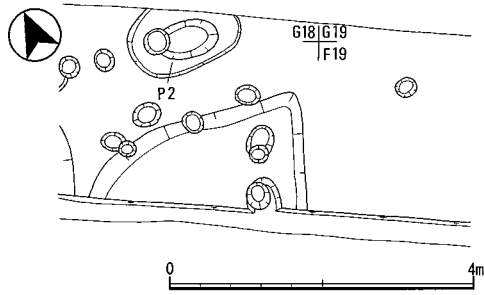
第169図 S K 424・423実測図 (1 : 100)



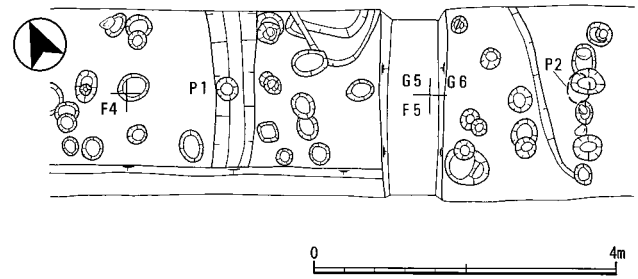
第170図 S Z 443実測図 (1 : 100)



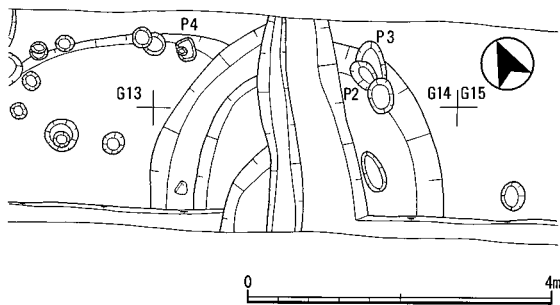
第171図 G 9 pit 1、F 9 pit 3、G 10 pit 12、F 11 pit 3 位置図 (1 : 100)



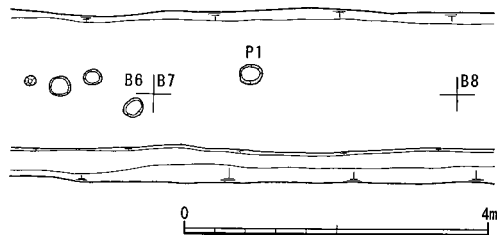
第172図 G 18pit 2 位置図 (1 : 100)



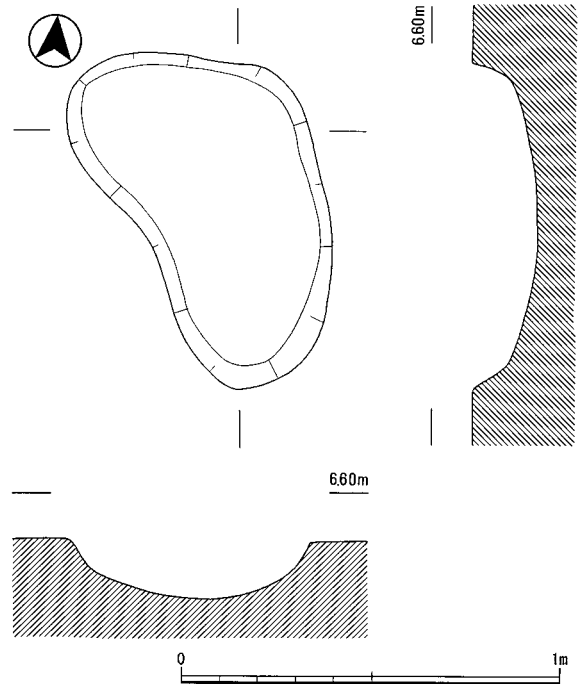
第173図 G 5 pit 1、G 6 pit 2 位置図 (1 : 100)



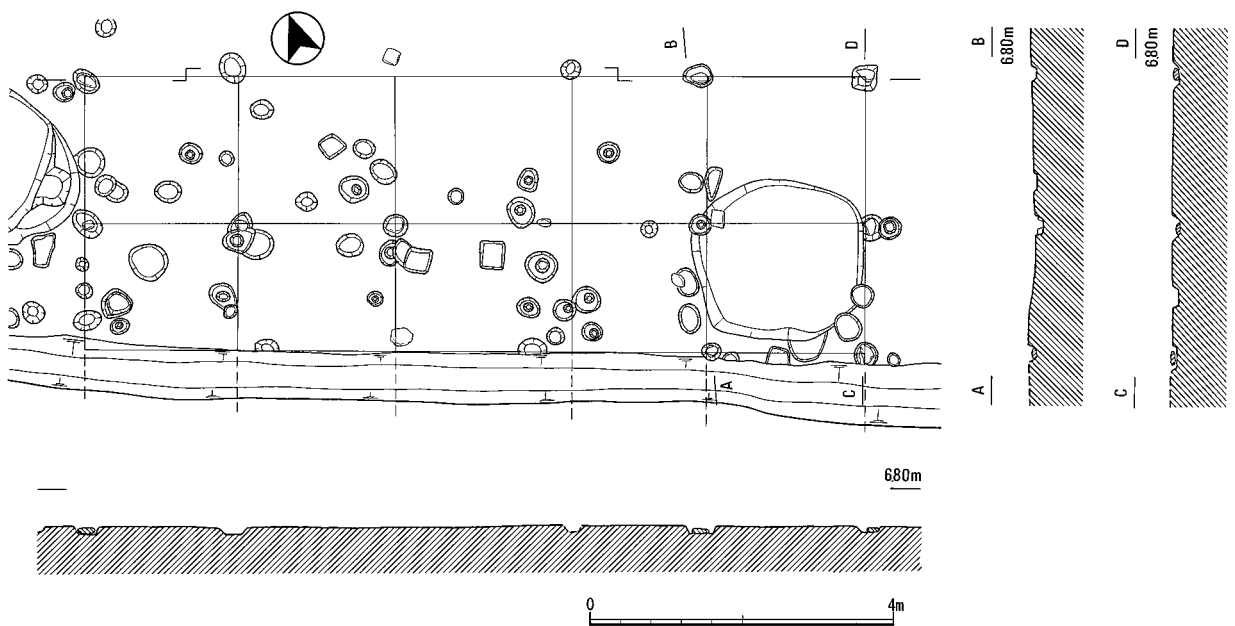
第174図 G 14pit 2・3・4 位置図 (1 : 100)



第175図 B 7 pit 1 位置図 (1 : 100)



第176図 S X 540実測図 (1 : 20)



第177図 S B 549実測図 (1 : 100)

F 11pit 3 出土遺物 (589) 平面菱形を呈する鉄製品であるが、用途は不明である。片刃が付いており、利器の可能性はある。

B 7 pit 1 出土遺物 (590) 青磁碗底部である。削り出し高台で、高台底にも施釉が及んでいる。

b N区包含層出土遺物

打製石器 (591~592) スクレイパー (591) と平基式の石鎌 (592) があり、ともにサヌカイト製である。

縄文土器 (593) 晩期の突帯文土器の深鉢である。刻目突帯で、条痕をもつ。

小刀 (594) 鉄製の小刀の茎部と思われる個体

で、2箇所の目釘孔をもつ。刃部は茎部から関などをもたずに移行する。

弥生土器 (596) 壺の体部である。指頭圧痕による押圧隆帯が3条みられる。

古代の土器 (603~604) 土師器甕 (603) と黒色土器碗 (604) である。黒色土器は、内面のみ黒色化された黒色土器A類である。

中世の土器 (597~603・605~606) 陶器鉢 (597)、山茶碗 (598)、陶器小皿 (599~602)、ロクロ土師器小皿 (605)、土師器小皿 (606) を図示した。このうち、土師器小皿606は南伊勢系である。

第8節 O区の調査

1 概要

O区は、平成15年度の7次調査区を宛てた。この調査区は、国道163号線BPに伴う幅18m、長さ約100mの調査区であるが、この区にはこの段階で既に調査が終了している14年度調査区(M区)が貫入していたため、トレンチとしてはM区を境に東西の2ヶ所に分断して実施した。

さて、M区や西接するL区、それに南接するN区ではかなり遺構密度が濃かったのに対し、O区では極端に薄かった。L区東端とO区西端の間には、幅4.5mの未調査区が介在するため、ここに何らかの区画施設があってO区の遺構密度が薄かった可能性も残るが、同条件のN区では相応の遺構が確認されており、調査方法上の問題に起因するかもしれない。

2 小地区設定方法

小地区設定は、国土座標には則らずに調査区の形状に合わせたかたちで独立して実施した。三重県の小地区設定における基本原則に従って東西軸は西から東へアルファベットで、南北軸は北から南へ数字で表示している(第11図)。

3 遺構

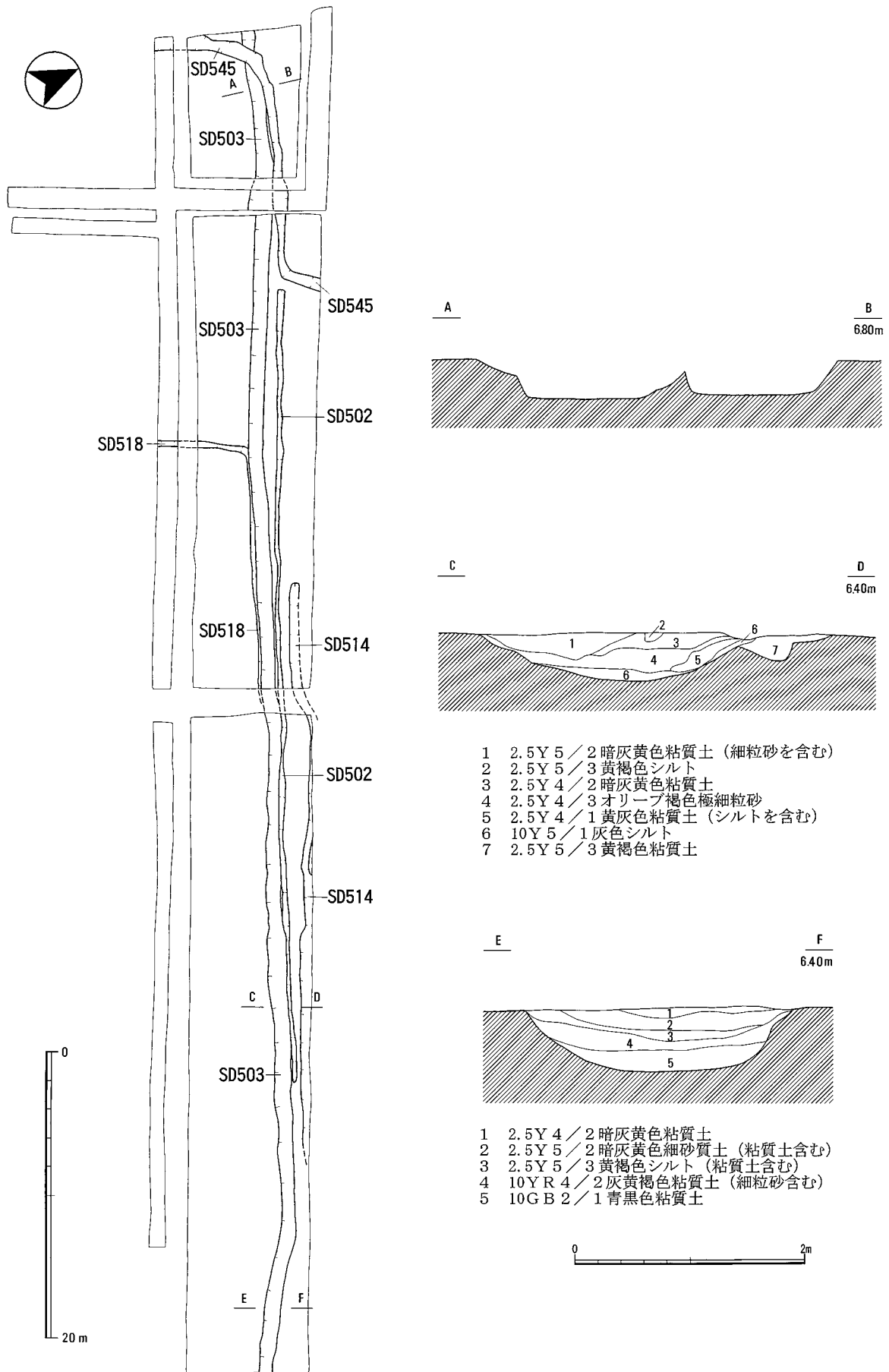
SD501(第179図) 東調査区東北隅に所在する落ち込み状遺構であるが、北側及び東側は調査区外、南側はSD515、西側はSD517と重複し、全体形状は不明である。埋土から山茶碗をはじめとする中世の遺物(607~618)が出土しているが、切り合い関係からはSD515・517に後出する。

SD502(第178図) 東接するP区にも連続する長さ93m(P区含)×幅1m、深さ31cmを測る、ほぼ一直線に延びる細長い東西溝である。調査所見では、ほぼ同一場所を流れるSR539とは別溝として扱っているが、SD502はSR539を掘り直したものかもしれない。埋土からは、中世の遺物を中心に古墳~古代の遺物も混入して出土している。

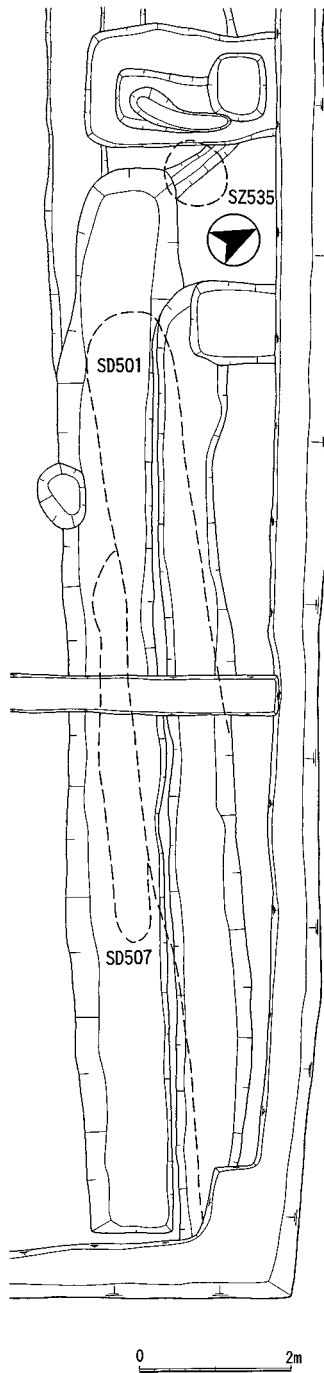
SD503(第178図) 東接するP区にも続く溝であるが、西接するL区では未確認である。ただし、直接結合はしないものの、SD210はSD503の西側延長部分に相当する部分に位置する。O区の西端部には攪乱土坑があるが、SD503はそのまま西側へ延びていく。東側はP区東端部よりさらに東側へ延びる。調査区内の総延長は90m、幅2.2m、深さ45cmを測る。切り合い関係からSD518やSD519などに後出する。大量の中世遺物が出土しており、代表的な77点(642~719)を図示した。

SD504(第183図) 長さ20m以上×幅0.7m、深さ16cmの東西溝である。切り合い関係からSD508に後出し、SK525よりは先行する。埋土から中世前期を中心とした土器類(720~724、ただし724は須恵器)が出土した。なお、SD504の東側に直交するように位置するSD511は、SD504とは約2m離れてあたかもSD504とSD511でL字状を呈するように存在している。

SD507(第179図) 切り合い関係からSD514に後出し、SD515に先行する浅い溝であった。重複



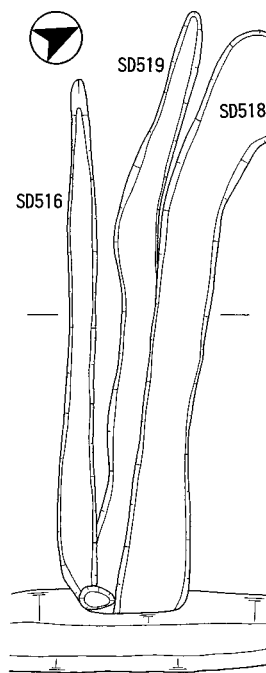
第178図 S D 502・503・518・545実測図 (全体図 1 : 400、土層断面図 1 : 50)



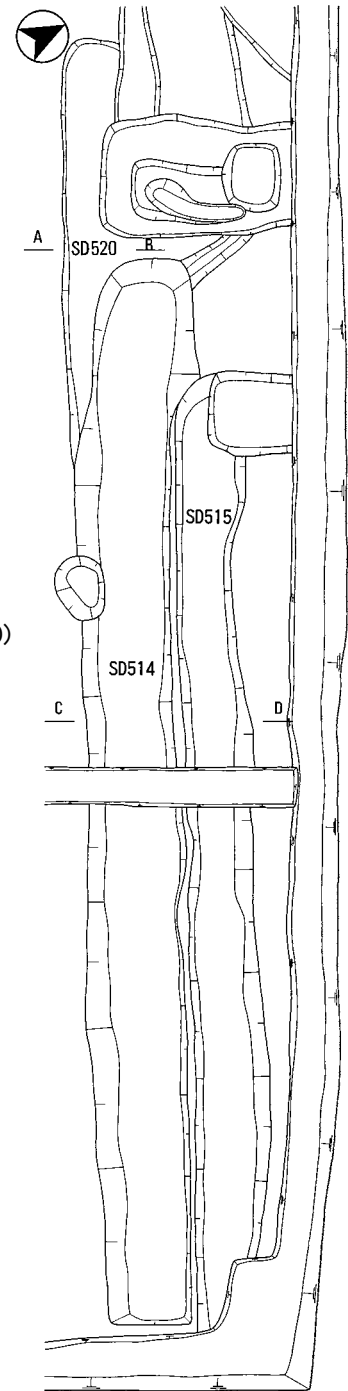
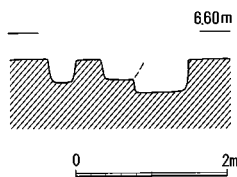
第179図 S D 501・507・S Z 535
位置図 (1 : 100)



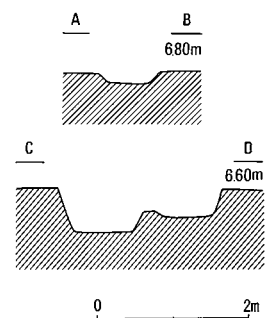
第180図 S Z 535遺物出土状況図 (1 : 40)

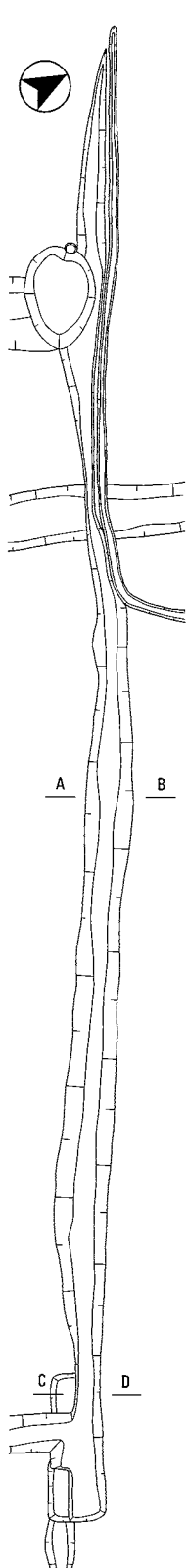


第181図 S D 516・519実測図
(1 : 100)

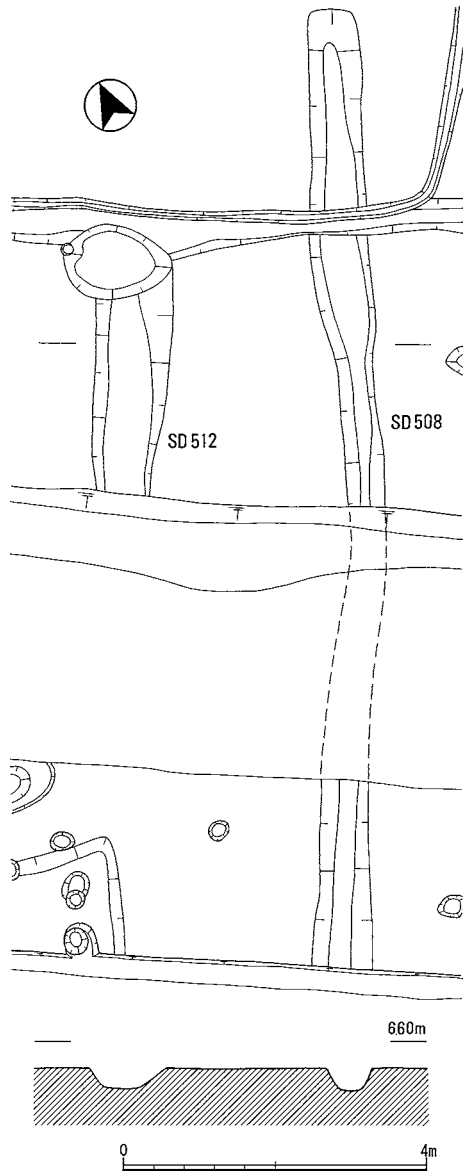


第182図 S D 514・515・520
実測図 (1 : 100)

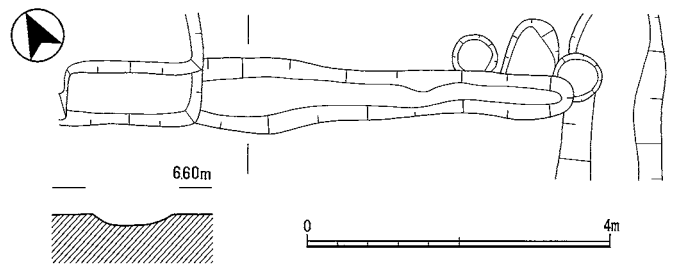
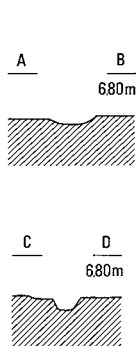




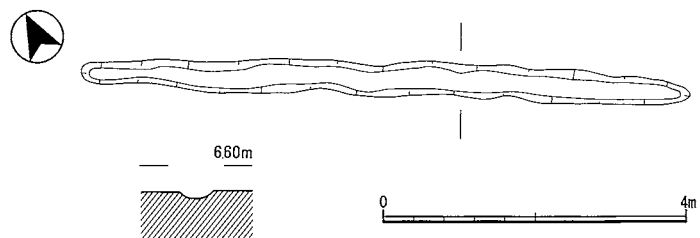
第183图 S D 504実測図 (1 : 100)



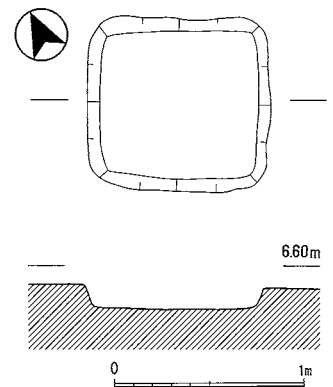
第184图 S D 508 · 512実測図 (1 : 100)



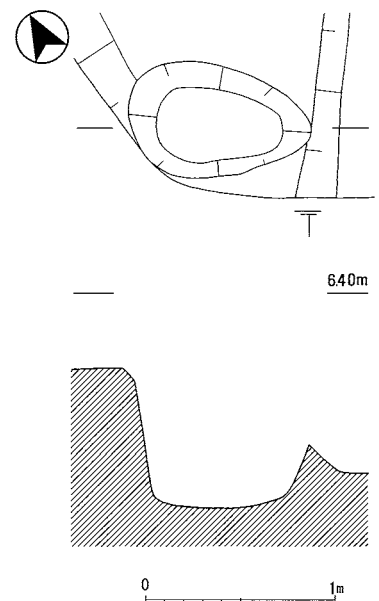
第187图 S D 513実測図 (1 : 100)



第188图 S D 544実測図 (1 : 100)



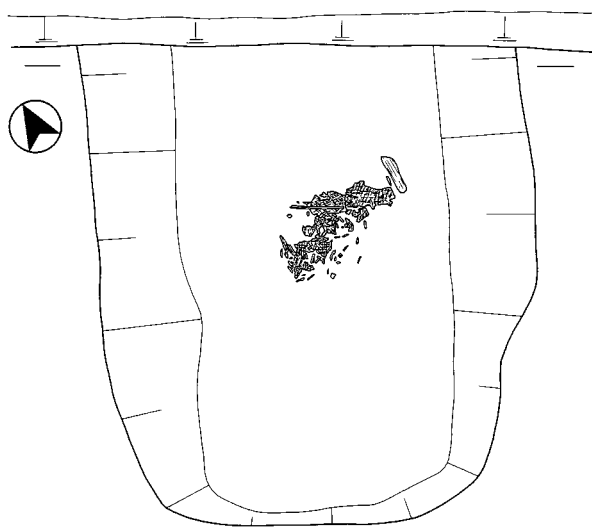
第185图 S K 547実測図 (1 : 40)



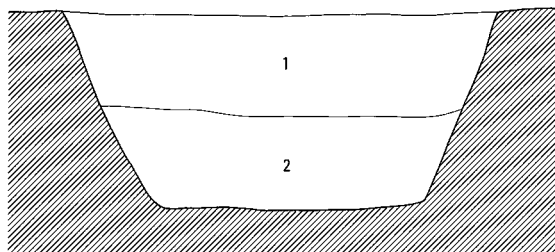
第186图 S K 536実測図 (1 : 40)



第189図 S D514遺物出土状況図 (1 : 40)



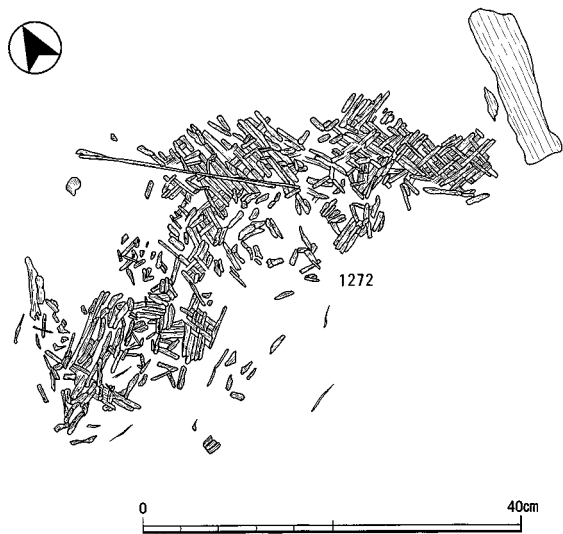
640m



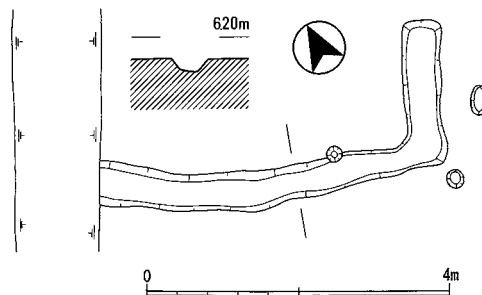
- 1 5 B 6 / 1 青灰色粘質土
(径1~5mmのマンガン粒を多く含む、しまり強い)
- 2 5 B 6 / 1 青灰色粘質土
(径1~5mmの炭化物を多く含む、しまり弱い)



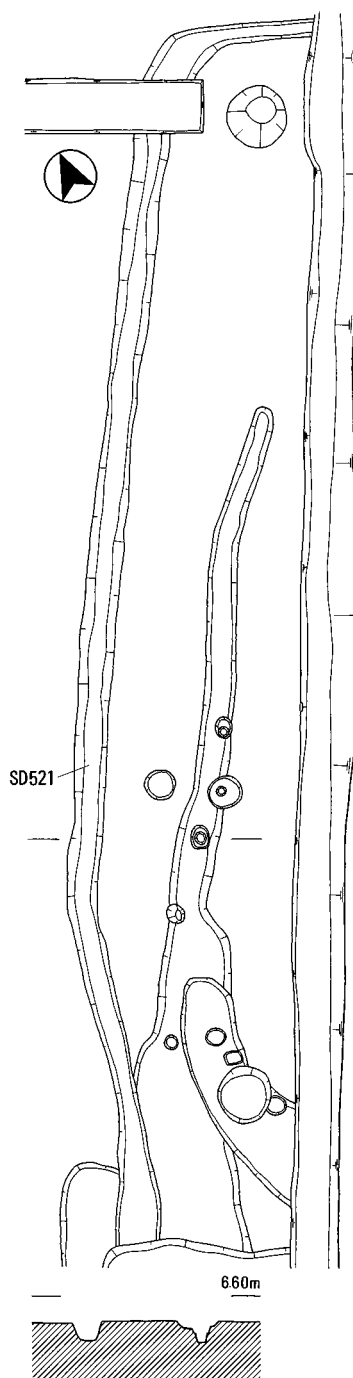
第190図 S D 517実測図 (1 : 20)



第191図 S D 517遺物出土状況図 (1 : 8)



第192図 S D 532実測図 (1 : 100)



第193図 S D 521実測図 (1 : 100)

して存在するSD514から出土遺物を峻別して取り上げたが、重複のため遺構のプラン等は明瞭でない。

SD508 (第184図) SD504に切られている南北溝で、南接するN区調査部分にも続いている。N区部分も含め、現況で長さ6.6m、幅0.8cm、深さ14cmを測る。埋土から緑釉陶器椀(731)が出土しており、平安時代の遺構とみられる。

SK510 (第195図) 別遺構の重複のため全体形は不明だが、長さ2.1m以上×幅0.8m、深さ14cmの長方形土坑である。埋土から瓦器椀(732)や土師器鍋(733)の破片が出土した。ただし、調査区外へ延びるため、溝の可能性も否定できない。

SD512 (第184図) SD508の西側に平行して存在する幅1m、深さ26cmの溝であるが、南接するN区の調査では未確認である。埋土には須恵器甕(734)なども含むが、13世紀前半の山茶椀も出土しており、中世に下る遺構であろう。SK525に切られている。

SD513 (第187図) 東西溝SD504東端部と南北溝SD511北端部を繋ぐように存在する長さ1.8m、幅0.4m、深さ7cmの小溝である。

SD514 (第189図) O区の東北隅に所在する幅0.7m、深さ65cmの溝で、P区の北側に所在する溝(調査時番号SD808)も同一溝の延長と推定される。両者をあわせると総延長は75m以上に及ぶ。完全な直線ではなく、僅かながら蛇行部分がある。東端(P区部分)はSD804との重複のため延長部分がわからないが、東側へは続いていかないためSD804所在部で収束するか、あるいは北側へ屈曲している可能性がある。埋土からは、土器や瓦をはじめとする大量の遺物類(736~895)が出土している。

SD515 (第182図) 切り合い関係からはSD501に先行し、SD514に後出する東西溝である。重複が激しく、全体形は捉えにくいだが、幅1.2m×残存長12m、深さ37cmを測る。埋土から、山茶椀類(896~898)や土師器の皿・鍋類(900~902)などが出土した。

SD516 (第181図) 幅25cm~50cm、深さ43cmの南北溝である。切り合い関係からSD519よりも後出する。なお、南接するN区では未検出である。埋土から山茶椀(903~904)が出土した。

SD517 (第190・191図) 調査区端に所在するため、溝なのか土坑状のものなのかは明瞭でないが、調査段階では一応、溝に指定されており、ここでもその見解に従った。幅1.1m、深さ53cmを測る。SD514とほぼ直交し、切り合い関係ではSD515に切られている。埋土からは漆器椀などの有機質遺物を含む遺物群(905~911)が出土した。網代編み物(写真図版22・55、遺物番号1272)も出土しており、個別実測図は作成できなかったが出土状況図(第191図)にて大まかな特徴を確認されたい。

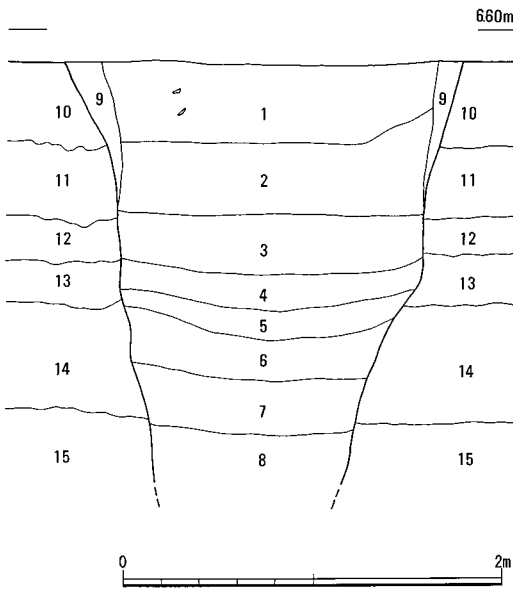
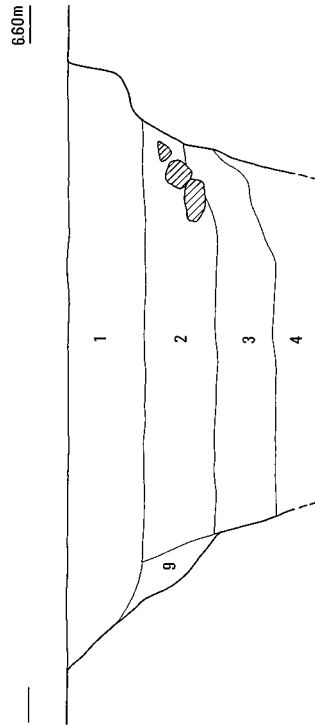
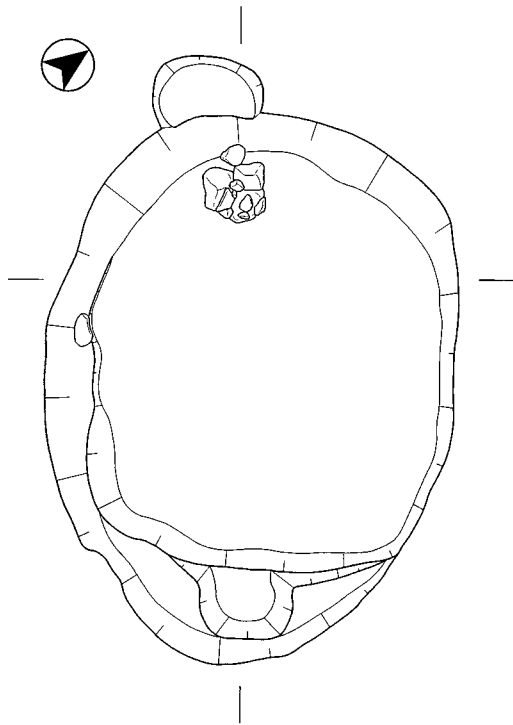
SD518・519 (第178・181図) O区東南部に位置する総延長44.4m以上を測る溝で、途中屈折してL字状を呈し、そのままN区にも連続する。切り合い関係で先行するSD519がまずあり、その後、同じ位置にSD518が掘り直されたと思われる。L字状溝の東西方向部分は、後出するSD503によって切られているため溝幅等の情報は不明だが、SD518が屈曲して南北方向に流れる部分では幅0.8m、深さ43cmを測る。埋土から山茶椀類などの中世前期の土器類(912~920)が出土している。

SD520 (第182図) 切り合い関係ではSD514を切る溝で、東側は調査区外のため不明である。幅0.8m、深さ14cmを測る。埋土から山茶椀片(932)が出土した。

SD521 (第193図) 東側は遺構の重複が多く不明だが、西側がL字状に屈折する幅0.4mの細い溝で、深さは35cmを測る。埋土から山茶椀の底部片(933)が出土した。

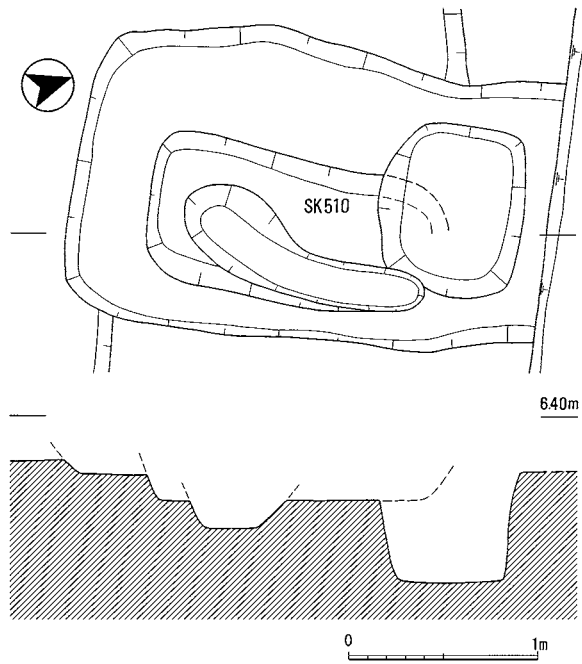
SK525 (第202図) 切り合い関係からSD512やSD504よりも後出する土坑である。長さ1.4m、幅1mの楕円形を呈し、深さ30cmを測る。埋土から山茶椀(934)が出土した。

SK529 (第194図) 長さ3m、幅2.2mの楕円形土坑で、深さ2m以上を測る。一見井戸を思わせるが、埋土には炭化物を多く含んでおり、また曲物等の出土もないことから井戸とするには疑問が残る。また、埋土からではないが、周辺部からは鉄滓小片など金属器加工に関わる遺物の痕跡が認められる。こうしたことから、やや根拠には弱い部分があるが、本遺構が金属器の鑄造に関わったものであった可能性が指摘される。なお、遺構埋土からは、山

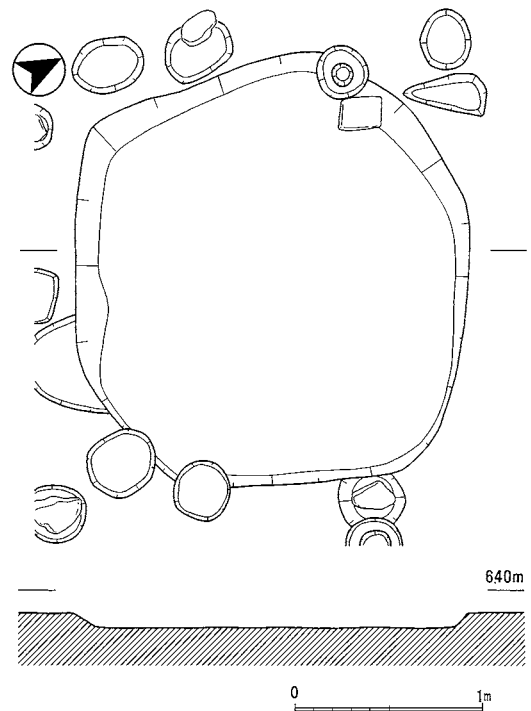


- 1 7.5YR 5 / 2 灰褐色砂質土
(径1~2cmのマンガンブロックを多く含む)
- 2 7.5YR 4 / 2 灰褐色砂質土
(径1~3cmのマンガンブロックを多く含む)
- 3 5PB 6 / 1 青灰色砂質土
(径1~5cmのマンガンブロックを多く含む。
しまりかなり強い)
- 4 5B 6 / 1 青灰色砂質土
(3層より砂粒多く混じる。しまり弱い)
- 5 5B 5 / 1 青灰色砂質土
(黒色粘土を斑状に含む)
- 6 5B 5 / 1 青灰色砂質土
(5層より砂粒や黒色粘土を多く含む)
- 7 5B 5 / 1 青灰色砂質土
- 8 5B 4 / 1 暗青灰色砂質土
- 9 5PB 6 / 1 青灰色土 (脆く容易に崩れる)
- 10 7.5YR 6 / 4 にぶい橙色土
(径1~2cmのマンガンブロックを多く含む)
- 11 7.5YR 6 / 4 にぶい橙色土 (やや砂質)
- 12 5B 5 / 1 青灰色砂質土
- 13 5B 4 / 1 青灰色砂質土
- 14 5B 5 / 1 青灰色砂質土 (水分を多く含む)
- 15 5B 4 / 1 青灰色砂質土 (水分を多く含む)

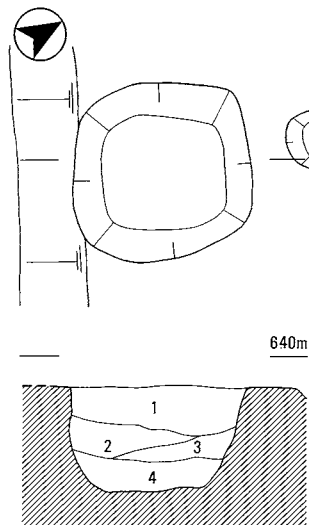
第194図 S K 529実測図 (1 : 40)



第195図 S K 510実測図 (1 : 40)

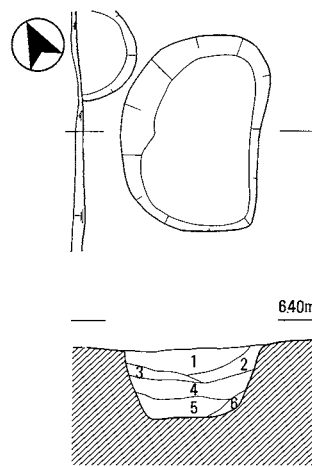


第198図 S K 534実測図 (1 : 40)



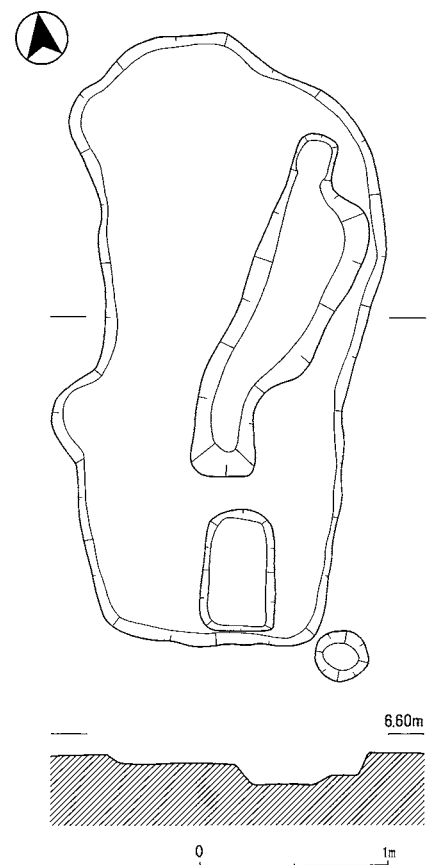
- 1 10R 4 / 1 暗赤灰色土
(径1mm以下のマンガン粒を多く含む)
- 2 10R 4 / 1 暗赤灰色土
(茶色土を斑状に少量含む。
炭化物を少量含む)
- 3 10R 3 / 2 暗赤褐色土
(茶色土を斑状に含む。
炭化物を少量含む)
- 4 10R 2 / 1 赤黒色粘質土
(灰色粘土を少量含む)

第196図 S K 531実測図
(1 : 40)



- 1 10R 4 / 1 暗赤灰色土
(径1cmのマンガンブロックを多く含む)
- 2 10R 4 / 1 暗赤灰色土
- 3 10R 4 / 1 暗赤灰色粘質土
(径5mmのマンガンブロックを多く含む)
- 4 10R 3 / 2 暗赤褐色土
(径1cmのマンガンブロックと
径5cmの灰色粘土を少量含む)
- 5 10R 2 / 1 赤黒色砂質土
- 6 10R 2 / 1 赤黒色土
(径1mm以下のシルト
ブロックを多く含む)

第197図 S K 533実測図
(1 : 40)



第199図 S K 541実測図 (1 : 40)

茶碗や陶器、土師器類などの中世前期の土器群(935~948)が出土した。

SK531(第196図) 直径0.9mの円形土坑で、深さ62cmを測る。埋土から山茶碗(950~953)や土師器小皿(954~958)が出土した。

SD532(第192図) SK529の西隣に所在する幅0.5m、深さ23cmの溝である。西側は途切れていて不明だが、東側はL字状に屈折し、現存部の総延長6.5mを測る。埋土には古墳時代のS字襖脚台部(967)なども混じるが、基本的には中世の土器類(963~966)が出土している

SK533(第197図) 長さ1m、幅0.8mの略楕円形土坑で、深さ38cmを測る。埋土から山茶碗(959~961)や土師器鍋小片(962)が出土した。

SK534(第198図) 長径2.2m×短径2.1m、深さ11cmの土坑である。SB549の東南部に所在するため、SB549に伴ういわゆる「南東隅土坑」の可能性もあるが、調査区の制約のためSB549の南への広がり不明で、ここでは可能性の指摘にとどめる。埋土から、山茶碗など中世前期の遺物が出土した。

SZ535(第179・180図) 長さ1m、幅80cm程度の範囲で土器が集中して存在しており、土器集中として把握した。明瞭な掘り込みは確認できなかったため、遺構としての安定性には欠ける。山茶碗など中世前期を中心とする土器(972~992)が出土している。

SK536(第186図) 切り合い関係ではSD516・518・519を切って存在する円形の土坑である。調査区の端で確認されたため全体形は不明だが、径1m内外と思われる。埋土から墨書を含む山茶碗(993~996)が出土した。

SX537(第200図) 深さ26cm・直径80cmの円形土坑の掘形に底部を穿孔した常滑大甕(1003)を据えた遺構である。大甕の内部から、木質部の残った小刀(998)や土師器小皿・皿類(999~1002)が出土しており、中世の甕棺墓と考えられる。

SE538(第201図) 直径2.2m、深さ1.3m以上の円形井戸である。埋土から曲物底板(997)が出土した。

SR539 調査区の東端でごく一端を押さえたが、ほとんどSD502と重複しているため詳細は不明で

ある。埋土からは、古墳~奈良時代の須恵器から黒色土器、土師器小皿や鍋などが出土したが、こうした状況はSD502の所見と同じで、SD502のものが混入している可能性も否定できない。一応、調査時の遺物取り上げで分別されていたため、その所見を尊重した。なお、遺構の個別図はない。

SX540(第176図) 長さ1.9m、幅60cmの長方形土坑で、埋土に焼骨とみられる骨片が混ざっていたことから土坑墓と考えられた。

SK541(第199図) 西側調査区で出土したもので、長さ3.3m、幅1.3mの不定長方形の土坑で、深さ19cmを測る。埋土からは弥生土器(1057)が出土しているが、底部片であり、これのみで遺構の時期決定をしてよいか疑問が残る。

SD544(第188図) 長さ9m、幅0.4m、深さ9cmを測る東西方向の小溝である。埋土から土師器小皿(1058)が出土した。

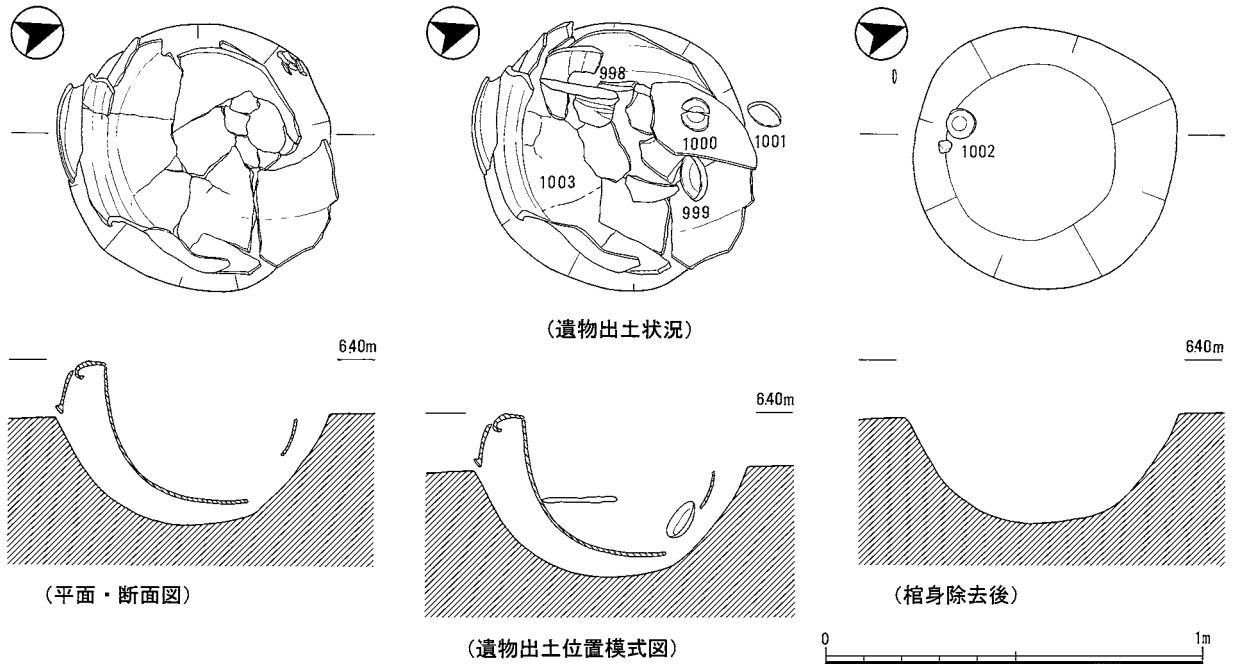
SD545(第178図) 2度クランク状に屈折する幅2m、深さ33cmの溝で、調査区内の総延長43mを測る。切り合い関係からSD503を切って存在する。埋土から山茶碗や緑釉陶器、信楽插鉢、瓦などの遺物(1059~1069)が出土した。

SK547(第185図) 一辺1mの正方形プランの土坑で、深さ12cmを測る。埋土からロクロ土師器の底部片が出土している。

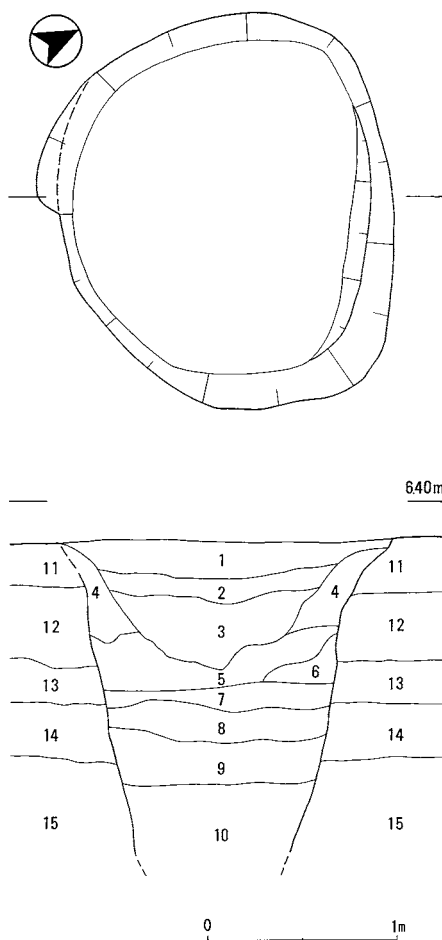
SB549(第177図) 南側が調査区外となるため全体形は不明だが、桁行5間(2m)×梁行2間以上の総柱建物である。柱間寸法はやや不等間で、柱掘形は径20cm~30cmの円形を呈する。建物方向はN21度Eである。SK534は本建物に伴う「南東隅土坑」である可能性があるが、梁行(南北軸)が3間以上あった場合、建物の「南東」部にはならず、東側中央に所在することになる。なお、SB549周辺には、SB549の柱穴と同様のピットが他にも存在しており、確定しきれなかったがこの地点には他にも掘立柱建物が存在していたものと推定される。

F5 pit 1(第29図) 掘り込みはほとんど確認できないが、ほぼ完形の須恵器杯身(1071)が出土している。

Q3 pit 1(第30図) SD502に切られている溝である。埋土から山茶碗片(1072)が出土した。

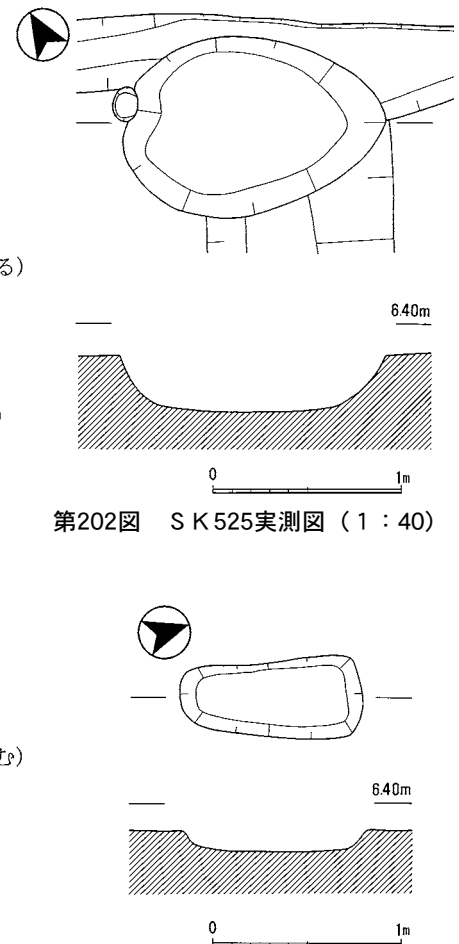


第200図 S X 537実測図 (1 : 20)



第201図 S E 538実測図 (1 : 40)

- 1 10Y R 4 / 3 にぶい黄褐色粘質土 (茶褐色土が斑状に混じる)
- 2 10Y R 6 / 1 褐灰色土 (1層よりも茶褐色土が多く混じる)
- 3 10Y R 4 / 2 灰黄褐色土 (灰色粘土が斑状に混じる)
- 4 10Y R 5 / 1 褐灰色粘質土 (砂粒多く含む。しまり弱い)
- 5 10Y R 3 / 3 暗褐色土 (灰色粘土が斑状に混じる。砂粒を少量含む)
- 6 10Y R 3 / 2 黒褐色砂質土 (5層より砂粒多く含む)
- 7 5 B 6 / 1 青灰色砂質土
- 8 5 B 5 / 1 青灰色砂質土 (黒色土を斑状に含む)
- 9 5 B 5 / 1 青灰色砂質土 (8層より砂粒多く含む)
- 10 5 B 5 / 1 青灰色砂質土
- 11 7.5Y R 6 / 4 にぶい橙色土 (径1~5mmのマンガンブロックを多く含む)
- 12 7.5Y R 6 / 4 にぶい橙色砂質土 (11層より砂粒多く含む)
- 13 5 B 5 / 1 青灰色砂質土
- 14 5 B 5 / 1 青灰色砂質土 (13層より粘性弱い)
- 15 5 B 4 / 1 暗青灰色土 (青灰色粘土と黒色土を斑状に含む)



第202図 S K 525実測図 (1 : 40)

第203図 S K 530実測図 (1 : 40)

L 5 pit 1 (第30図) S B 549と同地点に存在する直径30cmの円形ピットである。埋土から山茶椀片(1073)が出土した。

K 6 pit 1 (第30図) これもS B 549と同地点に所在する長径40cm×短径25cmの円形ピットである。埋土から土師器小皿(1074)が出土した。

4 出土遺物

a 遺構出土遺物

SD501出土遺物(607~618) 陶器捏鉢(607)、山茶椀(608~612)、黒色土器椀(613)、土師器皿(614)、土師器羽釜(615)、土師器鍋(616~617)、瓦(618)がある。鍋はともに南伊勢系、山茶椀は知多(608・611)、瀬戸(609~610)、渥美(612)と産地の統一はない。

SD502出土遺物(619~641) 灰釉陶器椀(619~620)、山茶椀(621~628)、陶器小椀(629)、白磁椀(630)、緑釉陶器椀(631)、土師器小皿(632)、陶器播鉢(633)、土師器羽釜(634~635)、土師器鍋(清郷型、636)、黒色土器椀(637)、須恵器杯蓋(638)、須恵器甕(639~640)、磨石?(641)がある。621と622には底部外面に「大」の墨書が、623・624にも判読不明ながら底部外面に墨書がある。陶器播鉢633は信楽焼で、筋目は3条と少なく、口縁端部も丸く収める古いタイプで、15世紀初頭前後の所産であろう。黒色土器椀637は、A類である。

SD503出土遺物(642~719) 調査年次をまたぐ総延長90mにものぼる溝であり、区域毎(調査年次を反映)に出土遺物を確認しておく。

642~644は、SD503のM区部分からの出土である。陶器甕(642)、山茶椀(643~644)があり、陶器甕は常滑である。

645~663は、O区西側部分からの出土である。緑釉陶器椀(645~646)、灰釉陶器椀(647)、山茶椀(648~655)、須恵器大甕(656)、土師器甕(657~658)、土師器鍋(659)、土師器小皿(660)、陶器鉢(661)、須恵器壺もしくは杯底部(662)、白磁椀(663)を図示した。中世前期を中心としつつも、古代のものも含んでいる。

664~669は、O区東側部分からの出土である。山茶椀(664~666)、陶器小形脚付皿(667)、陶器鉢

(668)、土錘(669)を図示した。山茶椀664は、底部外面にやや歪な「○」墨書がある。667は、脚の上に細長い変形の低平な皿を載せたものである。皿部上には焼成時の融着による別土器の破片がある。

670~690は、P区のなかでも上層・下層の分別なく取り上げたものを図示した。灰釉陶器椀(670~671)、土師器椀(672)、山茶椀(673~677・679~680)、陶器小皿(678・681)、土師器小皿(682)、陶器鉢(683)、陶器大甕(684)、瓦器椀(685)、土師器鍋(686)、軒丸瓦(687)、軒平瓦(688)、須恵器壺(689)、須恵器甕(690)がある。須恵器甕は古墳時代、土師器椀672や須恵器壺689は古代の所産と思われるが、全体としては中世前期の遺物が多い。山茶椀676と677、陶器小皿678は底部外面に墨書がある。また、山茶椀680は内面に炭化物が付着しており、灯明皿として使用された可能性がある。山茶椀は全体に瀬戸・猿投・知多系が多い。陶器大甕684は常滑であろう。

691~706は、P区部分のSD503上層から出土したものを図示した。須恵器鉢(691)、須恵器器台?(692)、陶器小皿(693)、陶器椀(694)、土師器小皿(695)、土師器皿(696~698)、土師器鍋(699~700)、軒平瓦(701)、丸瓦(702)、平瓦(703~705)、方形有孔薄板材(706)を図示した。須恵器鉢691は、篠窯産の須恵器の可能性があり、11世紀代の所産と思われる。693はいわゆる山皿で、底部外面に墨書痕跡をもつ。694は施釉された古瀬戸平椀で、内面にトチン跡が残る。土師器皿類はいずれも中北勢系、鍋は南伊勢系である。

707~719は、P区部分のSD503下層から出土した遺物である。土器では灰釉陶器椀(707)、山茶椀(708~710)、土師器小皿(711~712)、陶器椀の加工円盤(714)を、木製品では組合せ部材(713)、漆器椀(715~716)、板材(717)を、石製品では五輪塔(718~719)を図示した。灰釉陶器椀707は、2次被熱で変色したもので、この707と山茶椀はいずれも底部に墨書のあるものを図示した。708と709は知多・猿投系、710は猿投・瀬戸系である。瓦のうち、705は側面に水返しが付く。

SD504出土遺物(720~724) 土師器鍋(720)、ロクロ土師器椀(721)、山茶椀(722~723)、須

恵器杯蓋（724）がある。鍋は南伊勢系で13世紀頃の所産と思われる。724は混入であろう。

SD507出土遺物（725～730） 土師器皿（725～727）、土師器小皿（728）、山茶椀（729）、鉄製利器柄（730）がある。皿類は南伊勢系である。

SD508出土遺物（731） 緑釉陶器椀である。焼成は陶質である。

SK510出土遺物（732～733） 瓦器椀（732）と土師器鍋（733）がある。いずれも小片である。

SD512出土遺物（734） 須恵器甕の口縁部片である。

SD513出土遺物（735） 山茶椀である。知多・猿投系で、内面に煤が付着する。

SD514出土遺物（736～895） 大量の遺物が出土したので、大きく遺構の西側（7次調査分）と東側（8次調査分）に分けて報告する。

西側では、土師器鍋（736～744）、瓦質脚付土鍋（745）、土師器皿（746～759）、土師器小皿（760～775）、土師器小形鍋（776）、ロクロ土師器皿（777）、陶器小皿（778～782）、山茶椀（783～849）、陶器練鉢（850）、薄板材（851～852）を図示した。土師器の鍋・皿類はいずれも南伊勢系で、小形鍋も南伊勢系であろう。山茶椀類は墨書のものが多いのが特徴で、「○」「十」「×」「上」「万」などの単純なものが多い。このうち784は、「○」を側面に、「十」ないし「×」を底面に墨書している。また、練鉢850は常滑である。

東側では、土師器羽釜（853～855）、土師器鍋（856～861）、土師器皿（862～866）、灰釉陶器（867）、山茶椀（868～876）、陶器小椀（877）、陶器小皿（878～879）、須恵器高杯（880）、陶器播鉢（881～882）、軒丸瓦（883～884）、軒平瓦（885～887）、平瓦（888～890）、丸瓦（891～892）、五輪塔（893）、方形有孔板材（894）、柄付き角棒材（895）を図示した。羽釜は中北勢系、鍋は南伊勢系（856は南伊勢系C類、857は南伊勢系鍋2b類、858～861は南伊勢系4c類）である。ただし、こちらの土師器皿類は、少なくとも図示したものは中北勢系である。陶器播鉢のうち、881は鉄釉がかかった片口、882は同じく片口の信楽である。894は、箱状容器の底部であろう。895は本体の断面が方形、出

柄部分の断面が円形で、円形出柄部分に別材を挿入し、回転させて使用したものであろう。

SD515出土遺物（896～902） 山茶椀（896～898）、陶器鉢（899）、土師器皿（900）、土師器鍋（901～902）である。山茶椀896は、底部外面に「十」の墨書がある。陶器鉢は瀬戸で、山茶椀質である。

SD516出土遺物（903～904） ともに山茶椀で、904は内面に煤が付着している。

SD517出土遺物（905～911・1272） 土器・土製品では、陶器壺（905）、山茶椀（906）、土師器鍋（907）、木製品には漆器椀（909～911）、網代籠状品（1272、写真提示のみ）がある。陶器壺は常滑、山茶椀は瀬戸、土師器鍋は南伊勢系である。また、漆器椀は見込み及び側面に絵が描かれている。網代の籠状品1272は、残りが悪く、写真図版のみの提示となったが、出土状況の写真に拠る限り、いわゆる「箕」状の製品だった可能性がある。

SD518出土遺物（912～920） 陶器小皿（912～913）、山茶椀（914～918）、土師器皿（919）、土師器羽釜（920）がある。912の底部外面には、「T」字形の墨書がある。

SD519出土遺物（921～931） 山茶椀（921～928）、陶器小皿（929）、土師器皿（930）と小皿（931）がある。921の底部外面には墨書が残る。山茶椀の産地は、923の渥美を含め、各系統が混在している。

SD520出土遺物（932） 知多系の山茶椀の口縁部片である。

SD521出土遺物（933） 知多系の山茶椀の底部である。

SK525出土遺物（934） 知多系の山茶椀である。

SK529出土遺物（935～948） 山茶椀（935～936）、陶器小皿（937）、土師器台付小形鉢（938）、土師器鍋（939）、土師器小皿（940）、土師器皿（941～943）、「下層出土」として山茶椀（944～946）、陶器大甕（947）、陶器練鉢（948）を図示した。一応、「下層出土」のものはレイアウト上分けたが、出土遺物を見る限り明瞭な時期差は認めがたい。土師器のうち、小皿は中北勢系、鍋と皿は南伊勢系である。陶器では、山茶椀・小皿の系統は産地が混在、大甕は常滑、練鉢は瀬戸と思われる。936の底部には墨書がみられる。

SK530出土遺物 (949) 山茶碗の底部である。

SK531出土遺物 (950~958) 山茶碗 (950~953)、土師器小皿 (954~955) と皿 (956~958) がある。皿類はいずれも南伊勢系である。

SK533出土遺物 (959~962) 山茶碗 (959~961) と土師器鍋 (962) がある。959と960には墨書がみられる。962は南伊勢系である。

SD532出土遺物 (963~967) 陶器甕 (963~964)、山茶碗 (965~966)、土師器S字甕 (967) がある。いずれも小片で、S字甕は混入であろう。963は常滑、965は猿投・知多系で内面に煤が付着する。966は瀬戸である。

SK534出土遺物 (968~971) 山茶碗 (968~969)、陶器小皿 (970)、土師器鍋 (971) がある。

SZ535出土遺物 (972~992) 山茶碗 (972~984)、陶器小皿 (985)、青磁碗 (986)、白磁碗 (987)、土師器鍋 (988~989)、土師器羽釜 (990)、土師器小皿 (991~992) がある。山茶碗のうち、972~976は墨書がある。また、977・978・981は瀬戸系の未使用、979は瀬戸・猿投系の未使用、982は猿投系でこれも未使用の可能性がある。土師器鍋と小皿は南伊勢系、羽釜は中北勢系である。

SK536出土遺物 (993~996) いずれも山茶碗である。993は側面に「○」、底部外面に「×」の墨書があり、SD514出土の784・785などと共通する。996は内面に煤が付着する。

SE538出土遺物 (997) 円形の薄板で、曲物の底板であろう。

SX537出土遺物 (998~1003) 鉄製小刀 (998)、土師器皿 (999)、土師器小皿 (1000~1002)、それに陶器大甕 (1003) がある。小刀は、鞘の漆皮膜が残存し、また下地に使われた布状の物質も確認できたため、あえて錆を落とさずに保存処理を実施している。そのため、刀身本体部なりの原形状を知るのには難しい。皿類は、いずれも南伊勢系、大甕は常滑である。

SR539出土遺物 (1004~1056) 出土遺物は多く、須恵器杯蓋 (1004)、須恵器杯身 (1005~1008)、黒色土器碗 (1009~1011)、陶器小皿 (1012・1048~1049)、ロクロ土師器小皿 (1013)、土師器小皿 (1014~1016)、土師器鍋 (1017~

1021)、土師器羽釜 (1022~1023)、山茶碗 (1024~1047)、陶器甕 (1050)、青磁碗 (1051~1052)、陶器練鉢 (1053)、砥石 (1054)、土師質の土製支脚 (1055)、土錘 (1056) を図示した。中世を中心とするが、古墳時代のものも混じる。須恵器杯身は、古墳時代の1005と古代に入る1006~1008がある。土師器小皿は、1014と1016が南伊勢系、1015が中北勢系である。鍋はいずれも南伊勢系である。山茶碗は、各産地のものが混在していて、墨書のものも多い。1050の陶器甕は常滑である。

SK541出土遺物 (1057) 弥生土器壺の底部である。

SD544出土遺物 (1058) 土師器小皿である。いわゆる京都系の「て」の字状口縁小皿 (以下「て」の字小皿) である。

SD545出土遺物 (1059~1069) 陶器挿鉢 (1059)、緑釉陶器碗 (1060)、山茶碗 (1061~1066)、陶器壺 (1067~1068)、丸瓦 (1069) がある。挿鉢は信楽で、口縁端部のヨコナデは弱い。陶器壺のうち、1067は瀬戸美濃系で、玉縁口縁をもつ。

SK547出土遺物 (1070) ロクロ土師器の杯皿類である。

F5 pit 1 出土遺物 (1071) 古墳時代タイプの須恵器杯身である。

Q3 pit 1 出土遺物 (1072) 知多・猿投系の山茶碗底部である。

L5 pit 1 出土遺物 (1073) 知多・猿投系の山茶碗である。

K6 pit 1 出土遺物 (1074) 土師器小皿である。

b O区包含層等出土遺物

古墳時代の土器 (1075~1076) 土師器高杯 (1075) と須恵器臚 (1076) がある。高杯は、脚部に透孔をもってその上部に直線文を入れる東海系の有稜高杯である。

古代の土器 (1077~1082・1096) 須恵器杯蓋 (1077)、須恵器杯身 (1078~1079)、須恵器鉢 (1080)、須恵器長頸壺 (1081)、緑釉陶器碗 (1082)、それに器種不明の須恵器片 (1096) がある。緑釉陶器は、陶質である。須恵器片1096は、外面に墨書をもつ。

中世の土器 (1083~1095・1097~1138・1140

～1142) 山茶椀 (1083～1095・1097～1109)、陶器小椀 (1110～1111)、陶器小皿 (1112～1117)、陶器鉢 (1118～1120)、土師器鍋 (1121～1124)、土師器羽釜 (1125)、土師器清郷型鍋 (1126)、ロクロ土師器椀 (1127)、ロクロ土師器小皿 (1128)、土師器小皿 (1129～1133)、陶器大甕 (1134～1136)、陶器甕 (1137)、白磁椀 (1138・1140)、青磁皿 (1141)、陶器縁釉小皿 (1142)、青磁椀 (1144) がある。山茶椀のうち、ともに墨書のある1086と1093は焼成や質が酷似しており、同一個体の可能性がある。1097の内面には炭化物が付着している。土師器小皿1129の口縁内側には油脂分が付着

している。また、1133は京都系の「て」の字小皿である。陶器大甕は常滑で、1135はやや生焼け焼成である。青磁椀1144には、花文が印刻されている。

近世の土器 (1139・1143・1145) 陶器椀 (1139)、陶器皿 (1143)、陶器鉢 (1145) がある。陶器椀は天目茶椀、陶器皿は灯明皿である。

その他 (1146～1156) 軒丸瓦 (1146)、平瓦 (1147)・砥石 (1148～1150)、泥岩製の砥石 (1151)、土玉 (1152)、土錘 (1153～1154)、銅銭 (1155～1156) がある。銅銭は、1155が皇宋通宝 (初鑄年1253)、1156が至道元宝である。

第9節 P区の調査

1 概要

〇区に東接し、替田遺跡として最も東側に位置する調査区である。遺構密度は全体に疎らになっており、集落の縁辺部の様相を呈している。

2 小地区設定方法

隣接する〇区を受けての調査となったが、小地区の設定は〇区とは連動せず、P区独自に行っている。すなわち、本調査区も国土座標には則らずに調査区の形状に合わせた小地区設定を行っており、具体的には三重県の調査区設定における基本原則に従い、東西軸は西から東へアルファベットで、南北軸は北から南へ数字で表示している (第12図)。

3 遺構

本調査区を東西に縦断する溝のうち、西接する〇区にも連続する遺構 (SD502・503・514) は既に報告した。古代末から中世の遺構が主体を占めるが、古墳時代から中世の遺構も少量確認でき、また中世遺構に混入するかたちで弥生土器等が出土している例も多い。以下、代表的な遺構について述べる。

a 弥生時代～古墳時代の遺構

SD812 (第210図) SD502やSD503、SD807などに重複される細長い南北溝で、幅0.7m、長さ13.4m以上、深さ14cmを測る。南側は、SD807に切られた部分で収束しており、一見すると同時存在のセットのようにも見えるが、現地調査の所見では切り合い関係 (SD812→SD807) として捉えられている。埋土から、土師器高杯片 (1185) が出

土しており、古墳時代の所産と推定される。

SD816 (第208図) SD503に切られる長さ27m以上、幅2.2m、深さ19cmの溝であるが、西側への延長部分である〇区 (平成15年度調査区) では未確認で、途中で途切れているものと思われる。埋土からは、弥生時代から古墳時代の土器が出土しており、P区としては古い時期の遺構と思われる。

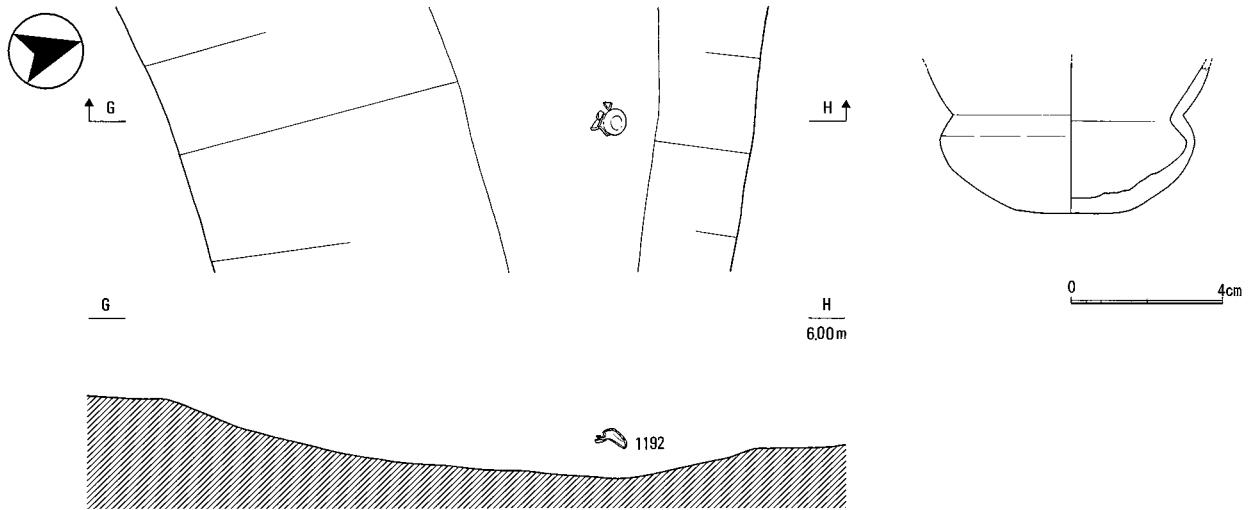
SK819 (第209図) 中央部をSD816によって切られているが、長径4.4m×短径1.5m、深さ10cmの楕円形の土坑である。埋土から古墳時代前期の土器 (1200～1202) が出土しており、古墳時代の所産である。このあたりまで来ると、弥生から古墳時代の遺構は疎らとなるが、全くないわけではないことが確認できる。

b 古代～中世の遺構

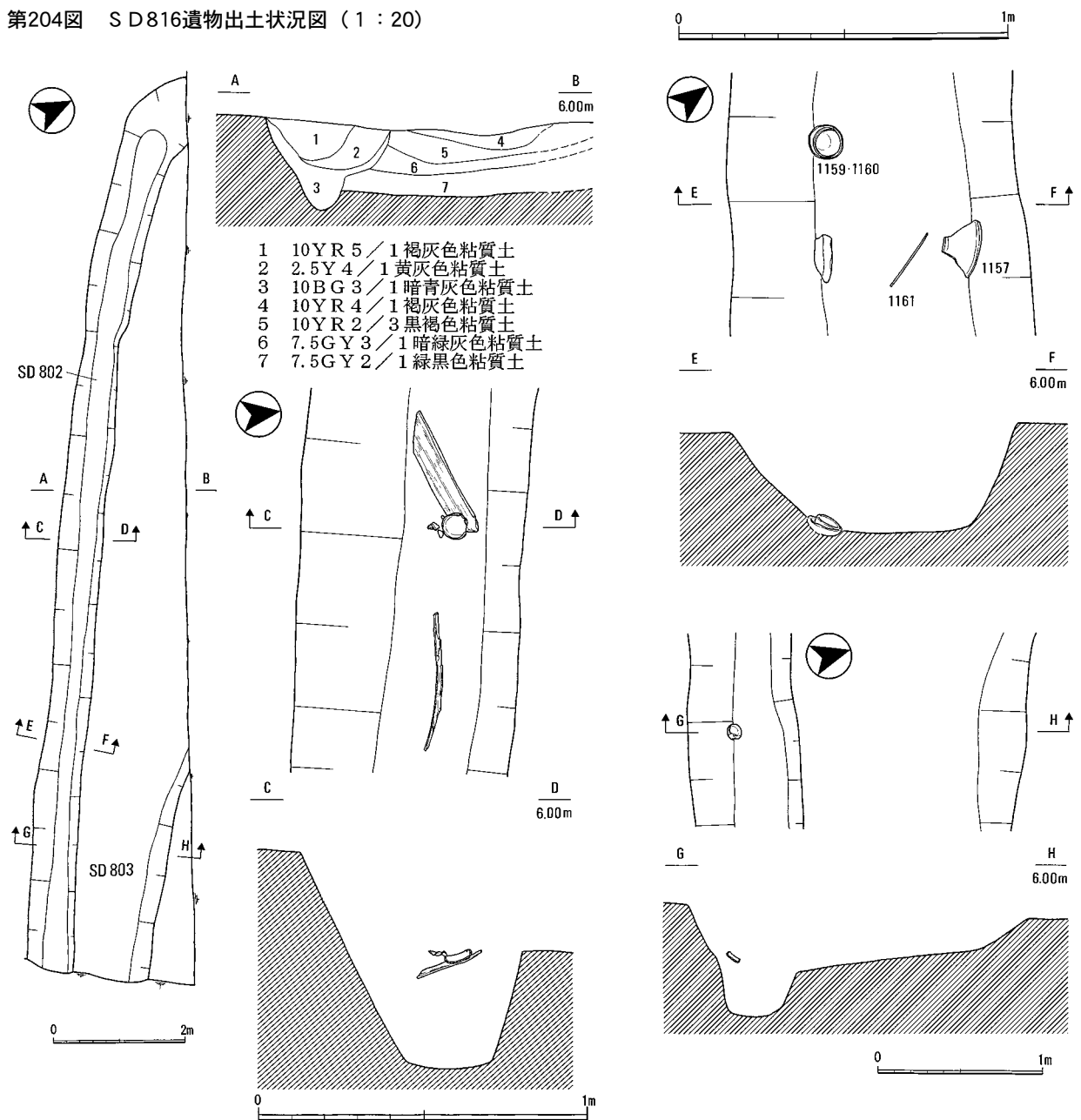
SD802 (第205図) 調査区東北隅のため一部を検出ただけであるが、後述のSD803埋没後に掘削された溝で、幅40cm、深さ25cmを測る。埋土には、木片や土器を含んでおり、溝床面から土師器小皿が重なり合って出土した部分もある (第205図)。中近世の遺物が出土しており、代表的なものを図示した (1157～1161)。

SD803 (第205図) 前述のSD802を切って作られた溝で、幅1.6m以上、深さ29cmを測る。埋土からは、下駄 (1171) を含む有機質遺物を含む室町時代の遺物が出土した (1162～1172)。

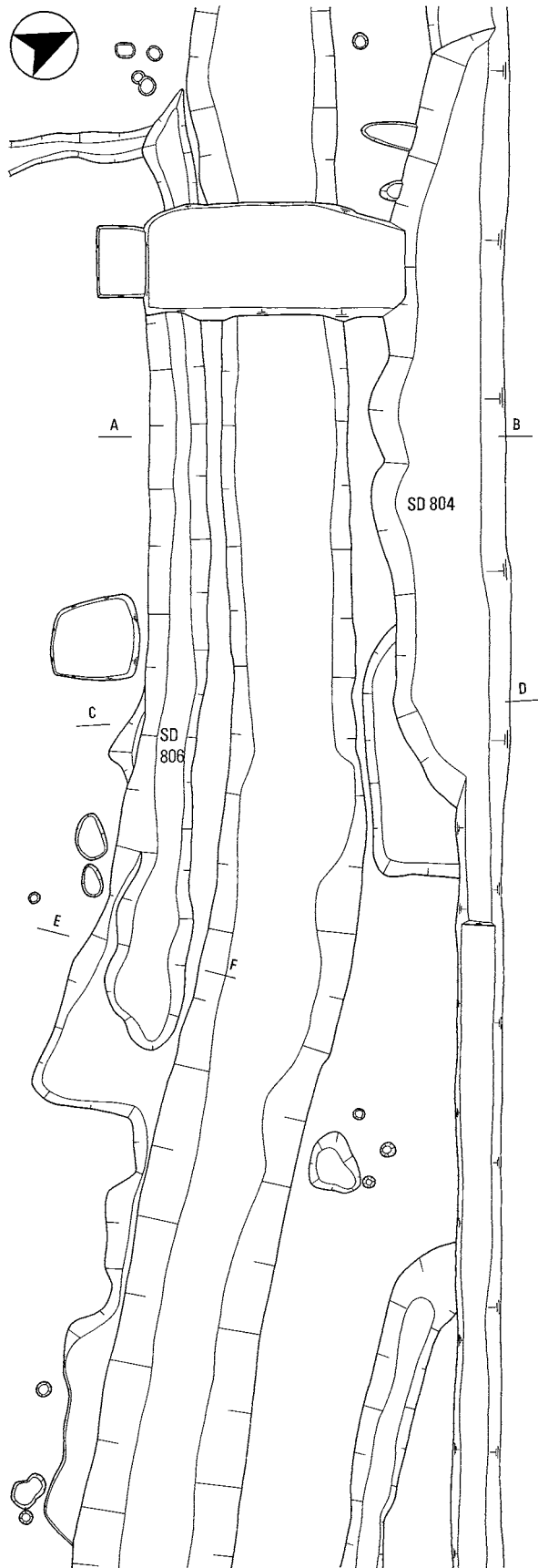
SD804 (第206図) 調査区の北壁に存在する



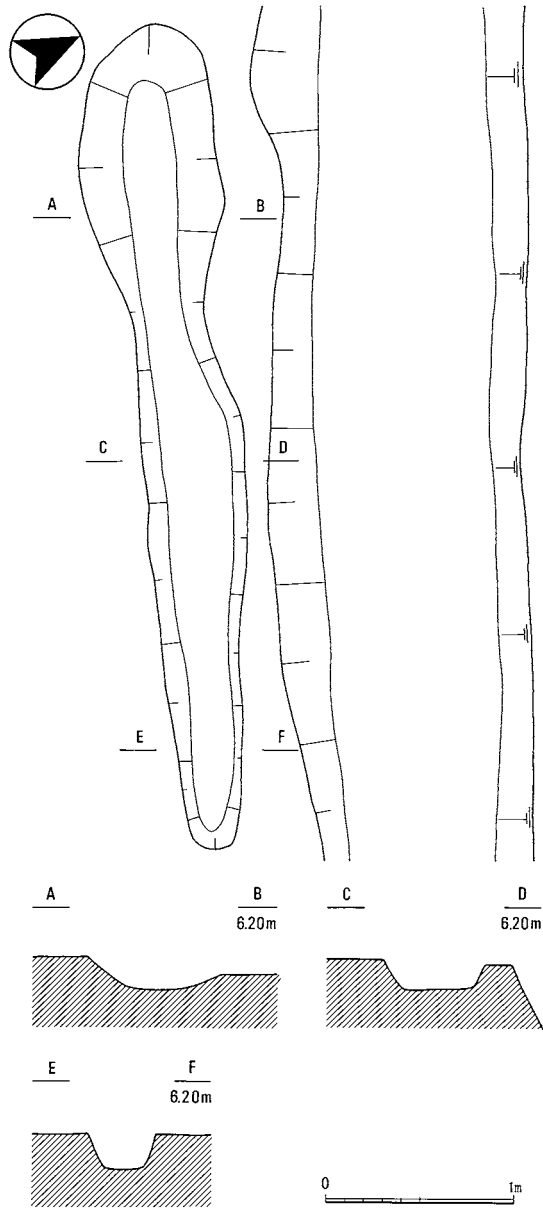
第204図 S D816遺物出土状況図 (1 : 20)



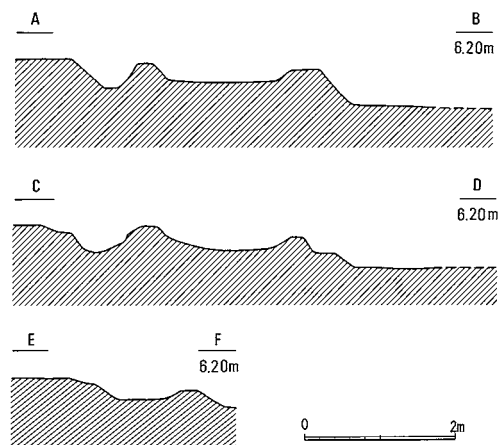
第205図 S D802・803実測図 (1 : 20、ただし g - h 間のみ 1 : 40)

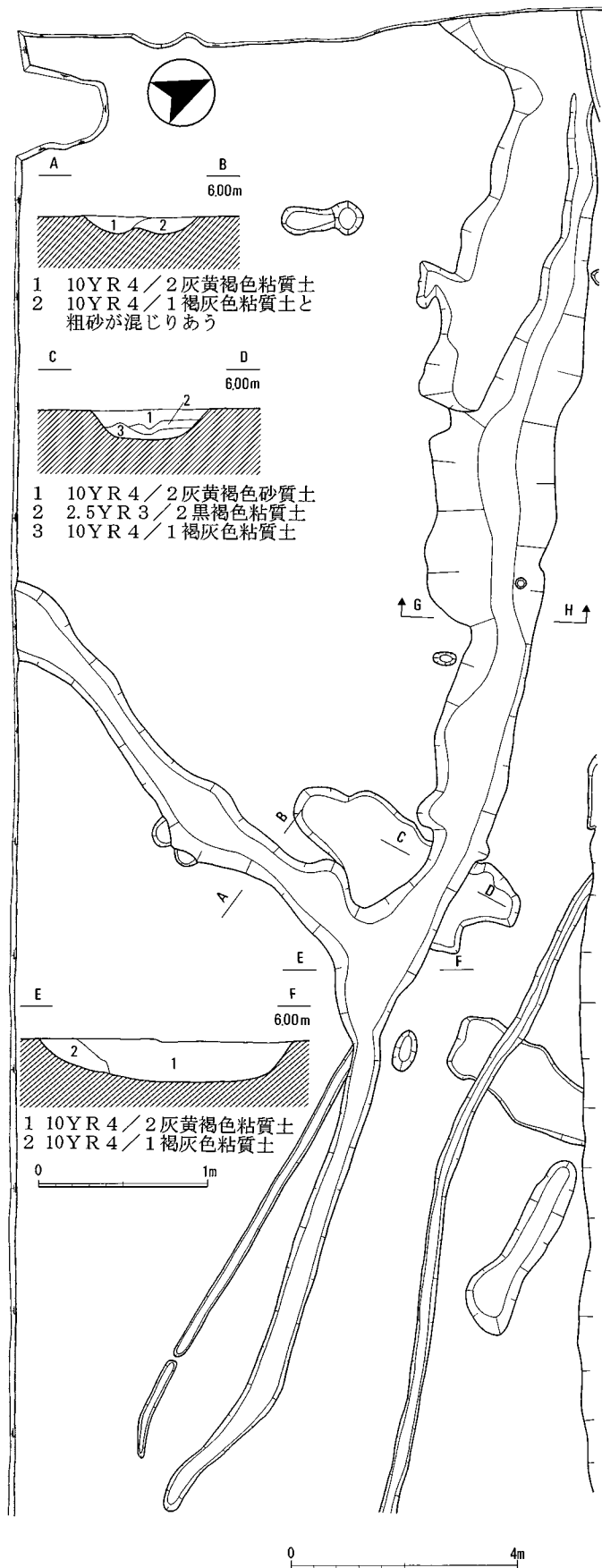


第206図 SD 804・806実測図 (1 : 100)

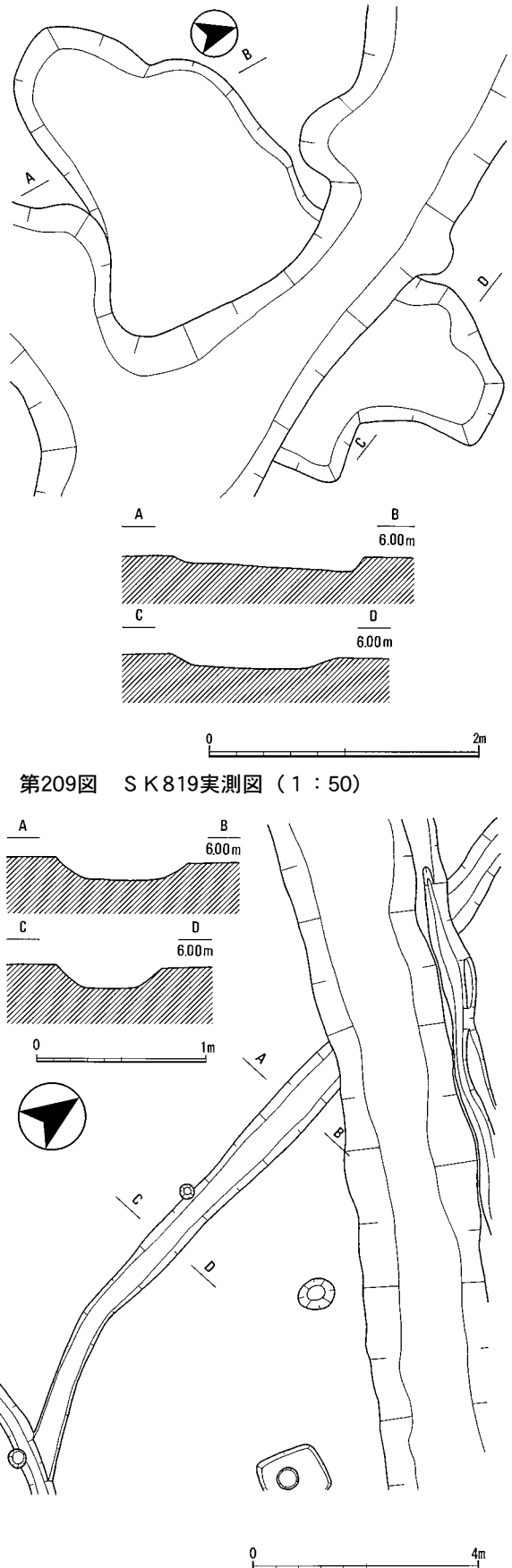


第207図 SD 814実測図 (1 : 40)





第208図 S D816実測図 (平面図 1 : 120、土層図 1 : 40)



第210図 S D812実測図 (平面図 1 : 120、土層図 1 : 40)

ため、遺構南端の一部を検出しただけである。深さ50cmの浅い落ち込み状の部分が緩やかな弧状を描いており、調査時点では溝と考えたが土坑状のものかもしれない。墨書山茶椀(1174~1175)のほか、7世紀代の須恵器壺(1173)も混じる。

SD806(第206図) SD503によって重複されているため、ごく一部が確認できただけの東西溝で、幅1.8m以上、長さ21m以上、深さ36cmを測る。埋土から古代末の遺物が出土している(1181~1184)。

SD814(第207図) SD503とSD514に挟まって存在する長さ4.4m、幅0.7m、深さ20cmの小溝である。性格は明瞭でないが、埋土から土師器小皿(1186)が出土した。

4 出土遺物

a 弥生~古墳時代遺構出土の遺物

SD812出土遺物(1185) 脚裾部を欠損するが、古墳時代の土師器高杯の脚部である。小片のため詳細は分からない。

SD816出土遺物(1187~1199) 弥生土器高杯(1187~1190)、土師器高杯(1191)・小形丸底鉢(1192)・甕脚台部(1193~1194)・甕(1195~1197)、須恵器杯身(1198~1199)がある。古墳時代前期の土器を中心に、その前後の時代を含む。

SK819出土遺物(1200~1202) 古墳時代前期のS字甕(1200)と高杯(1201~1202)がある。S字甕はC類、高杯はいわゆる有稜高杯である。

b 古代~中世遺構出土の遺物

SD802出土遺物(1157~1161) 土器には常滑練鉢(1157)・弥生土器壺(1158)・土師器小皿(1159~1160)、木製品には棒状木製品(1161)がある。常滑練鉢は煤が付着しており、煮沸具として用いられた可能性がある。また、土師器小皿はいずれも南伊勢系である。

SD803出土遺物(1162~1172) 土器には山茶椀(1162)・土師器皿(1163~1165)・鍋(1166~1168)・茶釜(1169)・常滑の壺(1170)、木製品では下駄(1171)と薄板(1172)がある。山茶椀は渥美系、土師器皿と鍋は南伊勢系で、茶釜

は中北勢系の可能性がある。下駄は、鼻緒孔が片側に寄らず中央部に位置するもので、薄板には刃物のあたり状の痕跡が全面に残る。

SD804出土遺物(1173~1180) 土器では須恵器壺(1173)・山茶椀(1174~1175)、木製品では薄板(1176)・栓ないしは楔状木製品(1177)・部材片もしくは残材(1178~1180)がある。山茶椀はいずれも渥美系で底部外面に墨書があり、1174は略押状の記号、1175は「○」と記されている。

SD806出土遺物(1181~1184) 灰釉陶器の壺(1181)と椀(1182)・土師器小皿(1183)とロクロ土師器台付皿(1184)がある。土師器小皿は11世紀前半頃の所産と思われ、灰釉陶器も含め全体に古代末の遺物で占められる。

SD814出土遺物(1186) 土師器皿である。南伊勢系で、器壁が極めて薄い。

c P区包含層等出土遺物(1203~1238)

石器では石鏃(1203)、弥生土器には高杯(1204)、古墳時代土師器では高杯(1205~1206)・甕(1207~1208)・大形鉢もしくは把手付鍋(1217)、古墳時代須恵器では杯蓋(1209)・杯身(1210~1213)・横瓶(1214)・有蓋高杯蓋(1215)、古代から中世の遺物では土師器甕(1216)・灰釉陶器椀(1218~1219)・山茶椀(1220~1226)・陶器小皿(1227~1228)・ロクロ土師器椀(1229~1230)・清郷型鍋(1231)・土師器小皿(1232~1234)、石製品では五輪塔(1236~1237)、それに鬼瓦(1238)を図示した。

1207~1208はともにS字甕で、1207はB類である。灰釉陶器・山茶椀・陶器小皿は、瀬戸・猿投系が1218~1219・1221・1225~1227、瀬戸系が1222~1224、渥美系が1220、知多・猿投系が1228である。1224~1226の底部外面には墨書が残る。1224は「十」、1225と1226には記号がある。図示した土師器小皿は、いずれも中北勢系のいわゆる「て」の字小皿である。五輪塔は、1236が一石五輪塔、1237が組合せ式である。(穂積)

報告書 遺構番号	報告 地区	調査時遺構情報				時期	長さ (m)	幅 (m)	深さ (cm)	備 考
		調査年次	調査地区	小地区	遺構					
SR601	J	5次	J	M2~P2他	SR南	弥生	11以上	2.5	12	F区続き
SR606	J	5次	J	L1~Q1	SR北	弥生	20以上	2.5	17	F区続き
SR607	J	5次	J	L2~P2他	SR中	弥生	18以上	2.5	33	F区続き
SR609	J	5次	J	M2~R4他		弥生	24以上	4	42	
SA631	J	4次	J	F区P5~07		古墳	13.1	9以上	70	F区続き
SB624	J	5+4次	J	F区L5~N6		古墳	6.6	2.3	29	F区で報告済み N22° E 東西棟
SK101	J	5次	J	N3	SK1	—	1.3	1.2	6	
SK102	J	5次	J	O2	SK2	—	1.3	0.9	35	
SK103	J	5次	J	N2	SK3	古墳	1.4	1.1	42	
SK104	J	5次	J	P2	SK4	—	1.2	0.6	15	
SE105	J	5次	J	O3	SK5	古墳	3.1	3.1	82	
SE106	J	5次	J	V5	SK6	平安中~後期?	2.5	2.1	400以上	
SK107	J	5次	J	V6	SK7	—	0.6以上	0.4以上	4	
SK108	J	5次	J	V7	SK8	—	1.2	1	7	
SK109	J	5次	J	U5	SK9	—	1.1	0.4	14	
SK110	J	5次	J	U6	SK10	—	2.5	1.9	7	
SK111	J	5次	J	V6	SK11	—	1.2	0.5	14	
SE112	J	5次	J	S4	SK12	—	2.5	2.2	100	
SK113	J	5次	J	S4	SK13	弥生	0.9	0.6	20	
SK705	J	5次	J	R7~R8他	SK14	—	2.2以上	0.7	7	G区続き
SK114	J	5次	J	R7・R8	SK15	古代~中世	2.9	1.4	12	
SX115	J	5次	J	U4	SD1	弥生	3.2	0.8	15	
				T4	SD8	弥生	3.8	0.8	10	
SD116	J	5次	J	T6・U7・V7	SD2	弥生	9以上	1.4	40	
SD117	J	5次	J	V6	SD3	弥生	20	2.5	50	
SD118	J	5次	J	T6・U7・V7	SD4	古墳	21.5	0.5	50	
SX119	J	5次	J	V4	SD5	弥生	2.3以上	0.7	7.5	
SD120	J	5次	J	U7・V7	SD6	—	4.4以上	0.9	43	
SR121	J	5次	J	T4・S5・R6	SD7	古墳	18	1.1	30	
SX122	J	5次	J	T5	SD9	弥生	4.1	0.7	10	
SB154	J	5次	J	M1~P2		古代~中世	9.8	3.7	50	N29° E 東西棟
SB155	J	5次	J	L2~03		古代~中世	14.2	6.8	70	N20° E 東西棟
SB156	J	5次	J	R6~S7		古代~中世	8.1	3.3	70	N5° E 東西棟
SB157	J	5次	J	R8~T8		古代~中世	10以上	3以上	70	N14° E 東西棟
SB158	J	5次	J	S8~U8		古代~中世	9.3以上	2.6以上	65	N17° E 東西棟
SK123	K	5次	H	C2・D2	SK1	古代	4以上	1.6	10	
SD124	K	5次	H	O2~Q2	SD1	弥生前期	4以上	1.4	60	
SD125	K	5次	H	G2~R2	SD2	—	43以上	0.4以上	16	
SD126	K	5次	H	H2	SD3	—	1以上	0.3	10	
SD127	K	5次	H	P2・Q2	SD4	弥生?	3.8	0.6	20	
SD128	K	5次	H	B2~E2	SD5	古代	13以上	0.3以上	11	
SE129	M	5次	I	E2・F2	SE0	鎌倉	2	1.5以上	72	
SK130	M	5次	I	H8	SK1	鎌倉?	1.5以上	—	12	
SK131	M	5次	I	H7	SK2	鎌倉	1.4	0.4	10	長楕円形土坑
SK132	M	5次	I	H9	SK4	鎌倉	2.1	1.5	23	不定形土坑
SR133	M	5次	I	H4・H5	SR1	鎌倉以前	2.5以上	5.4	—	O区続き SD545と同一?
SR134	M	5次	I	H7	SR2	鎌倉以前	2.8以上	9.6	—	SZ138に包含
SR135	M	5次	I	H3	SR3	鎌倉以前	2.5以上	2	—	O区続き SD545と同一?
SR136	M	5次	I	H3・H4	SR4	鎌倉以前	2.9以上	2.1	—	SZ138に包含
SR137	M	5次	I	B2・C2	SR5	鎌倉以前	2.8以上	2.6	—	
SZ138	M	5次	I	H8~H12	SR6	鎌倉以前	2.8以上	20.6	—	SR134・SR136と同一?
SZ139	M	5次	I	H12	SR7	鎌倉以前	2.9以上	2.5	—	

第4表 遺構一覧表

報告書 遺構番号	報告 地区	調査時遺構情報				時期	長さ (m)	幅 (m)	深さ (cm)	備 考
		調査年次	調査地区	小地区	遺構					
SD140	M	5次	I	H2・H3	SD1	—	2.5以上	1.7	28	
SD141	M	5次	I	H5	SD2	中世後期	2.7以上	0.3	10	
SD142	M	5次	I	F2	SD3	—	3.2以上	1	28	
SD143	M	5次	I	E2	SD4	—	3以上	0.7	20	
SD144	M	5次	I	H2	SD5	—	2.6以上	0.8以上	34	
SD145	M	5次	I	H2	SD6	—	2.5以上	0.8	13	SD140の下層
SD146	M	5次	I	H2	SD7	弥生	3.2以上	0.8	29	
SD147	M	5次	I	E2	SD8	弥生?	1.5以上	1.4	28	
SR148	M	5次	I	H3	SD9	—	2.5以上	0.9	—	
SD149	M	5次	I	F2	SD10	—	1.2以上	0.4以上	19	
SD150	M	5次	I	H5	SD11	鎌倉	2.6以上	0.5	12	
SD151	M	5次	I	H10	SD12	—	2.9以上	1.2	11	楕円形土坑状落ち込み
SD152	M	5次	I	H12	SD13	中世後期	2.9以上	0.7	9	
SR153	M	5次	I	H6	SR1	鎌倉以前	2.6以上	3	—	
SB159	M	5次	I	B2・C2	—	—	5.6以上	2以上	45	N36° E 東西棟
SB160	M	5次	I	D2・E2	—	—	5.5	2.6以上	20	N38° E 東西棟
SB161	M	5次	I	F2~H2	—	—	10	1.1以上	25	N27° E 東西棟
SB162	M	5次	I	H7・H8	—	鎌倉	8.5	1.8	25	N37° E 東西棟
SA163	M	5次	I	H9	—	—	3以上	—	25	N57° W
SA164	M	5次	I	H10	—	—	3以上	—	25	N81° W
SA165	M	5次	I	H10	—	—	3以上	—	30	N64° W
SA166	M	5次	I	H12	—	—	3以上	—	23	N63° W
SK201	L	6次	C	D3	SK01	弥生Ⅰ・Ⅱ	1.5	0.8	17	重複土坑
SK202	L	6次	C	D3	SK02	弥生Ⅰ・Ⅱ	2.5	1.1	42	重複土坑
SK203	L	6次	C	E2	SK03	弥生Ⅰ・Ⅱ	0.9	0.4	20	楕円形
SK204	L	6次	C	D4	SK04	弥生Ⅰ・Ⅱ	1.6	1.1	26	楕円形、炭を多く含む
SK205	L	6次	C	D4	SK05	弥生Ⅰ・Ⅱ	3.6	1.5	25	大型土坑、炭を多く含む
SK206	L	6次	C	D9	SK06	不明	0.9	0.9	4	円形、大型、浅い皿状
SH207	L	6次	C	G2~H3	SH07	弥生Ⅰ	5.1	4.3	26	方形住居跡 多量の遺物が出土
SD208	L	6次	C	C1~	SD08	古代	48	0.8	35	東西方向に走る長い溝
SD209	L	6次	C	G2	SD09	古代	4.8	0.4	15	北東から南西方向に走る短い溝
SD210	L	6次	C	F2~	SD10	弥生Ⅰ・Ⅱ	49以上	0.6	25	北東から南西方向に走るSD237と同一?
SK211	L	6次	C	G3	SK11	弥生Ⅰ・Ⅱ	1.2	1.1	25	円形土坑
SK212	L	6次	C	G6	SK12	近世	4.8	1.9	24.9	大型土坑 床面に木板を有する
SK213	L	6次	C	G6	SK13	近世	3	1.1	16.5	大型土坑12・14と同類
SK214	L	6次	C	G6	SK14	近世	5.3	1.2	10.1	大型土坑12・13と同類
SP215	L	6次	C	B5	SP15	奈良・平安	1.1	0.4	52	大型建物の柱穴
SP216	L	6次	C	B6	SP16	奈良・平安	1	0.5	49	大型建物の柱穴
SP217	L	6次	C	B6	SP17	奈良・平安	0.6	0.6	36	大型建物の柱穴
SD218	L	6次	C	E2~G2	SD18	弥生Ⅰ・Ⅱ	7.5以上	0.7	25	北東側のSD209に継続する溝
SH219	L	6次	C	E1・E2	SH19	弥生Ⅰ・Ⅱ	1.8以上	1.7	90	南辺の一部を検出
SK220	L	6次	C	D5	SK20	弥生Ⅰ・Ⅱ	1.1	1.1	15	円形土坑
SK221	L	6次	C	E5	SK21	弥生Ⅰ・Ⅱ	1.1	1	31	円形土坑
SK222	L	6次	C	E5	SK22	古墳前期	1.2	1.2	10	円形土坑
SK223	L	6次	C	E6	SK23	弥生Ⅰ・Ⅱ	1.4	1.3	15	円形土坑
SD224	L	6次	C	A4~C5	SD24	中世	10以上	4	50	幅広い南東から北西に走る溝
SD225	L	6次	C	D6~F6	SD25	不明	5.3	0.4	10	北側のSD224と同類に平行する
SD226	L	6次	C	D5~F5	SD26	中世	9.5	0.9	10	SD224と同類の溝
SP227	L	6次	C	F5	SP27	古代	0.8	0.6	66	大型建物の柱穴
SD228	L	6次	C	E・F4, F5	SD28	中世	9.2	1.1	15	大型の溝、SD224と同類
SX229	L	6次	C	F8・9	SX29	中世	1.3	0.7	37	長方形の土坑墓
SH230	L	6次	C	D9・E9	SH30	弥生Ⅰ・Ⅱ	4.1	3.9	29	円形住居跡

第5表 遺構一覧表

報告書 遺構番号	報告 地区	調査時遺構情報				時期	長さ (m)	幅 (m)	深さ (cm)	備 考
		調査年次	調査地区	小地区	遺構					
SD231	L	6次	C	G5~H5	SD31	中世	7以上	4.3	13	SD228・224と同類
SK232	L	6次	C	G4	SK32	弥生Ⅰ・Ⅱ	2.1	1.5	22	北西側のSK236と同類
SK233	L	6次	C	H5	SK33	弥生Ⅰ・Ⅱ	1.5	0.9	30	楕円形土坑
SK234	L	6次	C	G7	SK34	弥生Ⅰ・Ⅱ	1.8	1.2	33	楕円形土坑SK235を切っている
SK235	L	6次	C	G7	SK35	弥生Ⅰ・Ⅱ	1.1	0.4	18	楕円形土坑SK234に切られている
SK236	L	6次	C	G4	SK36	弥生Ⅰ・Ⅱ	2.1	2	10	楕円形土坑SK232を切っている
SD237	L	6次	C	F9・G8	SD37	古代	49以上	0.7	25	北西から南東方向に走る溝
SK238	L	6次	C	D7~9	SX38	弥生Ⅰ・Ⅱ	3.7	2.5	23	2段落土坑
SK239	L	6次	C	F8・9	SX39	弥生Ⅰ・Ⅱ	2	1.5	50	周溝内の土坑
SK240	L	6次	C	B・C6, C7	SX40	弥生Ⅰ・Ⅱ	7	1.5	43	
SK241	L	6次	C	F8	SK41	古墳	1.2	0.8	9	円形土坑
SK242	L	6次	C	F9	SK42	弥生Ⅰ・Ⅱ	1.3	1.2	52	円形土坑
SD243	L	6次	C	A6~A10	SD43	古代	18以上	0.8	22	北西から南東方向に走る溝
SK244	L	6次	C	G9	SK44	弥生Ⅰ・Ⅱ	6.7以上	1.5	51	
SK245	L	6次	C	G9	SK45	弥生Ⅰ・Ⅱ	1.3	1	14	
SD246	L	6次	C	D7~D9	SD46	不明	10.7	0.6	11	北西から南東方向に走る溝
SK247	L	6次	C	G・H9	SK47	弥生Ⅰ・Ⅱ	2.3	1.3	48	
SD248	L	6次	C	C4~E5	SD48	中世	6.1	0.5	12	SD228と同一方向に走る
SK249	L	6次	C	B・C8	SK49	弥生Ⅰ・Ⅱ	0.9	0.7	13	円形土坑
SK250	L	6次	C	C8	SK50	鎌倉	1.2	1	79	楕円形土坑
SH251	L	6次	C	C・D8	SH51	弥生Ⅱ	4.3	3.8	25	方形住居跡
SK252	L	6次	C	D9	SK52	弥生Ⅰ・Ⅱ	1.3	0.7	18	長方形の土坑墓？ 北端に完形の壺埋葬
SK253	L	6次	C	C・D9	SK53	弥生Ⅰ・Ⅱ	2.5	1.5	35	長方形隅丸土坑
SK254	L	6次	C	D9	SK54	弥生Ⅰ・Ⅱ	1.5	1.2	37	楕円形土坑
SK255	L	6次	C	D9	SK55	弥生Ⅰ・Ⅱ	1.7	1.7	12	土坑墓？長方形 北部端に壺埋葬？
SD256	L	6次	C	G10・G11	SD56	古代	6.5以上	1.2	40	東西方向に走る 幅広く浅い
SD257	L	6次	C	E11~13	SD57	古代	49以上	0.6	33	SD237の南側に継続 SD210 と同一
SE258	L	6次	C	A・B11	SE58	古代	2.2	2	57	丸底素堀溜井戸
SE259	L	6次	C	F12	SE59	中世	3.2	3.2	66	大型井戸、円形
SK260	L	6次	C	G9	SK60	弥生Ⅰ・Ⅱ	1.6	1.1	52	
SK261	L	6次	C	G9	SK61	弥生Ⅰ・Ⅱ	2.1	1.6	49	
SD262	L	6次	C	G11	SD62	古代	8以上	1.6	17	幅広く浅い溝 SD256と同一？
SE263	L	6次	C	F10	SE63	中世	0.8	0.8	64	小型素堀円形井戸
SK264	L	6次	C	B8	SK64	弥生Ⅰ・Ⅱ	0.8	0.7	40	楕円形土坑
SK265	L	6次	C	B12~C13	SK65	中世	上5.8 下3.7	上4.3 下3.5	上17 下18	方形土坑 南東隅土坑？
SE266	L	6次	C	D12・13	SE66	中世	1.5	1.3	51	方形小型井戸
SE267	L	6次	C	D12	SE67	中世	0.9	0.9	58	円形小型井戸
SK268	L	6次	C	G8	SK68	弥生Ⅰ・Ⅱ	2.2	1.6	49	
SE269	L	6次	C	B11	SK69	不明	0.9	0.5	?	楕円形土坑 写真図版あり
SK270	L	6次	C	E12	SK70	古代	1.6以上	1.2	?	楕円形土坑
SE271	L	6次	C	F13	SE71	中世	0.8	0.8	20	小型円形井戸
SD272	L	6次	C	B13	SD72	中世	2.4	0.3	14	細短い溝
SD273	L	6次	C	A・B12	SD73	中世	4.5以上	1.9	10	南東隅状土坑に伴う溝
SD274	L	6次	C	A・B12	SD74	中世	5.2以上	0.3	21	南東隅状土坑に付設する排水溝
SK275	L	6次	C	G12	SK75	弥生Ⅰ・Ⅱ	0.8	0.6	49	楕円形土坑 完形に近い壺埋葬
SD276	L	6次	C	G11・G12	SD76	古代	3.5以上	0.6	12	直軸溝 SD280手前で途切れる
SK277	L	6次	C	B9~C10	SX77	弥生Ⅰ・Ⅱ	4.8	1.2	38	L字状溝
SD278	L	6次	C	G13	SD78	中・近世	5以上	1.3	—	SD262に平行する幅広く浅い溝 痕跡として確認
SD279	L	6次	C	G10~G15	SD79	古代	15以上	0.5	71	SD262内にて検出 細長い溝

第6表 遺構一覧表

報告書 遺構番号	報告 地区	調査時遺構情報				時期	長さ (m)	幅 (m)	深さ (cm)	備 考
		調査年次	調査地区	小地区	遺構					
SD280	L	6次	C	E11・E12	SD80	古代	5.8	0.3	8	SD237に継続する溝 痕跡として確認
SK281	L	6次	C	C5・6	SK81	中世	1.6	0.6	17	後にSX286に変更した
SD282	L	6次	C	B14	SD82	中世	3.1	3.6	13	細い溝
SK283	L	6次	C	B13	SK83	中世	1.7	1.6	14	方形浅い土坑 南東隅土坑に 付設
SK284	L	6次	C	A・B8	SD84	弥生Ⅰ・Ⅱ	5以上	1.7	17	周溝状の溝
SK285	L	6次	C	C5・6	SX85	弥生Ⅰ・Ⅱ	5.5	1.5	65	SK240に切られている
SX286	L	6次	C	C5・6	SX86	中世	1.6	0.6	17	長方形 北端に土師皿を重ね埋葬
SK287	L	6次	C	C10	SK87	不明	0.9	0.7	—	楕円形土坑
SK288	L	6次	C	G2	SX88	弥生Ⅱ～Ⅲ	7.5以上	1.8	46	方形周溝墓状の溝
SD289	L	6次	C	G2	SD89	弥生Ⅰ・Ⅱ	7.5以上	0.6	9	西側のSD218に継続する
SK290	L	6次	C	G2	SK90	弥生Ⅰ・Ⅱ	1.1	0.6	25	楕円形土坑
SP291	L	6次	C	F2	SP91	弥生Ⅰ・Ⅱ	0.3	0.2	—	SK292に付設する
SK292	L	6次	C	F2	SK92	弥生Ⅰ・Ⅱ	0.8	0.7	8	円形小型土坑
SK293	L	6次	C	E1	SK93	弥生Ⅰ・Ⅱ	1.4	1	23	SH219竪穴住居跡内 長方形貯蔵穴?
SD294	L	6次	C	G5	SD94	不明	2.2	0.3	—	細長い溝
SD295	L	6次	C	G7	SD95	不明	7.2以上	0.2	7	細短い溝
SK296	L	6次	C	F8	SK96	不明	0.7	0.7	2	小型、円形土坑
SK297	L	6次	C	B4	SK97	古代	0.9	0.9	55	大型建物に伴う大型方形柱穴
SK298	L	6次	C	B3	SK98	古代	1.1	1	47	大型建物に伴う柱穴
SE299	L	6次	C	B3	SE99	中世	1.4	1.3	92	円形井戸
SK300	L	6次	C	B3	SK100	中世	0.6	0.7	97	小型円形井戸
SK301	L	6次	C	H6	SK101	弥生Ⅰ・Ⅱ	1.7	1.2	8	竪穴住居跡SH303に伴う 楕円形土坑
SK302	L	6次	C	G6	SK102	弥生Ⅰ・Ⅱ	1.8	1.4	7	竪穴住居跡SH303に伴う 楕円形土坑
SH303	L	6次	C	G6・H6	SH103	弥生Ⅰ・Ⅱ	5	4.6	9	方形住居跡
SK304	L	6次	C	G3	SK104	弥生Ⅰ・Ⅱ	0.8	0.7	15	隅丸方形土坑
SK305	L	6次	C	B5	SK105	不明	1.3	0.5	5	円弧を描く形状 SD242に切られて いる
SK306	L	6次	C	E13	SK106	弥生Ⅰ・Ⅱ	1.4	0.7	—	楕円形土坑
SK307	L	6次	C	B8	SK107	弥生Ⅰ・Ⅱ	2以上	1.2以上	28	楕円形土坑 溝の可能性はある
SK308	L	6次	C	D13	SK108	弥生Ⅰ・Ⅱ	1.6	0.6	60	楕円形土坑
SK309	L	6次	C	C10・11	SD109	弥生Ⅰ・Ⅱ	6.6	1.2	23	直線溝
SK310	L	6次	C	D11	SK110	弥生	0.75	0.66	9	楕円形
SH311	L	6次	C	D13～E14	SH111	弥生Ⅰ・Ⅱ	4	3.2	5	方形竪穴住居跡 四柱穴、炉跡有する
SK312	L	6次	C	F・G11	SD112	弥生Ⅰ・Ⅱ	4.9	0.8	48	直線状溝
SD313	L	6次	C	A・B13	SD113	弥生	4.2以上	1.2	5	南側に未広がり の溝 中央に細い溝を有する
SK314	L	6次	C	E・F11	SK114	弥生Ⅰ・Ⅱ	2.8	2.1	34	楕円形土坑 炭、焼土を含む
SK315	L	6次	C	D14	SK115	弥生Ⅰ・Ⅱ	1	0.7	80	楕円形土坑 写真図版あり
SK316	L	6次	C	B・C14	SK116	弥生Ⅰ・Ⅱ	1.7	1.2	36	楕円形土坑
SD317	L	6次	C	G13～F14	SD117	弥生	20以上	0.9	12	直線状
SK318	L	6次	C	B14	SK118	弥生Ⅰ・Ⅱ	2.2	0.8	32	楕円形土坑
SK319	L	6次	C	C11	SK119	弥生Ⅰ・Ⅱ	1.7	0.6	40	
SK320	L	6次	C	B・C15	SK120	弥生Ⅰ・Ⅱ	1.4以上	1	46	楕円形土坑
SK321	L	6次	C	B14	SK121	弥生Ⅰ・Ⅱ	2.45	0.8	35	楕円形土坑
SH322	L	6次	C	A11～B12	SH122	弥生Ⅰ・Ⅱ	2以上	1.4以上	1.2	三角形に検出 方形の可能性はある
SK323	L	6次	C	A11	SK123	不明	0.8	0.5	—	楕円形
SE324	L	6次	C	A11	SE124	古代	3.6以上	1.4以上	168(74)	円形井戸、仮枠あり
SD325	L	6次	C	A14	SD125	弥生Ⅰ・Ⅱ	6.5以上	0.8	0.23	二股に枝分かれ状
SK326	L	6次	C	A・B12	SK126	弥生Ⅰ・Ⅱ	2.7以上	0.5	42	舟形土坑

第7表 遺構一覧表

報告書 遺構番号	報告 地区	調査時遺構情報				時期	長さ (m)	幅 (m)	深さ (cm)	備 考
		調査年次	調査地区	小地区	遺構					
SE327	L	6次	C	A11~B12	SE127	古代	2.2以上	1.7以上	175	円形井戸 SE324に切られている
SK328	L	6次	C	E8	SK128	中・近世	1.2以上	0.7	15	土坑墓?
SK329	L	6次	C	H6	SH129	弥生I・II	1.1	0.9	12	竪穴住居跡内の円形土坑
SH330	L	6次	C	D14	SH130	弥生I・II	2.2以上	1.6以上	7	方形竪穴住居跡
SD331	L	6次	C	E14~G14	SD131	不明	10以上	0.7	27	直線状
SK332	L	6次	C	D12	SK132	弥生I・II	1.4	0.7	15	隅丸長方形土坑
SH333	L	6次	C	B14~C15	SH133	弥生I・II	4.8	4.4	14	正方形竪穴住居跡
SK334	L	6次	C	D14	SK134	弥生I・II	0.8	0.6	25	方形土坑
SK335	L	6次	C	B12	SK135	不明	0.8	0.4	—	楕円形土坑 焼土を大量に含む 写真図版あり
SK336	L	6次	C	E11	SK136	不明	0.7	0.65	17	円形土坑
SK337	L	6次	C	E11	SK137	不明	1.25	0.6	12	楕円形土坑
SD338	L	6次	C	G11・12	SD138	中世	2.5以上	0.88	—	痕跡として確認
SK339	L	6次	C	B14	SK139	弥生I・II	1.2	1.06	16	楕円形土坑
SD340	L	6次	C	A・B9	SD140	弥生中期	5	1.53	5	細い蛇行溝 SD243と重複
SK341	L	6次	C	A4	SK141	不明	1.7以上	1.7	1.65	方形土坑
SD342	L	6次	C	A・B5	SD142	不明	2.1	0.33	1	SD224内の溝 痕跡として確認
SB343	L	6次	C	B4・5他	—	古代	10	5.4	55	N10° E 東西棟
SB344	L	6次	C	E4・5他	—	古代末	8.4	4.5	60	N8° E 東西棟
SB345	L	6次	C	B1・C2他	—	奈良	3.2以上	4.4以上	20	N19° W 東西棟
SB346	L	6次	C	C2・D1他	—	古代以降	4.8	3	35	N2° E 南北棟
SB347	L	6次	C	D4・E4他	—	古代末	4.2	4.2	45	N7° W 正方形
SB348	L	6次	C	E6・F6他	—	古代末	4.8	3.3	50	N32° E 南北棟
SB349	L	6次	C	F7・E8他	—	古代	7	4.6	50	N26° W 南北棟
SB350	L	6次	C	E7・8他	—	古代	4.3	4.2	60	N37° E 南北棟
SB351	L	6次	C	E8・9他	—	中世	4.2	3.6	60	N16° E 南北棟
SB352	L	6次	C	E10・11他	—	中世	3	2.8	35	N1° W 南北棟
SD361	H	6次	D1	P1・2	SD401	—	7以上	2.5	30	
SD362	H	6次	D1	I18	SD402	—	3.8以上	1	30	総延長約64m
SD363	H	6次	D1	F18	SD403	—	4以上	4.6	48	総延長約62m
SK364	H	6次	D1	F18	SK404	—	1.8	0.8	18	
SK365	H	6次	D1	F18	SK405	—	2以上	0.6以上	14	
SK366	H	6次	D1	F18	SK406	—	1	0.7	18	
SD401	N	6次	B3	A7~G8	SD301	—	11以上	0.4	16	
SD402	N	6次	B2	F・G1	SD302	—	2.1以上	0.7以上	15	
SD403	N	6次	B2	F・G2	SD303	—	2.2以上	0.5	13	
SD404	N	6次	B2	F・G3	SD304	—	2.2以上	1.6	20	
SD405	N	6次	B3	D7・8	SD305	—	3.9	1.7以上	22	
SD406	N	6次	B2	F2~G3	SD306	—	2.2以上	0.8	10	
SD407	N	6次	B2	F・G8	SD307	—	2.4以上	2	49	
SD408	N	6次	B3	E7~F8	SD308	—	2以上	4.5	15	
SK409	N	6次	B2	F・G8	SK309	—	1.1	1.1	93	
SK410	N	6次	B3	C・D7	SK310	—	0.7	0.4以上	55	
SD411	N	6次	B3	C8, D7・8	SD311	—	2.1以上	0.6	23	
SK412	N	6次	B2	G9	SK312	—	0.8	0.7	48	
SK413	N	6次	B2	G8	SK313	—	0.7	0.4	11	
SD414	N	6次	B2	F13	SD314	—	1	0.6	14	
SZ415	N	6次	B2	E7	SZ315	—	2.1以上	0.6以上	19	
SD416	N	6次	B2	F・G10	SD316	—	2.3以上	1.8	16	
SD417	N	6次	B2	F・G9	SD317	—	2.6以上	1	28	
SD418	N	6次	B2	F・G11	SD318	—	2.7以上	0.3	19	
SK419	N	6次	B2	G13	SK319	—	1.3	0.8以上	9	
SD420	N	6次	B2	F・G14	SD320	—	2.6以上	0.4	22	

第8表 遺構一覧表

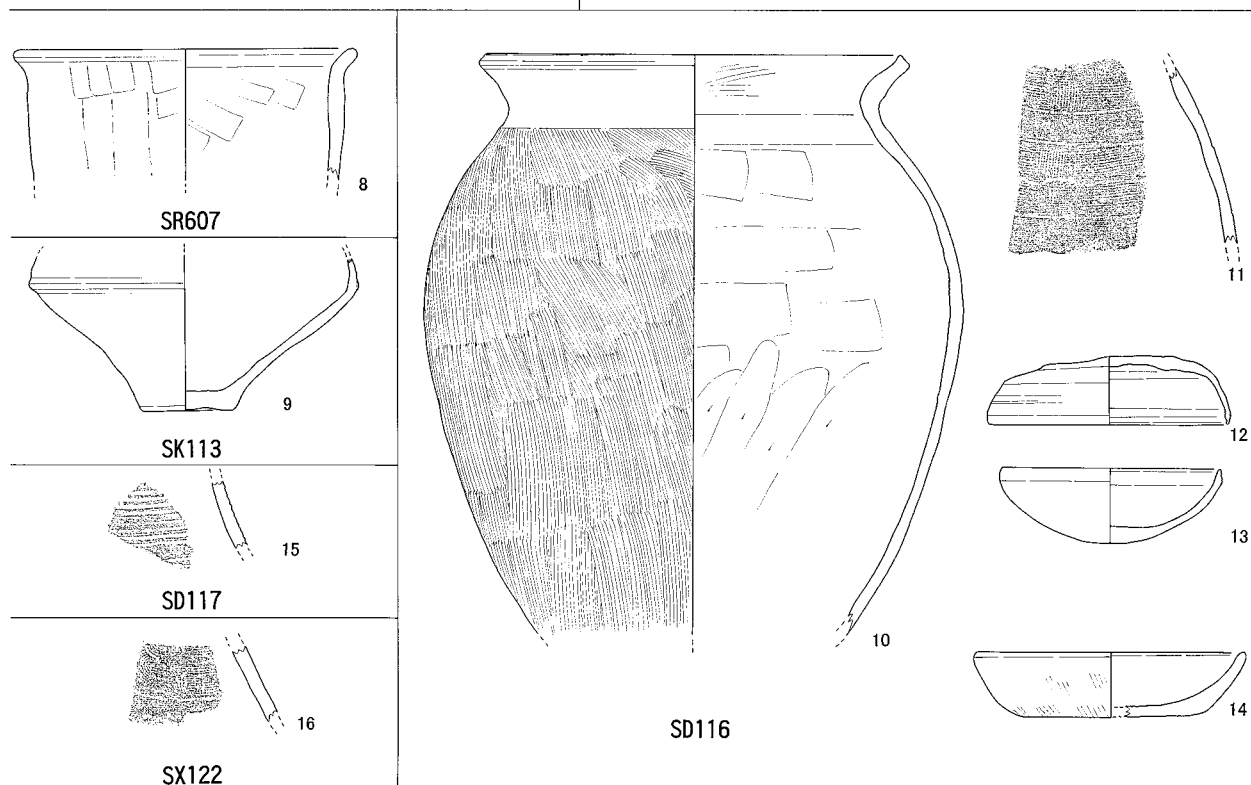
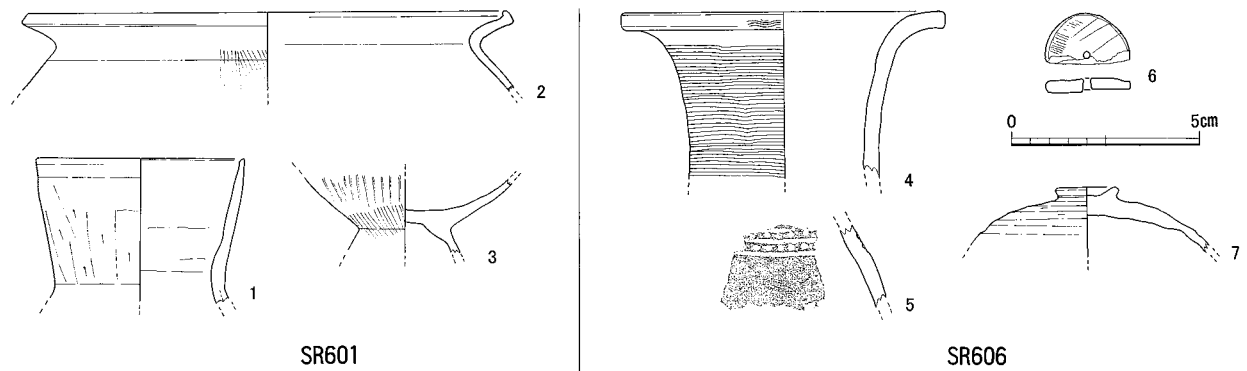
報告書 遺構番号	報告 地区	調査時遺構情報				時期	長さ (m)	幅 (m)	深さ (cm)	備 考
		調査年次	調査地区	小地区	遺構					
SK421	N	6次	B2	G11	SK321	—	1.2以上	1.3	16	
SK422	N	6次	B2	F10	SK322	—	1.1	0.5以上	8	
SK423	N	6次	B2	F・G14	SD323	—	1.1以上	0.6	28	
SK424	N	6次	B2	F・G14	SD324	—	2.5以上	3.8	20	
SX425	N	6次	B2	F・G16	SK325	—	1.3以上	1.2	—	痕跡のみ確認
SD426	N	6次	B2	F・G15	SD326	—	2.5以上	0.4以上	30	SD519と同一
SD427	N	6次	B2	F・G19	SD327	—	2.5以上	0.7	16	SD508と同一
SD428	N	6次	B2	F20	SD328	—	2.4以上	0.5	17	
SD429	N	6次	B2	F20・F21	SD329	—	2.6	0.8	22	
SD430	N	6次	B2	F21・F22	SD330	—	2.5以上	2.5	6	
SK431	N	6次	B2	F・G18	SK331	—	1.5	1	16	
SD432	N	6次	B2	G4	SD332	—	2以上	0.4	23	
SD433	N	6次	B2	G5	SD333	—	2.1以上	0.6	18	
SK434	N	6次	B2	G5	SK334	—	0.8以上	1.2	9	
SD435	N	6次	B3	A7	SK335	—	2以上	0.7	19	
SK436	N	6次	B3	A7	SK336	—	1.8以上	0.6	51	
SK437	N	6次	B2	G7	SK337	—	0.9	0.6	27	
SD438	N	6次	B2	G9	SD338	—	2.8以上	1.1	51	
SK439	N	6次	B2	G10	SK339	—	0.5以上	0.4以上	14	
SK440	N	6次	B2	F14	SK340	—	0.7	0.7	6	
SZ441	N	6次	B2	G12~14	SD341	—	11	1.5以上	9	
SD442	N	6次	B3	B7	SD342	—	2.2以上	1.2	43	
SZ443	N	6次	B2	F21	SZ343	—	—	6以上	21	
SD501	O	7次	I	U2~X2	SD1	中世	10以上	0.6以上	—	痕跡のみ確認 流路の残存部分か？
SD502	O	7次	I	L2~X2	SD2	中世	54以上	1	31	SD545に繋がる可能性
SD503	O	7次	I	Q2~X2	SD3	中世	90以上	2.2	45	
SD504	O	7次	I	S5~X5	SD4	中世	20以上	0.7	16	
SD505	O	7次	I	W5・6	SD5	中世	4以上	0.4	12	
SD506	O	7次	I	S5~U5	SD6	中世	10以上	0.2	16	
SD507	O	7次	I	V・W3	SD7	中世	6.7以上	0.4	—	痕跡のみ確認
SD508	O	7次	I	T5・6	SD8	中世	6.6以上	0.8	27	
SD509	O	7次	I	U6	SD9	中世	4.5以上	0.6	15	
SK510	O	7次	I	U3	SK10	中世	2.1以上	0.8	14	SK542に付随する
SD511	O	7次	I	X5・6	SD11	中世	4.4以上	0.8	11	
SD512	O	7次	I	T6	SD12	中世	3以上	1	26	
SD513	O	7次	I	X5	SD13	中世	1.8以上	0.4	7	
SD514	O	7次	I	U3~X3	SD14	中世	14以上	0.7	65	遺物が集中して出土 遺物溜まりか？
SD515	O	7次	I	U3~X3	SD15	中世	12以上	1.2	37	SD514にほぼ平行 遺物は少ない
SD516	O	7次	I	P5・6	SD16	中世	6.3以上	0.5	43	
SD517	O	7次	I	U2	SD17	中世	1.2以上	1.1	53	箆状遺物・家紋入り 漆製品出土
SD518	O	7次	I	P5・6	SD18	中世	33以上	0.8	43	
SD519	O	7次	I	P5・6	SD19	中世	6.4以上	0.6	26	
SD520	O	7次	I	T・U3	SD20	中世	5.4以上	0.8	14	
SD521	O	7次	I	P2~U3	SD21	中世	21以上	0.4	35	SR539の上を走る 区割りか？
SD522	O	7次	I	R3~T3	SD22	中世	11以上	1.1以上	20	SR539の上を走る 区割りか？
SK523	O	7次	I	W3	SK23	中世	—	—	—	遺物集中 遺構としては 認定取り消し
SK524	O	7次	I	V6	SK24	中世	0.8	0.4	8	
SK525	O	7次	I	S5	SK25	中世	1.4	1	30	
SK526	O	7次	I	V3	SK26	中世	0.8	0.5以上	45	
SK527	O	7次	I	X5	SK27	中世	2	0.3以上	5	ごく浅いぼみ
SK528	O	7次	I	T3	SK28	中世	0.8	0.7	54	真円に近い

第9表 遺構一覧表

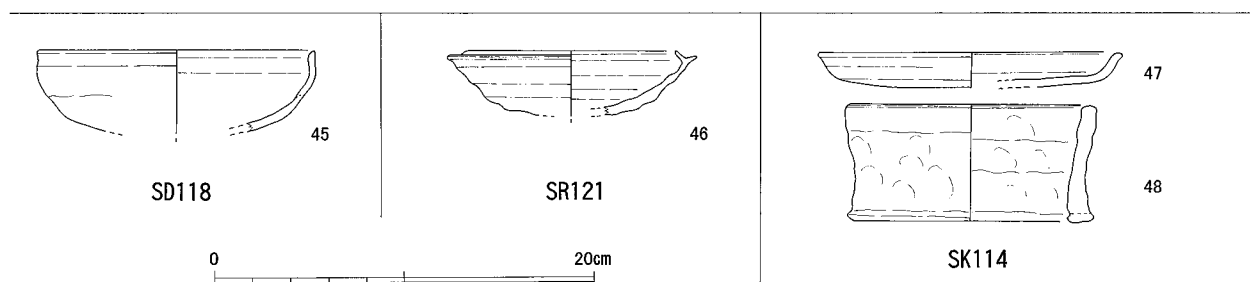
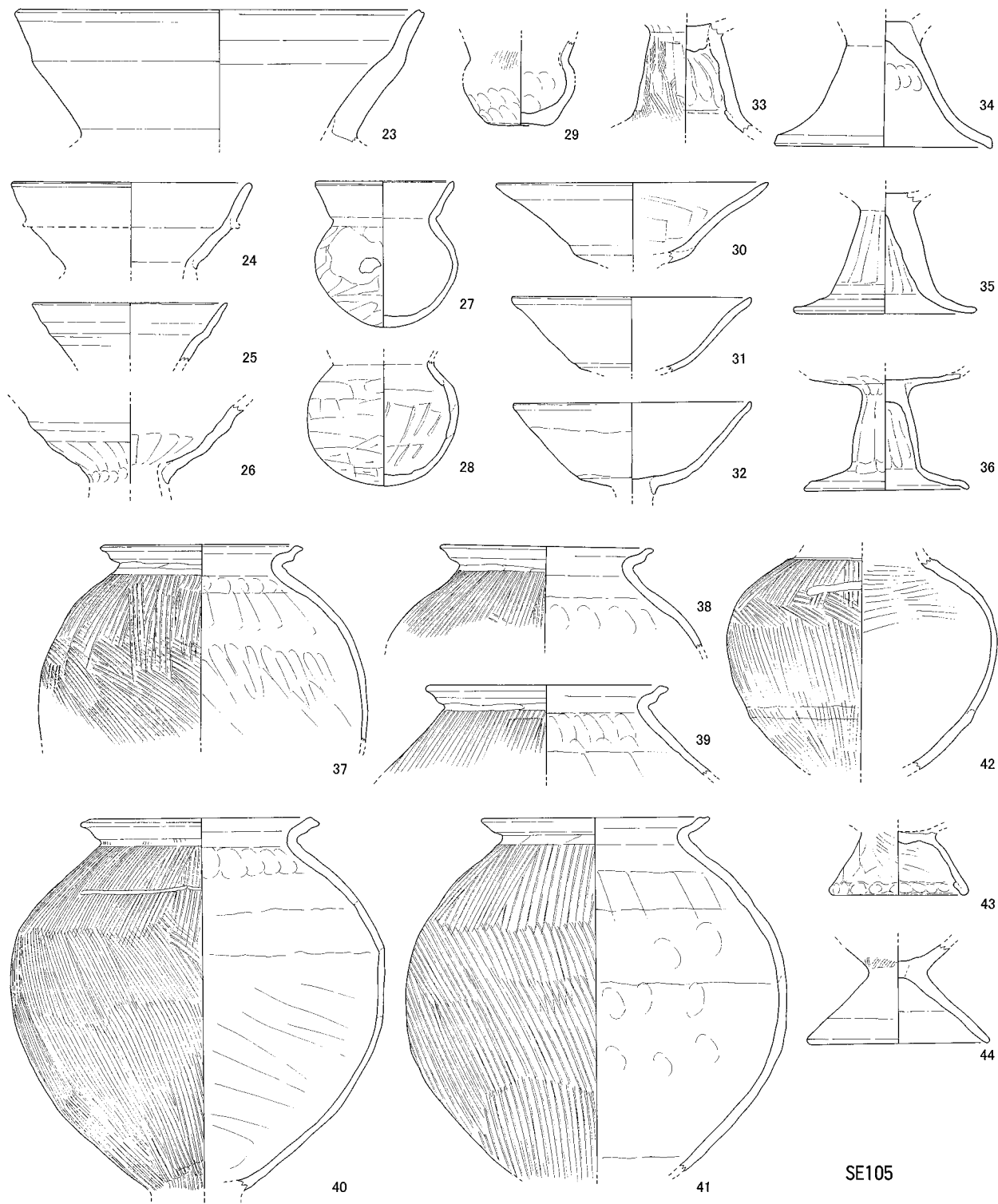
報告書 遺構番号	報告 地区	調査時遺構情報				時期	長さ (m)	幅 (m)	深さ (cm)	備 考
		調査年次	調査地区	小地区	遺構					
SK529	O	7次	I	K6	SK29	中世	3	2.2	200以上	埋められた井戸上に石組 用途不明
SK530	O	7次	I	O6	SK30	中世	1	0.4	13	
SK531	O	7次	I	O6	SK31	中世	0.9	0.9	62	遺物を含む
SD532	O	7次	I	I6~J6	SD32	中世	6.5以上	0.5	23	
SK533	O	7次	I	Q5	SK33	中世	1	0.8	38	関係遺物出土
SK534	O	7次	I	M6	SK34	中世	2.2	2.1	11	浅いくぼみ、SK541と類似
SZ535	O	7次	I	U3	SZ35	中世	1	0.8程度	—	明瞭な掘り込みなし 遺物集中
SK536	O	7次	I	P6	SK36	中世	0.5	0.3	19	上部は溝に切られている
SX537	O	7次	I	Q2	SX37	中世	0.8	0.8	26	甕棺・鉄製品・人骨出土
SE538	O	7次	I	N3	SE38	中世	2.2	2.2	130以上	
SR539	O	7次	I	L3~X3	SR39	中世	推定31	—	—	立ち上がりはSD502に壊されはつき りしない
SX540	O	7次	I	D5	SX40	中世	0.9	0.4	17	小骨あり
SK541	O	7次	I	D6	SK41	中世	3.3	1.3	19	SK534に類似
SK542	O	7次	I	U2	SK42	中世	5.4以上	1.6	6	厠跡か？
SK543	O	7次	I	P2	SK43	中世	1.3	0.2	12	SD544の一部か？
SD544	O	7次	I	L3~P3	SD44	中世	9	0.4	9	
SD545	O	7次	I	B7~K3	SD45	中世	43以上	2	33	SD502と連続？
欠番	O	7次	I	B6~G6	SD46	—	—	—	—	SD503と同一
SK547	O	7次	I	F7	SK47	中世	1	1	12	
SK548	O	7次	I	Q6	SK48	中世	1.2	1.1	—	下層確認時に確認した土坑
SB549	O	7次	I	K7~M7	SB49	中世	10.3	4以上	13	N21° E 東西棟
欠番	O	7次	I	—	SB50	—	—	—	—	
SK551	O	7次	I	U4	SK51	中世	1.3	0.4	27	SK542に付随
SK552	O	7次	I	U4	SK52	中世	0.9	0.7	56	SK542に付随
SK553	O	7次	I	F5	SK53	中世	2.8	0.4	27	
SD801	P	8次	—	A4~V5	SD1	中世・近世	90以上	2.8	65	山茶碗・伊勢鍋・瓦・須恵器・青磁 ・常滑甕・灰釉など
SD802	P	8次	—	T3~V4	SD2	中世・近世	13以上	0.4	25	山茶碗・伊勢鍋・須恵器・漆塗り碗 など
SD803	P	8次	—	T3~V4	SD3	中世	12以上	1.6以上	29	山茶碗・伊勢鍋・常滑甕・木製品な ど多数。墨書あり
SD804	P	8次	—	P3~R3	SD4	中世	11.3	1.6以上	50	山茶碗・伊勢鍋・須恵器・木製品な ど。墨書あり
SD805	P	8次	—	R3~S3	SD5	中世	3.6以上	1.2以上	34	土師器片、遺物少量
SD806	P	8次	—	P4~U5	SD6	中世か？	21	1.8	36	台付甕・須恵器・黒色土器
SD807	P	8次	—	E5~T7	SD7	古墳	64以上	0.5	13	古式土師(高杯脚)
SD808	P	8次	—	A3~P3	SD8	中世	59以上	1.6以上	58	瓦・山茶碗・伊勢鍋・火舎・須恵器・ 木製品など
SK809	P	8次	—	N4・O4	SK9	中世か？	1.2	0.8	22	めだつた遺物なし
SK810	P	8次	—	N5	SK10	中世か？	1.2	1	26	めだつた遺物なし
SD811	P	8次	—	P5	SD11	不明	3.3	0.8	27	めだつた遺物なし
SD812	P	8次	—	K4~M6	SD12	古墳	13.4	0.7	14	古式土師・須恵器
SD813	P	8次	—	A4~N4	SD13	中世・近世	50以上	0.9	26	山茶碗・清郷鍋？ 黒色土器・木製 品など
SD814	P	8次	—	G3~H4	SD14	中世	4.4	0.7	20	中世土師皿・伊勢鍋
SD815	P	8次	—	F5・G5	SD15	不明	3.3	0.9	18	めだつた遺物なし
SD816	P	8次	—	A5~H7	SD16	古墳	27以上	2.2	19	古式土師・須恵器
SD817	P	8次	—	F6~G7	SD17	古墳	8.4以上	0.2	7	古式土師
SK818	P	8次	—	C3・C4	SK18	不明	1.9	0.4	7	めだつた遺物なし
SK819	P	8次	—	E5・E6	SK19	古墳	4.4	1.5	10	古式土師・須恵器
SD820	P	8次	—	B3・B4	SD20	不明	3.1	0.9	16	めだつた遺物なし

※トーンは本書において個別報告した遺構である。

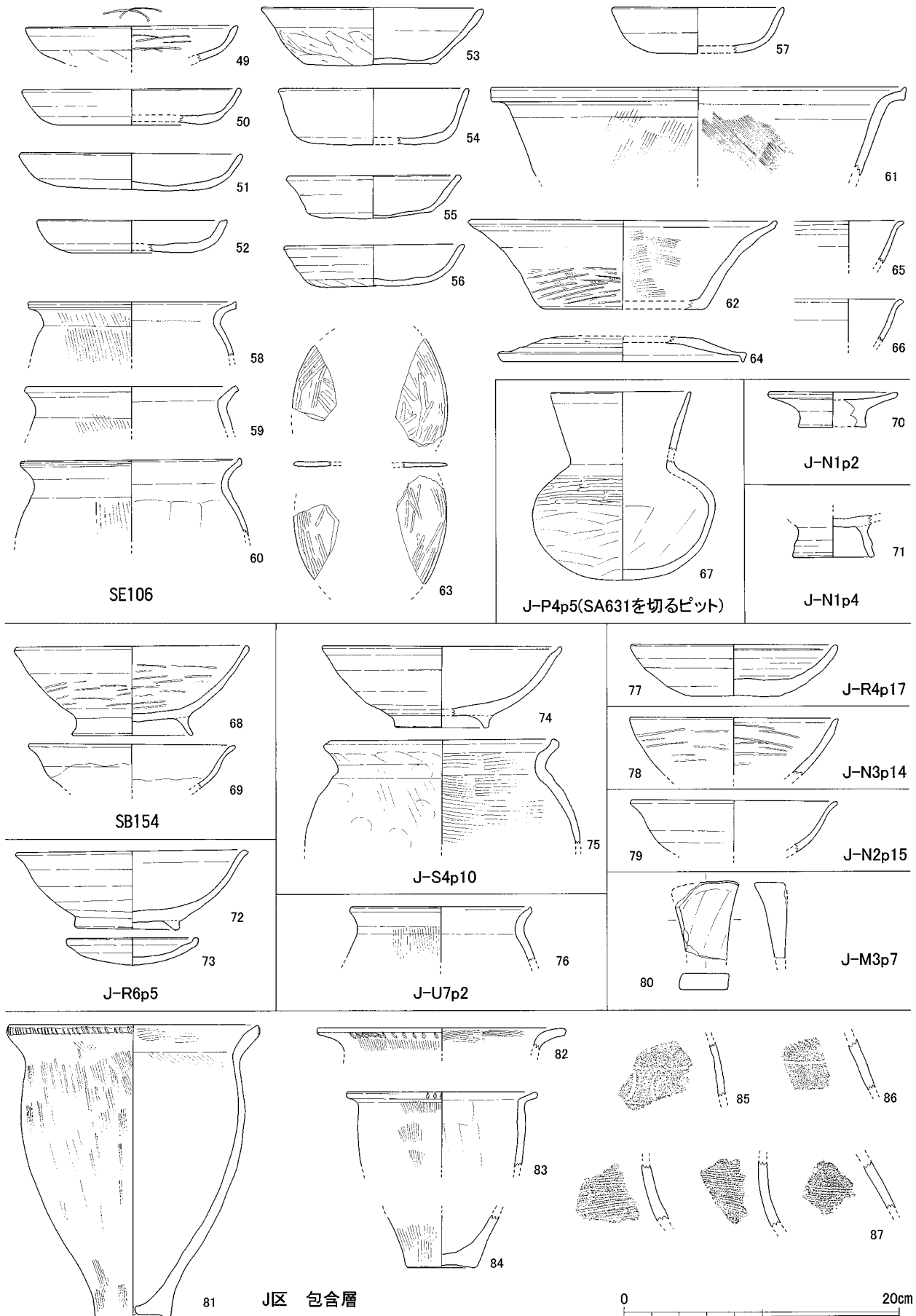
第10表 遺構一覧表



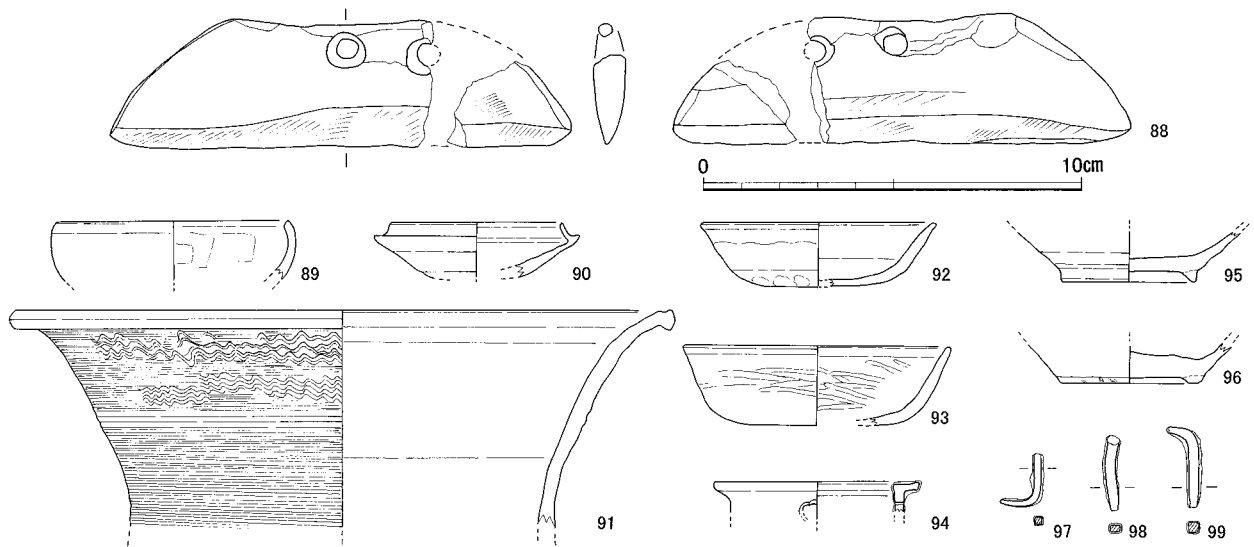
第211図 出土遺物実測図（6のみ1：2、その他1：4）



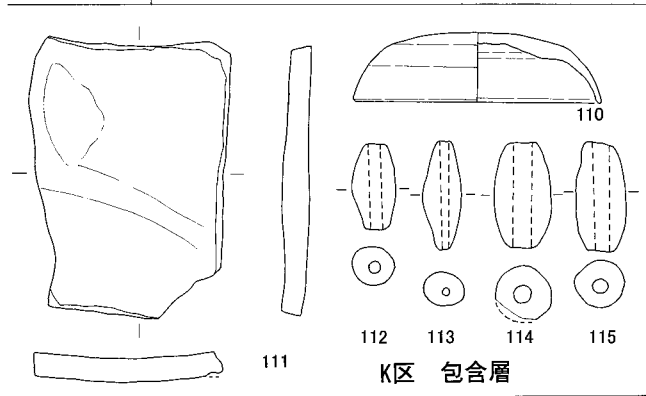
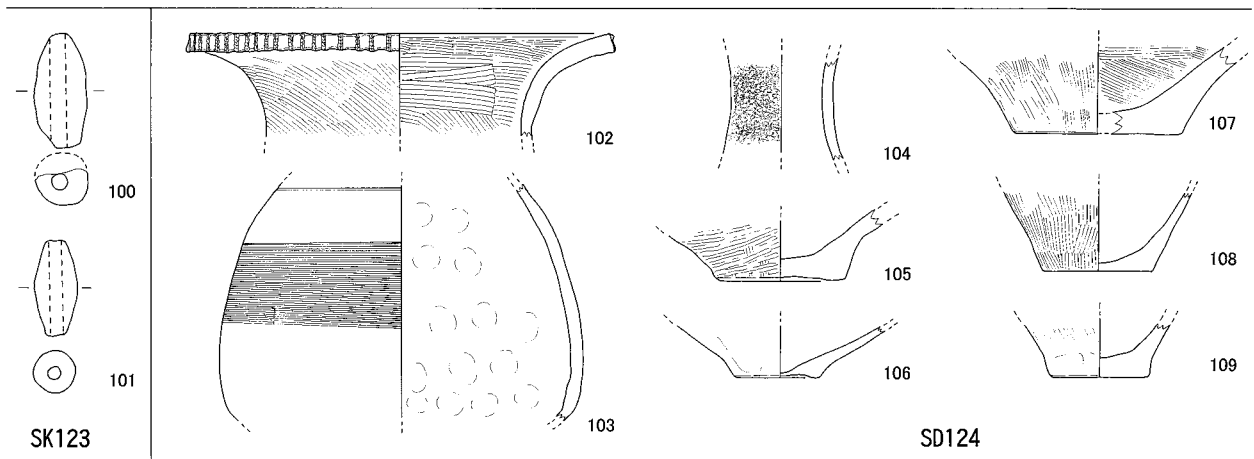
第212図 出土遺物実測図 (1 : 4)



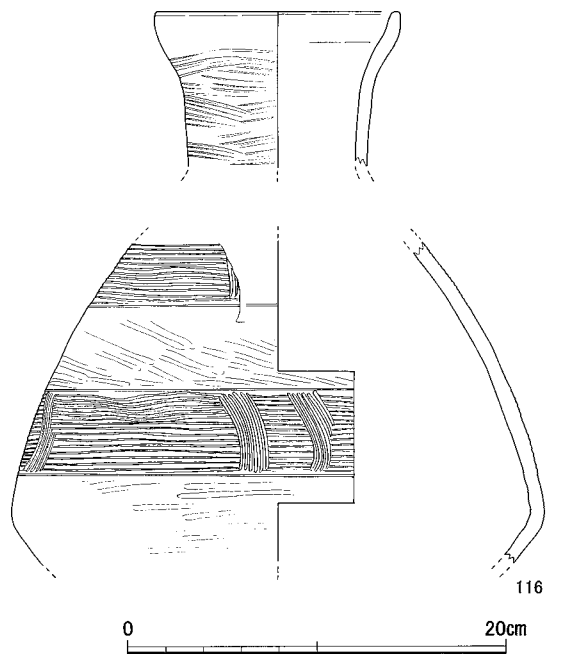
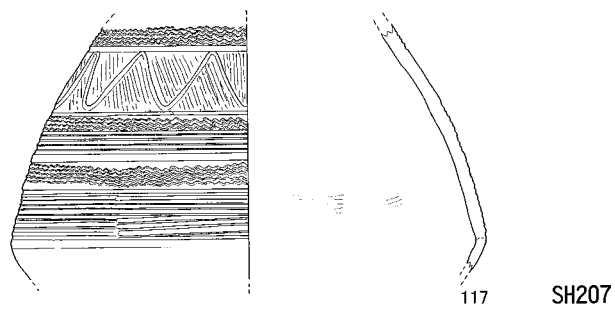
第213図 出土遺物実測図 (1:4)



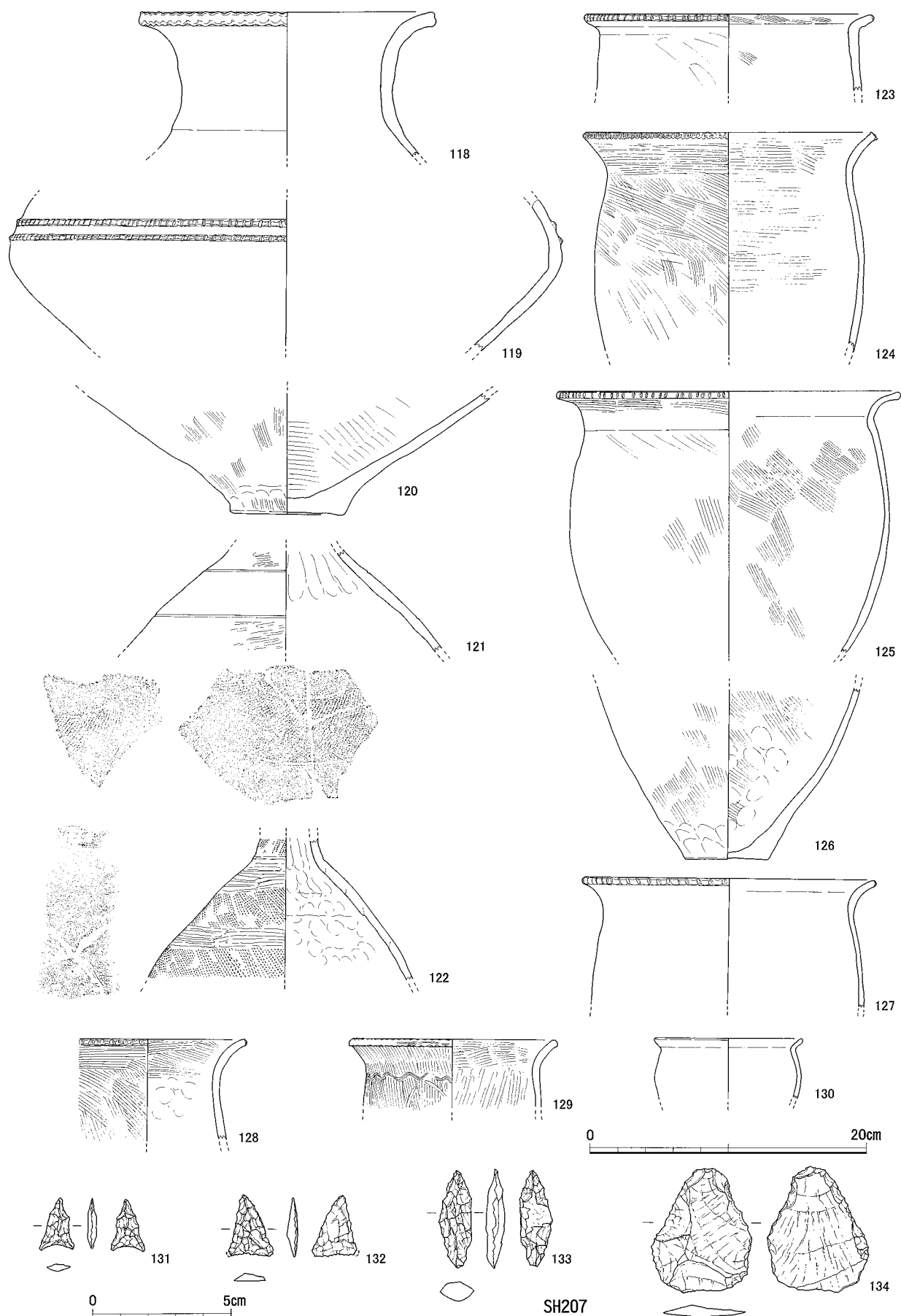
J区 包含層



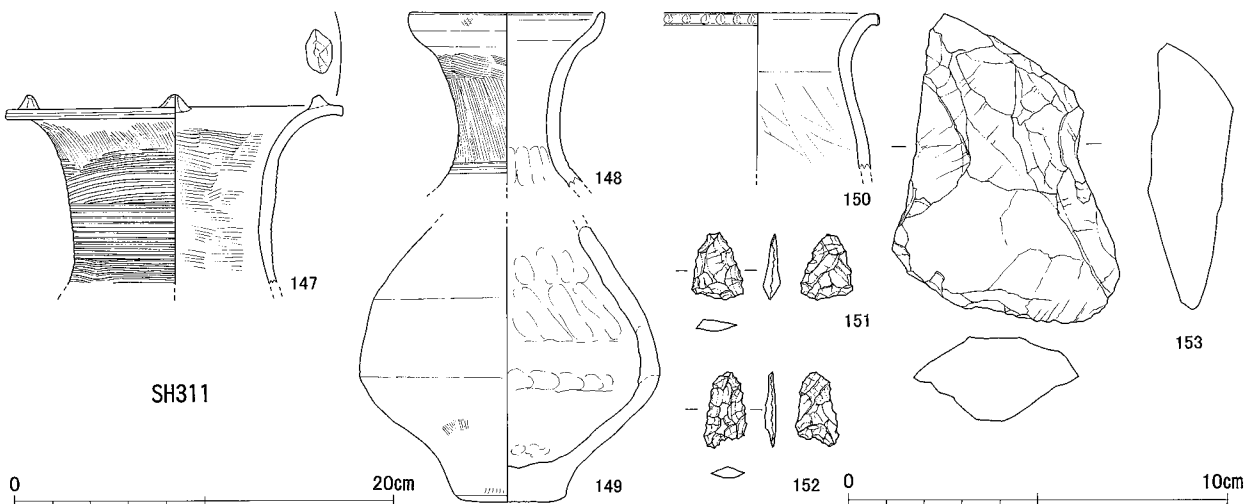
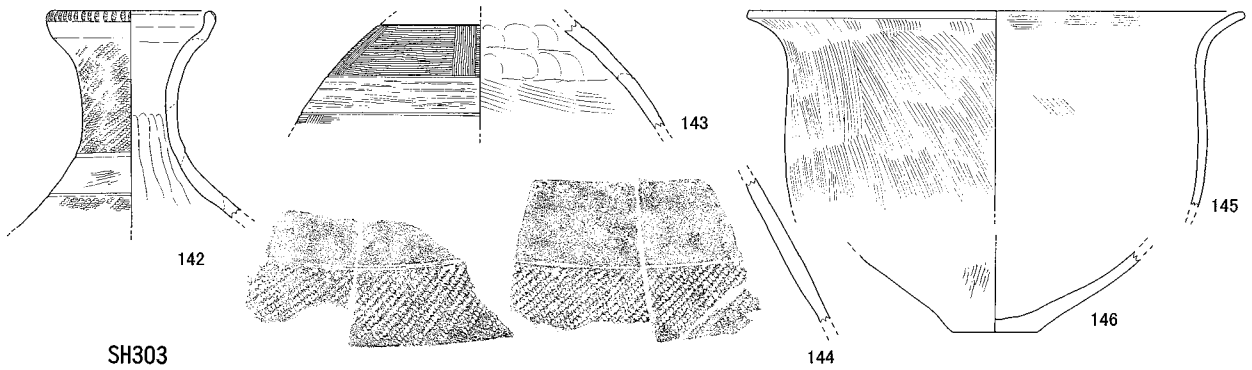
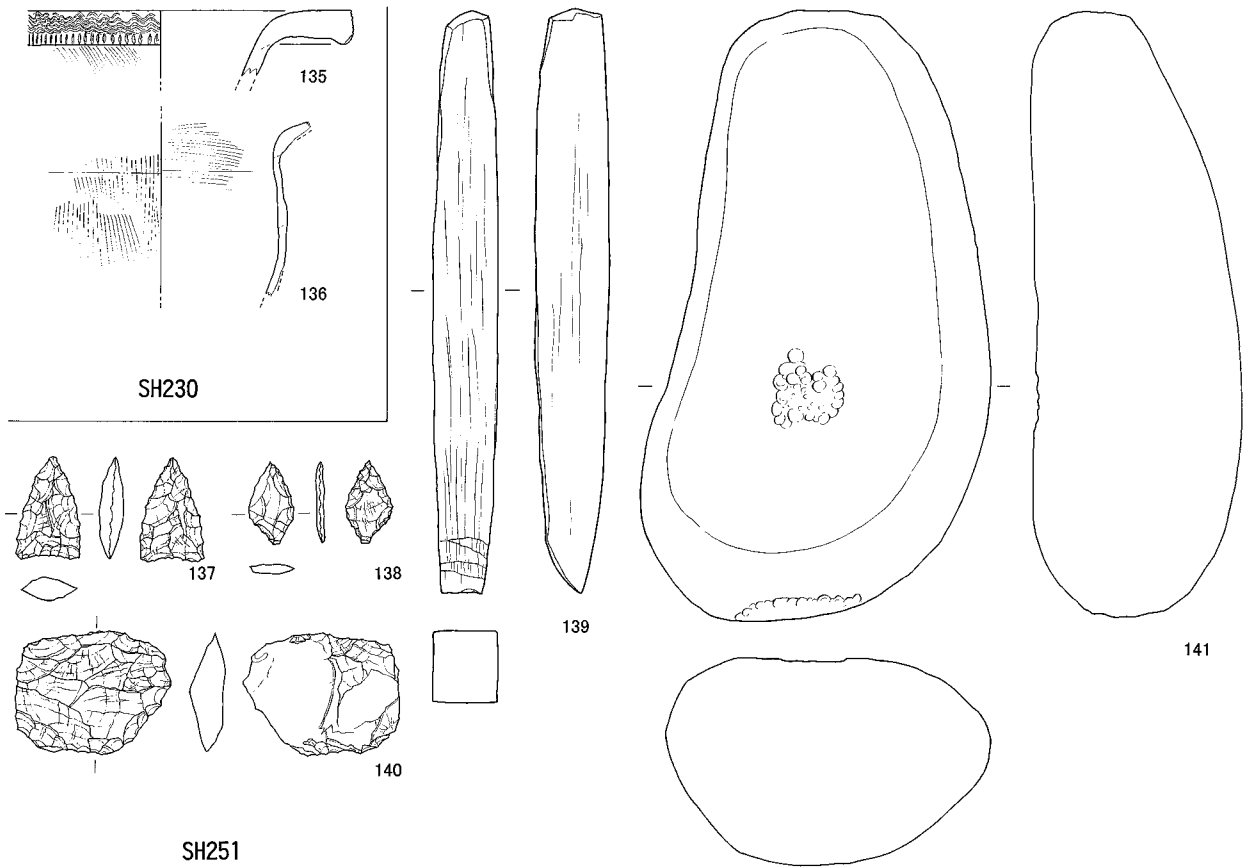
K区 包含層



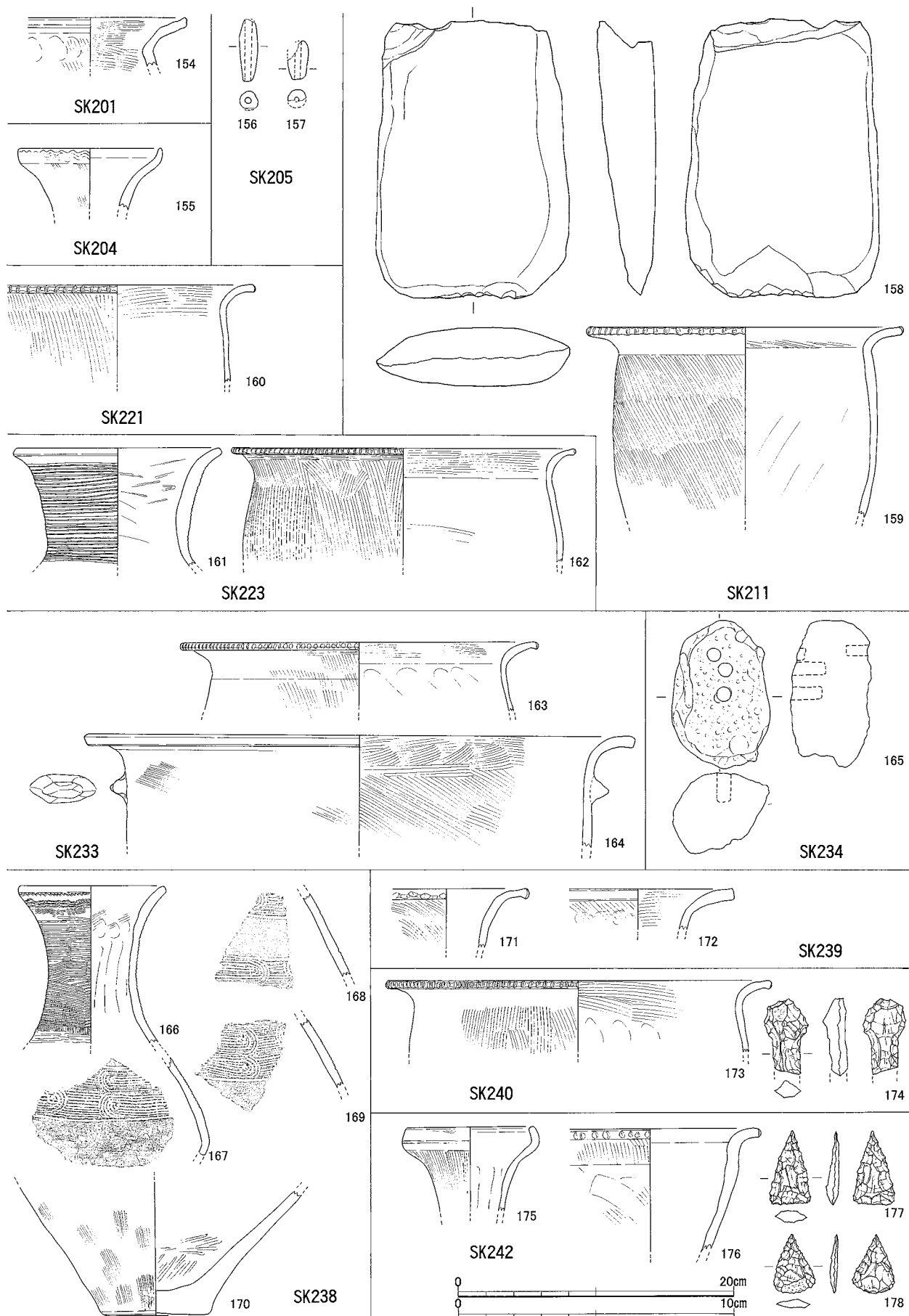
第214図 出土遺物実測図 (88のみ 1 : 2、その他 1 : 4)



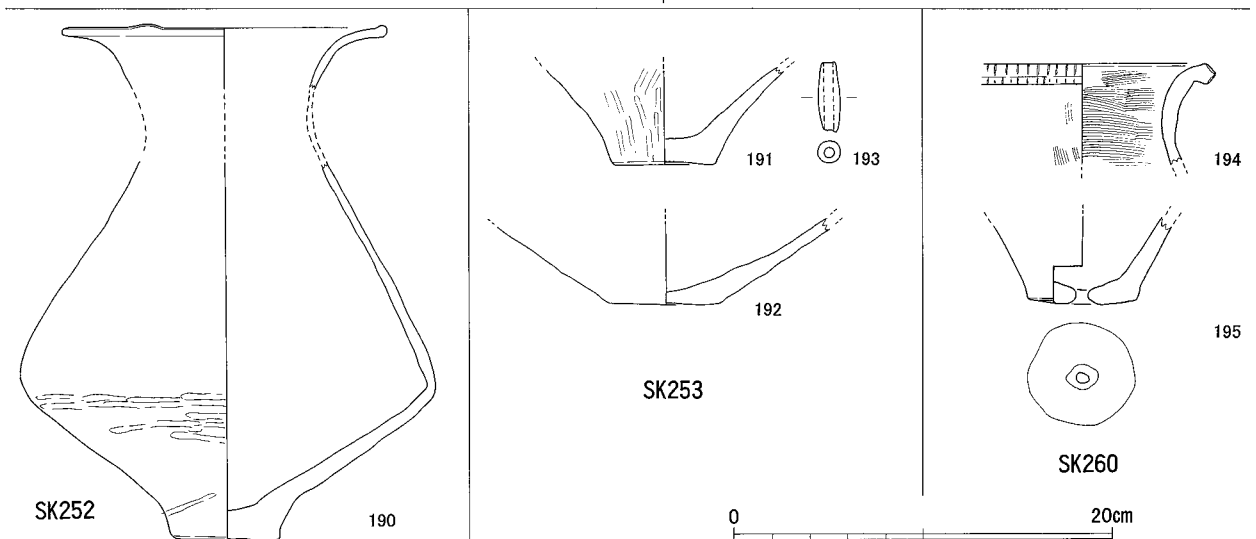
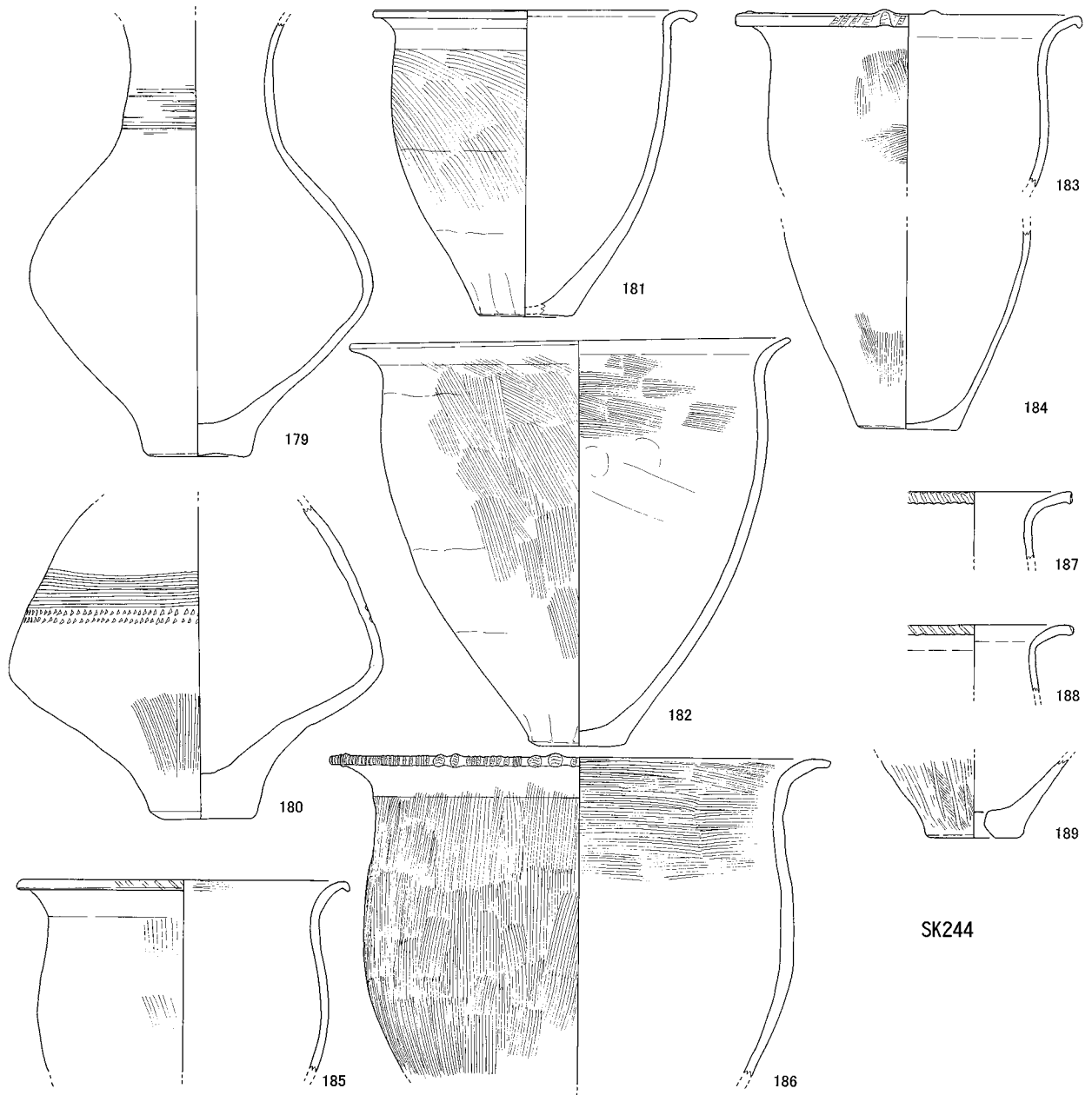
第215図 出土遺物実測図 (131~134は 1 : 2、その他 1 : 4)



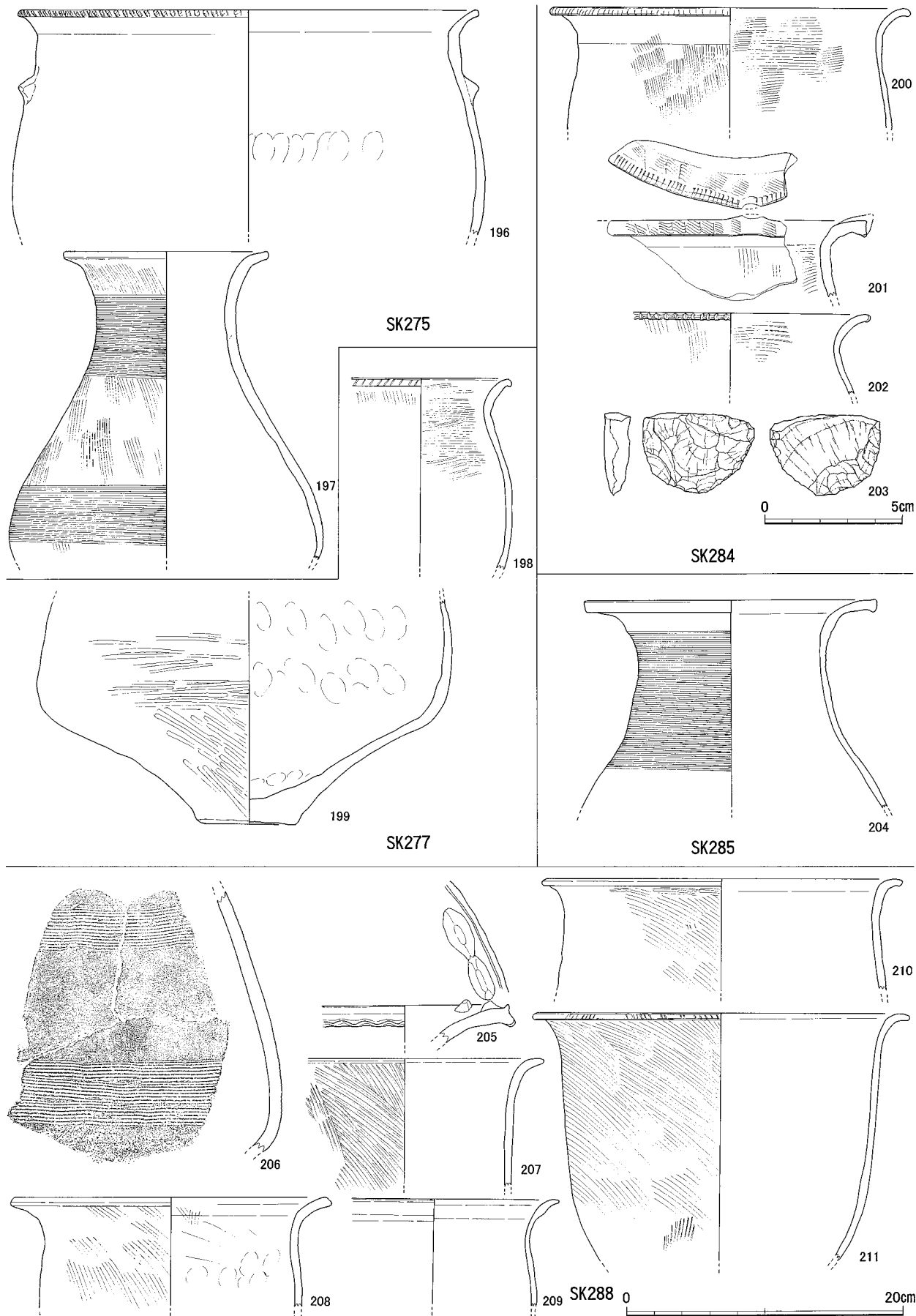
第216図 出土遺物実測図 (137~141・151~153は 1 : 2、その他 1 : 4)



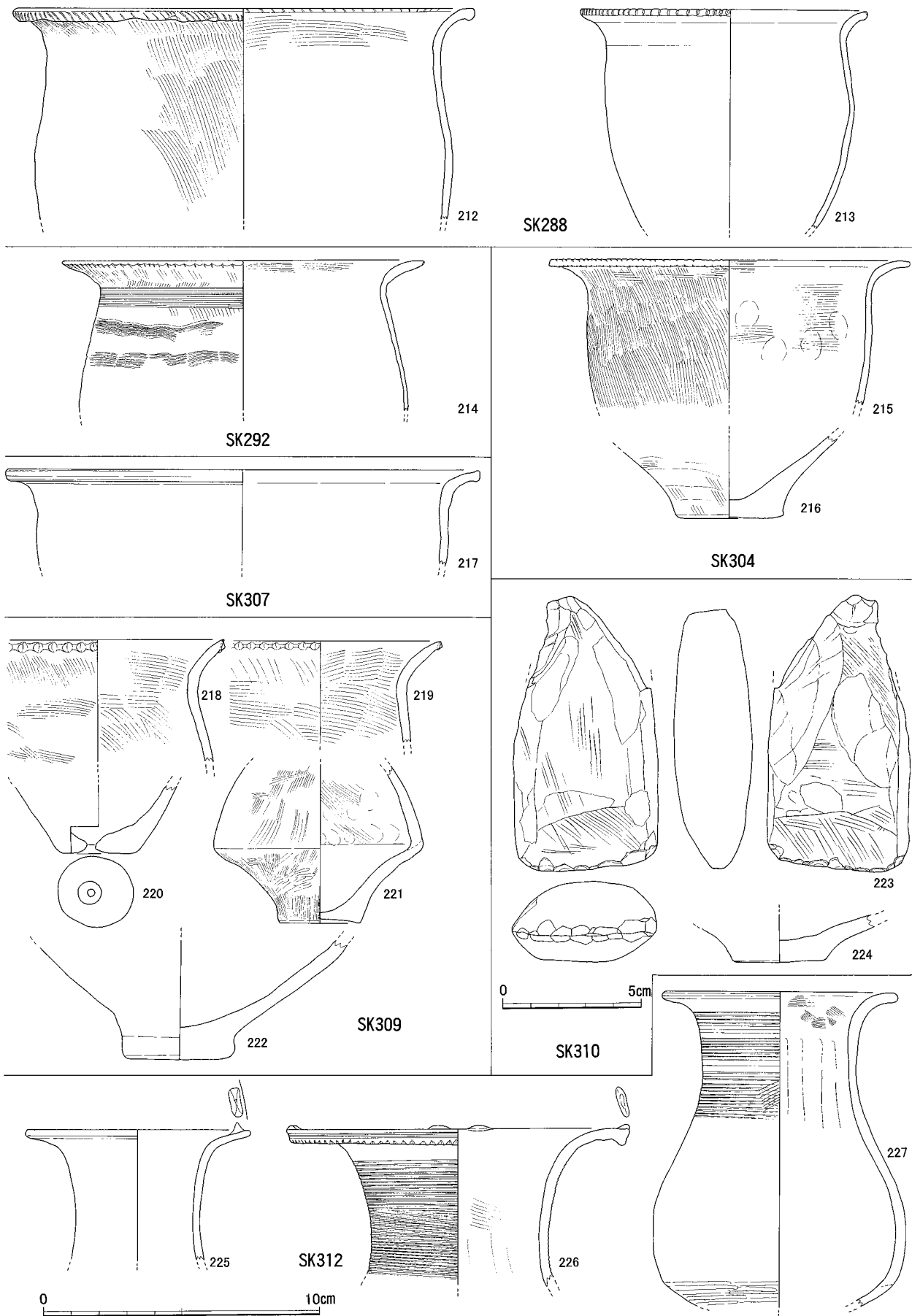
第217図 出土遺物実測図 (158・174・177・178は1:2、その他1:4)



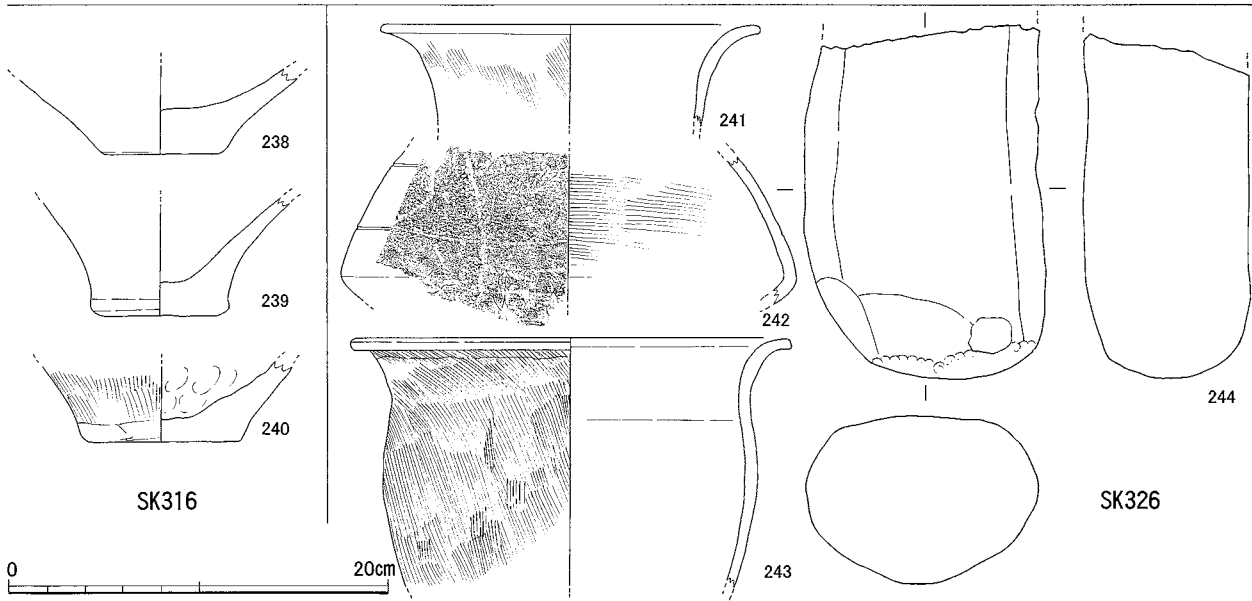
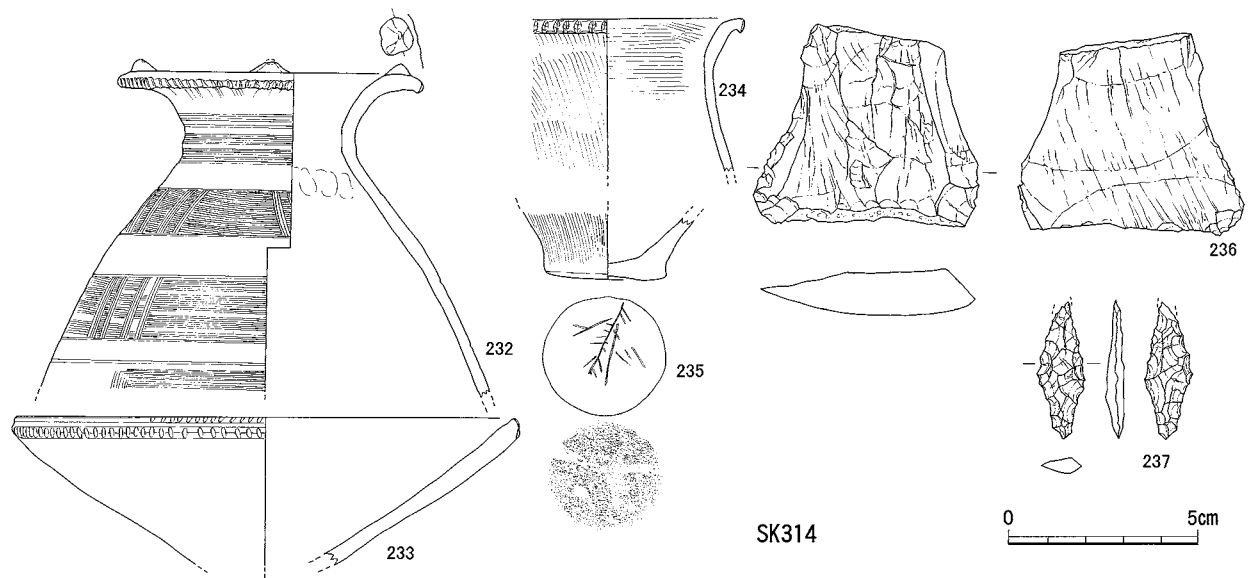
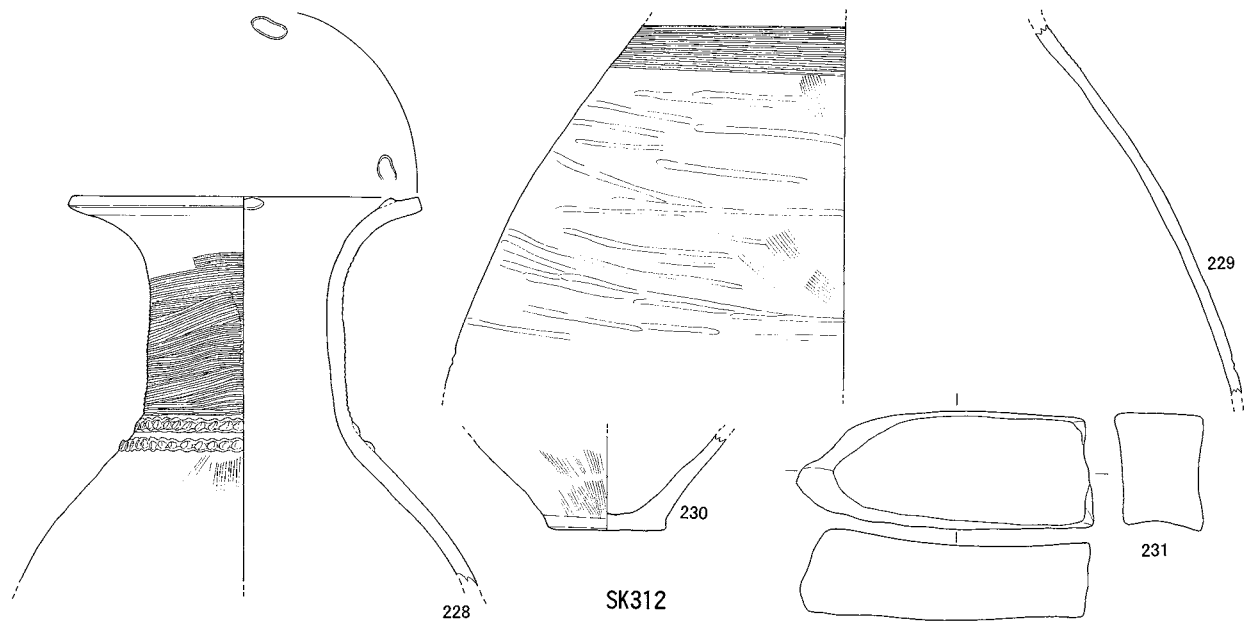
第218図 出土遺物実測図 (1 : 4)



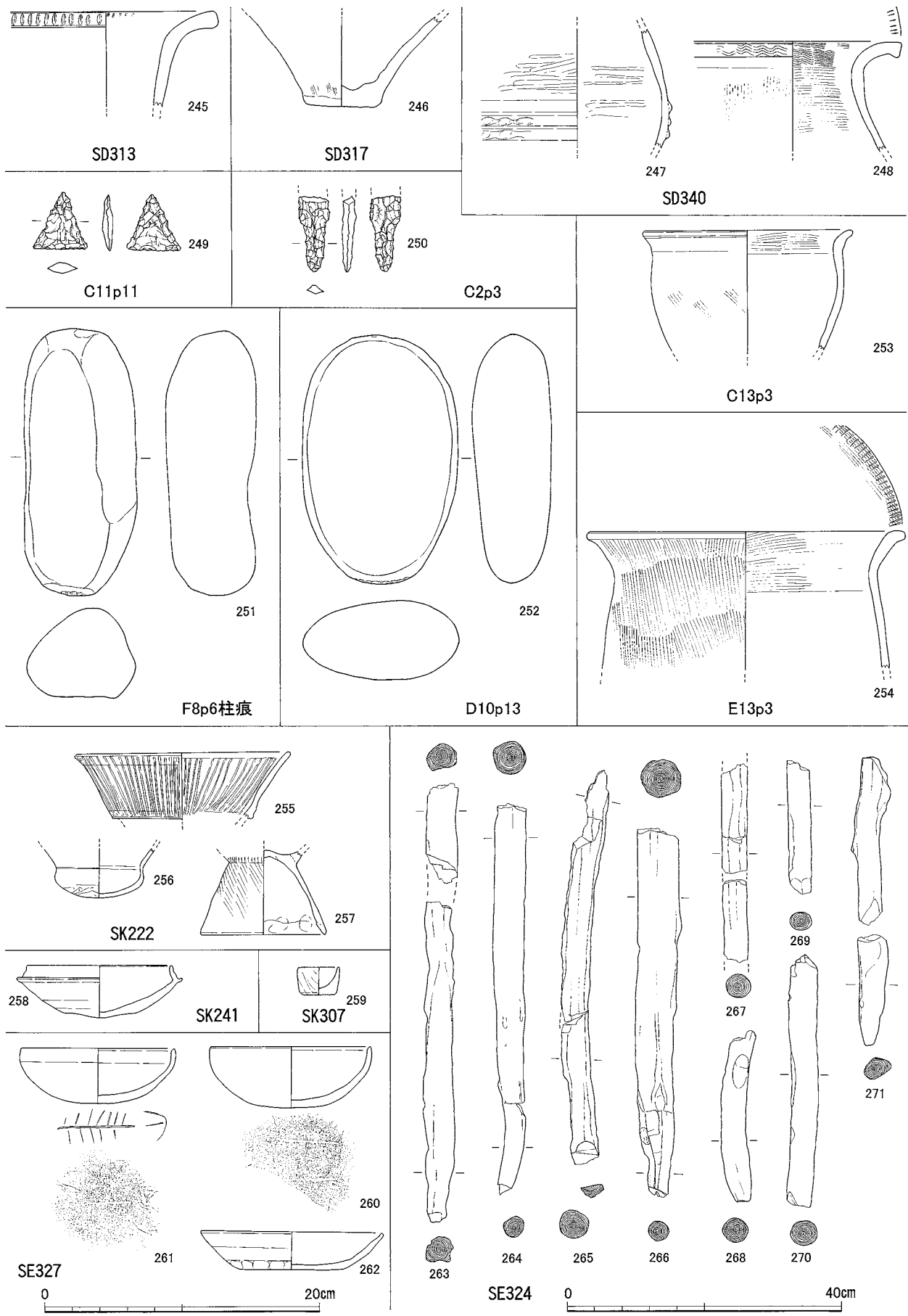
第219図 出土遺物実測図 (203のみ 1 : 2、その他 1 : 4)



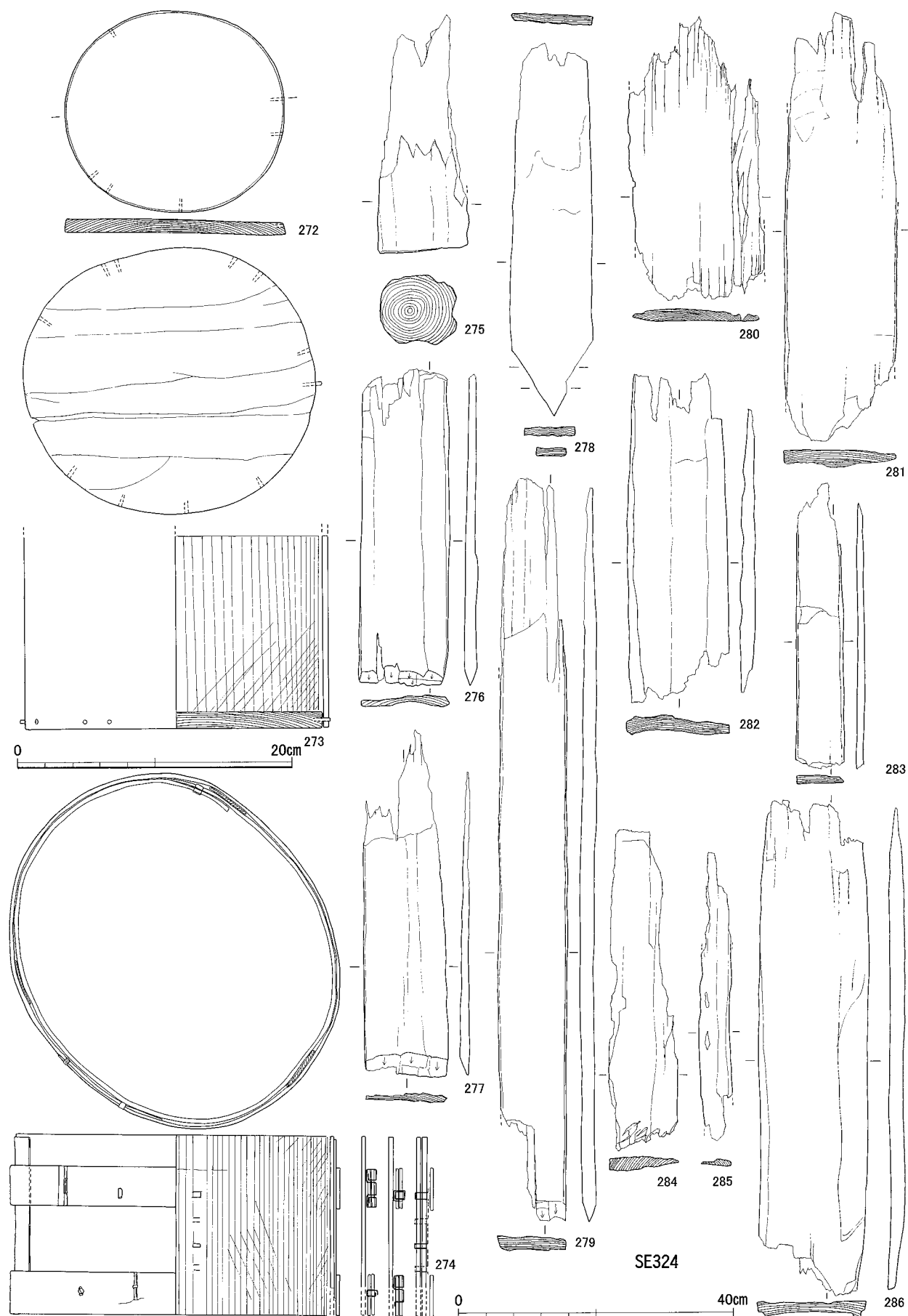
第220図 出土遺物実測図 (223のみ 1 : 2、その他 1 : 4)



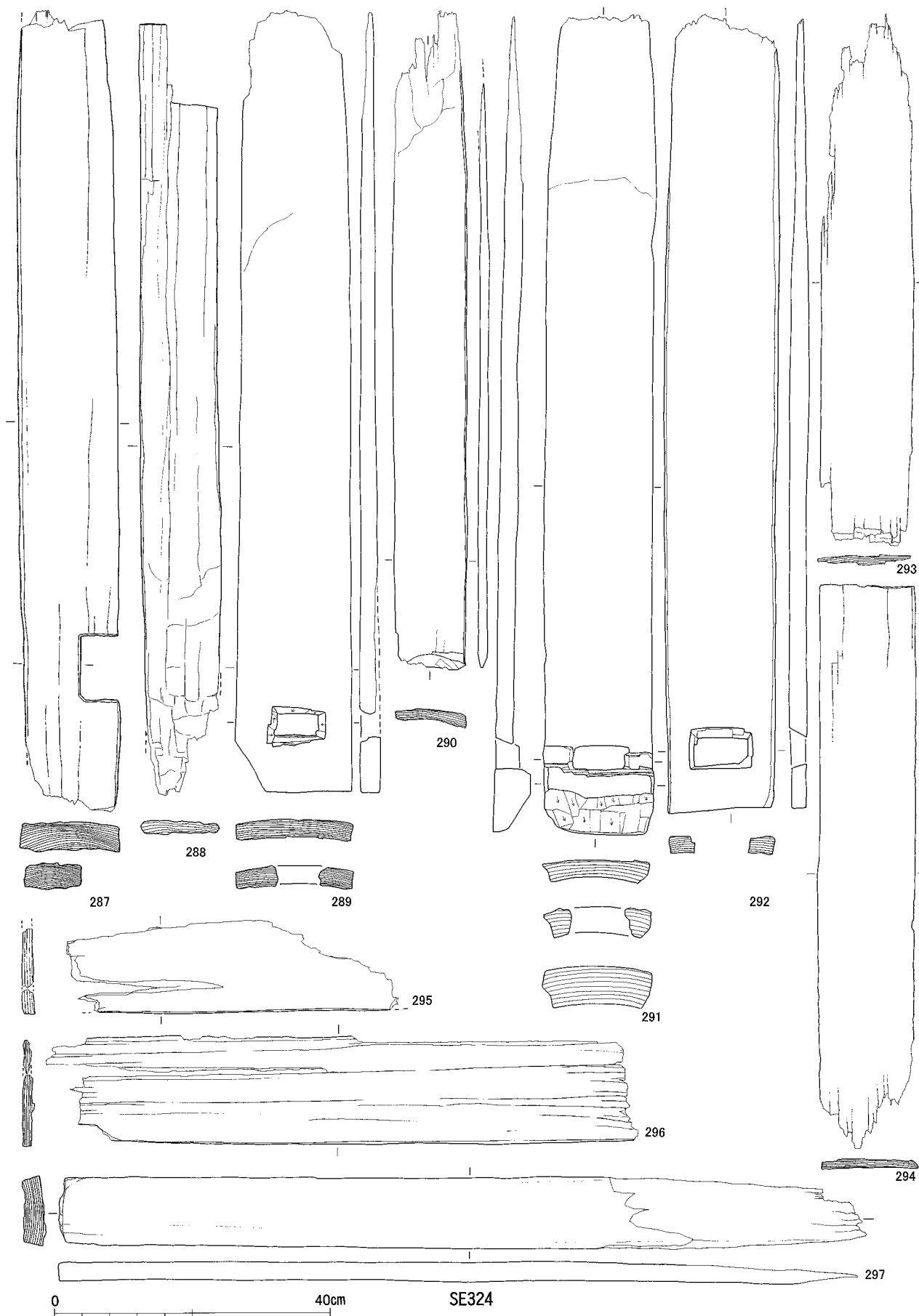
第221図 出土遺物実測図 (236・237・244は1:2、その他1:4)



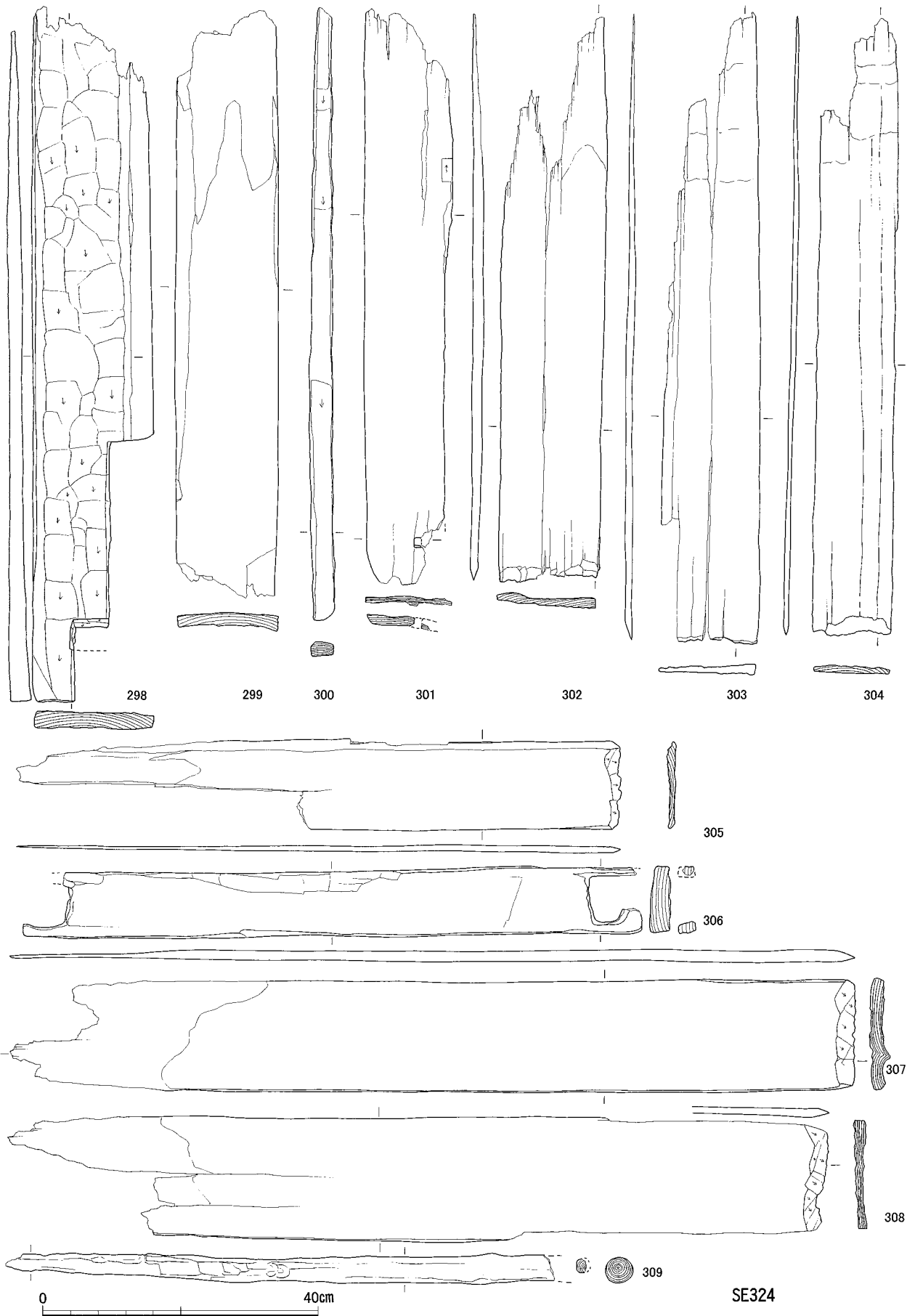
第222図 出土遺物実測図 (249~252は 1 : 2、263~271は 1 : 8、その他 1 : 4)



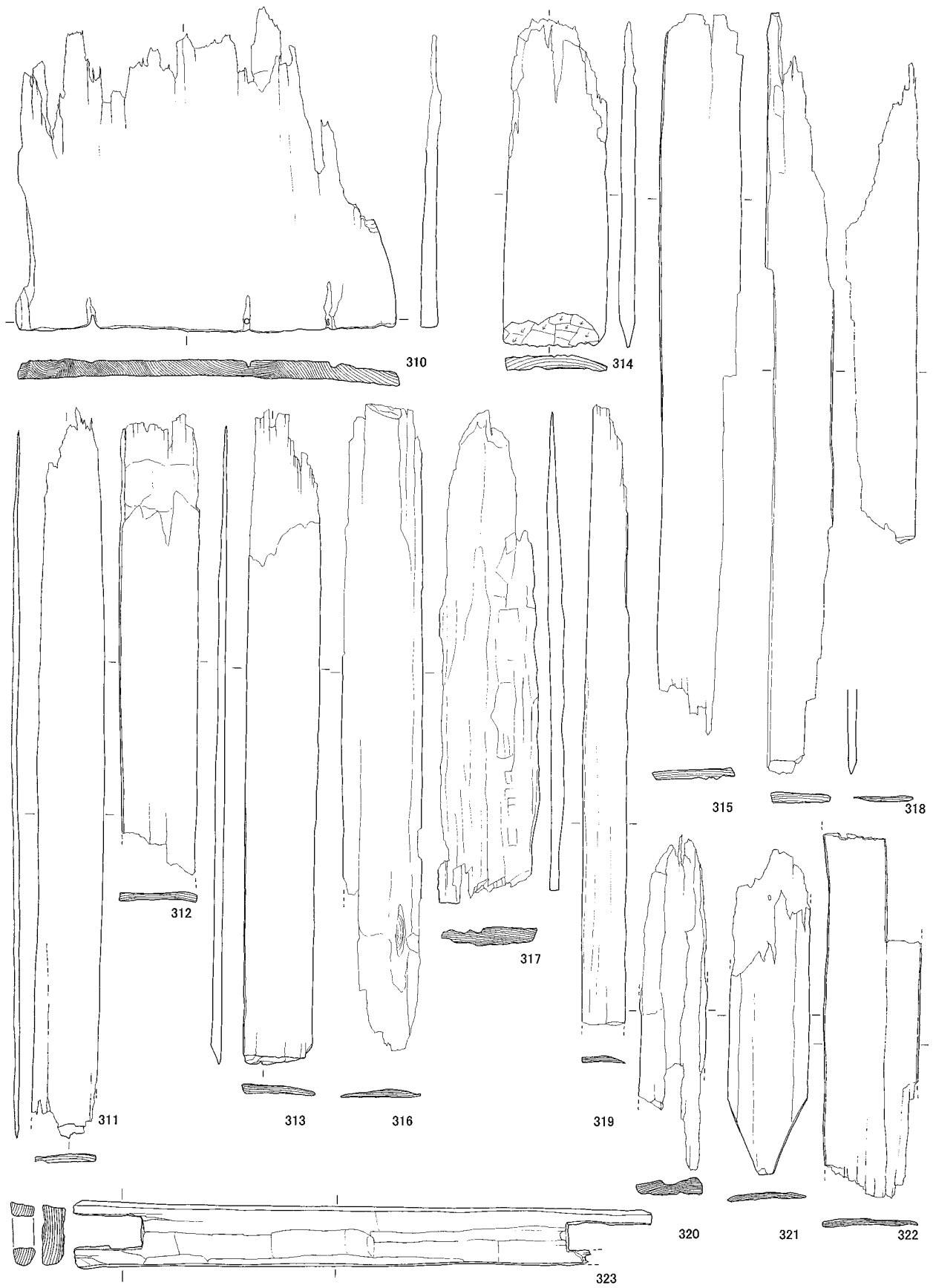
第223図 出土遺物実測図 (272・273は 1 : 4、その他 1 : 8)



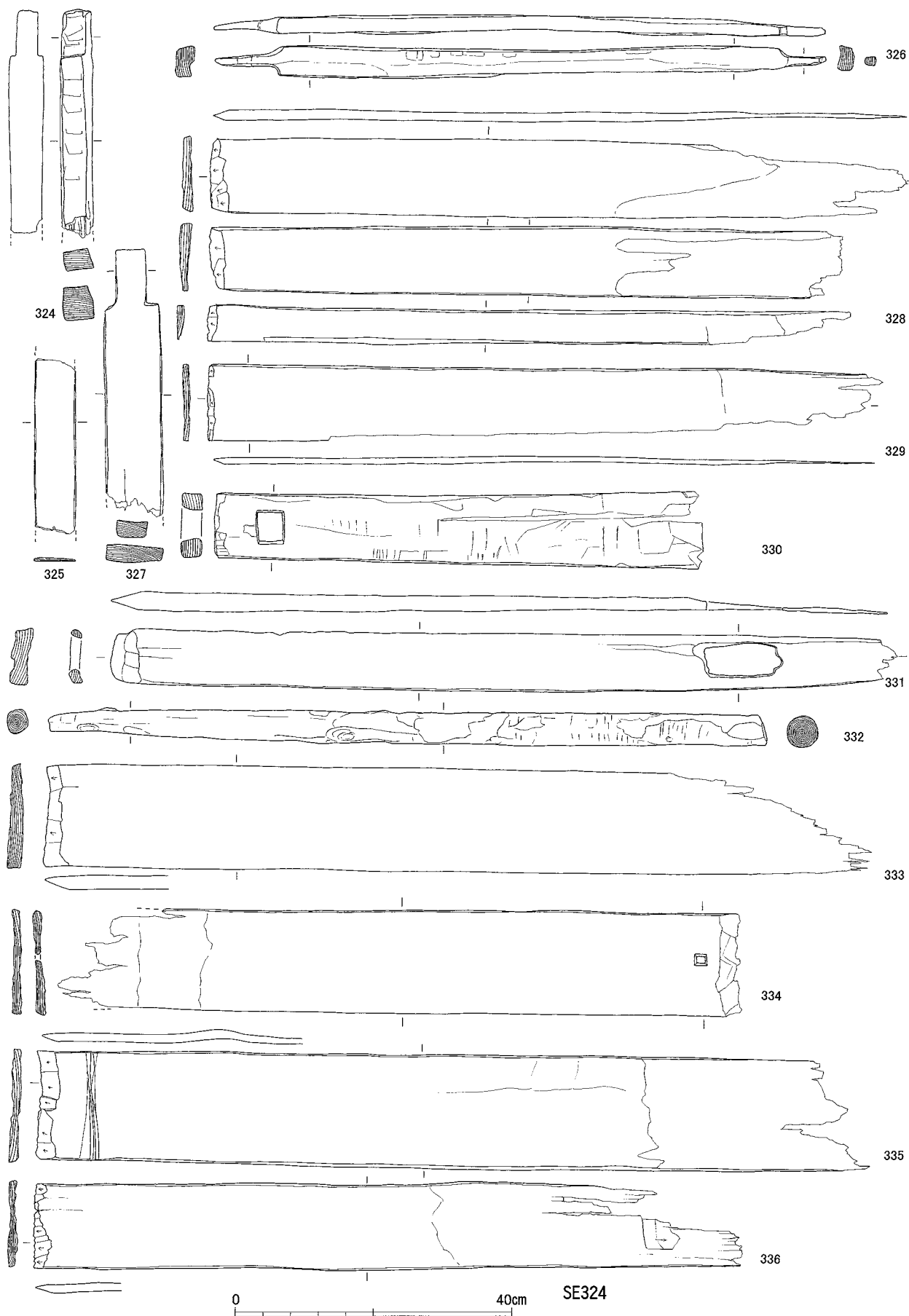
第224図 出土遺物実測図 (1 : 8)



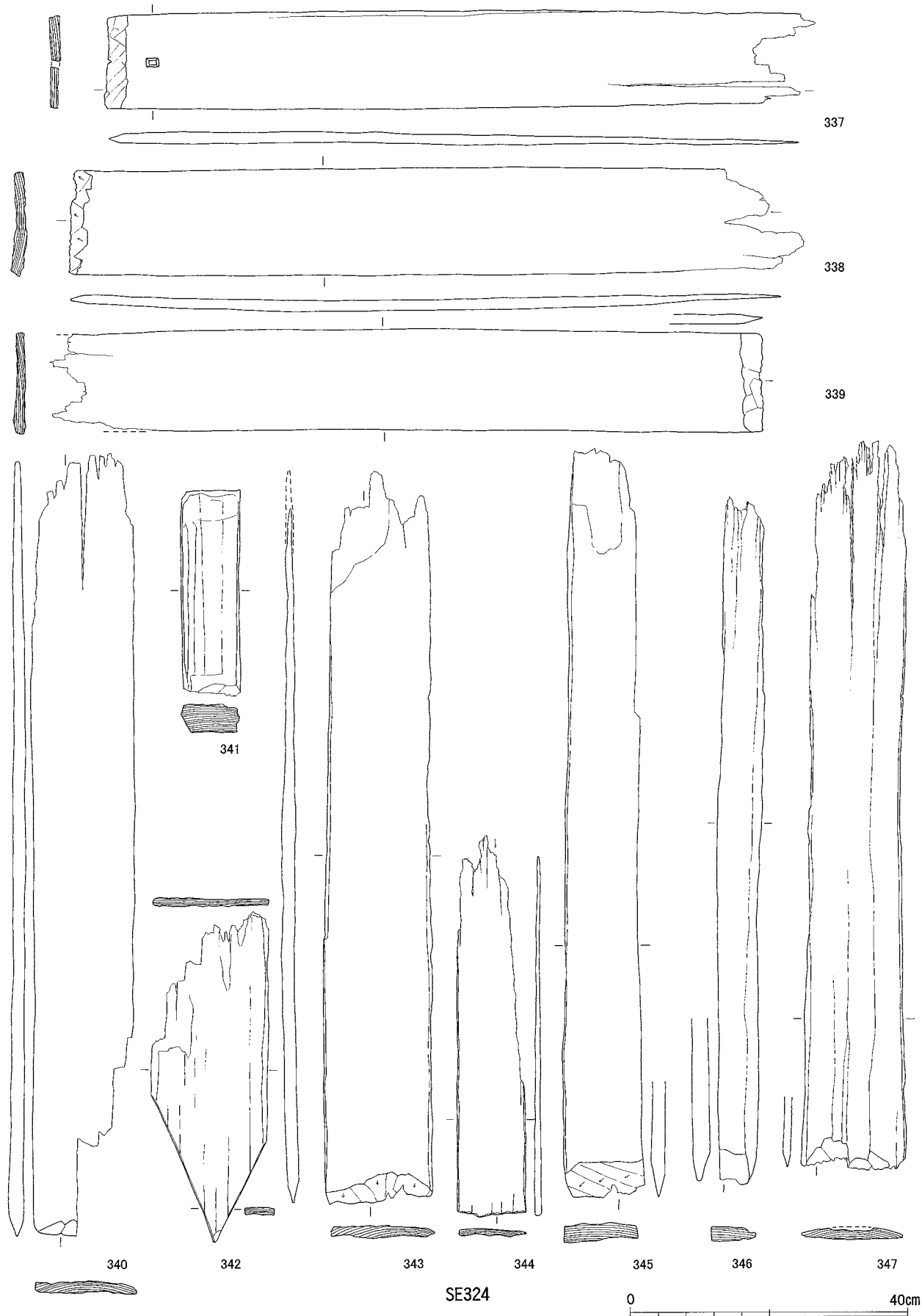
第225図 出土遺物実測図 (1 : 8)



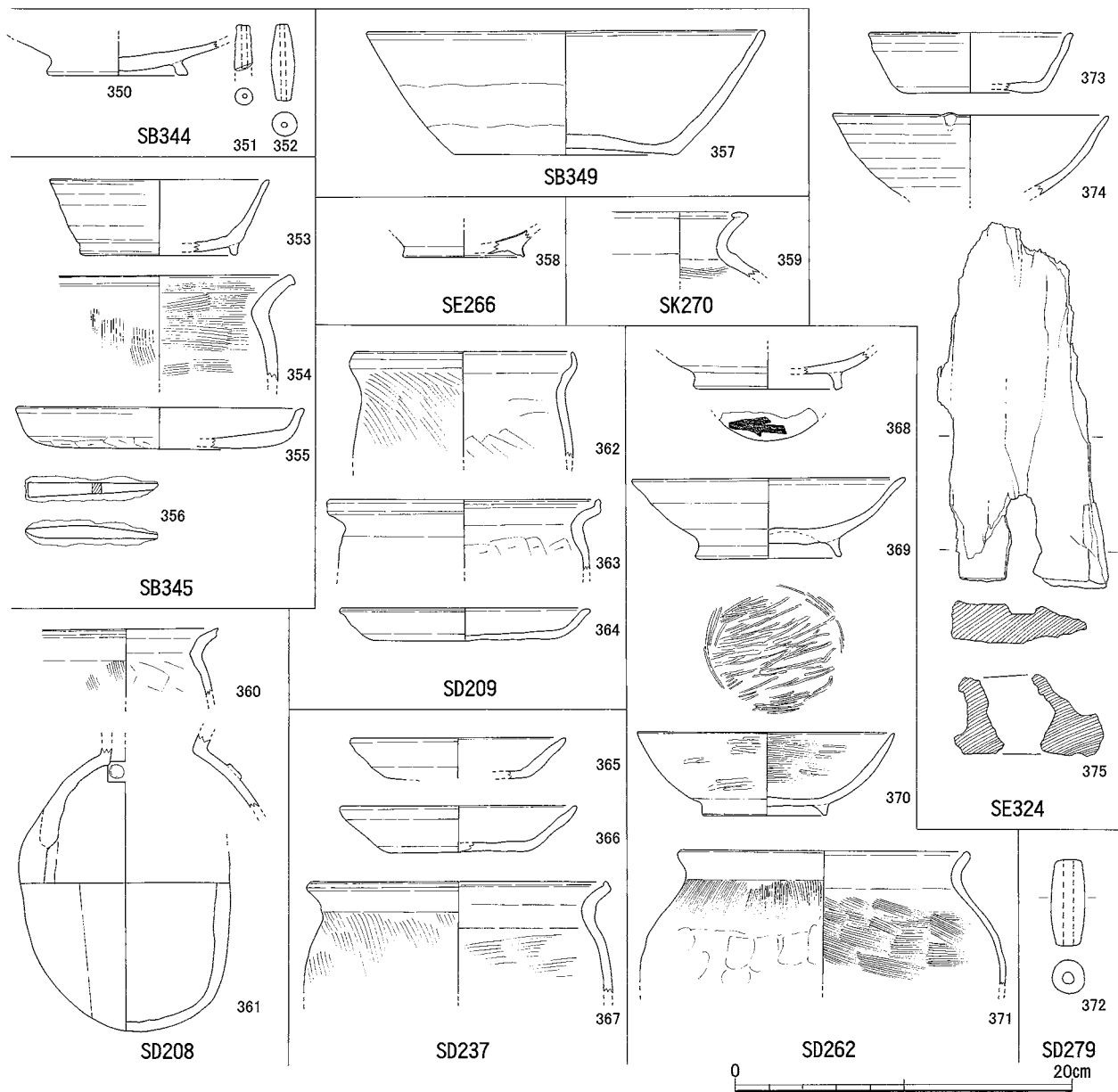
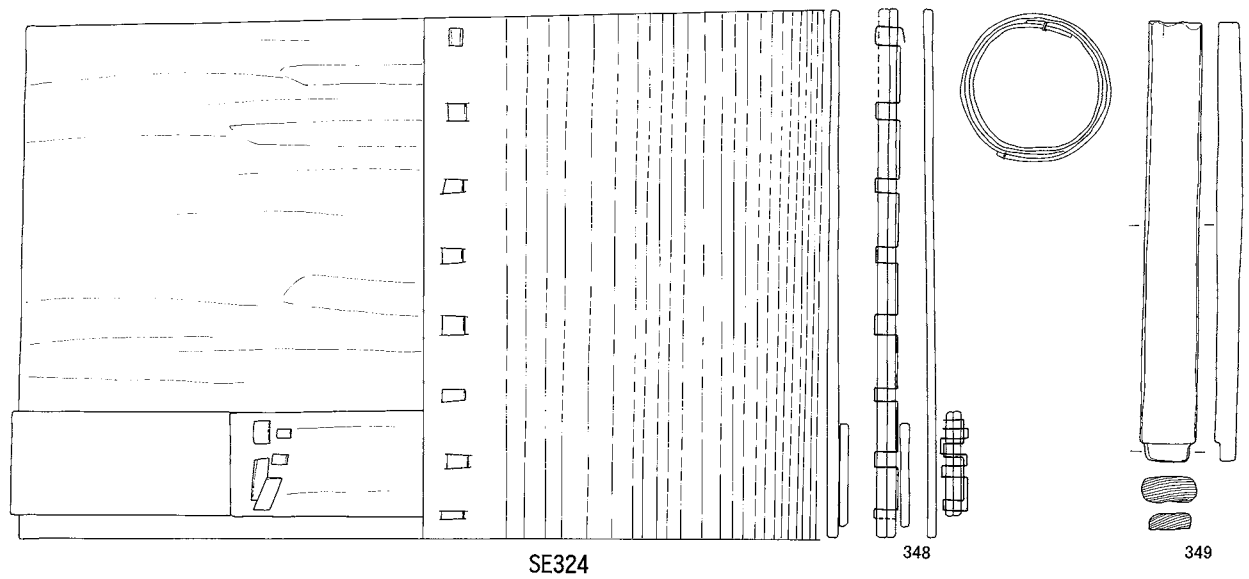
第226図 出土遺物実測図 (1 : 8)



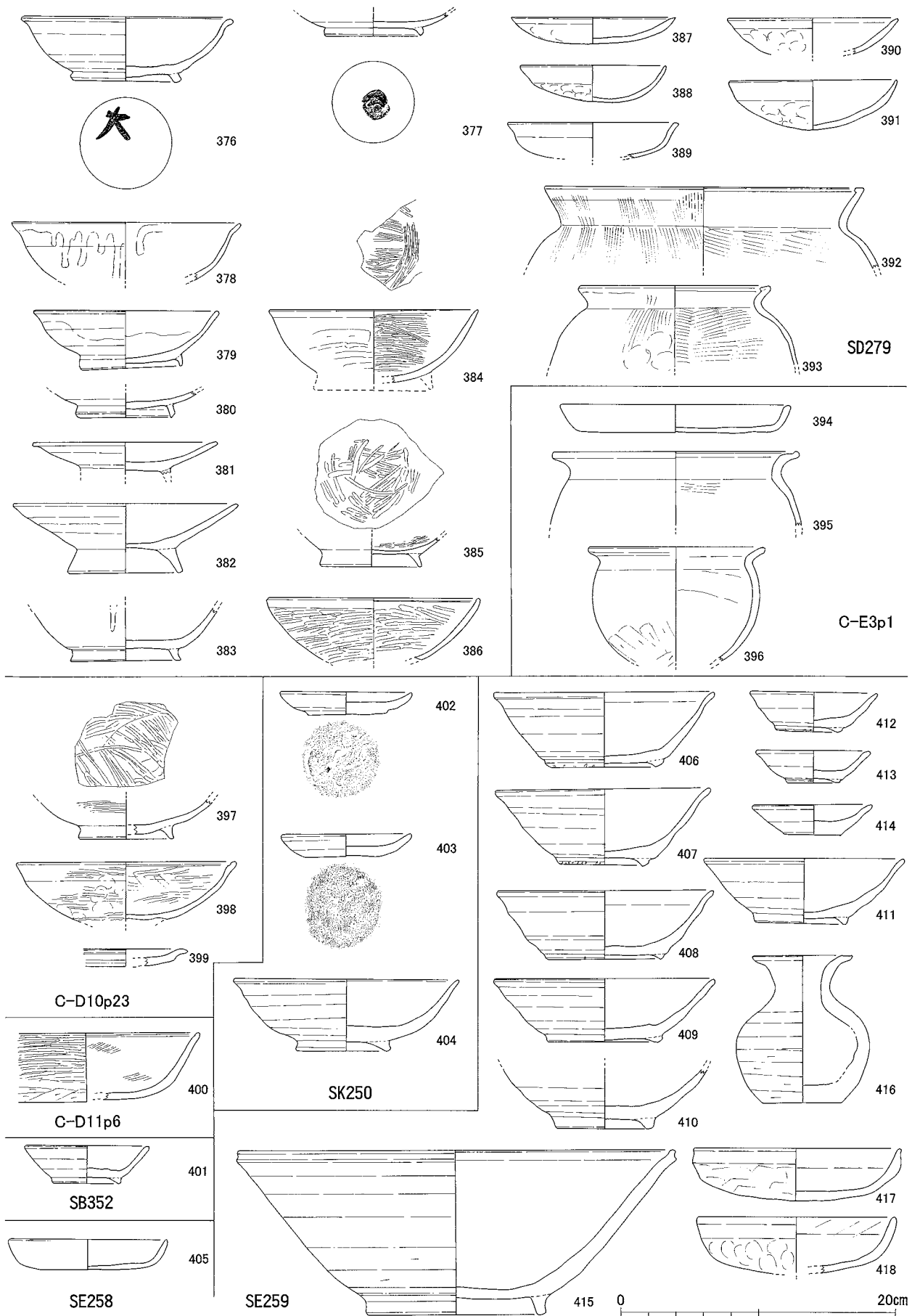
第227図 出土遺物実測図 (1 : 8)



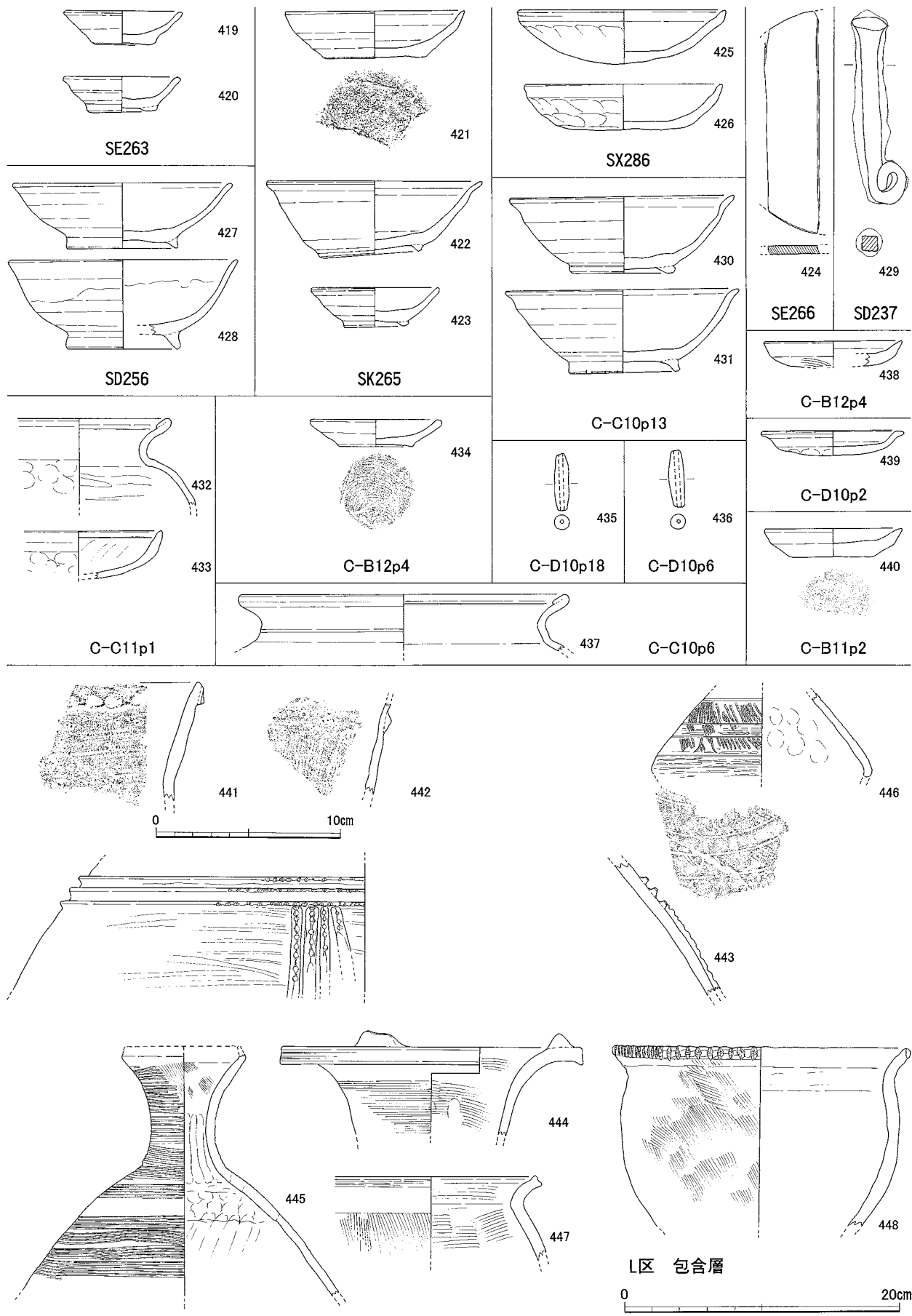
第228図 出土遺物実測図 (1:8)



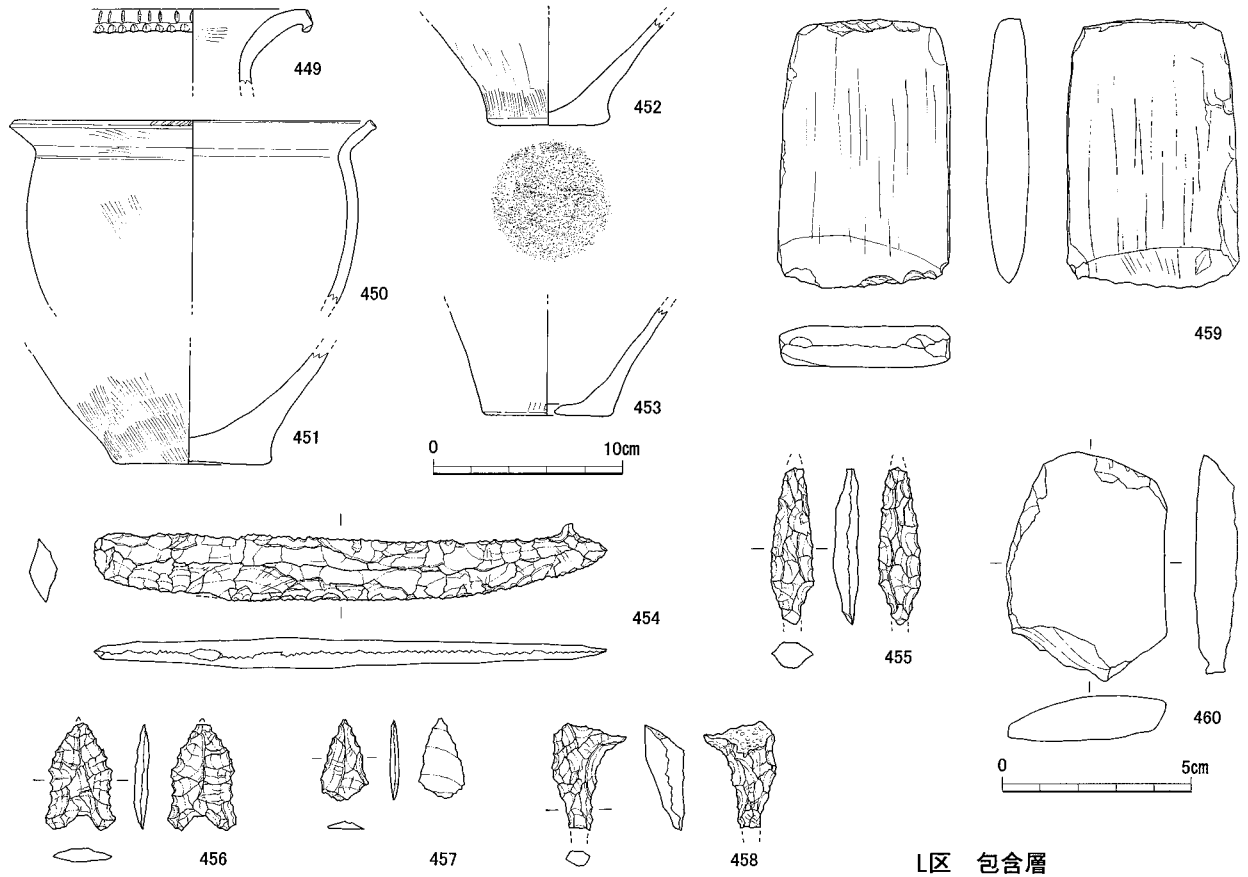
第229図 出土遺物実測図 (1:4)



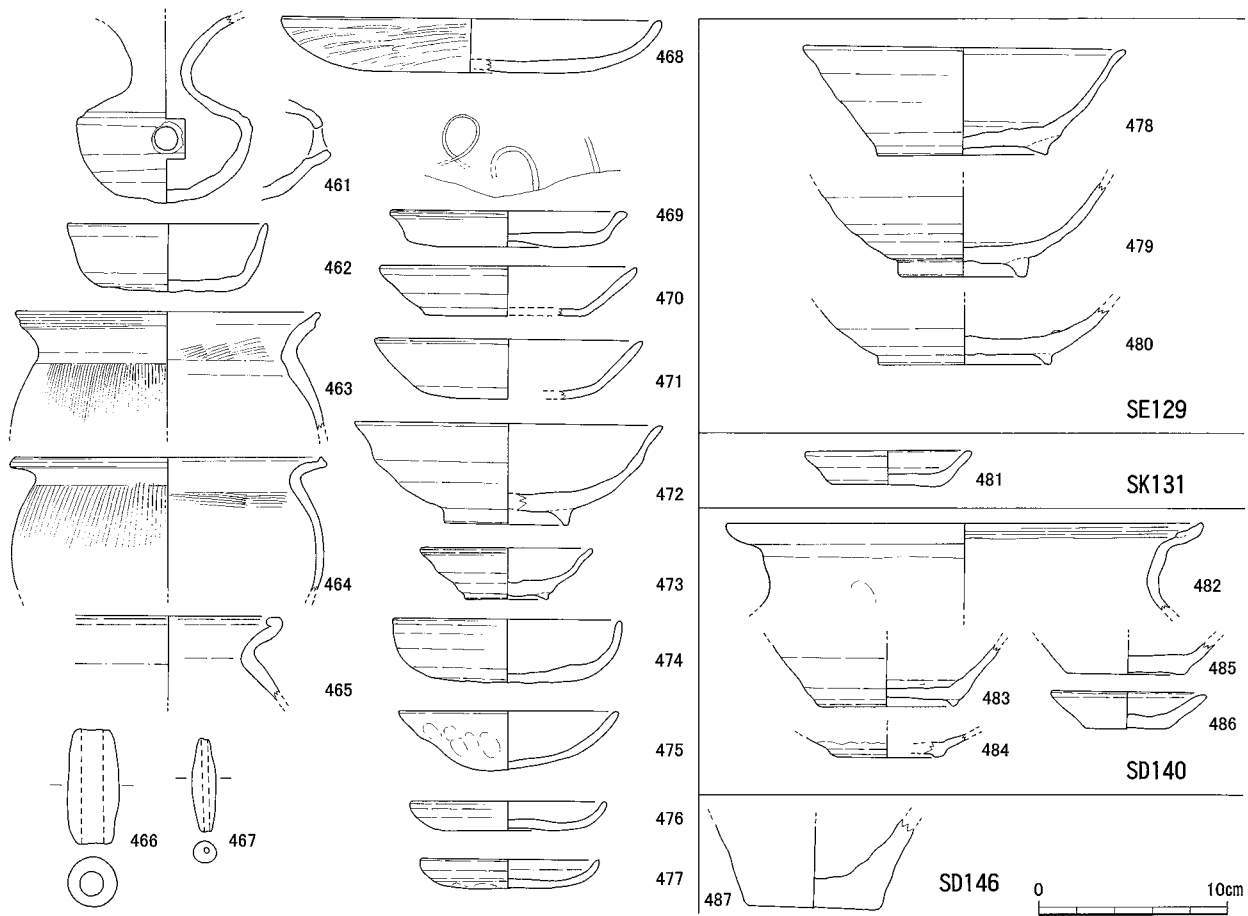
第230図 出土遺物実測図 (1 : 4)



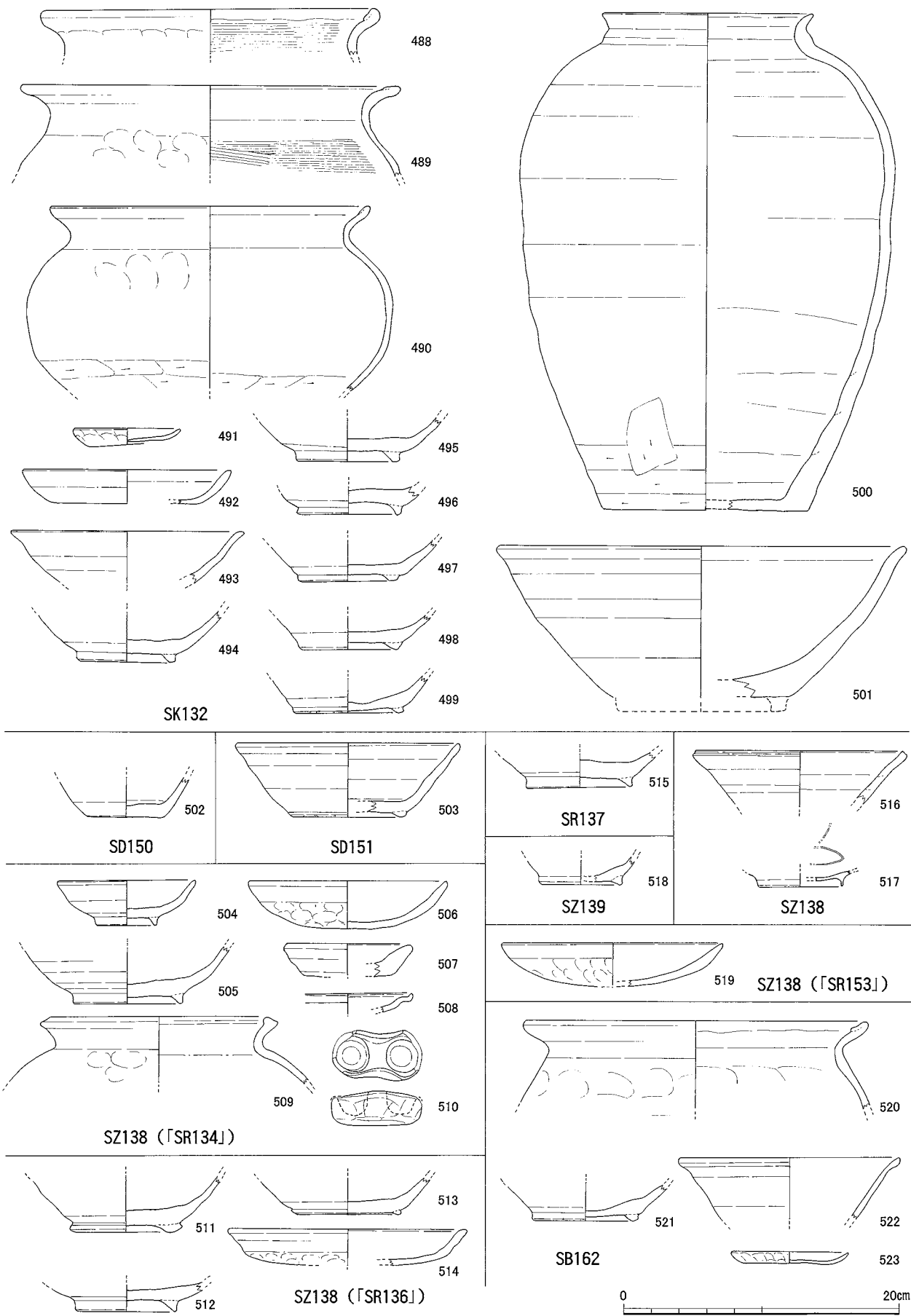
第231図 出土遺物実測図 (1:4)



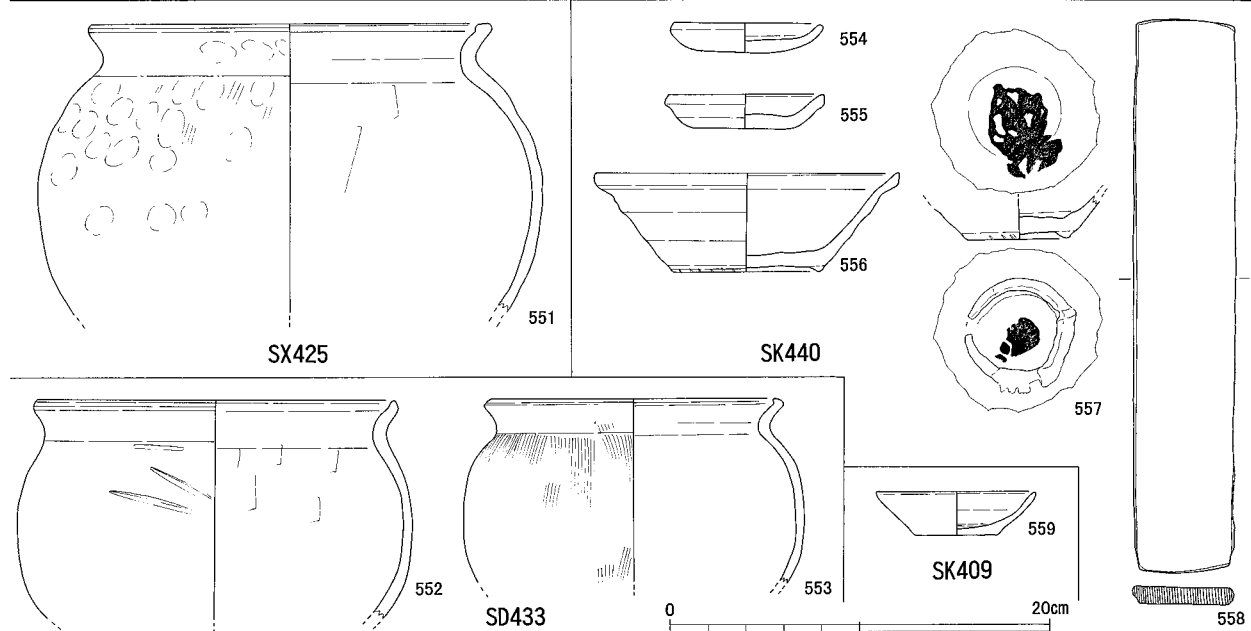
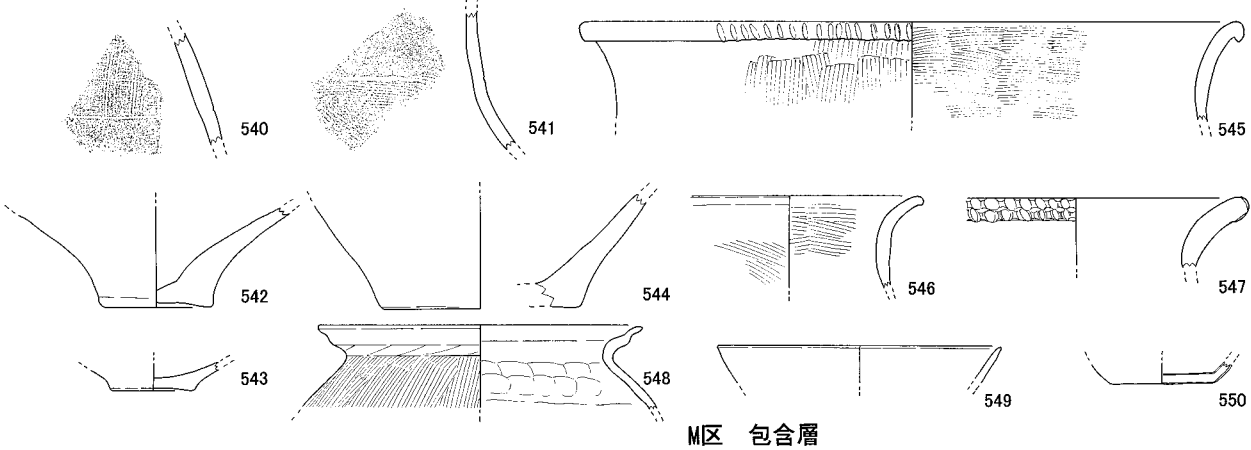
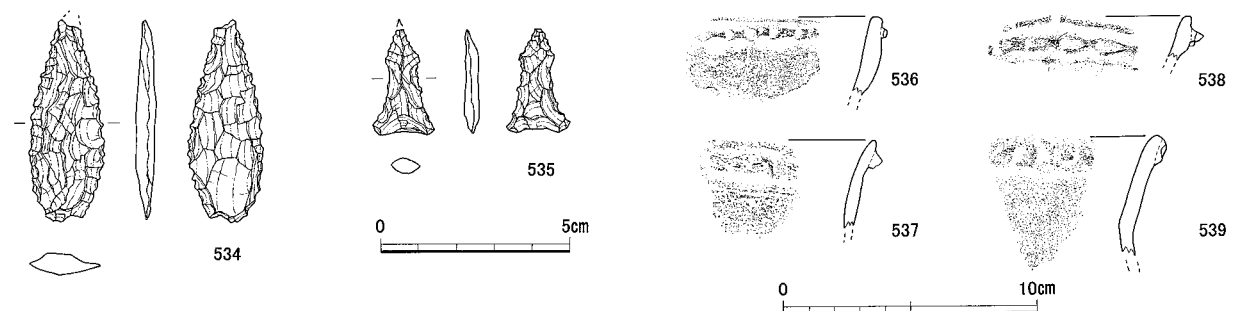
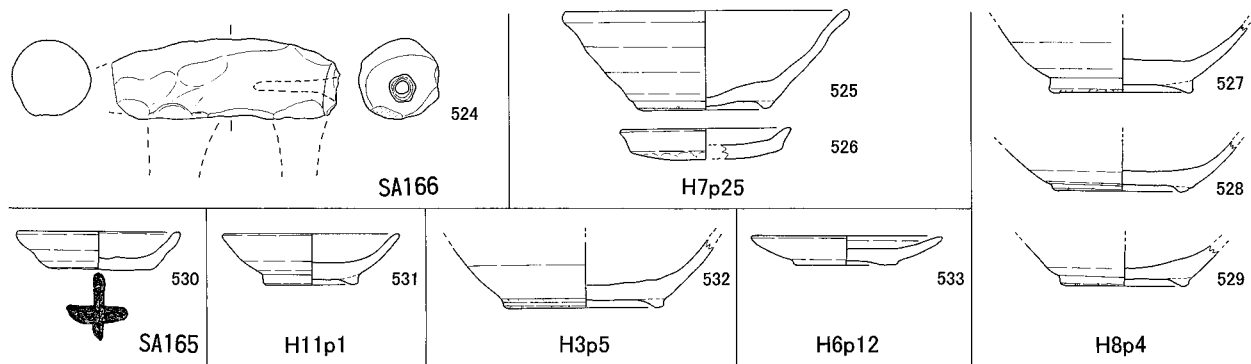
L区 包含層



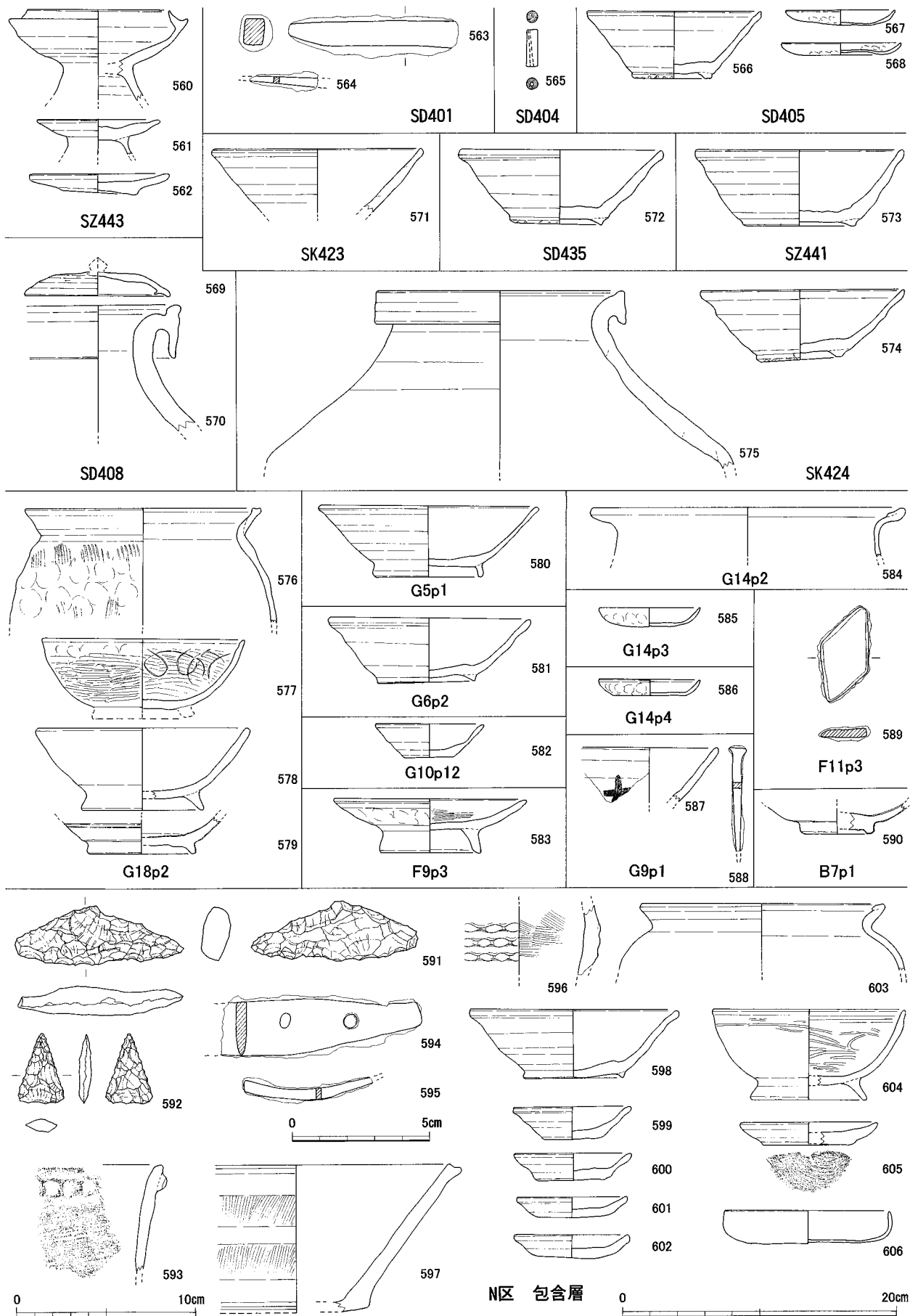
第232図 出土遺物実測図 (454~460は1:2、その他1:4)



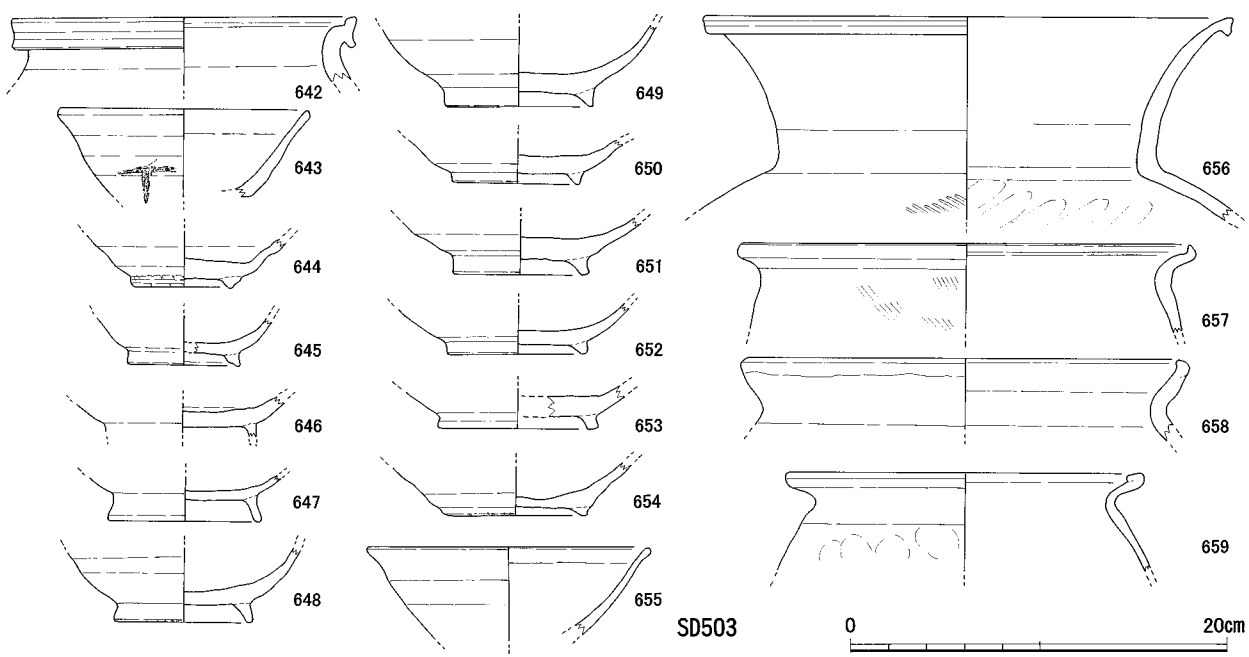
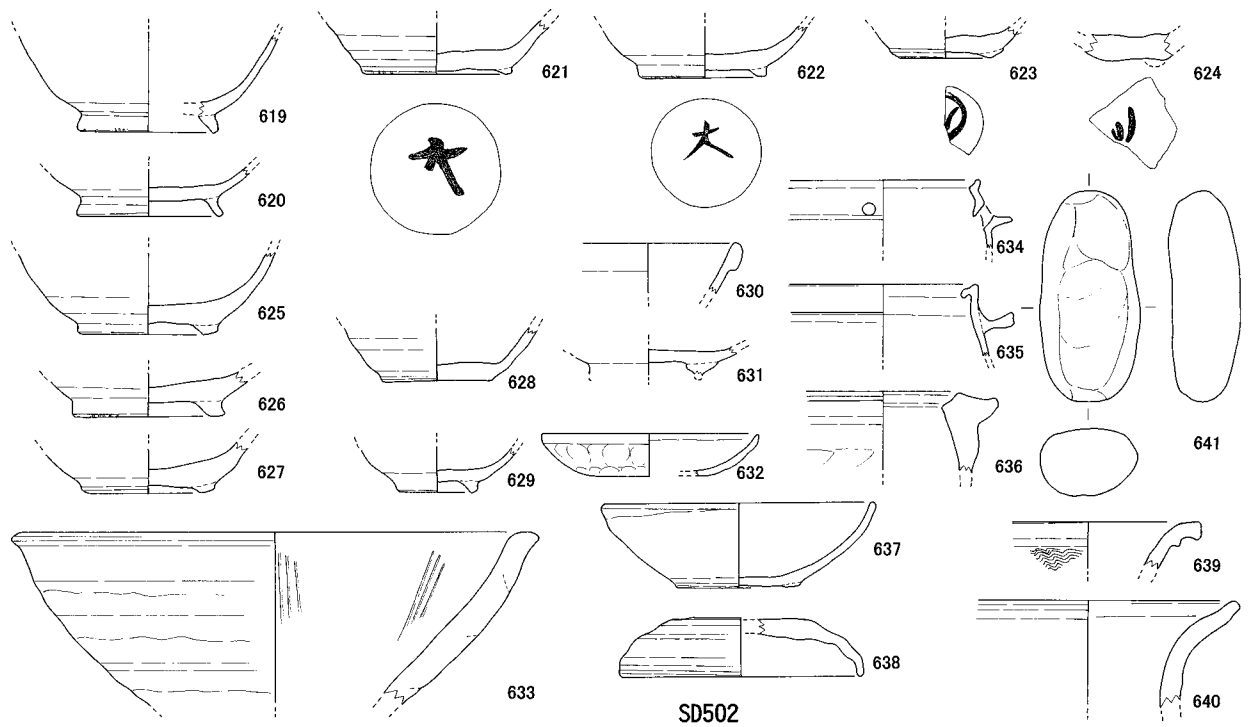
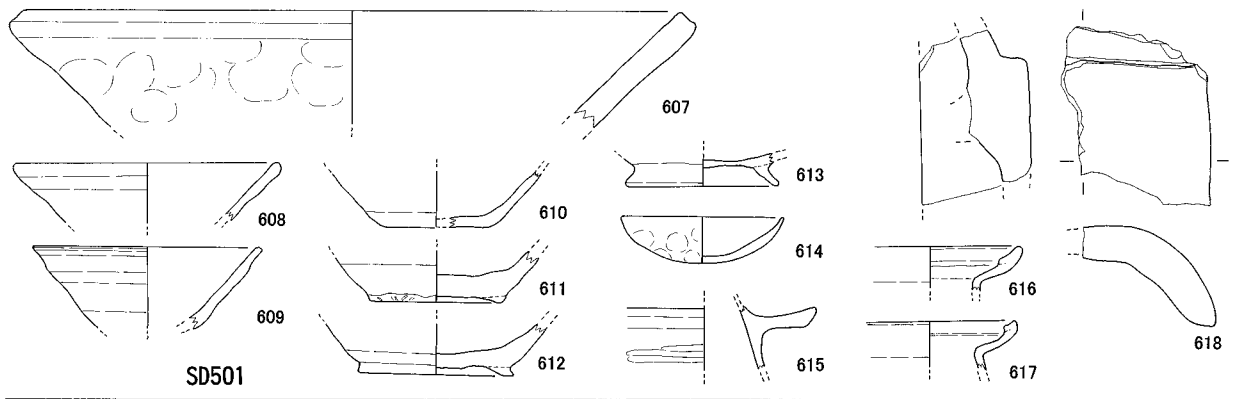
第233図 出土遺物実測図 (1:4)



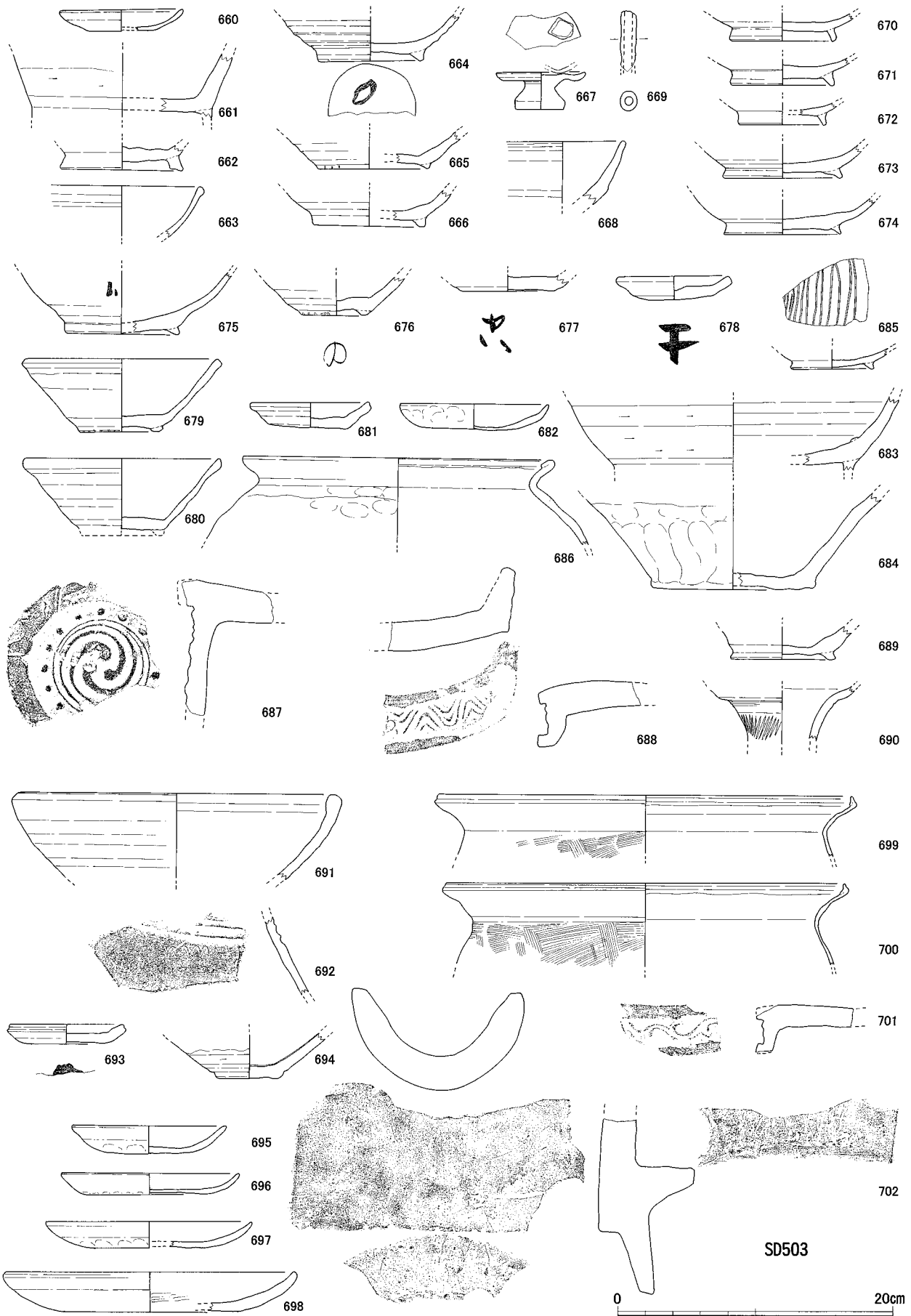
第234図 出土遺物実測図 (534・535は1:2、その他1:4)



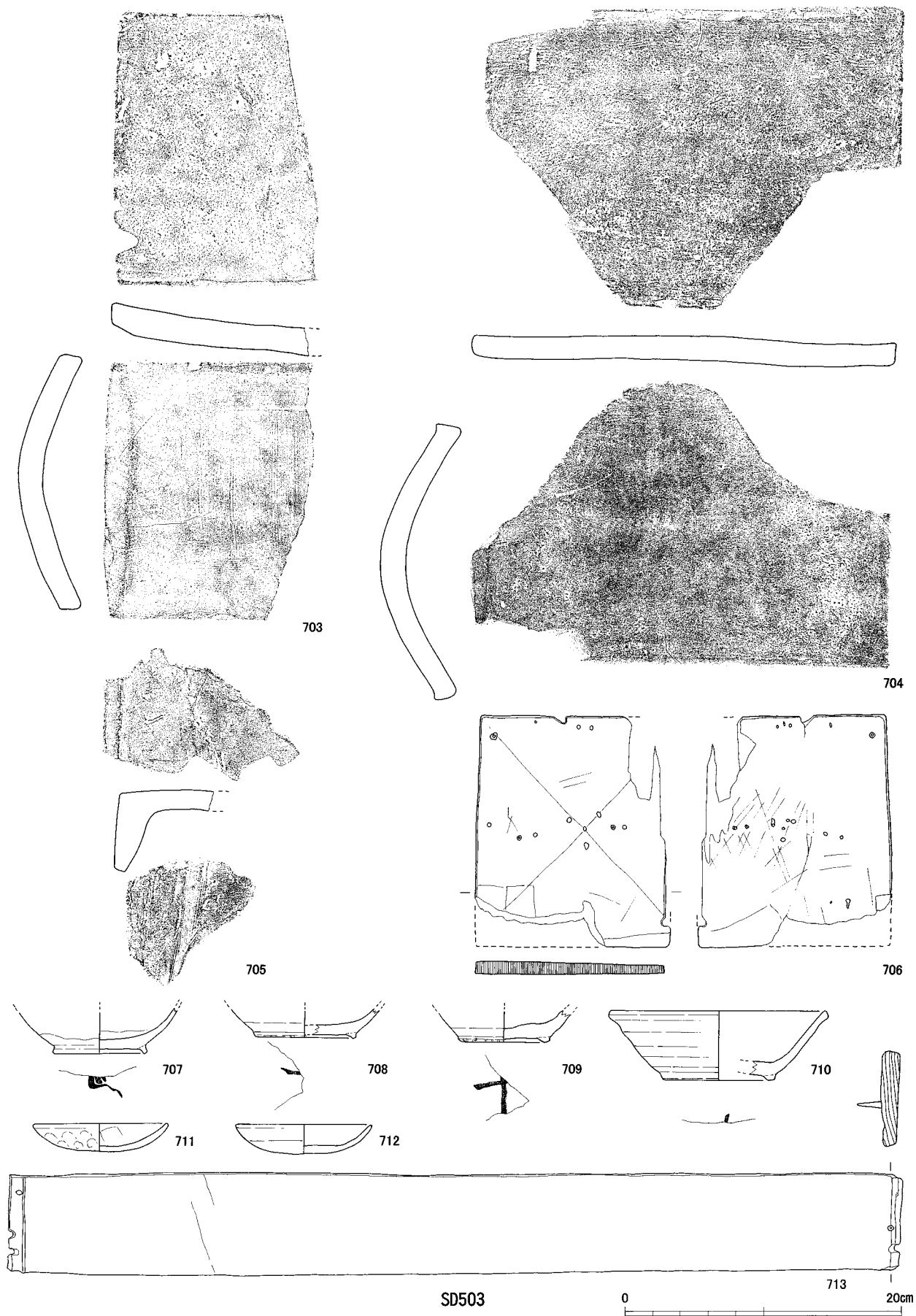
第235図 出土遺物実測図 (563・564・588・589・591~595は1:2、その他1:4)



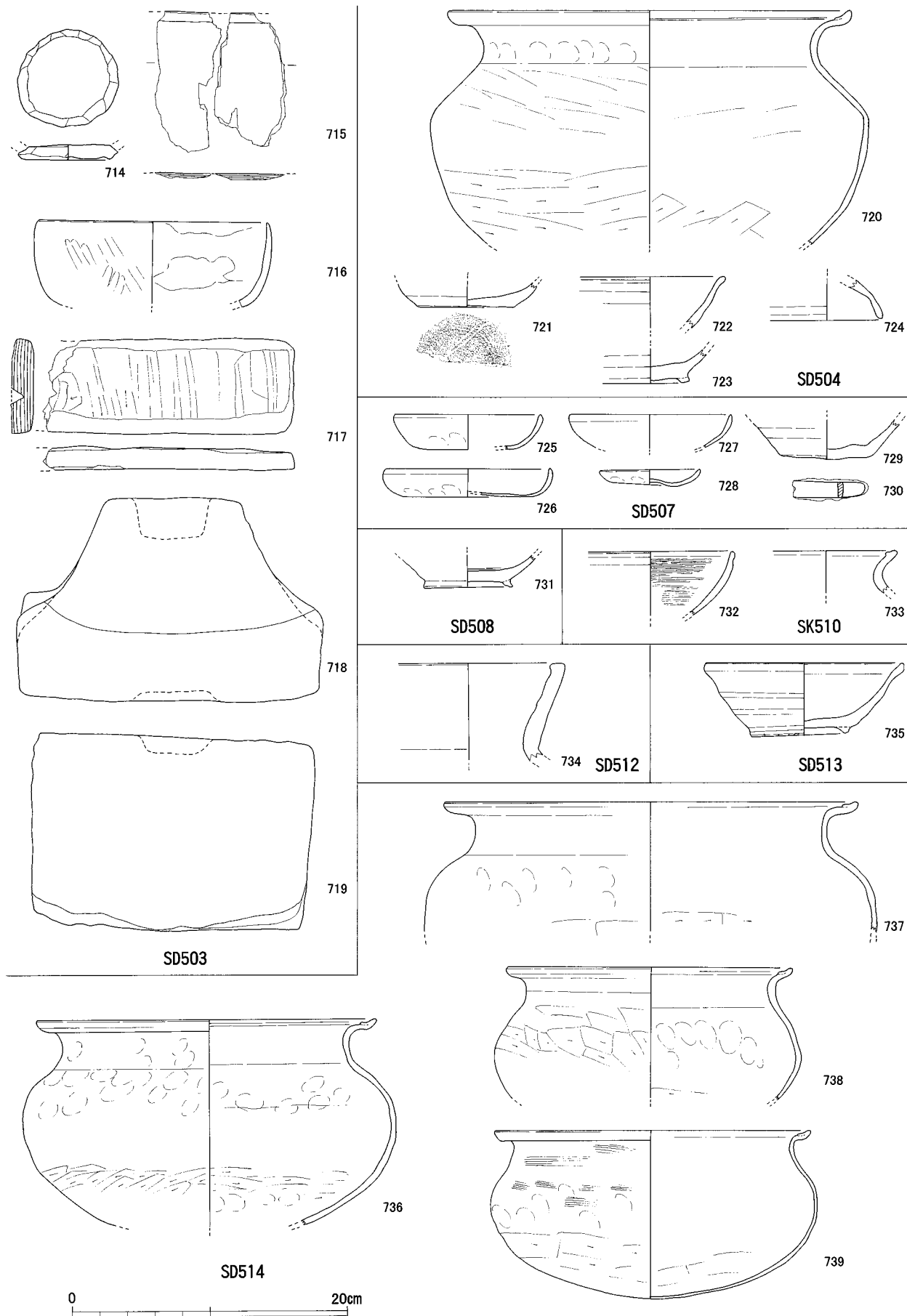
第236图 出土遺物実測図 (1:4)



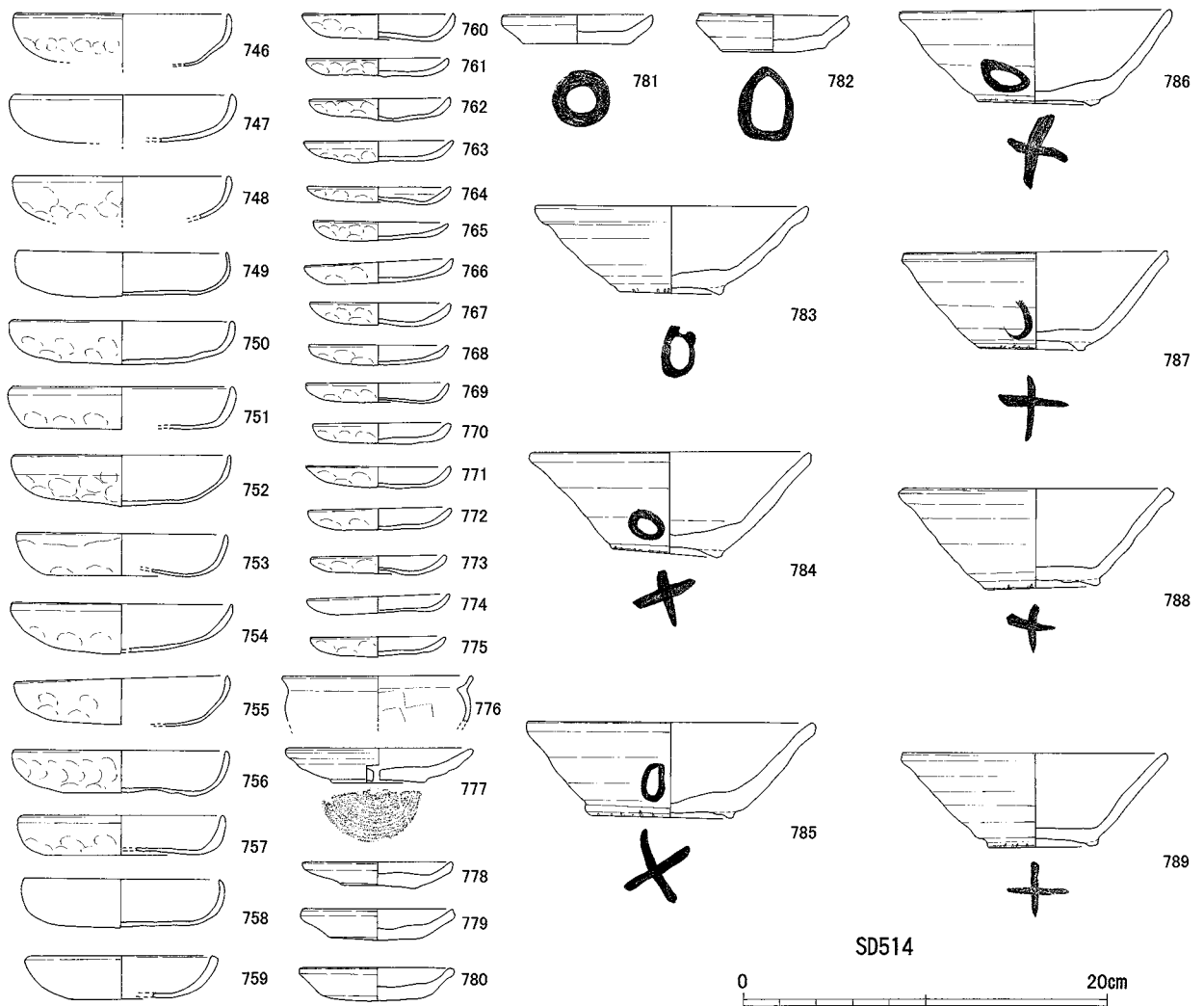
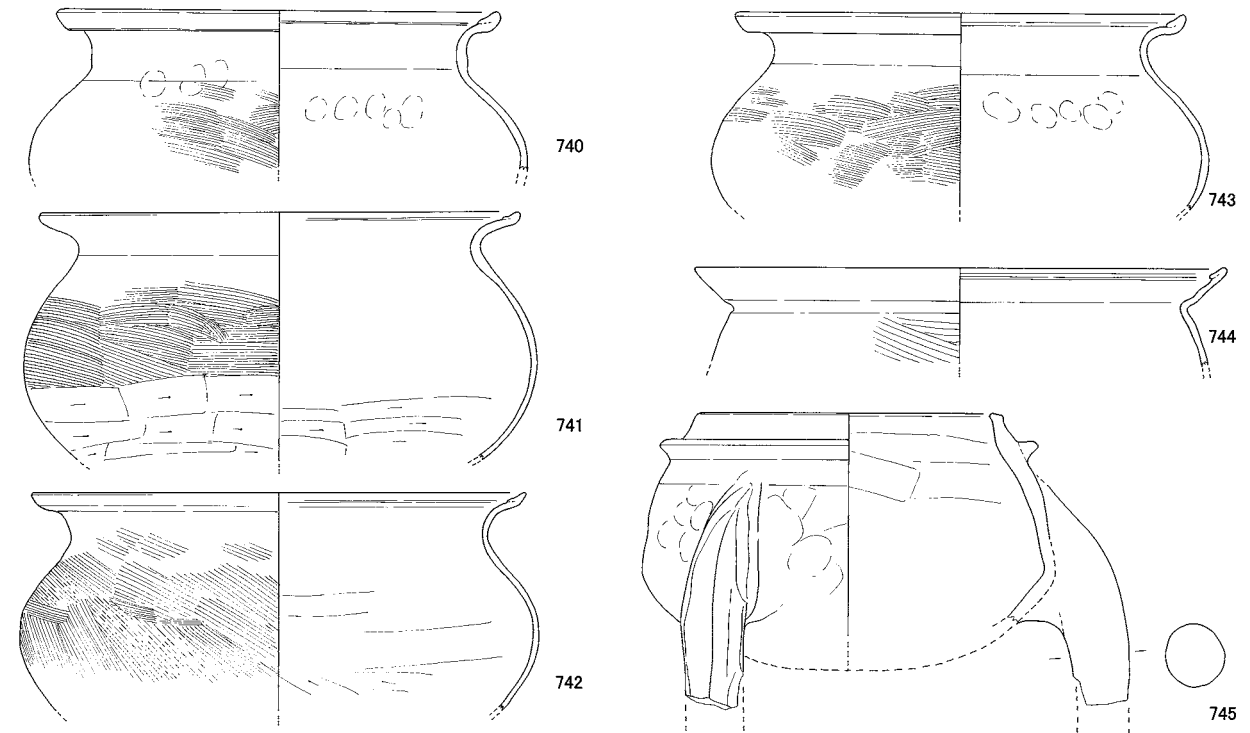
第237図 出土遺物実測図 (1:4)



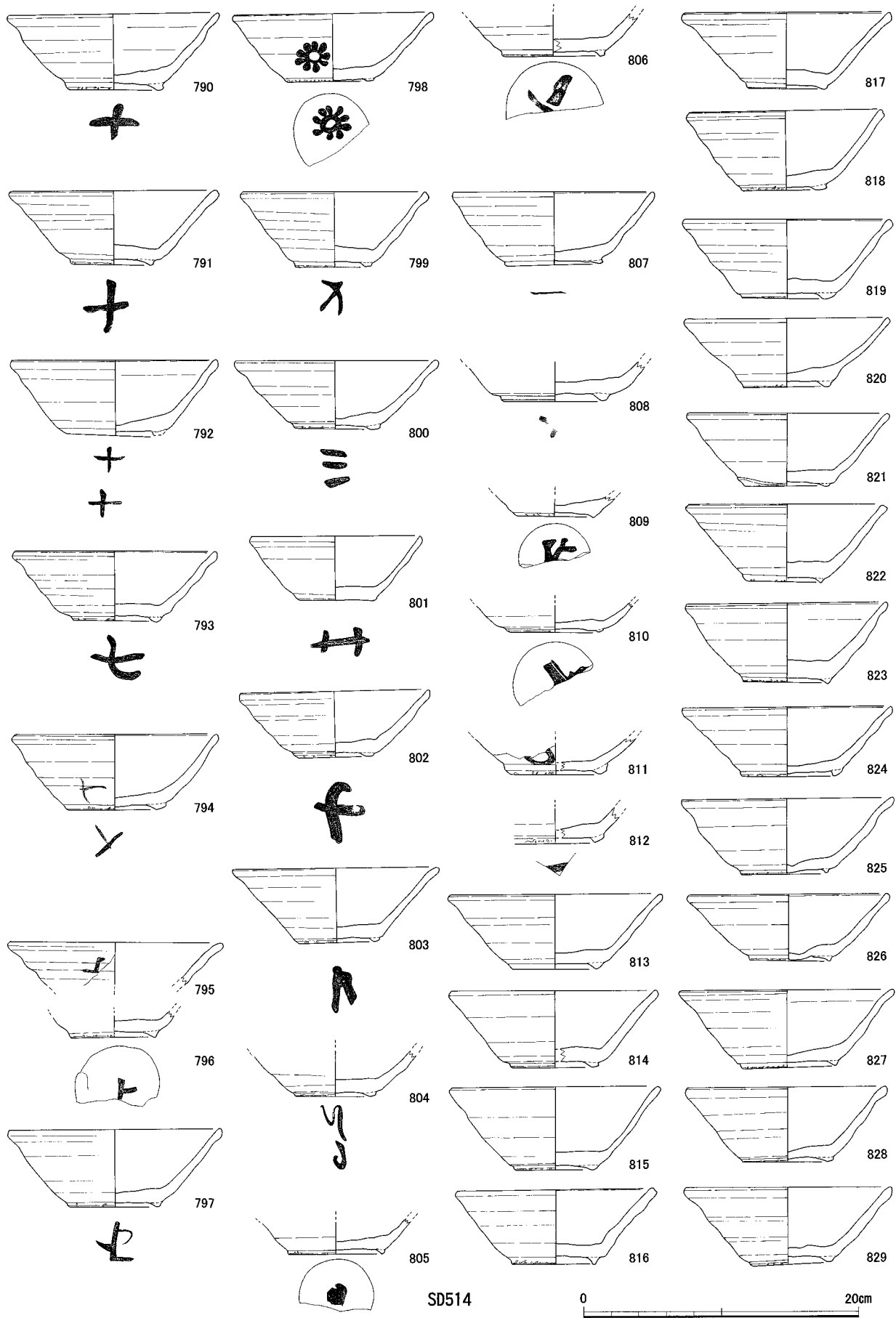
第238図 出土遺物実測図 (1:4)



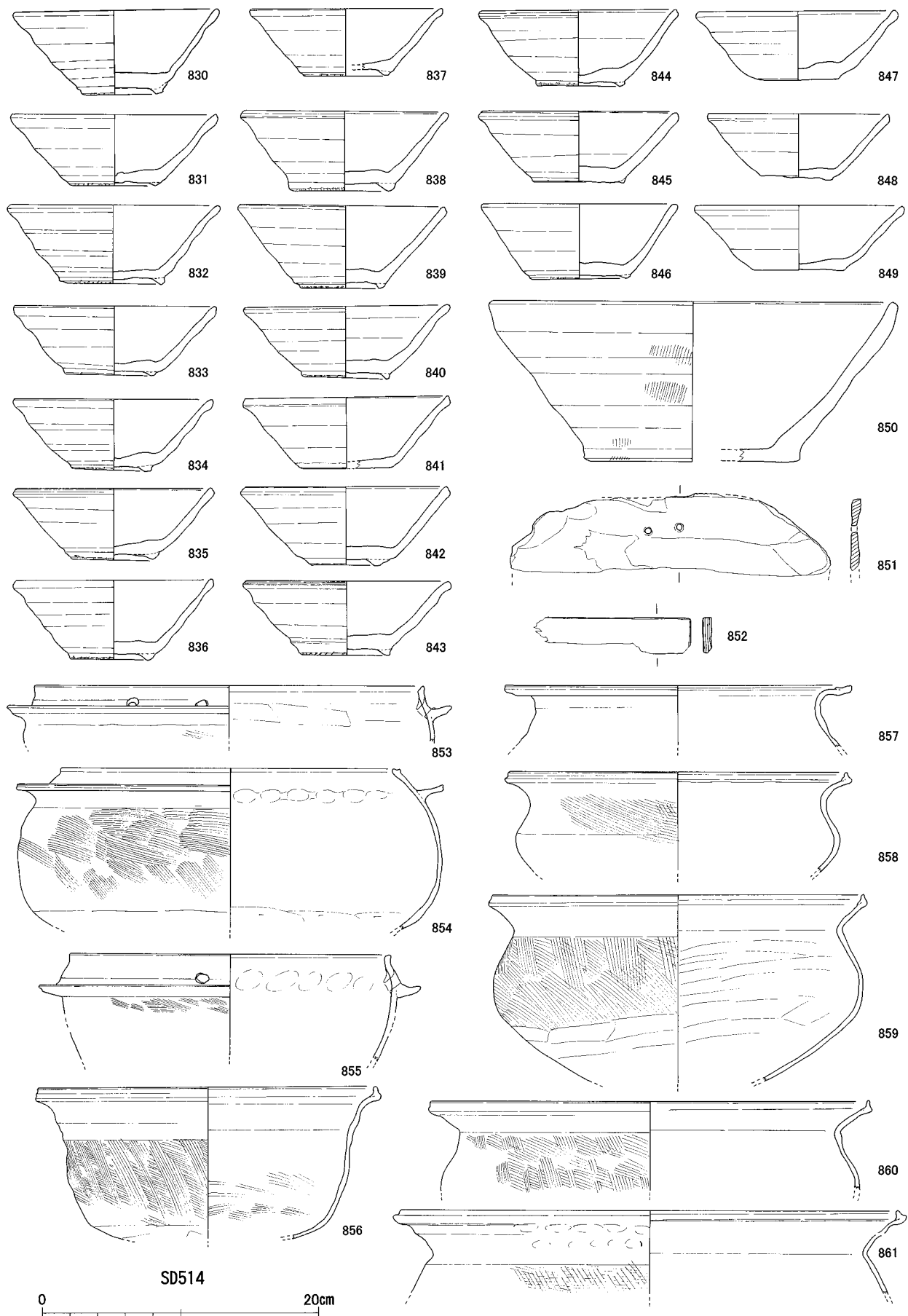
第239図 出土遺物実測図 (1 : 4)



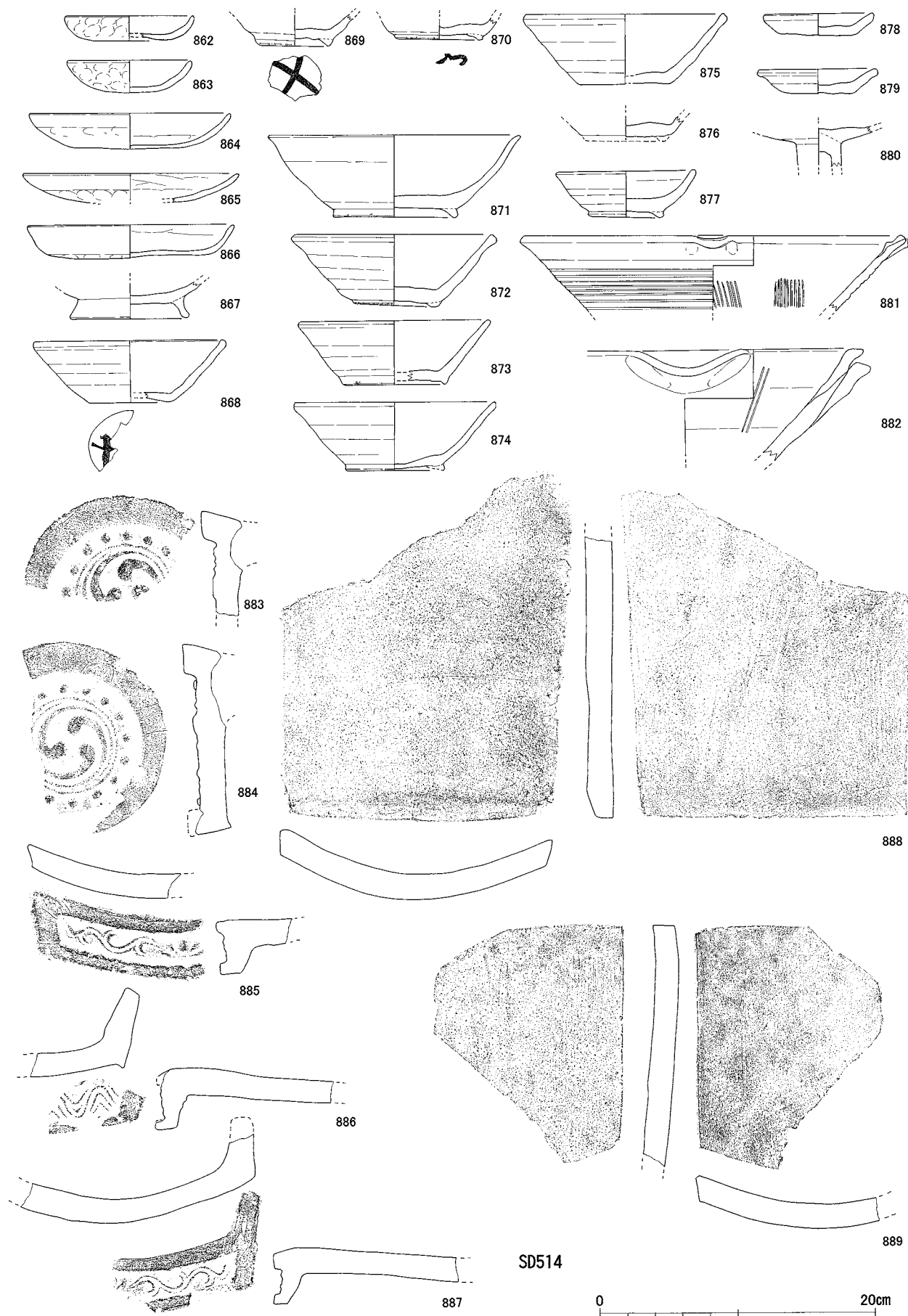
第240図 出土遺物実測図 (1 : 4)



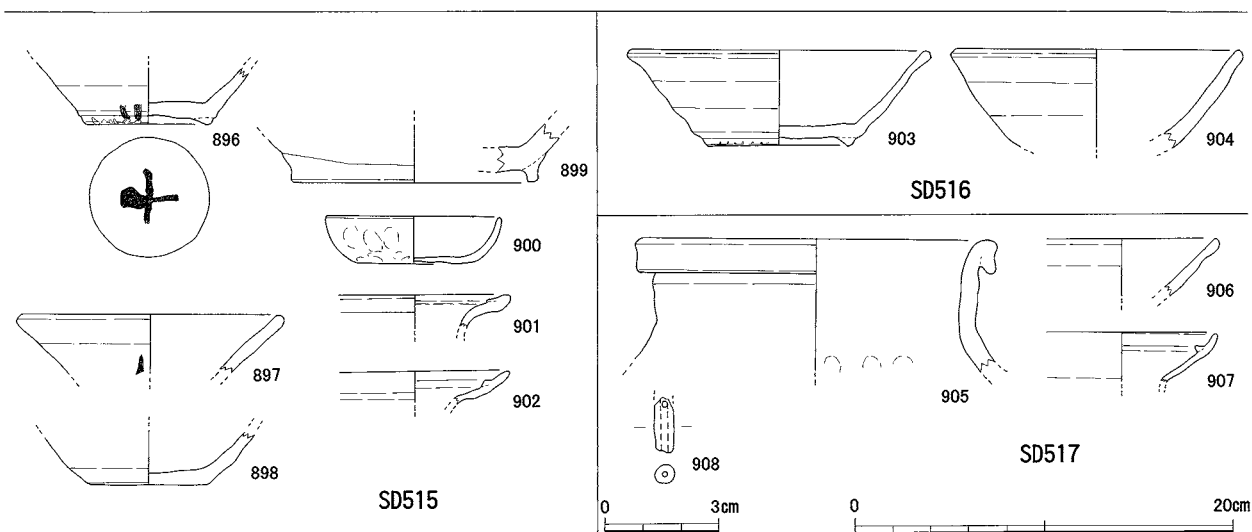
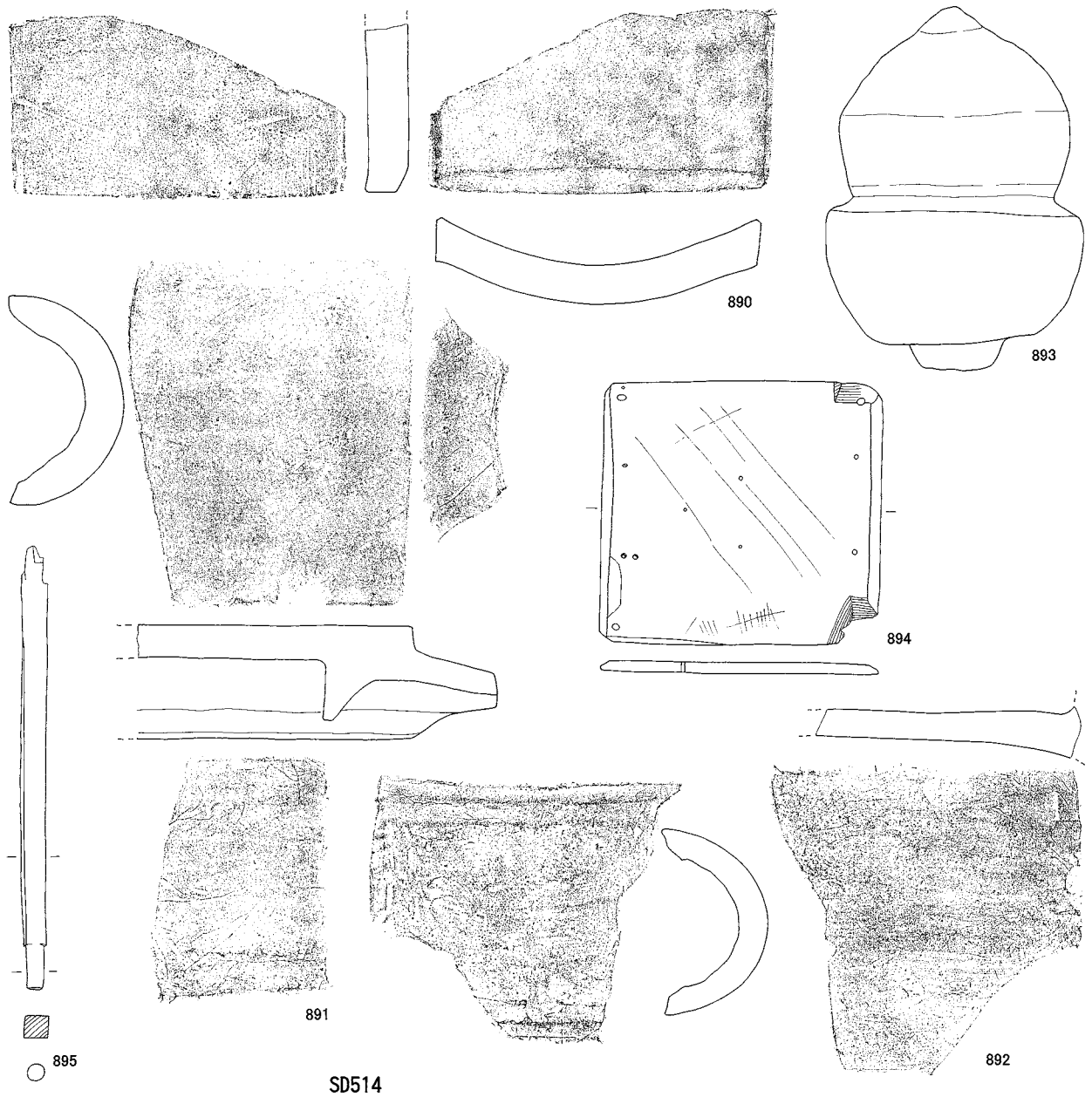
第241図 出土遺物実測図 (1 : 4)



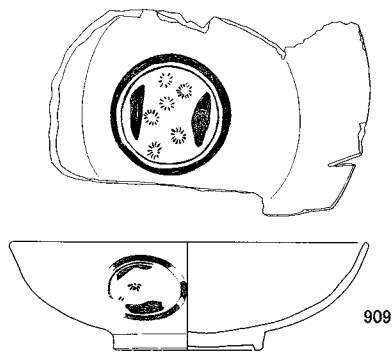
第242図 出土遺物実測図 (1:4)



第243図 出土遺物実測図 (1 : 4)



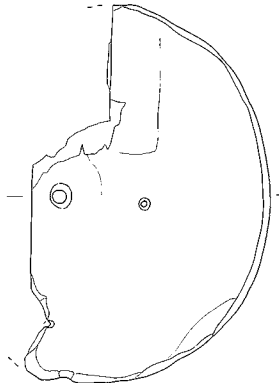
第244図 出土遺物実測図 (908は 1 : 2、その他 1 : 4)



909



910



911

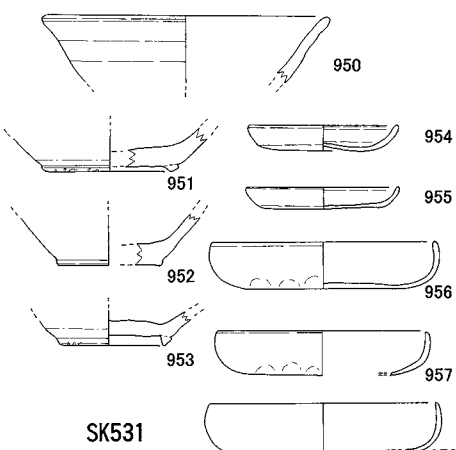


SD517

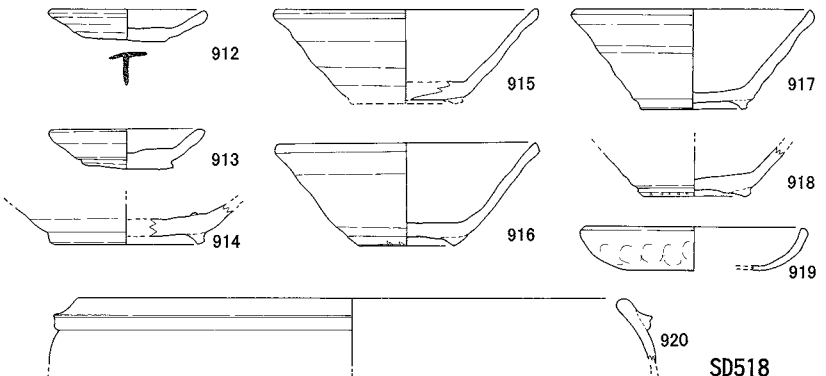


949

SK530



SK531



912

915

917

913

916

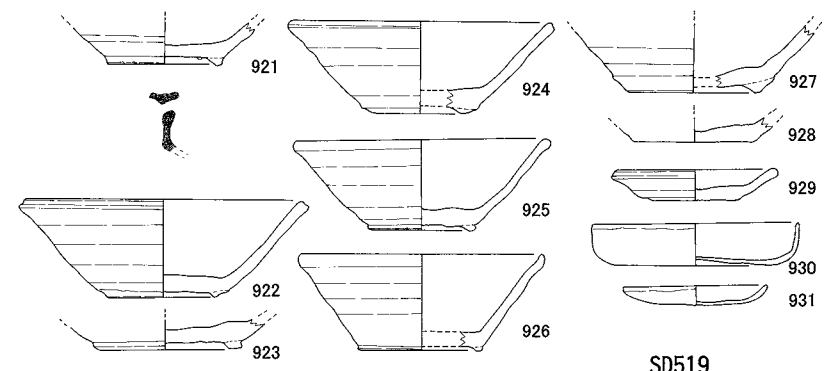
918

914

919

920

SD518



921

924

927

922

925

928

923

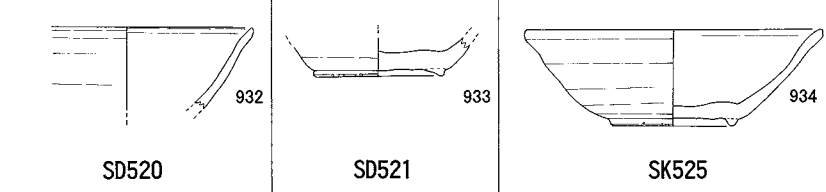
926

929

930

931

SD519



932

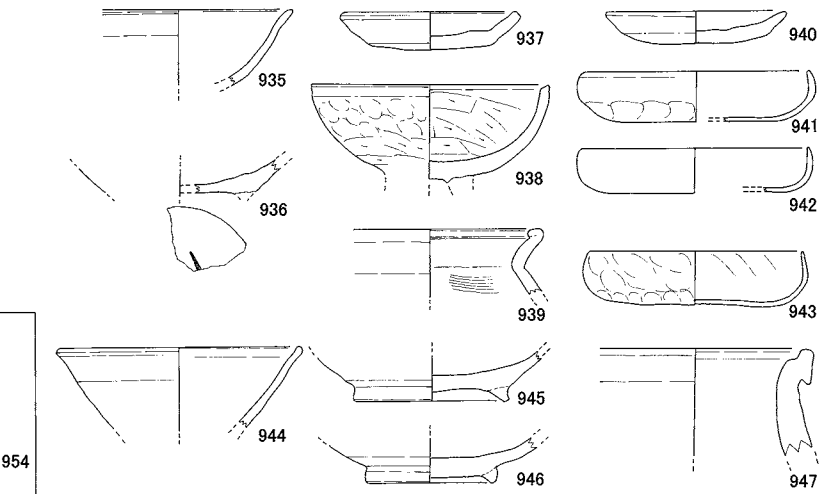
933

934

SD520

SD521

SK525



935

937

940

936

938

941

944

945

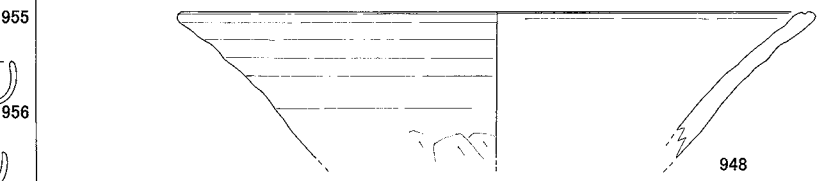
942

939

943

946

947

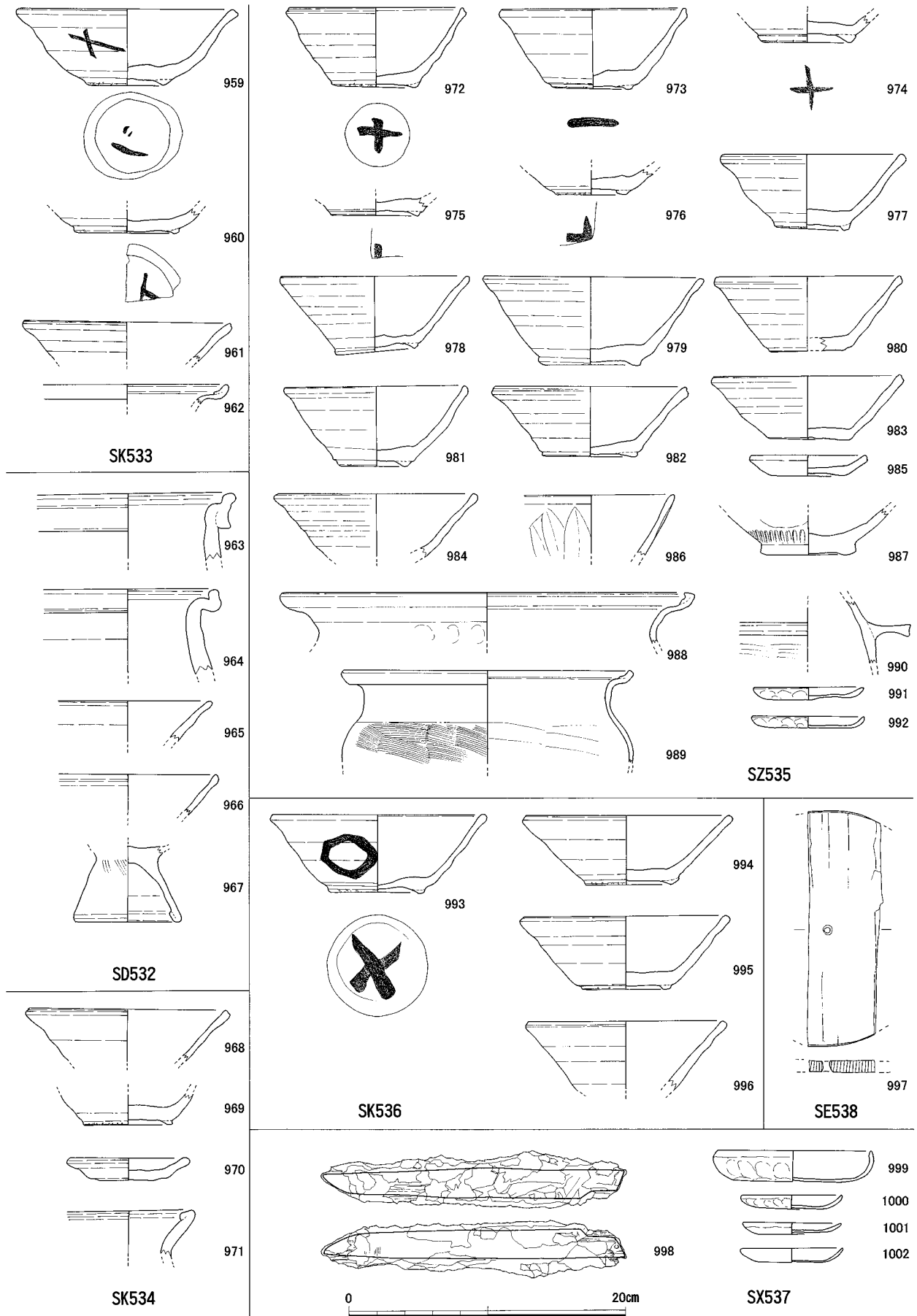


SK529

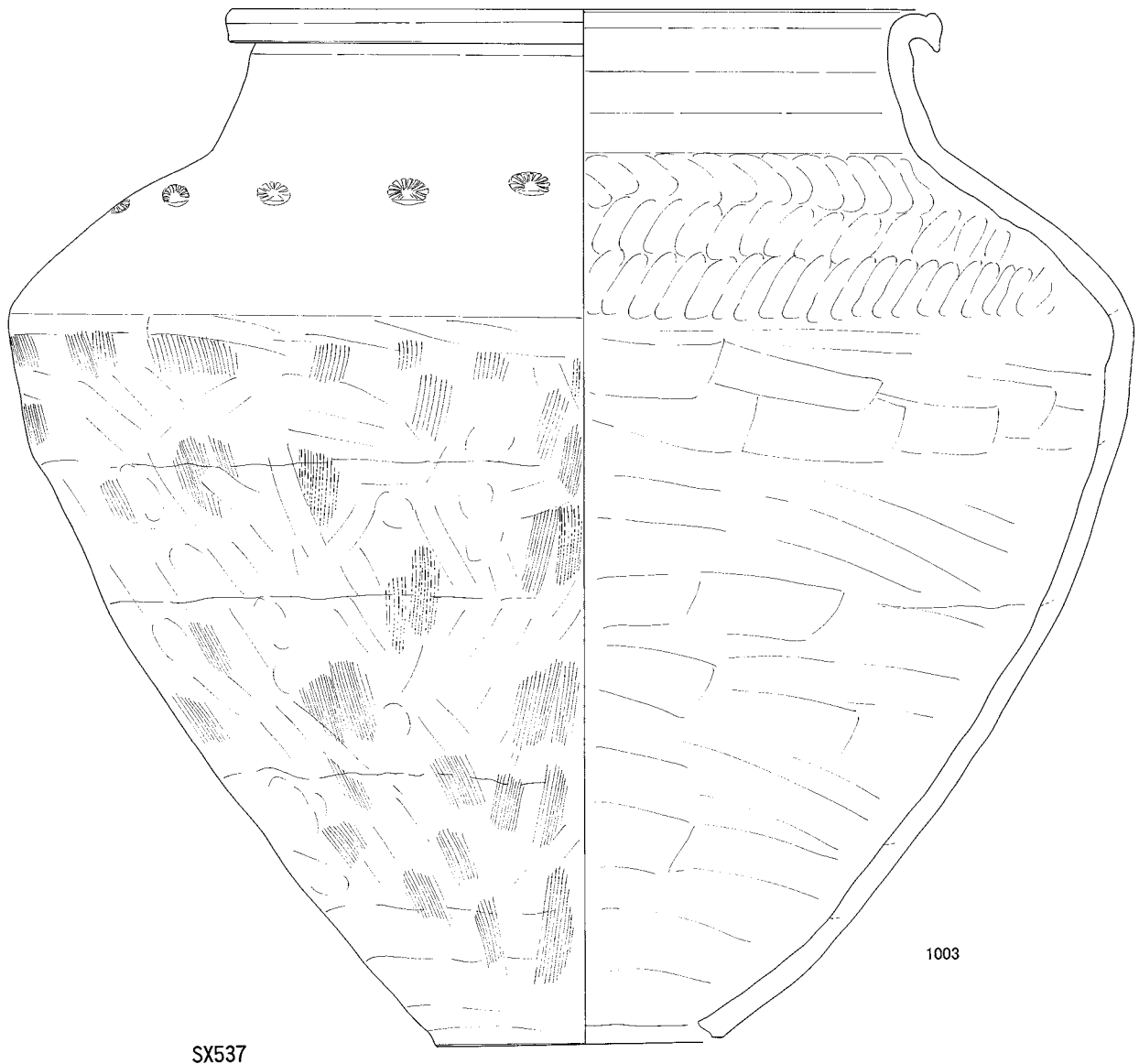
948



第245図 出土遺物実測図 (1:4)

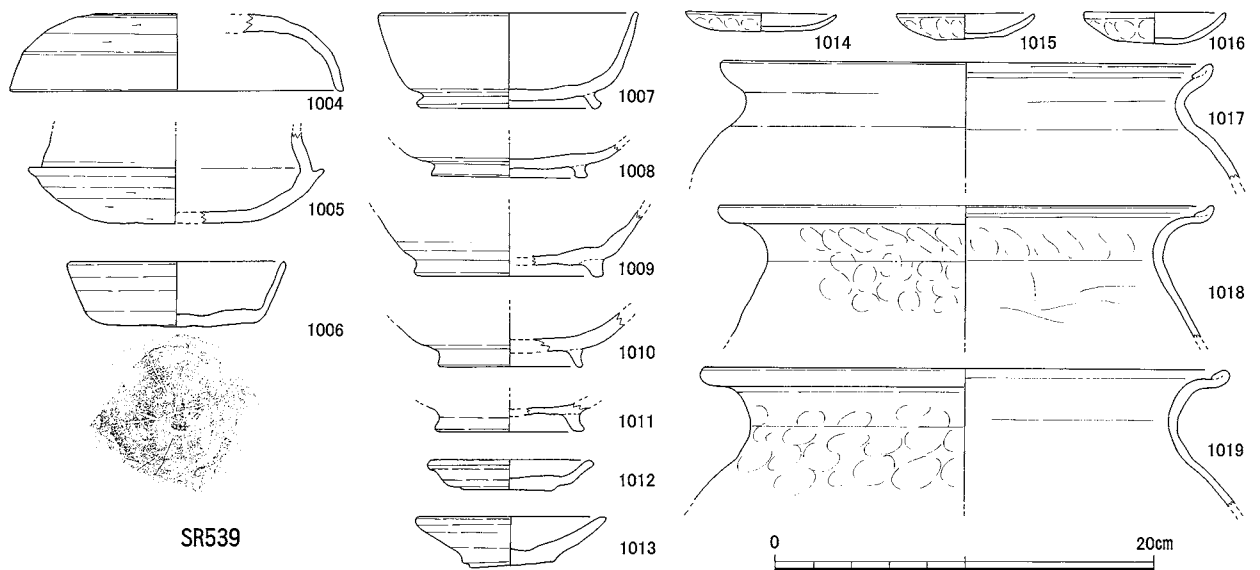


第246図 出土遺物実測図 (1 : 4)



SX537

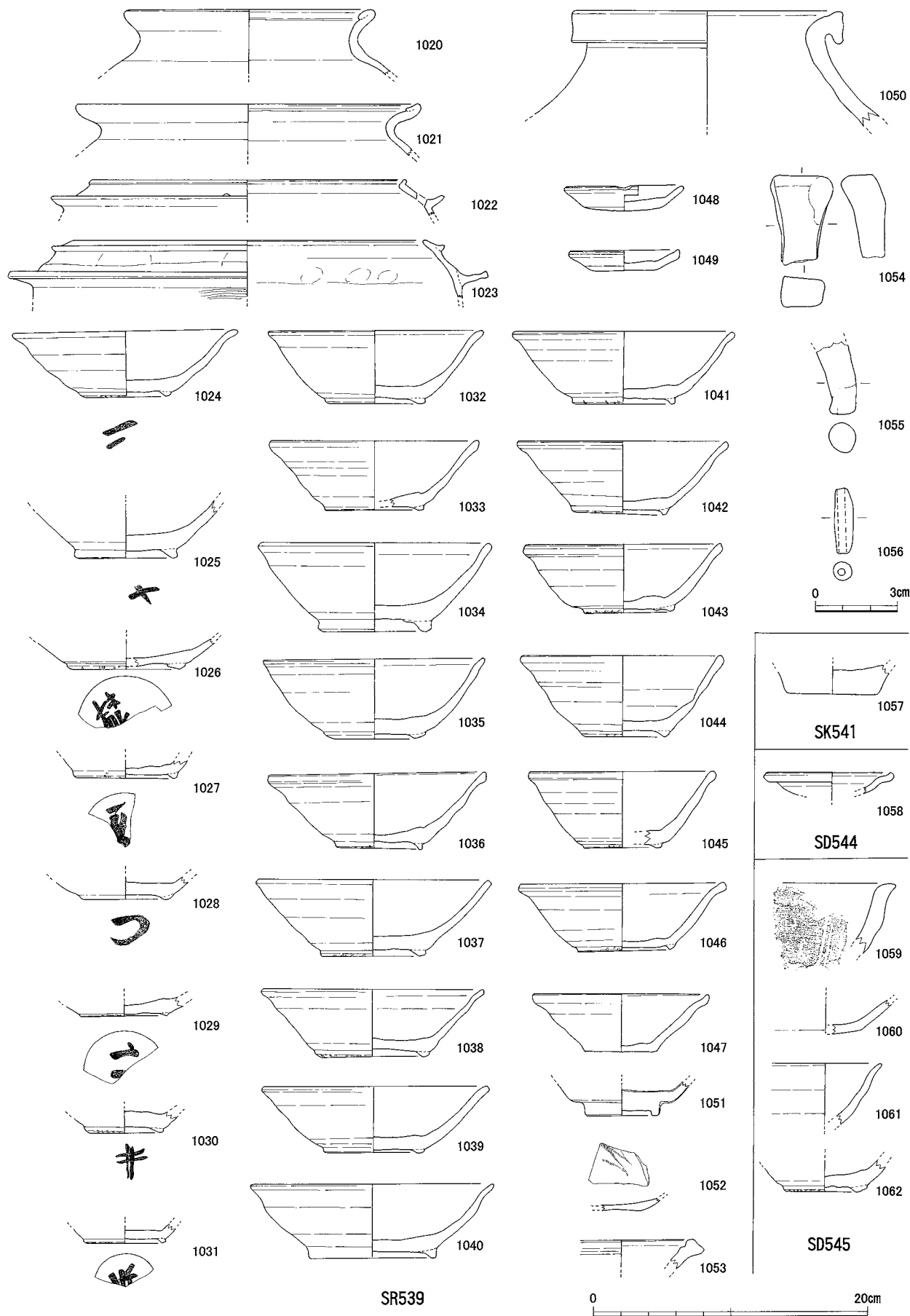
1003



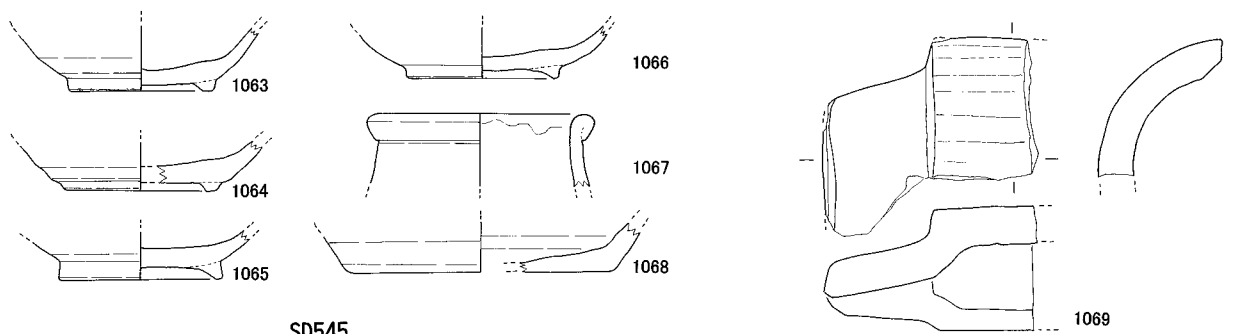
SR539

0 20cm

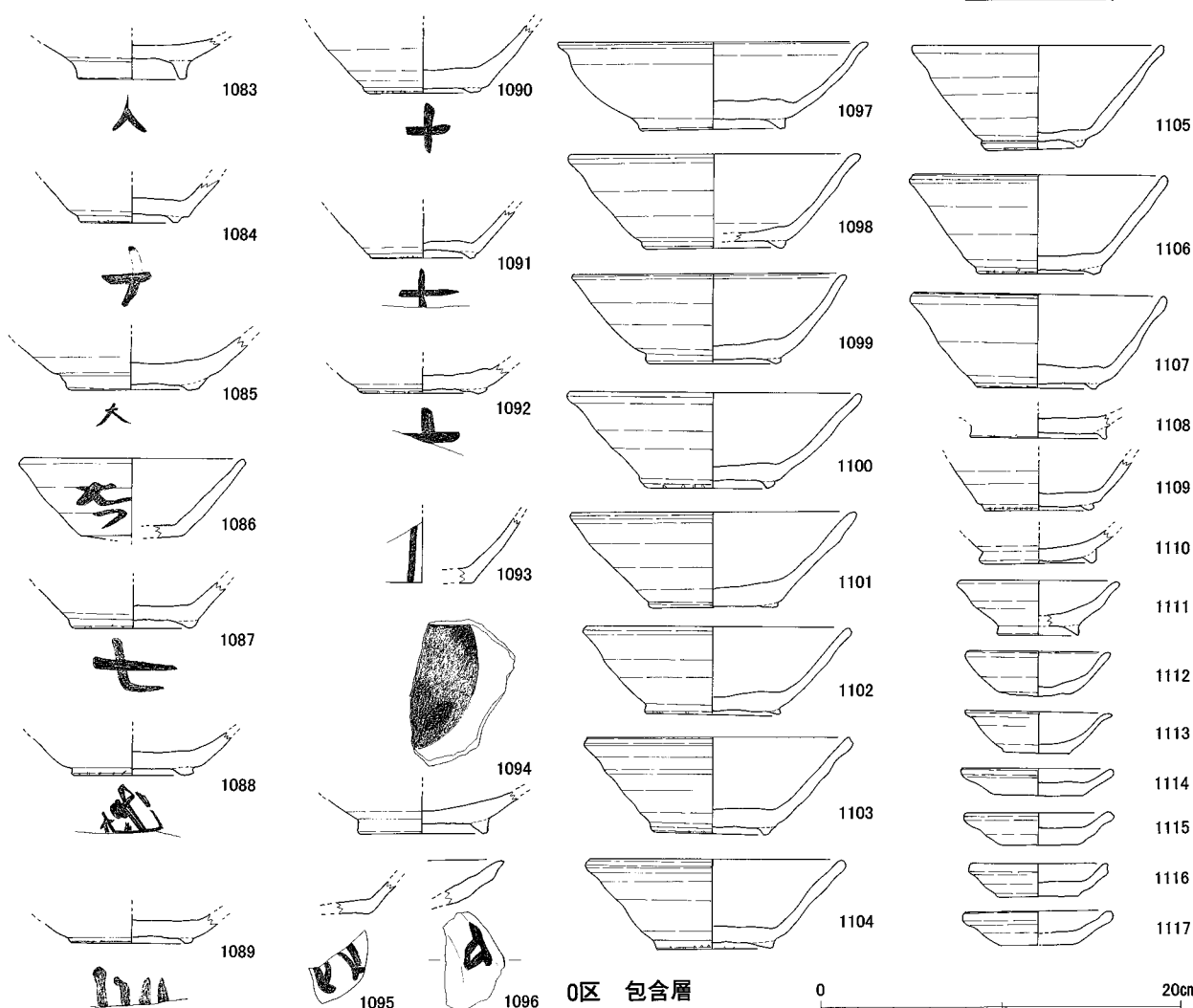
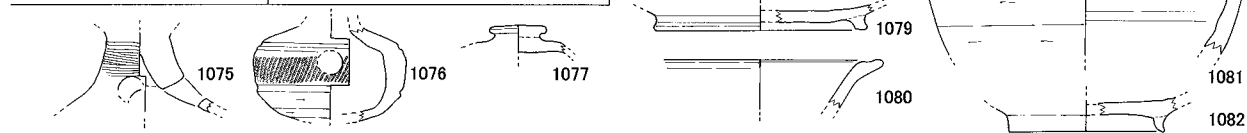
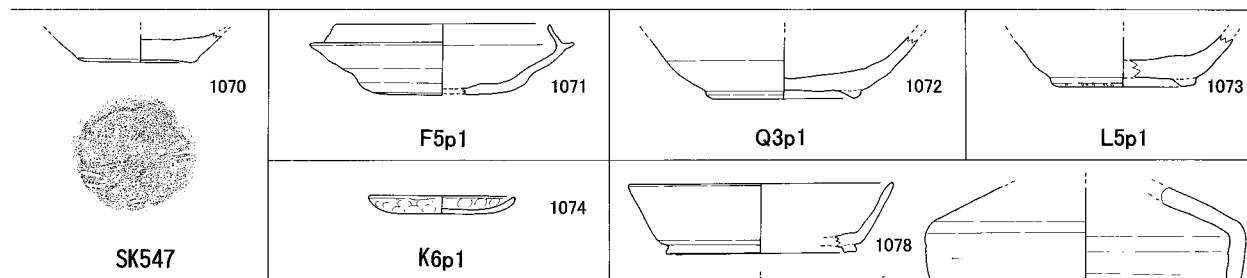
第247図 出土遺物実測図 (1:4)



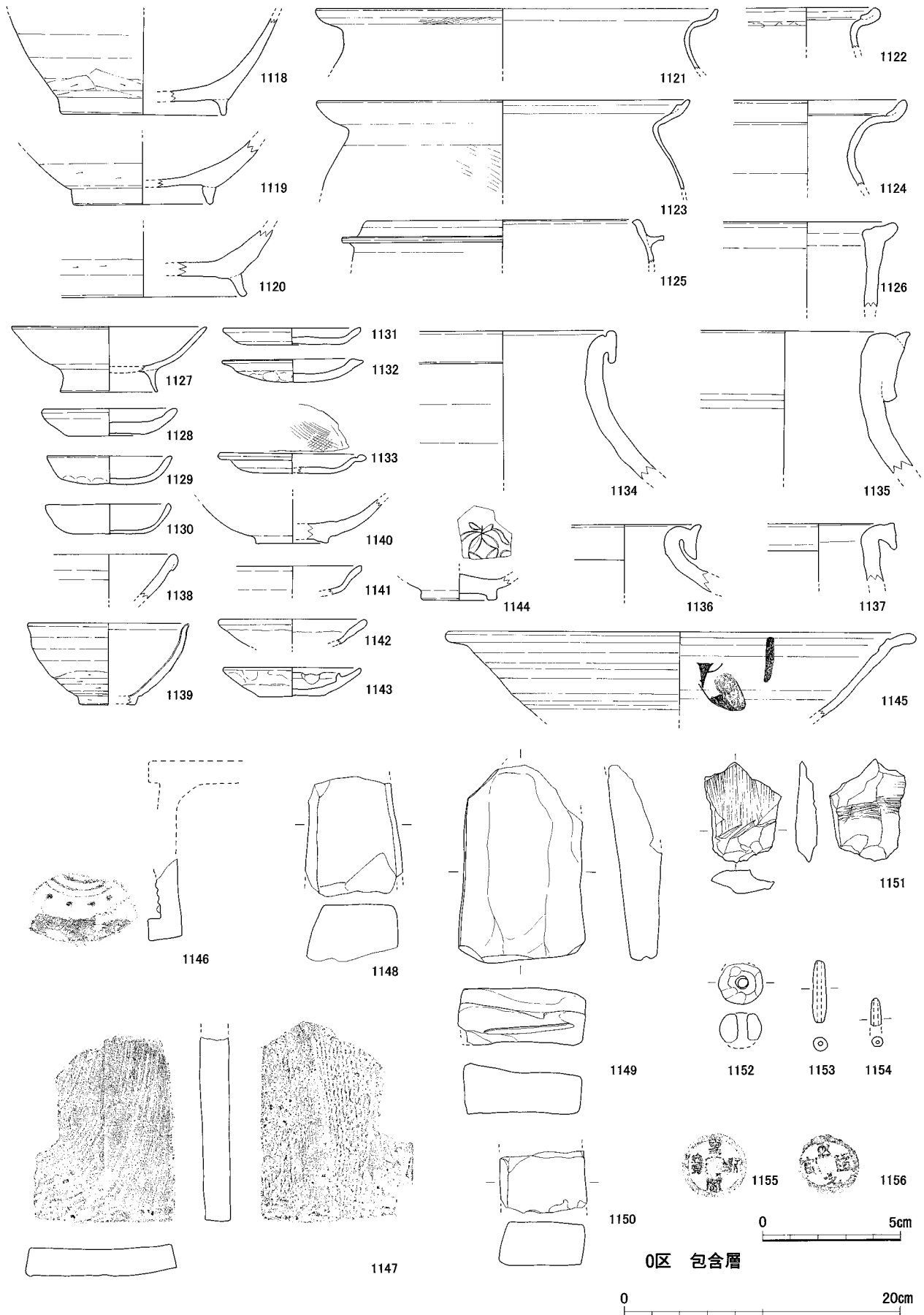
第248図 出土遺物実測図 (1056のみ 1 : 2、その他 1 : 4)



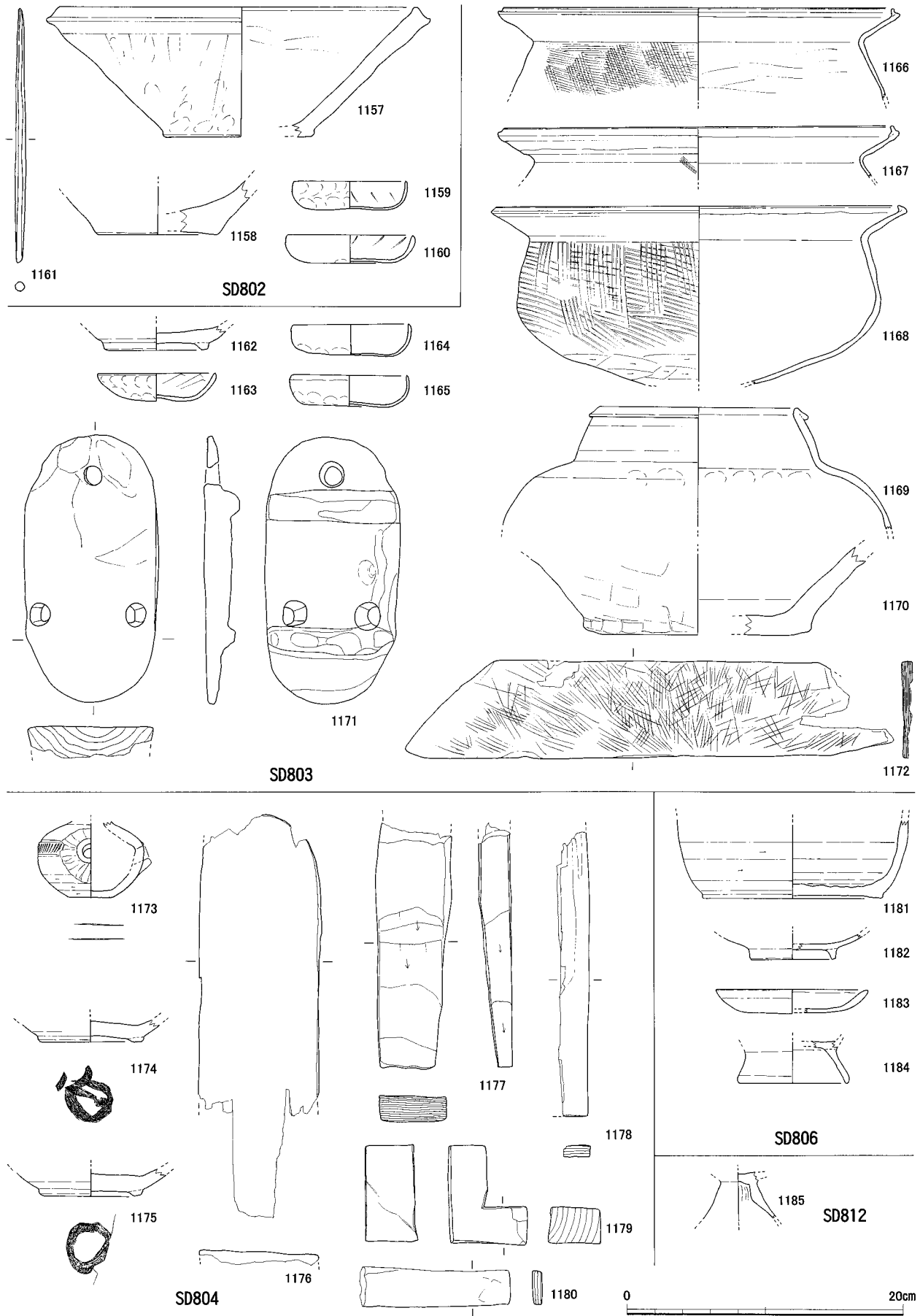
SD545



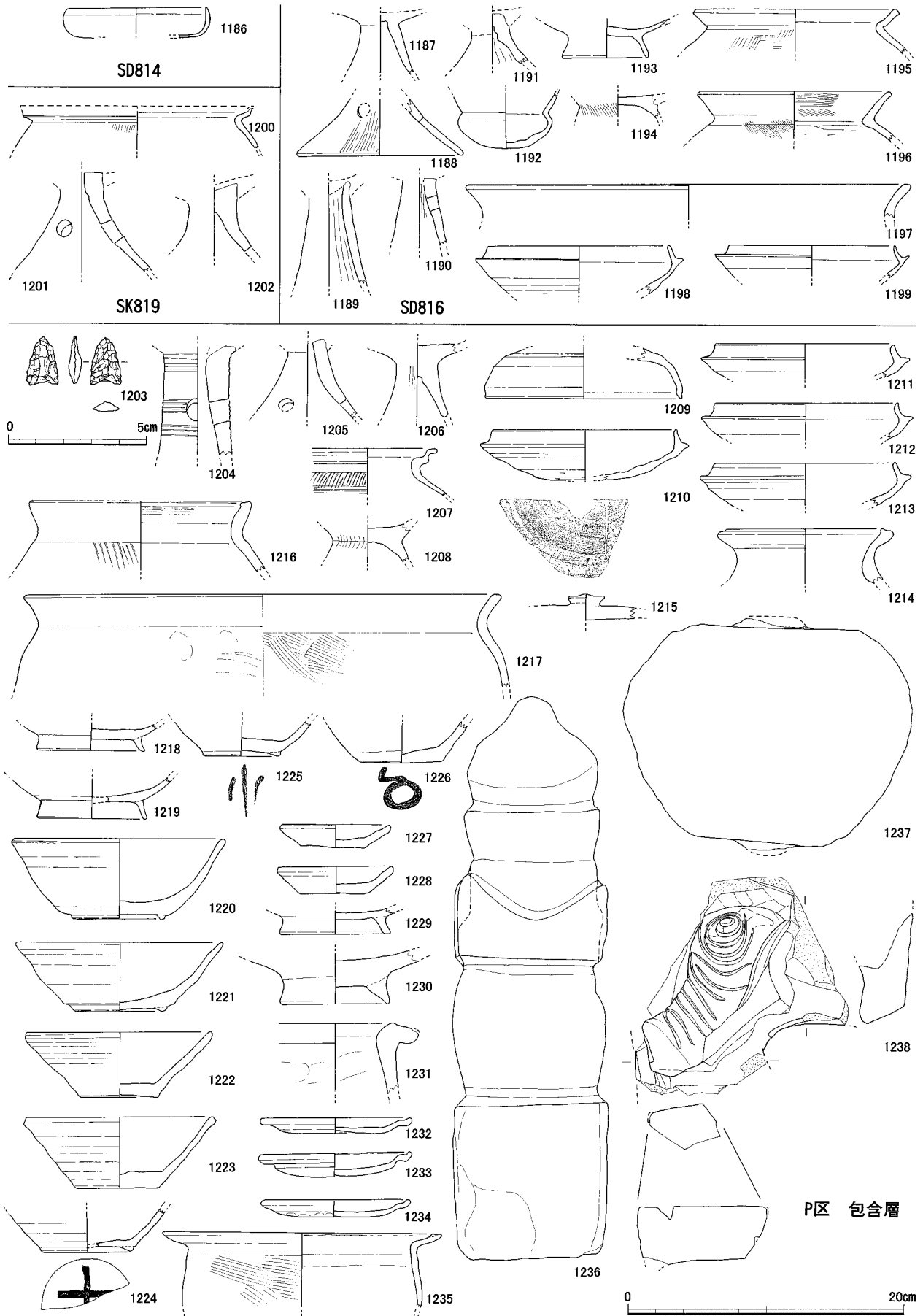
第249图 出土遺物実測図 (1 : 4)



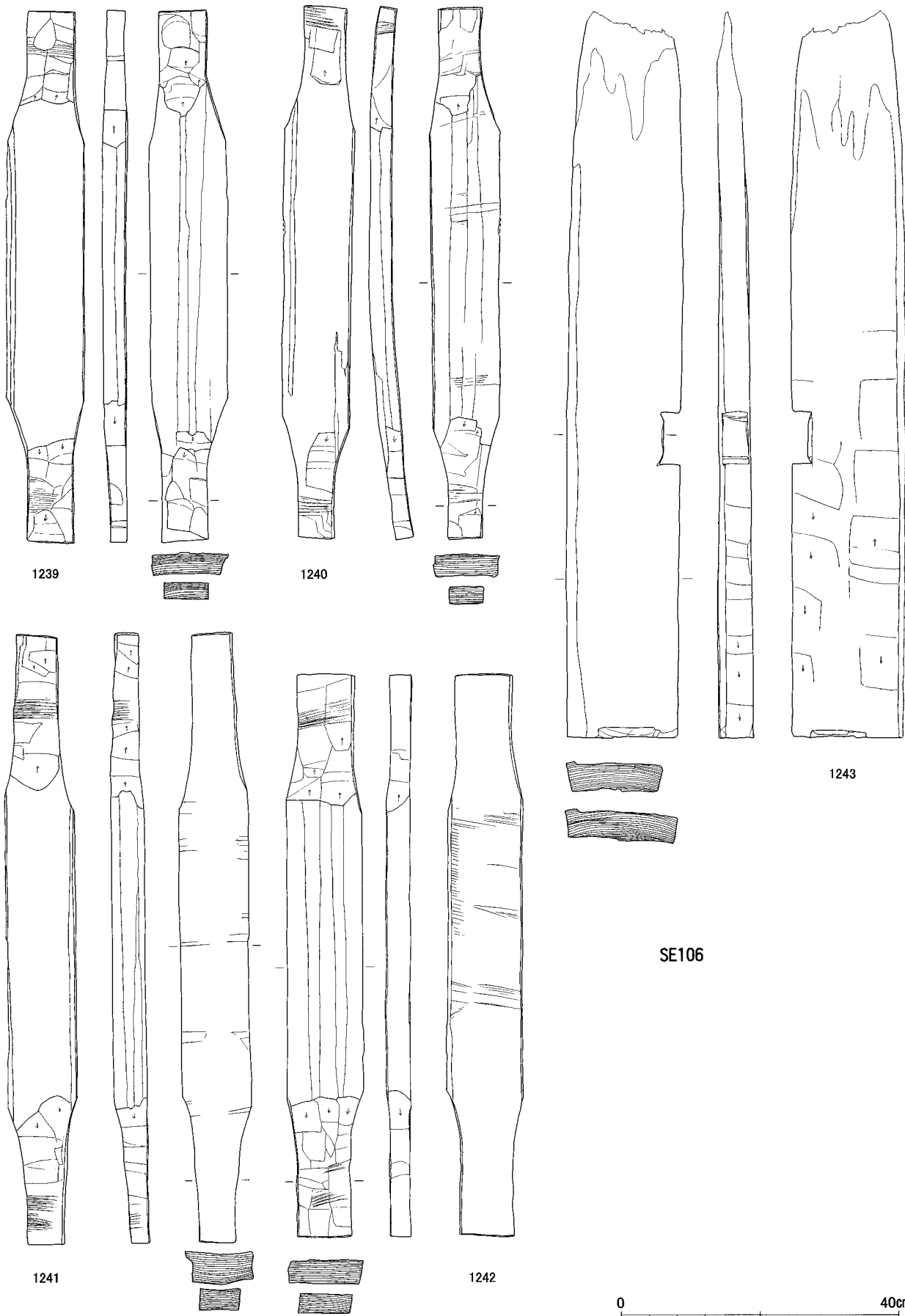
第250図 出土遺物実測図 (1155・1156は1:2、その他1:4)



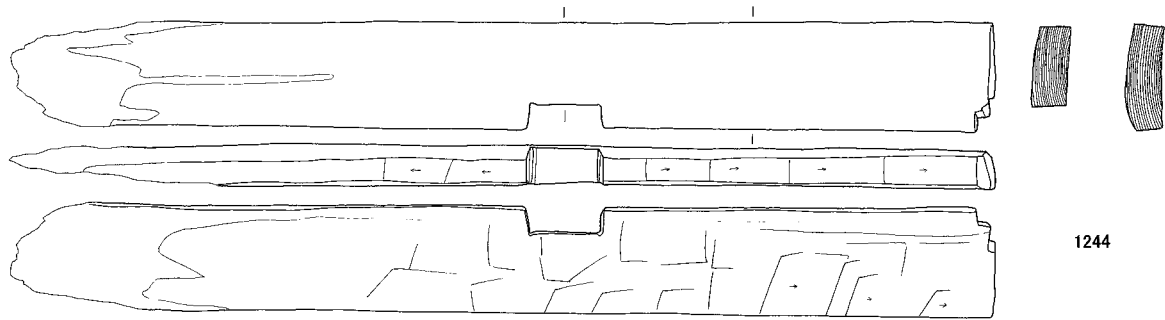
第251図 出土遺物実測図 (1 : 4)



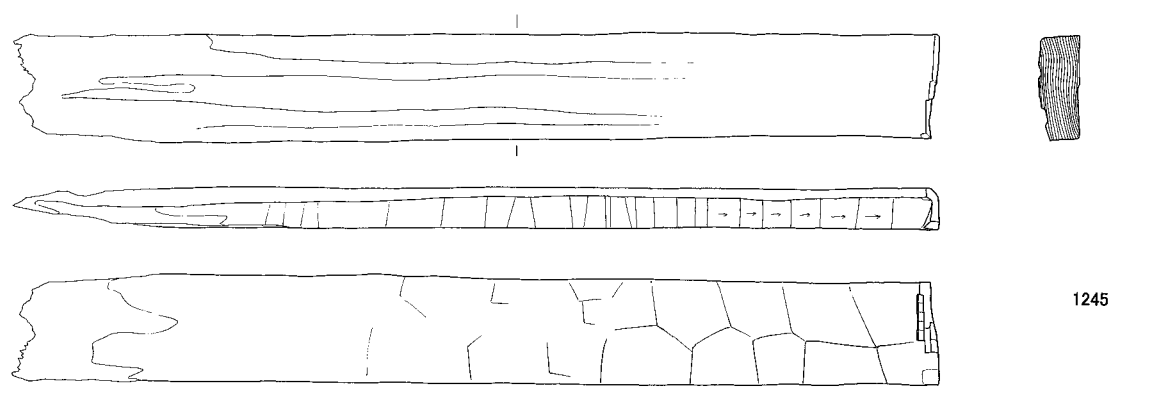
第252図 出土遺物実測図 (1203のみ 1 : 2、その他 1 : 4)



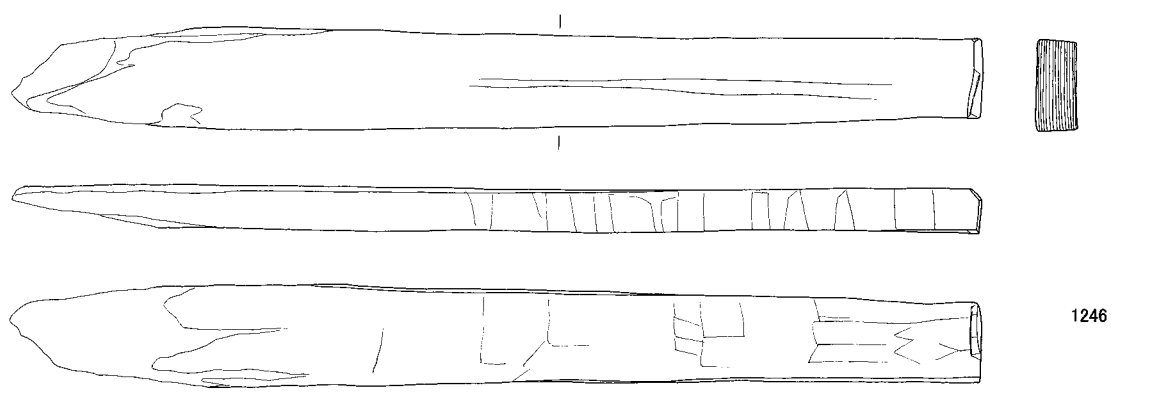
第253図 出土遺物実測図 (1 : 8)



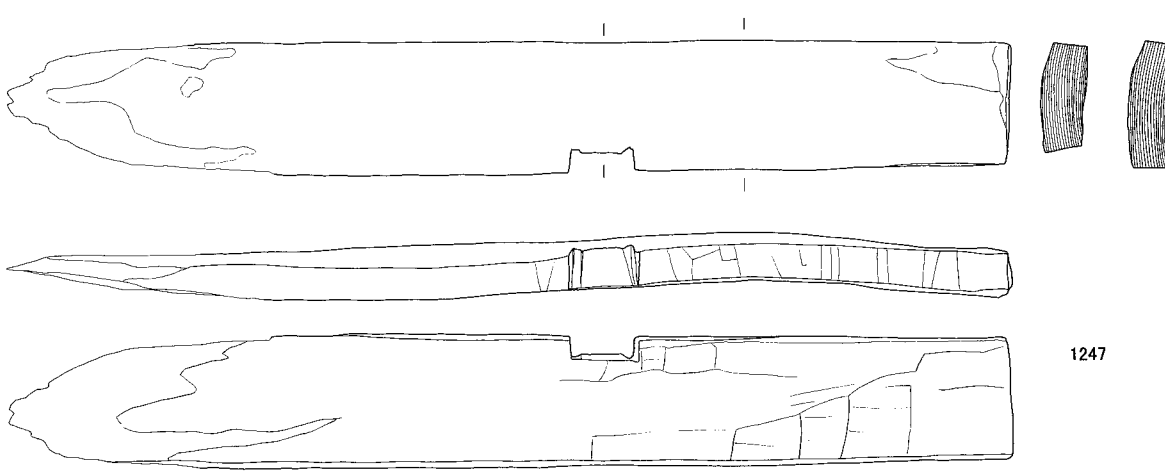
1244



1245



1246

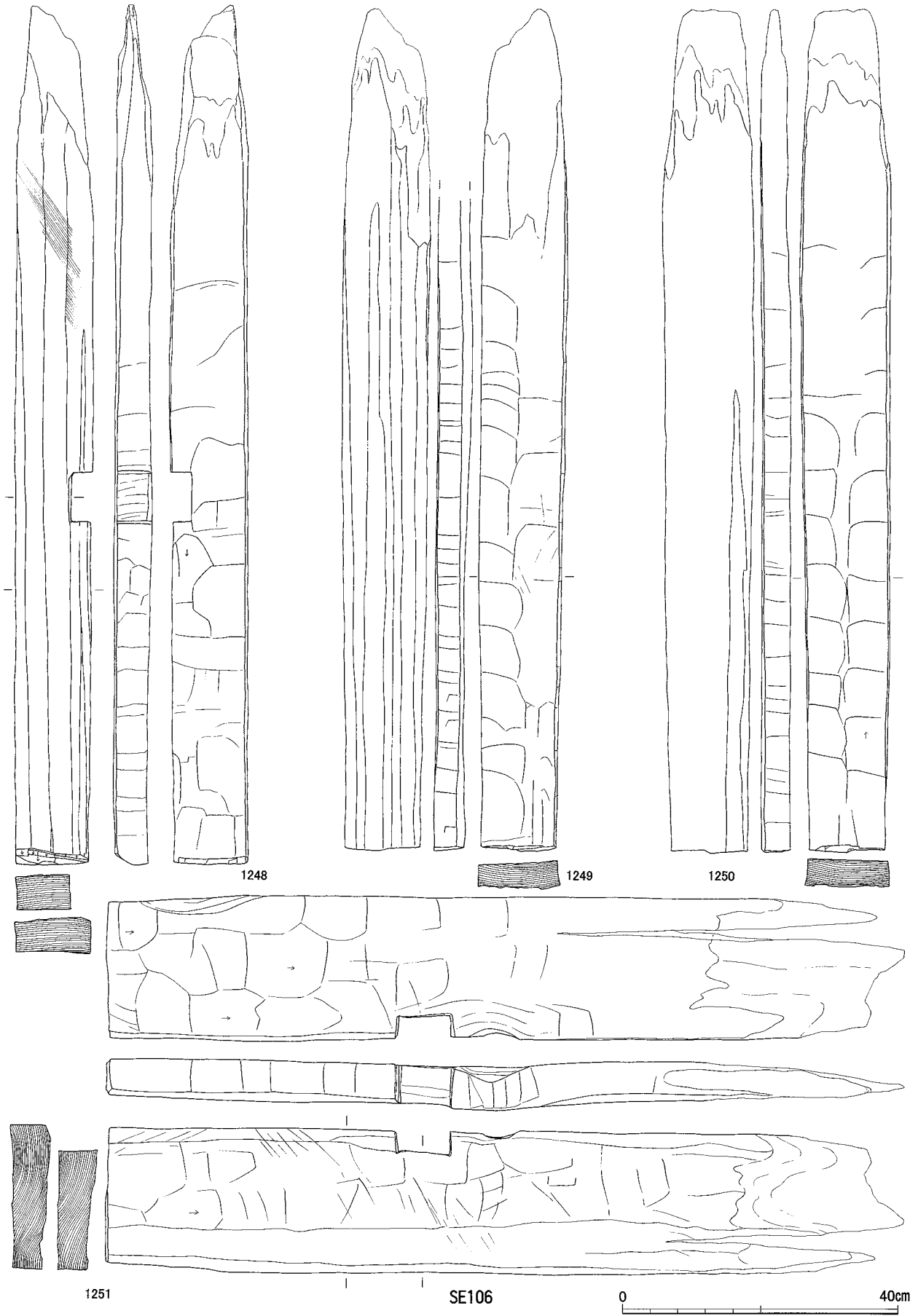


1247

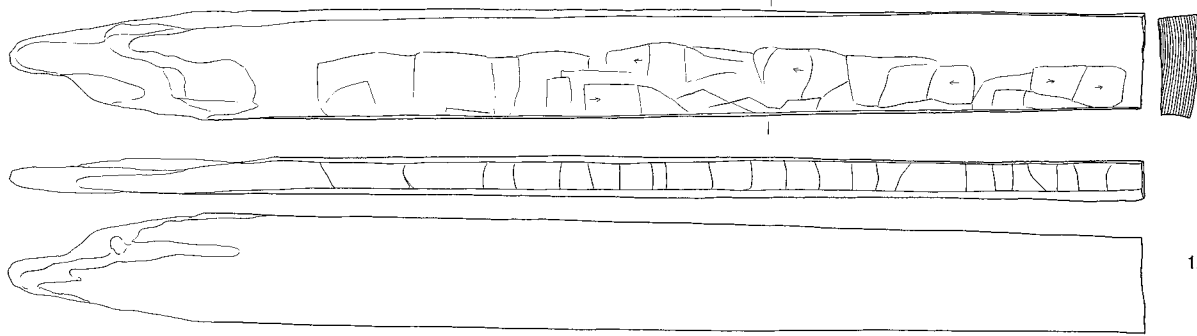
SE106



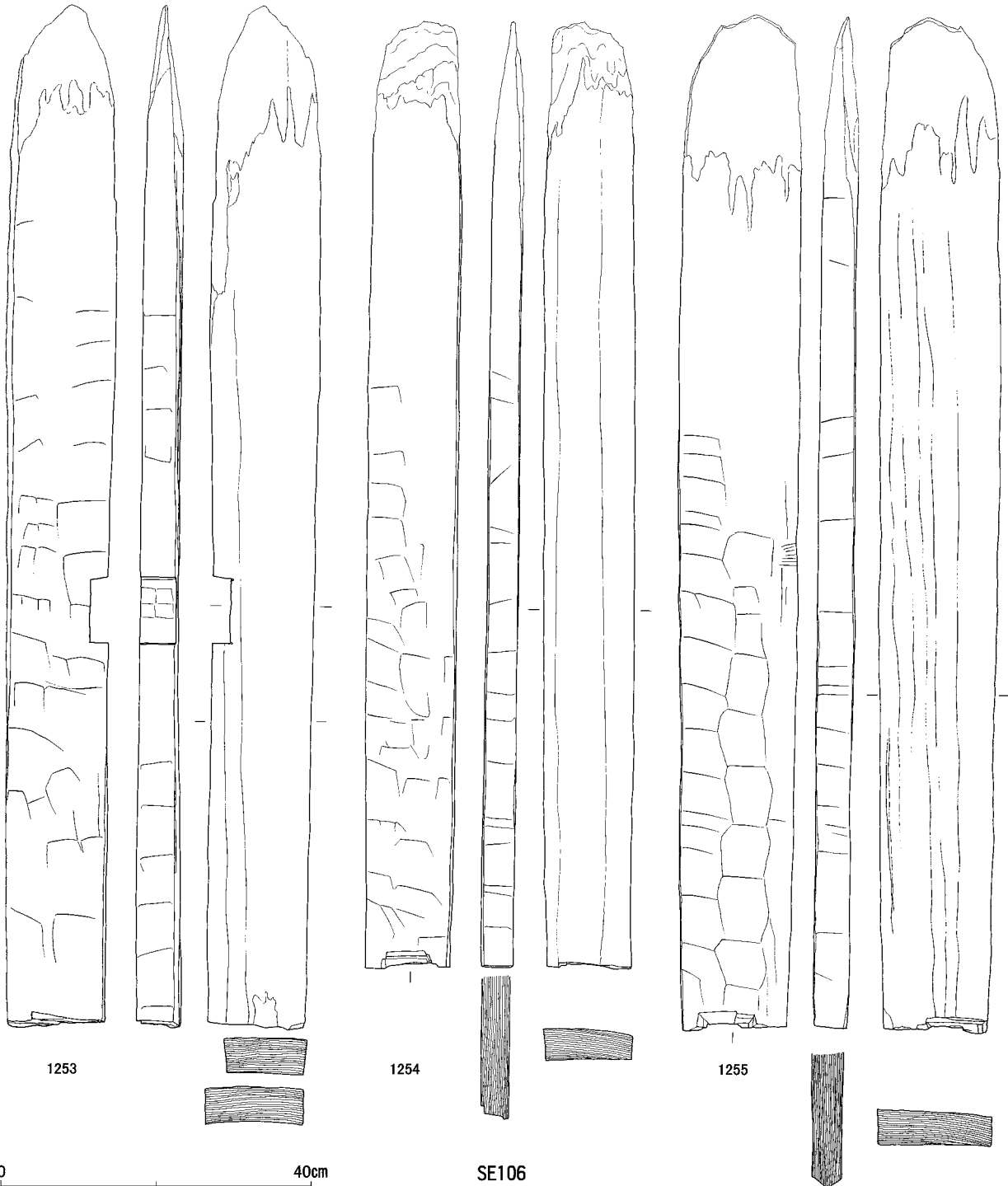
第254図 出土遺物実測図 (1 : 8)



第255図 出土遺物実測図 (1 : 8)



1252



1253

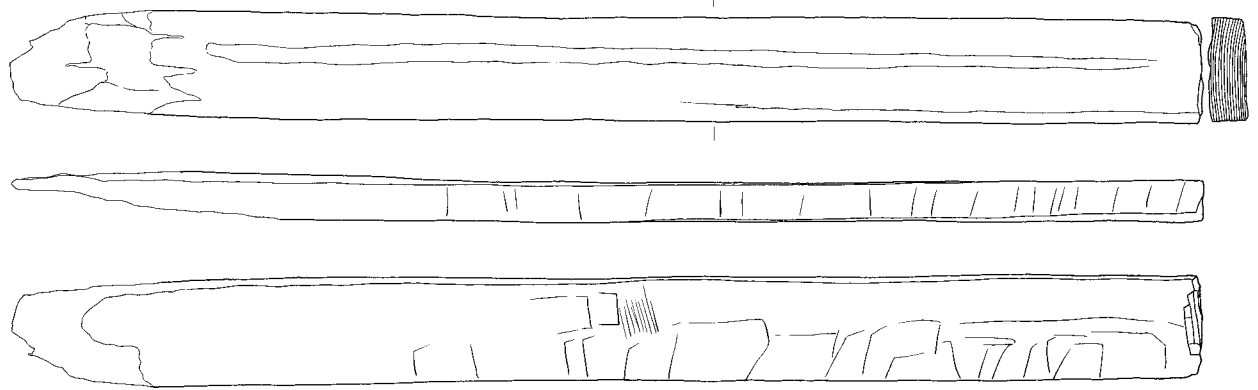
1254

1255

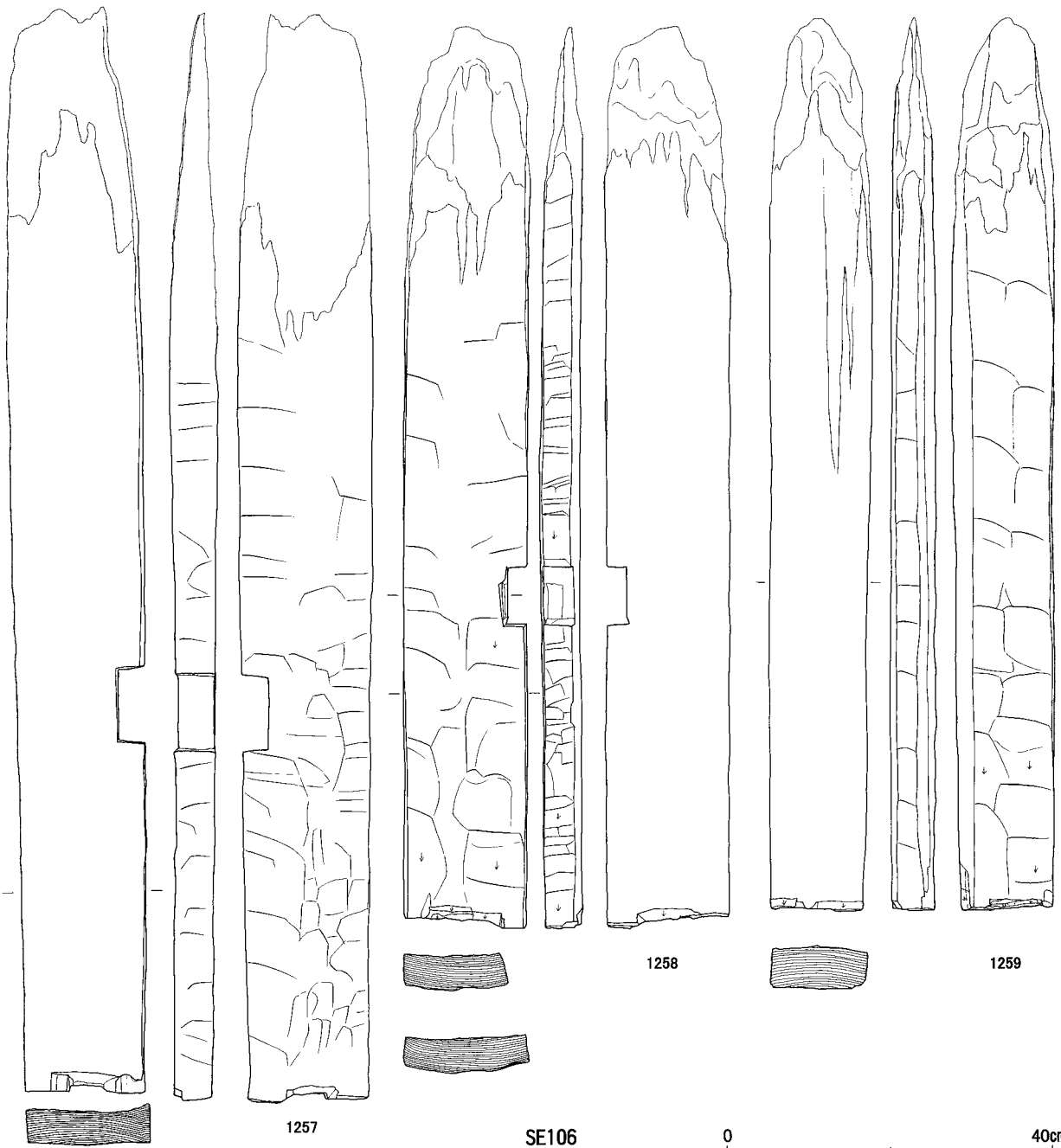
SE106

0 40cm

第256図 出土遺物実測図 (1:8)



1256



1257

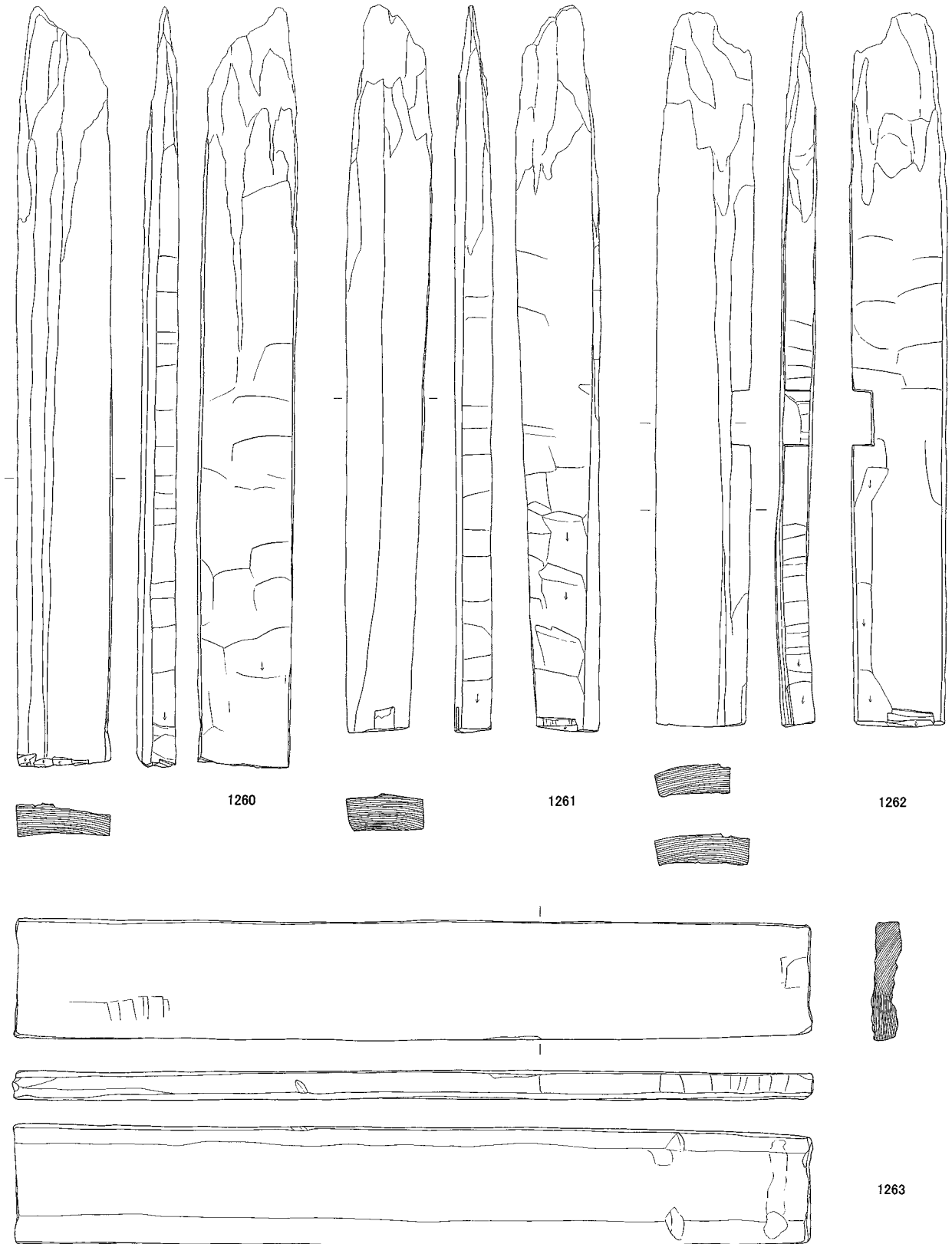
SE106

1258

1259

0 40cm

第257図 出土遺物実測図 (1 : 8)



1260

1261

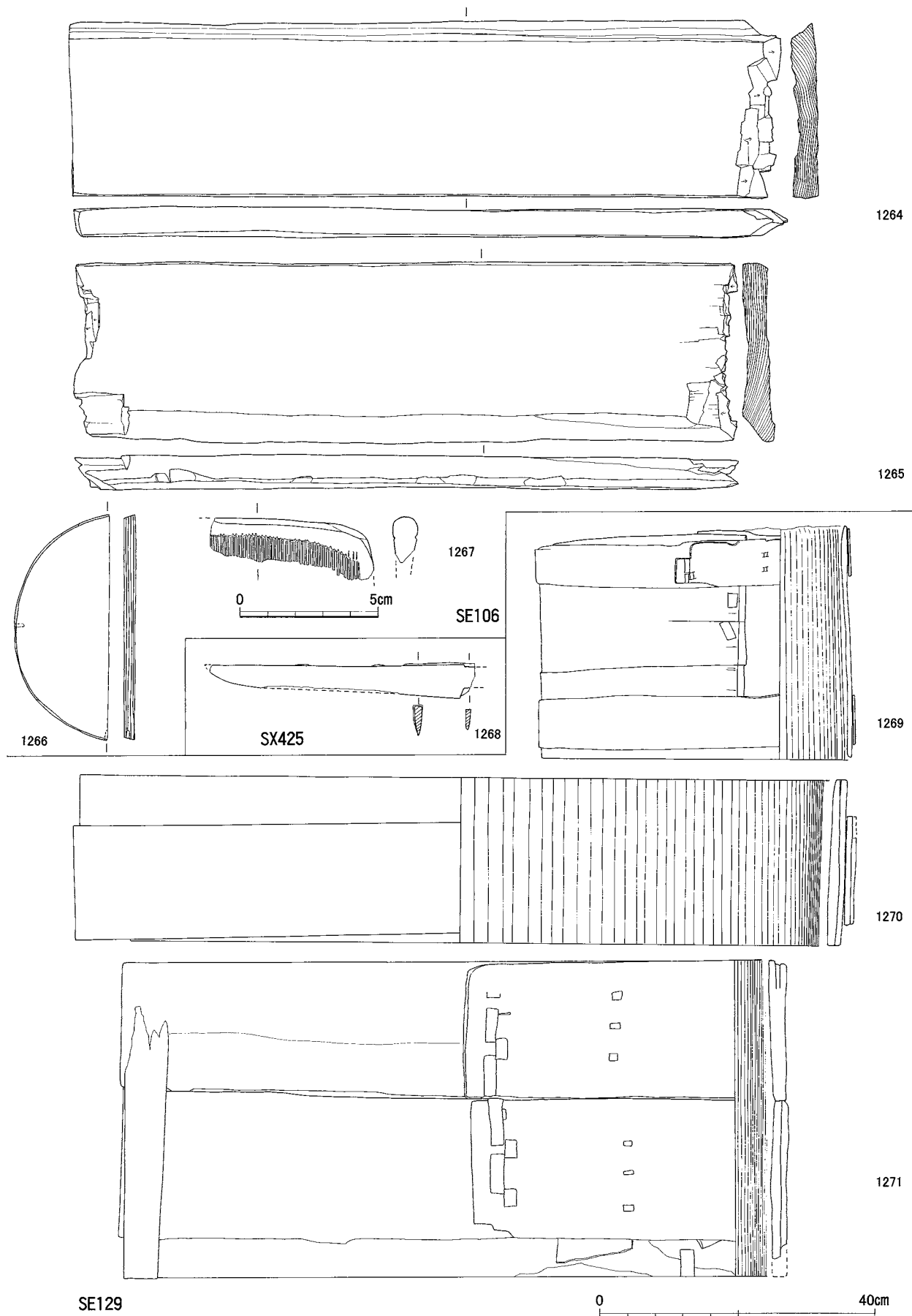
1262

1263

SE106

0 40cm

第258図 出土遺物実測図 (1 : 8)



第259図 出土遺物実測図 (1267のみ 1 : 2、1266・1268は 1 : 4、その他 1 : 8)

報告 番号	R No.	仮番号	質	器形	遺構	計測値			胎土	色調	残存	特記事項	
						口径 (cm)	器高 (cm)	重量 (g)					
1	5-4-2	542	弥生土器	壺	SR601		11.0		やや密	にぶい橙	7.5YR7/4	口縁部3/12	
2	5-5-1	551	弥生土器	甕	SR601		25.8		やや粗(～2.0mmの砂粒)	浅黄橙	7.5YR8/4	口縁部2/12	
3	5-5-2	552	弥生土器	甕	SR601				やや粗(～2.0mmの砂粒)	褐	7.5YR4/3		
4	5-16-4	5164	弥生土器	広口壺	SR606		17.1		やや粗	橙	5YR6/6	口縁部1/12	
5	5-18-2	5182	弥生土器	壺	SR606				やや粗(～2.0mmの砂粒)	暗灰	N3/0	小片	
7	5-5-4	554	須恵器	蓋	SR606	ワミ径	3.4		やや密	灰	N5/0	ワミ部3/12	内面に同心円あて具痕あり
8	5-17-1	5171	弥生土器	甕	SR607		18.0		やや粗(～4.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/2	口縁部1/12	
9	5-17-5	5175	弥生土器	壺	SK113	底径	4.7～5.0		粗(～3.0mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/4	底部完存	
10	5-16-1	5161	弥生土器	甕	SD116		22.6		やや粗(～2.0mmの砂粒)	浅黄橙	10YR8/3	口縁部4/12	外面に煤付着
11	5-17-6	5176	弥生土器	壺	SD116				やや粗(～2.0mmの砂粒)	灰	N5/0	体部片	
12	5-13-4	5134	須恵器	杯蓋	SD116		12.3	3.60	やや密	青灰	5B6/1	全体の9/12	
13	5-13-3	5133	土師器	杯	SD116		11.5	3.90	やや密	浅黄橙	7.5YR8/3	全体の8/12	底部に木の葉痕あり
14	5-13-2	5132	土師器	杯	SD116		14.3	3.40	やや粗(～3.0mmの砂粒)	灰白	5Y8/1	全体の9/12	
15	5-18-3	5183	弥生土器	壺	SD117				やや粗(～2.0mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/4	小片	
16	5-18-1	5181	弥生土器	壺	SK122				やや密	にぶい黄橙	10YR7/2	小片	
17	5-4-1	541	土師器	壺	SK103	底径	8.0		やや密	浅黄橙	10YR8/3		
18	5-6-1	561	土師器	二重口縁壺	SK103		16.3	28.60	密(～5.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/4	口縁部2/12	
19	5-6-3	563	土師器	小形S字甕	SK103		12.7		密(～2.5mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/4	口縁部2/12	外面に煤付着
20	5-6-2	562	土師器	高杯	SK103		17.0		密(～1.5mmの砂粒)	灰黄褐	10YR5/2	口縁部3/12	
21	5-6-5	565	土師器	高杯	SK103	基部径	3.8		密(～2.0mmの砂粒)	灰黄褐	10YR6/2	基部完存	
22	5-6-4	564	土師器	小型平底壺	SK103	底径	5.0		密(～1.5mmの砂粒)	浅黄橙	10YR8/3	底部5/12	
23	5-11-1	5111	土師器	二重口縁壺	SE105		27.0		密(～4.0mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/4	口縁部1/12	
24	5-11-5	5115	土師器	二重口縁壺	SE105		15.9		密(～1.0mmの砂粒)	にぶい橙	5YR6/4	口縁部2/12	
25	5-12-3	5123	土師器	二重口縁壺	SE105		12.8					口縁部2/12	
26	5-12-4	5124	土師器	高杯	SE105	頸部	5.2		密(～3.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/2	頸部6/12	
27	5-11-2	5112	土師器	小型丸底壺	SE105		8.1	9.70	密(～2.5mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/4	口縁部9/12	穿孔あり
28	5-10-5	5105	土師器	小型丸底壺	SE105	体部	9.9		密(～1.5mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/2	体部11/12	
29	5-8-3	583	土師器	小型平底壺	SE105	底径	4.3		やや密	にぶい橙	7.5YR7/4	底部完存	
30	5-10-4	5104	土師器	高杯	SE105		18.0		密(～2.0mmの砂粒)	明赤褐	2.5YR5/6	口縁部3/12	外面に煤付着
31	5-12-1	5121	土師器	高杯	SE105		15.8		密(～2.0mmの砂粒)	橙	7.5YR7/6	口縁部3/12	
32	5-9-3	593	土師器	高杯	SE105		15.7～16.2		やや密	灰白	10YR8/2	口縁部ほぼ完存	
33	5-10-1	5101	土師器	高杯	SE105	基部径	4.6		密(～2.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/3	基部完存	
34	5-8-2	582	土師器	高杯	SE105	台径	14.2		やや粗(～3.0mmの砂粒)	橙	2.5YR6/6	台部3/12	
35	5-10-3	5103	土師器	高杯	SE105	底径	12.1		密(～1.5mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR6/4	底部2/12	
36	5-11-3	5113	土師器	高杯	SE105	底径	10.9		密(～1.5mmの砂粒)	にぶい橙	5YR7/4	底部2/12	
37	5-7-2	572	土師器	S字甕	SE105		13.4		密(～2.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/3	口縁部完存	外面に煤付着 D類以降
38	5-9-2	592	土師器	S字甕	SE105		14.1		やや粗(～2.0mmの砂粒)	浅黄橙	10YR8/3	口縁部2/12	D類以降
39	5-9-1	591	土師器	S字甕	SE105		15.9		やや粗(～2.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/2	口縁部5/12	D類以降
40	5-7-1	571	土師器	S字甕	SE105		15.7		密(～3.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR6/3	口縁部完存	内面に炭化物付着 D類以降
41	5-8-1	581	土師器	S字甕	SE105		15.0		やや密	黒褐	10YR3/1	口縁部3/12	外面に煤付着 D類以降
42	5-12-2	5122	土師器	S字甕	SE105				密(～2.0mmの砂粒)	にぶい黄褐	10YR5/3		外面に煤付着 D類以降
43	5-11-4	5114	土師器	S字甕	SE105	底径	9.2		密(～2.0mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/4	底部完存	D類以降
44	5-10-2	5102	土師器	S字甕	SE105	底径	12.0		密(～2.0mmの砂粒)	橙	5YR6/6	底部2/12	外面に煤付着 D類以降
45	5-14-4	5144	土師器	杯	SD118		14.6		やや密(長石含む)	にぶい橙	5YR6/4	口縁部2/12	
46	5-14-5	5145	須恵器	杯身	SR121	受部径	13.2		密	灰白	N7/0	口縁部2/12	
47	5-16-3	5163	土師器	皿	SK114		16.0		やや密	浅黄橙	10YR8/3	口縁部3/12	
48	5-17-4	5174	土師器	製塩土器	SK114		20.0		粗(～3.0mmの砂粒)	にぶい橙	2.5YR6/4	口縁部1/12	志摩式
49	5-1-4	514	土師器	皿	SE106		15.4		やや粗(～2.0mmの砂粒)	橙	2.5YR7/6		内面に螺旋状暗文
50	5-2-6	526	土師器	皿	SE106		17.8	3.50	やや密(～1.0mmの微砂粒)	浅黄橙	7.5YR8/3	口縁部1/12	
51	5-3-5	535	土師器	皿	SE106		16.2	2.70	やや密(～1.5mmの微砂粒)	橙	5YR7/8		
52	5-2-4	524	土師器	皿	SE106		16.8	1.40	やや粗(～1.5mmの微砂粒)	橙	5YR7/6	口縁部1/12	内面に煤付着
53	5-2-1	521	土師器	杯	SE106		16.2	4.10	やや密(～2.0mmの砂粒)	浅黄橙	7.5YR8/4	口縁部完存	
54	5-2-5	525	土師器	杯	SE106		13.8	4.00	やや粗(～1.5mmの微砂粒)	橙	5YR7/8	口縁部2/12	
55	5-2-3	523	土師器	杯	SE106		12.6	3.10	やや粗(～2.0mmの砂粒)	橙	5YR7/6	口縁部完存	
56	5-2-2	522	土師器	杯	SE106		13.0	3.00	やや密(～1.5mmの微砂粒)	浅黄橙	7.5YR8/4	口縁部完存	
57	5-2-7	527	土師器	杯	SE106		12.6	3.30	密(～1.0mmの微砂粒)	赤橙	10R6/6	口縁部2/12弱	
58	5-1-3	513	土師器	甕	SE106		15.0		密(～1.5mmの微砂粒)	黒褐	10YR3/2	口縁部2/12強	外面に煤付着
59	5-1-5	515	土師器	甕	SE106		15.4		やや密(～1.0mmの微砂粒)	灰白	10YR8/2	口縁部3/12	内面に煤付着
60	5-1-2	512	土師器	甕	SE106		16.0		やや密(～1.5mmの微砂粒)	灰白	10YR7/1	口縁部2/12強	内面に煤付着
61	5-1-1	511	土師器	甕	SE106		30.0		やや粗(～2.5mmの砂粒)	灰白	10YR8/2	口縁部1/12強	外面黒い部分あり

第11表 遺物観察表

報告 番号	R No.	仮番号	質	器形	遺構	計測値			胎土	色調	残存	特記事項		
						口径 (cm)	器高 (cm)	重量 (g)						
62	5-3-1	531	土師器	鉢	SE106		22.4	6.40	やや密(～2.5mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/2	口縁部残りわずか	「盤A」	
63	5-3-4	534	黒色土器	円形板	SE106				密(～1.0mmの微砂粒)	灰黄褐	10YR6/2		硯の可能性あり	
64	5-2-8	528	須恵器	杯蓋	SE106		17.6		やや密(～1.0mmの微砂粒)	灰白	N7/0		内面に墨痕	
65	5-3-3	533	灰釉陶器	椀	SE106				密	灰白	5Y7/1	口縁部片	内面に灰釉 猿投	
66	5-3-2	532	灰釉陶器	椀	SE106				やや密(～1.0mmの微砂粒)	灰白	N8/0	口縁部片	内面に灰釉 猿投	
67	5-19-5	5195	土師器	直口壺	J-P4p5		10.1	13.50	密	橙	5YR7/6	口縁部1/12	SA631を切るピット	
68	5-20-1	5201	土師器	椀	SB154		17.0	6.40	密	浅黄橙	7.5YR8/4	口縁部4/12		
69	5-19-3	5193	陶器	山茶椀	SB154		15.0		密	(釉)灰白 (素地)黄灰	2.5Y8/1 2.5Y6/1	口縁部1/12	猿投	
70	5-20-3	5203	口口土師器	小皿	J-N1p2		9.4	2.50	密	にぶい橙	7.5YR7/4	口縁部1/12		
71	5-20-6	5206	口口土師器	不明	J-N1p4	底径	6.8		密	にぶい黄橙	10YR7/4	底部4/12		
72	5-19-1	5191	陶器	山茶椀	J-R6p5		16.8	5.60	密	灰	N7/0	口縁部7/12	瀬戸・猿投	
73	5-19-6	5196	土師器	小皿	J-R6p5		9.6	1.90	密	橙	5YR7/6	口縁部ほぼ完存	ての字小皿	
74	5-19-2	5192	陶器	山茶椀	J-S4p10		17.4	5.90	密(～2.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y7/1	口縁部4/12	渥美	
75	5-20-5	5205	土師器	甕	J-S4p10		17.0		やや密(～2.0mmの砂粒)	にぶい橙	5YR7/4	口縁部3/12		
76	5-20-8	5208	土師器	甕	J-U7p2		13.2		密	にぶい橙	5YR7/4	口縁部2/12		
77	5-20-2	5202	口口土師器	皿	J-R4p17		14.9	3.70	密	褐灰	10YR5/1	口縁部3/12		
78	5-20-7	5207	黒色土器	椀	J-N3p14		15.0		密	にぶい黄橙	10YR7/4	口縁部1/12	A類	
79	5-19-4	5194	灰釉陶器	椀	J-N2p15		15.0		密	灰白	5Y7/1	口縁部1/12	猿投	
81	5-13-1	5131	弥生土器	甕	J区包		18.3	21.20	やや粗(～3.0mmの砂粒)	褐灰	10YR5/1	口縁部6/12	底部に穿孔あり	
82	5-17-2	5172	弥生土器	甕	J区包		18.0		やや粗(～2.0mmの砂粒)	灰黄褐	10YR6/2	口縁部2/12以下		
83	5-17-3	5173	弥生土器	甕	J区包		13.8		やや粗(～2.0mmの砂粒)	黒褐	10YR3/1	口縁部1/12		
84	5-16-2	5162	弥生土器	甕	J区包	底径	5～5.2		やや粗(～3.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/2	底部完存		
85	5-18-4	5184	弥生土器	壺	J区包				やや粗(～3.0mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/3	小片		
86	5-18-5	5185	弥生土器	壺	J区包				やや粗(～2.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/3	小片		
87	5-17-7	5177	弥生土器	壺	J区包				やや粗(～2.0mmの砂粒)	黒褐	7.5YR3/2	頸・体部片		
89	5-4-3	543	土師器	杯	J区包		12.9		やや粗(～2.0mmの砂粒)	橙	7.5YR7/6	口縁部4/12		
90	5-15-3	5153	須恵器	杯身	J区包	受部径	10.8		密(～2.0mmの長石)	灰	N6/0	口縁部2/12		
91	5-14-1	5141	須恵器	大甕	J区包		34.6		密	灰	N7/0	口縁部2/12		
92	5-14-2	5142	土師器	杯	J区包		12.4	3.40	やや粗	にぶい黄橙	10YR7/3	口縁部3/12		
93	5-14-3	5143	土師器	杯	J区包		14.1		密	にぶい黄橙	10YR7/2	口縁部2/12		
94	5-15-4	5154	青磁	香炉	J区包		11.0		密	(釉)緑灰(素地)灰白	7.5GY6/1 7.5Y7/1	口縁部1/12	脚部に花文状の透かし	
95	5-15-1	5151	陶器	山茶椀	J区包	底径	7.1		密	灰白	N8/0	底部4/12	瀬戸	
96	5-15-2	5152	陶器	山茶椀	J区包	底径	7.1		密	灰白	5Y8/1	底部6/12	初穀痕 知多・猿投	
97	5-31-9	5319	鉄製品	釘	J区包		(長)2.7	(幅)0.4	(厚)0.4					
98	5-31-10	53110	鉄製品	釘	J区包		(長)4.0	(幅)0.5	(厚)0.4					
99	5-31-8	5318	鉄製品	釘	J区包		(長)4.4	(幅)0.5	(厚)0.4					
100	5-35-4	5354	土師質	土錘	SK123		(長)6.0	(幅)2.8	31.54	やや密(～3.0mmの砂粒)	褐灰	10YR5/1		
101	5-35-5	5355	土師質	土錘	SK123		(長)5.0	(幅)2.3	21.03	やや密(～4.0mmの小石)	にぶい黄橙	10YR7/4		
102	5-37-2	5372	弥生土器	広口壺	SD124		22.5			やや密(～4.0mmの小石)	灰黄褐	10YR5/2	口縁部ほぼ完存	
103	5-37-1	5371	弥生土器	壺	SD124					やや粗(～3.0mmの砂粒)	にぶい褐	7.5YR5/3	体部片	
104	5-36-7	5367	弥生土器	細頸壺	SD124					やや粗(～2.0mmの砂粒)	橙	5YR6/6	頸部片	
105	5-36-3	5363	弥生土器	壺	SD124	底径	7.0			やや密(～4.0mmの小石)	灰黄褐	10YR6/2		
106	5-36-4	5364	弥生土器	壺	SD124	底径	4.4			やや密(～3.0mmの砂粒)	橙	7.5YR6/6	底部はほぼ完存	
107	5-36-5	5365	弥生土器	壺	SD124	底径	8.8			やや粗(～3.0mmの砂粒)	灰黄褐	10YR6/2	底部1/4	
108	5-36-6	5366	弥生土器	甕	SD124	底径	5.7			やや密(～5.0mmの小石)	灰黄褐	10YR5/2	底部は完存	
109	5-35-3	5353	弥生土器	甕	SD124	底径	5.0			やや粗(～6.0mmの小石)	にぶい褐	7.5YR5/4	底部は完存	
110	5-35-1	5351	須恵器	杯蓋	K区包		13.0	3.60	やや密	にぶい黄橙	10YR7/4	口縁部わずか		
111	5-35-2	5352	須恵器	転用硯	K区包				密	灰	N6/0			
112	5-35-7	5357	土師質	土錘	K区包		(長)4.5	(幅)2.3	20.67	やや密(～4.0mmの小石)	黄灰	2.5Y5/1		
113	5-35-6	5356	土師質	土錘	K区包		(長)5.8	(幅)2.1	17.91	やや密(～2.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y7/1		
114	5-36-2	5362	土師質	土錘	K区包		(長)5.6	(幅)3.0	44.50	やや密(～2.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y7/1		
115	5-36-1	5361	土師質	土錘	K区包		(長)5.6	(幅)2.6	35.60	やや密	黄灰	2.5Y4/1		
116	6-68-1	6681	弥生土器	中頸壺	SH207		13.1			密(～5.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR6/3	口縁部2/12	
117	6-39-1	6391	弥生土器	中頸壺	SH207					粗(～4.0mmの小石)	黒褐	10YR3/2	体部片	
118	6-50-1	6501	弥生土器	広口壺	SH207		11.4			やや粗(～3.5mmの小石・砂粒)	にぶい橙	5YR7/4	口縁部4/12	
119	6-69-1	6691	弥生土器	広口壺	SH207	体部径	40.0			密(～2.5mmの砂粒)	橙	7.5YR7/6	体部片	
120	6-50-2	6502	弥生土器	壺	SH207	底径	8.3			やや粗(～4.0mmの小石・砂粒)	浅黄橙	7.5YR8/4	底部完存	
121	6-86-4	6864	弥生土器	細頸壺	SH207					密(～5.0mmの砂粒)	灰黄褐	10YR6/2	体部片	
122	6-69-2	6692	弥生土器	細頸壺	SH207	体部径	18.0			密(～2.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/3	体部片	
123	6-36-3	6363	弥生土器	甕	SH207		21.0			粗(～5.0mmの砂粒)	灰黄褐	10YR5/2	口縁部1/6	
124	6-38-1	6381	弥生土器	甕	SH207		21.2			やや密(～2.0mmの砂粒)	黄灰	2.5Y5/1	口縁部1/12	外面に煤付着
125	6-70-1	6701	弥生土器	甕	SH207		12.4			粗(～5.0mmの小石)	にぶい橙	5YR6/4	口縁部8/12	外面に煤付着

第12表 遺物観察表

報告 番号	R No.	仮番号	質	器形	遺構	計測値			胎土	色調	残存	特記事項	
						口径 (cm)	器高 (cm)	重量 (g)					
126	6-70-1	6701	弥生土器	甕	SH207	底径	6.0		粗(～5.0mmの小石)	にぶい橙	5YR6/4	底部完存	No.125と同一個体の可能性あり
127	6-48-2	6482	弥生土器	甕	SH207		21.1		粗(～4.0mmの砂粒)	橙	5YR6/6	口縁部1/4	
128	6-37-3	6373	弥生土器	甕	SH207				やや粗(～4.0mmの砂粒)	灰褐	7.5YR6/2	口縁部小片	
129	6-37-2	6372	弥生土器	甕	SH207		15.1		やや密(～2.5mmの砂粒)	灰褐	7.5YR6/2	口縁部1/4	
130	6-68-2	6682	弥生土器	甕	SH207		10.7		密(～2.0mmの砂粒)	褐灰	10YR4/1	口縁部3/12	
135	6-39-2	6392	弥生土器	広口壺	SH230				粗(～5.0mmの小石)	褐灰	10YR6/1	口縁部小片	
136	6-60-6	6606	弥生土器	甕	SH230				粗(～2.0mmの砂粒)	灰褐	7.5YR4/2	体部片	
142	6-35-2	6352	弥生土器	細頸壺	SH303		8.9		粗(～3.0mmの砂粒)	橙	7.5YR6/6	口縁部片	
143	6-85-1	6851	弥生土器	細頸壺	SH303				密	にぶい黄褐	10YR5/3	体部片	
144	6-84-2	6842	弥生土器	細頸壺	SH303				密	灰黄褐	10YR6/2	体部片	
145	6-40-1	6401	弥生土器	甕	SH303		26.0		粗(～3.0mmの砂粒)	にぶい褐	7.5YR6/3	口縁部6/12	
146	6-40-2	6402	弥生土器	壺	SH303	底径	4.2		粗(～4.0mmの小石)	灰黄	2.5Y7/2	底部のみ完存	
147	6-35-3	6353	弥生土器	広口壺	SH311		17.8		粗(～3.0mmの砂粒)	浅黄橙	10YR8/3	口縁部1/2	口縁内面に瘤状突起4方(3方向残)
148	6-36-1	6361	弥生土器	細頸壺	SH311		10.3		粗(～2.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/2	口縁部2/3	
149	6-37-1	6371	弥生土器	壺	SH311	底径	5.8		粗(～2.5mmの砂粒)	にぶい橙	2.5Y6/4	底部完存	
150	6-36-2	6362	弥生土器	甕	SH311				粗(～3.0mmの砂粒)	灰黄褐	10YR6/2	口縁部小片	
154	6-31-5	6315	弥生土器	甕	SK201				やや粗(～2.5mmの砂粒)	灰白	10YR8/2	口縁部片	
155	6-34-4	6344	弥生土器	細頸壺	SK204		10.4		やや粗(～2.5mmの砂粒)	浅黄橙	10YR8/3	口縁部1/4	
156	6-56-4	6564	土師質	土錘	SK205	(長)4.5	(幅)1.3	5.7	密	暗灰	N3/0		
157	6-56-5	6565	土師質	土錘	SK205	(長)2.8	(幅)1.5	2.0	密	黒	7.5YR2/1		
159	6-32-1	6321	弥生土器	甕	SK211		23.0		粗(～2.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/2	口縁部5/12	外面に煤付着
160	6-28-4	6284	弥生土器	甕	SK221				粗(～4.0mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/4	口縁部片	
161	6-33-2	6332	弥生土器	広口壺	SK223		15.1		やや粗(～1.5mmの砂粒)	灰黄褐	10YR6/2	口縁部1/4	
162	6-47-1	6471	弥生土器	甕	SK223		25.0		粗(～2.5mmの砂粒)	にぶい橙	5YR6/4	口縁部1/3	外面に煤付着
163	6-31-1	6311	弥生土器	甕	SK233		26.0		粗	にぶい橙	7.5YR7/4	口縁部1/5	
164	6-35-1	6351	弥生土器	甕	SK233		40.0		粗(～5.0mmの砂粒)	橙	2.5YR6/6	口縁部1/6	外面に煤付着 内面に炭化物付着
166	6-30-1	6301	弥生土器	細頸壺	SK238		10.8		粗(～2.0mmの砂粒)	黒褐	10YR3/2	口縁部ほぼ完存	
167	6-84-3	6843	弥生土器	壺	SK238				密	灰黄褐	10YR5/2	体部片	No.166と同一個体か
168	6-69-3	6693	弥生土器	壺	SK238				密(～2.5mmの砂粒)	灰黄褐	10YR6/2	体部片	No.166と同一個体か
169	6-69-3	6693	弥生土器	壺	SK238				密(～2.5mmの砂粒)	灰黄褐	10YR6/2	体部片	No.166と同一個体か
170	6-29-2	6292	弥生土器	壺	SK238		8.1		粗(～3.0mmの砂粒)	橙	7.5YR6/6	底部完存	
171	6-30-6	6306	弥生土器	甕	SK239				粗(～2.5mmの砂粒)	にぶい褐	7.5YR6/3	口縁部片	
172	6-30-5	6305	弥生土器	甕	SK239				粗(～4.0mmの小石)	浅黄橙	7.5YR8/3	口縁部片	
173	6-29-1	6291	弥生土器	甕	SK240		28.1		粗(～2.0mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/4	口縁部1/5	
175	6-27-4	6274	弥生土器	細頸壺	SK242		10.0		粗(～3.0mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/4	口縁部片	
176	6-31-3	6313	弥生土器	甕	SK242				粗(～4.0mmの小石)	黒褐	10YR3/2	口縁部片	
179	6-71-1	6711	弥生土器	広口壺	SK244	底径	6.0		粗(～5.0mmの小石)	明赤褐	5YR5/6	底部完存	
180	6-46-1	6461	弥生土器	広口壺	SK244	底径	6.0		粗(～5.0mmの小石)	黒	10YR1/2	底部2/3	
181	6-73-1	6731	弥生土器	甕	SK244		19.6	18.60	密(～2.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR6/3	口縁部2/12	内面に炭化物付着
182	6-74-1	6741	弥生土器	甕	SK244		26.8	24.70	密(～3.0mmの砂粒)	灰黄褐	10YR5/2	口縁部2/12	外面に一部煤付着
183	6-77-1	6771	弥生土器	甕	SK244		21.0		粗(～2.0mmの砂粒)	灰黄褐	10YR4/2	口縁部7/12	外面に煤付着
184	6-77-1	6771	弥生土器	甕	SK244	底径	6.0		粗(～2.0mmの砂粒)	灰黄褐	10YR4/2	底部完存	No.183と同一個体
185	6-33-1	6331	弥生土器	甕	SK244		20.2		粗(～2.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/3	口縁部1/3	
186	6-76-1	6761	弥生土器	甕	SK244		30.3		やや密(～2.0mmの砂粒)	灰黄褐	10YR5/2	口縁部2/12	外面に煤付着
187	6-32-3	6323	弥生土器	甕	SK244				粗(～1.5mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR6/3	口縁部片	
188	6-32-2	6322	弥生土器	甕	SK244				粗(～1.5mmの砂粒)	褐灰	10YR5/1	口縁部片	
189	6-30-2	6302	弥生土器	甕	SK244	底径	5.9		粗(～5.0mmの小石)	灰黄褐	10YR6/2	底部完存	底部に穿孔
190	6-78-1	6781	弥生土器	広口壺	SK252		17.1		粗(～3.0mmの砂粒)	橙	2.5YR6/6	口縁部6/12	口縁内部に突起あり(2ヶ所確認)
191	6-54-4	6544	弥生土器	甕	SK253	底径	5.6		粗(～3.0mmの砂粒)	灰褐	7.5YR5/2	底部完存	
192	6-55-2	6552	弥生土器	壺	SK253	底径	5.8		粗(～7.0mmの小石)	にぶい橙	7.5YR6/4	底部完存	
193	6-30-7	6307	土師質	土錘	SK253	(長)3.7	(幅)1.1	3.2	やや粗(～1.0mmの微砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/2		
194	6-31-4	6314	弥生土器	甕	SK260				粗(～2.5mmの砂粒)	浅黄橙	7.5YR8/4	口縁部片	
195	6-27-5	6275	弥生土器	甕	SK260	底径	5.8		粗(～3.0mmの砂粒)	にぶい橙	5YR6/4	底部完存	底部に焼成後穿孔
196	6-75-1	6751	弥生土器	甕	SK275		33.2		やや粗	橙	7.5YR6/6	口縁部4/12	体部に一対瘤状隆起
197	6-72-1	6721	弥生土器	広口壺	SK275		14.7		粗(～3.0mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/4	口縁部2/12	
198	6-57-1	6571	弥生土器	甕	SK277				粗(～2.5mmの砂粒)	灰褐	7.5YR6/2	全体に少量	
199	6-79-1	6791	弥生土器	壺	SK277	底径	7.0		粗(～10.1mmの小石)	にぶい橙	7.5YR7/4	底部完存	
200	6-31-2	6312	弥生土器	甕	SK284		26.0		粗(～3.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/2	口縁部1/4	
201	6-33-3	6333	弥生土器	甕	SK284				粗(～1.5mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR6/4	口縁部片	
202	6-27-3	6273	弥生土器	甕	SK284				粗(～2.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/2	口縁部片	
204	6-72-2	6722	弥生土器	広口壺	SK285		21.1		粗(～5.0mmの小石・砂粒)	橙	5YR7/6	口縁部6/12	

第13表 遺物観察表

報告 番号	R No.	仮番号	質	器形	遺構	計測値			胎土	色調	残存	特記事項	
						口径 (cm)	器高 (cm)	重量 (g)					
205	6-13-4	6134	弥生土器	広口壺	SK288				粗(～4.0mmの小石)	にぶい黄橙	10YR7/3	口縁部片	口縁内面に瘤状突起
206	6-81-2	6812	弥生土器	広口壺	SK288				やや粗(～4.0mmの小石・砂粒)	褐灰	7.5YR4/1	体部片	
207	6-16-2	6162	弥生土器	甕	SK288				やや粗(～2.0mmの砂粒)	黄橙	7.5YR7/8	口縁部片	
208	6-58-1	6581	弥生土器	甕	SK288		23.1		粗(～4.0mmの砂粒)	にぶい褐	7.5YR6/3	口縁部1/4	
209	6-16-1	6161	弥生土器	甕	SK288				やや粗(～2.0mmの砂粒)	にぶい黄	2.5Y6/4	口縁部片	
210	6-58-2	6582	弥生土器	甕	SK288		26.0		粗(～3.0mmの砂粒)	にぶい褐	7.5YR6/3	口縁部1/8	
211	6-23-1	6231	弥生土器	甕	SK288		27.1		やや粗(～3.0mmの砂粒・小石)	暗灰黄	2.5Y5/2	口縁部4/12	外面に煤付着
212	6-24-1	6241	弥生土器	甕	SK288		33.0		やや粗(～1.5mm小石・雲母)	オリーブ黒	5Y3/1	口縁部3/12	
213	6-45-1	6451	弥生土器	甕	SK288		20.8		粗(～3.5mmの小石・砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/3	口縁部4/5	
214	6-56-1	6561	弥生土器	甕	SK292		26.0		粗(～5.0mmの小石)	浅黄橙	10YR8/3	口縁部1/6強	
215	6-55-1	6551	弥生土器	甕	SK304		26.0		粗(～3.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/3	口縁部1/2	外面に煤付着
216	6-34-3	6343	弥生土器	壺	SK304	底径	7.8		粗(～5.0mmの小石・砂粒)	褐灰	10YR5/1		
217	6-28-1	6281	弥生土器	甕	SK307		34.2		粗(～3.0mmの砂粒)	浅黄橙	10YR8/3	口縁部1/7	
218	6-23-3	6233	弥生土器	甕	SK309				やや粗(～4.0mmの小石)	にぶい黄橙	10YR6/3	口縁部片	
219	6-23-2	6232	弥生土器	甕	SK309				やや粗(～3.5mmの小石・砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/3	口縁部片	
220	6-15-3	6153	弥生土器	甕	SK309	底径	5.7		粗(～4.0mmの小石・砂粒)	橙	5YR6/8	底部完存	焼成後底部穿孔
221	6-11-5	6115	弥生土器	小形壺	SK309	底径	5.8		粗(～3.0mmの砂)	灰白	10YR8/1	底部は完存	一部赤彩か
222	6-15-1	6151	弥生土器	壺	SK309	底径	7.8		粗(～8.0mmの小石・砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/3	底部完存	
224	6-55-3	6553	弥生土器	壺	SK310	底径	6.6		粗(～5.5mmの小石)	にぶい橙	7.5YR6/4	底部完存	
225	6-14-1	6141	弥生土器	広口壺	SK312		16.2		粗(～8.0mmの小石)	にぶい橙	7.5YR7/4	口縁部片	口縁内面に瘤状突起
226	6-19-1	6191	弥生土器	広口壺	SK312		25.0		粗(～3.0mmの砂粒)	橙	5YR6/6	口縁部のみ残存	口縁内面に瘤状突起
227	6-17-1	6171	弥生土器	広口壺	SK312		17.0		やや密(～4.0mmの砂粒)	浅黄橙	10YR8/4	口縁部1/8	
228	6-18-1	6181	弥生土器	広口壺	SK312		18.7		粗(～2.0mmの砂粒)	にぶい橙	5YR6/4	口縁部3/4	口縁内部に突起あり
229	6-80-1	6801	弥生土器	広口壺	SK312				やや粗(～3.0mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/4	体部片	
230	6-15-2	6152	弥生土器	壺	SK312	底径	6.1		粗(～4.0mmの小石・砂粒)	黄橙	7.5YR7/8	底部完存	
232	6-25-1	6251	弥生土器	広口壺	SK314		16.0		やや粗(～5.0mmの砂粒・小石)	橙	5YR6/6	全体の3/12	口縁内面に瘤状突起
233	6-26-1	6261	弥生土器	鉢	SK314		26.7		粗(～3.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/2	口縁部1/4	
234	6-54-5	6545	弥生土器	甕	SK314				やや粗(～2.0mmの砂粒)	にぶい褐	7.5YR6/3	口縁部片	
235	6-56-3	6563	弥生土器	甕	SK314	底径	6.3		やや粗(～5.0mmの小石)	にぶい橙	5YR6/4	底部完存	底部に木の葉痕跡
238	6-55-4	6554	弥生土器	壺	SK316	底径	6.0		粗(～3.5mmの小石)	にぶい黄橙	10YR7/2	底部完存	
239	6-28-3	6283	弥生土器	甕	SK316	底径	7.0～7.3		粗(～3.0mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/4	底部ほぼ完存	
240	6-56-2	6562	弥生土器	甕	SK316	底径	8.0		やや粗(～4.5mmの小石)	にぶい橙	7.5YR7/3	底部完存	
241	6-55-5	6555	弥生土器	壺	SK326		20.0		粗(～2.0mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/3	口縁部1/6	
242	6-84-1	6841	弥生土器	壺	SK326	体部径	24.0		密(～2.5mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR6/3	体部片	
243	6-49-2	6492	弥生土器	甕	SK326		23.2		やや粗(～1.0mmの砂粒)	灰褐	7.5YR4/2	口縁部6/12	外面に煤付着
245	6-13-3	6133	弥生土器	甕	SD313				粗(～4.0mmの小石)	にぶい黄橙	10YR7/3	口縁部片	
246	6-8-5	685	弥生土器	壺	SD317	底径	5.6		やや密(～5.0mmの小石)	浅黄橙	10YR8/3	底部完存	
247	6-80-2	6802	弥生土器	壺	SD340				やや粗(～3.0mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/4	体部片	胴部に刻目隆帯
248	6-13-2	6132	弥生土器	甕	SD340				粗(～3.0mmの砂粒)	にぶい橙	5YR6/4	口縁部片	
253	6-57-2	6572	弥生土器	小形甕	C13p3		15.3		粗(～5.0mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/4	口縁部1/3	
254	6-62-1	6621	弥生土器	甕	E13p3		23.1		粗(～2.0mmの砂粒)	灰黄褐	10YR6/2	口縁部3/12	
255	6-45-2	6452	土師器	直口壺	SK222		15.2		やや密(微砂粒)	浅黄橙	7.5YR8/6	口縁部2/3	
256	6-68-3	6683	土師器	小形丸底鉢	SK222	体部径	6.5		密(～1.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/3	体部5/12	
257	6-46-2	6462	土師器	S字甕	SK222	底径	9.1		やや密	橙	2.5YR6/6	底部4/5	
258	6-30-4	6304	須恵器	杯身	SK241		10.5	3.70	やや密(～2.5mmの砂粒)	灰白	N7/0	口縁部1/3	
259	6-54-6	6546	土師器	手捏ね土器	SK307		2.1	1.95	やや密(～2.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/3	口縁部残少量	
260	6-34-5	6345	土師器	杯	SE327		11.8	4.40	やや密(～1.5mmの砂粒)	明褐	7.5YR5/6	口縁部小片	底部にへら？木の葉痕あり
261	6-51-2	6512	土師器	杯	SE327		11.3	4.00	やや粗(～3.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/3	口縁部小片	底部に木の葉痕？あり
262	6-51-1	6511	土師器	杯	SE327		13.2	2.70	やや密	にぶい黄橙	10YR7/2	口縁部7/8	
350	6-30-3	6303	土師器	椀	SB344	底径	8.3		やや密(～1.5mmの微砂粒)	にぶい橙	5YR7/4	底部完存	
351	6-62-7	6627	土師質	土鉢	SB344	残存	(長)2.7 (幅)1.0	2.7	やや粗(～1.0mmの砂粒)	黄灰	2.5Y6/1		
352	6-62-6	6626	土師質	土鉢	SB344	残存	(長)4.5 (幅)1.4	7.6	密	にぶい橙	5YR6/4		
353	6-60-7	6607	須恵器	杯	SB345		13.0	4.45	密	灰白	N7/0	口縁部2/12	
354	6-60-5	6605	土師器	甕	SB345				やや粗(～1.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/1	口縁部片	
355	6-60-3	6603	土師器	皿	SB345		17.0	2.35	やや密(～1.0mmの砂粒)	橙	5YR7/6	口縁部2/12	
356	6-88-3	6883	鉄製品	釘	SB345	残存	(長)4.9 (幅)0.4 (厚)0.3						
357	6-57-3	6573	黒色土器	鉢	SB349		23.6	7.35	やや密(～5.0mmの砂粒)	橙	5YR6/6	口縁部1/4	
358	6-82-3	6823	緑釉陶器	椀	SE266	高台径	7.2		やや密(～2.0mmの砂粒)	灰オリーブ	7.5Y5/3	底部残少量	
359	6-32-4	6324	土師器	甕	SK270				やや密	褐灰	10YR4/1	口縁部片	

第14表 遺物観察表

報告 番号	R No.	仮番号	質	器形	遺構	計測値			胎土	色調	残存	特記事項	
						口径 (cm)	器高 (cm)	重量 (g)					
360	6-8-1	681	土師器	甕	SD208				やや密(~1.0mmの砂粒・雲母)	橙	5YR7/6	口縁部片	
361	6-81-1	6811	須恵器	提瓶	SD208				やや密	灰白	N7/0	体部片	
362	6-7-6	676	土師器	甕	SD209		13.4		やや粗(3.0mmの小石・砂粒・雲母)	にぶい黄橙	10YR7/3	口縁部2/12	
363	6-8-2	682	土師器	甕	SD209		16.2		密(~1.0mmの砂粒・小石・雲母)	橙	2.5YR7/6	口縁部2/12	
364	6-7-7	677	土師器	杯	SD209		14.8	2.00	やや密(~1.0mmの砂粒)	橙	7.5YR7/6	全体の3/12	
365	6-7-3	673	土師器	杯	SD237		12.8		やや密(~1.0mmの砂粒)	橙	5YR7/6	口縁部4/12	
366	6-7-4	674	土師器	杯	SD237		14.0	2.70	やや密(~1.0mmの砂粒・2.5mmの小石)	橙	5YR7/6	全体の6/12	
367	6-7-5	675	土師器	甕	SD237		18.0		やや密(~1.5mmの砂粒・小石)	にぶい黄橙	10YR7/3	全体の2/12	
368	6-11-1	6111	灰釉陶器	椀	SD262	高台径	8.8		密	灰白	2.5Y7/1	高台部1/8	底面に判読不明墨痕
369	6-11-3	6113	灰釉陶器	椀	SD262		16.2	4.70	やや密	灰白	10YR8/2	口縁部3/8弱	生焼け
370	6-12-2	6122	黒色土器	椀	SD262		15.2		密	浅黄橙	10YR8/3	口縁部残りわずか	
371	6-11-4	6114	土師器	甕	SD262		17.8		密	灰白	2.5Y8/1	口縁部1/4	
372	6-14-3	6143	土師質	土錘	SD279		(長)5.1 (幅)2.0	22.2	やや粗(~2.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/1		
373	6-27-1	6271	須恵器	杯	SE324		12.1	3.50	やや粗(~2.0mmの砂粒)	褐灰	10YR6/1	口縁部1/9	
374	6-27-2	6272	灰釉陶器	椀	SE324		16.3		密	(釉)灰白-灰(素地)灰白	2.5GY7/1 N8/0	口縁部1/4	
376	6-16-3	6163	灰釉陶器	椀	SD279		15.3	4.60	密	灰白	2.5Y7/1	口縁部1/4	底面墨書「大」
377	6-8-4	684	灰釉陶器	椀	SD279	高台径	7.2		密(微砂粒)	灰白	N8/0	高台部完存	底面墨書「●」
378	6-9-3	693	灰釉陶器	椀	SD279		16.6		密	(釉)灰白-灰(素地)灰白	5Y6/2 N7/0	口縁部1/4	
379	6-9-1	691	灰釉陶器	椀	SD279		13.4	4.20	密	(釉)灰白(素地)灰白	2.5Y8/1 5Y8/1	口縁部1/2	
380	6-8-3	683	灰釉陶器	椀	SD279	高台径	7.2		密	灰白	5Y7/1	高台部残6/12	
381	6-9-4	694	口土師器	皿	SD279		13.4		やや密	灰白	10YR8/2	口縁部1/4	
382	6-9-5	695	口土師器	台付皿	SD279		16.3	5.10	やや密	にぶい黄橙	10YR7/2	口縁部1/2	
383	6-12-4	6124	緑釉陶器	椀	SD279	高台径	8.0		密	(釉)灰白-灰(素地)灰	7.5Y4/2 5Y5/1	高台部1/4	
384	6-12-3	6123	黒色土器	椀	SD279		15.2		密	灰白	10YR8/2	口縁部1/5	
385	6-12-1	6121	黒色土器	椀	SD279	高台径	7.4		密	灰白	10YR8/2	高台部は完存	
386	6-9-6	696	黒色土器	椀	SD279		15.4		やや密	浅黄橙	10YR8/3	口縁部1/2弱	
387	6-11-2	6112	土師器	皿	SD279		11.9	2.00	密(~2.0mmの砂)	灰白	10YR8/1	口縁部9/16	
388	6-47-3	6473	土師器	杯	SD279		10.7	2.75	密(~1.0mmの砂粒)	浅黄橙	7.5YR8/4	口縁部2/3	
389	6-10-3	6103	土師器	杯	SD279		12.4		やや密	浅黄橙	10YR8/3	口縁部1/3	
390	6-10-4	6104	土師器	杯	SD279		12.4		やや密(微砂粒)	灰白	2.5Y8/2	口縁部1/3	
391	6-10-5	6105	土師器	杯	SD279		12.3	3.60	やや密	灰白	10YR8/2	口縁部1/4	
392	6-10-1	6101	土師器	甕	SD279		23.2		やや密(微砂粒)	浅黄橙	10YR8/3	口縁部1/4	
393	6-10-2	6102	土師器	甕	SD279		14.0		やや密(微砂粒)	浅黄橙	7.5YR8/4	口縁部1/4	
394	6-60-2	6602	土師器	皿	C-E3p1		16.8	2.05	やや密	浅黄橙	7.5YR8/4	口縁部6/12	
395	6-62-2	6622	土師器	甕	C-E3p1		18.0		やや密	にぶい橙	5YR7/4	口縁部4/12	
396	6-60-4	6604	土師器	甕	C-E3p1		12.8		やや粗(~2.0mmの砂粒)	黒褐	7.5YR3/1	口縁部3/12	
397	6-59-5	6595	黒色土器	椀	C-D10p23	高台径	7.0		密(~1.0mmの砂粒)	にぶい橙	5YR7/4	高台部1/8	
398	6-59-2	6592	黒色土器	椀	C-D10p23		16.0		密(~1.5mmの砂粒)	橙	5YR6/6	口縁部1/2強	
399	6-59-4	6594	土師器	小皿	C-D10p23				密(~1.5mmの砂粒)	橙	5YR7/6	全体に残少量	
400	6-59-3	6593	土師器	杯	C-D11p6				密(~1.0mmの砂粒)	橙	5YR7/6	全体に残少量	
401	6-61-3	6613	陶器	小椀	SB352		9.0	2.70	密	灰白	2.5Y7/1	口縁部5/12	
402	6-54-3	6543	口土師器	小皿	SK250		9.6	1.70	やや密(~1.5mmの砂粒)	淡橙	5YR8/4	口縁部ほぼ完存	
403	6-54-2	6542	口土師器	小皿	SK250		9.5	1.70	やや密(~1.5mmの砂粒)	灰白	10YR8/1	口縁部完存	
404	6-54-1	6541	陶器	山茶椀	SK250		16.4	5.30	やや密(~7.0mmの砂粒・小石)	灰白	N8/0	口縁部ほぼ完存	
405	6-28-2	6282	土師器	杯	SE258		11.6	2.20	やや密	橙	5YR7/6	口縁部1/4	
406	6-51-3	6513	陶器	山茶椀	SE259		16.0	5.40	密	灰白	5Y7/1	口縁部1/10	粗殺痕
407	6-53-1	6531	陶器	山茶椀	SE259		15.7	5.50	やや密	灰	N6/0	高台部は完存	粗殺痕 内面に煤付着
408	6-52-2	6522	陶器	山茶椀	SE259		15.8	5.00	やや密(~3.0mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	高台部1/2	粗殺痕
409	6-86-3	6863	陶器	山茶椀	SE259		16.1	4.60	密(~2.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部1/12	猿投・知多
410	6-86-2	6862	陶器	山茶椀	SE259	高台径	7.1		密(~1.0mmの砂粒)	灰黄	2.5Y7/2	高台部完存	
411	6-52-3	6523	陶器	山茶椀	SE259		14.5	5.70	密	灰白	N8/0	口縁部1/2弱	
412	6-53-5	6535	陶器	小椀	SE259		9.2	2.80	やや密(~1.5mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/1	口縁部1/3	粗殺痕
413	6-53-6	6536	陶器	小椀	SE259		8.3	2.30	密	灰白	2.5Y8/1	口縁部3/4	
414	6-86-1	6861	陶器	小皿	SE259		8.7	2.20	密(~1.5mmの砂粒)	灰白	N7/0	口縁部4/12	渾美 内面に漆付着
415	6-52-1	6521	陶器	鉢	SE259		32.0	12.00	やや密(~4.0mm小石・砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部1/6	
416	6-53-2	6532	陶器	小壺	SE259		7.7	10.70	密	灰白	5Y7/1		
417	6-53-3	6533	土師器	杯	SE259		15.1	3.80	密	灰白	2.5Y8/2	口縁部1/2	
418	6-53-4	6534	土師器	杯	SE259		14.5		やや密(微砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/2	口縁部1/3	

第15表 遺物観察表

報告 番号	R No.	仮番号	質	器形	遺構	計測値			胎土	色調	残存	特記事項		
						口径 (c m)	器高 (c m)	重量 (g)						
419	6-34-1	6341	陶器	小皿	SE263		8.6	2.40		密	灰白		口縁部完存	
420	6-34-2	6342	陶器	小碗	SE263		8.5	2.60		やや密(～2.5mmの砂粒)	灰白		口縁部完存	砂痕
421	6-38-2	6382	コロ土師器	杯	SK265		13.1	3.40		やや密(～1mmの砂粒)	灰黄褐	10YR6/2	口縁部1/4	
422	6-38-3	6383	陶器	山茶碗	SK265		15.6	5.30		やや粗	灰白	2.5Y7/1	口縁部1/2	粗穀痕
423	6-36-4	6364	陶器	小碗	SK265		9.3	2.90		密(～1.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部1/2	粗穀痕
425	6-78-2	6782	土師器	杯	SX286		15.0～15.5	3.90		やや密	浅黄橙	7.5YR8/3	口縁部ほぼ完存	
426	6-78-3	6783	土師器	杯	SX286		14.3～14.6	3.30		やや粗(～2.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/2	口縁部10/12	
427	6-80-3	6803	陶器	山茶碗	SD256		16.0	4.70		密	灰白	N8/0	口縁部1/12	猿投・知多
428	6-9-2	692	灰釉陶器	碗	SD256		16.7	6.50		密	(釉)灰白 (素地)灰黄	5Y7/1 2.5Y7/2	口縁部1/5	
429	6-88-7	6887	鉄製品	釘	SD237		(長)7.0	(幅)0.7	(厚)0.5					
430	6-61-2	6612	陶器	山茶碗	C-C10p13		16.2	5.60		密	灰白	5Y7/1	口縁部2/12	
431	6-61-1	6611	陶器	山茶碗	C-C10p13		16.1～16.8	6.00		やや密(～3.0mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部ほぼ完存	粗穀痕
432	6-57-4	6574	土師器	鍋	C-C11p1					やや粗(～1.5mmの砂粒)	にぶい褐	7.5YR6/3	全体に残少量	外面に煤付着
433	6-58-3	6583	土師器	杯	C-C11p1					密(～1.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/2	全体に残少量	
434	6-61-4	6614	コロ土師器	小皿	C-B12p4		9.6	1.90		やや密(微砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/2	口縁部6/12弱	
435	6-62-5	6625	土師質	土錘	C-D10p18		(長)4.2	(幅)1.1	4.2	やや密	にぶい黄橙	10YR7/3		
436	6-62-4	6624	土師質	土錘	C-D10p6		(長)4.1	(幅)1.1	4.6	やや密(微砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/4		
437	6-59-1	6591	土師器	鍋	C-C10p6		24.0			やや密(～2.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR6/3	口縁部1/7	外面に煤付着
438	6-61-6	6616	土師器	小皿	C-B12p4		10.0			やや密	灰白	2.5Y7/1	口縁部2/12	
439	6-62-3	6623	土師器	小皿	C-D10p2		10.3	1.70		やや密(微砂粒)	橙	5YR7/6	口縁部8/12	
440	6-61-5	6615	コロ土師器	小皿	C-B11p2		10.0	2.00		やや密	灰白	2.5Y7/1	口縁部小片	
441	6-83-1	6831	縄文土器	深鉢	L区包					粗(～3.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/2	口縁部片	縄文後期堀之内2式
442	6-83-3	6833	縄文土器	深鉢	L区包					粗(～2.5mmの砂粒)	灰黄褐	10YR4/2	体部?片	縄文後期堀之内2式 口縁直下刻目隆帯
443	6-82-1	6821	弥生土器	壺	L区包					やや粗(～4.0mmの小石)	にぶい黄橙	10YR6/3	体部片	刻目隆帯
444	6-43-1	6431	弥生土器	広口壺	L区包		22.0			粗(～5.5mmの小石)	浅黄橙	10YR8/3	口縁部1/2	口縁内面に瘤状突起
445	6-48-3	6483	弥生土器	細頸壺	L区包		9.0			粗(～3.0mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/4	口縁部1/3	
446	6-83-4	6834	弥生土器	壺	L区包	体部径	16.0			やや粗(～4.0mmの小石)	にぶい黄橙	10YR6/3	体部片	
447	6-60-1	6601	弥生土器	甕	L区包					やや粗(～2.0mmの砂粒)	浅黄橙	7.5YR8/4	口縁部片	
448	6-44-1	6441	弥生土器	甕	L区包		21.6			粗(～4.0mmの小石)	橙	7.5YR6/6	口縁部わずか	
449	6-13-1	6131	弥生土器	甕	L区包					粗(～3.0mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/4	口縁部片	
450	6-48-1	6481	弥生土器	甕	L区包		19.8			粗(～3.0mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR6/4	口縁部1/3	外面に煤付着
451	6-43-2	6432	弥生土器	甕	L区包		8.1			粗(～5.0mmの小石)	にぶい橙	5YR7/4	底部完存	
452	6-42-1	6421	弥生土器	甕	L区包	底径	6.5			やや粗(～2.0mmの砂粒)	褐灰	10YR4/1	底部完存	底部に木の葉圧痕あり
453	6-44-2	6442	弥生土器	甕	L区包	底径	6.3			粗(～5.0mmの小石)	にぶい橙	7.5YR7/4	底部完存	
461	6-44-3	6443	須恵器	甕	SE327	体部径	9.2			やや粗(～1.5mmの微砂粒)	灰	N6/	体部は完存	一方透かしあり
462	6-42-5	6425	須恵器	杯身	L区包		10.6	3.60		密	灰白	N7/0	口縁部5/12	
463	6-41-2	6412	土師器	甕	L区包		16.0			やや粗(～2.0mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/4	口縁部1/8	
464	6-41-5	6415	土師器	甕	L区包		16.7			やや密(～2.0mmの砂粒)	橙	2.5YR7/6	口縁部1/4	
465	6-41-7	6417	土師器	甕	L区包					やや粗(～2.0mmの砂粒)	浅黄橙	10YR8/3	口縁部片	
466	6-41-3	6413	土師質	土錘	L区包		(長)6.1	(幅)2.7	40.5	やや密	褐灰	10YR5/1		
467	6-41-4	6414	土師質	土錘	L区包		(長)4.85	(幅)1.3	6.5	やや密	浅黄橙	7.5YR8/4		
468	6-41-1	6411	土師器	皿	L区包		20.1	2.80		やや密(～2.0mmの砂粒)	橙	5YR7/6	口縁部1/5	
469	6-41-6	6416	土師器	杯	L区包		12.5	1.90		やや粗(～2.0mmの砂粒)	橙	5YR7/6	口縁部1/5	
470	6-43-4	6434	土師器	杯	L区包		13.6			やや密(～1.5mmの微砂粒)	橙	5YR7/6	口縁部1/4	
471	6-42-4	6424	土師器	杯	L区包		14.2	3.10		やや密	灰白	10YR8/2	口縁部2/12	
472	6-82-2	6822	陶器	山茶碗	L区包		18.2	5.30		密(～1.5mmの微砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部残少量	猿投系
473	6-42-6	6426	陶器	小碗	L区包		9.1	2.70		密(5.0mmの小石一つ)	灰白	N8/0	口縁部3/12	粗穀痕
474	6-42-7	6427	須恵器	杯身	L区包		12.1	3.30		密	灰白	N7/0	口縁部1/12	杯蓋の可能性もあり
475	6-43-3	6433	土師器	杯	L区包		11.6	3.10		やや密(～2.0mmの砂粒)	橙	2.5YR6/6	口縁部2/3	
476	6-42-3	6423	土師器	小皿	L区包		10.4	1.50		やや密(～2.0mmの砂粒)	浅黄橙	7.5YR8/4	口縁部3/12	
477	6-42-2	6422	土師器	小皿	L区包		9.5	1.55		密	浅黄橙	10YR8/3	口縁部5/12	
478	5-27-1	5271	陶器	山茶碗	SE129		17.0	5.70		やや密	灰白	7.5Y8/1	口縁部9/12	粗穀痕 知多・猿投
479	5-27-3	5273	陶器	山茶碗	SE129	高台径	6.8			やや粗(～2.0mmの砂粒)	灰白	N7/0		粗穀痕 猿投・瀬戸
480	5-27-4	5274	陶器	山茶碗	SE129	高台径	9.1			やや密	灰白	N8/0	高台部6/12	猿投・瀬戸 内面一部研磨
481	5-28-6	5286	陶器	小皿	SK131		8.6	1.80		やや粗(～3.0mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	完形	知多・猿投
482	5-28-1	5281	土師器	鍋	SD140		12.7			やや粗	明褐灰	7.5YR7/2	口縁部2/12	内外面に煤付着
483	5-27-5	5275	陶器	山茶碗	SD140	高台径	7.0			やや密	灰白	N7/0	高台部6/12	粗穀痕 猿投・知多
484	5-28-9	5289	白磁	碗	SD140	底径	6.0			密	(釉)灰白	2.5Y8/2	底部2/12	内外面施釉
485	5-28-4	5284	陶器	山茶碗	SD140	底径	6.2			密	灰白	7.5Y8/1		猿投・知多
486	5-28-8	5288	陶器	小皿	SD140		8.2			密	灰白	N8/0	口縁部3/12	渥美
487	5-32-1	5321	弥生土器	壺	SD146	底径	7.1～7.2			粗(～5.0mm砂粒)	灰白	10YR8/2	底部完存	

第16表 遺物観察表

報告番号	R No.	仮番号	質	器形	遺構	計測値			胎土	色調	残存	特記事項	
						口径 (cm)	器高 (cm)	重量 (g)					
488	5-23-2	5232	土師器	鍋	SK132		24.5		やや密(～1.0mmの砂粒)	にぶい黄褐	10YR4/3	口縁部2/12	南伊勢系
489	5-23-1	5231	土師器	鍋	SK132		27.4		やや密	にぶい黄橙	10YR7/2	口縁部1/12	南伊勢系
490	5-21-2	5212	土師器	鍋	SK132		23.2		やや粗(～1.0mmの砂粒)	浅黄	2.5Y7/3	口縁部2/12	南伊勢系
491	5-23-5	5235	土師器	小皿	SK132		7.7	1.30	やや密	灰白	10YR8/2	口縁部9/12	南伊勢系
492	5-23-4	5234	土師器	皿	SK132		15.1	2.45	やや粗(～2.0mmの砂粒)	浅黄橙	10YR8/3	口縁部2/12	南伊勢系
493	5-23-3	5233	陶器	山茶椀	SK132		16.8		密(～2.0mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部1/12	渥美
494	5-22-1	5221	陶器	山茶椀	SK132	高台径	7.2		密(～4.0mmの小石)	灰白	5Y7/1	高台部完存	渥美
495	5-22-2	5222	陶器	山茶椀	SK132	高台径	7.5		密	灰白	5Y7/1	高台部完存	渥美
496	5-22-5	5225	陶器	山茶椀	SK132	高台径	7.6		やや密	灰白	5Y7/1	高台部ほぼ完存	渥美
497	5-22-3	5223	陶器	山茶椀	SK132	高台径	7.2		やや密(～2.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	高台部完存	渥美
498	5-22-6	5226	陶器	山茶椀	SK132	高台径	7.3		密(～3.0mmの小石)	灰白	5Y7/1	高台部ほぼ完存	渥美
499	5-22-4	5224	陶器	山茶椀	SK132	高台径	8.0		やや密	灰白	2.5Y7/1	高台部8/12	初段痕 知多・猿投
500	5-24-1	5241	陶器	壺	SK132		15.7	36.10				口縁部3/12	渥美
501	5-21-1	5211	陶器	鉢	SK132		29.6	10.90	やや密(～2.0mmの小石・砂粒)	灰	7.5Y5/1	口縁部5/12	
502	5-28-5	5285	陶器	山茶椀	SD150	底径	5.5		密(～4.0mmの小石)	灰白	N8/0	底部7/12	瀬戸・猿投
503	5-27-7	5277	陶器	山茶椀	SD151		16.2	8.60	密(～1.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部2/12	初段痕 知多・猿投
504	5-25-7	5257	陶器	小椀	SR134		10.1	3.20	密(～1.5mmの砂粒)	灰白	N7/0	口縁部2/12	猿投・瀬戸
505	5-25-3	5253	陶器	山茶椀(転用碗)	SR134	高台径	8.0		密(～1.0mmの砂粒)	灰白	N7/0	高台部7/12	渥美
506	5-25-2	5252	土師器	皿	SR134		14.5	3.40	密(～1.0mmの砂粒)	灰褐	7.5YR5/2	口縁部3/12	
507	5-25-4	5254	土師器	小皿	SR134		9.4		密(～1.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/1	口縁部3/12	
508	5-25-5	5255	土師器	小皿	SR134				密(～1.0mmの砂粒)	淡赤橙		口縁部小片	雲出島貫道跡分類b2類
509	5-25-1	5251	土師器	甕	SR134		17.2		密(～2.0mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/4	口縁部1/12	
510	5-26-6	5266	土師質	土製小容器	SR134	長径6.4	短径3.6	2.50	密(～3.0mmの砂粒)	浅黄橙	10YR8/3		
511	5-26-2	5262	陶器	山茶椀	SR136	高台径	8.1		密(～2.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/1	高台部完存	渥美
512	5-26-5	5265	陶器	山茶椀	SR136	高台径	7.3		密(～1.5mmの砂粒)	灰白	N7/0	高台部完存	猿投?
513	5-26-3	5263	陶器	山茶椀	SR136	高台径	7.9		密(～1.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	高台部完存	渥美
514	5-26-1	5261	土師器	皿	SR136		17.3	2.60	密(～3.5mmの砂粒)	にぶい橙	5YR7/4	口縁部2/12	
515	5-26-4	5264	陶器	山茶椀	SR137	高台径	7.7		密(～1.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	高台部6/12	渥美
516	5-27-2	5272	陶器	山茶椀	SR138		15.4		やや密	灰白	N7/0	口縁部4/12	知多・猿投
517	5-29-3	5293	瓦器	椀	SR138	高台径	6.1		密	暗灰	N3/0	高台部2/12	暗文あり
518	5-29-4	5294	緑釉陶器	椀	SR139	底径	6.0		密	(釉)灰白(素地)浅黄橙	10Y5/2 7.5YR8/3	底部2/12	
519	5-27-6	5276	土師器	皿	SR153		16.0		やや密(金雲母含)	浅黄橙	7.5YR8/3	口縁部4/12	
520	5-31-2	5312	土師器	甕	SB162		25.0		密	灰白	10YR8/2	口縁部1/12	
521	5-30-3	5303	陶器	山茶椀	SB162	高台径	7.3～7.8		密	灰白	2.5Y7/1	高台部完存	初段痕 渥美
522	5-31-3	5313	陶器	山茶椀	SB162		16.0		密	灰白	N8/0	口縁部1/12	瀬戸
523	5-31-4	5314	土師器	小皿	SB162		8.5	0.80	密	灰白	10YR8/2	口縁部2/12	南伊勢系 II b型式
524	5-29-2	5292	土師質	土馬	SA166	長さ12	幅4.2		やや粗	浅黄橙	7.5YR8/3	胴体部分残存	
525	5-30-1	5301	陶器	山茶椀	H7p25		15.2	5.20	密(～3.0mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部6/12	初段痕 知多
526	5-31-5	5315	土師器	小皿	H7p25		9.0		密	橙	2.5YR6/6	口縁部3/12	中北勢系
527	5-30-4	5304	陶器	山茶椀	H8p4	高台径	7.5		密	灰白	5Y7/1	高台部7/12	初段痕 渥美
528	5-30-2	5302	陶器	山茶椀	H8p4	高台径	7.0		密(～5.0mmの小石・砂粒)	灰白	5Y7/1	高台部完存	初段痕 知多
529	5-30-5	5305	陶器	山茶椀	H8p4	高台径	6.7		密(～3.0mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	高台部5/12	初段痕 知多
530	5-30-8	5308	陶器	小皿	SA165		8.7	2.00	密(微砂粒)	灰白	N7/0	口縁部9/12	底面墨書「+」猿投・知多
531	5-30-6	5306	陶器	小椀	H11p1		9.3	2.70	密	灰白	N7/0	口縁部4/12	猿投・知多
532	5-27-8	5278	陶器	山茶椀	H3p5	高台径	8.4		やや密	灰白	N8/0	高台部7/12	内面に煤付着 初段痕 知多・猿投
533	5-28-7	5287	土師器	小皿	H6p12		10.1	1.50	やや密	にぶい橙	7.5YR7/3	口縁・底部5/12	
536	5-33-4	5334	縄文土器	深鉢	M区包				粗(～2.0mmの砂粒)	明褐灰	7.5YR7/2	口縁部片	晩期突帯文土器
537	5-33-2	5332	縄文土器	深鉢	M区包				粗(～3.0mmの砂粒)	暗灰	N3/0	口縁部片	晩期突帯文土器
538	5-33-3	5333	縄文土器	深鉢	M区包				粗(～2.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/2	口縁部片	晩期突帯文土器
539	5-33-5	5335	縄文土器	深鉢	M区包				粗(～5.0mmの砂粒)	にぶい褐	7.5YR6/3	口縁部片	晩期突帯文土器
540	5-33-7	5337	弥生土器	壺	M区包				やや粗(～2.0mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/3	小片	格子目文
541	5-33-6	5336	弥生土器	壺	M区包				粗(～3.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/3	小片	擬似流水文
542	5-32-3	5323	弥生土器	壺	M区包	底径	5.5～6.0		粗(～3.0mmの砂粒)	浅黄橙	10YR8/3	底部完存	
543	5-25-6	5256	弥生土器	壺	M区包	底径	4.4		密(～1.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR6/3	底部残8/12	
544	5-32-2	5322	弥生土器	壺	M区包	底径	10.5		粗	にぶい橙	7.5YR7/3	底部4/12	
545	5-33-1	5331	弥生土器	甕	M区包		35.0		粗(～2.0mmの砂粒)	にぶい橙	5YR6/4	口縁部1/12	<字形甕
546	5-32-4	5324	弥生土器	甕	M区包				粗(～2.0mmの砂粒)	にぶい褐	7.5YR5/3	口縁部片	<字形甕
547	5-32-5	5325	弥生土器	甕	M区包				粗(～3.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/3	口縁部片	<字形甕
548	5-31-1	5311	土師器	S字甕	M区包		17.0		密(微砂粒)	灰白	10YR8/2	口縁部3/12	
549	5-31-7	5317	青磁	椀	M区包		15.0		密	(釉)灰白(素地)灰白	5Y6/2 5Y7/1	口縁部1/12	

第17表 遺物観察表

報告 番号	R No.	仮番号	質	器形	遺構	計測値			胎土	色調	残存	特記事項	
						口径 (c m)	器高 (c m)	重量 (g)					
550	5-31-6	5316	白磁	小皿	N区包	底径	5.5		密	(釉)灰白	7.5Y7/1	底部4/12	
551	6-47-2	6472	土師器	甕	SX425		21.3		やや粗(~3.5mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/1	口縁部1/4	外面に煤付着
552	6-21-2	6212	土師器	甕	SD433		19.2		やや粗(~1.5mmの砂粒)	にぶい褐	7.5YR6/3	口縁部1/8	
553	6-21-1	6211	土師器	甕	SD433		15.8		やや密(~1.0mmの砂粒)	橙	5YR7/6	口縁部1/3	
554	6-1-6	616	陶器	小皿	SK440		8.2	1.60	やや粗(~2.0mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	全体の5/6	
555	6-1-5	615	陶器	小皿	SK440		8.4	1.80	やや密	灰白	5Y7/1	完存	
556	6-1-1	611	陶器	山茶碗	SK440		16.2	5.20	やや密	灰白	5Y7/1		内外面に煤付着 粉殻痕
557	6-1-3	613	陶器	山茶碗 (転用硯)	SK440	底径	5.4		やや粗	灰白	N8/0	底部のみ残存	粉殻痕
559	6-1-4	614	陶器	皿	SK409		8.4	2.30	やや密	灰白	5Y7/1	全体の1/2	
560	6-1-2	612	須恵器	高杯	SZ443		10.2		やや密	灰	N6/0	口縁部5/12	
561	6-6-1	661	コロ土師器	台付皿	SZ443		8.9		やや密(~0.5mmの砂粒)	褐灰	10YR5/1	口縁部ほぼ完存	
562	6-6-2	662	コロ土師器	小皿	SZ443		10.2		やや粗(~1.0mmの砂粒)	浅黄橙	7.5YR8/4	口縁部9/12	
563	6-88-4	6884	鉄製品	釘	SD401		(長)6.1	(幅)0.9	(厚)0.7				
564	6-88-1	6881	鉄製品	釘	SD401	残存	(長)2.5	(幅)0.3	(厚)0.2				
566	6-22-2	6222	陶器	山茶碗	SD405		12.7	4.90	やや密(~1.5mmの砂粒・ 小石)	灰白	N8/0	全体の3/12	粉殻痕
567	6-7-2	672	土師器	小皿	SD405		8.0	1.05	密	灰白	10YR8/2	ほぼ完形	
568	6-7-1	671	土師器	小皿	SD405		8.7	0.90	密	灰白	10YR8/2	完形	
569	6-21-3	6213	須恵器	杯蓋	SD408		10.5		密(~1.0mmの砂粒)	灰	N6/0	口縁部1/3	宝珠マミ欠損
570	6-20-2	6202	陶器	大甕	SD408							口縁部小片	常滑
571	6-20-4	6204	陶器	山茶碗	SK423		15.4		やや密(~2.5mmの砂粒)	灰白	2.5Y7/1	口縁部1/4	
572	6-20-3	6203	陶器	山茶碗	SD435		14.5~15.2	4.6~6.1	やや粗(~2.5mmの砂粒)	灰白	N7/0	口縁部9/10	粉殻痕
573	6-20-5	6205	陶器	山茶碗	SZ441		15.2	5.50	粗(~2.5mmの砂粒)	灰白	N7/0	口縁部1/3	口縁内一部炭化粉殻痕
574	6-22-1	6221	陶器	山茶碗	SK424		14.7	5.00	やや粗(~1.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部1/8	粉殻痕
575	6-20-1	6201	陶器	大甕	SK424		18.2		やや粗(~4.0mmの砂粒)	褐灰	7.5YR5/1	口縁部1/4	常滑
576	6-5-2	652	土師器	甕	G18p2		17.1		密(~1.0mmの微砂粒)	にぶい橙	5YR7/4	口縁部1/6強	
577	6-49-3	6493	黒色土器	碗	G18p2		14.6		密(微砂粒)	浅黄橙	10YR8/3	全体の9/12	
578	6-4-3	643	黒色土器	碗	G18p2		15.6	5.90	密(~2.5mmの砂粒)	橙	5YR7/6	口縁部1/4強	
579	6-4-5	645	緑釉陶器	碗	G18p2	底径	7.8		密	(釉)緑 (素地)浅黄橙	7.5YR8/4	底部1/2	
580	6-4-2	642	陶器	山茶碗	G5p1		16.0	5.10	密(~1.0mmの微砂粒)	灰白	N8/0	口縁部1/4	
581	6-4-1	641	陶器	山茶碗	G6p2		14.8	4.60	粗(~2.5mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部ほぼ完存	粉殻痕
582	6-5-3	653	陶器	皿	G10p12		7.9	2.40	密(~1.0mmの微砂粒)	灰白	N8/0	口縁部1/3	
583	6-4-4	644	コロ土師器	台付皿	F9p3		14.0	3.90	密(~1.5mmの微砂粒)	浅黄橙	7.5YR8/4	口縁部わずか	
584	6-5-1	651	土師器	鍋	G14p2		22.8		粗(~2.5mmの砂粒)	浅黄橙	7.5YR8/3	口縁部1/4	南伊勢系
585	6-4-7	647	土師器	小皿	G14p3		7.3	1.30	密	浅黄橙	10YR8/3	口縁部1/2弱	南伊勢系
586	6-5-4	654	土師器	小皿	G14p4		7.4	1.10	密	灰白	2.5Y8/2		
587	6-5-5	655	陶器	山茶碗	G9p1				やや密(~2.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/1		墨書「大」?
588	6-88-8	6888	鉄製品	釘	G9p1	残存	(長)3.8	(幅)0.3	(厚)0.2				
589	6-88-6	6886	鉄製品	利器?	F11p3	残存	(長)3.5	(幅)2.0	(厚)0.3				用途不明
590	6-4-6	646	青磁?	碗	B7p1	底径	5.4		密(~1.0mmの微砂粒)	(釉)明緑灰 (素地)灰白	7.5GY7/1 N8/0	底部1/3	
593	6-83-2	6832	縄文土器	深鉢	N区包				粗(~3.5mmの小石)	灰白	10YR8/2	口縁部片	晩期突帯文土器
594	6-88-5	6885	鉄製品	小刀	N区包	残存	(長)7.4	(幅)2.0	(厚)0.4				
595	6-88-2	6882	鉄製品	釘	N区包	残存	(長)4.7	(幅)0.4	(厚)0.2				
596	6-85-2	6852	弥生土器	壺	N区包				密(~1.5mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/2	体部片	押圧隆帯
597	6-3-1	631	陶器	鉢	N区包				やや粗(~3.5mmの砂粒)	褐灰	7.5YR6/1	残少量	
598	6-2-1	621	陶器	山茶碗	N区包		15.5~15.9	4.7~5.2	やや粗(~3.0mmの砂粒)	灰白	N7/0	口縁部完存	粉殻痕
599	6-2-4	624	陶器	小皿	N区包		8.6	2.30	やや密(~1.0mmの砂粒)	灰白	N7/0	口縁部1/3	
600	6-2-5	625	陶器	小皿	N区包		8.5	2.10	粗(~2.0mmの砂粒・1.0cm大 の小石混じる)	灰白	N7/0	口縁部7/8	
601	6-2-3	623	陶器	小皿	N区包		8.1	1.50	やや密(~1.5mmの砂粒)	灰白	N7/0	口縁部少量欠く	
602	6-2-2	622	陶器	小皿	N区包		8.4	1.75	やや粗(~2.0mmの砂粒)	灰白	N7/0	口縁部3/4	
603	6-3-2	632	土師器	甕	N区包		17.8		粗(~3.0mmの砂粒)	にぶい橙	5YR6/4		
604	6-3-3	633	黒色土器	碗	N区包		14.1	6.50	やや密(~1.0mmの砂粒)	浅黄橙	7.5YR8/3	口縁部1/8	黒色土器A類
605	6-2-6	626	コロ土師器	小皿	N区包		10.1	1.70	やや密(~1.0mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/4	口縁部1/3	
606	6-49-1	6491	土師器	小皿	N区包		12.0		密	灰白	10YR8/2	口縁部6/12	南伊勢系
607	7-51-1	7511	陶器	捏鉢	SD501		36.2		やや密(~5.0mmの小石)	にぶい橙	2.5YR6/3	口縁部2/12	常滑
608	7-50-2	7502	陶器	山茶碗	SD501		14.1		やや密	灰白	5Y7/1	口縁部3/12	知多
609	7-50-1	7501	陶器	山茶碗	SD501		11.9		やや密(~5.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/1	口縁部3/12	瀬戸
610	7-49-6	7496	陶器	山茶碗	SD501	底径	5.7		やや密(~4.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y7/1	底部6/12	瀬戸
611	7-50-3	7503	陶器	山茶碗	SD501	高台径	7.1		やや粗	灰白	5Y7/1	高台部6/12	粉殻痕 知多
612	7-50-4	7504	陶器	山茶碗	SD501	高台径	8.0		やや密	灰白	N7/0	高台部9/12	渥美

第18表 遺物観察表

報告 番号	R No.	仮番号	質	器形	遺構	計測値			胎土	色調	残存	特記事項		
						口径 (c m)	器高 (c m)	重量 (g)						
613	7-49-4	7494	黒色土器	椀	SD501	高台径	8.1		やや密	黒	N2/0	高台部4/12		
614	7-49-5	7495	土師器	皿	SD501		8.6	2.5	やや密	浅黄橙	7.5YR8/4	口縁部2/12		
615	7-50-5	7505	土師器	羽釜	SD501				やや粗(～2.0mmの砂粒)	浅黄橙	10YR8/3	小片		
616	7-49-2	7492	土師器	鍋	SD501				やや密(～5.0mmの砂粒)	浅黄橙	10YR8/3	口縁部片	外面に煤付着 南伊勢系	
617	7-49-3	7493	土師器	鍋	SD501				やや密	にぶい黄橙	10YR7/4	口縁部片	外面に煤付着 南伊勢系	
618	7-51-2	7512	瓦		SD501	残存	長9.5	幅7.8	やや密	灰白	N5/0			
619	7-52-5	7525	灰釉陶器	椀	SD502	高台径	7.4		やや密	灰	N6/0	高台部4/12	粉殻痕 猿投	
620	8-9-7	897	灰釉陶器	椀	SD502	高台径	7.6		密	灰白	N8/0	高台部5/12	猿投・瀬戸	
621	7-26-5	7265	陶器	山茶椀	SD502	高台径	7.8		やや密(～2.0mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	高台部8/12	底面墨書「大」 粉殻痕 知多	
622	7-25-4	7254	陶器	山茶椀	SD502	高台径	6.7		やや密	灰白	5Y7/1		底面墨書「大」 粉殻痕	
623	7-27-1	7271	陶器	山茶椀	SD502	高台径	4.9		やや密	灰白	10YR8/1	高台部5/12	底面墨書判読不明 粉殻痕 渥美	
624	7-27-3	7273	陶器	山茶椀	SD502				やや密	灰白	N8/0	底部小片	底部墨書判読不明 渥美?	
625	7-54-3	7543	陶器	山茶椀	SD502	高台径	7.4		やや密	灰白	N7/0	高台部8/12	渥美	
626	7-54-2	7542	陶器	山茶椀	SD502	高台径	8.0		やや密	灰白	N8/0	完存	粉殻痕 瀬戸・猿投	
627	8-23-3	8233	陶器	山茶椀	SD502	高台径	7.0		やや密	灰白	N8/0	高台径5/12	内面に煤付着 渥美	
628	7-54-6	7546	陶器	山茶椀	SD502	底径	5.8		やや密	灰白	N8/0	底部完存	瀬戸	
629	7-54-7	7547	陶器	小椀	SD502	高台径	4.2		密	灰白	N8/0	高台部10/12	渥美	
630	7-13-9	7139	白磁	椀	SD502				密	灰白	N8/0	口縁部片		
631	7-13-2	7132	緑釉陶器	椀	SD502	底径	6.8		密	浅黄橙	10YR8/3			
632	8-23-4	8234	土師器	小皿	SD502		11.4		やや密	灰白	2.5Y8/1	口縁部2/12		
633	7-52-1	7521	陶器	擂鉢	SD502		27.8		やや粗(～4.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/2	口縁部2/12	信楽	
634	7-53-1	7531	土師器	羽釜	SD502				やや粗(～2.0mmの砂粒)	浅黄橙	10YR8/3	口縁部片	穿孔1ヶ所	
635	7-53-2	7532	土師器	羽釜	SD502				やや粗(～2.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/2	口縁部片		
636	8-19-2	8192	土師器	鍋	SD502				やや密(～2.0mmの砂粒)	灰黄褐	10YR5/2	口縁部片	外面に煤付着 清郷型	
637	8-10-2	8102	黒色土器	椀	SD502		14.5		やや密	浅黄橙	7.5YR8/4	口縁部3/12	黒色土器A類	
638	7-54-1	7541	須恵器	杯蓋	SD502		12.9	3.1	密	灰	N5/0	口縁部小片		
639	7-52-3	7523	須恵器	甕	SD502				やや密	灰	N6/0	口縁部片		
640	7-52-4	7524	須恵器	甕	SD502				密	灰白	N7/0	口縁部片		
642	5-28-2	5282	陶器	甕	SD503		9.2		密	灰褐	7.5YR5/2	口縁部2/12	常滑	
643	5-29-1	5291	陶器	山茶椀	SD503		13.2		やや密(～2.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/1	口縁部1/12	墨書あり	
644	5-28-3	5283	陶器	山茶椀	SD503	高台径	5.1		やや密	灰白	N8/0	高台部7/12	猿投・瀬戸 粉殻痕	
645	7-13-5	7135	緑釉陶器	椀	SD503	高台径	6.0		密	灰白	N7/0	高台部1/12		
646	7-13-1	7131	緑釉陶器	椀	SD503	底径	7.9		密	淡橙	5YR8/4			
647	7-82-6	7826	灰釉陶器	椀	SD503	高台径	8.2		密(～1.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	高台部1/12	猿投・瀬戸	
648	7-82-1	7821	陶器	山茶椀	SD503	高台径	7.3		密(～1.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	高台部8/12	粉殻痕 渥美	
649	7-82-3	7823	陶器	山茶椀	SD503	高台径	7.8		やや密(～1.5mmの砂粒)	灰白	N8/0	高台部6/12	瀬戸・猿投	
650	7-82-2	7822	陶器	山茶椀	SD503	高台径	6.7		やや密(～1.5mmの砂粒)	灰白	N8/0	高台部ほぼ完存	知多・猿投	
651	7-81-3	7813	陶器	山茶椀	SD503	高台径	7.2		やや粗(～3.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	高台部9/12	猿投・瀬戸	
652	7-81-4	7814	陶器	山茶椀	SD503	高台径	7.2		やや密(～3.5mmの小石)	灰白	N8/0	高台部完存	猿投・瀬戸	
653	7-82-5	7825	陶器	山茶椀	SD503	高台径	8.4		やや密(～1.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/1	高台部2/12	猿投・瀬戸	
654	7-81-5	7815	陶器	山茶椀	SD503	高台径	7.6		やや密(～2.5mmの砂粒)	灰白	5Y8/1	高台部完存	粉殻痕 知多・猿投	
655	7-83-4	7834	陶器	山茶椀	SD503		15.0		密(～1.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部1/12	内面に煤付着 猿投・知多	
656	7-81-1	7811	須恵器	大甕	SD503		28.0		やや密(～1.0mmの砂粒)	灰白	N7/0	口縁部1/12		
657	7-83-1	7831	土師器	甕	SD503		24.2		やや粗(～2.0mmの砂粒)	浅黄橙	7.5YR8/4	口縁部小片		
658	7-83-2	7832	土師器	甕	SD503		23.8		粗(～2.5mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/2	口縁部1/12		
659	7-83-3	7833	土師器	鍋	SD503		19.0		粗(～2.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/2	口縁部1/12		
660	7-83-5	7835	土師器	小皿	SD503		9.0	1.55	やや密(～1.0mmの砂粒)	淡赤橙	2.5YR7/4	口縁部3/12		
661	7-81-2	7812	陶器	鉢	SD503	底径	26.0		やや密(～2.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	底部3/12		
662	7-82-7	7827	須恵器	壺or杯	SD503	高台径	9.0		やや粗(～1.5mmの砂粒)	灰黄褐	10YR5/2	高台部1/12		
663	7-14-2	7142	白磁	椀	SD503				密	(釉)灰白 (素地)灰	7.5Y7/1 N7/0	口縁部片		
664	7-26-1	7261	陶器	山茶椀	SD503	高台径	7.9		やや密	灰白	10YR8/1		底面墨書「O」	
665	7-49-1	7491	陶器	山茶椀	SD503	高台径	8.0		やや密	灰白	2.5Y7/1	高台部4/12	粉殻痕 知多・猿投	
666	7-48-8	7488	陶器	山茶椀	SD503	高台径	8.0		やや密	灰白	2.5Y7/1	高台部5/12	瀬戸	
667	7-48-7	7487	陶器	小形脚付皿	SD503		6.4	2.7	やや密	灰白	5Y7/1	口縁部3/12	猿投・瀬戸	
668	7-48-4	7484	陶器	鉢	SD503				やや密(～5.0mmの小石・砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部片		
669	7-48-3	7483	土師質	土錘	SD503	残存	(長)4.4	(幅)1.1	6.73	やや密	橙	7.5YR7/6		
670	8-9-6	896	灰釉陶器	椀	SD503	高台径	7.7		密	灰白	N8/0	高台部完存	猿投・瀬戸	
671	8-16-1	8161	灰釉陶器	椀	SD503	高台径	7.5		密(微砂粒)	灰白	2.5Y7/1	高台部3/12	猿投・瀬戸	

第19表 遺物観察表

報告 番号	R No.	仮番号	質	器形	遺構	計測値			胎土	色調	残存	特記事項	
						口径 (cm)	器高 (cm)	重量 (g)					
672	8-16-2	8162	土師器	椀	SD503	高台径	6.4		密(~2.0mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/4	高台部2/12	
673	8-9-5	895	陶器	山茶椀	SD503	高台径	8.7		密	灰白	N8/0	高台部4/12	猿投?
674	8-5-4	854	陶器	山茶椀	SD503	高台径	8.5		密	灰白	5Y7/1	高台部9/12	猿投・瀬戸
675	8-9-4	894	陶器	山茶椀	SD503	高台径	8.3		密	灰白	N8/0	高台部8/12	重ね焼痕 猿投・瀬戸
676	8-1-6	816	陶器	山茶椀	SD503	高台径	5.0		密(~3.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/1	高台部3/12	粉殻痕 底面墨書 瀬戸
677	8-1-5	815	陶器	山茶椀	SD503	底径	6.8		密(~1.0mmの砂粒)	灰白	5Y8/1	底部3/12	底面墨書 瀬戸・猿投
678	8-44-2	8442	陶器	小皿	SD503		8.4	1.60	密	灰白	N8/0	口縁部完存	底面墨書 知多・猿投
679	8-9-2	892	陶器	山茶椀	SD503		14.5	5.30	やや粗(~2.0mmの砂粒)	灰白	N7/0	口縁部1/12	粉殻痕 底部全体墨 知多・猿投
680	8-9-1	891	陶器	山茶椀	SD503		14.4		やや密	灰白	N8/0	口縁部5/12	内面に炭化物 瀬戸
681	8-9-3	893	陶器	小皿	SD503		8.8	1.90	やや密	灰白	N8/0	口縁部5/12	知多・猿投
682	8-8-6	886	土師器	小皿	SD503		10.8	1.90	やや密	灰白	10YR8/2	口縁部10/12	
683	8-7-1	871	陶器	鉢	SD503	底径	17.4		やや粗(~3.0mmの砂粒)	灰白	N7/0	底部小片	猿投・瀬戸
684	8-5-1	851	陶器	大甕	SD503	底径	12.0		密	青灰	5PB5/1	底部5/12	常滑?
685	8-10-1	8101	瓦器	椀	SD503	高台径	6.0		密	灰白	10YR8/1	高台部10/12	
686	8-6-3	863	土師器	鍋	SD503		22.6		やや粗	橙	2.5YR7/6	口縁部2/12	
687	8-37-2	8372	瓦	軒丸瓦	SD503	残存	長9.8		密	灰	N4/0		
688	8-28-2	8282	瓦	軒平瓦	SD503	残存	長7.5	幅9.0 厚2.2	密(~2.0mmの砂粒)	灰	N4/0		
689	8-5-3	853	須恵器	壺	SD503	高台径	7.6		密	灰	N5/0	高台部3/12	
690	8-6-4	864	須恵器	臙	SD503	頸部径	5.0		密	灰白	N7/0	頸部片	
691	8-12-5	8125	須恵器	鉢	SD503		24.0		密	灰白	5Y7/1	口縁部2/12	篠窯産(京都)
692	8-7-4	874	須恵器	器台?	SD503				密	灰	N5/0	体部小片	
693	8-1-1	811	陶器	小皿	SD503		8.6	1.40	やや密(~2.5mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部4/12	底面墨書 粉殻痕 知多・猿投
694	8-10-3	8103	陶器	椀	SD503	高台径	4.9		やや密	(釉)オリーブ黄 (素地)灰白	7.5Y6/3 N8/0	高台部完存	内面トチン跡 古瀬戸後IV(施釉)
695	8-8-3	883	土師器	小皿	SD503		11.2	2.05	やや密	灰白	2.5Y8/1	口縁部4/12	中北勢系
696	8-7-2	872	土師器	皿	SD503		13.1	1.60	やや密(~3.0mmの砂粒)	灰白	5Y8/1	口縁部3/12	中北勢系
697	8-8-2	882	土師器	皿	SD503		15.0	1.90	やや密	灰白	10YR8/1	口縁部3/12	中北勢系
698	8-8-1	881	土師器	皿	SD503		21.3	2.85	やや密(~2.0mmの砂粒)	にぶい橙	5YR7/4	口縁部2/12	
699	8-6-1	861	土師器	鍋	SD503		30.6		やや密	にぶい黄橙	10YR7/3	口縁部5/12	外面に煤付着 南伊勢系
700	8-6-2	862	土師器	鍋	SD503		29.6		やや密	灰黄褐	10YR4/2	口縁部5/12	内外面に煤付着 南伊勢系
701	8-37-1	8371	瓦	軒平瓦	SD503	残存	長7.0	幅幅3.4	やや密	灰	N4/0		
702	8-31-1	8311	瓦	丸瓦	SD503	残存	長16.2		密(~1.5mmの砂粒)	灰	N5/0		
703	8-30-1	8301	瓦	平瓦	SD503	残存	長15.0	幅18.4 厚2.0	やや密(~4.0mmの砂粒)	灰	N6/0		
704	8-36-1	8361	瓦	平瓦	SD503	残存	長30.6	幅19.9 厚1.8	やや粗(~3.0mmの砂粒)	灰白	N7/0		
705	8-7-3	873	瓦	瓦	SD503	残存	長7.1	厚1.4	やや粗	灰	10Y5/1	小片	
707	8-10-4	8104	灰釉陶器	椀	SD503	高台径	6.8		密	灰白	2.5Y7/1	高台部7/12	底面墨書 外面に煤付着
708	8-1-3	813	陶器	山茶椀	SD503	高台径	7.3		やや密(~1.0mmの砂粒)	灰白	N7/0	高台部3/12	底面墨書 粉殻痕 知多・猿投
709	8-1-2	812	陶器	山茶椀	SD503	高台径	6.6		密(~1.0mmの砂粒)	灰白	N7/0	高台部4/12	底面墨書 粉殻痕 知多・猿投
710	8-1-4	814	陶器	山茶椀	SD503		15.9	5.00	密(~1.5mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部2/12	底面墨書 粉殻痕 猿投・瀬戸
711	8-8-5	885	土師器	小皿	SD503		9.4~9.7	2.05	やや密	灰白	10YR8/2	口縁部完存	
712	8-8-4	884	土師器	小皿	SD503		9.8	2.10	やや粗(~2.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/2	口縁部3/12	
714	8-10-5	8105	陶器	加工円盤	SD503	直径	7.3	厚1.2 60.0	やや密	灰白	N7/0		知多
720	7-68-2	7682	土師器	鍋	SD504		29.4		やや密	黄灰	2.5Y4/1	口縁部5/12	外面に煤付着 南伊勢系
721	7-48-2	7482	ワカ土師器	椀	SD504	底径	6.8		やや密	橙	5YR7/6	底部6/12	
722	7-48-5	7485	陶器	山茶椀	SD504				やや密	灰白	2.5Y8/1	口縁部片	渥美?
723	7-48-1	7481	陶器	山茶椀	SD504				やや密	灰白	2.5Y7/1	高台部片	瀬戸・猿投
724	7-48-6	7486	須恵器	杯蓋	SD504				やや密	灰	N6/0	口縁部片	
725	7-53-6	7536	土師器	皿	SD507		10.9	2.55	やや粗(~2.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/2	口縁部5/12	南伊勢系
726	7-53-5	7535	土師器	皿	SD507		12.3	2.0	やや密	灰白	10YR8/2	口縁部2/12	南伊勢系
727	7-53-7	7537	土師器	皿	SD507		11.8		やや密(~2.0mmの砂粒)	浅黄橙	10YR8/3	口縁部3/12	南伊勢系
728	7-53-8	7538	土師器	小皿	SD507		7.4	1.25	やや密	灰白	10YR8/2	口縁部8/12	南伊勢系
729	7-54-5	7545	陶器	山茶椀	SD507	底径	6.6		やや粗(~2.0mmの砂粒)	灰白	N7/0	底部完存	知多・猿投
730	7-54-8	7548	鉄製品	利器柄	SD507		長5.5	幅1.4 厚0.8					
731	7-13-4	7134	緑釉陶器	椀	SD508	高台径	6.4		密	灰白	N7/0	高台部4/12	
732	7-52-6	7526	瓦器	椀	SK510				密	灰白	N8/0	口縁部片	
733	7-53-3	7533	土師器	鍋	SK510				やや粗(~2.0mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/4	口縁部片	
734	7-52-2	7522	須恵器	甕	SD512				密	灰白	N7/0	口縁部片	
735	7-42-2	7422	陶器	山茶椀	SD513		14.5	5.2	やや密(~2.0mmの砂粒)	黄灰	2.5Y6/1	口縁部2/12	粉殻痕 内面に煤付着 知多・猿投

第20表 遺物観察表

報告 番号	R No.	仮番号	質	器形	遺構	計測値			胎土	色調	残存	特記事項	
						口径 (cm)	器高 (cm)	重量 (g)					
736	7-31-1	7311	土師器	鍋	SD514		24.6		やや粗(〜2.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/3	口縁部3/12	外面に煤付着 南伊勢系
737	7-32-2	7322	土師器	鍋	SD514		30.0		やや粗(〜2.0mmの砂粒)	浅黄橙	10YR8/3	口縁部3/12	南伊勢系
738	7-34-1	7341	土師器	鍋	SD514		20.7		粗(〜2.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/2	口縁部9/12	外面に煤付着 南伊勢系
739	7-35-1	7351	土師器	鍋	SD514		22.9	12.2	やや密(〜2.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/2	口縁部6/12	外面に煤付着 南伊勢系
740	7-34-2	7342	土師器	鍋	SD514		23.3		やや密(〜1.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/2	口縁部4/12	外面に煤付着 南伊勢系
741	7-33-1	7331	土師器	鍋	SD514		25.3		やや粗(〜2.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/2	口縁部3/12	外面に煤付着 南伊勢系
742	7-32-1	7321	土師器	鍋	SD514		26.0		やや粗(〜2.0mmの砂粒)	灰褐	7.5YR4/2	口縁部2/12	外面に煤付着 南伊勢系
743	7-34-3	7343	土師器	鍋	SD514		23.6		やや粗(〜1.5mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/2	口縁部2/12	外面に煤付着 南伊勢系
744	7-45-1	7451	土師器	鍋	SD514		28.0		やや密(微砂粒)	浅黄橙	10YR8/3	口縁部3/12	外面に煤付着 南伊勢系
745	7-45-2	7452	瓦質	脚付土鍋	SD514		16.0		やや密(微砂粒)	灰白	5Y8/1	口縁部2/12	
746	7-36-7	7367	土師器	皿	SD514		12.0		密(〜1.5mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/1	口縁部ほぼ完存	南伊勢系
747	7-36-5	7365	土師器	皿	SD514		12.4		やや密(〜1.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/1	口縁部5/12	南伊勢系
748	7-36-6	7366	土師器	皿	SD514		11.0		密(〜1.5mmの砂粒)	灰白	10YR8/1	口縁部5/12	南伊勢系
749	7-36-3	7363	土師器	皿	SD514		12.3	2.5	密(〜1.5mmの砂粒)	灰白	10YR8/1	口縁部完存	南伊勢系
750	7-37-1	7371	土師器	皿	SD514		12.4	2.4	密	灰白	7.5YR8/2	口縁部5/12	南伊勢系
751	7-38-1	7381	土師器	皿	SD514		12.6	2.3	やや密	灰白	10YR8/2	口縁部3/12	南伊勢系
752	7-36-1	7361	土師器	皿	SD514		12.0	2.8	やや密(〜2.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/2	口縁部10/12	南伊勢系
753	7-38-2	7382	土師器	皿	SD514		11.6	2.3	やや密	灰白	10YR8/2	口縁部4/12	南伊勢系
754	7-36-4	7364	土師器	皿	SD514		12.2	2.7	密(〜1.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/1	口縁部完存	南伊勢系
755	7-35-3	7353	土師器	皿	SD514		11.8	2.7	やや粗(〜5.0mmの砂粒)	浅黄橙	7.5YR8/3	口縁部6/12	南伊勢系
756	7-35-2	7352	土師器	皿	SD514		12.0	2.3	密	灰白	2.5Y8/1	口縁部11/12	南伊勢系
757	7-37-2	7372	土師器	皿	SD514		11.4	2.15	密	灰白	7.5YR8/2	口縁部3/12	南伊勢系
758	7-36-2	7362	土師器	皿	SD514		11.0	2.7	密(〜1.0mmの砂粒)	浅黄橙	10YR8/4	口縁部9/12	南伊勢系
759	7-38-3	7383	土師器	皿	SD514		10.6	2.35	やや密	橙	2.5YR6/6	口縁部3/12	南伊勢系
760	7-37-10	73710	土師器	小皿	SD514		8.3	1.5	やや密(〜2.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/1	口縁部11/12	南伊勢系
761	7-37-7	7377	土師器	小皿	SD514		8.3	1.0	やや密	淡黄	2.5Y8/3	口縁部ほぼ完存	南伊勢系
762	7-37-8	7378	土師器	小皿	SD514		7.8	1.3	やや密	灰白	10YR8/2	口縁部完存	南伊勢系
763	7-38-6	7386	土師器	小皿	SD514		8.2	1.2	やや密	灰白	10YR8/2	口縁部ほぼ完存	南伊勢系
764	7-37-4	7374	土師器	小皿	SD514		7.9	1.0	やや密(〜2.0mmの砂粒)	にぶい橙	5YR7/4	口縁部完存	南伊勢系
765	7-37-9	7379	土師器	小皿	SD514		7.6	1.1	やや密	灰白	10YR8/2	口縁部完存	南伊勢系
766	7-38-8	7388	土師器	小皿	SD514		8.1	1.35	やや密	灰白	10YR8/2	口縁部7/12	南伊勢系
767	7-37-6	7376	土師器	小皿	SD514		8.0	1.3	やや粗(〜2.0mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/4	口縁部11/12	南伊勢系
768	7-37-11	73711	土師器	小皿	SD514		7.6	1.1	やや粗(〜2.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/2	口縁部4/12	南伊勢系
769	7-37-3	7373	土師器	小皿	SD514		8.2	1.1	やや密(〜2.0mmの砂粒)	浅黄橙	10YR8/3	口縁部完存	南伊勢系
770	7-38-5	7385	土師器	小皿	SD514		7.8	1.1	やや密	灰白	10YR8/2	口縁部10/12	南伊勢系
771	7-38-9	7389	土師器	小皿	SD514		7.5	1.2	やや密	灰白	10YR8/2	口縁部完存	南伊勢系
772	7-38-7	7387	土師器	小皿	SD514		7.8	1.2	やや密	浅黄橙	7.5YR8/3	口縁部8/12	南伊勢系
773	7-38-4	7384	土師器	小皿	SD514		7.4	1.1	やや密	灰白	2.5Y8/2	口縁部7/12	南伊勢系
774	7-38-10	73810	土師器	小皿	SD514		7.9	1.25	やや粗(〜2.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/2	口縁部8/12	南伊勢系
775	7-38-11	73811	土師器	小皿	SD514		7.4	1.1	やや密	浅黄橙	7.5YR8/3		穿孔 南伊勢系
776	7-45-3	7453	土師器	小形鍋	SD514		10.5		やや密	灰白	5Y8/1	口縁部2/12	南伊勢系
777	7-37-5	7375	土師器	皿	SD514		10.3	1.85	やや粗(〜2.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/2	口縁部5/12	底部に穿孔
778	7-46-6	7466	陶器	小皿	SD514		8.2	1.3	やや密(〜2.5mmの砂粒)	灰白	2.5Y7/1	口縁部5/12	猿投・知多
779	7-46-4	7464	陶器	小皿	SD514		8.5	1.7	やや密(〜3.0mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部完存	知多・猿投
780	7-46-5	7465	陶器	小皿	SD514		8.4	1.8	やや密(〜2.0mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部5/12	
781	7-18-4	7184	陶器	小皿	SD514		8.3	2.1	やや粗(〜3.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y7/1	口縁部完存	底面墨書
782	7-18-3	7183	陶器	小皿	SD514		8.3	2.0	やや密(〜4.0mmの小石・砂粒)	灰白	2.5Y7/1	口縁部完存	底面墨書
783	7-20-3	7203	陶器	山茶椀	SD514		15.0	4.8	やや密	灰白	N7/0	口縁部2/12	底面墨書 粗穀痕
784	7-17-4	7174	陶器	山茶椀	SD514		15.4	5.5	粗	灰白	5Y7/1	口縁部5/12	底面「+」or「×」側面に「○」墨書 粗穀痕
785	7-17-1	7171	陶器	山茶椀	SD514		16.0	5.2	やや密(〜2.0mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部完存	底面墨書 粗穀痕
786	7-17-2	7172	陶器	山茶椀	SD514		14.9	5.1	やや粗(〜5.0mmの小石・砂粒)	灰白	2.5Y7/1	口縁部9/12	底面墨書 粗穀痕
787	7-17-3	7173	陶器	山茶椀	SD514		14.6	5.3	やや密(微砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部7/12	底面墨書 粗穀痕
788	7-19-2	7192	陶器	山茶椀	SD514		15.1	5.5	やや粗(〜2.0mmの砂粒)	灰白	N7/0	口縁部3/12	底面墨書 粗穀痕
789	7-19-1	7191	陶器	山茶椀	SD514		14.6	5.1	やや粗(〜3.0mmの砂粒)	灰白	N7/0	口縁部11/12	底面墨書 粗穀痕
790	7-16-2	7162	陶器	山茶椀	SD514		15.4	5.5	やや粗(〜4.0mmの小石・砂粒)	灰白	2.5Y7/1	口縁部完存	底面墨書 粗穀痕
791	7-15-1	7151	陶器	山茶椀	SD514		15.3	5.4	やや粗(〜6.0mmの小石・砂粒)	灰白	2.5Y7/1	口縁部完存	底面墨書 粗穀痕
792	7-16-1	7161	陶器	山茶椀	SD514		15.1	5.6	粗(〜2.5mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部7/12	底面墨書 粗穀痕

第21表 遺物観察表

報告 番号	R No.	仮番号	質	器形	遺構	計測値			胎土	色調	残存	特記事項	
						口径 (cm)	器高 (cm)	重量 (g)					
793	7-15-3	7153	陶器	山茶碗	SD514		14.9	5.1	やや密(~3.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y7/1	口縁部4/12	底面墨書 靱殻痕
794	7-16-3	7163	陶器	山茶碗	SD514		15.0	5.5	やや粗(~8.0mmの小石・砂粒)	灰白	N8/0	口縁部10/12	底面墨書 靱殻痕
795	7-19-6	7196	陶器	山茶碗	SD514	高台径	15.6		やや粗(~2.0mmの砂粒)	灰白	N7/0	口縁部2/12	外面墨書
796	7-19-5	7195	陶器	山茶碗	SD514	高台径	6.2		やや粗(~2.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	高台部5/12	底面墨書 靱殻痕
797	7-20-2	7202	陶器	山茶碗	SD514		16.1	5.6	やや粗(~2.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部11/12	底面墨書 靱殻痕
798	7-18-1	7181	陶器	山茶碗	SD514		14.6	4.9	やや密(~1.5mmの砂粒)	灰白	7.5Y7/1	口縁部4/12	底面墨書 靱殻痕
799	7-15-2	7152	陶器	山茶碗	SD514		13.7	5.4	やや粗(~6.0mmの小石・砂粒)	灰白	N8/0	口縁部完存	底面墨書 靱殻痕
800	7-18-2	7182	陶器	山茶碗	SD514		14.8	4.9	粗(~12.0mm小石・砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部7/12	底面墨書 靱殻痕
801	7-23-2	7232	陶器	山茶碗	SD514		12.3	4.65	やや粗(~6.0mmの小石)	灰白	N8/0	口縁部2/12	底面墨書
802	7-20-1	7201	陶器	山茶碗	SD514		13.9	4.75	やや密	灰白	N8/0	口縁部1/12	底面墨書 靱殻痕
803	7-19-3	7193	陶器	山茶碗	SD514		15.0	5.4	やや粗(~2.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部6/12	底面墨書 靱殻痕
804	7-19-4	7194	陶器	山茶碗	SD514	高台径	5.8		やや粗(~3.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	高台部10/12	底面墨書 靱殻痕
805	7-23-1	7231	陶器	山茶碗	SD514	高台径	7.0		やや粗(~5.5mmの小石)	灰	N6/0	高台部6/12	底面墨書 靱殻痕
806	7-22-4	7224	陶器	山茶碗	SD514	高台径	7.4		やや粗(~1.0mmの砂粒)	灰白	5Y8/1	高台部3/12	底面墨書 靱殻痕
807	7-40-6	7406	陶器	山茶碗	SD514		14.7	5.4	やや密(~1.5mmの砂粒)	灰白	N7/0	口縁部完存	底面墨書 靱殻痕 内面煤 知多・猿投
808	7-21-3	7213	陶器	山茶碗	SD514	高台径	7.6		密(~2.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	高台部完存	
809	7-23-4	7234	陶器	山茶碗	SD514	高台径	5.6		やや粗(~2.0mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	高台部6/12	底面墨書 靱殻痕
810	7-22-2	7222	陶器	山茶碗	SD514	高台径	7.0		やや粗(~2.5mmの砂粒)	灰白	2.5Y7/1	高台部6/12	底面墨書 靱殻痕
811	7-23-3	7233	陶器	山茶碗	SD514	高台径	7.3		やや粗(~3.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y7/1	高台部4/12	靱殻痕
812	7-20-4	7204	陶器	山茶碗	SD514				やや粗(~2.0mmの砂粒)	灰白	N7/0	高台部片	底面墨書 靱殻痕
813	7-42-4	7424	陶器	山茶碗	SD514		15.6	5.4	やや密(微砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部5/12	知多・猿投
814	7-47-5	7475	陶器	山茶碗	SD514		15.2	5.4	密	灰白	5Y7/1	口縁部1/12	靱殻痕 知多・猿投
815	7-42-6	7426	陶器	山茶碗	SD514		15.3	6.0	やや密(~5.0mmの小石・砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部小片	靱殻痕 内面煤 知多・猿投
816	7-43-4	7434	陶器	山茶碗	SD514		14.6	5.5	やや密(~2.0mmの砂粒)	灰	5Y6/1	口縁部10/12	靱殻痕 知多・猿投
817	7-44-2	7442	陶器	山茶碗	SD514		15.2	5.6	やや粗(~10.0mmの小石・砂粒)	灰白	7.5Y8/1	口縁部5/12	靱殻痕 知多・猿投
818	7-39-3	7393	陶器	山茶碗	SD514		14.4	5.7	やや密(~2.0mmの砂粒)	灰白	N7/0	口縁部10/12	靱殻痕 猿投・知多
819	7-40-3	7403	陶器	山茶碗	SD514		15.3	5.8	やや粗(~6.0mmの小石・砂粒)	灰白	N7/0	口縁部完存	靱殻痕 知多・猿投
820	7-47-2	7472	陶器	山茶碗	SD514		15.0	5.0	やや密(~5.0mmの小石・砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部4/12	靱殻痕 猿投・瀬戸
821	7-47-1	7471	陶器	山茶碗	SD514		14.7	5.3	やや密(~1.5mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部2/12	靱殻痕 知多・猿投
822	7-43-2	7432	陶器	山茶碗	SD514		14.6	5.9	やや密(~1.5mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部完存	靱殻痕 猿投・知多
823	7-41-1	7411	陶器	山茶碗	SD514		14.7	5.7	やや粗(~12.0mmの小石)	灰白	5Y7/1	口縁部9/12	靱殻痕
824	7-44-3	7443	陶器	山茶碗	SD514		15.3	5.0	やや粗(~4.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部4/12	靱殻痕 知多・猿投
825	7-42-7	7427	陶器	山茶碗	SD514		15.4	5.9	やや密(~3.5mmの小石・砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部8/12	靱殻痕 猿投・知多
826	7-44-1	7441	陶器	山茶碗	SD514		14.7	4.85	やや密(~3.5mmの砂粒)	灰白	N7/0	口縁部4/12	靱殻痕
827	7-43-3	7433	陶器	山茶碗	SD514		15.6	5.7	やや粗(~3.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部4/12	靱殻痕 猿投・知多
828	7-39-2	7392	陶器	山茶碗	SD514		14.7	5.4	密	灰白	5Y7/1	口縁部11/12	口縁部に煤付着 靱殻痕 知多・猿投
829	7-39-6	7396	陶器	山茶碗	SD514		15.1	5.5	やや密(微砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部6/12	内外面煤付着 知多・猿投
830	7-40-1	7401	陶器	山茶碗	SD514		15.0	6.1	やや密(~2.0mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部10/12	靱殻痕 知多・猿投
831	7-47-4	7474	陶器	山茶碗	SD514		15.0	5.2	やや密(~1.5mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部2/12	靱殻痕 知多
832	7-39-1	7391	陶器	山茶碗	SD514		15.4	5.7	やや密(~2.0mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部完存	靱殻痕 猿投・知多
833	7-42-3	7423	陶器	山茶碗	SD514		14.7	4.9	やや密(~3.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y7/1	口縁部5/12	内外面に煤付着 靱殻痕
834	7-39-5	7395	陶器	山茶碗	SD514		14.5	5.1	やや密(~5.0mmの小石・砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部11/12	靱殻痕 知多・猿投
835	7-40-5	7405	陶器	山茶碗	SD514		15.2	5.7	やや粗(~3.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部10/12	靱殻痕 知多・猿投
836	7-39-4	7394	陶器	山茶碗	SD514		14.5	5.8	やや密(~2.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y7/1	口縁部11/12	靱殻痕 猿投・知多
837	7-46-2	7462	陶器	山茶碗	SD514		14.0	4.8	やや粗(~2.0mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部2/12	靱殻痕 瀬戸北部
838	7-41-2	7412	陶器	山茶碗	SD514		15.0	5.8	やや密(~4.0mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部ほぼ完存	靱殻痕
839	7-42-5	7425	陶器	山茶碗	SD514		15.2	6.0	やや密	灰白	2.5Y7/1	口縁部5/12	内面に煤付着 靱殻痕 知多・猿投
840	7-41-3	7413	陶器	山茶碗	SD514		15.0	5.1	密(~4.0mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部ほぼ完存	靱殻痕
841	7-47-3	7473	陶器	山茶碗	SD514		15.1	5.1	やや密	灰白	5Y7/1	口縁部4/12	知多・猿投
842	7-40-4	7404	陶器	山茶碗	SD514		15.2	5.7	やや粗(~10.0mmの小石・砂粒)	灰白	2.5Y7/1	口縁部完存	内面に煤付着 靱殻痕 知多?
843	7-41-6	7416	陶器	山茶碗	SD514		15.0	5.1	密	黄灰	2.5Y6/1	口縁部10/12	靱殻痕
844	7-41-4	7414	陶器	山茶碗	SD514		14.4	5.4	やや粗(~5.0mmの砂粒)	黄灰	2.5Y6/1	口縁部ほぼ完存	靱殻痕
845	7-41-5	7415	陶器	山茶碗	SD514		14.4	5.1	やや密(~4.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y7/1	口縁部11/12	靱殻痕
846	7-42-1	7421	陶器	山茶碗	SD514		14.2	5.4	密	灰白	5Y7/1	口縁部5/12	内面に煤付着 靱殻痕 知多・猿投
847	7-40-2	7402	陶器	山茶碗	SD514		14.6	5.1	密(~1.5mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部10/12	知多・猿投 高台なし
848	7-43-1	7431	陶器	山茶碗	SD514		13.2	4.8	粗(~4.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部9/12	瀬戸

第22表 遺物観察表

報告 番号	R No.	仮番号	質	器形	遺構	計測値			胎土	色調	残存	特記事項		
						口径 (cm)	器高 (cm)	重量 (g)						
849	7-43-5	7435	陶器	山茶椀	SD514		15.2	4.2		やや密(～2.0mmの砂粒)	灰	5Y6/1	口縁部4/12	猿投?
850	7-46-1	7461	陶器	鉢鉢	SD514		29.6	11.6		やや密	(釉)灰褐 (素地)灰白	5YR4/2 N7/0	口縁部1/12	鉄釉 常滑
853	8-13-2	8132	土師器	羽釜	SD514		28.2			密(～0.5mmの砂粒・雲母)	灰黄	2.5Y7/2	口縁部3/12	穿孔1対(2つ)残 外面に 煤付着 中北勢系
854	8-15-1	8151	土師器	羽釜	SD514		24.6			密	灰黄褐	10YR4/2	口縁部6/12	外面に煤 内面炭化物 付着 南伊勢系
855	8-13-1	8131	土師器	羽釜	SD514		23.2			密(～1.5mmの小石・雲母)	灰黄褐	10YR5/2	口縁部2/12	穿孔1つ残 外面に煤付 着 中北勢系
856	8-4-2	842	土師器	鍋	SD514		25.0			密	にぶい黄橙	10YR7/3	口縁部3/12	外面に煤付着 南伊勢系c類
857	8-13-3	8133	土師器	鍋	SD514		25.0			やや密(～1.0mmの砂粒・ 雲母)	褐灰	7.5YR4/1	口縁部2/12	外面に煤付着 南伊勢系2b類
858	8-14-2	8142	土師器	鍋	SD514		25.0			密(雲母)	にぶい黄橙	10YR6/4	口縁部3/12	外面に煤付着 南伊勢系4c類
859	8-4-1	841	土師器	鍋	SD514		27.4			密	にぶい橙	7.5YR7/4	口縁部3/12	外面に煤付着 南伊勢系4c類
860	8-14-3	8143	土師器	鍋	SD514		32.0			密(～1.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR6/4	口縁部3/12	外面に煤付着 南伊勢系4c類
861	8-14-1	8141	土師器	鍋	SD514		37.0			密(～1.0mmの砂粒・雲母)	にぶい黄橙	10YR6/3	口縁部2/12	外面に煤付着 南伊勢系4c類
862	8-16-10	81610	土師器	皿	SD514		9.4	1.80		密(～1.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/2	口縁部5/12	
863	8-16-9	8169	土師器	皿	SD514		9.0	2.40		密(～1.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/2	口縁部5/12	
864	8-12-2	8122	土師器	皿	SD514		14.6	2.60		やや密	灰白	10YR8/2	口縁部3/12	
865	8-12-1	8121	土師器	皿	SD514		15.6			密	灰白	2.5Y8/1	口縁部4/12	内面に油煙
866	8-12-3	8123	土師器	皿	SD514		14.8	2.40		やや密	灰白	10YR8/2	口縁部3/12	
867	8-16-8	8168	灰釉陶器	椀	SD514	高台径	8.6			密(～1.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y7/1	高台部6/12	猿投
868	8-17-7	8177	陶器	山茶椀	SD514		14.0	4.50		密(～2.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/1	口縁部3/12	底面墨書 瀬戸
869	8-2-3	823	陶器	山茶椀	SD514	高台径	5.3			密(～3.0mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	高台部3/12	底面墨書 粉殻痕 瀬戸
870	8-2-4	824	陶器	山茶椀	SD514	高台径	6.4			密(～1.5mmの砂粒)	灰白	2.5Y7/1	高台部6/12	底面墨書 粉殻痕 瀬戸・猿投
871	8-12-4	8124	陶器	山茶椀	SD514		18.2	5.90		密	黄灰	2.5Y6/1	口縁部3/12	粉殻痕 猿投・知多
872	8-17-1	8171	陶器	山茶椀	SD514		14.9	5.30		密(～2.5mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部4/12	粉殻痕 猿投・瀬戸
873	8-17-5	8175	陶器	山茶椀	SD514		14.0	4.60		密(～2.5mmの砂粒)	灰白	N7/0	口縁部1/12	粉殻痕 知多・猿投
874	8-17-4	8174	陶器	山茶椀	SD514		14.6	4.95		やや密(～2.5mmの砂粒)	灰白	N7/0	口縁部1/12	知多・猿投
875	8-16-7	8167	陶器	山茶椀	SD514		14.8	5.10		やや密(～5.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y7/1	口縁部2/12	知多 猿投
876	8-17-2	8172	陶器	山茶椀	SD514	底径	6.5			やや密(～4.0mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	底部完存	知多
877	8-17-8	8178	陶器	小椀	SD514		10.2	3.40		密(～4.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部11/12	猿投・知多
878	8-17-3	8173	陶器	小皿	SD514		8.0	1.70		やや密(～1.5mmの砂粒)	灰白	N7/0	口縁部7/12	知多・猿投
879	8-17-6	8176	陶器	小皿	SD514		8.7	1.80		密(～2.0mmの砂粒)	灰白	N7/0	口縁部10/12	知多・猿投
880	8-11-3	8113	須恵器	高杯	SD514	脚柱 上部径	3.2			密	灰白	N7/0	脚柱上部完存	
881	8-11-1	8111	陶器	播鉢	SD514		28.0			密	(釉)にぶい赤褐 (素地)灰白	2.5YR5/3 2.5Y8/12	口縁部1/12	古瀬戸(鉄釉)
882	8-11-2	8112	陶器	播鉢	SD514					やや密	灰白	2.5Y8/1	口縁部片	信楽
883	8-34-3	8343	瓦	軒丸瓦	SD514	残存	長7.6		厚1.9	密	灰	N4/0		
884	8-30-2	8302	瓦	軒丸瓦	SD514	瓦当部径	14.0			密(～5.0mmの砂粒)	暗灰	N3/0		
885	8-34-1	8341	瓦	軒平瓦	SD514	残存	長11.0	顎幅4.0		密	灰	N4/0	小片	
886	8-29-1	8291	瓦	軒平瓦	SD514	残存	長17.5	幅7.5	厚2.0	密(～1.5mmの砂粒)	灰	N5/0		
887	8-34-2	8342	瓦	軒平瓦	SD514	残存	長13.4	顎幅4.1		密	灰	N4/0		
888	8-33-1	8331	瓦	平瓦	SD514	残存	長20.5	幅19.8	厚1.8	密	灰	N4/0		
889	8-28-1	8281	瓦	平瓦	SD514	残存	長17.6	幅13.2	厚1.8	やや密(～3.0mmの砂粒)	暗灰	N3/0		
890	8-29-2	8292	瓦	平瓦	SD514	残存	長11.0	幅19.7	厚2.6	やや密(～2.0mmの砂粒)	灰	N5/0		
891	8-32-1	8321	瓦	丸瓦	SD514	残存	長21.7	幅12.6	厚2.0	やや密	灰白	N4/0		
892	8-35-1	8351	瓦	丸瓦	SD514	残存	長16.0	幅11.2	厚1.7	やや密(～5.0mmの砂粒)	灰	N5/0		
896	7-26-3	7263	陶器	山茶椀	SD515	高台径	6.6			やや密(～5.0mmの小石)	灰白	2.5Y8/1	高台部4/12	底面墨書「+」 粉殻痕
897	7-55-2	7552	陶器	山茶椀	SD515		14.2			密	灰白	5Y7/1	口縁部3/12	外面に墨書 知多
898	7-56-2	7562	陶器	山茶椀	SD515	底径	6.3			やや粗(～4.0mmの小石・砂 粒)	灰白	5Y7/1	底部5/12	猿投・知多
899	7-56-3	7563	陶器	鉢	SD515	高台径	13.0			やや粗	灰	5Y6/1	高台部2/12	瀬戸
900	7-56-7	7567	土師器	皿	SD515		9.2	2.4		やや密(～2.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/1	口縁部5/12	
901	7-56-4	7564	土師器	鍋	SD515					やや密	にぶい黄橙	10YR7/3	口縁部片	外面に煤付着
902	7-56-6	7566	土師器	鍋	SD515					やや密	褐灰	10YR5/1	口縁部小片	外面に煤付着
903	7-56-1	7561	陶器	山茶椀	SD516		16.0	5.0		やや密(～3.0mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部1/12	粉殻痕 猿投・瀬戸
904	7-55-6	7556	陶器	山茶椀	SD516		15.4			やや密	灰白	2.5Y7/1	口縁部2/12	内外面に煤付着 知多・猿投
905	7-55-1	7551	陶器	壺	SD517		19.1			密	灰白	N7/0	口縁部2/12	常滑
906	7-55-4	7554	陶器	山茶椀	SD517					やや密(～2.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y7/1	口縁部片	瀬戸
907	7-56-5	7565	土師器	鍋	SD517					やや密(～2.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/12	口縁部片	南伊勢系
908	7-55-7	7557	土師質	土錘	SD517	残存	長2.9	幅1.1	1.94	やや密	黄褐	2.5Y5/3		

第23表 遺物観察表

報告 番号	R No.	仮番号	質	器形	遺構	計測値			胎土	色調	残存	特記事項		
						口径 (cm)	器高 (cm)	重量 (g)						
912	7-25-3	7253	陶器	小皿	SD518		8.4	1.6		やや密(~2.0mmの砂粒)	灰白	7.5Y7/1	口縁部9/12	底部墨書「T」字形
913	7-59-4	7594	陶器	小皿	SD518		8.2	2.1		やや密(~2.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部9/12	知多・猿投
914	7-59-5	7595	陶器	山茶碗	SD518	高台径	8.0			やや密(~3.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	高台部2/12	瀬戸・猿投
915	7-57-4	7574	陶器	山茶碗	SD518		14.0			やや密(~1.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部3/12	知多・猿投
916	7-57-5	7575	陶器	山茶碗	SD518		14.0	5.5		やや密(~3.5mmの小石)	灰白	7.5Y7/1	口縁部6/12	知多
917	7-57-3	7573	陶器	山茶碗	SD518		12.8	5.2		粗(~8.0mmの小石)	灰白	N8/0	口縁部2/12	初段痕 瀬戸・猿投
918	7-58-3	7583	陶器	山茶碗	SD518	高台径	5.9			やや粗(~2.5mmの砂粒)	灰白	10YR8/7	高台部完存	初段痕 瀬戸?
919	7-59-7	7597	土師器	皿	SD518		12.0	2.3		密(~1.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/2	口縁部4/12	
920	7-58-1	7581	土師器	羽釜	SD518		29.0			粗(~2.0mmの砂粒)	淡黄	2.5Y8/3	口縁部1/12	
921	7-26-2	7262	陶器	山茶碗	SD519	高台径	6.0			やや密	灰白	2.5Y8/1	高台部10/12	底部墨書 初段痕
922	7-57-2	7572	陶器	山茶碗	SD519		15.2	5.1		やや密(~1.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部3/12	猿投・瀬戸
923	7-58-2	7582	陶器	山茶碗	SD519	高台径	7.8			密(~1.0mmの砂粒)	灰白	N7/0	高台部完存	渥美
924	7-59-1	7591	陶器	山茶碗	SD519		14.0	4.85		粗(~3.5mmの小石)	灰白	5Y8/1	口縁部1/12	瀬戸
925	7-57-1	7571	陶器	山茶碗	SD519		13.5	4.8		やや粗(~3.5mmの小石)	灰白	N8/0	口縁部6/12	初段痕 知多・猿投
926	7-58-5	7585	陶器	山茶碗	SD519		13.0	5.05		粗(~3.0mmの砂粒)	灰白	5Y8/1	口縁部1/12	内面に煤付着 初段痕 瀬戸
927	7-58-4	7584	陶器	山茶碗	SD519	高台径	7.0			やや粗(~2.5mmの砂粒)	灰白	N8/0	高台部4/12	瀬戸・猿投
928	7-59-2	7592	陶器	山茶碗	SD519	底径	6.2			やや粗(~1.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/1	底部完存	知多?
929	7-59-3	7593	陶器	小皿	SD519		8.8	1.6		粗(~7.5mmの小石)	灰白	5Y7/1	口縁部3/12	猿投・瀬戸
930	7-59-6	7596	土師器	皿	SD519		10.8	2.2		密(~1.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/2	口縁部3/12	
931	7-59-8	7598	土師器	小皿	SD519		7.6	1.0		やや密(~1.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/2	口縁部ほぼ完存	
932	7-61-3	7613	陶器	山茶碗	SD520					粗(~2.0mmの砂粒)	灰白	N7/0	口縁部小片	知多
933	7-62-2	7622	陶器	山茶碗	SK521	高台径	6.9			やや粗(~3.5mmの砂粒)	灰白	N7/0	高台部10/12	初段痕 知多
934	7-61-2	7612	陶器	山茶碗	SK525		15.8	5.1		やや密(~1.5mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部6/12	初段痕 知多
935	7-61-4	7614	陶器	山茶碗	SK529					密(微砂粒)	灰白	N7/0	口縁部小片	猿投・知多
936	7-24-4	7244	陶器	山茶碗	SK529	底径	7.8			やや粗(~2.0mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	底部片	底部墨書
937	7-62-5	7625	陶器	小皿	SK529		9.5	2.0		やや密(~1.0mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部1/12	渥美?
938	7-60-5	7605	土師器	台付小形鉢	SK529		12.6			密(~1.0mmの砂粒)	にぶい橙	5YR7/4	口縁部2/12	
939	7-60-6	7606	土師器	鍋	SK529					やや粗(~1.5mmの砂粒)	灰白	10YR8/1	口縁部小片	南伊勢系
940	7-60-4	7604	土師器	小皿	SK529		9.6	1.9		密(~1.5mmの砂粒)	灰白	10YR8/1	口縁部9/12	中北勢系
941	7-60-2	7602	土師器	皿	SK529		12.0	2.7		密(微砂粒)	灰白	10YR8/1	口縁部4/12	南伊勢系
942	7-60-3	7603	土師器	皿	SK529		12.2	2.3		密(微砂粒)	灰白	2.5Y8/1	口縁部3/12	南伊勢系
943	7-60-1	7601	土師器	皿	SK529		11.3	2.9		密(~1.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/1	口縁部5/12	南伊勢系
944	7-61-5	7615	陶器	山茶碗	SK529		13.0			やや粗(~3.0mmの砂粒)	灰白	N7/0	口縁部10/12	瀬戸北部?
945	7-62-1	7621	陶器	山茶碗	SK529	高台径	8.2			やや密(~2.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y7/1	高台部9/12	猿投・瀬戸
946	7-62-3	7623	陶器	山茶碗	SK529	高台径	7.0			密(微砂粒)	灰白	N7/0	高台部10/12	瀬戸・猿投
947	7-62-6	7626	陶器	大甕	SK529					やや密(~1.5mmの砂粒)	灰	N5/0	口縁部小片	常滑
948	7-61-1	7611	陶器	練鉢	SK529		33.7			やや密(~3.0mmの砂粒)	灰	N6/0	口縁部2/12	瀬戸?
949	7-62-4	7624	陶器	山茶碗	SK530	高台径	5.9			やや粗(~2.0mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	高台部片	初段痕 瀬戸
950	7-64-2	7642	陶器	山茶碗	SK531		15.2			密	灰白	5Y7/1	口縁部1/12	知多・猿投
951	7-63-7	7637	陶器	山茶碗	SK531	高台径	7.0			やや密(~2.0mmの砂粒)	黄灰	2.5Y6/1	高台部2/12	初段痕 知多
952	7-65-2	7652	陶器	山茶碗	SK531	底径	5.5			やや密(~3.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y7/1	底部3/12	内面に煤付着 瀬戸
953	7-63-6	7636	陶器	山茶碗	SK531	高台径	5.6			やや粗(~5.0mmの小石)	灰白	2.5Y8/1	高台部1/12	初段痕 瀬戸
954	7-63-2	7632	土師器	小皿	SK531		7.9	1.3		密	浅黄橙	10YR8/2	口縁部11/12	南伊勢系
955	7-63-3	7633	土師器	小皿	SK531		8.1	1.2		やや密(~2.0mmの砂粒)	浅黄橙	10YR8/3	口縁部4/12	南伊勢系
956	7-65-4	7654	土師器	皿	SK531		11.9	2.5		密	淡黄	2.5Y8/3	口縁部8/12	南伊勢系
957	7-65-6	7656	土師器	皿	SK531		11.0	2.3		密	灰白	2.5Y8/2	口縁部5/12	南伊勢系
958	7-65-5	7655	土師器	皿	SK531		12.1	2.6		密	灰白	2.5Y8/2	口縁部3/12	南伊勢系
959	7-25-2	7252	陶器	山茶碗	SK533		15.9	5.5		やや密(~3.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y7/1	口縁部完存	底外面墨書 初段痕
960	7-27-2	7272	陶器	山茶碗	SK533	高台径	7.3			やや密	灰白	N7/0	高台部4/12	底面墨書 初段痕 知多・猿投
961	7-64-1	7641	陶器	山茶碗	SK533		15.1			密	灰	N6/0	口縁部1/12	知多
962	7-64-7	7647	土師器	鍋	SK533					やや粗(~3.0mmの砂粒)	にぶい黄褐	10YR4/3	口縁部小片	外面に煤付着 南伊勢系
963	7-64-5	7645	陶器	甕	SD532					やや密(~4.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/3	口縁部小片	常滑
964	7-64-6	7646	陶器	甕	SD532					やや密(~10.0mmの小石)	灰褐	7.5YR4/2	口縁部小片	
965	7-64-3	7643	陶器	山茶碗	SD532					密	灰白	5Y7/1	口縁部小片	内面に煤付着 猿投・知多
966	7-64-4	7644	陶器	山茶碗	SD532					やや粗(~5.0mmの小石)	灰白	2.5Y8/1	口縁部小片	瀬戸
967	7-63-4	7634	土師器	S字壺	SD532	底径	7.7			やや密(~4.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/2	底部片	
968	7-63-8	7638	陶器	山茶碗	SK534		14.7			密(~2.0mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部1/12	知多
969	7-63-5	7635	陶器	山茶碗	SK534	高台径	6.4			やや密	灰白	2.5Y8/1	高台部10/12	初段痕 知多・猿投
970	7-63-1	7631	陶器	小皿	SK534		8.8	1.6		密(~5.0mmの小石)	灰白	5Y7/1	口縁部3/12	
971	7-65-1	7651	土師器	鍋	SK534					やや密(~3.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/3	口縁部小片	

第24表 遺物観察表

報告 番号	R No.	仮番号	質	器形	遺構	計測値			胎土	色調	残存	特記事項		
						口径 (c m)	器高 (c m)	重量 (g)						
972	7-26-4	7264	陶器	山茶椀	SZ535		13.0	5.7	やや密(～4.0mmの小石)	灰白	5Y8/1	口縁部5/12	底面墨書 靱殻痕	
973	7-28-1	7281	陶器	山茶椀	SZ535		13.6	5.8	やや粗(～5.0mmの小石・砂粒)	灰白	5Y8/1	口縁部6/12	底面墨書 靱殻痕	
974	7-30-1	7301	陶器	山茶椀	SZ535	高台径	6.5		やや密(微砂粒)	灰白	5Y7/1	高台部小片	底面墨書 靱殻痕	
975	7-30-3	7303	陶器	山茶椀	SZ535	高台径	6.3		やや密	灰白	5Y7/1	高台部2/12	底面墨書	
976	7-29-5	7295	陶器	山茶椀	SZ535	高台径	5.2		やや密(～3.0mmの砂粒)	灰白	5Y7/1		底面墨書 靱殻痕	
977	7-67-3	7673	陶器	山茶椀	SZ535		13.5	5.5	やや粗(～3.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部4/12	靱殻痕 瀬戸	
978	7-66-4	7664	陶器	山茶椀	SZ535		13.7	5.2	やや粗(～4.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部10/12	瀬戸	
979	7-66-2	7662	陶器	山茶椀	SZ535		16.0	6.3	やや密(～2.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部1/12	瀬戸・猿投	
980	7-67-2	7672	陶器	山茶椀	SZ535		13.5	5.4	やや粗(～2.0mmの砂粒)	灰白	5Y8/1	口縁部2/12	瀬戸	
981	7-67-4	7674	陶器	山茶椀	SZ535		13.3	5.8	やや粗(～6.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部完存	瀬戸	
982	7-66-1	7661	陶器	山茶椀	SZ535		14.2	5.05	やや密	灰白	N7/0	口縁部5/12	靱殻痕 猿投?	
983	7-66-3	7663	陶器	山茶椀	SZ535		13.8	4.65	やや密	灰白	N8/0	口縁部完存	瀬戸・猿投	
984	7-67-1	7671	陶器	山茶椀	SZ535		14.8		やや密(～2.0mmの砂粒)	灰白	N7/0	口縁部3/12	瀬戸・猿投	
985	7-70-4	7704	陶器	小皿	SZ535		8.5	1.5	やや粗(～4.0mmの小石・砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部7/12	猿投・知多	
986	7-14-8	7148	青磁	椀	SZ535				密	(釉)明抄-ア 灰 (素地)灰白	2.5GY7/1 N8/0	口縁部片		
987	7-13-7	7137	白磁	椀	SZ535	高台径	6.9		密	(釉)灰白 (素地)灰白	10Y8/1 N8/0	高台部3/12		
988	7-69-1	7691	土師器	鍋	SZ535		30.0		やや密(微砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/2	口縁部2/12	外面に煤付着 南伊勢系	
989	7-68-1	7681	土師器	鍋	SZ535		21.1		やや密	黒褐	10YR3/2	口縁部3/12	外面に煤付着 南伊勢系	
990	7-69-2	7692	土師器	羽釜	SZ535				やや粗(～2.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/2	体部小片	中北勢系	
991	7-69-4	7694	土師器	小皿	SZ535		8.0	0.9	やや密	灰白	10YR8/2		南伊勢系	
992	7-69-3	7693	土師器	小皿	SZ535		8.2	0.8	やや密(微砂粒)	浅黄橙	10YR8/3		南伊勢系	
993	7-25-1	7251	陶器	山茶椀	SK536		15.6	5.6	やや密(～4.0mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部完存	側面「〇」外面「×」 墨書 靱殻痕	
994	7-70-1	7701	陶器	山茶椀	SK536		15.2	5.0	やや粗(～6.0mmの小石・砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部4/12	靱殻痕 知多・猿投	
995	7-70-2	7702	陶器	山茶椀	SK536		15.2	5.3	やや密	灰白	5Y7/1	口縁部3/12	靱殻痕 猿投・瀬戸	
996	7-70-3	7703	陶器	山茶椀	SK536		14.5		密	灰白	5Y7/1	口縁部4/12	内外面に煤付着 知多・猿投	
998	7-88-1	7881	鉄	小刀	SX537	残存	長22.0	幅3.4						木質付着
999	7-78-1	7781	土師器	皿	SX537		13.0	2.0	密(～1.0mmの砂粒)	灰白	5Y8/0	口縁部ほぼ完存	南伊勢系	
1000	7-78-4	7784	土師器	小皿	SX537		7.3	1.0	やや密(～1.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/2	口縁部完存	南伊勢系	
1001	7-78-2	7782	土師器	小皿	SX537		8.1	0.9	密(～1.5mmの砂粒)	灰白	10Y8/1	口縁部完存	南伊勢系	
1002	7-78-3	7783	土師器	小皿	SX537		7.4	1.0	やや粗(～1.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/2	口縁部完存	南伊勢系	
1003	7-84-1	7841	陶器	大甕	SX537		41.3	60.0	やや密	(釉)赤褐 (素地)灰白	7.5Y7/1 10R5/3	口縁部10/12	常滑	
1004	7-77-5	7775	須恵器	杯蓋	SR539		17.6		やや密(～2.5mmの砂粒)	灰	N5/0	口縁部1/12		
1005	7-77-6	7776	須恵器	杯身	SR539	受部径	15.6		密(～1.5mmの砂粒)	灰	N5/0	受部部1/12		
1006	7-21-4	7214	須恵器	杯身	SR539		11.6	3.4	やや密(～1.5mmの砂粒)	灰白	N7/0	口縁部3/12		
1007	7-73-4	7734	須恵器	杯身	SR539		13.7	5.1	やや粗(～2.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部小片		
1008	7-77-4	7774	須恵器	杯身	SR539	高台径	8.2		密	灰	N6/0	高台部4/12		
1009	7-75-6	7756	黒色土器	椀	SR539	高台径	10.0		やや密(～2.0mmの砂粒)	灰	N5/0	高台部4/12		
1010	7-75-4	7754	黒色土器	椀	SR539	高台径	7.6		やや密(～2.0mmの砂粒)	浅黄橙	10YR8/3	高台部5/12		
1011	7-78-5	7785	黒色土器	椀	SR539	高台径	7.8		密	暗灰	N3/0	高台部2/12		
1012	7-74-3	7743	陶器	小皿	SR539		8.7	1.6	やや密	灰白	N7/0	口縁部7/12	猿投・知多	
1013	7-75-3	7753	口口土師器	小皿	SR539		10.0	2.65	やや粗(～2.0mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/4	口縁部7/12		
1014	7-76-5	7765	土師器	小皿	SR539		8.0	1.0	密(～1.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/2	口縁部完存	南伊勢系	
1015	7-76-6	7766	土師器	小皿	SR539		7.3	1.4	密(～3.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/1	口縁部7/12	中北勢系	
1016	7-76-4	7764	土師器	小皿	SR539		7.4～7.9	0.9～1.95	やや密(～1.5mmの砂粒)	浅黄橙	7.5YR8/4	口縁部完存	南伊勢系	
1017	7-76-2	7762	土師器	鍋	SR539		26.0		粗(～2.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/2	口縁部1/12	外面に煤付着 南伊勢系	
1018	7-75-2	7752	土師器	鍋	SR539		26.2		やや粗(～3.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/2	口縁部2/12	外面に煤付着 南伊勢系	
1019	7-75-1	7751	土師器	鍋	SR539		27.9		粗(～3.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR6/3	口縁部2/12	外面に煤付着 南伊勢系	
1020	7-76-3	7763	土師器	鍋	SR539		18.2		粗(～3.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/2	口縁部2/12	外面に煤付着 南伊勢系	
1021	7-76-1	7761	土師器	鍋	SR539		25.0		やや密(～2.5mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/3	口縁部3/12	外面に煤付着 南伊勢系	
1022	7-77-2	7772	土師器	羽釜	SR539		23.0		やや密(～3.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/3	口縁部2/12	穿孔1ヶ所 外面に 煤付着 中北勢系	
1023	7-77-1	7771	土師器	羽釜	SR539		28.4		やや粗(～2.0mmの砂粒)	浅黄橙	7.5YR8/3	口縁部1/12	外面に煤付着 南伊勢系	
1024	7-21-1	7211	陶器	山茶椀	SR539		16.2	4.75	密(～1.0mmの砂粒)	灰白	5Y8/1	口縁部1/12	底面墨書 靱殻痕	
1025	7-21-2	7212	陶器	山茶椀	SR539	高台径	7.4		やや密(2.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	高台部11/12	底面墨書	
1026	7-22-1	7221	陶器	山茶椀	SR539	高台径	8.6		やや粗(～2.5mmの砂粒)	灰白	5Y8/1	高台部4/12	底面墨書 靱殻痕	
1027	7-24-3	7243	陶器	山茶椀	SR539	高台径	5.4		やや密(～1.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	高台部2/12	底面墨書 靱殻痕	

第25表 遺物観察表

報告 番号	R No.	仮番号	質	器形	遺構	計測値			胎土	色調	残存	特記事項	
						口径 (c m)	器高 (c m)	重量 (g)					
1028	7-22-3	7223	陶器	山茶椀	SR539	高台径	6.0		やや密(～1.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	高台部6/12	底面墨書
1029	7-24-1	7241	陶器	山茶椀	SR539	高台径	6.4		やや粗(～4.0mmの小石)	灰白	N8/0	高台部4/12	底面墨書 粗殻痕
1030	7-24-2	7242	陶器	山茶椀	SR539	高台径	5.2		やや密(～2.5mmの砂粒)	灰白	N8/0	高台部8/12	底面墨書 粗殻痕
1031	7-24-5	7245	陶器	山茶椀	SR539	高台径	5.8		やや粗(～1.5mmの砂粒)	灰白	N8/0	高台部小片	底面墨書
1032	7-71-1	7711	陶器	山茶椀	SR539		15.7	5.3	やや密(～1.5mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部完存	渥美
1033	7-74-2	7742	陶器	山茶椀	SR539		15.2	5.0	やや粗(～2.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部1/12	知多・猿投
1034	7-72-4	7724	陶器	山茶椀	SR539		17.0	6.4	やや粗(～2.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部3/12	渥美
1035	7-73-2	7732	陶器	山茶椀	SR539		16.1	5.7	やや密	灰白	N7/0	口縁部3/12	渥美
1036	7-73-1	7731	陶器	山茶椀	SR539		15.8	5.55	やや粗(～3.0mmの砂粒)	灰白	N7/0	口縁部5/12	粗殻痕 知多・猿投
1037	7-71-6	7716	陶器	山茶椀	SR539		17.1	5.5	やや密(～2.0mmの砂粒)	灰白	5Y8/1	口縁部2/12	粗殻痕 瀬戸？
1038	7-72-2	7722	陶器	山茶椀	SR539		16.2	4.9	やや密	灰白	N8/0	口縁部4/12	粗殻痕 猿投・瀬戸
1039	7-73-3	7733	陶器	山茶椀	SR539		16.4	4.8	やや粗(～2.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部1/12	内面に煤付着 渥美
1040	7-72-1	7721	陶器	山茶椀	SR539		17.6	5.35	密	灰白	N8/0	口縁部1/12	瀬戸・猿投
1041	7-72-5	7725	陶器	山茶椀	SR539		16.1	5.25	やや粗(～5.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部2/12	粗殻痕 知多・猿投
1042	7-71-5	7715	陶器	山茶椀	SR539		15.3	5.4	粗(～4.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y7/1	口縁部9/12	粗殻痕 知多・猿投
1043	7-71-4	7714	陶器	山茶椀	SR539		14.5	5.0	やや密(～2.5mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部7/12	粗殻痕 知多
1044	7-71-3	7713	陶器	山茶椀	SR539		14.8	5.8	やや粗(～2.5mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部5/12	粗殻痕 知多
1045	7-74-1	7741	陶器	山茶椀	SR539		13.6	5.5	やや粗(～2.0mmの砂粒)	灰白	N7/0	口縁部5/12	粗殻痕 知多・猿投
1046	7-71-2	7712	陶器	山茶椀	SR539		15.1	5.0	粗(～3.5mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部完存	粗殻痕 知多
1047	7-72-3	7723	陶器	山茶椀	SR539		12.8	4.2	やや粗(～2.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部5/12	内面に煤付着 瀬戸？
1048	7-74-5	7745	陶器	小皿	SR539		8.6	1.8	やや密(～1.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部5/12	知多・猿投
1049	7-74-4	7744	陶器	小皿	SR539		8.0	1.45	やや密	灰白	N7/0	口縁部完存	知多・猿投
1050	7-77-3	7773	陶器	壺	SR539		19.6		やや密(～2.5mmの砂粒)	黄灰	2.5Y5/1	口縁部2/12	常滑
1051	7-14-6	7146	青磁	椀	SR539	高台径	5.5		密	(釉)オリブ灰 (素地)灰白	5GY6/1 N7/0	高台部7/12	
1052	7-14-4	7144	青磁	椀	SR539				密	(釉)明利-ア灰 (素地)灰白	2.5GY7/1 N7/0	底部片	
1053	7-75-5	7755	陶器	練鉢	SR539				やや粗(～3.5mmの砂粒)	灰	N5/0	口縁部小片	瀬戸
1055	7-78-11	77811	土師質	支脚	SR539	残存	長5.1	径2.2					
1056	7-78-10	77810	土師質	土錘	SR539		長4.7	径1.3	6.45				
1057	7-78-7	7787	弥生土器	壺	SK541	底径	6.6		粗(～5.0mmの小石・砂粒)	にふい橙	10YR7/3	底部完存	
1058	7-78-6	7786	土師器	小皿	SD544		9.5		密	橙	2.5YR7/6	口縁部1/12	ての字小皿(京都系)
1059	7-80-2	7802	陶器	播鉢	SD545				やや密	浅黄橙	7.5YR8/4	口縁部片	信楽
1060	7-13-8	7138	緑釉陶器	椀	SD545				密	灰白	N7/0	小片	
1061	7-79-1	7791	陶器	山茶椀	SD545				密	灰白	5Y7/1	口縁部片	猿投・瀬戸
1062	7-79-3	7793	陶器	山茶椀	SD545	高台径	6.0		密	灰白	5Y7/1	高台部9/12	粗殻痕 知多
1063	7-79-2	7792	陶器	山茶椀	SD545	高台径	7.6		密	灰白	5Y7/1	高台部完存	粗殻痕 瀬戸・猿投
1064	7-79-5	7795	陶器	山茶椀	SD545	高台径	8.1		密	灰白	5Y7/1	高台部4/12	知多？
1065	7-79-7	7797	陶器	山茶椀	SD545	高台径	8.6		密	灰白	5Y7/1	高台部4/12	猿投・瀬戸
1066	7-79-4	7794	陶器	山茶椀	SD545	高台径	8.0		密	灰白	5Y7/1	高台部3/12	猿投・知多
1067	7-80-3	7803	陶器	壺	SD545		12.0		密	(釉)褐 (素地)灰白	7.5YR4/3 5Y7/1	口縁部3/12	瀬戸美濃系
1068	7-79-6	7796	陶器	壺	SD545	底径	14.0		密	灰	N6/0	底部2/12	
1069	7-80-1	7801	瓦	丸瓦	SD545	残存	長11.4	厚1.8	やや粗(～3.0mmの砂粒)	灰	N5/0		
1070	7-78-9	7789	口口土師器	杯or皿	SK547	底径	6.4		やや粗(～2.5mmの砂粒)	橙	5YR7/6	底部完存	
1071	7-83-7	7837	須恵器	杯身	F5p1		11.4	3.7	密	灰白	N7/0	口縁部小片	
1072	7-82-4	7824	陶器	山茶椀	Q3p1	高台径	8.2		やや密(～4.0mmの小石)	灰白	N8/0	高台部3/12	知多・猿投
1073	7-82-8	7828	陶器	山茶椀	L5p1	高台径	7.6		やや粗(～2.5mmの砂粒)	灰白	N8/0	高台部3/12	粗殻痕 知多・猿投
1074	7-83-6	7836	土師器	小皿	K6p1		7.7	0.9	やや密(～1.5mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/1	口縁部9/12	
1075	7-2-6	726	土師器	高杯	0区包	基底部径	3.3		やや密(～2.5mmの砂粒)	淡橙	5YR8/4	基底部ほぼ完存	三方透かし 東海系
1076	7-4-7	747	須恵器	罎	0区包	体部径	8.0		やや密(～2.5mmの砂粒)	灰	N6/0	体部5/12	穿孔
1077	7-4-8	748	須恵器	杯蓋	0区包	つまみ径	3.1		密(～1.0mmの砂粒)	灰	N6/0		
1078	7-6-3	763	須恵器	杯身	0区包		14.0	3.6	やや密(微砂粒)	灰	N5/0	口縁部2/12	
1079	7-3-6	736	須恵器	杯身	0区包	高台径	11.3		やや密(～1.5mmの砂粒)	灰黄	2.5Y7/2	高台部2/12	
1080	7-4-6	746	須恵器	鉢	0区包				粗(～4.0mmの砂粒)	灰	7.5Y6/1	口縁部小片	
1081	7-2-4	724	須恵器	長頸壺	0区包	肩部径	16.8		やや粗(～2.5mmの砂粒)	灰白	N8/0	肩部2/12	
1082	7-13-3	7133	緑釉陶器	椀	0区包	底径	8.2		密	灰	N6/0		
1083	7-28-5	7285	陶器	山茶椀	0区包	高台径	6.0		密	灰白	5Y7/1	高台部小片	底面墨書
1084	7-28-6	7286	陶器	山茶椀	0区包	高台径	5.6		密	灰白	5Y7/1		底面墨書 粗殻痕
1085	7-28-2	7282	陶器	山茶椀	0区包	高台径	7.4		密	灰白	2.5Y7/1	高台部完存	底面墨書
1086	7-28-4	7284	陶器	山茶椀	0区包		12.6		やや粗(～4.0mmの小石・砂粒)	灰白	2.5Y8/1	口縁部3/12	外面墨書 1093と同一個体か
1087	7-29-1	7291	陶器	山茶椀	0区包	高台径	6.7		やや密	灰白	5Y7/1	高台部3/12	底面墨書 粗殻痕
1088	7-29-2	7292	陶器	山茶椀	0区包	高台径	6.7		やや密	灰白	5Y7/1	高台部5/12	底面墨書 粗殻痕

第26表 遺物観察表

報告 番号	R No.	仮番号	質	器形	遺構	計測値			胎土	色調	残存	特記事項	
						口径 (cm)	器高 (cm)	重量 (g)					
1089	7-29-4	7294	陶器	山茶椀	0区包	高台径	6.7		やや密(～3.0mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	高台部4/12	底面墨書 粉殻痕
1090	7-28-3	7283	陶器	山茶椀	0区包	高台径	6.4		密	灰白	2.5Y7/1		底面墨書 粉殻痕
1091	7-29-3	7293	陶器	山茶椀	0区包	高台径	5.7		密	灰白	5Y7/1	高台部5/12	底面墨書 粉殻痕
1092	7-30-2	7302	陶器	山茶椀	0区包	高台径	7.0		やや密(微砂粒)	灰白	5Y7/1	高台部4/12	底面墨書 粉殻痕
1093	7-30-4	7304	陶器	山茶椀	0区包				やや粗(～5.0mmの小石・砂粒)	灰白	5Y8/1	体部小片	外面墨書 1086と同一個体か
1094	7-5-8	758	陶器	山茶椀	0区包	高台径	7.2		密(～1.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	高台部5/12	内面底部に黒痕
1095	7-30-5	7305	陶器	山茶椀	0区包				やや粗(～2.5mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/1	底部小片	底面墨書
1096	7-30-6	7306	須恵器	不明	0区包				密	灰白	N7/0	体部小片	外面墨書
1097	7-12-1	7121	陶器	山茶椀	0区包		17.1	4.8	やや密	黄灰	2.5Y6/0	口縁部6/12	内面に炭化物付着
1098	7-10-5	7105	陶器	山茶椀	0区包		16.1	5.1	密	灰白	7.5Y7/1	口縁部2/12	
1099	7-10-6	7106	陶器	山茶椀	0区包		15.1	4.9	密	灰白	5Y7/1	口縁部4/12	
1100	7-11-2	7112	陶器	山茶椀	0区包		16.2	5.2	やや密(～7.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y7/1	口縁部8/12	粉殻痕
1101	7-10-7	7107	陶器	山茶椀	0区包		15.8	5.2	密	灰白	2.5Y7/1	口縁部1/12	
1102	7-11-1	7111	陶器	山茶椀	0区包		14.8	4.8	密	灰	N6/0	口縁部2/12	粉殻痕
1103	7-1-2	712	陶器	山茶椀	0区包		14.9	5.3	粗(～3.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y7/1	口縁部3/12	粉殻痕
1104	7-1-4	714	陶器	山茶椀	0区包		14.3	4.9	やや粗(～2.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部5/12	粉殻痕
1105	7-1-1	711	陶器	山茶椀	0区包		14.0	5.8	粗(～5.0mmの小石)	灰白	N8/0	口縁部完存	粉殻痕
1106	7-6-1	761	陶器	山茶椀	0区包		14.3	5.4	やや密(～1.5mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	口縁部10/12	粉殻痕
1107	7-1-3	713	陶器	山茶椀	0区包		14.3	5.2	やや密(～2.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部1/12	粉殻痕
1108	7-4-4	744	陶器	山茶椀	0区包	高台径	7.6		密(～1.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	高台部完存	粉殻痕
1109	7-11-3	7113	陶器	山茶椀	0区包	高台径	6.2		密(～3.0mmの砂粒)	灰白	7.5Y7/1	高台部6/12	粉殻痕
1110	7-10-3	7103	陶器	小椀	0区包	高台径	6.5		やや密	灰白	2.5Y8/1	高台部11/12	
1111	7-4-1	741	陶器	小椀	0区包		9.0	3.0	密(～1.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部4/12	
1112	7-4-2	742	陶器	小皿	0区包		8.0	2.45	やや粗(～1.5mmの砂粒)	灰白	N8/0	口縁部7/12	
1113	7-10-1	7101	陶器	小皿	0区包		8.1	2.3	密	灰白	2.5Y8/1	口縁部7/12	
1114	7-10-2	7102	陶器	小皿	0区包		8.4	1.5	密(～4.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/1	口縁部5/12	
1115	7-10-4	7104	陶器	小皿	0区包		8.3	1.8	やや密(～3.0mmの砂粒)	灰白	5Y8/2	口縁部2/12	
1116	7-4-3	743	陶器	小皿	0区包		7.8	1.9	やや密(～1.0mmの砂粒)	灰白	N7/0	口縁部9/12	
1117	7-1-8	718	陶器	小皿	0区包		8.4	1.9	やや粗(～4.0mmの小石)	灰白	N8/0	口縁部5/12	
1118	7-6-2	762	陶器	鉢	0区包	高台径	12.0		やや密(～4.0mmの小石・砂粒)	灰白	5Y7/1	高台部3/12	
1119	7-11-4	7114	陶器	鉢	0区包	高台径	10.4		やや密	灰	N6/0	高台部3/12	
1120	7-12-2	7122	陶器	鉢	0区包				粗(～4.0mmの砂粒)	灰白	5Y8/1	高台部片	
1121	7-7-2	772	土師器	鍋	0区包		29.0		やや密(微砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/2	口縁部1/12	外面に煤付着
1122	7-5-3	753	土師器	鍋	0区包				やや密(～1.5mmの砂粒)	灰黄褐	10YR6/2	口縁部小片	外面に煤付着
1123	7-2-2	722	土師器	鍋	0区包		27.0		やや密(～2.0mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/3	口縁部2/12	
1124	7-7-1	771	土師器	鍋	0区包				やや粗(～4.0mmの小石・砂粒)	灰白	10YR8/2	口縁部片	
1125	7-5-4	754	土師器	羽釜	0区包		19.6		やや粗(～1.5mmの砂粒)	橙	5YR7/6	口縁部2/12	
1126	7-12-3	7123	土師器	鍋	0区包				やや粗(～3.0mmの砂粒)	褐	7.5YR4/3	口縁部片	清燗型
1127	7-2-5	725	口土師器	椀	0区包		14.0	4.7	やや密(～2.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/2	口縁部1/12	
1128	7-5-1	751	口土師器	小皿	0区包		9.8	2.0	やや粗(～1.5mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR6/4	口縁部6/12	
1129	7-7-4	774	土師器	小皿	0区包		9.0	2.1	やや密	灰白	2.5Y8/1	口縁部4/12	口縁内側油脂付着
1130	7-1-7	717	土師器	小皿	0区包		9.0	2.1	やや粗(～5.5mmの小石)	灰白	2.5Y8/1	口縁部6/12	
1131	7-5-2	752	土師器	小皿	0区包		10.0	1.2	やや密(～1.5mmの砂粒)	橙	2.5YR7/6	口縁部2/12	
1132	7-7-3	773	土師器	小皿	0区包		10.2	1.7	やや密	浅黄橙	10YR8/3	口縁部3/12	
1133	7-1-5	715	土師器	小皿	0区包		10.7	1.4	密	灰白	10YR8/2	口縁部3/12	ての字小皿(京都系)
1134	7-6-5	765	陶器	大甕	0区包				やや密(微砂粒)	黄灰	2.5Y4/1	口縁部片	常滑
1135	7-6-4	764	陶器	大甕	0区包				やや粗(～4.0mmの小石・砂粒)	にぶい橙	5YR6/4	口縁部片	常滑
1136	7-3-1	731	陶器	大甕	0区包				やや粗(～4.0mmの砂粒)	(釉)暗赤褐 (素地)灰褐	2.5YR3/3 5YR6/2	口縁部小片	常滑
1137	7-3-2	732	陶器	甕	0区包				やや密(～1.5mmの砂粒)	灰褐	5YR4/2	口縁部小片	常滑
1138	7-14-1	7141	白磁	椀	0区包				密	(釉)灰白 (素地)灰白	2.5GY8/1 N8/0	口縁部片	
1139	7-3-3	733	陶器	天目茶椀	0区包		11.7	5.9	密(微砂)	(釉)褐 (素地)灰白	7.5YR4/3 10YR8/2	口縁部4/12	
1140	7-14-5	7145	白磁	椀	0区包	底径	5.2		密	(釉)明刈-ブ灰 (素地)灰白	5GY7/1 N8/0		
1141	7-14-3	7143	青磁	皿	0区包				密	(釉)刈-ブ灰 (素地)灰白	2.5GY6/1 N7/0	口縁部片	
1142	7-3-4	734	陶器	緑釉小皿	0区包		10.7		密(微砂粒)	(釉)オリ-ブ黄 (素地)灰白	5Y6/3 5Y7/1	口縁部2/12	
1143	7-1-6	716	陶器	灯明皿	0区包		10.0	2.1	やや粗(～1.0mmの砂粒)	(釉)暗褐 (素地)灰黄	7.5YR3/3 2.5Y7/2	口縁部11/12	
1144	7-14-7	7147	青磁	椀	0区包	高台径	5.5		密	(釉)明緑灰 (素地)灰白	10GY7/1 N7/0	高台部2/12	花文印刻
1145	7-2-1	721	陶器	鉢	0区包		34.0		密	灰	5Y6/1	口縁部2/12	

第27表 遺物観察表

報告 番号	R No.	仮番号	質	器形	遺構	計測値			胎土	色調	残存	特記事項		
						口径 (cm)	器高 (cm)	重量 (g)						
1146	7-9-2	792	瓦	軒丸瓦	0区包	残存	長5.9		厚1.4	やや密(～2.0mmの砂粒)	灰白			
1147	7-9-1	791	瓦	平瓦	0区包	残存	長14.5	幅10.8	厚2.0	粗(～6.0mmの小石・砂粒)	灰	N6/0		
1152	7-5-7	757	土師質	土玉	0区包	残存	(幅)3.15	(厚)2.2	18.8	やや粗(～1.5mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/4		
1153	7-5-5	755	土師質	土鍾	0区包		(長)4.5	(幅)1.0	3.8	密(～1.0mmの砂粒)	橙	5YR7/6		
1154	7-5-6	756	土師質	土鍾	0区包	残存	(長)2.0	(幅)0.8	0.9	密(～1.0mmの砂粒)	浅黄橙	7.5YR8/4		
1155	7-85-1	7851	銅	銅銭	0区包	直径	2.3						「皇宋通宝」	
1156	7-85-2	7852	銅	銅銭	0区包	直径	2.2						「至道元宝」	
1157	8-19-1	8191	陶器	練鉢	SD802		26.0	9.40		密(～2.0mmの砂粒)	橙	2.5Y6/6	底部に煤付着 煮沸具? 常滑	
1158	8-5-2	852	弥生土器	壺	SD802	底径	9.0			やや密(～3.0mmの砂粒)	浅黄橙	10YR8/3	底部4/12 弥生中期後半～ 後期前半	
1159	8-18-4	8184	土師器	小皿	SD802		8.0	2.00		密	灰白	10YR8/2	口縁部完存 南伊勢系	
1160	8-18-3	8183	土師器	小皿	SD802		9.6	2.10		密	灰白	10YR8/2	口縁部完存 南伊勢系	
1162	8-16-4	8164	陶器	山茶碗	SD803	高台径	7.6			密(～1.5mmの砂粒)	灰白	N7/0	高台径11/12 渥美系	
1163	8-16-3	8163	土師器	皿	SD803		8.7	1.90		密(～1.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/1	口縁部9/12 中北勢系 (南伊勢模倣)	
1164	8-16-5	8165	土師器	皿	SD803		8.5	2.40		密(～3.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/2	口縁部9/12 南伊勢系	
1165	8-16-6	8166	土師器	皿	SD803		8.6	2.40		密(～3.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y8/2	口縁部8/12 南伊勢系	
1166	8-18-2	8182	土師器	鍋	SD803		29.0			密	灰白	10YR8/2	口縁部1/12 外面に煤付着 南伊勢系4c類	
1167	8-23-1	8231	土師器	鍋	SD803		29.0			やや密	灰白	10YR8/2	口縁部3/12 外面に煤付着 南伊勢系2b類	
1168	8-44-1	8441	土師器	鍋	SD803		30.0			密	灰白	10YR8/1～2	口縁部3/1～2 外面に煤付着 南伊勢系4b類	
1169	8-18-1	8181	土師器	茶釜	SD803		15.8			密	灰白	10YR8/2	口縁部5/12 外面に煤付着 南伊勢系?	
1170	8-18-5	8185	陶器	壺	SD803	底径	16.5			密(～8.0mmの小石・砂粒)	にぶい褐	7.5YR6/3	底部2/12 常滑	
1173	8-19-3	8193	須恵器	罌	SD804	胴部径	7.6			密	灰白	N7/0	口縁部欠	
1174	8-2-2	822	陶器	山茶碗	SD804	高台径	7.6			密(～1.5mmの砂粒)	灰白	5Y7/1	高台部5/12 底部墨書略押状記号 渥美	
1175	8-2-1	821	陶器	山茶碗	SD804	高台径	7.5			密(～1.0mmの砂粒)	灰白	N8/0	高台部6/12 底部墨書「○」渥美	
1181	8-23-2	8232	灰釉陶器	壺	SD806	底径	13.0			やや密	灰白	10Y8/1	底部5/12	
1182	8-22-3	8223	灰釉陶器	碗	SD806	高台径	6.2			密	灰白	N8/0	高台部5/12	
1183	8-23-6	8236	土師器	小皿	SD806		11.0			やや粗(～0.5mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/4	口縁部2/12	
1184	8-22-1	8221	土師器	台付皿	SD806	高台径	8.1			やや密	灰白	2.5Y8/1	高台部9/12 外面に煤付着	
1185	8-21-9	8219	土師器	高杯	SD812	底部径	2.6			やや粗(～1.5mmの砂粒)	橙	5Y R6/6	底部完存	
1186	8-23-5	8235	土師器	皿	SD814		10.6			やや密	灰白	10YR8/1	口縁部2/12 南伊勢系	
1187	8-20-6	8206	弥生土器	高杯	SD816	脚柱 上部径	2.7			やや密(～1.5mmの砂粒)	橙	5YR7/6		透かしあり
1188	8-20-1	8201	弥生土器	高杯	SD816	底径	12.0			粗(～1.5mmの砂粒)	にぶい橙	7.5YR7/4	底部2/12	三方透かし
1189	8-20-3	8203	弥生土器	高杯	SD816	脚柱 上部径	2.9			粗(～4.5mmの小石)	淡赤橙	2.5YR7/3		
1190	8-20-7	8207	弥生土器	高杯	SD816	脚柱 上部径	2.4			密(～1.0mmの砂粒)	橙	5YR6/6		透かし1つ確認
1191	8-20-5	8205	土師器	高杯	SD816	脚柱 上部径	2.7			やや粗(～1.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/2		
1192	8-21-7	8217	土師器	小形丸底鉢	SD816	頸部径	6.1			粗(～1.0の砂粒)	橙	2.5YR7/6	頸部6/12	
1193	8-22-2	8222	土師器	甕	SD816	底部径	6.2			やや密	浅黄橙	10YR8/3	底部完存	
1194	8-21-6	8216	土師器	甕	SD816	底部 基部径	5.6			粗(～2.0mmの砂粒)	浅黄橙	7.5YR8/4	底部基部完存	
1195	8-21-2	8212	土師器	甕	SD816		14.8			やや密(～1.5mmの砂粒)	灰白	10YR8/2	口縁部小片	
1196	8-21-1	8211	土師器	甕	SD816		14.0			粗(～3.0mmの砂粒)	浅黄橙	10YR8/3	口縁部1/12	
1197	8-20-4	8204	土師器	甕	SD816		32.0			やや密(～1.0mmの砂粒)	淡橙	5YR8/4	口縁部1/12	
1198	8-21-4	8214	須恵器	杯身	SD816		13.0			やや粗(～3.0mmの砂粒)	灰	N6/0	口縁部1/12	
1199	8-21-5	8215	須恵器	杯身	SD816		12.0			やや粗(～2.0mmの砂粒)	灰白	2.5Y7/1	口縁部1/12	
1200	8-21-3	8213	土師器	S字壺	SK819		16.7			やや粗(～1.5mmの砂粒)	浅黄橙	10YR8/3	口縁部小片	O類
1201	8-21-8	8218	土師器	高杯	SK819	頸部径	3.0			粗(～1.5mmの砂粒)	橙	5YR7/6		三方透かし 有稜高杯
1202	8-20-2	8202	土師器	高杯	SK819	脚柱 上部径	3.3			やや粗(～3.0mmの砂粒)	橙	5YR7/6		有稜高杯
1204	8-25-1	8251	弥生土器	高杯	P区包	脚柱部径	4.8			やや密(～2.5mmの砂粒)	にぶい黄橙	10YR7/3	脚柱部完存	透かし孔1つ
1205	8-27-4	8274	土師器	高杯	P区包	脚柱 上部径	2.8			やや密	橙	5YR6/8	脚柱上部完存	三方透かし
1206	8-26-4	8264	土師器	高杯	P区包	脚柱 上部径	3.0			やや密	橙	5YR6/6	脚柱上部完存	透かし
1207	8-27-2	8272	土師器	S字壺	P区包					やや密(微砂粒)	灰白	10YR8/2	口縁部片	B類
1208	8-25-3	8253	土師器	S字壺	P区包	頸部径	4.9			やや密	にぶい橙	7.5YR6/4		D類?
1209	8-26-5	8265	須恵器	杯蓋	P区包		14.2			密	灰	N6/0	口縁部4/12	
1210	8-44-3	8443	須恵器	杯身	P区包		13.4			密	灰	N6/0	口縁部1/12	
1211	8-25-6	8256	須恵器	杯身	P区包		12.9			密	灰	N6/0	口縁部1/12	
1212	8-25-5	8255	須恵器	杯身	P区包		13.3			密	灰	N6/0	口縁部1/12	
1213	8-37-4	8374	須恵器	杯身	P区包		13.1			やや密	褐灰	5YR5/1	口縁部2/12	
1214	8-25-7	8257	須恵器	横瓶	P区包		12.7			密	灰	N6/0	口縁部4/12	

第28表 遺物観察表

報告 番号	R No.	仮番号	質	器形	遺構	計測値			胎土	色調		残存	特記事項
						口径 (cm)	器高 (cm)	重量 (g)					
1215	8-27-5	8275	須恵器	有蓋高杯蓋	P区包	つまみ径	2.5		密	灰白	N7/0		
1216	8-27-3	8273	土師器	甕	P区包		16.0		密	にぶい橙	7.5YR7/4	口縁部3/12	外面に煤付着
1217	8-26-3	8263	土師器	大形鉢	P区包		34.3		密	橙	5YR7/6	口縁部1/12	把手付鍋か？
1218	8-26-1	8261	灰釉陶器	椀	P区包	高台径	7.8		密	灰白	5Y8/1	高台部10/12	瀬戸・猿投
1219	8-27-8	8278	灰釉陶器	椀	P区包	高台径	8.0		密	灰白	5Y7/1	高台部3/12	猿投・瀬戸
1220	8-24-3	8243	陶器	山茶椀	P区包		15.4	6.80	やや密	灰白	N7/0	口縁部3/12	炭化物付着 渥美
1221	8-24-2	8242	陶器	山茶椀	P区包		15.0	5.00	やや密	灰白	N8/0	口縁部2/12	猿投・瀬戸
1222	8-24-4	8244	陶器	山茶椀	P区包		13.6	4.70	やや粗	灰白	N8/0	口縁部3/12	瀬戸9型式
1223	8-24-1	8241	陶器	山茶椀	P区包		14.0	5.20	密	灰白	N8/0	口縁部9/12	瀬戸
1224	8-2-5	825	陶器	山茶椀	P区包	高台径	6.7		密(～4.0mmの砂粒)	灰白	5Y8/1	高台部1/12	底部墨書「+」 粉痕 瀬戸
1225	8-3-2	832	陶器	山茶椀	P区包	高台径	5.6		密(～1.5mmの砂粒)	灰白	N8/0	高台部10/12	底部墨書「↑」 瀬戸・猿投
1226	8-3-1	831	陶器	山茶椀	P区包	底径	6.0		密(～2.0mmの砂粒)	灰白	N8/0		底面墨書あり 瀬戸・猿投
1227	8-25-4	8254	陶器	小皿	P区包		8.0	1.60	密	灰白	2.5Y7/1	口縁部6/12	猿投・瀬戸
1228	8-24-9	8249	陶器	小皿	P区包		8.5	2.00	やや密(～4.0mmの砂粒)	灰白	N7/0	口縁部9/12	知多・猿投
1229	8-27-1	8271	大口土師器	椀	P区包	高台径	8.0		やや密	浅黄橙	7.5YR8/4	高台部10/12	
1230	8-24-5	8245	大口土師器	椀	P区包	高台径	7.9		やや粗(～2.0mmの砂粒)	にぶい橙	5YR7/4	高台径2/12	
1231	8-27-6	8276	土師器	鍋	P区包				やや密(～3.0mmの砂粒)	にぶい赤褐		口縁部片	清郷型
1232	8-24-7	8247	土師器	小皿	P区包		10.9	1.10	やや密	橙	5YR7/6	口縁部7/12	ての字小皿(中北勢系)
1233	8-24-8	8248	土師器	小皿	P区包		11.1	1.65	やや密	灰白	10YR8/2	口縁部3/12	ての字小皿(中北勢系)
1234	8-24-6	8246	土師器	小皿	P区包		11.0	1.30	やや密	橙	5YR7/6	口縁部9/12	ての字小皿(中北勢系)
1235	8-37-3	8373	土師器	鍋	P区包		20.2		やや密(～2.0mmの砂粒)	灰白	10YR8/1	口縁部1/12	外面に煤付着
1238	8-38-1	8381	瓦	鬼瓦	P区包	残存	15.4×15.9		厚3.8	密	灰白	N8/0	
1268	6-89-1	6891	鉄製品	刀子	SX425	残存	(長)20	(幅)2.5	(厚)0.5				
1273			鉄製品	鉄滓	SD514								写真のみ
1274			鉄製品	鉄滓	SK265								写真のみ
1275			鉄製品	鉄滓	L区包(B3)								写真のみ
1276				甗	SE259								写真のみ

第29表 遺物観察表

報告番号	R N o.	報告地区	遺構名	出土地区等	調査時遺構名	器種	法量 (cm)			重量 (g)	石材	備考
							長さ	幅	厚さ			
6	5-18-07	J	SR606	5次J地区Q2	流路中	有孔円板	2.2	1.3	0.35	1.575	滑石	
80	5-20-04	J	J-M3p7	5次J地区M3	Pit7	砥石	5.7	4.1	1.1	53	凝灰岩	
88	5-18-06	J	J区包	5次J地区R7	包	石包丁	11.7	3.4	0.8	40.660	塩基性岩	
131	6-67-02	L	SH207	6次C地区G2	SH7-IV	石鏃	1.9	1.2	0.3	0.450	サヌカイト	ほぼ完形
132	6-67-01	L	SH207	6次C地区H2	SH7北東	石鏃	2.2	1.6	0.4	0.920	サヌカイト	
133	6-66-02	L	SH207	6次C地区3G	SH7アゼ	石鏃	3.55	1.15	0.7	3.060	サヌカイト	
134	6-67-11	L	SH207	6次C地区G3	SH7	RF	4.5	3.65	0.4	8.710	サヌカイト	
137	6-67-04	L	SH251	6次C地区C8	SH51-Ⅲ中層	石鏃	2.7	1.7	6.0	2.660	サヌカイト	完形
138	6-31-06	L	SH251	6次C地区D8	SK51-Ⅲ	石鏃	2.2	1.2	0.25	0.720	サヌカイト	未製品
139	6-65-01	L	SH251	6次C地区D8	SH51	柱状片刃石斧	15.4	1.85	1.9	113	ハイアロクラスタイト	完形
140	6-67-10	L	SH251	6次C地区C8	SH51-VI上層	スクレイパー	3.2	4.1	0.9	18.150	サヌカイト	
141	6-64-03	L	SH251	6次C地区D8	SH51	敲石	16.1	9.2	5.5	1.180	安山岩	ほぼ完形
151	6-67-05	L	SH311	6次C地区D13	P3(SH111内)	石鏃	1.8	1.4	0.45	0.900	サヌカイト	完形
152	6-67-03	L	SH311	6次C地区D14	SH111南側肩	石鏃	2.0	1.1	0.3	0.650	サヌカイト	
153	6-87-03	L	SH311	6次C地区D13	SH111-IV	両刃石斧	8.3	6.0	2.2	78.300	ハイアロクラスタイト	
158	6-65-03	L	SK211	6次C地区G3	SK11-I	打製石器	10.1	7.0	2.1	235	ホルンフェルス	完形
165	6-85-03	L	SK234	6次C地区7G	SK34アゼ	軽石	10.7	7.1	5.5	120	軽石	
174	6-67-06	L	SK240	6次C地区C7	SX40西	石鏃	2.8	1.6	0.9	3.170	サヌカイト	
177	6-29-04	L	SK242	6次C地区F9	SK42	石鏃	2.7	1.5	0.45	1.560	サヌカイト	完形
178	6-29-03	L	SK242	6次C地区F9	SK42	石鏃	2.2	1.5	0.3	0.770	サヌカイト	完形
203	6-67-08	L	SK284	6次C地区B8	SK84-II	スクレイパー	2.9	4.0	0.9	12.150	サヌカイト	
223	6-65-04	L	SK310	6次C地区D11	遺構直上	両刃石斧	10.0	5.2	2.85	240	ハイアロクラスタイト	
231	6-14-02	L	SK312	6次C地区F11	SD112	砥石	15.1	6.2	4.6	690	凝灰質砂岩	
236	6-67-07	L	SK314	6次C地区E10	SK314	剥片	5.3	9.0	1.3	47.490	サヌカイト	
237	6-63-02	L	SK314	6次C地区F10	P1	石鏃	3.6	1.3	0.5	1.700	サヌカイト	
244	6-64-04	L	SK326	6次C地区A-B12	遺構直上	敲石	9.3	6.4	4.4	470	閃緑岩	
249	6-63-01	L	C11p11	6次C地区C11	P11	石鏃	2.05	2.0	0.4	1.110	サヌカイト	完形
250	6-58-04	L	C2p3	6次C地区C2	P3	石鏃	2.75	1.1	0.5	1.320	サヌカイト	
251	6-64-02	L	F8p6	6次C地区F8	P6柱痕	敲石	9.7	4.15	3.3	215	砂岩	完形
252	6-64-01	L	D10p13	6次C地区D10	P13	敲石	8.05	5.65	2.9	230	泥岩	完形
454	6-66-01	L	L区包	6次C地区D-E12-13	遺構直上	石小刀	13.5	2.0	0.8	20	サヌカイト	完形
455	6-43-06	L	L区包	6次C地区D14	包	石鏃	4.1	1.1	0.7	3.090	サヌカイト	
456	6-42-08	L	L区包	6次C地区C5	第4層	石鏃	2.8	1.8	0.35	1.610	サヌカイト	完形
457	6-43-05	L	L区包	6次C地区C13	包	石鏃	2.1	1.2	0.25	0.580	サヌカイト	未製品
458	6-67-09	L	L区包	6次C地区B13	包	石鏃	2.8	1.9	1.0	4.050	サヌカイト	
459	6-65-02	L	L区包	6次C地区F5	遺構直上	片刃石斧	7.1	4.55	1.1	75	ハイアロクラスタイト	完形品
460	6-82-04	L	L区包	6次C地区D11	遺構直上	磨製石斧	6.1	4.3	1.1	44.640	ハイアロクラスタイト	転用品
534	5-34-01	M	M区包	5次I地区H4	Pit1	石鏃	5.2	2.0	0.55	5.525	サヌカイト	
535	5-34-02	M	M区包	5次I地区H12	SR7	石鏃	2.75	1.6	0.4	1.405	サヌカイト	
565	6-21-04	N	SD404	6次B2地区G3	SD304	管玉	2.6	0.85	2.15	3.530		
591	6-66-03	N	N区包	6次B2地区G3	SD306	スクレイパー	2.2	6.05	1.1	12.510	サヌカイト	ほぼ完形
592	6-03-04	N	N区包	6次B2地区G6	側溝	石鏃	2.5	1.7	0.45	1.550	サヌカイト	完形
641	8-03-03	P	SD502	8次J4	SD13	磨石?	11.1	5.3	3.5	330		
718	8-40-01	P	SD503	8次N4	SD1下層	五輪塔(火)	14.8	22.3	-	12.0 (kg)	花崗岩	
719	8-39-01	P	SD503	8次V5	SD1下層	五輪塔(地)	14.3	20.0	-	15.5 (kg)	花崗岩	
893	8-43-01	P	SD514	8次I3	SD8	五輪塔(空・風)	22.0	15.5	-	6.1 (kg)	花崗岩	
1054	7-78-08	O	SR539	7次N3	SR39	砥石	6.2	4.4	2.2	92	凝灰岩	
1148	7-08-02	O	O区包	7次W3	包	砥石	8.6	6.9	4.1	341	凝灰質砂岩	
1149	7-08-01	O	O区包	7次西区	包	砥石	14.4	9.2	3.6	610	砂質凝灰岩	
1150	7-08-03	O	O区包	7次L5	包	砥石	4.4	6.2	3.1	129	凝灰岩	
1151	7-07-05	O	O区包	7次C5	包	砥石	7.2	5.3	1.6	71	泥岩	
1203	8-27-07	P	P区包	8次M7	包	石鏃	1.8	1.1	0.3	0.645	サヌカイト	
1236	8-41-01	P	P区包	8次N3	機械掘削	五輪塔(一石)	40.8	11.0	-	6.4 (kg)	凝灰質砂岩	
1237	8-42-01	P	P区包	8次D4	機械掘削	五輪塔(水)	16.8	20.8	-	8.9 (kg)	花崗岩	

第30表 遺物観察表(石器・石製品)

報告 番号	RNo.	報告 地区	遺構名	出土地区等	調査時 遺構名	器種	残存法量 (cm)			樹種	備考
							全長	幅	厚さ		
263	6-09-01	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	杭	61.0	4.6	4.4		
264	6-09-02	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	杭	57.0	4.9	4.6	ブナ科シイ属	
265	6-16-03	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	杭	56.0	4.2	4.0		
266	6-10-02	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	杭	53.4	6.8	5.2	ブナ科シイ属	
267	6-16-02	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	杭	27.9	3.5	3.4		
268	6-09-07	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	杭	24.8	5.2	3.6		
269	6-09-05	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	杭	19.4	3.3	2.4		
270	6-09-06	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	杭	36.9	4.5	3.2	ツツジ科スノキ属 シャジャンボ	
271	6-09-03	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	杭	16.1	4.5	3.2	ツバキ科サカキ属 サカキ	
	6-09-04		SE324				24.5	5.8	7.6		
272	6-32-01	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	曲物	口径21.0	-	1.0		完存
273	6-31-01	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	曲物	口径21.2	高さ14.0	-		孔11個確認
274	6-18-01	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	楕円形曲物	口径52.0	高さ27.0	-		
275	6-03-01	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	棒状材	34.6	13.2	9.9		
276	6-12-01	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	46.0	13.0	1.8		
277	6-05-02	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	49.8	12.0	1.2		
278	6-10-03	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	53.5	11.8	1.6	スギ	
279	6-37-03	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	107.0	9.8	2.3		
280	6-13-01	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	39.9	18.4	1.8		
281	6-22-01	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	61.8	16.4	2.4		
282	6-05-01	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	47.3	14.8	2.2		
283	6-07-01	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	41.0	7.0	1.2		
284	6-14-01	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	46.5	10.0	2.0		
285	6-04-01	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	41.5	5.8	1.0		
286	6-21-03	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	71.7	15.8	2.6	マツ科モミ属	
287	6-06-01	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	113.5	14.3	4.0	スギ	
288	6-25-01	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	111.2	11.3	1.9	スギ	
289	6-35-01	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	112.5	17.0	2.6	スギ	
290	6-36-03	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	95.0	10.3	2.6	スギ	
291	6-17-02	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	118.8	16.0	6.0	スギ	
292	6-39-01	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	114.8	16.0	3.3	スギ	
293	6-22-03	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	77.0	13.4	1.4		
294	6-06-02	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	81.5	14.0	1.3		
295	6-20-03	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	48.6	13.3	2.8		
296	6-06-03	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	83.0	15.4	1.7		
297	6-37-01	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	116.2	10.2	3.1	スギ	
298	6-20-02	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	100.2	17.5	3.5	スギ	
299	6-28-02	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	84.7	14.9	2.4	マツ科モミ属	
300	6-08-01	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	89.8	3.3	2.2		
301	6-38-01	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	83.8	12.7	1.5	スギ	
302	6-33-03	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	80.5	14.5	1.5		
303	6-33-01	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	85.7	13.8	1.5		
304	6-33-02	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	88.5	11.0	1.0		
305	6-28-03	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	87.0	11.5	1.3		
306	6-17-03	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	89.5	9.5	3.1	スギ	
307	6-34-01	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	120.7	16.3	2.0	スギ	
308	6-34-02	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	118.0	18.0	1.5	スギ	
309	6-16-01	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	79.2	4.4	4.0		
310	6-41-01	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	46.2	54.0	3.1	スギ	
311	6-40-02	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	103.6	9.3	1.1		
312	6-22-02	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	65.1	11.5	1.4		
313	6-38-03	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	92.5	10.5	1.5	スギ	
314	6-11-01	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	46.7	14.6	2.3	スギ	
315	6-40-03	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	101.7	11.5	1.5		
316	6-10-04	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	91.0	10.5	1.0	スギ	

第31表 遺物観察表 (木製品)

報告 番号	RNo.	報告 地区	遺構名	出土地区等	調査時 遺構名	器種	残存法量 (cm)			樹種	備考
							全長	幅	厚さ		
317	6-21-02	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	69.8	13.5	2.8		
318	6-39-03	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	108.3	8.5	1.8		
319	6-27-01	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	87.9	6.4	1.1		
320	6-26-02	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	47.2	9.5	2.5		
321	6-08-02	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	46.3	11.2	1.1	スギ	
322	6-08-03	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	51.9	13.6	1.1		
323	6-38-02	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	81.5	8.5	3.3	スギ	
324	6-15-02	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	棒状材	33.1	5.2	4.2	スギ	
325	6-32-02	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	25.2	6.0	0.3		
326	6-10-05	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	棒状材	87.9	4.5	2.6	スギ	
327	6-15-01	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	38.6	8.1	2.6	スギ	
328	6-20-01	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	A 100.0	11.0	1.8		
328	6-20-01	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	B 91.0	10.0	1.7		
328	6-20-01	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	C 92.5	5.3	1.1		
329	6-36-02	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	97.0	11.0	1.0		
330	6-21-01	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	70.1	9.7	2.8	スギ	
331	6-40-01	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	112.9	8.2	2.6	スギ	
332	6-10-01	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	棒状材	103.2	4.8	4.4	クスノキ科クスノキ属 ヤブニッケイ	
333	6-35-02	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	118.6	15.0	2.0	スギ	
334	6-25-02	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	97.8	15.0	1.3	スギ	
335	6-17-01	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	119.5	16.5	1.3	スギ	
336	6-37-02	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	101.6	12.8	1.5		
337	6-39-02	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	101.2	13.8	1.6	スギ	
338	6-36-01	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	104.9	15.0	2.2	スギ	
339	6-25-03	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	101.1	14.5	1.5	スギ	
340	6-34-03	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	112.1	14.9	2.0		
341	6-30-01	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	29.7	8.2	4.1	スギ	
342	6-29-01	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	48.0	17.0	1.2	スギ	
343	6-28-01	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	105.0	75.3	1.9	スギ	
344	6-26-01	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	54.6	9.6	1.0		
345	6-35-03	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	107.3	11.0	2.5	マツ科モミ属	
346	6-23-01	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	96.7	6.3	2.1		
347	6-23-02	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	104.0	15.0	1.6	スギ	
348	6-19-01	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	曲物	口径42.9	高さ27.5	-		
349	6-01-03	L	SE324	6次C地区A11-12	SE127	板材	23.2	2.8	1.3	ヒノキ科アスナロ属	
375	6-02-01	L	SE324	6次C地区A10-11	SE124	板状具	21.4	7.8	2.4		
424	6-01-01	L	SE266	6次C地区		曲物底板				スギ	
558	6-01-02	N	SK440	6次B2地区F14	SK340 南端下層	板材	29.4	5.3	0.9	ヒノキ科アスナロ属	
706	8-02-02	P	SD503	8次J4	SD1上層	方形有孔 薄板材	16.6	13.7	0.9		
713	8-07-01	P	SD503	8次L4	SD1下層	組合せ部材	64.4	7.4	1.7		
715	8-05-03	P	SD503	8次O4	SD1下層	漆器椀	10.2	-	0.4		
716	8-01-01	P	SD503	8次M4	SD1下層	漆器椀	口径16.6	-	0.5		
717	8-05-02	P	SD503	8次P4	SD1下層	板材	18.2	7.0	1.8		
851	7-87-03	O	SD514	7次	SD14	薄板材	24.2	5.2	0.6		
852	7-87-02	O	SD514	7次W3-W4	SD14	薄板材	11.3	2.6	0.7		
894	8-04-01	P	SD514	8次M3	SD8	方形有孔板材	16.9	16.0	0.7		完存
895	8-02-01	P	SD514	8次I3	SD8	柄付き角棒材	26.6	1.5	1.5		

第32表 遺物観察表 (木製品)

報告 番号	R N o .	報告 地区	遺構名	出土地区等	調査時 遺構名	器種	残存法量 (c m)			樹種	備考
							全長	幅	厚さ		
909	7-86-01	O	SD517	7次V2	SD17	漆器椀	口径18.6	器高5.7	底径7.8		
910	7-86-02	O	SD517	7次V2	SD17	漆器椀	口径15.4	器高6.0	底径6.8		
911	7-87-01	O	SD517	7次V2	SD17	漆器椀	径20.0	-	1.0		
997	7-87-04	O	SE538	7次	SE38	曲物の底板	径17.0	-	0.9		
1161	8-01-02	P	SD802	8次W4	SD2	棒状材	18.4	7.0	6.0		
1171	8-03-01	P	SD803	8次W4	SD3	下駄	19.3	9.7	2.6		完存
1172	8-04-02	P	SD803	8次V4	SD3	薄板材	35.2	7.2	0.8		
1176	8-06-02	P	SD804	8次Q3	SD4	薄板材	29.0	8.7	1.0		
1177	8-05-01	P	SD804	8次R3	SD4	楔状木製品	17.6	5.4	2.3		
1178	8-06-01	P	SD804	8次Q3	SD4	部材片or残材	20.5	2.2	0.8		
1179	8-01-03	P	SD804	8次R3	SD4	部材片or残材	5.7	7.0	3.7		
1180	8-01-04	P	SD804	8次P3	SD4	部材片or残材	10.8	2.8	0.7		
1239	5-23-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	井戸横棧	77.4	11.4	3.4		東側
1240	5-26-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	井戸横棧	77.5	10.2	3.3		北側
1241	5-25-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	井戸横棧	88.5	10.0	4.8		南側
1242	5-24-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	井戸横棧	81.4	11.0	3.7		西側
1243	5-13-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	井戸縦板	105.6	16.1	5.0		東側
1244	5-14-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	井戸縦板	104.5	11.3	4.0		東側
1245	5-15-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	井戸縦板	98.5	11.1	4.4		東側
1246	5-16-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	井戸縦板	103.0	9.7	4.4		東側
1247	5-17-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	井戸縦板	106.7	13.6	5.4		東側
1248	5-03-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	井戸縦板	125.0	11.5	5.0		南側
1249	5-04-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	井戸縦板	122.5	12.5	5.0		南側
1250	5-05-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	井戸縦板	122.8	13.0	4.0		南側
1251	5-07-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	井戸縦板	116.0	21.0	5.5		南側
1252	5-06-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	井戸縦板	120.5	11.5	4.0		南側
1253	5-18-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	井戸縦板	131.6	14.1	4.4		北側
1254	5-19-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	井戸縦板	121.7	11.6	4.2		北側
1255	5-20-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	井戸縦板	130.8	15.4	4.4		北側
1256	5-21-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	井戸縦板	127.4	11.0	4.0		北側
1257	5-22-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	井戸縦板	133.2	15.9	5.8		北側
1258	5-08-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	井戸縦板	110.0	15.0	5.0		西側
1259	5-09-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	井戸縦板	109.5	11.0	5.5		西側
1260	5-10-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	井戸縦板	105.5	13.0	5.0		西側
1261	5-11-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	井戸縦板	101.0	11.5	5.0		西側
1262	5-12-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	井戸縦板	99.0	13.0	4.5		西側
1263	5-27-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	底板	105.0	11.5	4.0		
1264	5-28-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	底板	103.0	25.0	3.5		
1265	5-29-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	底板	96.0	2.6	5.0		
1266	5-30-01	J	SE106	5次J地区U5	SK6	曲物底板	径16.0	-	0.8		
1267	5-30-02	J	SE106	5次J地区U5	SK6	横櫓	5.7	1.8	0.9		櫓歯40本残
1269	5-02-01	M	SE129	5次I地区E2-F2	SE	曲物底板	45.7	34.0	-		井戸枠
1270	5-01-01	M	SE129	5次I地区E2-F2	SE	井戸枠曲物	57.0	12.0	-		井戸枠
1271	5-01-02	M	SE129	5次I地区E2-F2	SE	井戸枠曲物	48.5	22.9	-		井戸枠

第33表 遺物観察表 (木製品)

第5章 まとめ

第1節 遺構の変遷と画期

替田遺跡で本格的な集落形成が開始されるのは弥生時代中期初頭以降である。ここでは、発掘調査の全体的なまとめとして、替田遺跡の消長を大まかに捉えていきたい。以下、弥生時代以前の断片的な土器の出土にはじまり、途中衰退や断絶を経ながら近世まで続く遺跡の盛衰を周辺の遺跡動向も踏まえながら簡単に確認する。

前1期 縄文時代晩期

L区やN区で晩期の突帯文土器が確認され、詳細は不明なものの、替田遺跡もしくは周辺部での人間活動の存在が示唆される。

替田遺跡周辺では、安濃川北岸の蔵田遺跡で晩期の自然河道が確認されているほか、下流の納所遺跡でも浮線文土器など晩期の遺物の出土がある。弥生時代前期に納所遺跡で大規模な開発が開始されるが、その前史として断片的ではあるが当地域での晩期遺物の出土が注意されており、替田遺跡に残された痕跡もこの流れと軌を一にするものであろう。

第1期 弥生時代中期前葉～中葉

今回報告したJ区・L区を中心に、中期前葉の遺構・遺物が出土し、替田遺跡の本格的な遺構形成が始まる。今回報告分には、明瞭な前期の遺物は出土しておらず、中期初頭をもって集落形成の開始期と捉えられる。第2節で詳述するが、中勢道路調査区やL区を中心に堅穴住居による居住域が存在した。ただし、明瞭な墓域は未確認である。

替田遺跡の周辺では、納所遺跡が伊勢湾西岸部を代表する前期遺跡として成立したほか、岩田川南岸の台地部に所在する上村遺跡でも前期土器が多数出土している。替田遺跡は、安濃川北岸の蔵田遺跡や松ノ木遺跡が中期初頭から集落や墳墓の形成を開始する動向と軌を一にしており、納所遺跡から分派した集団によって新たに拓かれた集落と推定される。時代は少し異なるが山籠遺跡などと比べて伐採・加工用磨製石斧類の出土が少ないことも特徴のひとつで、替田遺跡では施設材以外の木器は専ら他遺跡からの搬入によっていた可能性がある。替田遺跡から

は凹線文土器の出土はなく、集落は中期中葉のうちに廃絶したものと捉えられる。

第2期 古墳時代前期

J区やL区などで土坑や溝などの遺構がみられるが、その量は少なく、出土遺物も少ない。具体的な集落構成を論ずるほどではないが、一応、替田遺跡でも人間活動が存在したことを確認しておきたい。

第3期 古墳時代後期～奈良時代

古墳時代後期から断片的な遺構形成がはじまり、L区を中心にでは奈良時代の掘立柱建物なども成立する。遺構数は少なく、やや散在した状況ではあるが、この時期にも集落形成が存在した。

第4期 平安時代末～中世

遺跡全体に遺構・遺物がみられるが、遺跡東部のL区・N区・M区・O区・P区を中心とした字「結縁寺」部分の遺構密度が特に濃く、溝から大量の遺物が出土している。調査区の制約から掘立柱建物の確認数は多くないが、かなり大規模な集落が存在したものと推定される。O区とP区を通す溝SD503やSD514などからは大量の墨書山茶碗類のほか、室町期では香炉(94)や瓦類など寺院に関係するのではと推定される遺物も出土した。本期に関わる問題点や集落の詳細な盛衰は、第5節及び第7節を参照されたいが、今後、「結縁寺」の字句が示唆する寺院と、その成立年代等が問題となろう。

第5期 近世

少量の土器の出土はあるものの、遺構としてはごく少数の遺構が確認されたにすぎない。しかも、これらの多くは第4期に形成された溝などの埋没過程で遺物が入り込んだものと思われ、遺構形成としてはかなり低調であったと推定される。もっともこのことは、この時期以降、土地利用の形態が、集落・宅地から耕地へと大きく変更されたことを示唆するものと思われ、遺構がないことがすなわち当地での人間活動自体がなかったことを意味しないことはいうまでもない。

(穂積)

第2節 替田遺跡における弥生集落の様相

替田遺跡J区やL区では、弥生時代の竪穴住居や方形周溝墓の可能性のある溝などが検出されている。これらはいずれも弥生時代中期前葉～中葉の比較的まとまった時期に営まれている。また替田遺跡では、これまでの調査でも同様の時期に属すると考えられる竪穴住居や溝、土坑などの遺構が多数検出されている。これらの資料からは、替田遺跡における弥生時代中期の集落の全体像をある程度把握することができよう。

1 集落の構造

弥生時代中期の遺構がまとまって検出されているのは1次調査B地区、L区である。これらからは、合計14棟の住居のほか、溝や土坑なども多く検出されている。また、替田遺跡に南接する式ノ坪遺跡からも同時期の遺構が検出されている。式ノ坪遺跡の中でも替田遺跡と接する北半部に集中して、焼失住居1棟（SH64）をはじめとする弥生時代中期前葉～中葉の遺構が検出されており、替田遺跡とともに一連の集落を形成していたものと考えられる。

弥生時代の遺構が密に分布する1次調査B地区やL区は、地形的にみて最も高くなっている部分であるが、O区・P区などその東側では低くなっている。南側も、式ノ坪遺跡の調査区南半で次第に地形が低くなっていく。また、替田遺跡の西側には三泗川が流れており、この三泗川沿いは地形も低く不安定な土地であったとみられる。こうした点を示すように、J区北部では弥生時代中期に存在していたとみられる小規模な自然流路がいくつか検出されており、弥生時代の遺構はほとんど認められない。

こうした地形条件に加え、2次調査C地区⁽³⁾で検出されている東西にのびる溝は、その北側で弥生時代中期の遺構密度がかなり下がることから、集落域の北側を画する機能を持っていたとも考えられる。同様に、式ノ坪遺跡SH64周辺では東西にのびる溝が3条検出されており、この溝が集落域の南側を画する機能を持っていたものと考えられる。

このようにみれば、替田遺跡と式ノ坪遺跡の弥生時代中期集落は、安濃川の自然堤防上に存在する微高地上に営まれており、その南北は溝によって画さ

れ、東西は主に河川や小規模な自然流路などの自然地形によって画されていたものと考えられる。その範囲は、南北200m、東西120mほどであるものと思われる。

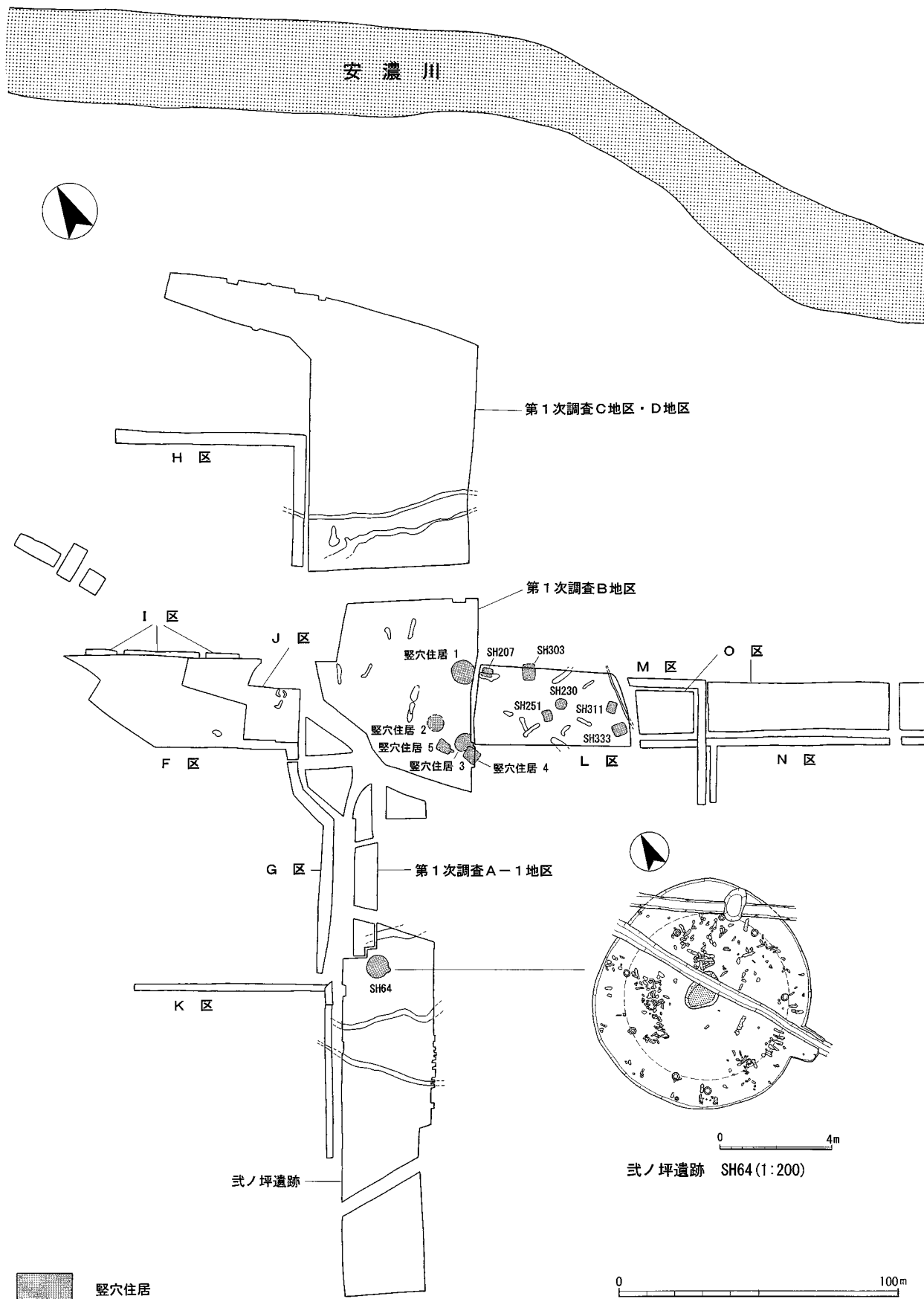
以上からみても式ノ坪遺跡は替田遺跡と一連の集落と考えられるが、1次調査B地区・L区の住居のまとまりとは少し離れていることは確かである。第1次調査B地区と式ノ坪遺跡の間のG区では弥生時代中期中葉の土器がややまとまって検出されたことから遺構が存在する可能性もあり⁽⁴⁾、両者の間の連続性が窺える。しかしながら、G区に隣接する1次調査A-1～3区ではやや規模の大きな自然流路の痕跡と思われる砂層が検出されており、式ノ坪遺跡の居住域と替田遺跡の居住域は、自然流路などによって区別されていた可能性がある。

また、式ノ坪遺跡SH64の規模は1次調査B地区・L区において検出された住居の規模より一回り大きく、また張り出し部が付属している。このように住居の規模や構造にも違いが認められることには注意しておかなくてはならないだろう。

こうした点からみれば、替田遺跡と式ノ坪遺跡は一連の集落を形成しつつも、その内部の居住域はいくつかのまとまりに区別されていたと推定できる。そして、このような複数の居住域のまとまりは、替田遺跡・式ノ坪遺跡の集落内における複数の集団の存在を示している可能性も考えられよう。

替田遺跡・式ノ坪遺跡では、以上のような住居や溝などの居住域に関連する遺構のほか、土壇墓あるいは方形周溝墓の溝の可能性が指摘されるような小規模な溝や土坑が多数検出されている。

これらの溝・土坑の分布範囲は、居住域が営まれている範囲とほぼ同じであり、時期的にも居住域が営まれた時期とほとんど差はない。したがって、これらが墓とすると居住域内に墓が造営されていたこととなる。伊勢湾西岸地域では、弥生時代中期前葉～中葉には方形周溝墓や土壇墓が一定の区域にまとまってつくられて墓域を形成し、居住域とは近接していても明瞭に区分されている例が多い。こうしたことから、住居と混在して存在する替田遺跡の溝や



第260図 替田遺跡弥生時代遺構配置図 (1:2000)

土坑を埋葬に関連する遺構とは断定できない⁽⁵⁾。

J区のSX115やSX122などは住居が集中する区域からやや西に離れており、居住域と分離された墓域と考えることも可能であるが、これらの遺構に関しても方形周溝墓と考えるには一辺が2～3mとかなり小型であることが問題である。

こうしたことから、現状では替田遺跡・式ノ坪遺跡では明確な墓域の存在は認めがたい。数次にわたる調査によってほぼ集落の東西南北の範囲が把握できていることを考えれば、墓域は居住域とは別の場所に設けられていた可能性が高いものと思われる。

2 竪穴住居の平面形態

替田遺跡の弥生時代竪穴住居の平面形態には、円形と方形の2種類がある。伊勢湾西岸地域では中期前葉までは円形が主体であるが、中期中葉を境として方形が主体となっていく、中期後葉にはほぼ方形に統一される。出土土器からみれば、替田遺跡はその過渡期にあたる時期に営まれたと考えられる。

円形住居から出土した土器を第3節での替田遺跡弥生土器の整理にしたがってみていくと、L区SH230出土の広口壺は、形状や口縁端部への波状文の施文などからみてⅢ様式期に属する可能性が高い。1次調査B地区竪穴住居1から出土した土器も短頸の広口壺や受口状口縁細頸壺を含んでおり、Ⅲ期に属する。また、式ノ坪遺跡SH64から出土した土器もⅢ様式期に属する可能性が高い。したがって、円形住居が方形住居に先行して作られたとはいえず、替田遺跡・式ノ坪遺跡では同じ集落内に円形住居と方形住居とが混在していたという景観が復元できる。

替田遺跡以外にも、東庄内B遺跡⁽⁶⁾や中尾山遺跡⁽⁷⁾などで円形住居と方形住居と一緒に検出されている。これらの遺跡についても、出土した土器や遺構の重なりあい方から見る限り、円形住居が必ずしも方形住居に先行して構築されていないようである。

円形と方形の住居は、平面形態の違いのみではなく、その構造にも違いがみられる。方形住居では、替田遺跡のSH311では4箇所の支柱穴を持ち、1次調査の竪穴住居4では2箇所の支柱穴を持つと考えられる。それに対して円形住居では、1次調査の竪穴住居1では8箇所の支柱穴を持ち、式ノ坪遺跡のSH64は7箇所の支柱穴を持つなど、方形住居に

くらべて支柱穴の数が多。このように、住居の平面形態の違いは決して単なる平面形の違いではなく、上屋の構造にも差があると推定される。

住居の平面形態が何に規定されるのかは定かではないが、当該期の小規模な集落には、平田古墳群⁽⁸⁾のように円形住居ばかりのものや、中ノ垣外遺跡⁽⁹⁾のように方形住居ばかりのものがある。これらの例を参考にすれば、家族など小規模な集団のなかで営む住居の形態が決まっていた可能性が考えられる。

こうした想定に従えば、替田遺跡では円形住居が少数派であることからみて、替田遺跡の集落では方形住居を営む集団が中心的であり、その中に円形住居を営む集団が少数派として存在していたと考えることもできる。先述のように、替田遺跡では時間的な円形から方形へという平面形態の変化は追いがたく、伊勢湾西岸地域全体が方形住居を作るようになっていく流れの中で、円形住居を作り続けていた人々も同じ集落の中で共存していたと考えられよう。

こうした住居形態の差は先の居住域の区分とは対応していないが、このことは集落内部の集団構成の複雑さを示しているものにとらえておきたい。

3 小結

替田遺跡・式ノ坪遺跡は、弥生時代中期前葉～中葉の居住域であり、その内部には複数の集団の存在が推定される。しかしながら、検出された住居数は決して多いものではない。また、中期後葉の遺構・遺物がほとんど出土していないことから、ごく限られた時期に営まれた集落であるとみられる。

近くに安濃川が流れ、調査でも自然流路や旧河道がいくつか検出されていることを考えれば、微高地であるとはいえ、決して安定した土地ではなかったであろう。そうした土地に、短い期間に複数集団からなる居住域が営まれたことは、当該期の社会を考える上で重要である。その背景を考える上で、柱状片刃石斧や石小刀など替田遺跡周辺では当該期の出土例が少ない精良な作りの石器が出土していることは一つの手がかりになるかもしれない。安濃川流域のみではなく、近畿地方や濃尾平野などとの関係も視野に入れておく必要がある。(石井)

註

(1) 三重県埋蔵文化財センター「VI. 替田遺跡(第1次)」

- 『一般国道23号中勢道路 埋蔵文化財発掘調査概報Ⅹ』1997
- (2) 三重県埋蔵文化財センター『式ノ坪遺跡発掘調査報告』2005
- (3) 三重県埋蔵文化財センター「Ⅲ. 替田遺跡(第2次)」『一般国道23号中勢道路 埋蔵文化財発掘調査概報Ⅹ』1998
- (4) 三重県埋蔵文化財センター『替田遺跡(第4次)発掘調査報告』2004
- (5) 完形に近い土器の出土から土壙墓との推定がなされることがあるが、弥生時代中期には土器を埋葬施設に入

れることはまれである。したがって、逆に完形に近い土器が数個体出土するような場合は墓との認定を慎重に行うべきであろう。

- (6) 日本道路公団名古屋支社・三重県教育委員会「東庄内B遺跡」『東名阪道路埋蔵文化財調査報告』1970
- (7) 新田剛「中尾山遺跡」『三重県史』資料編考古1 三重県 2005
- (8) 安濃町教育委員会『平田古墳群』1987
- (9) 三重県教育委員会「伊勢市佐八町 中ノ垣外遺跡」『昭和58年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財調査報告』1984

第3節 弥生土器について

中期前葉から中葉にかけての弥生土器が、弥生時代の遺構が集中するL区を中心に出土している。

ここでは、L区で確認された遺構一括資料を中心に特徴を把握したい。

1 時期

壺を指標にすると、いわゆる朝日式の壺が出土するSK312・244は上村氏編年⁽¹⁾(以下、省略)のⅡ様式の範疇に包含されるものであり、単純口縁の細頸壺が確認できないことからⅡ-1様式に相当する。SK312には、壺体部上半にヘラ描き沈線文で区画された直線文帯をもつ土器が存在する。

単純口縁の細頸壺が出土しているSK238はⅡ-2様式に相当する。SK238からは流水文の描かれた壺体部が出土している。

受口状口縁の細頸壺が出土しているSH311・207・303はⅢ-1様式に相当する。SH207・303出土資料は、文様帯が複数段で構成されている点と調和的である。壺体部の文様帯は上下がヘラ描き沈線文で区画されており、直線文の施文された資料と縄文の施文された資料が共伴する。最も資料の充実するSH207では、波状文(壺・甕)が出現しており、無文の広口壺も組成する。

また、短頸の広口壺232(SK314出土)も文様帯が多条化していない点から、Ⅲ-1様式に位置づけた。頸胴部境が明瞭な点特徴的である。

体部の直線文帯の上下を区画するヘラ描き沈線文が省略された壺が出土しているSK288は、Ⅲ-2様式以降に相当する。

以上の点から、概ねⅡ-1～Ⅲ-2様式にかけての所産に相当し、ピークはⅢ-1様式にあることが分かる。

2 壺

土器そのものが劣化しており観察の困難な土器もあるが、土器の系統を検討することを目的として、壺体部内面の壁面調整と体部外面のヘラミガキの単位を観察した。

凹線文系土器の波及が認められるIV-1式の土器が出土している松阪市筋違遺跡⁽²⁾では、2系統の土器が存在するが、凹線文系土器の波及以前の状況は明らかでない。このため、筋違遺跡出土土器の検討に用いた分類を用いて、凹線文系土器の波及以前の資料による検討を行った。分類の詳細は、筋違遺跡発掘調査報告を参照されたい。

観察した結果、壺の体部内面の壁面調整はナデ消しで仕上げられており、筋違遺跡分類でのa手法に相当した。また、体部外面のヘラミガキはランダムな仕上げであり、この点でも筋違遺跡分類のa手法に相当し、明らかに分割された単位の分かるb手法に相当する土器は存在していない。

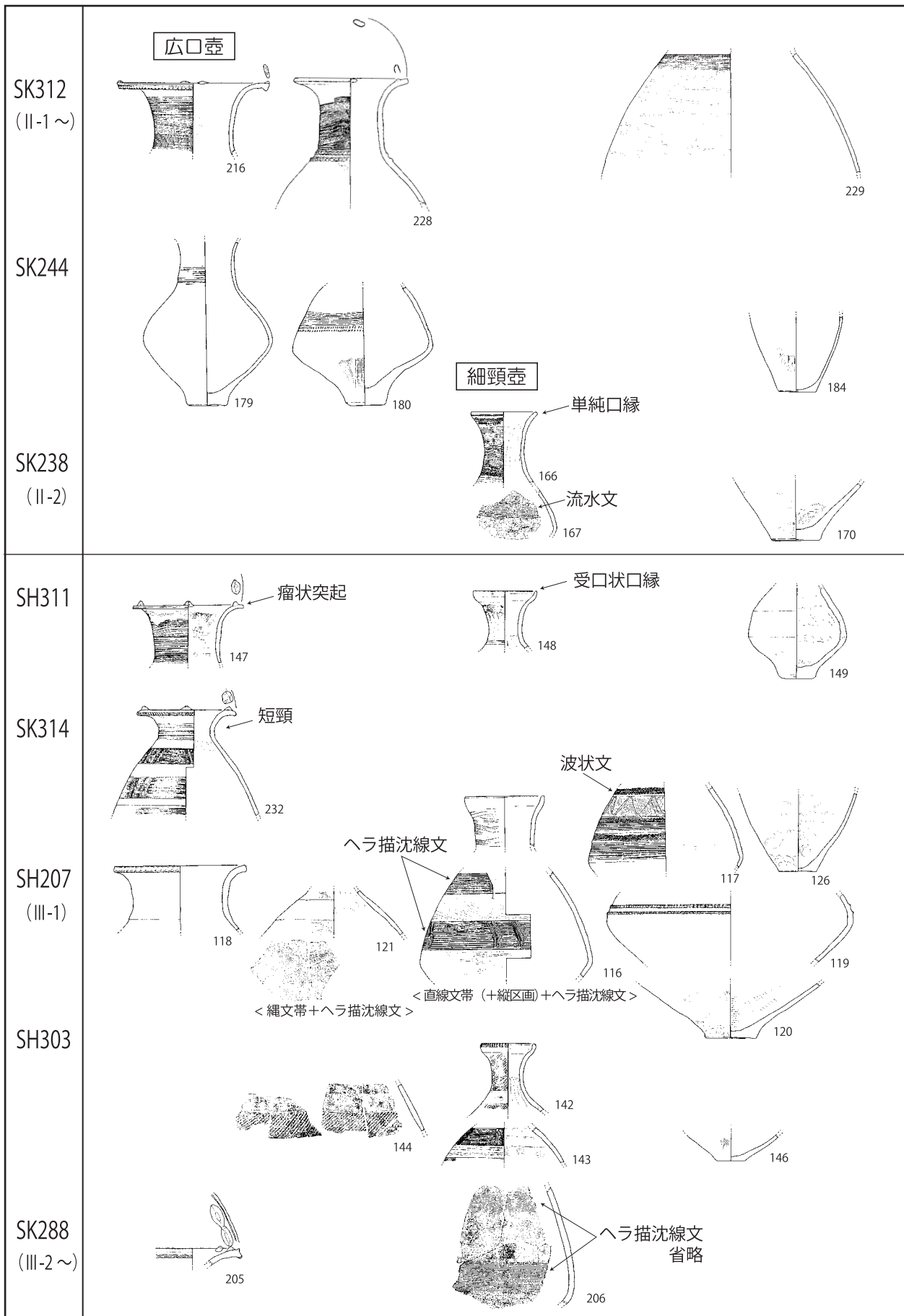
以上によって、凹線文系土器の波及する以前の替田遺跡にはa系土器しか存在していないことが明らかになった。

3 甕

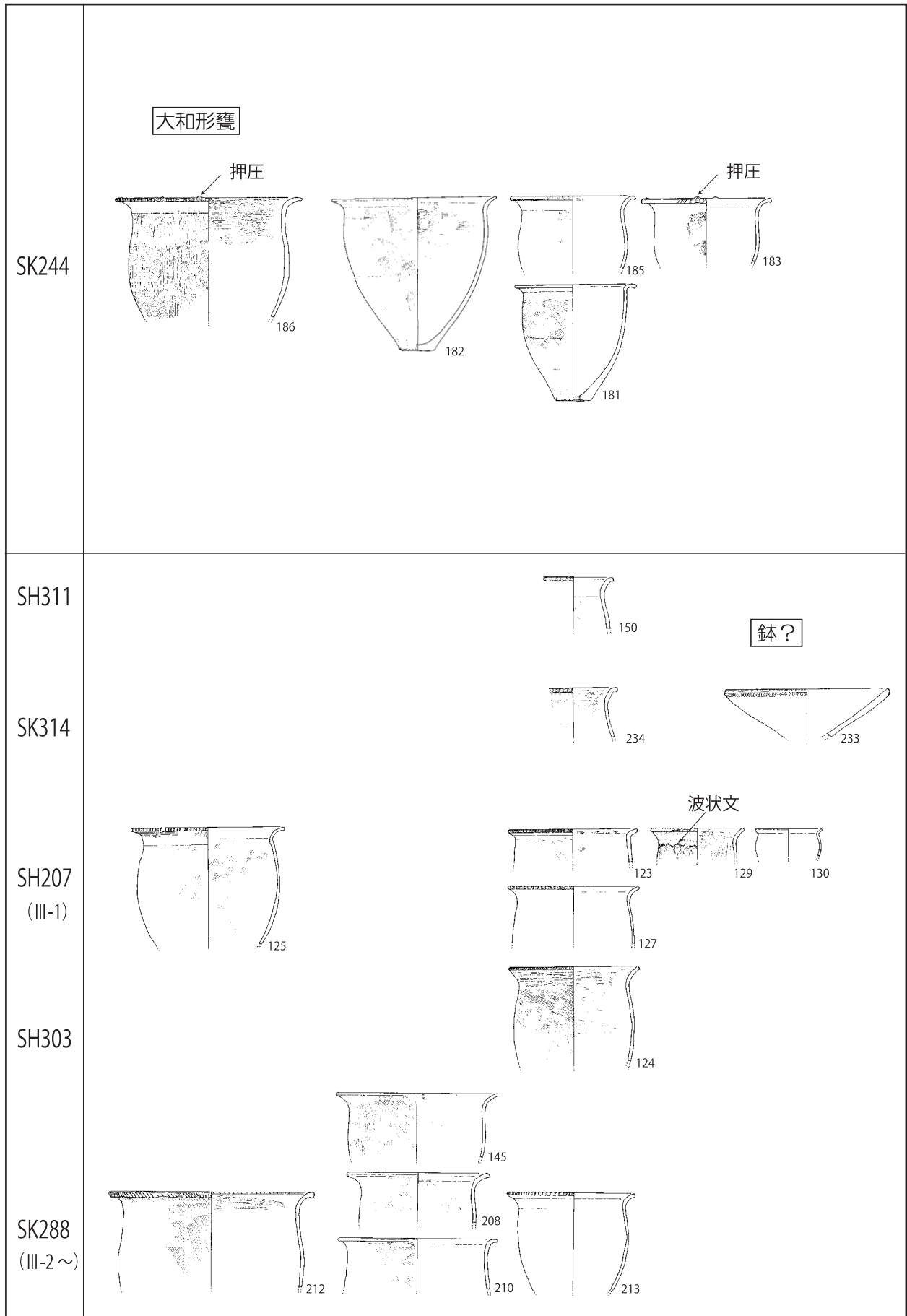
甕は、口縁部内面にヨコハケ・体部外面にタテハケ・口縁端部に刻目を施文する大和形甕が一貫して主体的に存在し、口縁部内面のヨコハケが欠落するものや口縁端部の刻目の欠落するものも存在する。

初期のものは、口縁部の屈曲がゆるやかで上方に広がっていき、端部の巻き込みが少ないが、次第に体部が張り出し、口縁部の巻き込むようになる傾向がみられる。

また、口縁端部の数カ所に押圧が施される例がⅡ-1様式から存在する。(川崎)



第261図 替田遺跡出土弥生土器の変遷 (1)



第262図 替田遺跡出土弥生土器の変遷 (2)

註

(1) 上村安生「伊勢・伊賀地域」『弥生土器の様式と編年』
木耳社 2002

(2) 三重県埋蔵文化財センター『筋違遺跡－第1分冊－』
2005、川崎志乃「土器の様相」『筋違遺跡－第2分冊－』
三重県埋蔵文化財センター 2005

第4節 替田遺跡出土古式土師器の位置付け

替田遺跡における古式土師器は、出土点数こそ少ないものの、比較的一括性の高い資料がある。小節では、替田遺跡出土古式土師器の編年の位置を明らかにするために、弥生時代後期末から古墳時代の土器がほぼ一連に出土している雲出島貫遺跡⁽¹⁾の資料と比較検討する。そのうえで、同時期の資料である堀田遺跡出土資料にもふれてみたい。

1 替田遺跡出土資料の特徴

当遺跡において古式土師器はJ区SK103、SE105、L区SK222等から出土している。小節ではこれらの中でも比較的まとまった資料であるSK103およびSE105出土土器を対象とする。

なお、SK103とSE105は遺物の内容が似ていることから、ほぼ同時期のものであると思われる。また、須恵器の共伴はなく、古墳時代前期後半から中期初頭に相当すると考えられる。出土した資料としては、高杯、台付甕、二重口縁壺、小形壺といった基本的な器種は一通り揃っているが、完形資料はほとんどなく、出土点数も少ない。従って、本来ならば、出土資料を分類し、その分類を元に考察するところであるが、個々の器種を細分することは特にせず、器種ごとにその特徴をあげてみたい。

高杯 完形資料はないが、杯部はいずれも有稜である。近畿地方からの影響を強く受けたものと考えられ、島貫分類では高杯Cに相当する。脚部の形態は屈折して開くものと、外反して開くものがある。

台付甕 実測をすることができた甕は全て前代から続くS字状口縁台付甕に基本的な系統をもつものである。台付甕はその口縁部の形態から2者に分類できる。

①台付甕A 前代までのS字状口縁台付甕の系統上にあるもの。口縁部のヨコナデが弱まっているものの、まだS字形が残っている。また、頸部外面にヘラ状のもので沈線を施している。赤塚氏による廻間遺跡分類⁽²⁾ではD類に相当する。

②台付甕B 口縁部のS字形が崩れ、その名残が

わずかに口縁部外面の段などに見られる。頸部外面の沈線も省略されているものがある。

二重口縁壺 実測をすることができた壺はすべて二重口縁を呈する。広口壺の上に二重口縁部が付加される型式であり、いわゆる伊勢型二重口縁壺である。島貫分類では壺Bbに相当する。また、擬口縁の突出が大きく、突帯のようにみえるものもある。

小形壺 いわゆる小形丸底壺に含まれるものであるが、当地では丸底のほかに平底を呈しているものも多い。島貫分類では小形壺Baに相当する。

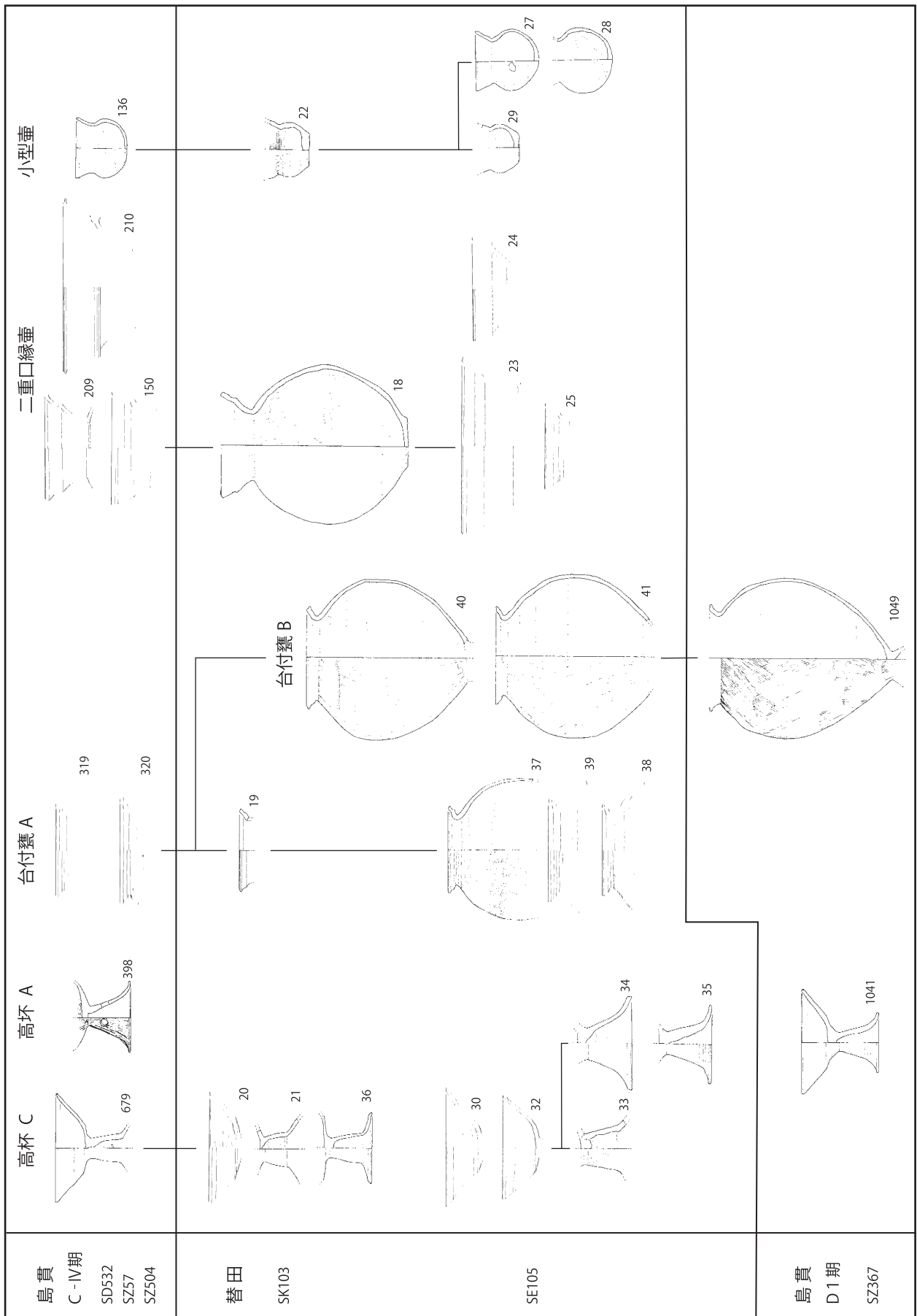
2 雲出島貫遺跡出土資料との比較検討

雲出川下流域に位置する雲出島貫遺跡では、縄文時代晩期から近世をA～H期の8期に区分されている。さらに弥生時代後期末から古墳時代前期にあたるC期はI～IV期⁽³⁾、古墳時代中後期にあたるD期は1～2期⁽⁴⁾に細分されている。なお、雲出島貫遺跡のD1期は陶邑田辺編年TK208～TK10型式併行期と位置づけられている。このことから、須恵器が共伴しない替田遺跡の資料は雲出島貫遺跡D1期以前の資料であると考えられる。以下、器種ごとに雲出島貫遺跡出土資料⁽⁵⁾と比較検討していく。

高杯 高杯の形態や手法は島貫C-IV期、D1期出土資料と大きな差はない。一方、島貫C-IV期では、近畿地方からの影響を受けた高杯Cの他に、前代からの系譜をひく高杯A（脚部に透孔を有する有稜高杯）の最終段階が存在するが、替田遺跡では当該時期に高杯Aの系統をもつ資料は認められない。

台付甕A 口縁端部に明瞭な肥厚した面をもつことや、頸部外面に沈線を施すことなどの特徴は、島貫分類IV段階aとほとんど変わらない。

台付甕B 島貫C-IV期ではS字形の崩れた口縁部をもつ台付甕は出土していない。むしろ島貫D1期において形態の近いものが出土しているが、かなり長胴化が進んでいる。また、口縁部も肥厚した端部をもっているものの、「S」字形というより、「く」の字形に近く、ほぼ直線的に延びている。



第263図 替田遺跡出土古式土師器の編年の位置 (1 : 8)

二重口縁壺 島貫C-IV期では、擬口縁を持たず、内面のヨコナデにより二重口縁状にみせているものがすでに確認されている。当遺跡出土資料でも同様の形状のものが出土しているが、ヨコナデがさらに弱くなっており、二重口縁の痕跡を残す程度のものである。なお、島貫D 1期では二重口縁壺は認められない。

小形壺 島貫C-IV期では平底状になっているが、当遺跡では丸底のものも出土している。当遺跡の資料は非常に粗雑化が進んでおり、島貫D 1期では認められないことから、最終段階に相当すると考えられる。

小結

以上のように、替田遺跡出土資料の特徴は東海地方に特徴的な高杯Aの消失、台付甕Aと台付甕Bの共伴等の点があげられ、島貫C-IV期とは区別される土器群と考えられる。従って、当遺跡出土の古式土師器は、島貫C-IV期と島貫D 1期の間を補完する資料と言えよう。すなわち、須恵器が出現、普及する直前の土師器として位置づけることができると思われる。

最後に、今後の課題を提示しておく。今回、比較対象を雲出川流域の雲出島貫遺跡の資料としたが、当遺跡は安濃川流域に立地し、地域差を含んでいる可能性があることに注意しなければならない。

また、島貫C-IV期と併行する資料として堀田遺跡の資料があげられる⁽⁶⁾。伊藤裕偉氏によって「堀田式」と設定された土器群⁽⁷⁾は、布留系と在在系との融合した台付甕や丸底甕の出現等に見られるように、「近畿地方の布留式土器を様相上受容する一方、東海地方としての伝統性も保持される段階」とされている。この「堀田式」に続く資料として「河曲B群

土器」が提示されている⁽⁸⁾。

本来ならばこれらの資料を含めた総合的な比較検討が必要であるが、ここでは現時点での所見を概述するにとどめる。まず、S字状口縁台付甕の口縁部や高杯の形態をみると、「堀田式」よりも替田遺跡の資料の方がやや新しい形態である。また、当遺跡では「堀田式」に特徴的な台付甕や丸底甕は出土していない。特に、丸底甕は「狭く見ても雲出川下流域」に存在することが指摘されている⁽⁹⁾。このことから、安濃川流域に立地する替田遺跡の古式土師器と雲出川流域に存在する「堀田式」の土器群は時期的な差異だけでなく、地域的な差異が認められよう。

今後は、編年観だけの検討でなく、安濃川流域や雲出川流域のほか、鈴鹿川流域などを含めたより広域な資料を対象として、時間的、空間的な検討を進めていく必要がある。(野鳥)

註

- (1) 三重県埋蔵文化財センター『嶋拔Ⅲ』2001
- (2) 赤塚次郎「廻間式土器」『廻間遺跡』愛知県埋蔵文化財センター 1990
- (3) 川崎志乃「古墳時代前期の雲出島貫遺跡」『嶋拔Ⅲ』三重県埋蔵文化財センター 2001
- (4) 伊藤裕偉「雲出島貫遺跡における古墳時代中後期の土師器」『嶋拔Ⅲ』三重県埋蔵文化財センター 2001
- (5) S Z 57の資料は、雲出島貫遺跡第1次調査出土資料である。三重県埋蔵文化財センター『嶋拔』1998
- (6) 三重県埋蔵文化財センター『堀田第3～5次調査』2002
- (7) 伊藤裕偉「伊勢における古墳時代前期後半の土師器に関する覚書」『研究紀要』14 三重県埋蔵文化財センター 2005
- (8) 伊藤裕偉「古墳時代前・中期における伊勢の土器相」『研究紀要』15-1 三重県埋蔵文化財センター 2006
- (9) 註(7)に同じ

第5節 微地形と土地利用の変化について

第3章のとおり、替田遺跡周辺の地形はJ区北東部の現水路地点に谷状地形が存在しており、そこから氾濫した洪水堆積物によって形成されていることが明らかになった。それは弥生時代中期前葉までに開始されると同時に土地の利用も行われており、圃場整備以前まで続いていた。

各地区における遺構密度の格差や遺構面の高低差

は、元来の微地形と関連していることが考えられるため、ここでは1964年撮影の空中写真の判読を行い、替田遺跡の特徴を把握することにする。また、O・P区は、「字結縁寺」に相当する地点が含まれていることから、圃場整備前の字切図を用いて遺構との関連を検討するために、第264図を作成した。

1 空中写真の判読による微地形

替田遺跡付近について、1964年撮影の空中写真より読み取ることのできた点を挙げてみる。

- ① 条里地割を乱し、北西方向から南東方向に向かうやや暗い色調を呈する地点がある。
- ② 条里地割の中に、円形に地割が乱れている場所があり、そこはやや白く浮きあがっている。
- ③ 整然とした条里地割が広域にわたって広がっている。
- ④ 安濃川と岩田川をつなぐ三泗川は条里地割に則して、直角に流れている。
- ⑤ 安濃川に沿って地割が乱れており、右岸では細かな地割になる地点がある。

おおむね上記5点の特徴が見られた。

①に相当する地点は、今回の調査における替田遺跡の基本層序の検討によって、J区北東部の現水路地点に谷状地形が存在することが明らかとなった。また、そこから氾濫した洪水堆積物によって、替田遺跡の基本層序が形成されていることも明らかになった。なお、地下水位の高い地点が空中写真では暗色を呈していることが分かる。

2 微地形と弥生集落

②に相当する地点は、式ノ坪遺跡⁽¹⁾が立地している。式ノ坪遺跡では、弥生時代中期の遺構と古代の遺構が現地表面から深さ20～30cmの高さで同時に検出されており、その間に土砂の堆積がさほど存在していない点から安定した土地であったことが知られる。弥生時代中期前葉から中葉にかけての遺物を包含する遺構は、空中写真でみとめられた微高地（地下水位が低いために白色を呈する）上で検出されている。具体的には、竪穴住居・土坑・溝が確認されている。

そのほかJ区やL区でも中期前葉から中葉にかけての遺構が検出されており、J区北東部の谷状地形に伴う自然堤防上に遺構が立地していることが分かる。

3 条里遺構の検出

③は安濃郡条里であり、約N30°Eの方位に偏ることが知られている⁽²⁾。替田遺跡においても、巨視的には同方向を指向する遺構が確認されており、O・P区SD503・K区SD125・128などが相当する。L区SD210はSD503の延長上に位置し、北へ蛇行するが存在するが、L区が自然堤防に相当する地

点であるために蛇行していると考えられる。

時期的には、K区SD128が古代の可能性があり、SD503は中世前期の遺構である。なお、SD125・128の延長上には、式ノ坪遺跡SD10・56・57が位置しており、平安時代初期と報告されている。また、式ノ坪遺跡では条里方向を指向する掘立柱建物群が存在する。弥生時代以降安定した地点にのみ確認されている点特徴的である。

4 替田遺跡と里前遺跡の関係

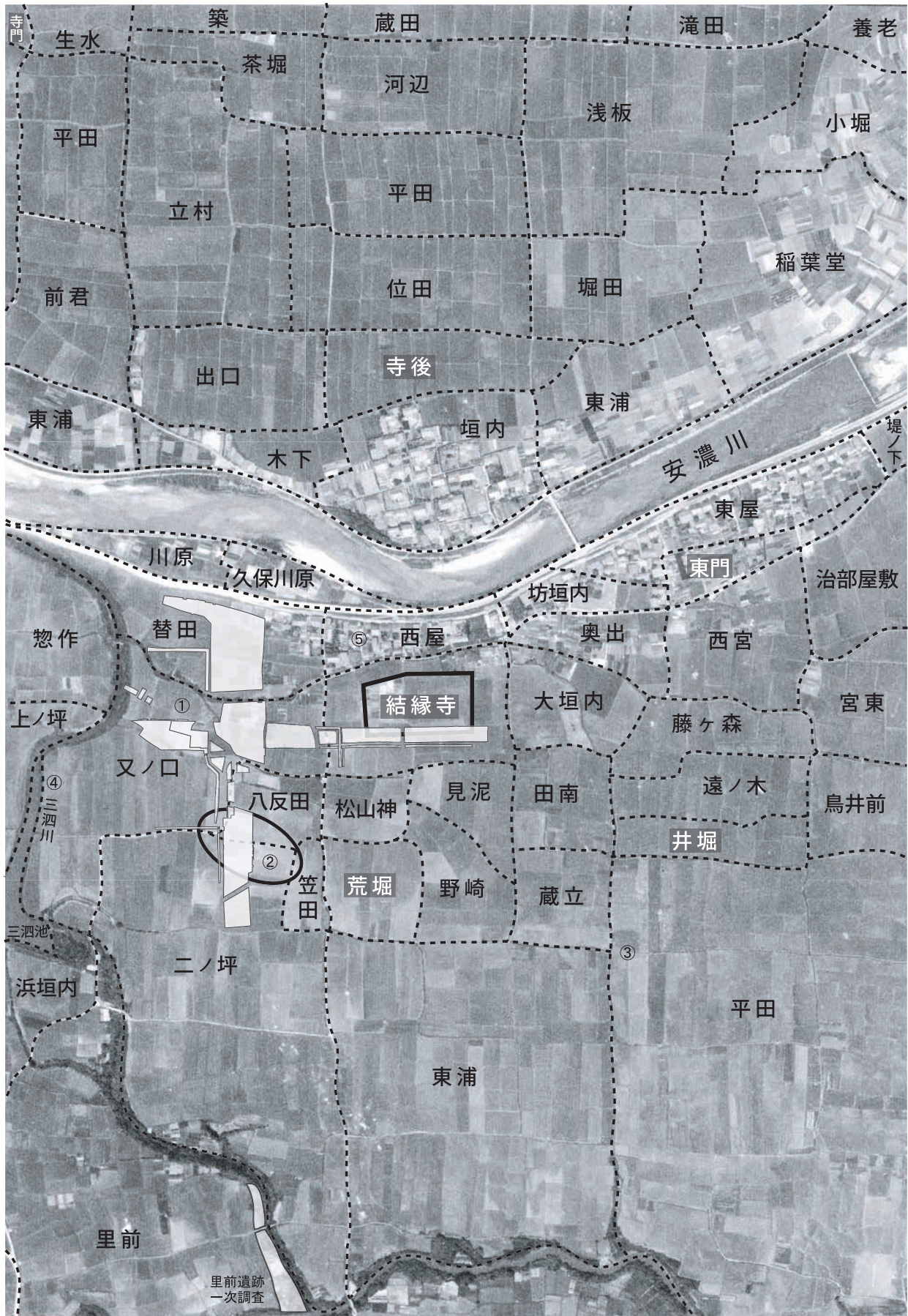
④については、条里地割に沿って三泗川が改修されており、条里型地割が施工されて以降に大規模な河川改修が実施されていることが分かる。この点について『津市史』⁽³⁾によると近世に改修が行われたことが知られる。しかし、里前遺跡1次調査⁽⁴⁾によってそれ以前にも谷状地形が存在しており、近世に新たに掘削された河川ではないことが証明されている。また、替田遺跡と里前遺跡1次調査区で筆跡の類似する同一墨書が確認された(第6節参照)点から、中世前期には三泗川が里前遺跡と替田遺跡を結ぶ導線として重要な機能を果たしていたと考えられる。

5 「字結縁寺」と関連遺構

⑤は安濃川の自然堤防上には現集落が位置している。また、現集落南部の「字結縁寺」には、白色を呈する微高地が存在しており、周辺と比較すると細かな地割となっている。

「結縁寺」は14世紀の安東郡専当沙汰文⁽⁵⁾に見える地名であり、第264図のように圃場整備以前まで「字結縁寺」およびそれを取り囲む地名「東門」「井堀」「荒堀」「寺後」「寺門」と地割が非常に良好な状態で残存していた。

替田遺跡O・P区は、字結縁寺に相当する地点が含まれており、墨書土器が多く出土しているSD514とその延長上に位置するSD521の位置に地割が認められる。この地割は字結縁寺地内で方形の区画をなしており、その内側の一部は現在も畠として周囲より一段高くなっている。また、その外部は暗色を呈していることから、地下水位が高いと推定でき、溝が検出されている点と一致する。従ってSD514・521を一辺とする区画の中心は、調査区北部に存在すると推定される。なお、区画溝から瓦や五輪塔等の寺院関連の遺物が出土したが、これらは墨



第264図 替田遺跡調査区と周辺の小字

書土器の時期より後出する。(川崎)
註
(1) 三重県埋蔵文化財センター『式ノ坪遺跡発掘調査』
2005
(2) 宮田勝功「方格地割と条里遺構—安濃川下流域を中

心にして—」『研究紀要』第8号 1999
(3) 津市役所『津市史』第3巻 1958
(4) 三重県埋蔵文化財センター『里前遺跡発掘調査報告』
2002
(5) 『安東郡専当沙汰文』(『群書類従』第28輯雑部)

第6節 中世の墨書土器について

中世の墨書土器は、山茶碗と山皿に認められた。替田遺跡出土の墨書土器にみられる文字や記号は、合計で24種類を確認した。この中には、不鮮明のために識別不能なものや破片資料を含んでいないことから若干の変化があると思われるが、まとまった量が出土していることには変わりない。

さて近年、伊勢国内では墨書土器の出土傾向についての分析が多く行われており、各遺跡の「場」の特性を顕している⁽¹⁾と考えられている。従って、今回も替田遺跡出土の墨書土器の特徴を把握することによって、遺跡理解の一助としたい。なお、近接する里前遺跡⁽²⁾から出土した墨書土器と同一・同筆跡と推定される墨書の施文された土器が存在することから、里前遺跡出土墨書土器との比較も検討する。

替田遺跡出土の墨書土器は概して達筆の墨書がないが、明瞭な非識字層による墨書と推定可能なものもない。この点では、筆遣いのこなれた達筆の墨書が存在する一方、明らかに非識字層が書いたと推定される⁽³⁾墨書も存在する里前遺跡での状況と異なる。

出土量では圧倒的に記号が多い。文字では平仮名の可能性が考えられるものも存在するが、漢字が多い。また、「七」「十八」といった漢数字を確認できたことは重要である。「一」「三」「十」といった画数が少ない墨書が出土しても漢数字として識別することが困難であったが、替田遺跡では漢数字の存在が明らかになったことから画数の少ない墨書についても漢数字である可能性が高まった。これまでに漢数字の確認されている遺跡は、岩出遺跡群⁽⁴⁾や安養寺跡⁽⁵⁾といった有力者の介入する居館や寺院である。








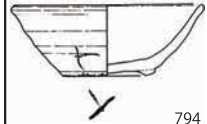


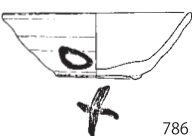




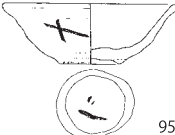



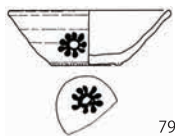




また、出土量の多い「大」「〇」「十」「×」などは里前遺跡1次調査区でも出土量の多いものであり、なおかつ、県内の六大A遺跡⁽⁶⁾や辻子遺跡⁽⁷⁾でも数多く確認されている(第35表)。従って、これらは当該期に普遍的にみられる墨書群であることが分かる。

「〇」「×」が組み合わされる墨書と  は、筆

跡の類似するものが里前遺跡1次調査区からも出土している。この墨書はこれまで三重県内では未確認であり、普遍的に存在する墨書とは異なることが考えられる。替田遺跡から三泗川沿いに下った地点に位置する里前遺跡は、物資集配機能を想定した河川際の里前遺跡1次調査区と居住空間である2次調査区で出土する墨書土器が質量ともに異なっており、各地点での機能差が反映されている可能性が考えられる。さらに、替田遺跡と里前遺跡1次調査区で筆跡の類似する同一墨書が確認された点から、里前遺跡1次調査区は隣接する居住空間である里前遺跡2次調査区だけでなく、河川を媒介として近接する替田遺跡とも密接に関わっていたことが考えられる。

次に、出土地点を検討していく。替田遺跡での墨書土器の出土傾向は、圧倒的に〇区からの出土が多く、特に〇区北東部に出土量が集中する。〇区からの出土量が多い点は中世前期の山茶碗が〇区に集中している点と共通する。詳細に出土地点を検討すると、区画溝SD514から最も量が多く出土している。SD514から出土する墨書は、「〇×」漢数字等が多い。「〇×」は、条里境に相当する地点に位置するSK536からも出土している。

中世の墨書土器が条里境に集中して出土することについては、岐阜県内の出土例から可児光生氏が指摘⁽⁸⁾されており、里前遺跡においても酒井巳紀子氏によって指摘⁽⁹⁾されている。今回の替田遺跡においては、条里溝であるSD503からもまとまった量の墨書土器が出土しており、他にも条里境に相当するSK536からも墨書土器は出土している。しかし、最も出土量の多いSD514は条里境ではなく、条里境であるSD503から4m地点に平行して位置する条里内の区画溝である。また、替田遺跡における墨書土器集中出土地点は〇区北東部であり、この地点は条里溝SD503に区画された一角であり、字結縁寺に相当する地点でもある。(川崎)

墨書	数量	里前遺跡分類	墨書	数量	里前遺跡分類	墨書	数量	里前遺跡分類	墨書	数量	里前遺跡分類
	4	A13		1	G5		1			1	G3
	1			2			1	C4		1	
	1			1			5	D1 G7		1	
	1			10	G6		7	D1		1	
	1			1			1	D3		1	I3
	1			2	G7		1			2	

第34表 替田遺跡墨書一覧表

分類	墨書	里前1次	里前2次	替田	六大A	辻子	分類	墨書	里前1次	里前2次	替田	六大A	辻子	分類	墨書	里前1次	里前2次	替田	六大A	辻子	分類	墨書	里前1次	里前2次	替田	六大A	辻子						
A1	寺 ₂₅₃	2					C2	卅 ₂₆₄	2					E7	𠂇 ₁₅	1					G5	𠂇 ₈₇₀	1	1	1		K5	𠂇 ₁₂₂₃	1				
A2	𠂇 ₁₀₃₉	3					C3	𠂇 ₆₃₁	1					E8	𠂇 ₄₁₆	1					G6	𠂇 ₄₁₅	12	10	15	8	K6	𠂇 ₁₀₅₁	2				
A3	𠂇 ₁₀₃₈	1					C4	𠂇 ₁₀₄₅	4	2	1		3	E9	𠂇 ₁₁₅₁	3					G7	𠂇 ₅₀₅	17	7	3	6	K7	𠂇 ₉₅	8				
A4	上 ₄₂₈	3	1		4	13	C5	𠂇 ₂₈₂	2					E10	𠂇 ₂₈₈	6					H1	𠂇 ₈₇₇	2				K8	𠂇 ₅₄₈	1				
A5	𠂇 ₄₉₃	1					D1	𠂇 ₁₀₁₁	13		12	2	10	E11	𠂇 ₁₀₂₃	8					H2	𠂇 ₁₀₁₀	1				K9	𠂇 ₁₁₃₁	1	10			
A6	𠂇 ₁₀₅₀	1					D2	𠂇 ₁₀₃₄	1					E12	𠂇 ₁₁₆₈	1					H3	𠂇 ₈₇₁	1				K10	𠂇 ₄₉₄	4				
A7	𠂇 ₅₉₅	4	1				D3	𠂇 ₁₉₄	6			2		E13	𠂇 ₂₈₉	12					H4	𠂇 ₆₅₃	1				K11	𠂇 ₅₃₉	1				
A8	𠂇 ₄₄₃	1					D4	𠂇 ₁₁₄₇	4					E14	𠂇 ₄₃₂	1					H5	𠂇 ₁₀₁₉	1				K12	𠂇 ₂₄₅	1				
A9	𠂇 ₅₁₅	1					D5	𠂇 ₁₅₉	1					E15	𠂇 ₁₁₆₉	1					I1	𠂇 ₁₀₄₇	1				K13	𠂇 ₃₂₄	1				
A10	𠂇 ₁₁₂₉	1					D6	𠂇 ₄₂₃	6					E16	𠂇 ₁₁₄₈	1					I2	𠂇 ₄₄₉	1				K14	𠂇 ₂₄₈	1				
A11	𠂇 ₁₀₈₈	1					D7	𠂇 ₅₇₀	1					E17	𠂇 ₁₀₂₆	1					I3	𠂇 ₈₆₉	2		2		K15	𠂇 ₄₅₄	1				
A12	𠂇 ₁₁₃₂	1					D8	𠂇 ₄₂₇	2					F1	𠂇 ₄₅₆	2					J1	𠂇 ₁₀₄₈	1				K16	𠂇 ₁₀₉₅	1				
A13	大 ₁₀₈₂	20	1	4	4	3	D9	𠂇 ₃₀₀	1					F2	𠂇 ₄₃₈	1					J2	𠂇 ₁₀₂₇	1				K17	𠂇 ₁₁₃₃	1				
A14	𠂇 ₅₇₄	2					E1	𠂇 ₁₁₅₂	2					F3	𠂇 ₁₀₅₅	3					J3	𠂇 ₁₀₄₈	1				K18	𠂇 ₁₀₀₉	1				
A15	𠂇 ₁₀₃₃	1					E2	𠂇 ₂₈₅	25					F4	𠂇 ₁₄₀	1					J4	𠂇 ₁₁₃₉	1				K19	𠂇 ₉₄₅	1				
A16	𠂇 ₄₁₁	1					E3	𠂇 ₁₀₅₉	5					G1	𠂇 ₁₀₂₉	7	1		3		K1	𠂇 ₂₀₁	8				K20	𠂇 ₁₀₃₂	3				
B1	𠂇 ₁₁₁₆	2					E4	𠂇 ₆₅₀	3					G2	𠂇 ₂₈₇	1					K2	𠂇 ₁₈₀	4			1							
B2	𠂇 ₁₀₂₂	2					E5	𠂇 ₂₆₉	1					G3	𠂇 ₆₃₆	34			1		K3	𠂇 ₁₀₁₈	1										
C1	𠂇 ₁₀₀₄	11				1	E6	𠂇 ₁₁₆₅	3					G4	𠂇 ₆₄₃	1					K4	𠂇 ₁₂₁₂	2										

第35表 里前遺跡ほか墨書一覧表

註

- (1) 竹田憲治「安養寺跡の墨書土器」『安養寺跡・豆谷山中世墓群・豆谷山経塚群・五峰山2号墳』二見町教育委員会2004
- (2) 三重県埋蔵文化財センター『里前遺跡発掘調査報告』2002
- (3) 川崎志乃「考察」『里前遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター2002
- (4) 三重県埋蔵文化財センター『岩出地区内遺跡群発掘調査報告』1996
- (5) 二見町教育委員会『安養寺跡・豆谷山中世墓群・豆

- 谷山経塚群・五峰山2号墳』2004
- (6) 穂積裕昌「中世の墨書土器について」『六大A遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター2002
- (7) 角正淳子「辻子遺跡出土の古代末から中世の土器について」『辻子遺跡発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター2004
- (8) 可児光生「中世 第一章 文化の普及」『岐阜県教育史』通史編 岐阜県教育委員会 2003
- (9) 酒井巳紀子「中世前期の墨書土器について」『里前遺跡(第2次)発掘調査報告』三重県埋蔵文化財センター2005

第7節 古代末から中世の替田遺跡

古代末から中世の替田遺跡出土遺物を概観する⁽¹⁾。

古代末期 10世紀中葉から11世紀前葉頃にあたる。尾張産灰釉陶器、在来の系統下にある土師器皿類、南伊勢系統の土師器甕類が見られる。

中世Ⅰ期 11世紀後半から12世紀後半頃にあたる。この時期の土師器類は、広義の「京都系」と在来のものがある。「て」の字状口縁小皿(73・1058ほか)や2段ナデの小皿(477)は、京都系の範疇に含まれる。それに対し、506は在来の系統下である。京都系土師器は、近隣では雲出島貫遺跡で多量に出土している⁽²⁾が、当遺跡では極めて少ない。

土師質土器(ロクロ土師器)では、柱状高台小皿(70)や小皿類(402ほか)があり、組成上は一定量占めると考えられる。黒色土器は、器壁の厚いものが多く、近隣での生産が考えられる。煮沸具では南伊勢系統が主体で、少量の清郷形甕を伴う。

陶器類は尾張産・三河(渥美)産の椀(山茶椀)のほか、尾張産の壺類が認められる。珍しいものでは、篠窯産と見られる鉢(691)がある。

中世Ⅱ期 13世紀初頭から15世紀初頭頃にかけての時期にあたる。前半代(Ⅱa期、14世紀前半頃)の資料充実に対し、後半代のものは少ない。

土師器では京都系が消滅する。在来の系統下にある皿(417・418)は引き続き見られるが、南伊勢系(746~758など)の搬入量がそれを圧倒している。土師質土器と黒色土器は消滅している。煮沸具では引き続き南伊勢系が中心である。三足の付く瓦質羽釜(745)は珍しく、京都方面からの搬入と考えられる。

Ⅱa期の陶器類は、椀を中心とした尾張産の搬入が継続する。

中世Ⅲ期 15世紀中葉から16世紀前半頃にあたる。

土師器皿類は南伊勢系のものがあるが、中北勢系は少なく、当遺跡の特徴といえる。煮沸具では中北勢系羽釜(855など)のほか、南伊勢系(854・858~861など)が確認できる。数値で示せないが、南伊勢系煮沸具の方が中北勢系よりも多そうである。

陶器類では、古瀬戸・常滑などの東海諸窯製品の他、信楽系の播鉢(633・1059)も少量認められる。

貿易陶磁器は少量だが、香炉(94)の出土は特筆できる。同種のもは、県内では北畠氏館跡で出土が知られる⁽³⁾程度であり、当地に存在していた寺院との関連で把握できるものであろう。

この他に、当該期に特徴的な遺物として瓦類の出土が挙げられる。瓦の調整方法や軒丸瓦の様式から見て、15世紀代を中心としたものと考えられる。

動向 出土遺物からみた当遺跡は、14世紀前葉から15世紀初頭までの空白期をはさみ、前半期(中世Ⅰ・Ⅱa期)と後半期(中世Ⅲ期)の2時期に大きく分かれる。最盛期は13世紀中葉であろう。

替田遺跡の前半期は、近隣の神戸遺跡・式ノ坪遺跡等と一体となった荘園(安濃神戸)在家集落の一部と考えられる。全体として散村的景観をなしていたであろう当地の状況復元が考古学的に可能と思われる。後半期の動向は不明であるが、前半期の在家集落が変動するなかで、寺院のみ精神的紐帯の要として当地に残った可能性も考えられよう。(伊藤)

註

- (1) 時期区分は、伊藤裕偉「中世後期における伊勢・志摩地域の土器相」『関東・東海における中世土器・陶器の最近における研究成果』陶磁器編年研究会・静岡大学2005による。
- (2) 三重県埋蔵文化財センター『鳴抜Ⅱ』2000
- (3) 美杉村教育委員会『北畠氏館跡9』2005

第6章 調査の総括と学術上の課題

大面積を調査した中勢道路部分の整理・報告書作成が今後に予定されている現段階では中間的な内容にならざるを得ないが、現状での替田遺跡調査の総括と学術上の課題を列挙し、今後の課題としたい。

集落域に関わる問題

行政的な遺跡名称「替田遺跡」として把握されている遺跡の小字名は替田遺跡であるが、替田遺跡として把握されている部分は、字「替田」以外にも字「結縁寺」や「又ノ口」にも広がり、特に今回の報告箇所は字「結縁寺」と「又ノ口」がほとんどである（字「替田」に相当する部分は中勢道路調査区の北側部分、第264図参照）。遺跡名称の付与方法は、当該遺跡が遺跡として把握された経緯とも関わり、小字が複数に広がる場合はそのなかのひとつを代表させて遺跡名称とする場合もあって必ずしも間違いではないが、替田遺跡の場合、これまでの研究史上の扱いと遺物注記を含む相当の整理が進んだ状態などを勘案して、替田遺跡のままとした。

弥生集落に関わる問題

遺構の分布密度は、弥生時代の遺構は字「又ノ口」に、古代末から中世前期の遺構は字「結縁寺」に中心がある。しかし、第5章第2節でも明らかのように、弥生時代中期前葉～中葉の集落は替田遺跡と南側の式ノ坪遺跡に中心がある。両遺跡は、ほぼ同時期の集落であるが、両集落の間には河道が入り込んでおり（第3章及び第5章第5節参照）、同一の集落とはいえない。しかし、河路を挟んで相対する集落として、同一の集落群を構成していた可能性は高い。つまり、両集落は、「替田・式ノ坪遺跡群」とも呼称しうる状況を呈している。

この集落群内部の住居構成は、現状では竪穴住居のみしか確認できなかったが、北側800mの蔵田遺跡では逆に掘立柱建物を中心に構成されており、替田遺跡に本当に掘立柱建物が存在しないのか、またないとすればその要因が立地条件なのか別の要因かなど、当地の中期初頭の集落構成を考えるうえでも重要な論点を孕んでいる。今後の課題としたい。

古代末～中世期の替田遺跡の性格

この時期の遺構は、字「結縁寺」に中心がある。

この部分の遺構に関しては、第5章第5節で地籍図も交えて考察されているように、かつて存在したとされる寺院、「結縁寺」との関わりが注意される。ただし、遺物のうえでは中世前期までは寺院関連と推定されるものは乏しく、寺院の成立と地割の相関をどのように捉えていくのが今後の課題である。

具体的には、〇区のすぐ北側には、かつては周辺部よりも1段高くなった土壇状の区画が残存していた（第1図参照）。第5節も考察されているように、この部分を中心に据えると今回報告した溝の一部がこの土壇状施設の区画溝に相当する可能性がある。一方で、区画の成立が先にあり、それに規定されて後に寺院が成立した可能性も考えられる。いずれにせよ、現在、県内の中世寺院が発掘調査によって明確に把握された例は伊勢市の安養寺跡⁽¹⁾など少数にとどまっており、この土壇状の施設とそれに地割を揃える溝（SD514・521）は、こうした中世寺院の具体的なあり方を示す遺構⁽²⁾である可能性は高い。

なお、これに関連して、替田遺跡からは瓦類の出土もある。出土した軒瓦類の一部（688・886）の文様は、これまで県内各地、例えば津市六大A遺跡⁽³⁾、川北城跡、伊賀市観菩提寺⁽⁴⁾（正月堂）などで確認されているものと系統的にも共通している⁽⁵⁾。今後、その編年的位置の確定をしたうえで、分布と瓦の供給関係を確認することも課題であろう。

今回の調査成果によって、未解明な部分の多い当地の中世寺院・仏教史を多面的に考察するひとつの手掛りとなり、その解明に少しでも寄与できることがあればと祈念している。

（穂積）

註

- (1) 三重県二見町教育委員会『安養寺跡・豆石山中世墓群・豆石山経塚群・五峰山2号墳』2004
- (2) 替田遺跡との関連で結縁寺の性格を考察したものに下記文献。小倉整「三重県津市南河路「小字結縁寺」についての一考察」『Mie history』vol.16 2005
- (3) 三重県埋蔵文化財センター『六大A遺跡発掘調査報告』2002
- (4) 島ヶ原村史編纂委員会『島ヶ原村史』1983
- (5) 河北秀実氏のご教示による

写真図版



遺跡全景（東から、正面は長谷山）



遺跡東半部全景（西から）

図版 2



調査前風景（L区・O区 東から）



H区北側全景（西から）



H区東側全景（北から）



I区全景（西から）

図版 4



J区北西側全景（西から）



J区南東側全景（北から）



K区北側全景（東から）



L区全景（東から）

図版 6



L区全景（西から）



L区西側近景（北東から）



L区中央部近景（北から）



L区東側近景（北から）

図版 8



M区北側（東から）



M区東側（南から）



N区上層全景（西から）



N区下層全景（西から）

図版10



N区南への派生トレンチ上層全景（北から）



N区南への派生トレンチ下層近景（北から）



N区東端部全景（東から）



O区西側全景（東から）

図版12



O区全景（東から）



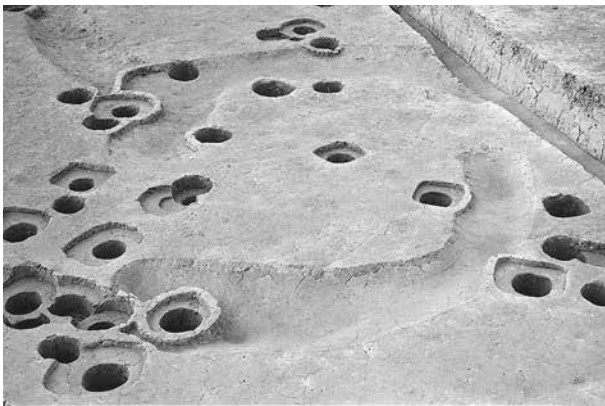
P区全景（東から）



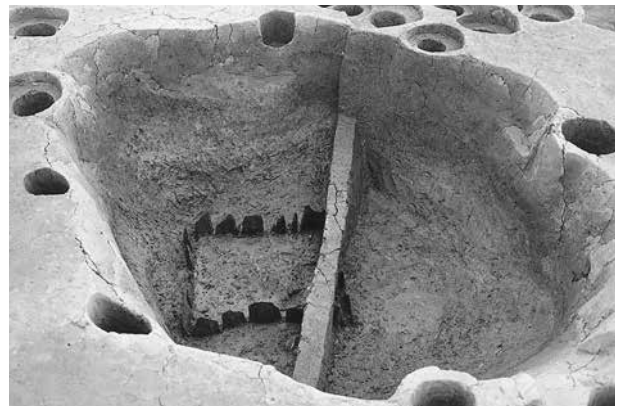
S K 103 (西から)



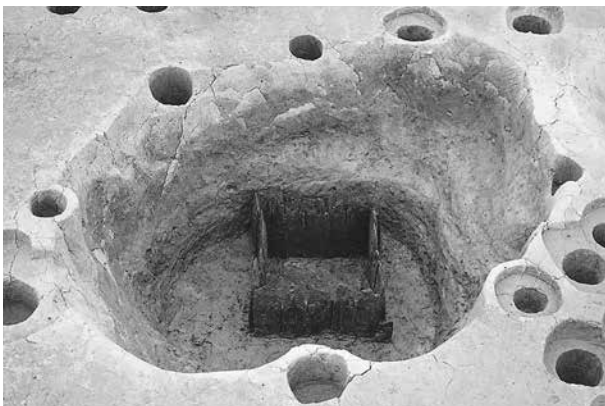
S E 105 (東から)



S X 122 (東から)



S E 106 杵材検出 (北から)



S E 106 杵材埋土掘削 (東から)



S E 106 掘形と杵材 (東から)



S E 106 杵材内遺物出土状況 (東から)



S E 106 横棧組方 (北東から)

図版14



S K 201 (西から)



S K 202 (北から)



S K 204 (南から)



S K 205 (南から)



S H 207 (東から)



S H 207近景 (南から)



S K 220 (東から)



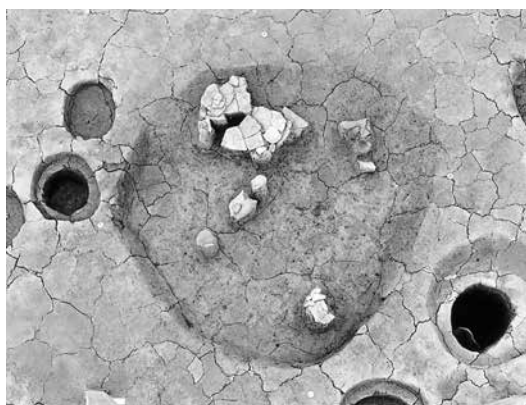
S K 221 (東から)



S K 222 (東から)



S K 222近景 (東から)



S K 223 (東から)



S K 244 (北西から)



S K 244 (北東から)



S H 251石斧 (139) 出土状況 (西から)



S K 252 (南から)



S K 252遺物 (190) 出土状況 (西から)

図版16



S K 285 (西から)



S K 285遺物出土状況 (北から)



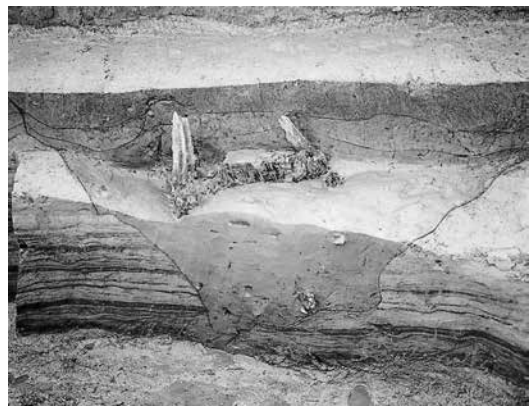
S K 304 (東から)



S D 340 (北から)



S E 327 (左) ・ S E 324 (右) (南から)



S E 324 (東から)



S E 327 (東から)



S E 327完掘状況 (東から)



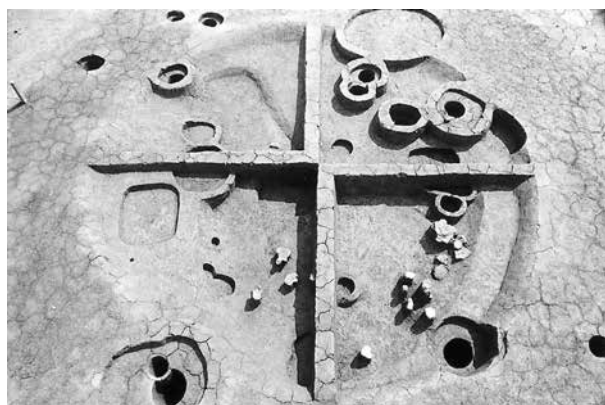
L区全景（南東から）



S K 204（南から）



S X 229（北から）



S H 230（東から）



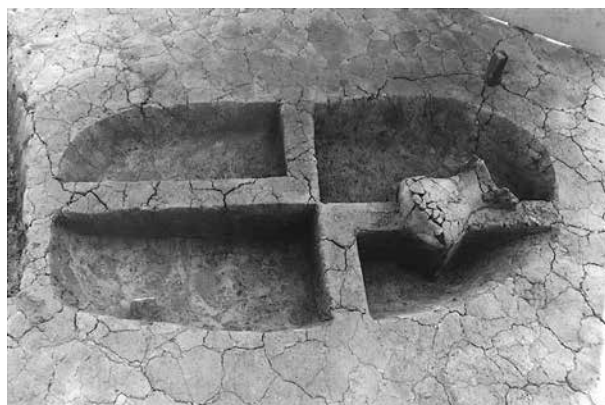
S K 233（東から）



S K 233遺物出土状況（東から）



S H 251（西から）



S K 252（東から）

図版18



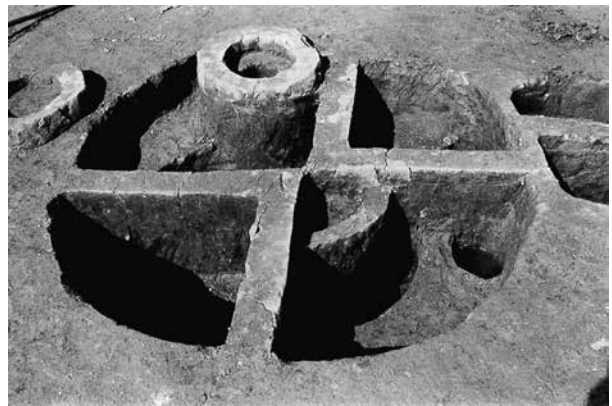
S E 259埋土半截（北西から）



S E 269（北から）



S E 267（北から）



S E 229（西から）



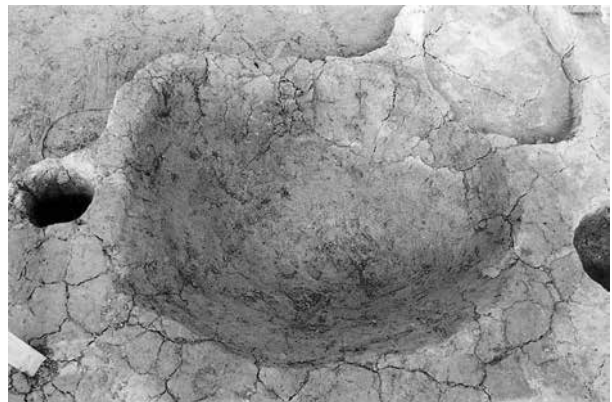
S H 311（東から）



S K 312（北から）



S K 312遺物出土状況（東から）



S K 315（南から）



S E 324 (東から)



S E 327 (東から)



S E 327遺物出土状況 (南から)



S H 333 (北東から)



S K 335 (北から)



S B 343 (東から)



S K 234・235 (東から)



S B 344 (東から)

図版20



S D 124 (東南から)



M区南端調査区 (北から)



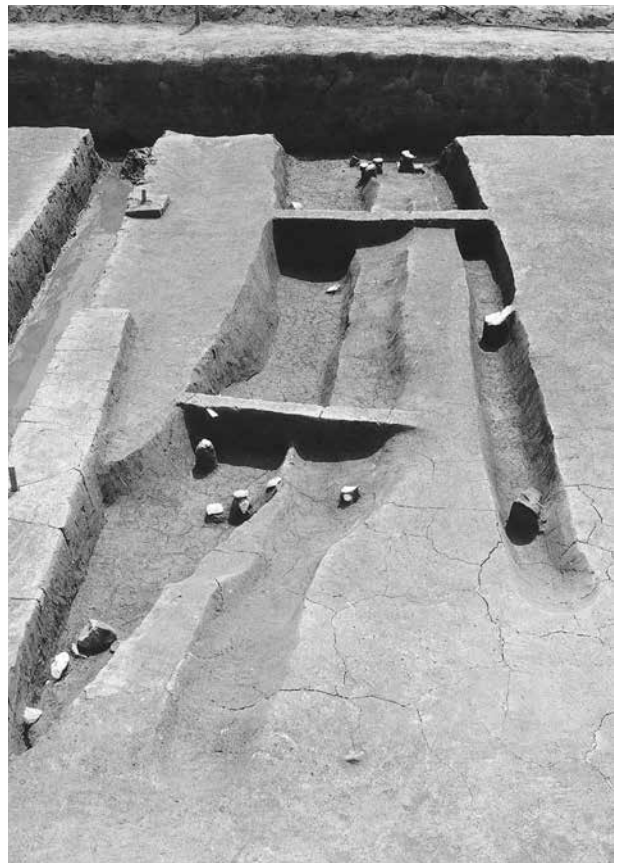
S E 129 (北から)



J区P 4 pit 5 遺物出土状況 (西から)



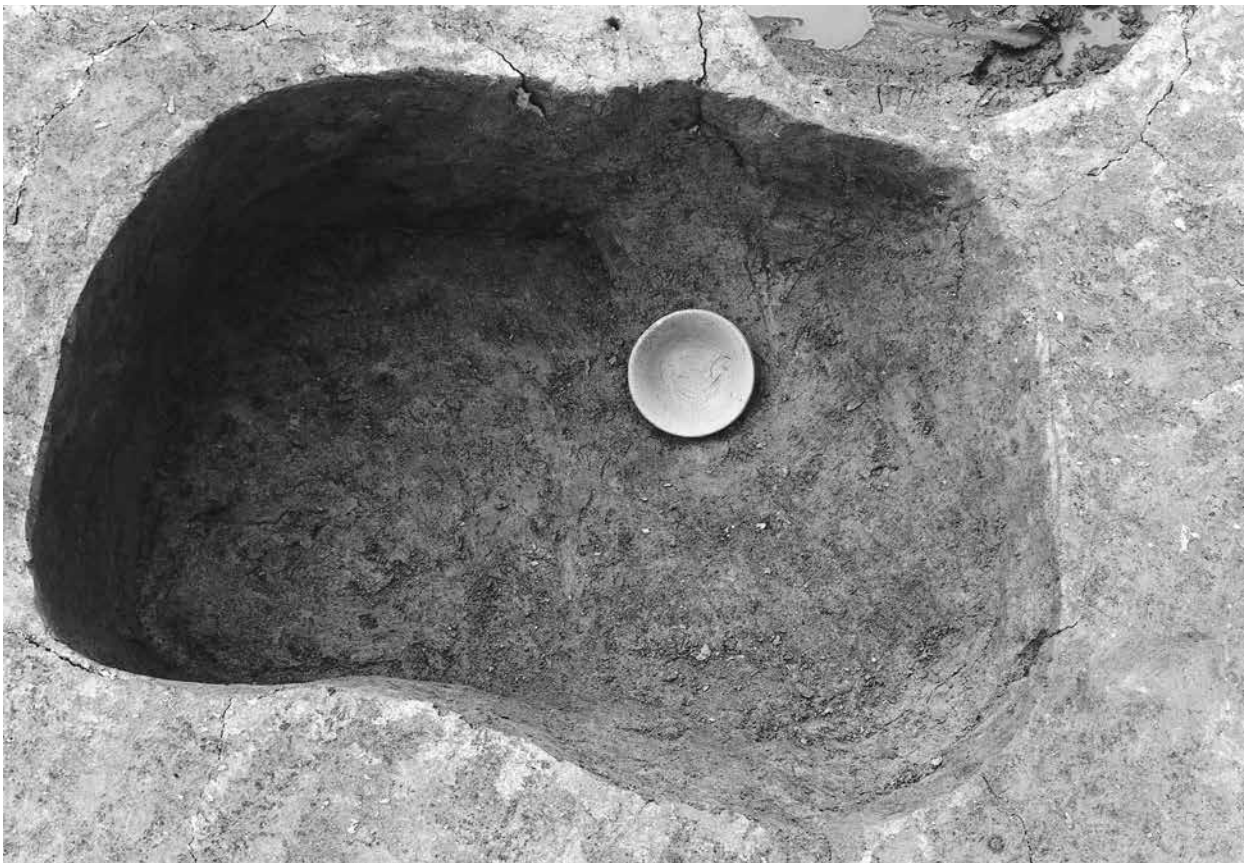
S D 514 (東から)



S D 516・518・519 (北東から)



S K 529 (東から)



S K 533 (東から)

図版22



S D514遺物出土状況（西から）



S X537（東から）



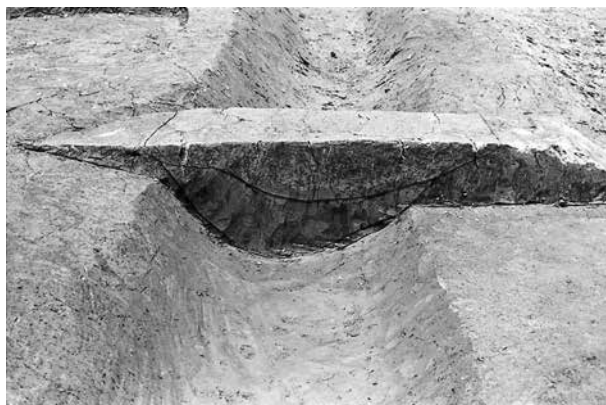
S X537（東から）



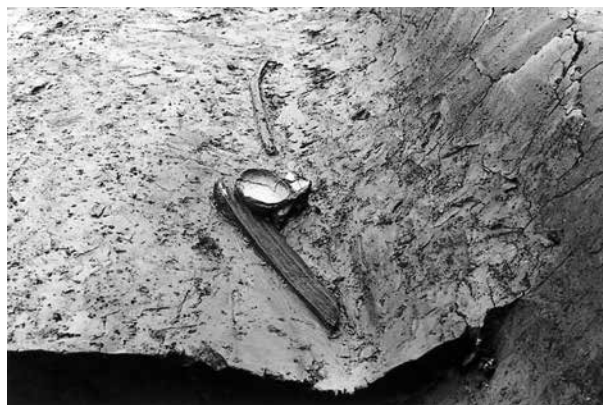
S K525（北東から）



S D517網代出土状況（南から）



S D 806 (東から)



S D 802 (西から)



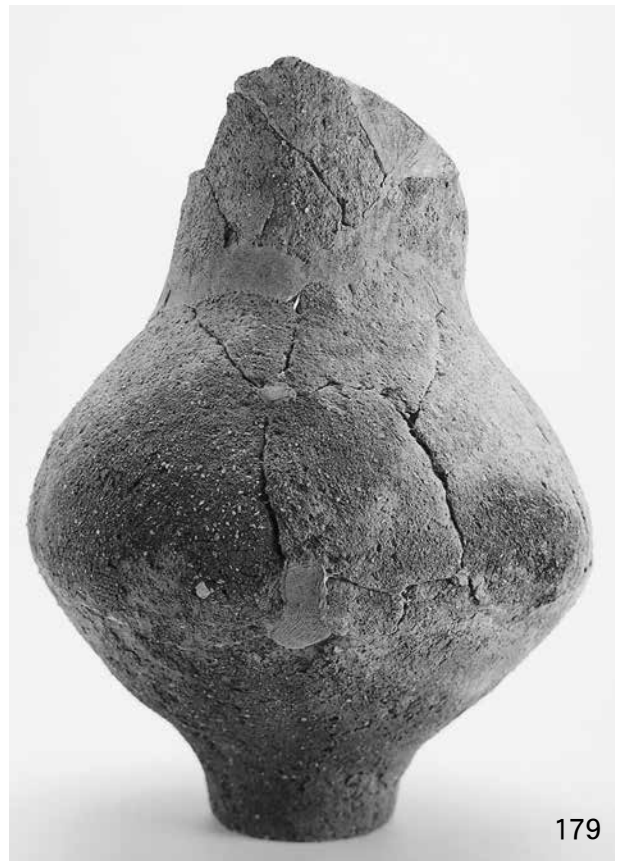
S D 803下駄出土状況 (南から)



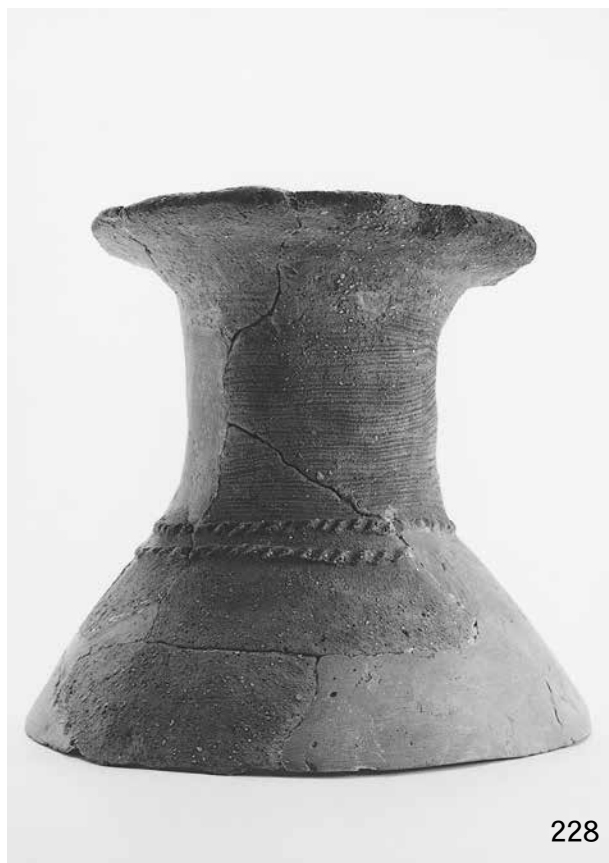
S D 802掘削中 (西から)



S D 503東側 (西から)

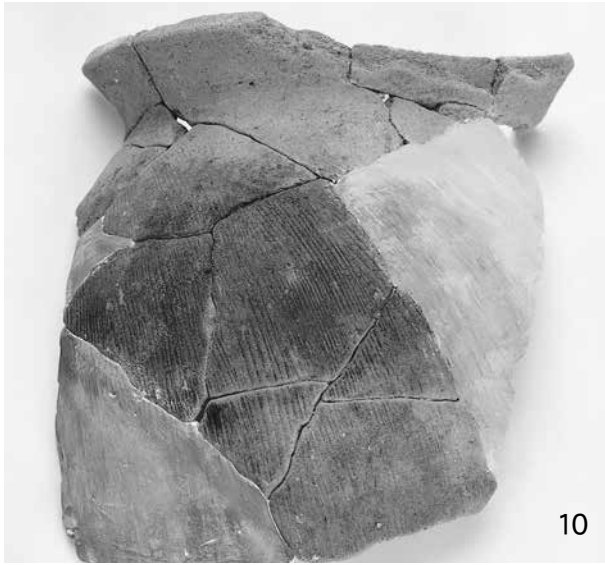


出土遺物18・81・116・179



出土遺物181・182・227・228

图版26

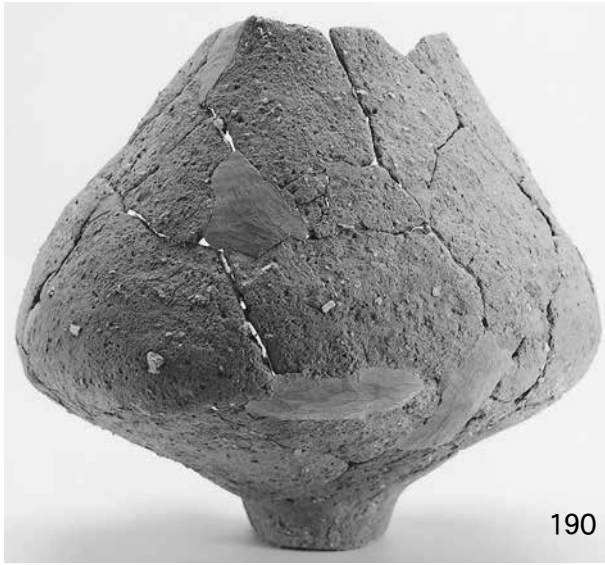


出土遺物10・10・37・40・67・117



出土遺物124・125・149・180・183・186

图版28



出土遺物190・196・197・199・204・211



出土遺物229・232・445・500・745・1003

图版30



出土遺物9・12・23・53・56・62・68・72・73・77

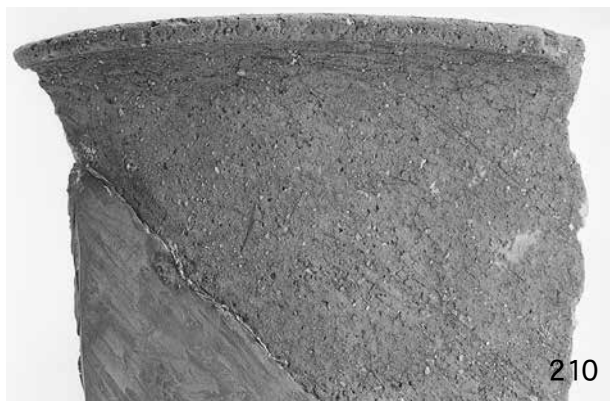


出土遺物91・118・119・121・122・143・144・145

图版32



出土遺物147・148・162・163・164・164・167・168・169・189



出土遺物210・212・214・215・226・233・254・357

图版34



出土遺物369・370・371・376・379・382・383・402

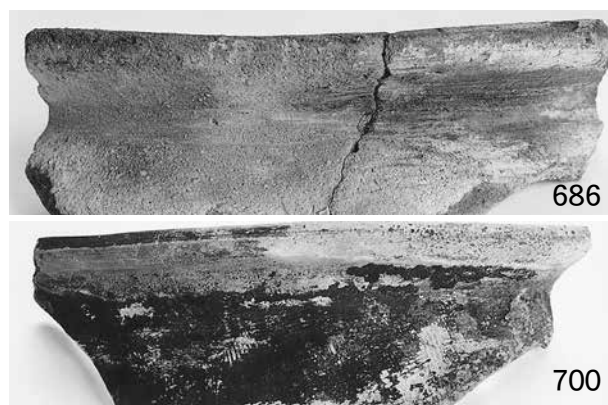
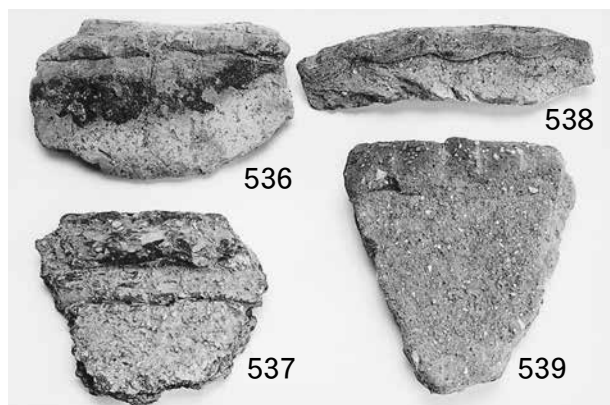


出土遺物404・407・411・414・415・417・425・422・426・469

图版36



出土遺物430・431・443・444・448・490・501・510



出土遺物536・537・538・539・547・548・551・560・575・667・686・700

图版38

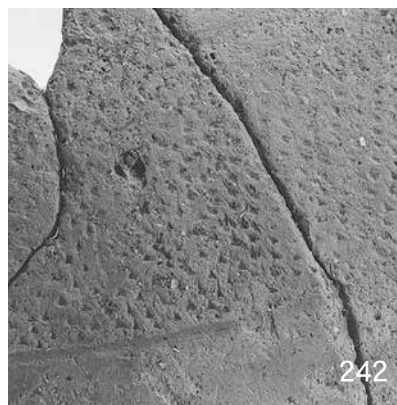
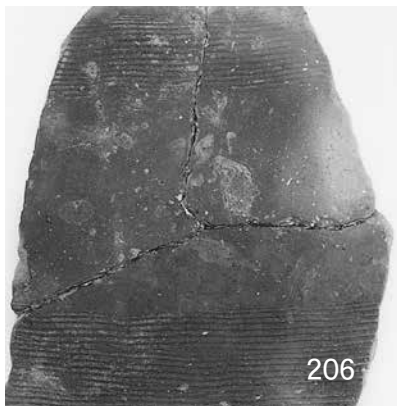
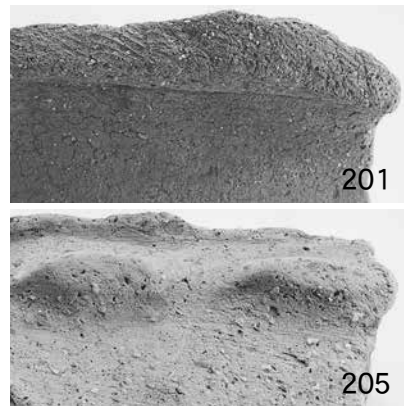
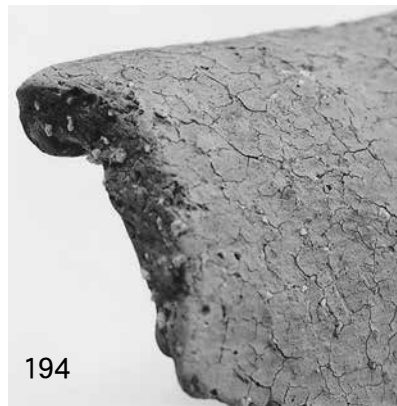


出土遺物720・736・739・741・854・856・859・1007

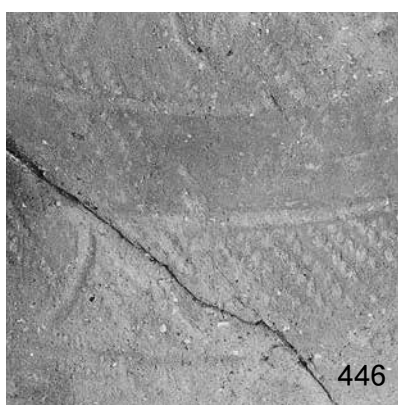
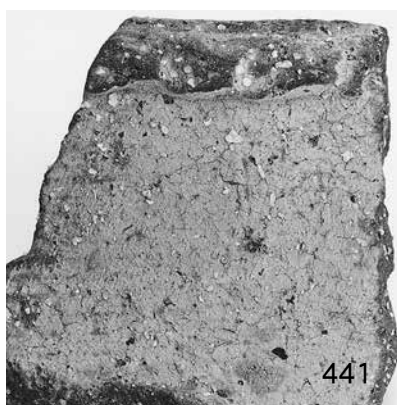


出土遺物1・4・5・11・27・34・36・63・75・93・103・129

图版40

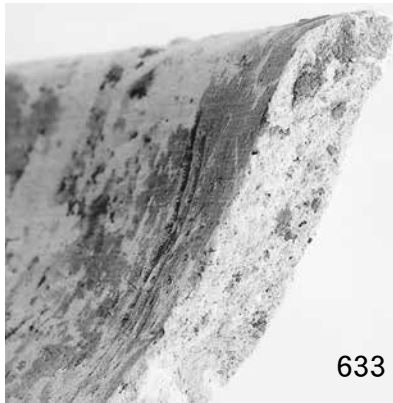


出土遺物142・159・161・166・194・201・205・206・207・221・225・242・243

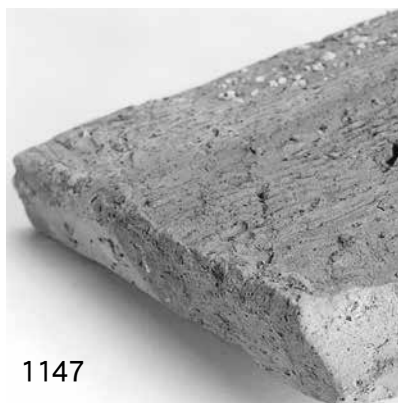


出土遺物255・256・257・255・261・261・401・412・416・439・506・441・446・461・524

图版42

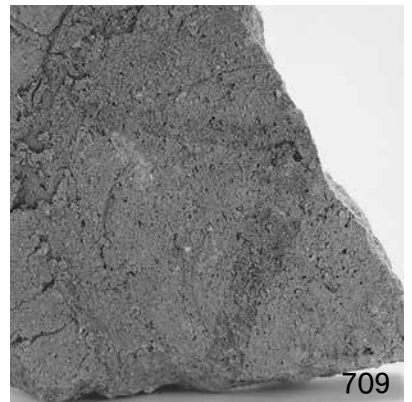
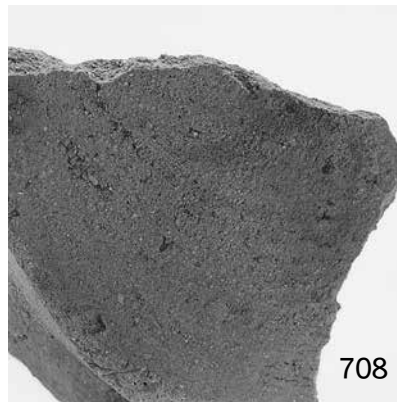
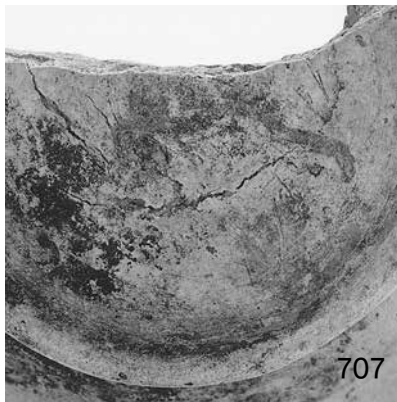
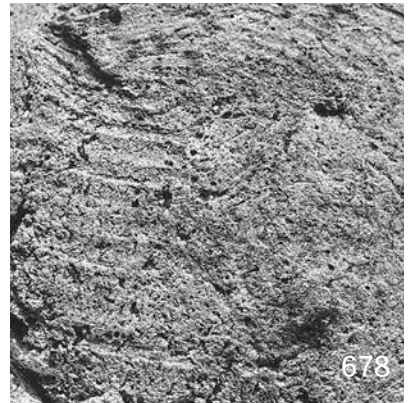
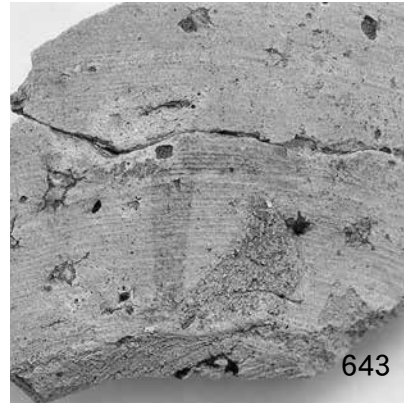
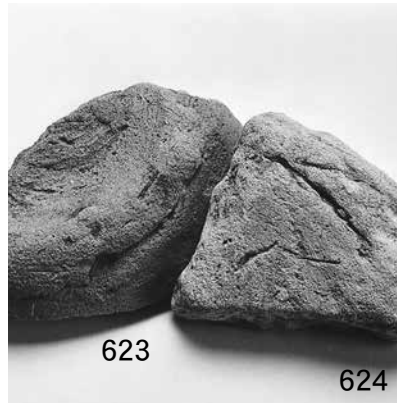
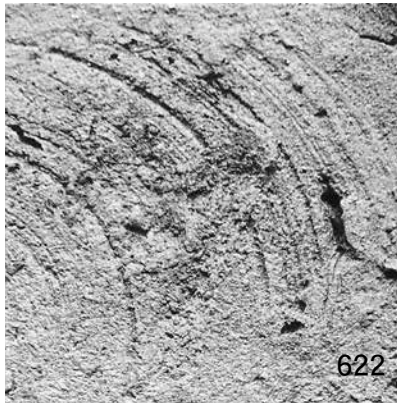
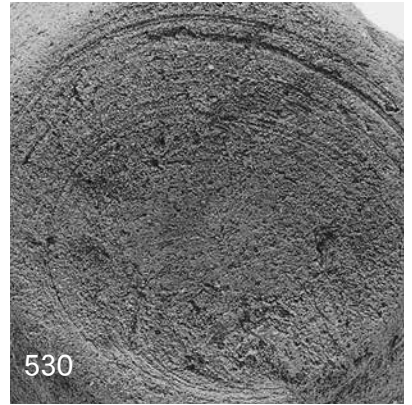
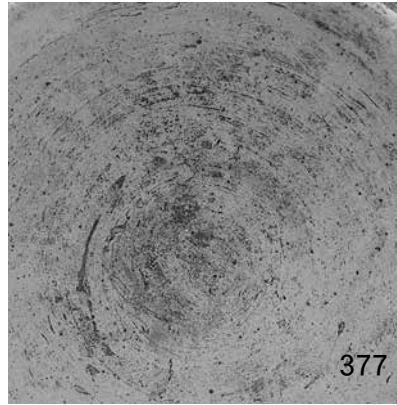
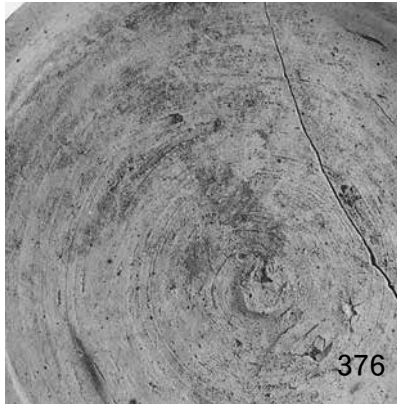


出土遺物577・583・601・604・606・749・633・761・770・1144・840・842

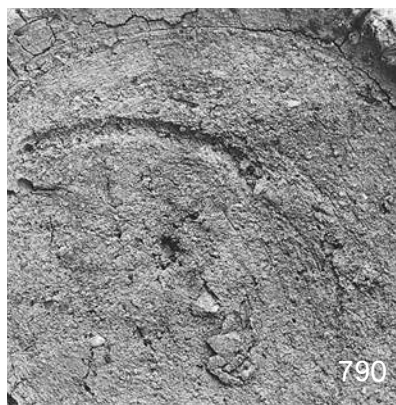
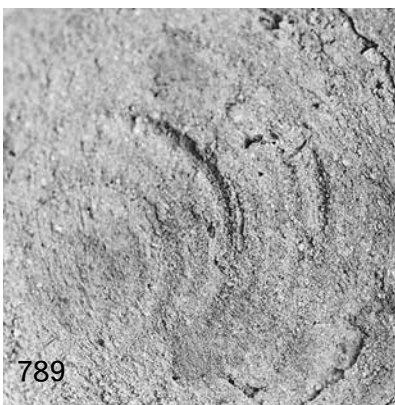
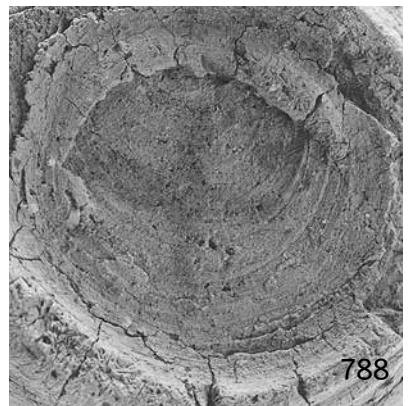
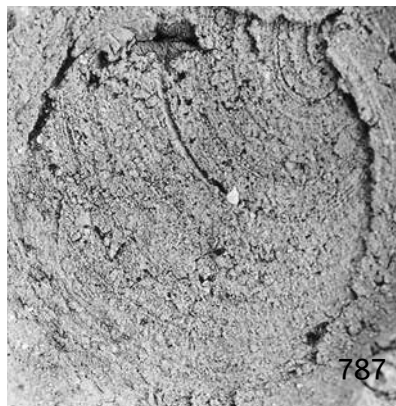
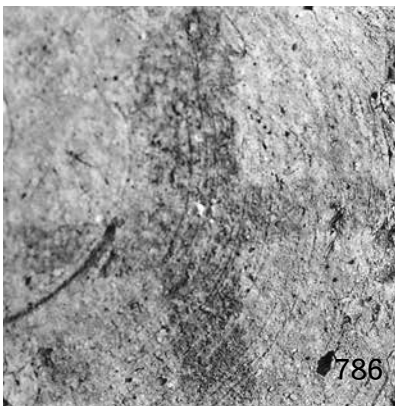
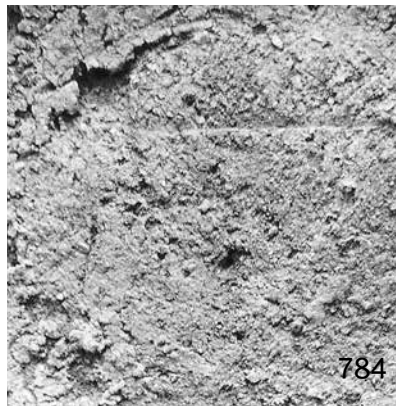
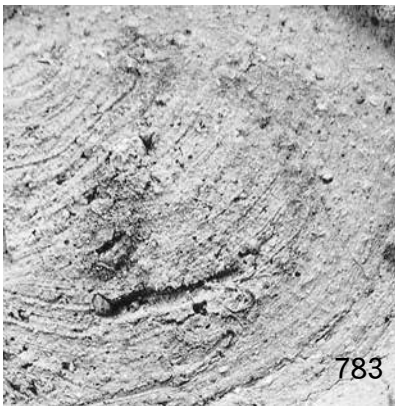
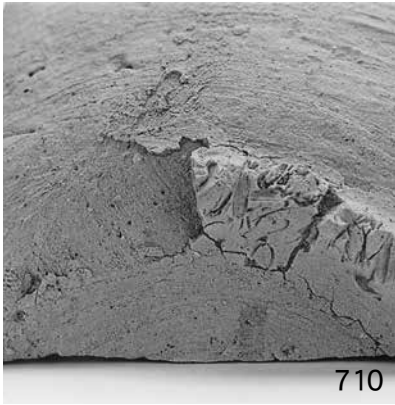


出土遺物687・883・884・688・701・885・886・887・1146・1147・1238・1238

图版44

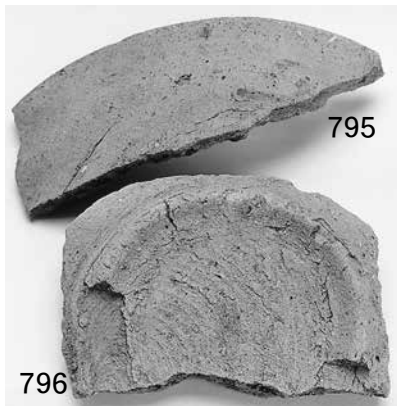
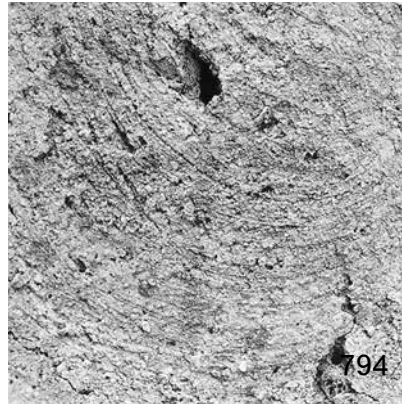
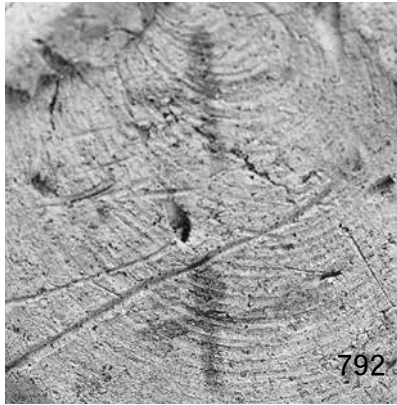


出土遺物376・377・530・622・623・624・643・676・677・678・707・708・709

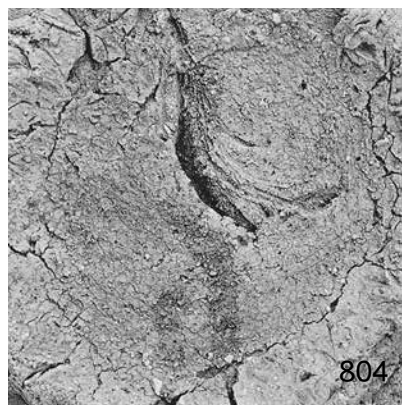
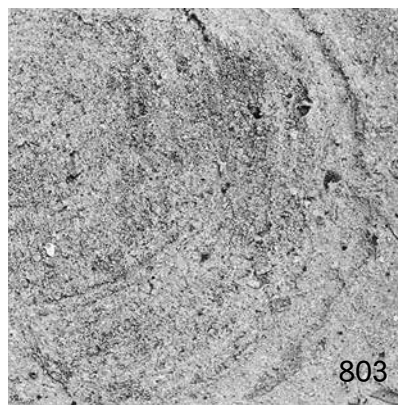
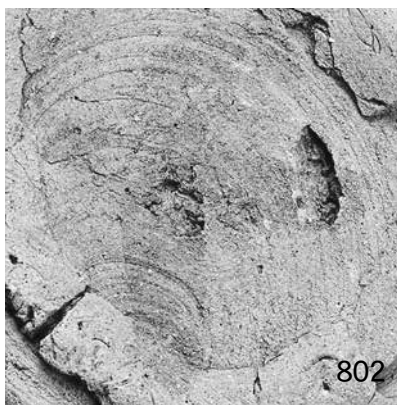
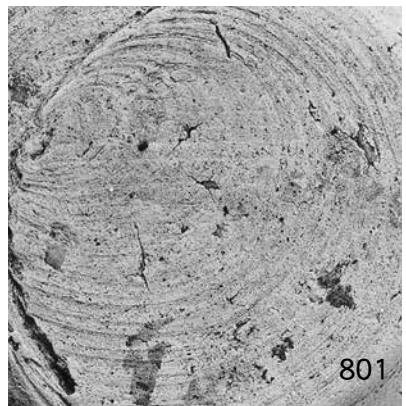
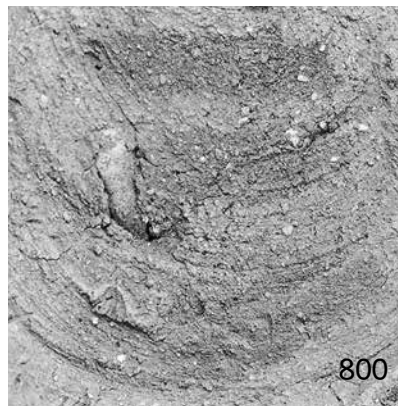
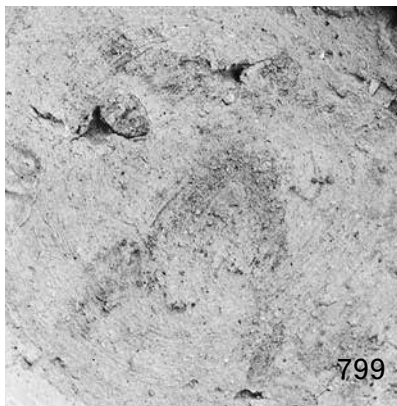
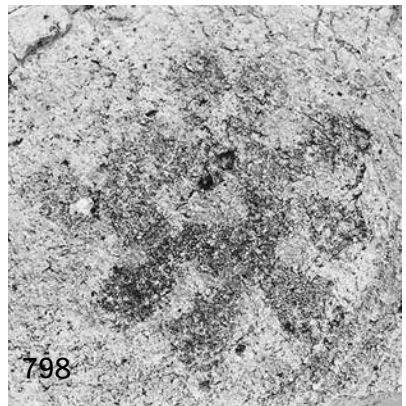
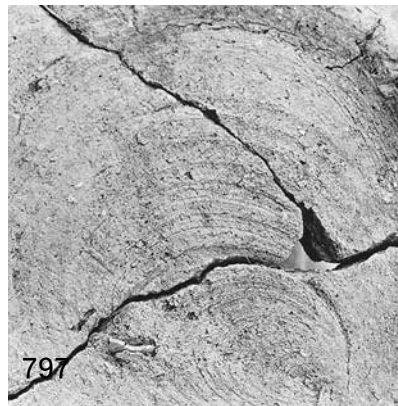


出土遺物710・781・782・783・784・785・786・787・788・789・790・791

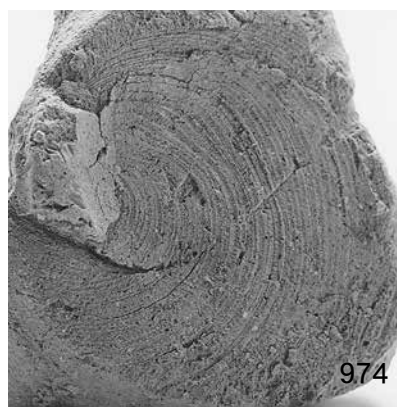
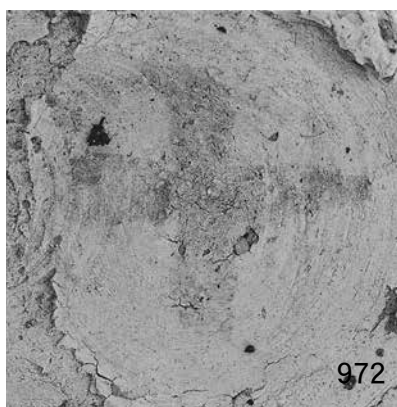
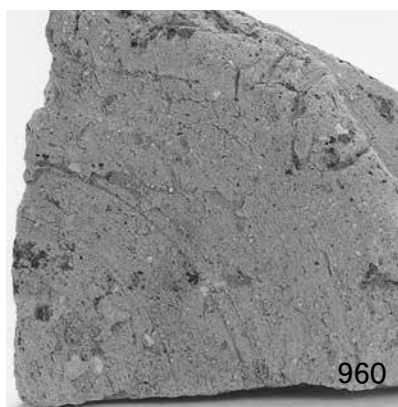
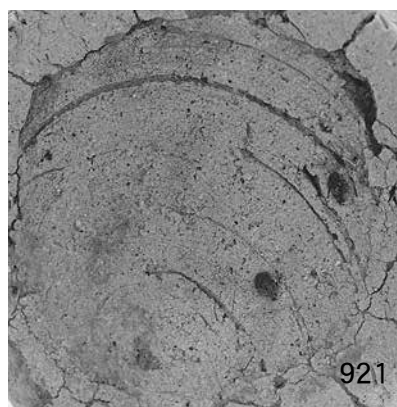
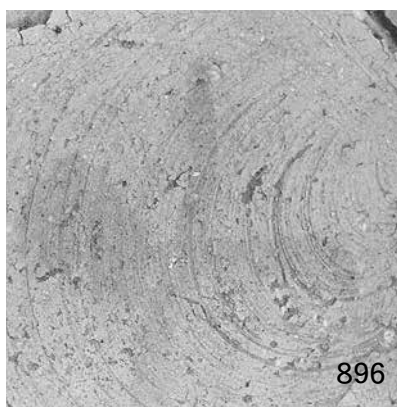
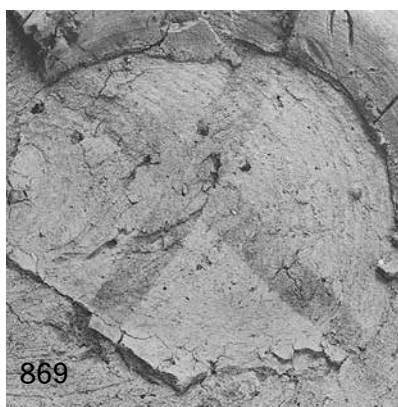
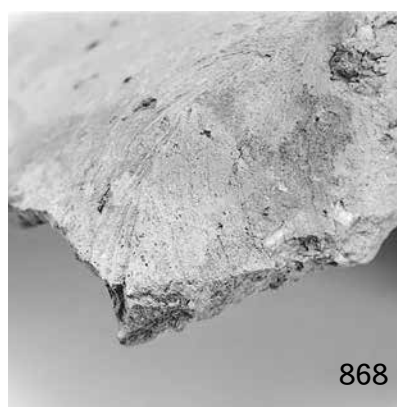
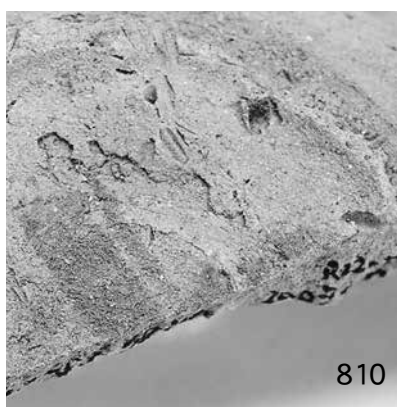
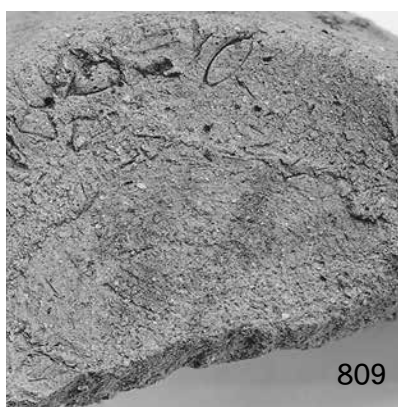
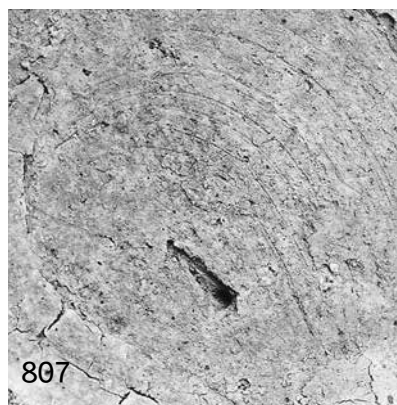
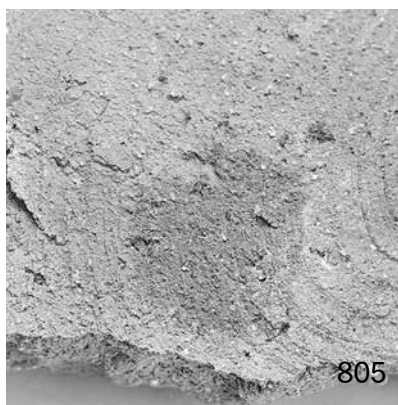
图版46



796

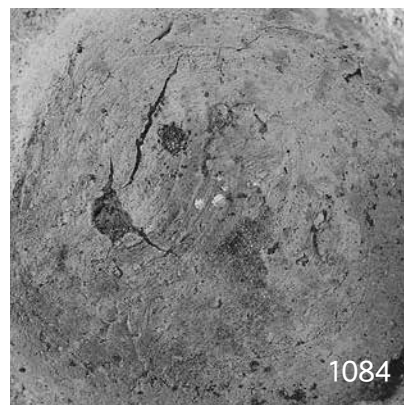
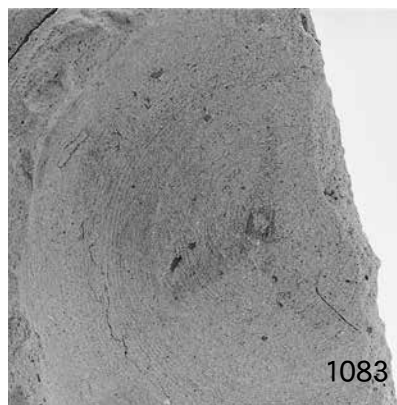
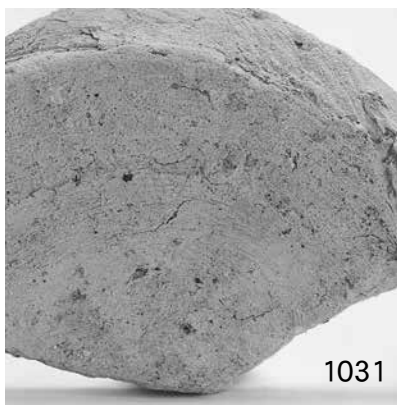
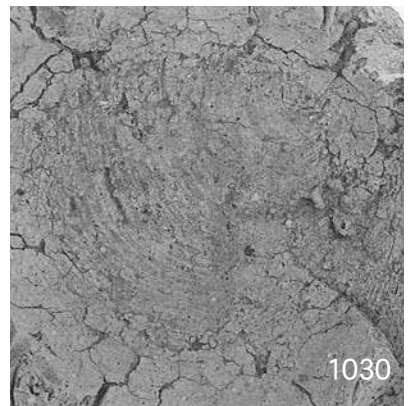
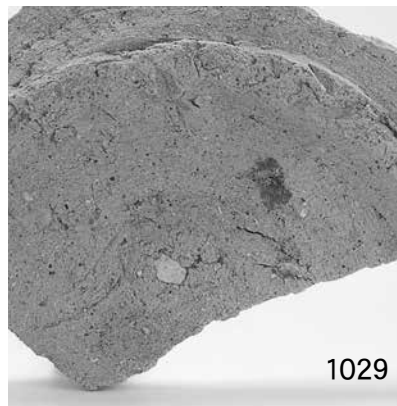
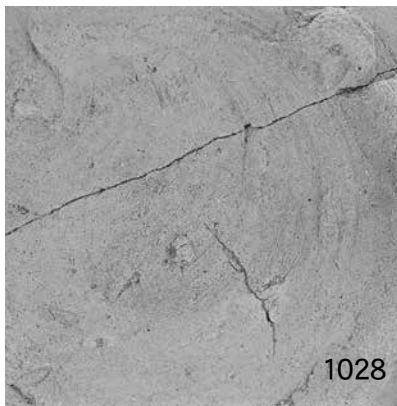
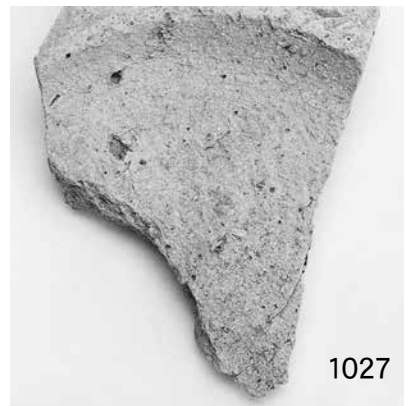
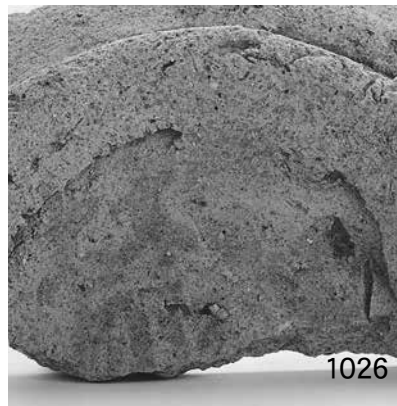
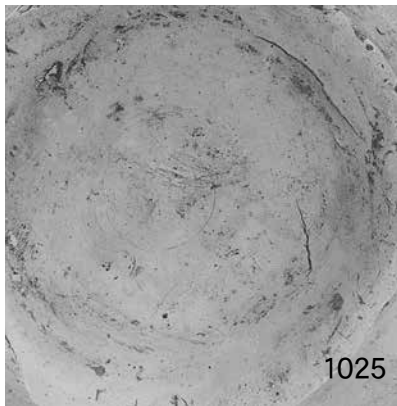
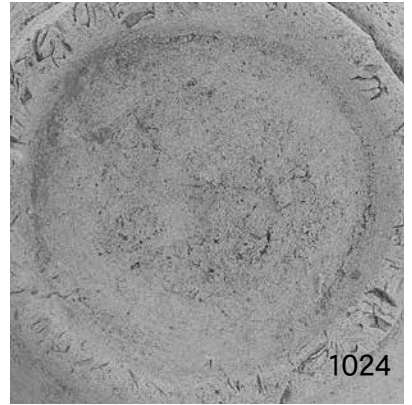
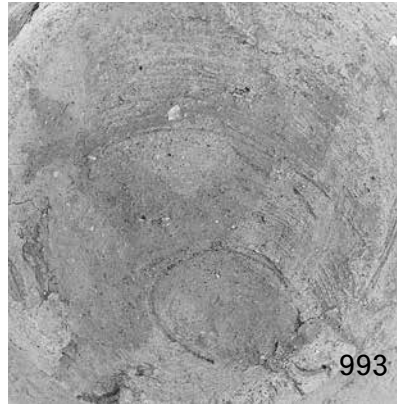


出土遺物792・793・794・795・796・797・798・799・800・801・802・803・804

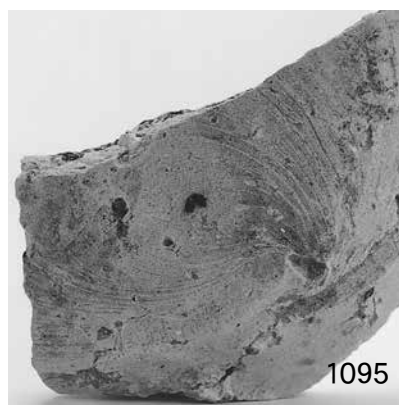
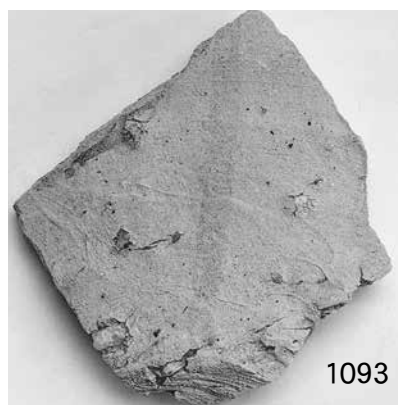
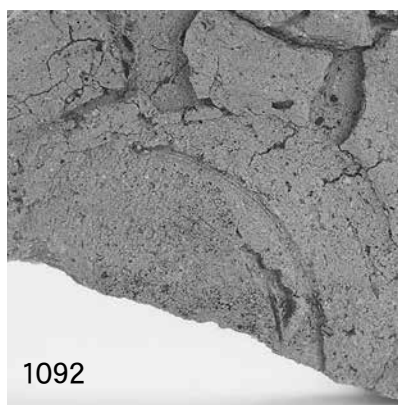
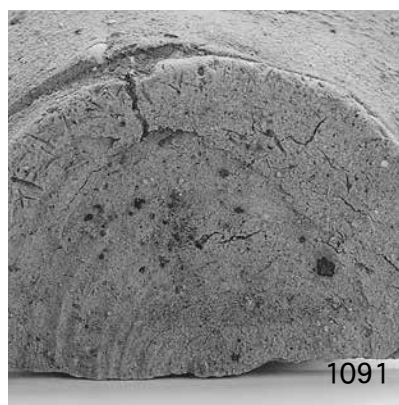
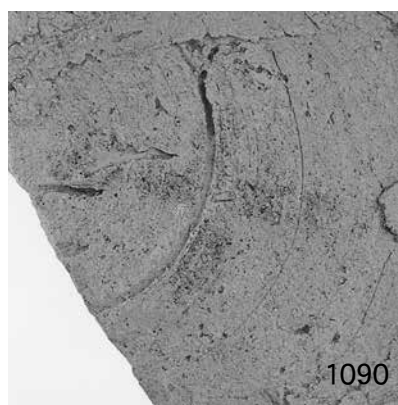
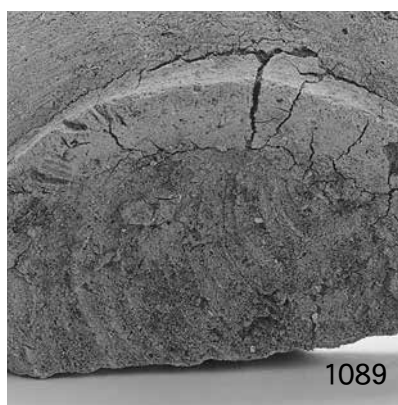
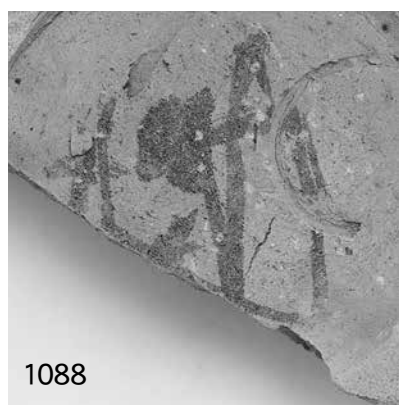
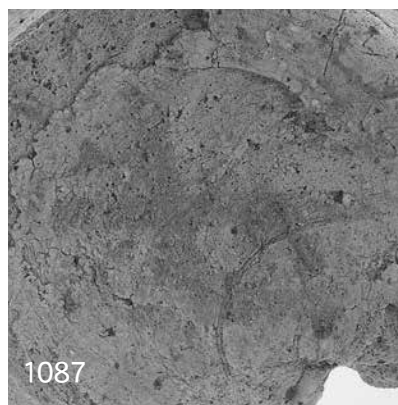
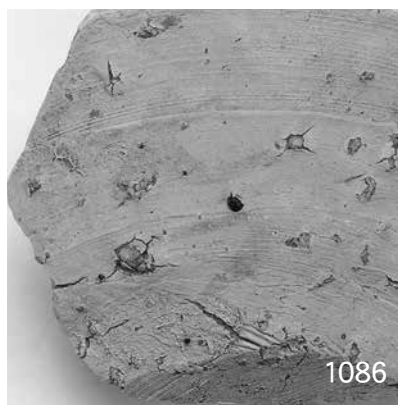
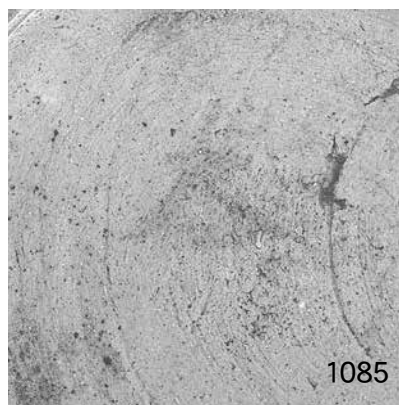


出土遺物805・806・807・809・810・868・869・896・921・960・972・974

图版48

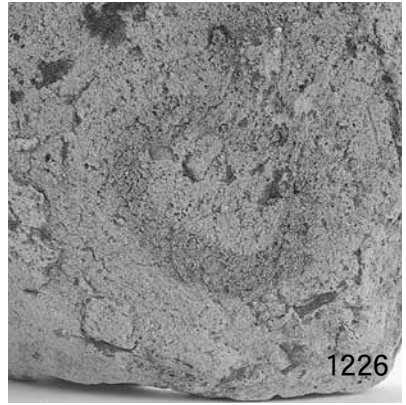
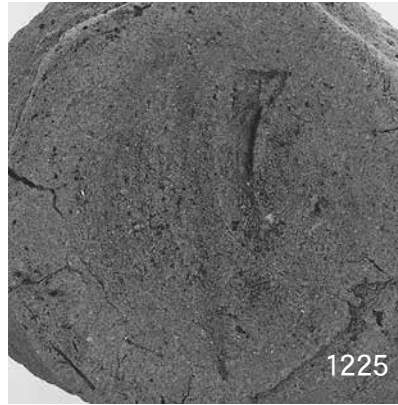
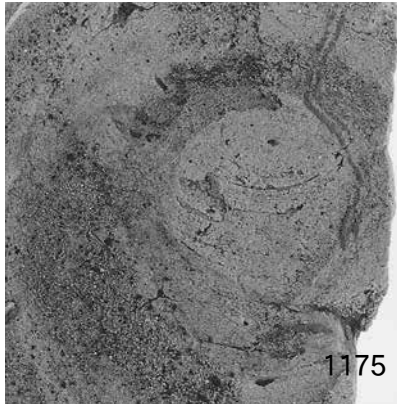


出土遺物976・993・1024・1025・1026・1027・1028・1029・1030・1031・1083・1084

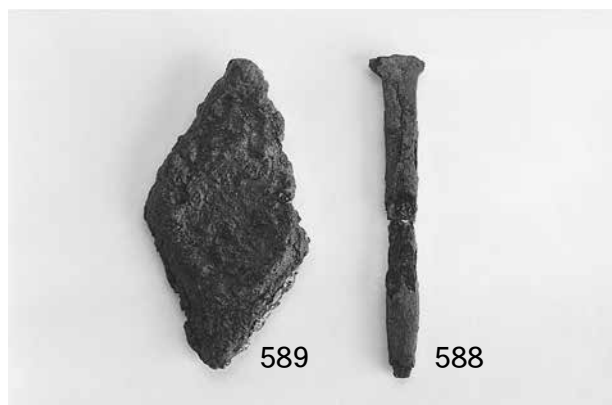


出土遺物1085・1086・1087・1088・1089・1090・1091・1092・1093・1095・1096・1174

图版50

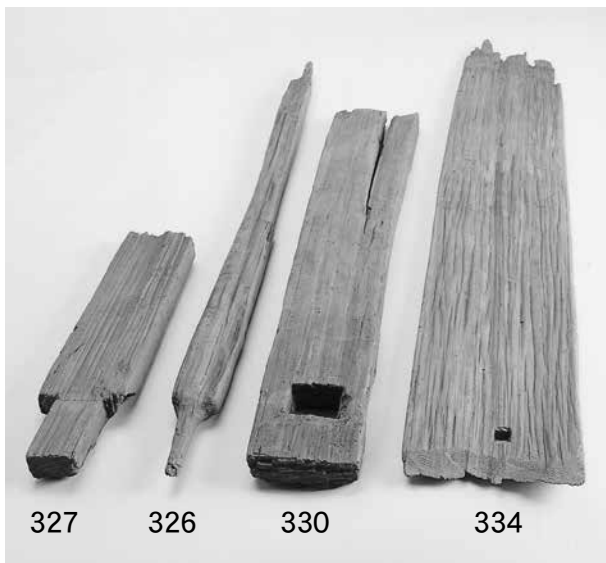
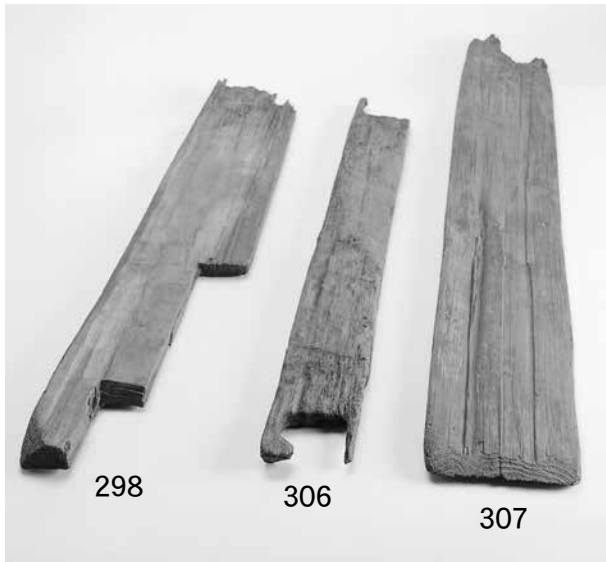


出土遺物1175・1225・1226・784・785・786・787・794・798



出土遺物589・588・1268・594・998・998・1155・1156・1273・1274・1275・1276

图版52

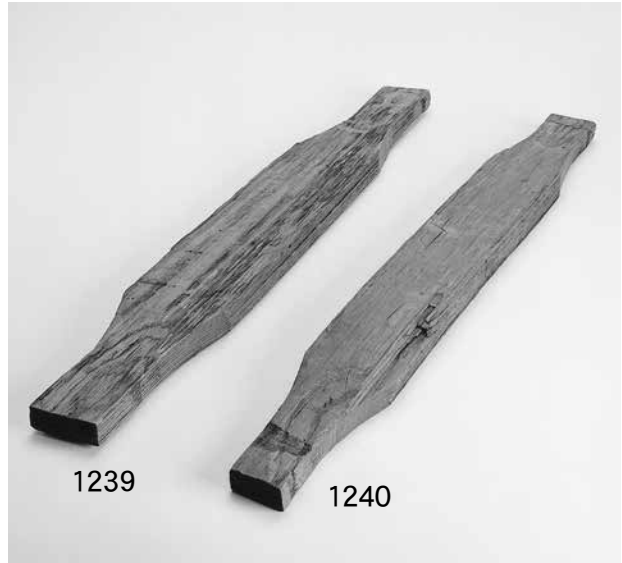


出土遺物273・287・289・291・298・306・307・310・327・326・330・334・342・337・349



出土遺物348・713・909・909・910・910

图版54

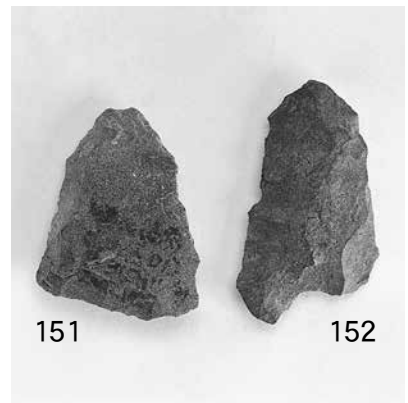
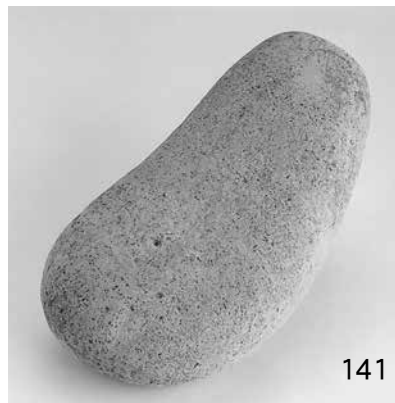
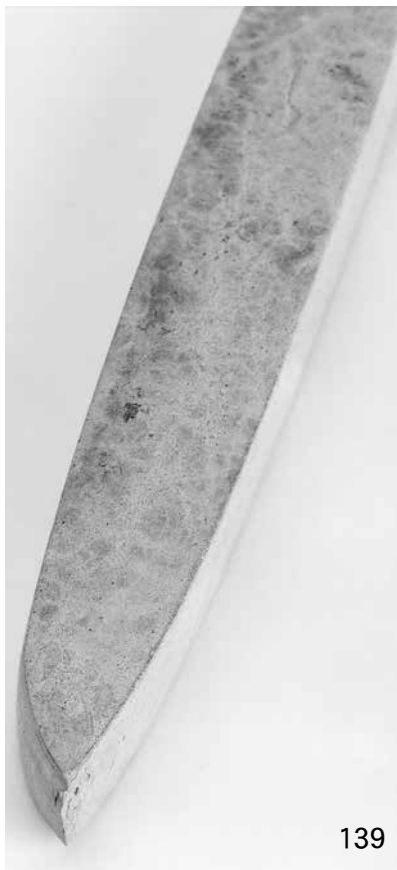
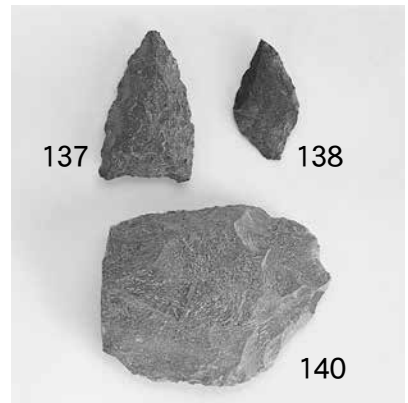
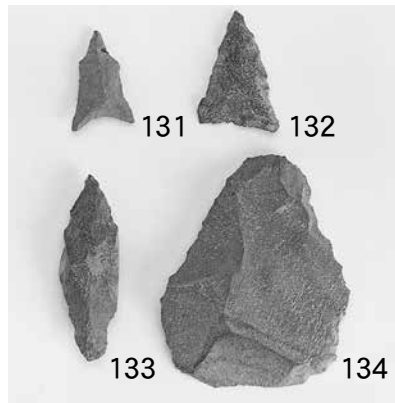
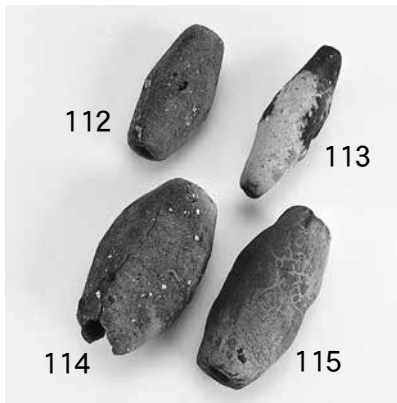
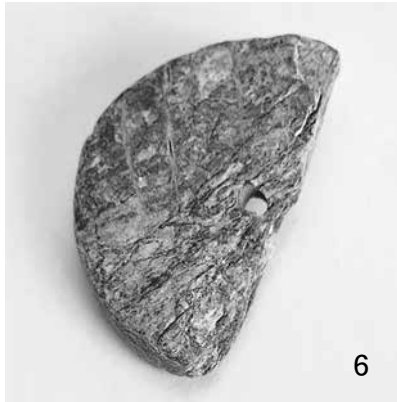


出土遺物1171・1239・1240・1241・1242・1243・1244・1247・1251・1257・1258

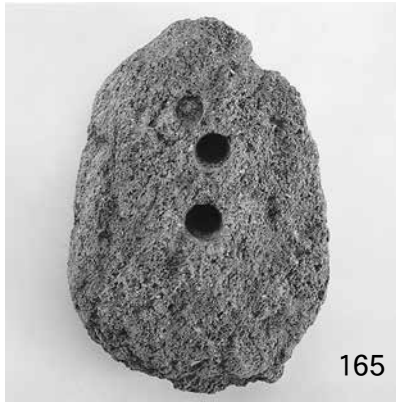


出土遺物1263・1264・1266・1267・1269・1272

图版56



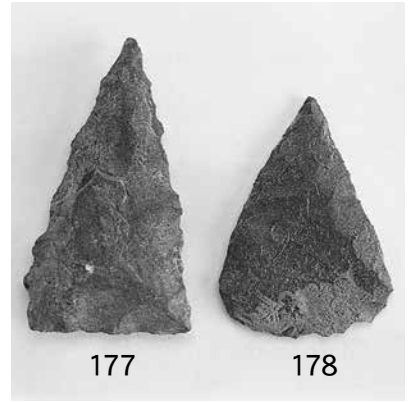
出土遺物6・80・88・112・113・114・115・131・132・133・134・137・138・140・139・141・151・152・153・158



165



174



177

178



203



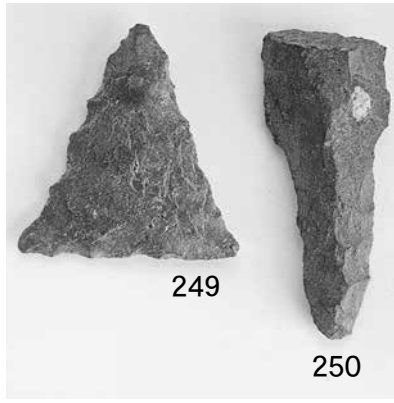
223



231



237



249

250



251



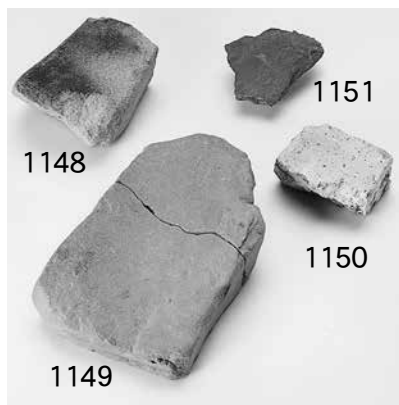
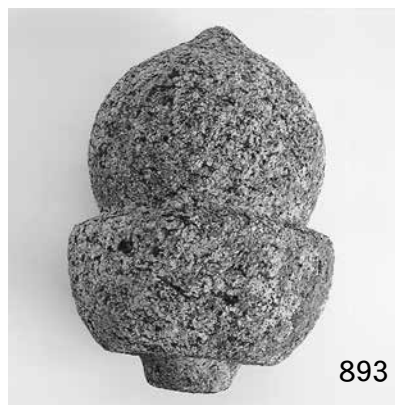
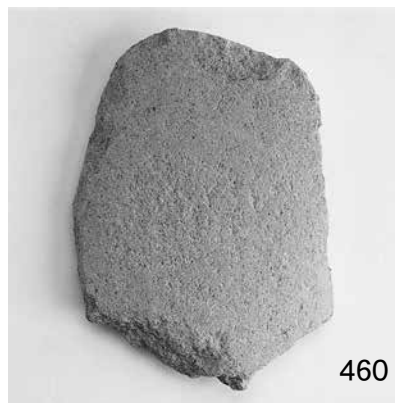
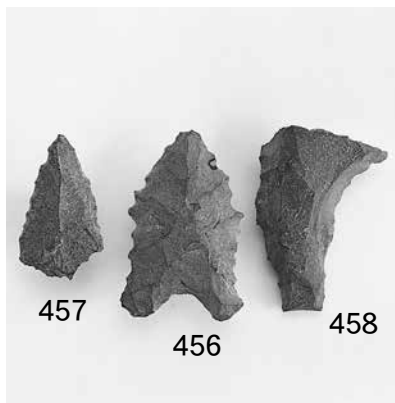
252



454

出土遺物165・174・177・178・203・223・231・237・249・250・251・252・454

图版58



出土遺物455・457・456・458・460・534・535・591・565・718・893・1148・1149・1150・1151・1152・1153・1154

報 告 書 抄 録

ふりがな	かえだいせき (だい5～だい8じ) はくつちようさほうこく							
書名	替田遺跡 (第5～第8次) 発掘調査報告							
副書名								
巻次								
シリーズ名	三重県埋蔵文化財調査報告							
シリーズ番号	281							
編著者名	穂積裕昌・伊藤裕偉・石井智大・野嶋美沙子・川崎志乃・酒井巳紀子							
編集機関	三重県埋蔵文化財センター							
所在地	〒515-0325 三重県多気郡明和町竹川503 Tel 0596-52-1732							
発行年月日	西暦 2007年 3月28日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村 遺跡番号		北緯	東経	調査期間	調査面積 m ²	調査原因
かえだいせき 替田遺跡	つしみなみこうじ 津市南河路	24201	759	34度43 分10～ 16秒	136度 28分56 ～57秒	20011012 ～ 0020215 ・ 20020701 ～ 20021128 ・ 20030516 ～ 20030916 ・ 20040518 ～ 20040827	5,521m ²	国道163号バイパス 整備事業(国道163 号国補特殊道路改 良事業、国道163号 南河路BP国補特 殊道路改良事業)
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
替田遺跡	集落跡	弥生中期・古墳時 代前期・古代・中 世		竪穴住居・掘立 柱建物・井戸・ 土坑・墓・流 路・溝		縄文土器・弥生土 器・土師器・須恵 器・灰釉陶器・緑釉 陶器・山茶碗・常 滑・青磁・白磁・ 瓦・木製品・鉄製 品・石器・石製品		弥生中期前葉の集落 と、古代末ないし中 世前半の寺院周辺の 集落

三重県埋蔵文化財調査報告281
替田遺跡(第5～第8次)発掘調査報告

2007(平成19)・3

編集・発行 三重県埋蔵文化財センター
印刷 (有)山文印刷
